
ゼロ魔の世界で魂生成～カトレアに惚れてなんかいないんだからね！～

百合姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロ魔の世界で魂生成くカトレアに惚れてなんかいないんだからね！〜

【Nコード】

N2375S

【作者名】

百合姫

【あらすじ】

酔っ払いにどつかれ、しりもちをついたところは道路。丁度トラックが通りかかり、グチャブルズル。そうして死んだ男性がゼロの使い魔の世界へ転生したっていう転生話。このサイトでファンフィクションのものを見たら書きたくて書きたくて仕方なくなって書いた。後悔は・・・これからするのだろっ！多分！！

主人公の目的はただ安穩と生きること、だったはずなのだが。

人と人の付き合いとは不思議なもので、義理堅い主人公はサイトが余所見をしないようにルイズ一筋になるようにフラグを折りに四苦八苦。

なんでこんなことに？

もう一つ僕が書いてるネギま！の世界で魂生成もよろしくです。キャラのつながりは全く無く、主人公も別人です。

1 ページ目 (前書き)

カトレアがヒロインのゼロ魔のファンフィクションが少ない！
てなわけで、無ければ自分で作るがモットーの僕が作るしかあるま
い！！

というわけでカトレアとのラブラブを当面の目標に書いていきます。
こうこうこうした方が良いというアドバイスは有難いですが、単な
る批判はやめて下さいませ。ないしは回りくどくお願いします。

作者は打たれ弱いんですww

他の連載とあわせて気分を書いていくので、一日に複数更新したり
しばらくしなかったり気まぐれに更新していきます。

1 ページ目

聞いて驚け、見て驚け。

わたくし私死にました。

死んじやいました。

あっという間に転がって、あっという間に轢かれて。あっという間に昇天お陀仏、南無阿弥陀仏。
つてなワケですよ。

まあ早い話、酔っ払いに絡まれて口論。相手がムキになり押し出され、道路へバタン。

グチャ。ズルズルーってわけですよ。

はははははは、笑えねえ。

いや、笑ってるけどさ。笑わずしてどうしろって言うの？

結婚だっしてなかったんだぜ？

おいおい、勘弁してよみたいない？

親孝行だってるくにしちゃいない。

せいぜいあの酔っ払いが責任とって、僕の親まで面倒見てくれりやあいいんだけどね。うん。

でもって死んだ私目がなぜまたこんなことを考えているかと言うと、変な空間にいるわけですよ。

真っ白のような真っ黒のような・・・そんな空間。

不思議空間とでも名づけてみようか。

矛盾してるような表現だけど、それしか表現のしようが無いんですわ。

言い得て妙、ベストチョイスって感じの表現でっせ。これ。

とまあ絶賛混乱中、テンパリ中でもある僕ですが、目の前にはオッサン。

オッサンもしくは“ヒゲモジャで上半身裸体でガチムチ老人”と表現しても可。

そんな感じのオッサンが目の前にいる。
そしてそんなオッサンがこんなことを言ってきた。

「ワシ、神様。」

おけーおけー。オーケーオーケー。オーケーといえばオーケー牧場という、とあるお人のギャグがあるが、あれって僕嫌いなんだよね。あのギャグ言った後のあの人のドヤ顔がむかつくのなんのって。つまんねえよと誰か言ってるやれよ！！と周りの愛想笑いをかましている芸人ドモに言ってるやりたいと思うんだけど、まあそれはいいや。ワシ、神様ですと？本来なら激流のごとくスルーして見なかったところにするべきなのだが、いかんせん僕の本能がこれは本物ですよ！とアラートを上げている。

理性の部分ではマジかよ！？ウソでしょ！？まさか、あれか？死ぬ前日に友達と神様ってどんな姿してると思う？という馬鹿話で、最終的にガチムチで上半身だけなぜか脱ぎだす老人となったわけだがそれが原因か？となっているわけですが、とりあえず理性は捨て置こう。この不思議空間に神様らしき人といえど、他人がいたのは僥倖と言える。

何するかも、どんなところかも分かってなかったしさ。聞く分には自称神様であろうと本物の神様だろうとどうでも良いことだ。

でもって、なにやら筋肉をこれ見よがしに見せ付けるようなポーズをしながら神様は仰りました。

「単刀直入に言うと、世界創造の手伝いしてくれね？ってワケなんじゃがどうじゃるつか？」

単刀直入すぎて良く分かん。

「ええと、断ると?」

「輪廻転生の輪に戻すだけじゃ。」

別におぬしで無くてはいけないというわけじゃないからの。」

「輪廻転生・・・ってマジモンなんですね。」

「おう、マジもマジ。大マジモンじゃ。」

ちなみに輪を回ってる間に記憶や人格、業といったものが洗い流される。」

大マジモンって・・・。

「ちなみに受けると?」

「創造された世界で好きに生きれるぐらいの力をプレゼントフォーユ」。記憶と人格の引継ぎ。

なおかつ、最低でも1000年は生きてもらうことになる。」

「・・・まじですか?」

「魂の数は決まってる。その規定数に達するまで作り続けねば輪廻転生機構が働かん。よってその規定数に達するように魂生成器を組み込んだ人間を創造したい世界に送る。」

これによって組み込まれた人間は不老の力と毎日、約1000個の魂を作る能力を得る。」

1000年で。結婚した相手死んじゃうよ?

まあその世界の人間の寿命が地球のと一緒ならば・・・の話であるが。まあ1000年も生きる人間はまずいないだろう。多分。

「まずする心配がそれかいの。・・・まあその辺は上手くやるとええ。」

「何をどう上手くやれと!?」

「奥さんとか作ったらその奥さんに不老の秘技を使えばよいじゃろ。」

「そんなものがある世界なんですか？」

「いや、ない。作れ。勝手に。」

「・・・無茶にもほどがあるがな。」

「冗談じゃ。ほれ。」

ガチムチ老人は僕になにやら種みたいなもの渡してきた。

「それを奥さんと決めた相手に飲ませれば不老になるからの。念じれば虚空から出現する。あとはその奥さんとせいぜい仲良く過ごすことじゃのう。」

1000年生きた後、生きるのに飽きたら適当に死ねばよい。」

適当に死ぬってオイ。

「何か質問はあるかの？」

「なんかえらい淡白な神様ですね。あなた。」

「それはオヌシのイメージに起因しておる。」

オヌシの無意識な神様像が今のワシの姿なんじゃろって。

ワシに個は無く、郡もない。姿も無ければ性別も無く、感情も無ければ義理もない。

ただ“意思”があるのみじゃのう。今話している言葉すらもオヌシが勝手にワシの“意思”をそうだと解釈してるに過ぎないのじゃ。」

良く分からないです。

「分からんでも問題ない。」

とりあえず、オヌシがカエルだとすれば意思疎通の手段は言葉でなく鳴き声であつたらうし、ワシも人間としての姿を持たず、カエル

としてオヌシの目の前に現れたってことじゃ。」

分かるような、分からんような。

「ではもう良いな・・・っとまた忘れるところじゃった。」

「また？」

「創っている世界は何も一つだけではない。他の世界にもオヌシと同じような頼みごとをされた輩がある。そのときに“また”というようなことを繰り返してしまっただけじゃの。」

「なるほど。」

で、なんですか？」

「ちえすとおおおおおっ！！」

「いつだあああああああっ！？」

いきなりの目潰し攻撃って、どういつつもり！？

目があああああああ！？

目があああああああ！？

目が大変なことになっていらっしやる！？

熱い熱い熱い熱い熱い熱い！？なんかしらんが溶けそうなほどに熱い

ぞおおおおおおおっ！！

バルスを受けて目がああああと叫びながら崩れ行くラピユタの残骸と一緒に海の藻屑と化したムスカ大佐もこんな痛みを味わっていたのかっ！？

なんてことが唐突に頭をよぎった。

「力を与えるのを忘れておったわ。」

俗に言うチートって言うやつじゃ。先ほども言ったように死なれるのは困るからの。驚異的な回復力も付けておいた。頭を潰されない

限りなかなか死なないが、逆に言えば潰されたら死ぬから、気をつけての。」

わかったあああああつ!!

なんか知らんがわかったから、この目の焼けるような痛みをどうにかしろよおおおおおつ!?

花粉症の人の気持ち判る気がするっ!いや、分からんけどな!!
目のかゆみとはまた別もんだ!!当然だけでも!!

「その目はあらゆる物を“視認”できるある意味最強の魔眼じゃ。がんばって使いこなせよ。」

ちなみにじゃが、使用中は眼球が白く染まるので注意が必要じゃ。

“白目キモツ!”とか言われるぞ。」

「ぐがっ!・・・はあ・・・はあ。ようやく収まった。」

で、なんだって?痛くてそれどころじゃあああああああああああああ
ああああつ!?!?

いきなり足元にワームホール(?)がっ!?

お、落ちるっ!?!つか、すでに落ちてます!!

「ちなみにオヌシに創造を手伝ってもらう世界は“ゼロの使い魔”の世界。」

ワシ個人の好みでオヌシの外見は男の娘じゃ。がんばっての。」

とか言う声を聞いたような聞かないような、早い話落ちている真っ最中であり、そんなことにかまかけてる余裕はなかった。

こうして僕の二度目の人生が始まったのである。

そんでもって現在3歳。

転生しました。ゼロの使い魔の世界にね。

両親はトリステイン貴族。といってもあまり身分は高くないようですが、成り上がり？の面が大きく、苦勞してきたようなので実力もあるみたい。

領地も基本的に黒字経営のよう。

ゼロの使い魔ってどの国に生まれてもキナ臭いから、読者としては良かったが、その国の当事者にはなりたくなかった。・・・本当にもうちょつと違う世界があったはずだとあのガチムチ神に物申したい。

ちなみに0〜2歳の時の記憶や自我はぼんやりとしか覚えていなかったりする。そりゃそうだよな。成人男性1人分の記憶を生まれたての未熟な赤ん坊の脳で受けきれはるはずがない。

3歳になって、ようやく自我がはつきりしてきたというところ。

それでも記憶は断片的であるが、おそらくこの辺は成長とともに補完されるのかなあと考えているのでそこは良しとする。

んでもって歩けるようになって間もない僕んだけど、さっそく魔法を使ってみたいということでも母上、父上に杖をくれと可愛くおねだりしてみたりするのだが、危ないからもう少ししてからね〜みたいな感じで適当にはぐらかされて終わってしまう。

正直、待ちきれません。

「つみゆきとかつまらにゆ。」

積み木とかそういうのが子供への玩具らしく、まあ最初はあながち

悪いわけでもなかったんだよ。

久々に童心に還ったっていうかね？

あとは人形と人形で戦わせるとか、そういう人形遊び？

肉体にかなり精神が引っ張られてるみたいで、こんな遊びでも存外はまっているから。

ただ、こういう玩具もまあ飽きてくるわけで、最近は積み木をしても全く面白くない。

「つみゆきつまにゃい！」

積み木なんてポイだポイ。

舌足らずな口調もいい加減直したいのだが、如何せんこれがなかなかどうして難しい。

舌や顎周りの筋肉が突っ張る感じで、しっかりと発音するのが難しいのである。

面倒を見てくれているメイドさんが“よしよし”じゃあ次は何で遊びましょうか？”とか言いながら狼狽してる姿を見ると、申し訳なく思う気持ちももちろんあるんだけどそんな気遣いを忘れさせるほどに暇すぎるんだ、やっぱり。

退屈ってある種の拷問に近い気がしてきた最近である。

そんな暇極まりない日々をなんとかこうにか過ごし、4歳になった頃。

漸く、杖を持たせてもらえることになる。

やっほい！とか思いながら嬉々とし杖をぶん回しながら呪文を唱えてみた物の、うんともすんとも言わないんだけども？

呪文を大きく言ってみたり、杖を振らずにやってみたり、適当に力んでやってみたりとしたのだが、どれも上手くいかなかった。

「母上、できない！」

「あらあら？」

「そうねえ。きつと精霊さんにちゃんとした量の魔力を与えてないんじゃないかしら？」

「精霊さん？魔力？」

「そうよ。」

メイジは精神力を魔力に変換させて魔法を使うの。

その変換をしてくれるのが杖。

精神力を上手く練れてないのかもしれないわね。

精霊さんに魔力をあげて、お願いするのよ。」

「せいしんりよくを？」

「杖を持つて、呪文を唱え続けてたら人にもよるけど1〜2週間で感覚をつかめると思うわよ。」

「・・・そう。」

「まだエンデには分からないことね。」

ふふふと微笑みながら、僕の頭を撫でる母上。

もちろん、中身が成人男性そのものである僕であるからして、分からないなんてことは無いんだが。

とりあえず説明は理解した。だが精神力を練るとか、現代日本人の僕にはイメージがどうしてもわかない概念である。

ちなみに、僕の名前はエンデ・ド・レイフオール。

レイフオール家の跡取り息子。とのことらしい。

母親はモンモラシ家縁の貴族で、水のスクウエア。父親はレイフオール家現当主で風のトライアングルとのこと。となれば、その息子である僕は水と風の素養を持っていることになる。

確か、この世界では一番ランクの高いメイジでスクウエアとのことだが、魔法は精神力が元になっているため、威力などが精神状態に左右されるって話が確か、あったはずだ。

怒りなどの強い感情がきっかけでランクが上がるとい話もあった。

となれば魔法は状況により弱くもなれば強くもなる。

何が言いたいかといえば、気の持ちようでスクウェア以上の魔法使いになれるのでは？とかこっそり考えていたりするのだ。

まあまだ仮説段階なんだけどね。

とにかく魔法を使いたい。

浮きたい、飛びたい、フライしたい！

つてなわけで、現在進行形でレビテーションを練習中。

なんどやっても上手くいかないから、どうしようか？と本格的に悩んだ結果。

神様から貰った“視認”できる魔眼とやらを使ってみることにする。

「ひあつ！？」

使った瞬間、世界がガラリと変わった。

つい悲鳴をあげるくらいには不気味な世界だ。

なんというか、表現しづらいのだが、赤外線やら紫外線までもが見えるせいでやたら風景がおかしく見える。

いろんな物が混線して塗りつぶされかけた感じとでも言えば多少なりとも分かってもらえるだろうか？

邪魔臭いなと感じた瞬間、普段どおりになり、異様な物といえば周りに漂う赤っぽかったり、白っぽかったり、緑っぽいもの。

これが精霊さんとやらか？

この人・・・かは分からないけど、この人たちをお願いするのだろうか？

魔眼を使った状態で、もう一度レビテーションと発声すると、精神力の流れが見えた。

腕を伝って、杖に流れ、杖に精霊さん達が集まっていく。が、一粒二粒の光が集まっただけである

なるほど。これが魔法の仕組みのようだ。
魔力に引かれて精霊が集まり、その精霊が一定数集まるとその精霊に対応した現象が発生する。といった感じだろう。

色は白がコモンマジック、赤が火、緑が風、青が水、黄色が土を司る精霊さんと言ったところかな？

ここまで理解したところで、もう一度精神力を杖に流してみる。

呪文を唱えた瞬間にくる微妙な力。

杖が僕の体から精神力を引っ張っているというのが目で見て分かる。今までは無理やり杖が引っ張っていたのだろう。杖に流れていく精神力は糸ほどの細さしかない。

それを今度は自分から流しこむ。

とりあえず、腕の太さ限界まで精神力を流し込んでみると、今度は杖に向けてかなりの量の白っぽい精霊が集まってきているのが分かる。

そのままレベティションと呪文を唱えてみると、さっきまでの苦難がウソのように体が軽々と浮いた。

10センチほど浮かせてから、そのまま移動速度や方向を適当に弄ってみるとこれは面白い。

「俺は鳥になる!!!」

と調子に乗って加速したら、思いっきり木にぶち当たり、転げまわった。

精神力も霧散して、魔力も霧散。結果、地べたで土まみれになりながら僕はうめいた。

「いつだああああああっ!?!」

超痛いです。

めっちゃ痛い。

木の幹がまた荒くて、コレがなおのこと効く。
なんか周りの精霊も笑っている感じである。

い、いい度胸じゃないかコラ。

人の不幸を笑うものは、自分の不幸に嘆くんだぞっ!?

というか、誰も見てなくて良かった。

こんなところを見られてたら、危ないってことで杖を取り上げられるかもしれないからね。

「・・・はあ・・・はあ。」

さて、気を取り直していいこうか。」

あまりの痛さに息が乱れたが気を取り直して、再度検証する。

この後、いくつか試してみた結果、いろいろなことが分かった。

呪文を唱えるにしても、精霊さんに“お願い”という気持ちを込めて唱える場合と”やれ”という命令形では効果がかなり違うことが分かった。

前者では精神力の消費が3割ほど抑えることが出来たのと、威力も若干上がった。

後者は問題ないことには問題ないが、これから先はお願いという気持ち忘れずにいいこうと思う。

精霊が見えるからこそこういう祈り？が効くのかどうかも要実験だ。一度見えてからというものの、精霊の気配くらいなら分かるようになり、湯浴みのときはなんとなく怖くなって鏡が見れなくなったというのはちよっとした弊害である。

そうしたことがあり、魔法の研究に日夜がんばっているある日のこと。

「魔法の方はどうなんだ？」

「た、楽しいよ、父上。」

珍しく、父上が話しかけてきた。

この父親、かなり寡黙で言葉より行動という信条らしく、喋るときはいつも簡潔である。

そして、子供が苦手らしく僕から話しかけることはあってもあちらからは滅多に話しかけてこない。

おはよう、おやすみなさいなどの挨拶くらいである。

母上いわく「不器用な人」だそうだ。

「そうか。」

「うん。」

すまん！

何が言いたかったのか、さっぱりだそ！父上！！

まあ、心配してくれたのかもしれない。

杖は8歳ごろから持たせ、10歳頃から本格的に魔法を仕込むのがメイジの基本だそうだ。

僕は現在、4歳。幼い子供が学ぶには色々と心配なこともあるだろう。

「いいつけは守ってるから大丈夫だよ。」

「うむ、ならばいい。」

心配しなくても大丈夫。とか言おうとも思ったが、この歳でそこまですぐ遣うのもどうかかな？と思い、無難な返事しておく。

いいつけとは“レビティションは10センチまでしか上がっちゃダメ”とかそんな感じである。

とはいえ、これだけでも父親は安心したそうので、少し顔が綻んでい

る。

分かりにくいようで分かりやすい父上である。

良い父親だ。と思ったところでふと元の世界の父親を思い出した。親孝行もろくに出来ないまま、こんな遠いところへ僕は来てしまった。

元気にやっているだろうか？泣いているかな？泣いてるだろうかと考えて、少し俯いていると。

「どうした？」

な、泣きそうな顔をしているぞ？」

やたらと慌てた様子で父上が僕の顔を覗き込む。

泣きそうな顔か。どうせなら神様に前世での両親の記憶だけは抜いてもらえば良かったかもしれない。

「なんでもない。」

「・・・そ、そうか。」

「くす、変な顔。」

「・・・オマエを心配したんじゃないか。」

「ありがとう、父上。」

「・・・うむ。」

変な顔といっても、やたらと端正な顔立ちの父親であるからして、それも画になるのだけれど。

とりあえず今日も魔法の特訓である。

「母上、系統魔法を教えてください。」

「もうコモンマジックは覚えたの？」

「覚えた。簡単。」

「まあ、優秀なのね。」

いつもはのんびりしてる母親だが、このときばかりは結構な驚きを見せた。

まあ、他のメイジは感覚で魔法を会得しているのだろうけど、僕は魔眼があるからね。

視認できるだけでかなりスムーズにことが進むのだ、コレが。

どこかで人間は感覚器の中で視覚が一番発達していると聞いたことがあるようなないような。

その視覚を使っているのだから、習得が早いのも当たり前である。

あとはイメージの問題だが、前世含め30近くの人生経験がある僕におおよそイメージできないものはないからこれまた、楽。

しかもそのうちの24年程が日本での記憶。科学もそうだが、CGなんてもあればアニメや漫画などもあり、いろいろな概念だ能力だなんてのが闊歩していたあの世界で生きてきた人間にとってはイメージなんてのは非常に簡単なものである。

精霊の協力もあるしね。今となつては杖が無くても簡単なコモンマジックなら可能というエルフ式魔法・・・とでも呼ぼうか？エルフ式魔法まで使える。

これはもちろん秘密中の秘密だよ。

そもそもエルフと人間の違いって、精霊を認知できるか出来ないかである。あとは耳の長さとか？

僕には認知しうる能力があるのだから出来て当然とも言えるかもしれない。

ただ、カウンターとかそういう高度なものは魔眼で見て、どんなものかわからなければ使えない。

全く想像がつかない物だからね。
精霊達にどんなお願いをして、どんな感じに精神力を与えているの
か微塵も分かん。

「うーん、まあいいか。」

早すぎる気もしないこともないけどエンデなら大丈夫よね。」

「当然だね、母上。
まあいいけども。」

「まずは系統魔法の中で、エンデに合うものを探しましょう。」

こうして僕の系統魔法の練習が始まった。

2ページ目

系統魔法の練習を始めてまもなく。
僕は5歳となる。

誕生日は家族間のみでの祝いだ。

大抵の貴族は自身の息子、娘に対し社交界への前準備がてら大きなパーティを開く傾向が強いとのことだが、我が家はそうした賑やかなパーティはしない。

苦手らしい。

言わずもがなあの寡黙な父親が、だ。

他にも税の浪費を防ぐためだとか、後片付けが面倒だとかそういう理由もあるとのこと。

というわけで我が家に勤める家臣と母上、父上のみで誕生会を開く僕としても見ず知らずの輩を呼ばれるのは願うところじゃないから、正直嬉しい。

他の貴族様とこの子供達にちょっと同情した。とはいえ、傲慢かつ高慢ちきでプライドばかりが一丁前なトリスティン貴族としては控えめな誕生会が好きだという家の子供は少ないかもしれない。

「おめでとつございます、エンデ様。」

「ありがとう、エミリア。」

エミリアは僕専用のお世話さんで、姉みたいに思っている。

ちなみに12歳。12歳でも驚きのしっかりさんで、正直脱帽ものである。

エミリアのプレゼントを皮切りに、他の執事やメイドさんたちが口々に祝いと共に祝い品を贈ってくれるのだが、正直エミリア以外、名前を知らなかったりする。ごめんなさい。

これは余談だが我が家は成り上がりという面が強いためか、平民蔑視の意識が低い。

正直、ラッキーである。

身分の高い貴族に生まれるよりか、遙かに嬉しいことだ、これは。蔑視が低いというのは父上の頭の良さも関連してるそう。

平民あつての貴族。貴族あつての平民という考えをかなり小さいころから持っていたそう。

平民が家畜を育て、野菜を育て、それを貴族に納める。

変わりに貴族は平民を守り、より過ごしやすい環境作りを目指す。

平民がいなくなったり、死ねば、貴族は飢える事になる。

また逆に貴族がいなければ、力を持たぬ平民は他の亜人種や竜種などに虐げられることになる。

こんな当たり前のことに気づかない貴族様が多いことに父上は嘆いているそう。

苦労人だね！父上！！

がんばれ！！

僕は正直、いつかツンデレ頭髪娘たちがどうにかすんじゃね！？とか他人任せに思っているだけなので、どうでも良いつて感じた。

ルイズが出世していくとともに、サイト君も出世していくだろう。

そうなれば“平民すげえ”となり、蔑視も緩やかに軽減されていくのでは？と考えている。

ルイズ周りの貴族達もサイトには並々ならぬ好意を寄せていたから、あの世代の貴族が家を継ぐにつれ、蔑視はおそらく収まっていくことになると思う。

ていうか、ちよつと考えれば分かる物だと思っただけだね。この世界の人間は本当に阿呆が多い。

いや、そういう教育しか出来ていない教育制度のレベルの低さが一番の原因かもしれない。

そんなことを思いつつ。

家臣たちのプレゼントを受け取った後、今度は母上、父上からのプレゼントである。

「ふふ、私からはこれよ。」

そう言つて、母上からもらった物は、銀色の髪飾りである。

嬉しいんだけど、この髪飾りで一体いくつ目だと思つているのか？と問いたい。

なんせ、僕の容姿はまんま女の子であるからして、今までの誕生日はメイドや執事から貰える物含めて髪飾りやブローチ、ネックレスといった女物が多かった。当初は複雑な心境であったが、後々になつてくると“似合うし、いつか。”となつてくる。

たまには男らしい物が欲しい。

容姿は父親譲りの肩くらいまでの緑髪に母親の顔をそのまま丸っこくした感じである。

母親はモンモラシ家歴代最高峰の美を持つと謡われたそうで、それを受け継いだ僕もソレ相応の顔となつている。

初めて鏡を見たときはあまりの可愛さに自分に惚れそうになつたものである。

嬉しいような嬉しくないような容姿だ。

「私からはコレだ。」

といつてもらつたのは無骨な手甲。

装飾が軽く施してあるだけで、その飾り気の無さはそのまま性能に比例してそんな重々しいものである。

多少大きめに作つてある様で、僕の体が成長した後でも使えそうだ。父上の知り合いに腕の良い土メイズがいるらしく、その彼に作つて

もらった逸品とのこと。

父上は基本的に武器系をくれることが多い。

去年はコンバットナイフを貰った。

メイジたる物、自分の身は自分で守れるようにするのがメイジの嗜みらしく、僕がもう少し大きくなったら鍛え上げるとか言っていた。別にそれは構わないのだが、今から武器を用意するのは早すぎない？と思わないでもない。

「ありがとう、父上、母上。」

「どういたしまして。」

「うむ。」

こうして5歳を迎えて、しばらく経ったある日のこと。

「父上、話とはなんですか？」

「うむ。」

またもや珍しく、父上から呼び出しを食らう。

ちなみに魔法の特訓は順調。

すでにトライアングルメイジ。確か、ドットが一番ランクが低くて魔法学院に入った直後の大半のメイジはドットだったあず。ラインメイジはちよつと優秀。トライアングルはエリートないしは一流。スクウエアは超一流だったはず。この次の段階はないとされてるが、僕はこの次のランクを目指している。

トライアングルは三角形、スクウエアは四角形の意だろうから次はペンタゴンもとい五角形か？

確か、王家に連なる物が二人以上いて始めて使えるという六角形の意を示すヘキサゴンスペルもあるから意外といけるんじゃないかね？と僕は考えている。

2人がかりとは言え、可能なのだからそれが1人で出来ても不思議

はないということである。

精神力の量で言えば中身が良いオッサンである僕はすでにトライアングルどころかスクウェアまで軽くいつてるはずなのだが、なんだかよく分からない壁見みたいのを感じる。

おそらくランクを上げるには精神力の量と魔法を扱う技量。この二つが必要なのだろう。

要特訓である。力があつて困る世界ではないし、身を守るための魔法はきつちりと極めていきたい。

閑話休題。

話を戻そう。

「えと・・・ヴァリエール家からの招待状ですか？」

「そうだ。先方の当主様には世話になっていてな。」

日ごろの感謝も含め、娘さんの誕生日を祝ってやりたいと思うのだ。

「

父上の話とはヴァリエール家からの娘さんの誕生日会の招待状のことらしい。

父上が世話になっているというのならば、仕方ないか。

ルイズ関連の人とは関わりを一切持ちたくないと思っっているが。

なんせあの頭の弱い姫様と関わってしまう可能性があるからして。

いや、まあいいんだ。アンリエッタ姫は。

色恋沙汰を優先してしまうとか、別国への王子に対するラブレターとか。

横恋慕が大好きだとか、あまり時をおかずにサイト君へ鞍替えするとか。

まあいい。その辺は人の勝手だし、彼女も普通の女の子。そんな面もあっていいだろう。

ジヨセフ王とかヴィットーリオとかあの辺の鬼才どもと比べれば大抵の人間は愚かしく、物足りなく感じて当たり前である。

そもそも歳が歳だし、がんばっている方だろう。ただ、ただ、ただ。

歳の割にはがんばっていると思うんだが、国の王ともなればがんばっているだけでは足りない。厳しいことを言うようだが、結果を出さねば意味がない。

“自分はがんばりました。そのがんばりに免じて攻めて来ないてください”なんて言葉が国家間で通じるわけがないのだ。

あんな王を据えて、かつプライド優先の敵のほうがマシというくらいのアホ貴族の多いトリステインなど僕から見れば“どうぞ、滅ぼしてくださいな”と言ってる様なもんである。

正直、良く残ってるもんだと感心する。

とどのつまり何が言いたいかと言えば、そんな脆弱な国家を背に戦争なんてしたくないってことよ。

もしあれと関わったら最後。あれに使われかねない。

僕もトリステイン貴族という立場上、彼女の命令がどんなにアホらしくとも従わねばならなくなる。そうそうアホらしい命令が出るとも限らないが、関わらないに越したことはない。

もちろん、仮に彼女と接触するとしても力の弱いビビりで情けないメイジのフリをするつもりなだけだね。

「ふうん。それで、僕を呼んだのは？」

十中八九、その誕生日会と一緒に連れて行くためだろうけど。社交界……というやつだろうか？

「顔見せも踏まえて、ヴァリエール公爵夫妻にオマエを紹介しておくかと思っただけだ。」

「わかったよ、父上。」

誕生日会ってことはプレゼントは用意したほうが良いの？」

「ああ、もちろん。・・・そうだな。オマエからのプレゼントというのも何か用意はしたほうが良いかもしれない。」

だが、まだ五歳のオマエがそこまで気遣うことでもないよ。」

「ううん、僕も用意する。」

「そうか？」

「うん。大丈夫。綺麗な物・・・だよ。女の子の好きなものって。」

「ふむ。だが、綺麗な物と言っても宝石などはあまり喜ばないかもしれない。」

相手はあのカトレア嬢だからね。」

カトレアっていうとあのほんわか天然系お姉さんって感じの人か？確かに宝石関連のものに興味がありそうには見えない。」

「カトレア嬢は今年で確か、9歳の誕生日だ。光物に興味が出るのはもう少ししてからだろう。」

意外と女の子の好みを押さえているな、父上は。

となると花束か？

でも花束は僕が好かない。」

花ってすぐ枯れちゃうから、好きじゃないんだよね。」

花を愛でるのは、摘み取って部屋で。ではなく、外へ出て自然の状態の花を見る。というのが一番良い花の鑑賞法ではないだろうか？

まあというわけで、花束は排除。」

となると絵本とか？

僕の世界の童話や漫画とかを簡潔にして送るのはどうだろうか？

9歳の女の子にはぴったりだろう。」

つつても、女の子が好きな話となるとシンデレラとか？

プリキュアとか？これくらいしか思い浮かばない。

それに普通に紙に書いて送るのも味気ない。

魔法があるんだし、どうせなら魔法を使ったギミックを加えたいな。仕掛け絵本みたいな。

ふむふむ、なんとなくだが完成形が見えてきた。

「父上、その招待日はいつなの？」

「うん？」

ああ、招待日なら次の虚無の日だな。」

となるとざっと6日か。

間に合うかな？

間に合わなかつたら、適当な食べ物でも送ればいいのか。

バナナとかりんごとかのフルーツでいいよね？多分。

合ったことのない人の誕生日なんかを祝う気持ちなんて殆ど無いし。

絵本は自分の創作魂なるものを刺激したってことで。間に合ったら

絵本をプレゼント。間に合わなかつたら食べ物。よし、これでOK。

「絵本にしようと思ったんだけど、大丈夫かな？」

「問題ないと思うぞ。」

「・・・作れるのか？」

「多分大丈夫。」

「完成したら一応見せてくれ。」

「わかった。」

というわけで、僕の絵本作りが始まった。

一日目。

まずはどういった形の絵本にするかだ。

おとなしく紙媒体にして仕掛け絵本の仕掛けにルーンを刻んで、適当に光らせてみようか？

でも、なんだかそれだけだと味気ない。

でも、紙媒体ともなればそれくらいじゃなきゃ、紙自体が耐えられないだろう。

物語の中で敵が炎を出す部分に本当に炎の出るルーンを刻めば、絵本の中の絵から火を出すように出来るだろうけど紙が普通に燃えるてか、危ない。

魔法を使つてというコンセプトが守りにくいため、紙は論外。

となれば別のもの。

たとえば、僕は水がトライアングル。風がラインってことで、水と風の絵本とかどうだろう。

本が水で出来ていて、ページをめくる際には風が起こって自然とめくれるという摩訶不思議な本……ではないな。

本というか、ただの水の固まりだし。そもそも常に本の形を取らせる手段が思いつかん。

というか、可能なのだろうか？

何よりも水媒体の本にするという発想自体が意味分からん。

本を模^{かたど}る位なら普通に紙で良いでしょ！？って話である。

というわけで、本という形に捉われない様にと考えてみた。

なかなか思い浮かばない中、一日目が終わった。

二日目。

昨日考えたとおり、本という形を除外。なおかつ魔法をふんだんに使える。そして字を書き込む、ないしは字を表示できるなんらかの媒体。と考えると、とりあえずいろんな形に整形できる粘土という物を念頭に考えてみた。

錬金とかで、それぞれのページに絵を彫り、色をつけてみたらどうかと考えた。

土メイジじゃないってことで却下。他にも理由はある。

薄く延ばし固定化を欠ければ本に近い形を取れると思ったが、そもそも粘土という素材のため、それなりに重い。病弱と聞いているカトレアさんにはちょっと辛いんじゃないかと思う。本の形を取らず、巻物を開いたように薄い状態に伸ばし、左からコマ漫画のように書けば良いんじゃないか？と思ったが、これは保管場所に困るので却下。

なによりも不衛生である。

病弱なカトレアさんには不向き。多分。

三日目。

やっぱり面白そうだし、水の本を作ってみようってことで、チャレンジしてみた。

まずはその辺の石ころにルーンを刻み、魔力を込める。

水の中にそれを入れて、取り上げてみると簡単に本の形を模らせることはできた。が、持てない。

核にした石しか持てずその周りに引っ付いている本の形をした水の中に手を突っ込まなくてはいけない。

かならず腕までびしょびしょになるという欠陥本。表面を撫でる分には濡れないみたいだけどさ。さらにはページという機能がつけれない。本の形をした水の塊。

そうとしか表現できないとんだ失敗作となった。

ただ、これはこれで面白いので部屋に飾っておくことにしよう。

四日目

あつという間に四日目となってしまって、こりや間に合わんと感じる。てなわけで適当な食べ物を選んだ後、また魔法の絵本の開発にとりかかった。

水メイジであるからして、ここはやはり水を媒体にしたい。と思い、色々考えてみた結果。

面白い案が浮かぶ。

いっそのこと水を箱に詰めてみようか？と考えて、執事長に買って

きてもらった木箱の中に水をぶち込んだ。底に“記憶”のルーンを彫り、後は魔法を発動。

魔法はイメージがもつとも重要である。てなわけで中に入れた水の表面に小説が浮き上がるようにイメージして呪文を唱える。

イメージがしつかり定着するように、事前に紙に書き上げておいた物語。その名も“風と水の戦士ブリキュア！”（ブリミルとブリキュアを混ぜてみた。）を読み、そこに書かれている文章を頭に浮かべながら呪文を唱える。

頭で考えていることと全く違うことを喋っているせいか、かなり遅い詠唱しか出来なかったが、半日かけて漸く完成。途中でトイレにいけなかったのが辛かった。

さっそく木箱のフタを開けてみる。

木箱には固定化がかかっている、水に常に触れていても腐らない。

なおかつルーン文字は記憶のほかにも数個彫っていて、さかさまにしても水が出ない仕様である。

文字は自然とスクロールされていく。

見てみるとどうやら成功したみたいだ。

完成させてみたものの、内心、ほとんど意味の無い無駄なマジックアイテムだな〜と思いつつも、適当に本媒体じゃない本というものを見てみたかったから仕方ない。

普通に紙に起こした方が労力が少ないのは分かっているのだが、ネタということ別。

早速父上に見せてみたところ、少し驚いていたようだが、頭を撫でてもらった。

なんというか驚きがマジックアイテムを作ったということよりも、小説の内容の方に行っていたのは若干不満があるのだが。

木箱の機能を詳しく言っても、“なぜまたそんな面倒なことを？普通に紙で良いじゃないか？”みたいな顔をしていたので、というかそんな感じのことを言ってきたので「父上なんてだいきらい！！」といって、父上の執務室を出た。

背後で、何か倒れる音がしたがしつたこつちや無い！！

くそう！！どうしてこの無駄な発明というこの“無駄”な部分が良
いというネタの部分を分かってくれないのか？悲しい物がある！！
そりゃ、普通に紙で良いのは僕だって、分かっている。

そこを敢えて、本という常識をぶち破る無駄！！それが良いとい
うのに！！

今度は母上の寝室を訪ねた。

そして見せた結果。

「確かに・・・すばらしいわ。でも・・・無駄とかうんぬんの前に
・・・しょぼいわね。」

最後の言葉は小さくて、こつそり言っただつもりなんだろうが、ばっ
ちり聞こえてしまいましたよ。

無駄うんぬんの前にしょぼい！？

言うに事欠いてしょぼい！？だと！？

5歳児がマジックアイテムを作るという偉業よりも、5歳児が良く
出来た物語を書き上げるといふ事よりも、母上はしょぼさが一番気
になったようである。

もっと驚くべきところが前者二つだと思っただが、そこを敢えてス
ルーしてしょぼさに目を向けるのが我が母のとんでもクオリティ！？
いや、確かに水の表面に浮き上がった文字が普通に読みにくかつた
り、早送り機能とか巻き戻し昨日が無いから一度見逃すとまた最初
から見ないといけないとか、スクロールが一定速度しかないから速
読の人だと読む気がしないとか多々の欠点はあるけれども！！

一生懸命作った息子の作品に対して、しょぼいとはつきり言うのは
どうなん！？

「・・・こそ。」

は、はは、母上も嫌いだあああああああっ！！！！

とって僕は寢室を後にした。

背後の方ではあらあら。という母上の声が聞こえた。

今に見てるよ！！

世界に一つだけしかない、とっておきの絵本を見せてやるからな！！
てか、絵が無いんだからただの本・・・でもないからただの水小説・
・・・?とも言うべきかな。とにかく見ているよ！！

あと二日でもクオリティに仕上げてやるから！！

無駄な発明・・・ではなく、本という媒体をぶち壊すような革命的
な発明をしてやるんだからな！！

3 ページ目

そうした思いを胸に二日間。

きつちり改良を施し。それこそ魔改造とも言えるべき超絶改良をした木箱はもはや、初期型の次元を超えたものになっていた。欠点はもちろんのこと全て改良。

そして水が物語に出てくる建物や人物を模るようにし、なおかつ染料を水の中に入れ、建物や人物の彩色も可能とした。

さらには水が震えることで、音声を発生させることに成功。

人物が喋るのみならず、戦闘シーンなどの効果音もバツチリである。さらにはブリキユアの変身シーンなどもこだわりの一つ。噴出す水や光に彩られ、それこそまさにその場にいるような臨場感が楽しめるというわけである。

3D映画を木箱に詰め込んだ・・・といっても過言ではない！！もうね。あまりの完成度に名前をつけてみた。

その名も「幻想木箱」。

幻想。すなわち物語を詰め込んだ木箱として、作った僕渾身の作品である。

売りに出せば世界中で大ヒット間違いなし。なのだが、如何せんこれはかなり高度な魔法技術とルーン文字の掘り込みが必要で、表面も裏にもビツチリとルーンが描かれており、ソレが一種の彫刻に見えないことも無い、見栄えもパーフェクトな木箱である。

これを二日。徹夜で仕込んだのは我ながら死ぬかと思った。

何度も何度も魔法をかけたで、今となってはどんな魔法をどれだけ重ねがけしたのかも覚えていない。というかこの二日でスクウェアにレベルが上がったという、ラッキーなことも。風もトライアングルとなった。

精神力の量というよりは、手先の器用さを求められる感じ？だったので、ここ数日で色々な技能を修得した気がする。

というか、やりすぎな気がしないでもない。

職人芸だね、もはや。

完成したものを早速、母上に見せに行くと、さすがの母上も驚いていた。

「え、エンデ。あなた、凄いじゃない!？」

このブリキアという女の子の服装・・・見たことのないものだけど、かなり可愛いわよ!？」

あなたには魔法以外にもデザイナーとしての才能があるのかもしれないわね?」

そこかよ!?!とツツコミそうになったが、まあよしとしよう。

この母親をまともな驚かすのは無理と判断する。

今度は父親に。と思ったのだが、父親は寝込んでいるとのこと。仕事のしすぎだろうか?

今日はヴァリエール公爵家へ行く日だと言つのに。

「父上、起きて。」

「うつつん・・・うつつん」

うなされているようで、父上は苦しそうにしている。

一体何があったんだろうか?と考えても何も思い当たらない。

というか眠くて頭が働かん?

軽くぼーっとしてると、執事長がやってきてこっそりと耳打ちをしてきた。

「パパ、大好きと言えばすぐに起きるに違いませぬぞ。若様。」

「そなの?おじいちゃん。」

「そつでございませ。物は試しとも言いますし、ちぢ、どつぞお試しくださいませ。」

ちなみにこの執事長の名はツェツペリンと言つらしい。
70過ぎの古株で父上が子供の頃からこの家に仕えているのだとか
おじいちゃんみたいなき感じではつとする人である。

木箱を買つてもらつた際、せつかくの機会とばかりに名前を聞いて
それと呼ぼうとしたらおじいちゃんと呼ばれるほうが嬉しいとの
とで、それ以来おじいちゃんと呼んでいる。

とにかくおじいちゃんの言つとおりにしてみる。

恥ずかしいのだが、遅刻なぞしてはヴァリエール家に悪印象を与え
てしまう。

いや、関わりたくないという手前、そつちのほうが好都合なのか？
まあいいや。

「パ、パパ？

だ、大好き・・・ひあつ!？」

ちよつとたどたどしくも言つてみると、いきなりガバつと起き上が
る父上。

その起き上がり方が、いつてはなんだが気持ち悪い。
心臓にも悪い。

「私も大好きだぞ！エンデー！

だいつきらいなんてウソだよな!？」

ウソだといつておくれ!？」

「え!？う、うん!？」

もちろんだよ!！ち、父上!！」

「そ、そうか!！」

そうだよな!！うん!！」

なんか、すつごいテンション高い父上だ。

何か良い事でもあったのだろうか？というか初めて見る父上である。ナンにせよ。うなされてるのが治ってよかった。

「旦那様。今日はヴァリエール公爵家のご息女の誕生会でございます。

遅刻などせぬように、急いで支度なさいませ。」

「分かっている、ツエッペリン。」

というか、いささかいつもより元気すぎる気もしないこともない。

おじいちゃんの方へ目を向けるとウインクをしてくるおじいちゃん。

“どうです？言ったとおりでしょう。”といわんばかりである。

目線だけで謝礼の意を示しておき、僕は父上の執務室を出る。

「父上、プレゼントが出来たよ。

後で見て。」

「う、うむ。分かった。先に馬車に乗っていてくれ。」

「うん。」

こうして僕の初めての原作キャラとの対面はカトレアさんということになった。

誕生会へ行くくらいなら家で魔法の特訓をしたいなと思いつつ。

追伸。

幻想木箱を父上に見せたところ、大好評であった。

これにまさるプレゼントは無いだろうという言葉をもらえるほど。

ソレを聞いて、いささかやりすぎた気がしたが、まあ一度くらい構うまい！と樂觀視しつつ徹夜による疲労と眠気にいざなわれて、意識を落とす僕である。

「起きなさい、エンデ。」

「ん？」

「・・・ついたの？」

「ああ、ついたぞ。」

「眠気は大丈夫か？」

「・・・大丈夫かな？」

「うん、大丈夫。」

馬車の仮眠は約三時間ほどであったが、誕生会を過ごす分には十二分。

問題なさそうである。

「オマエは聡明だから問題ないとは思うが、失礼や粗相の無いようにな。」

「それも大丈夫。というより、プレゼントを渡したらそのまま適当に隅っこにいるつもりだし。」

「我が子ながら欲が無いな。」

他の貴族の子供達は覚えを良くしようとするところなのだが、

「・・・恥ずかしいもの。」

プレゼントを渡すとお礼を貰うよね。

僕ってどうもお礼を言われるのが好きじゃないというか、「ありがとう」「みたいな目で見られるのが苦手なのだ。」

なんかいたたまれないというか、恥ずかしいというか。だから正直もつと手を抜いたプレゼントを用意すればよかったと今更ながらに後悔している。

「・・・我が子だからこそだな。」

父上は僕の恥ずかしい宣言に特にリアクションは起こさず、一瞬だけ遠い目をしただけだった。

多分、自分の幼い頃を思い出しているのだろう。

“私も恥ずかしかつたな。” みたいなことを思っているに違いない。最近、ようやく分かってきたことなのだが、父上が寡黙なのは恥ずかしさから来る物であって、喋るのが苦手というわけではないみたいである。

母上曰く“可愛い人”なのだそうだ。我が父上は。

馬車を降りて、歩いていくとかなりの豪邸が見える。

門の前には執事さんが立っていた。

ヴァリエール家の執事なのだろう。やたらとピシッとしていて迫力がある。

実はいいとこの貴族なんです！と言い出してもすんなり信じてしまいうそなレベルだ。

おじいちゃんが親しみ特化型執事だとすればこの人は事務特化型執事と呼べるかもしれない。

「ジェローム殿。ハンニバル・ド・レイフォールとその息子、エド・ド・レイフォールだ。招待状はこちらに。」

と言って、招待状を差し出す父上。

ジェロームと呼ばれた執事は「お預かりします」と一言断ってその招待状の確認をする。

「確かに渡した招待状のようですね。

ようこそおいでなさいました。ハンニバル様、そしてエンデ様。」

ジェロームさんは確認を終えた後、完璧なお辞儀をしてくれた。背筋とか、動きとか、美しいを通り越して鋭さすら感じさせるものである。

こちらもお父上共々お辞儀し返すが、なんか見劣りしてる気が。

「ふふふ、ご息もすばらしいですな。」

「当然だ。自慢の息子だからな。」

「？」

すばらしいといわれるほど綺麗なお辞儀ではなかったと思うが？
あなたにすばらしいと言われても嫌味にしか聞こえんぞ。

「ああ、お辞儀の出来のことではございませぬ。

お辞儀を返すという行為をすばらしいと僭越ながら評価させて頂いた次第でございます。」

はい？

「ただの使用人風情にお辞儀をし返すという貴族様はなかなかいらっしやいませぬ。

そもそもそれが当たり前ですから。ともすればレイフォール家も返す必要は無いのですが、レイフォール家の人々は必ずといって良いほど私も平民とはいえど、礼を尽くしてくださいます。そのレイフォール家の家訓とでも申しましょうか？それをきっちり守られて

いるエンデ様を見て、すばらしいと評したのです。」
なるほどね。

「昨今の貴族様はろくに後継者も育てられぬ輩が多いという話ですから・・・まあこの心配はレイフォール家のかたがたにおいては微塵もありませぬでしょう。」

「当然のことだな。息子を褒めて貰ったことは純粹に嬉しいのだが、少し差し出がましくは無いか？ジェローム殿。」

「と、申し訳ありません。」

確かにあまりに踏み入り過ぎた話でございましたね。
私としたことが、とんだ無礼をしまして。

どうか許してくださいませ。」

「ふん、大儀があつたとしても、ヴァリエールがかこむその使用人をその辺の貴族が罰せられるものか。
相変わらず食えぬ男よ。」

ふふふふと不敵な笑いをする父上。
初めて見たな、こんな父上。

「父上はジェローム殿と友人？」

「む？」

・・・わかるか？」

わかるだろう、それは。

予定調和な空気しか感じないぞ。

僕の疑問にはジェロームさんが答えてくれた。

「私は元々レイフォール家に仕えていたのですよ。

エンデ様の家にツェッペリンという執事はいらっしやいませんか？」

「おじいちゃんの知り合い？」

「ふふ、おじいちゃんとききましたか。
あの人らしい。」

クスクスと笑うジェロームさん。

「アレの息子が私でございます。」
なるほど。

どうしておじいちゃんの息子がヴァリエール家に仕えることになったのかとは良く知らんが・・・というか興味がないんだけども、とりあえず父上とは浅はかならぬ仲ってわけね。
まあそりゃそうだよね。

ジェロームさんが父上に話したことって、初対面の人にただの使用人という立場の人間が言えるような内容じゃなかったし。

「立ち話が過ぎましたね。重ね重ね申し訳ない。
では、お2人のご案内は私の後ろで控えているメイドにお任せします。」

・・・お連れしなさい。」

ジェロームさんの言葉にしたがって、メイドさんが僕達のご案内をかってでる。

メイドに付いていった先は大きなエントランスホールだった。

「で、でかい・・・」

さすが一番身分が高い貴族とされる公爵家。

家が馬鹿でかい分、エントランスホールも超馬鹿でかい。

どっからどう見ても過剰な広さだろ！？と思わずにはいられないのは僕が小市民だからなのか、器なのか、気のせいなのか。

なんにせよ維持管理が大変そうである。

これの月の維持管理だけで平民の年収くらいはするんだらうな・・・
とか思うとなんだか真面目に働く平民がかわいそうになってくる。

ホールには沢山の長机とそこに置いてある大量の料理。
立食パーティ形式のようだ。

「私はヴァリエール公爵に挨拶をしてくる。

オマエもカトレア嬢に挨拶がてら、プレゼントを渡してけると良い。
その後は会場で好きに過ごしなさい。」

「了解、父上。」

父上の背中を見送った後で、僕はカトレアさんを探すべく、周りを
見回した。

奥の方に椅子があり、そこにカトレアさんは座っていた。

少し遠めだが、ここからでも十二分に可愛いということが分かる。

前世で彼女無しかった自分には刺激が強いかもしれない。とはいえ、
所詮相手は9歳児。

前世含め30間近の男でもさすがに緊張は無いけどさ。

第一、美少女の顔には日々慣れ親しんでいる。

主に鏡を見るときに。

・・・やめよう。考えても悲しくなるだけだ。

周りには貴族の坊ちゃん嬢ちゃんが群がって、我先にと話しかけて
いる。

お前ら、人の迷惑考えるよ！？と思わずツツコミたくなる光景だ。
確か病を患っているって話だが、大丈夫なのか？

まあ僕が心配することじゃないな。

とっとと渡してとっとと帰りたい。

そしてぐっすり眠りたい。

眠気は無くともあくまでも一時的なものだし、そもそも体の疲れま
では取れない。

自分にヒーリングあたりをかけてみるかな？

「あのう・・・」

「ミス、カトレア・・・僕とお食事に！！」

「ミス、カトレアはきれいね、是非とも友達になってくれないかし
ら！？」

「ミス、カトレア。君は病を患っていると聞いた！

私にその病は治せないが、君と一緒にいて支えてあげることがは出来
る！！」

とかなんとか周りの連中がうるさい。

プレゼントが渡せないじゃないか。

というか、こいつらを掻き分けてまでプレゼントを渡しに行くよう
な気概は僕には無い。

・・・どうしよう。

いつそのこと渡したってことにしちゃうかな？

それとも、その辺のメイドさんに渡してもらおうように頼む？

カトレアさんの近くの机には貰ったプレゼントと思わしき花束やら
宝石やらがある。

あそこに置いて置けばいいんじゃない？

「あ・・・メイドさん。」

その机の近くに突っ立っていたメイドさんに話しかけた。

「これってミス・カトレアが貰ったプレゼント置き場・・・みたい

なものですか？」

「は、はい。そうです！」

話しかけられるとは思ってなかったのか、慌てて返事をするメイドさん。

よし、決定だ。

ここに置いておけば良い！！

「プレゼントを渡したいのですが・・・あれですから・・・ここに置いておいて大丈夫でしょうか？」

貴族達に姦しく囲まれているカトリアさんへ視線を向けつつ、僕はそう尋ねた。

「・・・ははは。申し訳ありません。」

「貴方が謝ることではないです。」

この紙にこのマジックアイテムの使い方を書いておくので、後でミス・カトリアと一緒に渡して置いてください。」

「は、はい。承りました。」

一応、危険性が無いかどうかディディクトマジックをかけて確認させていただきますし、紙の内容も拝見させていただきますが、よろしいですか？」

「問題ないです。」

よし！

これで、あとは目立たず騒がずで会場の隅っこにでもいれば良いだろう！！

ふとカトリアさんの方を向くと目が合った。その目には若干の疲労と苦心が見て取れる。

とりあえず目線だけでがんばれと応援して見たが、伝わるまい。そのまま会釈して立ち去った僕である。去り際にこちらに向けてきたようなカトレアさんの笑顔がやけに印象に残った物だ。

その後、体調を崩したということでカトレアさんは退室。パーティーは主役を欠かしたまま大詰めを向かえ、終わりが近づいていた。

ちなみに僕はエントランスホールから出て、ヴァリエール家の庭に遊びに出ていた。

どうもあの空気は好きになれん。

庭には大き目の湖があり、鯉みたいな魚（微妙に違う形をしている）に会場から持ってきたパンを千切ってあげている所であった。ばしゃばしゃと僕の前に必死になって寄ってくるのが可愛い。

かなり癒されるわコレ。

家の庭にも湖があるし、そこで鯉の1、2匹を飼うのも良いかもしれない。

というか、これを見てたら飼いたくなってきた。

一匹だけで良いからくれないかな？

持ち運びも鯉ごと水の一部を切り取ってそのまま持っていくのは――無いな。

空中に水の塊を作って鯉をそこに入れるって方法は一見良さそうだが壁やしきりが無いんだから普通に飛び出る。

ちなみであるが、動物への餌やりが楽しいのは精神学的に言うと自己の存在の確認・・・みたいな意味合いがあるからとかどっかで聞いたことがある。

動物に確認してもらわなくちゃならんとは、なんだか寂しいものがあるね。

友達がいないってことを暗に示している気がする。

他人と交流が少ない人間ほど動物を飼いたがるそうな。確かカトレアさんって動物好きだったよな？

そう考えると病気で他人と関わる機会の少ない彼女だからこそやたらと動物を周りに置きたがったのかも。なんて詮無いことを考えていると、周りを漂っている精霊の動きが乱れる。もちろん現在は魔眼は発動していないよ？

なぜ見えるかって言うと、精霊を感じるどころか裸眼でも精霊が見れるようになってきたからです。どんどん人間離れしていくなあと感じる今日この頃。

それは置いておき、話を戻す。

精霊が乱れる。大概に置いて、そうなる時は主に僕以外のメイジが近くにいるときである。

普通のメイジが魔法を使うとき、精霊に命令するような感じで精霊を使役するため、精霊側としても“魔力という好物をくれるのはいいんだけど、命令しまくる嫌な上司が来たぞ！！”みたいな感じで緊張が見て取れる。それが乱れとして確認できるということに最近気づいた。

一言で言うなら対メイジ専門探知能力である。超便利。

「何か御用ですか？

カトレア様。」

ミスを付けようと思ったんだが、面倒だった。様付けならば問題あるまい。

「私も一緒に餌をあげていい？」

僕の背後に忍び寄ってきた「ー」ってわけではないんだろうが、やってきたのはカトレアさん。
体調を崩して自室に戻ったんじゃないの？と思わないでもないが、それは単に公爵夫妻が姦しい集団に絡まれているのを助けるための方便かもしれない。
というか、そうだろう。

「体調が優れないと聞きましたけども、お体は大丈夫なので？」

分かっているながらこんな質問をするのも意地が悪いとは思っけど、僕は普通の「ー」ではないが、とにかく5歳児である！！
まずは心配するのが普通の応対という物だろう。

いろいろ手遅れな気もするけど5歳児然とした態度をとっておかなくってはならない。
目をつけられるわけにはいかない・・・というわけでこんなところにいるのだが、なぜまたここにこやつが出現するのか？
全く、思い通りには行かない物だ。

「大丈夫よ。心配してくれてありがとう。」

小さいのに、紳士なのね。」

とってコロコロと笑うカトレアさん。いや、もう、内心で“さん”付けもいらさないか。
可愛い笑顔である。
頬は染まってるなんかないんだからね！！

ごほん。

「餌をあげたければ好きにすれば良いでしょう？」

僕ごときの許可なんて要らないはずです。」

「あなたの邪魔をしてしまうと思って。」

「あ、い、いえ。」

常にニコニコ。

笑みがこれほど似合う女性も珍しいんじゃないだろうか？と思わせるほどに魅力的な笑顔である。惚れてしまいそうだ。惚れないけどね。

「それにしてもなぜここへ？」

鯉に餌をあげたかったっていうのは無いだろう。

別に今外に出てあげる必要ないし。

自分の家なんだからいつでもあげられる。

「部屋の窓からあなたの姿が見えたから。

お話したいの。ダメ？」

「いや、ダメじゃないですけど・・・」

ダメ。普通に。

彼女と仲良くなると自然、ルイズと関係する可能性も高くなる。

なんとかしてもそれは避けたいのだが。

彼女に目をつけられないために、会場の隅っところか会場から出たのにそれが逆に仇となるとは思っても余らなんだ。

いや、むしろ単独で孤立してたからむしろ目立ったんじゃない？

・・・じーざす！！

こんなことに今更気づくとは、我ながらアホ過ぎる！！

くそー！！僕もあの姦しい集団に紛れてアホ面下げて彼女に迫ってお

くんだった!!

明らかに失敗した!!木を隠すなら森の中とも言っし!!

まあそんなことを言ったところで、今更遅い。

とりあえず適当に話を切り上げて、会場に戻るう。いや、いつそのこと体調が悪いつてことにして即帰宅だ!

「あのそれで、話とは?」

「まずね、その堅い口調を止めて?」

ふふふと微笑みながらそう言ってきたカトレア。

それはちとまずいんじゃない?

たとえ本人が許したとしても周りが黙っていない。それが貴族様なワケで。

2人きりの時だけということにしてもばれば少なからず波風は立つ。

勘弁してもらいたい。

「あの、そういうわけには・・・」

「お願い。」

「いや、だから公爵様のご息女を・・・」

「ダメ。」

「ですから・・・」

「じゃなきゃ、父様から命令って形で出してもらっつ。」

めちゃくちゃだなオイ。

「はあ。わかりま・・・わかったよ。カトレア様。」

「様もいりません。」

「いやさすがにそれ・・・」
「いいません。」

口調は静かだが有無を言わさないとという意味の強さが見て取れる。
ルイズの頑固さを思い出すよ。

さすがアレの姉。

一見押しが弱そうでも、通すときはしっかり通してくる。

「か、カトレア？」

「よろしい。」

呼び捨てにすると一気に満開の笑みになる。

慌てて目を逸らしたのは照れたんじゃないからな!!

断じて違うんだからな!!

「僕はエンデ・・・一応言っておくけど男だよ。」

「へえ、男の子なのにすごく可愛いね。女の私から見ても嫉妬しちゃうぐらい。」

さすがにそこまではーいかないと思わないでもない。

「エンデはお魚が好きなの？」

「お魚・・・というか動物全般が好きかな。」

前世ではエキゾチックアニマルを主に飼っていた。

エキゾチックアニマルとは簡単に言うと一般的ではないペットの総称。

へビヤトカゲ、カエル、ハリネズミやフルーツコウモリなど。

医者の見つかりにくい動物ばかり飼っていた。

ちなみにハリネズミなんかは人間と同じように加齢とともに“がん”になりやすくなる。

よって、医者が必要不可欠な生き物だったりする。

放っておくと野球ボール大や体の三分の一にまで肥大化して見えないなくなるため、医者を探してから出ないと飼えない生き物だと考えている。安楽死という選択を取る覚悟も必要という可愛い外見からは想像できない意外にもシビアなペットだ。

カエルやトカゲなども脱腸や肥満、感染症などの病気にかかる時があるし、ヘビなんかは温度が足りないと消化不良を起こしてそのまま死亡。という場合もある。

どの動物にも言える事だが、飼う際にはさまざまな苦勞を覚悟する必要があるということである。

自分が飼えなくなると、基本的に里親に出すか殺処分しか無いため、特に恒温動物類は10年先くらいまで良く考えて購入して欲しい。

あれ？何の話をしてたんだっけ？

「私も色々な動物が好きなの。というより動物さん達はお友達だと思ってる。エンデは？」

「僕は・・・良き隣人。って感じかな？」

どの動物を飼育するさいにも言える事だが、初心者にありがちな失敗に人間と一緒に見る傾向がある。

たとえば人間は体温を持っているが、魚やトカゲ、カエル、ヘビ、昆虫は変温動物と言って体温が外気温に左右される。

ここでヒーターなどを買い忘れると温度の変化についていけず状態を崩したり死んだりするわけだ。

別の生き物！として見てしっかりとその生き物の生態や体の特徴を捉える事が大切なのだ。

「隣人・・・良い表現ね。」
「そうかな？」

犬猫を家族として見る人がいるが、そうするとどうしても人間基準で見てしまうことがある。過剰なスキンシップや優しさではない甘さ。

それはペットにとっても飼育者にとっても良くない。
というわけで“ペット”と言うには抵抗があるくらいには情を持っている僕としては自分への戒めも含めて“良き隣人”と思うことにしている。

友達でも可かも。

なんにせよ、カトレアの今の発言は自分のひそかな信念を認められたようで、ちょっと嬉しい。

「あ、ありがとう。」

「・・・ねえ、エンデ。」

私と友達になってくれない？」

うおいつ!？」

そ、それは嬉しいような悲しいような。

この世界に置いて同じような動物愛好家は他にはいない。
動物の飼育という娯楽が確立されていない。

どこるかそういつた発想すらないのだ。

そりゃそうだよな。平民は日夜生活するので精一杯だし、その辺の貴族は動物よりもメイドを飼うのが好きな年中発情野郎がほぼ全て。そもそもペット的な扱いの生き物がすでに“使い魔”として存在している以上、その上で他に何か！と考えるのはまずないだろう。

カトレアと一緒にハルゲニア動物図鑑とかを完成させるのも楽しいかもしれない。

可愛い子とお近づきになれるってのも悪くは無い。

が、ルイズが邪魔だ。

いや、邪魔という悪いか。ルイズだって好きで戦争に出るわけじゃないじゃないもんな。

むしろ被害者側だろう。

王女のラブレターの後始末とか、捨てゴマ扱いされたりとか、ジュリオ達には良いようにされたりとか。

サイヤ人クラスの戦闘力があればルイズを助けてやっても良いぐらいの不憫さだ。

とはいえそれは無いものねだりでしかない。

どうせなら魔眼じゃなくて、サイヤ人の肉体とかが欲しかったな。いまさらながらあのガチムチ老人神様に物申したくなる。

なんにせよ彼女の周りの人と言う感じに認識が変わるのはご勘弁願いたい。

ど、どうしようか？

「だめ？」

鯉に餌をやるためにかがんでいるカトレア。

そして僕は立つて餌をやっている。

自然上目遣い気味になる。

結果、破壊力抜群の可愛らしいお顔が目の前に広がる。

よって友達になった。

よし。

証明終了。

追伸。

カトリアと文通をすることになった。

4 ページ目

カトレアと文通を続けることになり、しばらくが経ったある日。僕は6歳となる。

今までは魔法の鍛錬やエルフ式魔法の試行錯誤ばかりであったが、そろそろ体も鍛えてみようかな？と思えてきた。

もちろん成長期の体であることは間違いないので、無理はしない程度にである。

適当に走りこみをして体力をつけること。まず第一に。

地球産の格闘技の練習もしてみた。

堅い物を殴ると拳が鍛えられるとかいう話があるので、治癒の魔法もあることだし思い切って石を殴って見た。

が。

痛い。痛すぎる。

当然だ。

というか、そもそも魔法という殺傷性の高い飛び道具が横行するこの世の中。

素手なんていうナンセンス極まりないリーチの短い物を使う必要が無い。

剣や槍を持っておけばいいだけの話だ。

剣や槍を使えない状況だったらどうするんだ？と考えたが、そんなことは無いように生きようと決めた。

気をつけていても巻き込まれたら？とも考えたが、まあ無いと信じることにした。

信じれば報われる。そんな気がする。

とも言ってられないので、なんとか近接技を会得したい。

カポエイラ、テコンドー、空手、柔道、剣道、ボクシング、ムエタイ、中国拳法と知っている格闘技を頭に浮かべてみたが、もちろん都合よく経験済みなんてことはない。

せいぜい漫画、アニメ、テレビで見たという程度である。
柔道や、剣道。ボクシング、テコンドー、空手なんかはスポーツ化
しちゃってるから参考にはならないだろう。

「CQCを真似てみるか？」

ふと思いついたCQC。アメリカだかの兵隊に置ける近接格闘術。
いろんな国のスポーツから実践的な部分を抜き出して組み合わせた
ものだったっけ？

それとも近接格闘技の総称？

まあ良く分からんが某スニーキングゲームで有名なCQC。

ゲーム内の動きを思い出して適当に真似てみたが、だめだめ。

そりゃそうだろう。

出来るわけ無い。

物は試しとばかりに適当に他のスポーツ化した格闘技も含めてやっ
てみることにする。

空手は拳を鍛えるのが痛すぎるので却下。

柔道は人間以外を相手にする場合もあるので却下。服を着てない相
手や極太の腕を持つオーク鬼なんかをどう投げろっちゅうんだ。で
きればどんな相手にも使えるものが良い。

剣道はもちろん却下。これは完全にスポーツ化しちゃってる。

本当の刀や剣を使えるような動きになつてないのは素人目にも分
かる。

アニメや漫画にでてくるカポエイラなんか無駄が多すぎる。

テコンドーも論外。蹴りと拳を適当に使うんだろう程度の予備知識
しかない。

ボクシングはもはやただのパンチだろう。

中国拳法も柔道と同じで人外を相手にするとき困る。

結局、なんも使えないという結末に気づいた。

いっそのこと自分で考え出しちゃうか？

エンデ流！とか。ださいな。

まず体を鍛えようと思ったが、やめた。筋力で負ければそれで終わりだからだ。上には上がいる。下手に筋肉をつけて体を重くするのは避けるべきだ。実践という中では悪手だろう。

剣を振る程度。これで十分。

そもそも剣を使う必要があるかといえばー多分、要らない。

もともと懐に入り込まれたときや、武器が何も無い場合の手段を模索していたのだ。

（エルフ式魔法は切り札だし、できれば使いたくない。）

となれば。

スピード。敵の攻撃をかわすスピードがまず一番。

それを持続させるスタミナ。

そして反撃の場合は何も剣である必要はない。

ナイフなどで急所をしつかり狙えば十二分に攻撃力は稼げる。

投げナイフも扱えれば重畳^{ちゅうじょう}。

なおかつ、必ず急所に当てることの出来るナイフさばき。

この技術があれば大体のことに対応できるんじゃないか？

エルフ式魔法とあわせてこれではほ全ての状況に対応できる。はず。

人外を相手にした際にはナイフでは心もとないかもしれないが、そこはマジックアイテムとしてのナイフを用意できればいい。あるかわからないけど。

ないしは魔法のブレードでカバーできる。

防御面は父上から貰った手甲を使って受け流す形にすればあらかたの刃物は怖くない。

「よし、ナイフの練習と簡単な持久走を訓練メニューにしよう。」

これにて魔法の実験や訓練の他に日課が加わり、そこそこの距離でも狙ったところに投げナイフを当てられるようになった頃。父上の執務室に呼ばれた。

わざわざ執務室に呼ぶときは基本、大事な話である。

「最近、良く走っているが運動不足なのか？」

「うん、まあね。」

運動不足どころか足は結構引き締まって女性に羨まれる様な美脚になっていたりするけども。

腕もたるみやすい二の腕はしっかりとしまっている。

投げナイフを武器にしているので腕のがっちりとは筋肉が付かない。

「それで、今日はなんのようなの？父上。」

「うむ。最近領内でオーク鬼の大量発生が確認されている。」

「へえ。」

まさか6歳児に狩ってこいと言っくんじゃなかるうな!?

「ふふ。そう不安そうな顔をするな。」

別にオマエに討伐を頼むというわけではない。」

ですよね。

父上が非常識人だと仮定したとしてもそれは無いですよ。

「オマエには被害の出た村の復興を頼みたいと思っているのだ。」

この屋敷近くに被害にあった村がある。そこで怪我人の治癒を頼み

たい。治癒魔法の練習もしたいと言っていたらう？

周辺のオーク鬼はすでに駆除済みだから問題なからう。」

「それくらいなら喜んで。」

カトレアと友達になって情が沸いてからというもの。

この世界でも死なない力を付けるためと知的好奇心のためという魔法特訓の目的にさらに一つ。

彼女の病気を治したいという目的も追加した。

彼女を治すためにも治癒魔法の練習の機会は望むところである。

領民も助かって一石二鳥だ。

僕自身の傷は神様から貰った回復能力のせい——おかげで？

おかげで大抵の怪我が即刻治ってしまう。

ろくな練習が出来なかつたので、その点でも感謝である。

「さっそく行ってくる——！」

「まてまて！」

馬車の用意が出来てないし、今から行くと日が暮れて危ない。

明日にきなさい。」

「・・・そう。」

行く気満々だったのでテンションがガタ落ちである。

だが断る！と言ってレビテーションで飛んでいこうか？などと思っただが、色々な面でアホ過ぎるのでヤメた。

その日はおとなしく就寝。

いや、おとなしくでは無かった。

遠足前の子供のようなワクワク気分であったため、なかなか眠れず。エミリアに添い寝して貰うなんていう嬉恥ずかしいハプニングが起

きた。

彼女は13歳となり、第二次成長が本格的になってきたせいか急に女の子らしい体形になってきて、なおのこと眠りづらかったのは言うまでも無い。結構な美少女でもあるのでその面でもつらい。

今の段階でこれくらいの大きさはあった。何が？とは言いつまでもあるまい。

将来どうなるか、恐ろしさどころか頼もしさを感じさせてくれる。

・・・何を言ってるんだ？僕は。念のため言っておくが性的な意味での他意は微塵も無いよ。ホントウダヨ！！

とかなんとか言いながらもぐつすりと眠れたわけだけどね。

添い寝とか、安心感が半端ないんです。

人の体温って結構、いいものなんだよ。うん。

包まれてるといっつか、守られてるといっつか。

家族って感じ？上手くいえないんだけどね。

でもって次の日。

「行ってきますー！！」

「気をつけてな。」

「無理そうだったらすぐにでも帰ってきていいからね？」

母上と父上に見送られ。

地球のバラエティー番組“はじめてのおつかい”を思い出しながら、どんぶらこっこ。どんぶらこっこ。と馬車に揺られること1時間。

着いたのはユワツシャー村。

なんとなく「お前はもう死んでいる」と言いたくなる。

・・・モヒカン族とかスキンヘッドの皆さんがたむろってるとか無いよね？

ちなみにもちろんのこと護衛兼世話人、手伝い人としてエミリアと他数名のメイドであるメイドもついてきている。

入り口では村長が待っていた。

「ホアタタタ。よ、ようこそおいでくださいました。
私は村長のケンシロウと申します。」

・・・この村長はボケているのか？

おそらくだが「おや？・・・ようこそおいでくださいました。」と
言うべきであろうところをホアタタタにするとか、ケンシロウと
いう名前にしろ、偽名じゃないの？と思えてくる。

つつこみませんよ？

ホアタタタとか言ってくる人を舐めた態度のくせに微妙におびえ
た目を向けてくるのはなんでだよ！？

・・・ていうか、なんでおびえてるの？

「さっそくで悪いのですが、怪我人は？」

「それならばあちらの建物に。」

そ、その、それで治療に際したお金なのですが・・・今はあいにく
蓄えが少なく・・・

「無料ただでやれ？と？」

「い、いえ滅相もございませぬ！！

ただ、その！！

できれば・・・待っていたきたく・・・

この確認の仕方は意地悪だったかな？

「別に問題ないですよ。多分。」

その辺の折り合いは知らんがな。ここに行けって言われただけだし。
僕としては治療の練習がてらに来たのだからむしろお礼を言いたい
くらい。

報酬うんぬんは父上が話していると思っただが違うみたいだ。

確か、“臨時の際に救援した際の報酬は受け取らない”という常識がこの領内ではあるため、この村に救援をしらせた使者の人もわざわざ常識であるその辺は言っただけなかつたのかも。

父上に平民蔑視の意識は微塵も無いのだから理由があるならば無茶な要求はしないだろうし、そもそも報酬を要求すること自体無いと思うのだが。

言うまでもなく、うちの領民はその辺に理解があると思っただけで、違うのかな。

「若様。」

この村は隣の領から逃げ出してきた人たちが作った村ですから・・・その辺の理解がまだないのだと思います。いじめたらかわいそうですよ?」

「なるほど。合点がいったよ。蓄えが無いってのもそのためか。」

エミリアの補足説明に頷く僕。

どおりで変におびえた目を向けてきたわけだな。のわりにはふざけてるヤツだと思っただけか?

「そもそも、オーク鬼の大量発生を確認した時点で旦那様は私設備兵団やギルドから雇い入れた傭兵による領内警邏を手配していましたが他の農村はこの村ほどの被害は受けてないのです。

急ごしらえの村だったために確認と対策が遅れた。結果、若様の手が必要になるほどの被害が出た。というわけです。」

なおのこと納得。

平民は財産。と考える父上にしてはなんの対策も取らないはずがな

いと思っていたのだが、どうやらその予想は当たっていたようである。

「無駄話はここまでにして、さっそく治療に取り掛かる。」

僕に付き従うメイドたちがいつせいにハイと返事をする。

その後はあっという間の出来事だった。

魔法の使えないメイドは僕のサポートや怪我人の搬送を主に行い、水魔法が使える人間は全て治療に回る。

あらかた終わって一息つく。

この世界には医者という物がいない。

なぜなら、魔法で全て解決してしまうからである。

水の秘薬がないと重症は回復できないと言われているが、おそらくその辺は医学知識のあるなしに関わっているのだろう。

母上に聞くと、大抵の水メイジは漠然と“健康になれ”と念じる、ないしは”健康な自分“を想像して怪我人に魔法をかける。

イメージと感情が魔法の威力を左右するので、こんな漠然としたイメージで威力が出ないのは当然のことだ。メイジ単独の力で治すというのは難しいものがあるだろう。

僕は違う。たとえ元の世界では医者でなくとも、健康番組や雑学番組といった物が豊富にあり、ネットでは色々な病気について調べられるという現代日本人において、素人でもこの世界の人間に比べたら破格の医学知識を持つことになる。

なおかつ、大半の人が人体の内臓や骨の位置、筋肉や血液が循環しているという当たり前の知識であり概念。

それを持つ僕のイメージ力はそれこそ天と地ほどの差があるだろう。こうしたことを踏まえて、怪我人を治療した結果。

いろいろなことが分かった。

僕と一緒に治療にあたってた水メイジのメイドに簡単な人体構造を

教えるだけでも大分効果が違うということである。

骨があつて、筋肉があつて、内蔵があつて、ここにはどういう機能を持つ内蔵があり、この内蔵はこういう機能が・・・と教えるだけでも精神力の消費量、治癒魔法の威力、範囲、修復速度など大分違う。

そして骨を折った怪我の場合。

イメージが漠然な物だろうと、そうでなかつたら“修復”の必要がないということだ。

これが一番大きな発見であつた。

骨を折つた場合は通常、折れた状態のまま曲がつた状態で骨が固まらないように骨の位置を治すという作業がある。

これを修復という。

これがまた痛いんだ。

よっぽどの部分で無い限り麻酔はかけない。

よって超イタイ。

悲鳴が上がる痛さではなく、絶句する痛さと思つてもらえればいい。

治療魔法はどうも精霊が“体にとって一番自然な状態”にするように、折れた骨も勝手に整形されていく。

正確に言うならば、“遺伝子情報”に基づいて再生をするようである。

1人だけ右手親指が生まれつき無い子がいて、都合の良いことに右腕が悲惨な状態になっていた。

ぐちゃぐちゃでよくもまあ、感染症にもならず生きていたと思つたものだが彼を治してみても分かつたのは親指は無いままであつた。

自然な状態とするならば親指は人間の手の構造上、必須部分である。それが治らない。

これが示すところは生まれつきの病気は治らない。ということを示唆している。

すなわち。

生まれつき病弱なカトレアは治せないという証拠に他ならなかった。

治せない。

早くも僕の目的の一つが潰れてしまったのである。

僕はこのとき初めて泣いた。

別に泣くほど近いと感じているわけではない。

どうしようもない。

それを理解して、自身の無力に対する口惜しさ。悔しさに涙したのだった。

5 ページ目

カトレア14歳の誕生日。

徐々に病弱具合が加速しているようで、この世界で言う成人の15歳に近いつてもあつて誕生会はもうされなくなつていった。

ルイズの誕生日会はまだに続いていて参加していたが、それだけに寂しさが際立っていた。

エレオノールは普通にもう成人しているからエレオノールはすでにないけどね。

僕は10歳となっている。

あいも変わらず文通は続けているが、さすがの彼女も少し参っているようである。

ここ連日、外から水メイジが多々やってきて入れ替わり立ち代りさまざまな魔法を試しては帰っていくということが続いているとのこと。精神的にも肉体的にもきついだらう。

症状はせきと激しい運動が出来ないということ。

呼吸器系に異常があるようだが、いくらこの世界の人間より医学知識があるとはいえ僕にはそこまでのことしか分からない。

手紙にはそのことに対するちよつとした弱音と動物達の話が殆どであつた。

励ましの言葉と動物に関すること。それを書いて誕生日を迎えることが出来たことによる祝いの言葉。

そして、彼女の9歳の誕生日の時に送った「幻想木箱」が好評で、それ以来毎年あげている「幻想木箱」を手紙と同封し、送る。

せめてこれを見る間だけでも病氣のことを忘れることができるように願つて。

今回の物語はブルーメンの音楽隊。
地球版とは出てくる動物が違って、彼女の飼っている動物が登場するようになっている。

手紙とプレゼントの準備を終えた後は鍛錬と治療魔法の開発。

最近は一〇歳になり、体もしっかりしてきたことから徐々に父上との近接訓練も行っている。

父上から貰ったコンバットナイフと手甲をつけて日々精進である。

最初はわざと弱く見せかけていたのだが、途中でやっぱりばれた。

白状してナイフの訓練をしていたというと、呆れ半分、嬉しさ半分という顔で頭を撫でられた。

危ないことをしていた以上、褒められないけど、自主的にがんばったことは褒めてやりたいみたいな感じかな？

魔法面はあれから精霊をより近くに感じることができるようになり、原作で言うところのエルフが言う「契約」と思わしき芸当も出来るようになってきた。

メイジとしての魔法はコントロールや速読詠唱、省略詠唱といった技術面はもちろん。使い方も工夫している。

ペンタゴンメイジへの壁も見えてきているから順調と言える。

たとえば水を圧縮して打ち出すウォーターカタラー。水は圧縮して打ち出すことよって鉄はもちろんのことダイヤモンドも両断することが出来る。その知識を用いたオリジナルスペルだ。

あとは圧縮した水をそのまま盾に使えばほとんど全ての攻撃は防ぐことが出来た。

重力球といった方が良くかもしれない。

大量の水を圧縮すると、圧縮された水塊内部には馬鹿でかい水圧が発生することになる。

これを盾にした場合、押し固められた水が強固な壁となり、例えば銃

弾などがこの壁を突き破ったとしても水塊内部で一センチと進まず止まり、弾はケシツブ並みの大きさに圧縮される。剣でも魔法でもこれは同じで、水圧に潰され、貫通することはまず無かった。しかも相手の頭にぶつけると、それだけで相手の頭が割れて流血するほどに堅い水塊。いろんな意味でエグイ魔法である。

アクアウォールなんて魔法も創ってみた。

足元から360度カバーする水の壁を噴出する魔法で、瞬間的な盾だがこれは受け流すことを想定にしている魔法。

水の勢いで攻撃の軌道をずらしちゃおう！っていう魔法なのだ。

ドットメイジでも使えるけど、もちろんのことスクウエアスペルとして発動したほうが強固な盾となる。

ほかにはタイダルウェイブと名づけたスクウエアスペルの津波魔法。一度だけ誰もこないような野山で使ってみたんだが、野山の木々が流されかけたところを見て急遽魔法を解いた。

危なすぎて使えない。しゅれにならん威力だ。

あとはさっきも言った水塊の魔法。アクアボールと名づけたこの魔法。

25メートルプールにあたる水を人の大きさくらいの容量に圧縮しているため、なかなかの堅さと水圧を誇る。

敵の近くで圧縮を解けば、即興の水爆弾と化したりもして、最強の魔法使いつて水メイジ！？と確信した魔法でもある。

そして“遺伝子情報”から治癒するという事実は僕に強力な近接魔法を生み出すきっかけともなった。

風2つに水2つのスクウエアスペルで、その名も『雷神降臨』。

これは自身の力を爆発的に上げるスペルである。

まずは風2つで電気を作り、体内の電気信号を弄る。

この辺のイメージがちょっと苦労したが、痛覚のON、OFFを可能にし、なおかつ反射神経の強化、脳が普段筋肉にかけているリミッターの解除。これら三つを行い、水2つで常に自身の体にヒーリングをかけた状態にする。

これによって、一時的に超人的な力を得ることが出来るのだ。

人間は3割ほどの力しか出せないといわれている。これは体自体が痛むのを和らげるためという。

すなわち、そのリミッターを解除して100パーセントの力を常に出し続け、体が壊れても骨が折れても即時正常な状態で、整復という工程が必要なく回復するため安心して限界突破できる。

こうした無茶による時間制限や副作用を魔法によって力づくで無視するという体は大層悪そうな切り札魔法だったりする。

基本的にメイジは一つの魔法しか使えないが、僕はエルフ式魔法も使えるのでこの雷神状態でも魔法が使えるという超性能を誇る。

とはいえ、これはもともと人外レベルの回復能力を持っている僕が出来る魔法であり、普通の人は3分と耐えられないだろう。水2つのヒーリングじゃ副作用による影響を消しきれないはずだ。

さらに言えば、これはきつと寿命を縮めるほどの滅茶苦茶技。こういうときは神様に1000年以上の寿命を与えられている不老の体がありたい。

雷神状態での鍛錬も週に1回だがこつそりとやっている。

そして治癒魔法面だが、治療という観点で“遺伝子”に基づくというなら、そうではなく“外科的手術”というイメージでもって治すのはどうだろうか？と考えてみた。

普通に治すという念は精霊にとって“直す”と同義に捉えられているようで、遺伝子という人体の設計図に基づいて“直す”。これが精霊の動きだった。

だったら治すではなく、外科的にそろから整形するというイメージでもっていわば“遺伝子という名の設計図の改造”を施そうってわけである。

そのイメージのもと先天的な病を持つ平民を父上に協力してもらい、探して、試してみたところ良い具合の結果が出た。

他にもいろいろラグドリアン湖に住む水の精霊から精霊の涙を貰ってそれを使って魔法を使ってみようと考えたが、一番は改造という概念を加えた治癒魔法。である。

改造という意識を加え、“生きる上で自然に”と念じながら治療を行うと精霊があとはやってくれぬみたいで、医学知識もあまり必要ない。

もう少しで治せる！

一度は絶望したものの、多少の希望が見えてきたのは幸運といえよう。

魔眼で病状を確認できるからそれもまたカトレアの病気を治す手助けになってくれる。

ただ、治療の際は服を下着ごと脱いでもらわなくちゃいけないという決定的な欠陥があった。

視認能力が見れば全てのこと分かるのだが、透視能力までは無く服を透かして見ることは出来なかったのである。

治療に際した一番の問題はここだったりする。

どんなに服越しに見ようと思っても、服の素材や編み方、付着している粉塵の数や本来肉眼では見えないほどに薄い汗の染み、雑菌の有無など。

いらんことはこれでもかつてほどに分かるのだが、どうあっても服の下の皮膚。皮膚の下の内臓までが見れないのだ。

ちなみに皮膚を透かす必要はない。

見た部分をそういう物体として視認できるので必要ないのだ。

病気を確認できる目を持つるので上半身裸になってくれというのはいささか辛いものがあるだろう。

日本で言えば、医者が「私は写輪眼を持ってましてね。世界中の名医の執刀を見て模倣した私は最強の名医ですよ！」と言ってくるのと一緒だ。

胡散臭いことこの上ない。

きつと思うだろう、リアルと現実をこっちゃんにしてるやばい人だと。

なんにしてもまずはこの新たな概念のもと作り出した治癒魔法を“リザレクシヨン”と名づけて色々な患者を練習台としてあと二年は練習しようと思う。

ちょっと酷いとは思うがお金を取らないんだから勘弁して欲しい。

仮に脱がせることが出来たとしても失敗は許されない。

脱がして失敗したら、単にオマエ裸見たいから直せるとか大言造語を吐いたんじゃない？

と疑われんかねない。

そつでないと言っても信じてくれるのはカトレア本人くらいだろう。下手したらあの“烈風”に殺されかねないので慎重に行うのは当然である。

どのみちこれはまだ完全ではないしね。

秘薬をあわせて使うとどうなるかとか、どの部位にも等しく効果が発揮されるのか？とかもつと被験者が欲しい。

統計が必要だ。

カトレアの場合は呼吸器という失敗が即死亡につながる部分ならばなおのこと。

待ってるよ、カトレア！

友達として僕が助けてみるからな！！

あくまでも友達としてだ。

あくまでもね！！

惚れてなんかないんだからな！！

あれからさらに一年。

「あぐっ！？」

「よし、今日はここまでにしよう。」

今日は父上との実戦形式の訓練日。

訓練して分かったことといえば、父上が意外にもかなりの強者であるということだ。

母上の話によるとあの“烈風”が隊長を勤めたマンティコア隊の隊員だったそうで、そこでも父上は弱いほうだったらしい。

ちなみに父上はあのワルドの師匠も勤めているとか。
今すでにスクウェアだそうだから、そのワルドの師匠をしている父上ですら弱いほうだったとは、どれほどのクオリティを誇っていたのだろうか。当時のマンティコア隊は。

そしてその隊長である“烈風”。

勝てる気がしない。

もちろん僕が作った数々のオリジナルスペルは訓練中には一切使わない。

殺傷能力が高すぎるし、雷神降臨はもちろんだ。

これらを使えば勝てるだろうが、逆に言えば使わないと父上には手も足も出ないという強さ。

化け物の集まりだと実感した次第です。

僕の本気でも烈風には勝てないんじゃないかね？と思えてきたからあら、不思議。

ああ、そうそう。

ようやくペンタゴンスペルが使えるようになり、雷神降臨にさらに風を1つ付け足して打撃の際に体を纏った風が敵を切裂くという効果もついた。

体をまとう風のおかげで擬似的に空も飛べるし、瞬間的な加速も可能となる。より便利に多次元的な攻撃が可能となった切り札スペル。我ながら恐ろしい魔法である。

「・・・そろそろ時期が来たのかも知れんな。」

「どうしたの？」

父上。「

汗をタオルで拭きつつ、父上がぼやく。

「何。ちゃんとした実践を積むのも悪くあるまい。

ちよつど夜盗の討伐依頼が来ていたところだ。」

「・・・僕にそれを？」

「・・・嫌なら無理には言わない。」

嫌なわけが無い。

もともと魔法の力や今やっている訓練も、いずれ来るであろう戦争の時に備えて自分が死なないように、生き残れるように力を蓄えているに過ぎない。

戦争から逃げればいいのだが、そうもいくまい。貴族として生まれた以上、立場がある。

国から命じられるだろうし、領民を守るためにも必要だ。

それに、今までの努力の・・・自身の成果が試せる。

これに異論を上げるはずが無いのだ。

かといって、喜んでいるかといえばそうではない。

たとえ相手が害を与えてくる人といえど、殺して大丈夫と思えるほどには冷徹になれないし、こちらから殺しにかかる以上、相手も死に物狂いで向かってくる。

絶対という言葉は無い。足を滑らせたところを殺されるかもしれないし、鬼だと思ってたら竜が出てくるかもしれない。

仲間の誰かが間違えて僕に魔法をぶつけるかもしれない。

死ぬ可能性なんてのは探そうと思えばいくらでも探せる。

特に殺し合いに行くときはなおのこと。

殺される場合のことを考える。

すなわち殺される覚悟を持って殺しに行かなければならない。

そんな戦場に好んで臨む輩はそうはいないだろう。

少なくとも僕は好きじゃない。

ただ、これから先、この世界で生きていくのならば逃げることを出来ない通過点でもある。

どうせ通るならばとっとと通ってしまいたい。

その思いもあった。

「いけるよ。そのためにやってるんだから。領民のため。家族のため。平和のため。」

平和を――平和な日常を求めるゆえに力を求めなければいけない。皮肉な物だ。

「そうか。」

ならばいい。

私は父として、現レイフォール家当主として、オマエを支えるだけだ。」

こうして僕は初めての殺し合いの場に行くこととなった。

場所は前回と同じくユワツシャー村。

護衛は僕の希望で誰も連れてこないようにしてもらった。

父上も母上もかなり心配していたが、これは譲れなかった。

誰かがいるとその人を頼ってしまう。

いざとなったら助けしてくれるかもしれない。そういう甘えが出ないように、出ようが無いように臨む。

何よりも僕の魔法はメイジとしてはあまりに異端に過ぎる。エミリアや両親、おじいちゃんならばともかく、他の人間には極力見せたくない。

その結果、姉代わりのエミリアにも心配をかけてしまったが、その辺は仕方あるまい。

余談だがエミリアは現在18歳。胸はFとなっていて、凄い美人さんへと昇華していた。

なのに未だに添い寝をしてきたり、一緒にお風呂に入ろうとしてくるのはいい加減止めて欲しいものである。いやどちらもありがたいのだけでも。

添い寝は相変わらず安眠具合が遙かに違っし、お風呂はお風呂で背中を流してもらったりマッサージなんかもしてもらったりして、とても気持ちいい。
性的な意味はないのであしからず。

などと考えながらも村はずれの坑道を探索中の僕。

警戒は常に最大レベル。野党とはいえ油断無く、きっちりかっちりばっちり殺す。

殺すための想像も覚悟も済ませてきた。

村人が数人捕らえられたりしたそうで、その救助も目的にある。

「見つけた。」

エルフ式魔法をほぼ極めつつある僕には四系統全てを扱える。

よって土の上にいれば大抵は感知できるし、土の上になくても風で捉えることが出来る。

メイジかどうかも人の周りにいる精霊を見れば判断がつくし、かりに相手が隠密形の魔法を使っているてもメイジである以上は僕を誤魔化すことは出来ない。

むしろ精霊の気配が濃くなるから分かりやすいくらいである。

人質らしき人は見当たらないんだが、もう殺されてしまったのだからうか？

なににせよ雷神降臨を使用し、アクアベールも準備しておく。

手加減はせず、確実に皆殺しにする。
ナイフを持つ手が小刻みに震える。
手甲がカチカチと音をたてる。
サイレントをかけているので問題ないが、今後のことを考えると問題だ。

初めての人殺し。
殺されるかもしれない。

そう思うだけで、無性にここから立ち去りたくなる。

とはいえ、そうはいかない。
いけない。

「・・・よし。」

まずはさらわれた人の確保が最優先。
身を隠しながら付近を搜索する。

しばらくして急増と思われる小屋を見つけた。
ところどころがひび割れている小屋。
おそらくもともとはこの坑道で働いていた人たちが使っていたものなだろう。
父上が大分前に掘り尽くした坑道だと言っていたから、ソレ相応にぼろっちい。

周りを探索して誰もいないことを確認してからナイフを片手に小屋へと入る。

「・・・ひうつ!?!」

中には女性と思われる遺体が数体。なぶり殺されたと思われる男性の遺体が一つ。

最後に10歳ほどの僕と変わらないくらいの少女が小刻みに震えて倒れていた。

このくらいで悲鳴が出そうになるとは僕もまだまだである。

いや、これをなんら意に介さない人間になりたいとも思わないが。

少女は暴行を受けた後らしく、体中には青痣が多数。

すぐに治癒の魔法をかけながら魔眼で状態を確かめると、かなりまずいことが分かる。

よっぽど強い力で殴られたか蹴られたかしたのだろう。もしくは棍棒などのフルスイングをまともに受けたか。胃が破裂して、子宮も潰れていた。

正直治せるか五分五分の状態だ。胃の内容物と剥離した胃の粘膜、血反吐が回りに飛び散っている。子宮も子供が産めるようになるかは分からない。

というか、これだけのダメージを受けてよく生きているものだ。間があまり空いてないのか？

「・・・どうしてこんなことが出来るんだか・・・。」

あまりの酷い惨状に逆に頭が冷えていく。

年端も行かない少女にこんなことをする理由はなんだ？

何があればこんなことができる？

女性の遺体も良く見ると性的暴行をした後に殺したということが分かる。

雷神降臨状態での特訓をしておいてよかった。

最初の方は制御が上手くいかず、木とかに衝突して色々スプラッタなことになっていたから、慌てず対処が出来る。何が役に立つかわからんものだ。

「そろそろ大丈夫かな。」

魔眼で確認すると胃の状態も子宮も幸い、上手い具合に治った。障害は残らないだろう。

エルフ式魔法だと治療用の魔法まで強力になるから便利である。

一応一ヶ月ほど経過を見たいから村に滞在・・・は無いな。うちで雇うか。

「おい。てめえは誰だよ？」

「ひうつ!？」

また出そうになる悲鳴を懸命に押し込み、すぐさま振り返って思いつきり殴る!!ヘタレとは言わないで!!必死なんだよこっちも。つい慌てた結果、殴られた男は上半身が軽く吹き飛び、上半身と遅れて下半身が小屋の壁を吹き飛ばしつつ十数メートルバウンドしたところで沈黙した。

「くそつ!!!」

雷神状態による豪撃はもちろんのこと派手な音を発てた。はつきり言って焦りすぎて、ダメすぎな対応だ。

これでは他の仲間に気づかれてしまう。僕1人なら余裕で対応できるが、少女を守りながらではどうか分からない。

なにより僕にとっては殺し合いというのは未知の領域だ。

その未知の領域にわざわざ不利な状況で挑むなんて無謀に過ぎない。能力だけを見れば十全に可能かもしれないが、現実には能力以外にも運や精神面といったものが影響する。そもそも今、焦って殺した男が夜盗の仲間じゃなかったらとんだ間違い。どころか一生もののミスである。服装を見ると村の人間でも、坑道で働くような格好でもないようだから夜盗だろう。ほっとした。本当に安心した。夜盗だからと安心した。というのもちよっと変だが。

とにかく仕切りなおした。

少女を背負ってそのまま僕はこの場を離れる。つもりだったが、精霊の動きがおかしい。

「メイジ・・・っ!？」

予測は当たりで、目の前に風の暴風が巻き起こる。それを間一髪で避ける僕。少女を背負ったままじゃあまり派手な動きは出来ない。

「オイオイ・・・てめえはナンだ？」

そこには多いな杖を構えたメイジの男と、ナイフや斧、剣を持つ男達が数十人。

メイジの男を守るように群がっていた。

・・・報告では10人ほどのはずだったと思うんだけど？少なくとも

も30人はいるんじゃない？これ。

静かにピンチが到来した現状である。

5 ページ目 (後書き)

健康診断がありました。

身長が一ミリも変わってなかったとです。(苦)

6 ページ目

てめえはナンだ？か。

それはこっちのセリフだろ。

「夜盗のくせして魔法を使うのか。」

「口に気をつける。貴族の嬢ちゃん。」

この人数相手に勝てるかどうかかわからんほどの阿呆じゃあるまい？」

普通に勝てるんだけどね。

この背負ってる女の子がいなかったら話ですが。

そして僕は男だ。

「一応、聞いておきたいんだけどあっちの小屋の中の人たち殺したのアンタ？」

「ん？」

あれか？

まあ、俺だな。」

「ふうん。」

「そういや、その背にいるガキは俺の大事な大事な息子様に蹴りをくれたクソガキか。」

ちつと可愛いからと股開かせようとしただけで俺の大事なもんをけり潰そうとしたクソガキにはたつぷりと教育的指導を施したつもりなんだが・・・なんで生きてるんだ？」

「あれはアンタがやったんだ？」

「もちろん。今の話の流れからして他にやったと思えるようなやつはいないだろ？」

ちよつと頭に来て使いもんにならなくしちまったと後悔したもんだ

が・・・嬢ちゃん、大層な秘薬を持ってたようだな。せつかくだし、二人揃って仲良く腰を振るって言うなら、命だけは助けてやってもいいぜ？」

胃が潰れてたのに、秘薬をつかえるかったの。

いくら魔法薬と言っても、体内に取り込めないだろうよ。多分。

「アンタみたいな蛆虫に股開くぐらいなら死んだほうがマシだろう。実際。」

命だけは？阿呆が。

命よりもアンタごときに蹂躪されるという事実のほうが忌々しい」と極まらないわ。

逆だろ？

命だけはやるから、それは勘弁してもらいたいっていうなら分かるが。

蛆虫相手に腰フルなんてとてもじゃないが無理だね。」

「・・・殺せ。」

僕の言葉に男は怒ったのか、配下と思わしき連中をけしかける。

分かりやすいことだ。

だが、ちょうど良かった。

僕もこいつには結構な殺意を抱いていたからね。

心置きなく殺せる。

「ぐぎゃあっ!?!」

「げっ!?!」

「びぎゃっ!?!」

「あがああああっ!?!」

「ぶぎいいいつ!？」

夜盗達が思い思いの悲鳴を上げてはらわたをぶちまけていく。絶対に使わないと思っていたこの魔法を使わせるとは大したクズどもだ。

いや、顔色変えずにここまで惨い魔法を使えてる僕も大概にしてクズなのかもしれない。だとしたら嫌だなあ。

たとえ外道が相手だとしても人殺しを行ったつてのに何も思わない。

「な、な!？」

なに、何をしやがったっ!？」

あつという間にメイジの男以外は全てはらわたをぶちまけてうずくまっている。

男を除いて全員が全員、生きてはいるがすぐに死んでしまうレベルの重症だ。

「簡単なことさ。

体内の水を外に引つ張り出してあげただけだよ?」

「・・・あ、ありえねえ!？」

ありえねえぞ!？」

そんなことは不可能なはずだ!!

魔法には・・・魔法には・・・」

「僕さ。水のメイジなんだよね。

んで、盾として大量の水を常に作ってるんだけど、今は僕の周りにないよね?」

ここで、問題。その盾はどこへ行ったでしよう?」

魔法は解いてないよ?もちろん。」

そう、人体に含まれている水分は水メイジといえど操作は不可能である。

というかそれが出来れば最強すぎる。そもそもすでに誰か試してるだろうし、そうした呪文が無いってことは、無理だということだ。人体に含まれる水分にはその人、個人の精神力が宿っていてそれが抵抗力としてあるのか、酷く操りにくいものとなっている。

そもそも人間の体内の水分はなんかかشらの物と混ざっており、それもまた操作を難しくさせる。どんなにがんばっても毛細血管一本分の血流を滞らせるというのが限界である。

それこそ人体を貫くほどの力を持たせるのは不可能と言って良い。ただのアー一匹で象を倒すくらいに不可能なことだ。

僕がペンタゴンからヘクサゴンにクラスアップしたならなんとかできるかもしれないが、仮に出来たとしても、1人殺すので精一杯だろう。

そこで僕は考えた。

人体の水分が使えないなら他から持ってきてくれれば良いだけだ。

ペンタゴンになって初めて使えるようになったオ리지ナルスベル。

“ミストカーテン”。文字通り霧のカーテンである。霧を自由自在に操るのだ。

水は固体、気体、液体という三形態を持っている。

まずは霧。水蒸気として相手の体内。

肺や胃に入り込み、それらを通して僕の魔力の通った霧を相手の体内に入れる。

そして今度はそれらに方向性を持たせて、一箇所に集める。それによって液体化した水を凍らせて肉に引っ掛けるのと同時に一気に引き抜くとあら、不思議。

人間が真っ赤なお花を咲かせました！というわけ。

氷も飛び散って、一種の芸術のように見えて綺麗だ。

「せいぜい、綺麗な花を咲かせてね。
名も知らぬメイジさん。」

「や、やめぐばはっ!？」

ちなみに彼は僕の背負っている少女が怪我をした部分と同じ部位を
引き抜いた。

胃と。性器である。

「シヨツクによる即死だね。」

よかったじゃないか。他の連中と違って苦しまずに逝けてさ。」

全員が死んだのを見届けた頃には、僕のナイフを握る手は震えてい
なかつた。

見届ける途中ですっかり油断していたせいか、夜盗が死の物狂いで
襲い掛かってきたのは驚いた。
はらわたをぶちまけたっていうのに、よくもまあ動けるものだ。も
ちろん雷神状態は解いてなかつたので反射的に色々とぶちまけたの
だが、返り血を思いつきり浴びてしまった。

「うあ……気持ち悪い。」

首から下が血だらけで、一見すると重症を負ってる様だ。

水で洗い流そうかと思っただが、女の子を抱えてる状態だしとっとと屋敷に帰って寝たい。

あのペンタゴンスペルは規模の割に精神力の減りが激しくて、女の子を抱えて帰る分も考えると無駄に精神力の消費をすると途中で魔法が切れて大変なことになるかもしれない。

帰宅道中に危険がないとも言い切れないし。

雷神状態でいるのにも精神力をじわじわと消費するし、彼女を背負って歩くことを考えると解けないし、レビテーションで彼女を運ぶのも却下。人前でそれ以外の魔法が使えなくなるし、レビテーションは得意じゃない・・・ユワツシャー村で泊めて貰って明日帰ると言うのも色々な面から却下。

両親とエミリアに心配をかけるし、枕が替わると眠れないってのもある。

平民の村にろくなベッドがあるとも思えないし、こういう疲れたときこそふかふかベッドで寝るべきだろう。

多少は無理してでも帰るべきだ。

となると出来るだけ魔法は節約したい。

川かなんかあれば良いんだが・・・そう都合よくもない。

村で軽く服を洗ってから帰ることにしよう。

「・・・はああああ。」

血まみれで村まで帰らなくちゃいけなくなるとは。

盛大なため息について僕はその場を後にした。

で。

結論から言つとだ。

村につく頃には血がガツツリとこびり付いて染みとなつており、まるで汚れが取れなかった。

頑固な油汚れには某台所用洗剤であるジヨ 君を使うんだろうが、頑固な血汚れにも ヨイ君は効いてくれるのだろうか？それとも漂白剤かな？でも漂白剤だとこの時代の染料レベルだと服の色も抜け落ちてしまいそうだ。まあ手に入らないんだけどね。

くそ！一張羅が台無しだよ！！

実用的な青色の特別デザイン服が見るも無残になってしまった。(具体的に言つとテイ ズオブヴェスペリアのフレンのような服。知らない人は軽装の騎士なんかを思い浮かべてね。)

胸から腹にかけて真っ赤でっせ？

怖いわ！！固まってどす黒くなつてんのもまたそれを加速させる。

どこの殺人現場つて感じだよ。

村長のケンシロウなんかは「ホアタタタタ！？ざ、斬新な彩色ですね？」とか言い放つてきた。

ホアタタタタの部分はスルーしてやるが、血をぶちまけるだけの彩色があるか！！とツツコンでやた。

そのまま、オマエはそういう彩色をするんだな！？と詰め寄つてやるうー！と思わないでもなかったが、フォローのつもりだろうから許してやった。そんなことよりもとっとと家に帰りたかったからつてもある。

第一フォローになつてないけどね。

現在は帰りの道を一直線。

ちなみに雷神状態は解いてない。

そうでないとい人一人抱えて歩くなんてことが無理だし、この際だからどれくらいの間、維持できるか精神力が続く限り試してみようと思う。

そう続けられるほどの精神力は残ってないけどもね。

少女を抱えながらふと思いついたのが、後日改めて彼女を回収しに行けば良かったんじゃないか？と思わないでもない。

まあさしもの僕でも完治つてとこまではいつてないから何かあったときのために仕方ないけどさ。

後から確認して分かったことだけど、脊髄までにも損傷が入って治りきつてなかった。危なかったわ。自分で思う以上に動揺してたのかもしれない。このまま見逃してたらやばかった。

肋骨にもヒビが入ってたし、腸の一部もダメになってたし・・・もつとあの腐れ外道を苦しめて殺したほうが良かったかも？と感じないでもない。脊髄部分と腸を治して肋骨は屋敷に帰ってからだ。

村長に聞いたところ、殺された男は父親で、母親も殺された女性の1人だったらしい。

少女の傷の状況から、一番最後に殺されかけたようだしきつと目の前で両親は殺されたんだろう。

精神的なケアも必要だ。

母親に至っては娘の目の前でえつちなことをされた後に殺されたはずだ。

そう考えると本当に惨い話である。

やっぱりもつと苦しめて殺すべきだった。

もしくは少女に殺させるか・・・復讐は良くない・・・とは確かに思うが、所詮外野の僕からしてみればどうしようも無いことなんだよね。

僕も父上と母上がそうならと思うと・・・もしもの仮定だって

言うのに、かなりの殺意が沸く。

これが実際に起きたことなら、地の果てまで追ってって殺すだろう。人生の目的にすらなるかもしれない。

コルベール先生を殺そうとしたアニエスの気持ちもわかるわ。頭で悪くないと思っても、そうはいかないよね感情って。

「殺さずにアレも持って帰れば良かったな。・・・失敗した。」

腕と足をちょん切って、失血死しないように治した後なら何も出来なかっただろうし、あの腐れ外道も回収するべきだった。ままならんもんだ。

屋敷の入り口につく頃にはすっかり精神力が空っぽになっており、幸いなことに少女は目を覚まさなかった。

このぎりぎりの状況で起きて喚かれたらどうしようも無いわ。

エミリアには拳骨を食らい、母上には魔法を食らい、父上には魔法と拳骨を食らった。

おじいちゃんにはネチネチと嫌味を言われた。そしてどれほど自分が心配したか？

泣きながらに1時間ほどたっぷりと聞かされて一番辛かったのは言うまでも無い。

「どうだった？」

父上はそう聞いてきた。

このどうだった？はいろんな意味でのどうだった？なのだろう。

「・・・嫌だった。」

これが偽らざる僕の気持ちだ。

あんな現場を見るのも嫌だったし、死ぬ一步手前の酷い状態を見るのも治すのも嫌だった。外道とは言え殺すのも嫌だったし、血をかぶったのも嫌だった。

そしてあんなことが平気で出来る人間も嫌だったし、それを許してしまう世界も嫌だった。

とにかく嫌なことばかりだった。

覚悟していたつもりだったが、全く持って覚悟が足らなかった。

「そうか。」

そんな気持ちを察してくれたのか、父上はその一言で終わる。

「しばらくの間、休め。」

カトレア嬢から頂いた鯉の世話でもしながら・・・な。」

「うん、そうする。」

しばらくは動物の世話でもしながらゆったりと休むことにしよう。

今日のことを忘れることはできないだろうが、考えないようにすることは出来る。

その夜は母上と久しぶりに添い寝した。

暗くなると途端にあいつらを殺した時の場面が思い浮かぶが、母上に抱きついてるとそれも自然に納まった。

全く持って情けない。

それにまだ一番の問題が残っている。

次の日。

「・・・誰？」

「僕はエンデ。君の名前を聞いて良いかな？」

「・・・シャスティル。」

「そう。シャスティル。良い名前だね。」

少女が起きたというので会いに行った。

部屋は余っていたものを使い、シャスティルの体はすでに完治済み。

「・・・気分は？」

「良いと思ってるの？」

「思わないけどそういう意味じゃない。

体のどこかが具合悪くないか？ってこと。」

「・・・どうして助けたの？」

「死に掛けてたから。」

「くだらない動機ね。」

「・・・まあ今の君からしたらそうだろうね。」

彼女の目には光が無い。

どこか虚ろで生きる気力が無いように見える。

「助かりたくなかった。」

「・・・そう。」

「助けて欲しくなかった。」

「・・・そう。」

「なんで・・・なんで助けたの!？」

あのまま・・・あのまま死にたかったのにつ!!!」

涙しながら声を上げる少女。

その肩は震えている。

「母さんも・・・父さんも・・・母さんなんか・・・」

そのときの場面を思い浮かべたのか、涙が洪水のように流れ出る。

「いやっ!!」

いやいやっ!!」

もう嫌なのっ!!」

どうして・・・どうして・・・っ!？」

話の内容が色々と飛んでいる。

おそらく気持ちを言葉に出来ない・・・そういう状態だ。
ただただ慟哭を上げる少女。

ひとしきり泣いた後、彼女は口を開いた。

「ねえ。殺して。」

「・・・いいの?」

「生きててなんになるの?」

「・・・死んだお父さんお母さんはそんなこと思ってないと思うっよ
?」

「・・・あなたに分かるの?」

お父さんとお母さんと話したこともないのに?」

もつともだ。気休めにもならない。

「分かったよ。殺すことにする。」

ただ、一週間だけで良い。ここで生きてみて欲しい。」

「……気持ちは変わらない。」

「それでもだよ。一応生きてみて。」

それでも死にたかったら、苦しまないように殺してあげる。」

「……約束ね。」

「……うん。」

じゃ。晩御飯の時に呼ぶから。と言って部屋を後にした。

「エンデ。」

「……エミリア。」

扉の前ではエミリアが待っていた。

「聞いてたの?」

「本当に殺すの?」

エミリアは姉同然なため、僕もエミリアも屋敷内では敬語を使っていない。

そのエミリアがそう聞いてきた。

「……僕の責任だからね。」

「貴方がすることないわ……旦那様に頼むか……いえ、私がやる。」

「……僕の責任。」

「いえ、私がやる。」

「ダメ。これだけはダメ。絶対に僕がやる。勝手にやらないでね。例えエミリアでも許さない。」

「そんなことしたら、・・・殺すよ。」

「だったら、殺せば良い。」

とにかく私がやる。」

脅しだとばれてるみたい。

さすがに姉に隠し事は出来ないか。というか本当に殺されても構わないと考えているのかも。

そんな彼女だからこそ、こんなことをさせられないんだけどね。となればこれしかあるまい。

「お願い・・・これだけは僕がやる。やりたい。お願いします。」

頭を下げて誠心誠意頼み込むしかあるまい。

「ど、どうして・・・そこまで。」

「・・・エンデは何も悪くないじゃないっ!?!」

泣きながらそう言うエミリア。

良い姉を持った物だ。

こんな汚れ役を変わりにしてくれるなんてなかなかこうは行かない。

「・・・あのままだったら死んでたところを僕が助けたからね。これは僕の責任。屋敷までつれてきたのも僕の責任。というより、夜盗を殺してきたんだから今更1人、2人殺したところで変わらないよ?。」

「そういうことは・・・もっと余裕のある顔で言いなさい。」

「・・・そんな顔してるかな?。」

「泣きそうな顔よ。」

うぐ。

痛いところを付くな。

「どうせ、一度死ぬはずだった命が本来の運命に従うだけとか考えて、なんとか平静を保とうとしてるんでしようけど、誰よりも彼女を殺すってことしか出来ない自分に・・・口惜しい思いをしてるのはエンデでしょう？」

誰よりも彼女を殺すしかないって選択肢しか無いことに悲しんでいるのは貴方でしょうに。

どうして家族を頼らないの？

こついうときこそ、家族に甘えれば良い！！

貴方が甘えてくれることなんて殆ど無いじゃない！？

まだ11歳なのに、そこまで1人で抱え込むことない・・・じゃない・・・ぐず。

・・・うああああああん！！」

なんでエミリアが泣くんだか。

・・・というかそんなに言わないでよ。

「それ以上言わないで。泣いちゃう。」

一応、男の子としての意地とちっぴけなプライドで泣きそうなのを耐えているというのに、そんなに言われるとこっちだって泣きたくなるっば。

「・・・ぐず。」

泣けば良いでしょ!!」

「・・・恥ずかしいもん。」

「いいから泣きなさい!!」

「・・・うん、ありがとう。」

たまには思いっきり泣くのも大切さ!

泣きつかれてその日はそのまま寝た。

「それで、どうするの?」

「どうするって?」

「彼女のことよ。」

どうせ、一週間って期間になんとかするつもりなんでしょ?」

「・・・まあね。」

「どうするの?」

「アニマルセラピー・・・なんて知らないよね。」

アニマルセラピー。

簡単に言うと動物と触れ合うことで心を豊かにしようっていうセラピー。

動物に触れて感じて、心の傷を癒す。

それが僕の作戦。

そのつもりだったから、あの部屋は僕お手製の水槽に特徴的な魚であるフグを入れて、別水槽にはカメレオン。他にはヘビ。ウサギ、ネコ、イヌ、カエル、カメとあらゆる好みに対応できるよう各種動物を取り揃えている。

アニマルセラピーと根気強く話しかけること。

これによって生きる気力を沸きあがらせよう！…というわけだ。

「そううまくいく？」

「上手く行かなかったら・・・そのときに考える。」

もちろん約束をたがえるつもりは無い。

そうなれば僕の手で直接殺すことになる。

本当に嫌だ嫌だ。

のんびり動物と暮らしつつ、訓練の毎日だけで良いのにな。

6 ページ目（後書き）

彼女は後々、カトレアとの絡みの際に重要なポジションを位置どるキーパーソンです。カトレアの病を治してはい結婚！なんてのは問屋が降ろさないのです。

7 ページ目

一日目。

朝、あいつは来た。

早朝からやってきた。

朝っぱらからなんだと思ったら、ぞろぞろと動物達がいる。
何？この無駄に行儀の良い動物達は？

一列に並んで、彼女の後ろにつき従い、私の部屋にやってきた。

「ごめんね？」

この部屋はもともと動物達専用でね。

邪魔ならどかすけどしばらく我慢してくれると嬉しい。・・・しばらくといっても一週間だが。」

最後のセリフは聞こえなかったが、動物達用の部屋でこんなに良い部屋がもらえるのか。

うらやましいことだ。

私の家なんて、この部屋ほどの広さも無かった。

それでも父さんと母さんがいて、それなりに幸せだとは感じる生活だったのに。

なんで。どうして。なぜ。殺されたの？

何もしてなかったのに。父さんと私の目の前で服を脱がされた母さんが・・・

「シヤステイル？」

「っ！？」

いつの間にか目の前に彼女がいた。

彼女の顔はやたらと綺麗で可愛い。
こんな大きな家もあって、恵まれているに違いない。

「顔が真っ青だし、泣きそうだよ？

大丈夫？気分は？」

「・・・気分が良くても意味が無い。

一週間後には死ぬから。」

彼女は私を生かしたいらしい。

どうして私を生かしたいのか分からないけど、どうあっても私の気持ちは変わらない。

死にたいけど死なせてくれないのはどうして？

「僕は君が今日明日にでも自殺するかとハラハラしていたけど、その様子だと大丈夫そうだね。」

「・・・約束は守りなさいってお母さんから言われてたから。」

自殺。

そうだ。

自殺という手があった。

どうして思いつかなかったのだろう。

そうだ、自殺だ。自殺しよう。

でも、母さんの・・・今はいない母さんの言いつけもある。

約束は守るべきものだって。

だからだ。

だから。

一週間は生きてやろう。

約束しちゃったから。

こんなことなら約束しなければ良かった。

なんだか胸がモヤモヤするけど、なんだろう？

これは。

お腹空いたな。

彼女が言うには胃の調子を見て今日は飲み物のみにしたほうが良い
って言ってた。

飲み物だけじゃお腹は満たされないけど、このまま餓死するのモ
いかなと思う。

二日目

動物達はやたらと静かだ。

特にすることも無く私はベッドで腰をかけている。

何もしたくないというのが正しいのかもしれない。

動物達をぼんやりと眺めながらそんなことを思った。

朝食が運ばれてくるが、私の両手は動かさにくかった。

「・・・異常は無いはずんだけど・・・脊椎の治療は始めてだっ
たらな・・・さすがに神経が集中する重要箇所はそうそう治せな
かったのか・・・それともリハビリが必要なのか？」

せきずい？しんけい？

なんのことだろうか？

そんなことを言う彼女。

・・・どうでもいいか。

どうせ死ぬもの。

「リハビリになるし、がんばって食べようか？」

「・・・そこまでして食べたくない。」

「でも、食べないと死んじゃうよ?」

「早めに、死ぬだけじゃない。」

という私を見て、はあとため息をつく彼女。
そうだ。

このまま私を死なせて。餓死するの。

「はい、あーん。」

「い、いらない!」

驚いたことに彼女はあーんをしてくる。

カップルがやっているのを見たことがある。

つい、恥ずかしくてそっぽを向いてしまった。

というより女同士ってのがまた恥ずかしい。

「いいから、食べて。」

「いらないって言ってるでむぐっ!??」

「美味しい?」

私が喋ってる最中に無理やり口にご飯を突っ込んできた。
こんなもの美味しいわけが・・・美味しいけどさ。

「ま、まずい。」

美味しいなんて口が裂けても言ってもやらない。

「そう。じゃあ、もう一杯どうぞ。」

「まずいって言ってるのがわかなぐっ!??」

また口に突っ込まれるスプーン。
彼女は私のウソなんて見破っているかのように、私の口へと食べ物
を運ぶ。

私はそのままされるがままになった。
どうせ殺してもらえるんだからいい。
そうだ。

問題ない。

そういえば、お母さんも私が風邪を引いた時はこうして甲斐甲斐し
く世話をしてくれたっけ。
そんなことを思い出しながら、枕を濡らして寝た。

三日目

イヌやネコを弄って遊ぶと良い暇つぶしになることに気づいた。
食事は朝昼晩と彼女に世話をしてもらった。

私を屋敷に入れたことといい、生かしたがつていることといい、変
な貴族様だ。

「はい、あーん。」

「あむ。むぐむぐ。」

「美味しい？」

「まずい。」

毎回この会話が繰り返される。
もちろん、美味しい。

「貴族様って毎日こんなに美味しい食事を食べてるのね。」

「いや、これは特別メニュー・・・というか、僕が作ってるんだ。」

っ！？

驚いた。

料理のできる貴族様なんて始めて聞いた。

「栄養学をちよつとかじってたんだ。動物達の餌のメニューを考える参考にするためにね。」

えいようがく？

また知らない言葉を使う。

学もあるのね。

本当に世界は不公平だ。

私は父さんも母さんも殺されたって言うのに。

「なに？」

「撫でてるだけだよ？」

「触らないで。気持ち悪い。」

「・・・予想以上にきつい返しだ。それは。」

なれなれしく私の頭を撫でてくる彼女。

ほつとなんてしてない。

私の頭を撫でて良いのは・・・良いのは。

「母さんだけなんだから・・・」

その母さんもいない。

私を撫でてくれる人はもういない。

彼女の前で泣くのは癪だったから泣くのは我慢した。

泣きたい気持ちを我慢するために目の前にいた小さなネコを、ただひたすら捏ね繰り回してる私は彼女の目にはどう映るのだろうか？
・・・いや、どう見られていても関係ない。

その日は動物達をいじってたら、いつの間にか寝ていた。

四日目。

朝、起きると私をのぞきこむ熊がいた。

「ふひあっ!?!?」

なんだか知らないけど、私は食べられる!?!?と違ってベッドから転げ落ちた。

すると熊の影からひよっこりと人影が出てくる。

「ふふくん、驚いた?」

「・・・別に。」

「あれ?ちよつと不機嫌?」

「貴方が飼いならした熊?」

「飼いならしたって表現はちよつと好きじゃないけど、まあそつだよ。」

「・・・そつ。」

「安心した?」

「別に・・・飼いならしてなかったら熊に殺してもらえたと思うと残念に思ったただけなもの。」

「あんなに慌ててたくせに。ふひあっ!?!?っていう悲鳴を上げてたくせに。」

「あ、あれは・・・条件反射だもの！」

「ふひあっ!?も?」

「うるさい!」

彼女はやっぱり分からない。

その日は熊を枕にして寝るといふ変な体験をした。

怖くてびくびくしてたら、いつの間にか寝ていて、朝になっていた。

なんかむかつく。

五日目。

「外に行こう!」

「いや。」

「そういわずに。」

ぐいぐいと私を引っ張っていく彼女。

だんだん私に対して遠慮がなくなってきたる気がする。

どうせ死ぬし、別にいいけど。

「鯉がいるんだ。」

この餌をやってみて。」

「何これ?」

「鯉用に作った餌。」

私に持たされたのはコップ。

コップの中には石ころのような緑っぱい何かが沢山入っていた。

変な臭いがする。

「色々な野菜と川魚のすり身を混ぜ込んだ物を整形して、乾燥させた物だよ。」

魚のくせに私と同等な物を食べてる。

本当に嫌な世界だ。

とつとと死にたい。

「ほら、あげてみて。」

「う、うん。」

ためしに一粒、とつて投げてみるとスイスイと泳いでいた鯉がすぐに食いついた。

それを皮切りに、私の方へよってくる鯉たち。

我先にと池のふちに群がって、口をパクパクさせてる姿はなかなか愛嬌たっぷりだ。

バシャバシャという水音と一緒にコココココと鳴き声のような音も聞こえる。

「このコココココっていう音は鯉が口をパクパクさせる音だよ。

早く餌をくれっていう意思表示でもある。」

「えと、これ全部あげていいの?」

「うん、もちろん。」

いっぺんに上げるとすぐに終わっちゃってつまらないから10個づつくらい上げるのを勧めするよ。」

「う、うん。」

言われたとおりに餌を投げ入れるとすぐに食いつく鯉達。

なかなかどうして面白い。

「笑ってるほうが可愛いよ。」

「ふふふ・・・え？」

私。笑ってた？

「私・・・笑ってなんか・・・ふひあつ!？」

鯉が興奮するあまり、私の服に思いっきり水がかかった。いきなりなことだから本当に驚いた。

「ふひあつ!？だつて!!」

ぷくくく。また言ったね。」

「う、うるさいって言ってる!!」

この子嫌い。人の揚げ足ばかりとるもの。

その日は鯉に餌を上げる夢を見た。

夢の中では彼女が水を頭から引つかぶってた。ざまあみる。

六日目。

「へビはピット器官って言って赤外線を感じする能力を持ってるんだ。」

「・・・あむ、むくむく。そうなんだ。ところで赤外線って何？」

食べるときは必ず動物の話をする彼女。死ぬつもり私には意味の無い知識だ。でも、面白いのでそのまま聞いておく。

「さて、今日もお風呂の時間だ。」

お風呂。

この屋敷に来て、驚いたことは数多あれど一番の驚きは湯を張ってそこにつかるということだ。

私達平民は基本的にサウナで汗を流して、水を浴びて終わりっていうのが普通。

貴族様の湯浴みでも最後の水が温かい水ってこと以外は変わらないと物知りの父さんは言っていた。

この家が特別なのか、それとも父さんが間違っていたのか。

なににせよ気持ち良いからいいか。

私は風呂場で、彼女に頭を洗ってもらっていた。

この“せっけん”とか言うのも初めて見るし、聞くものだ。

貴族様に頭を洗ってもらう平民なんて私くらいじゃないだろうか？

そういえば彼女のお股は私と違った。

父さんと同じものが付いていた。

父さんは男にしか付いてないって言ったのに、彼女にも付いている。

父さんは意外と物知りじゃないのかもしれない。

「肩までちゃんとつかって。」

「いや。」

「いやじゃない。」

しっかり温まってから出ないと寒いよ。」

別に気持ちいいからいいんだけど、彼女の命令を聞くという形は癪

だ。

「お願い。」

「……うるさいな。」

渋々肩までつかる私。

お願いくらい聞いてやるう。

彼女に抱きかかえられる形でお風呂に入る私。

母さんと一緒の布団で寝たときのことを思い出して、泣いてしまった。

私が泣き出すと彼女が頭を撫でる仕草まで母さんと似ていて、私は余計に寂しくなって泣いてしまった。

その夜は彼女が添い寝してくれた。

私が死ぬまであと少し。

私が死んだら……彼女はどう思うんだろうか？

胸のモヤモヤが強くなった気がして、考えるのをやめた。考えたら戻れない気がした。

七日目

今日は珍しく朝、昼とメイドさんが来た。

やたらと胸の大きいメイドさんだ。

食べさせてくれたのもメイドさんだった。

ただ、いつものように美味しくは感じなかった。

同じ料理でも全然違う料理のように感じた。

なんだかメイドさんに食べさせられることが無性に苛立って、自分の手でかきこみ、一気に食べ干した。出てって。と言ったら素直に出て行くメイドさん。私は何様だろう？

しばらくすると、また胸がモヤモヤしてきて落ち着かない。

彼女がどうしたか？それをメイドさんに聞くのもなんだか、とてつもなく恥ずかしいことのように思えて、聞かないまま夜を迎えた。

へびやカメ、カエル、イヌ、ネコ、鳥、熊を相手にして気を紛らわせていた。

なんだか面白くない。

実に面白くない。

つまらない。

このまま明日を迎えると、私は死ぬ。

殺してもらおう。

明日は私が死ぬ日。

そう考えると胸のモヤモヤが一層強くなった気がして私は苦しかった。

なんだか良く分からないけど苦しかった。

夜。食事を持ってきたのはメイド。

じゃなかった。

いつもの彼女だ。

「いやあ、ごめんね。ちょっと父上と母上に話しておかないことがあつてさ。

長引いちゃった。」

「うるさい！」

「ばか!!」

「死ね!!」

「は、はい!?!」

何を言ってるんだろう?

私は。死ぬのは私だろうに。

「そこまで言うこと無いだろうに・・・まあいいか。明日。約束の日だよ。」

「・・・早く食べさせて。お腹空いた。」

明日のことをどうして今話すのか?

そのことに凄く苛立った私はぶっきらぼうな言い方になってしまった。

「はいはい。」

彼女はいつもの笑顔で私に食事を食べさせてくれる。

あいつも変わらず美味しい。

「まずい。」

こう言うのもあいつも変わらず。

美味しいなんて言ってやらない。

彼女の手作りだと聞いたらなおのことだ。

彼女は私の布団に入り込んできた。

出てけとは言わない。

もともと彼女の家だ。
だから言わない。
言いたいけど、言わない。
それだけだ。

「良く考えて。」

彼女が搾り出すように言ったその一言は、不思議と私の心に染み渡った。

八日目。

約束から一週間。
生きてみた。

朝、私は言った。

「殺して。」

「そう。」

本当に良いの？

「殺してよ。」

「本当に？」

「殺して、お願い。」

分かっていたでしょう？
私に生きる気概なんて無い。
居場所もない。

死ぬ。

死にたい。

楽になりたい。

そう考えるほどに胸のもやもやが強くなっていく。

このもやもやが限界を超えないうちに早く殺して欲しい。

「ねえ。」

今日まで過ごしてどうだった？」

どうでも。

「動物達は可愛かったでしょう？」

そんなわけではない。

暇だったから相手してあげただけ。

「毎日のご飯は？」

まずかったよ。

「僕とのお話は？」

楽しいわけが無い。

「お風呂。気持ちよかったですよ？」

熱かっただけ。

「鯉の餌やりは？あんなに笑っていたのに。」

笑ってない。貴方の目の錯覚だ。

「時間が経つことに泣くことが少なくならなかった？」

うるさい。

死ね。

「お母さんとお父さんのことを忘れて・・・」

うるさい！！

うるさいうるさいうるさい！！

「時間が経つごとに・・・過去・・・に出来ていたよね？」

「うるさいっ！！」

黙れ！！

黙って！！

黙ってよ！！

お願い！！

「本当に死にたいの？」

死にたい！！

死にたいに決まってるでしょ！！？

「どうしても、僕には死にたがってる人間には見えない。」

なんで、なんでなんで！？

なんでそんなこと分かるの!？
そんなこと言ってるにないし、思っても無い!!

「どうして、そんなに泣いてるの?」

泣いてない!!

泣いてなんか無い!!

泣く理由は・・・もう無くなった!!

死んだ!!

「泣く理由なんて・・・泣く理由が・・・無くなってくの・・・私
の中から・・・父さんと母さんがどんどん消えていくの・・・」

「消えないよ。」

「やめてっ!!」

お願いだから優しくしないで!!

私・・・私・・・このままでいいと思いはじめてる・・・貴方とずっ
と一緒にいたいと思ってる・・・」

何を言ってるのだろうか?

私は。

「別に良いよ。」

一緒にいてあげる。」

優しくしないでっ言ってるのに!!

「ご飯は美味しかった!!

まずいなんて言ってたけど、全部ウソ!!

恥ずかしかっただけだもん!!」

「分かってるよ。」

「動物だつてみんな良い子で・・・私にはもつたないくらいの良い子達で・・・」

「ああ・・・そうかもね。」

「鯉の餌やりだつて、今までに無かつたくらい楽しかつた!」

「うん。」

「お風呂も気持ちよかつたし、髪を洗つてもらつたのだつて・・・本物のお姉ちゃんにしてもらつてるみたいで凄く・・・凄く・・・」

「そう。」

「泣くのだつて、少なくなつていたもん!」

「・・・。」

「幸せ!」

「幸せだつた!」

でも。

「でも、ダメなの!!」

「貴方といると・・・幸せすぎて、幸せすぎて母さんを・・・父さんを忘れてしまう・・・忘れていつてる!!」

「私は忘れたくない!!」

「いつも優しくて時に厳しかつた母さんを!!」

「いつもは全然頼りないのに、いざというときはカッコいい父さんを!!」

「彼女といると忘れてしまう。」

「泣けなくなつてしまう。」

「幸せすぎて。」

「父さんと母さんが遠ざかつていつてしまう!!」
「そんな気がする。」

私が忘れたら本当に父さんと母さんが死んでしまつ。
そんなの嫌だ!!

「いや!! 私は父さんも母さんも忘れたくない!!
だから・・・お願い・・・お願いだから・・・私を・・・私が父さ
んと母さんを忘れる前に・・・」

お願いだから私を殺して。

「・・・忘れるわけ無いだろうがっ!!」

ひうつ!?

「どんなに時が経ったって、どんなに幸せだったって・・・父親を・
・母親を・・・忘れるわけ無いだろ!?

どうやってシャスティルは生まれたんだよ!?

父親が・・・母親が・・・2人がいて始めて生まれたんだろ!?

彼女が凄い剣幕で私に掴みかかってくる。

「逆だよ!!」

シャスティル!!

履き違えるな!!

逆だ!!

シャスティルが生きてるからこそ母親が・・・父親がいた何よりの
証になる!!」

そのまま強く抱きしめてくる。

「シヤスティル・・・何よりも僕が君に生きて欲しいと感じている。お願いだから・・・お願い、だから・・・僕のために生きて欲しい。」

ぎゅっともる力。

耳元で聞こえる咽ぶ音。

どうして・・・どうしてここまでしてくれるの？

こんなにされたら。

こんなに愛されたら。

死ねないじゃない。

死にたくなるじゃない。

「・・・シヤスティル・・・もう一度だけ聞くとよ。本当に死にたいの？」

ここまでしておいて今更何を言っているのだろうか？

「誠心誠意、お仕えさせていただきます。私の命は貴方のために。・・・エンデ様。」

こうしてエンデ専属メイドが増えたのだった。

「は？」

そんな彼女の決意表明に大したエンデの答えといえれば、ポカンとした顔も可愛らしいこと極まりなく、間の抜けた声を出しただけである。

7 ページ目（後書き）

書き上げて思った。

このままシヤステイルもヒロイン入りすんじゃないかね？と。

カトレアとだけラブラブさせるはずだったのに！

次話から学園編。

カトレア編という括りは存在しません。

何故ならば、この作品の最終目標がカトレアとのラブリチャだからです。具体的に言つと子供を産むくらいあたりまで？

（タイトル変更しました）

8 ページ目

「そうか、上手く言ったのだな。」

「はい、父上。」

なんかあの後、変なことになったが一先ず一件落着というヤツだ。

「全く・・・葬儀の準備をしてくれといわれた時は驚いたぞ。結局、取り越し苦労であったのは良かったことだが。」

「・・・あはは。」

父上と母上には7日目に全て話した。

彼女が生きることをあきらめ、死ぬことを選んだ時のために葬儀の準備も頼んだが、本当に良かった。

せっかく作って貰った棺桶だが、出番はずっと先だろう。

父上か母上が老衰なりで死ぬまで埃を被ってもらうしかない。

「それで？」

「それでって？」

「彼女を嫁にするのかと聞いている。」

「・・・ばーでゅん？」

「何語だ、それは。」

父上はニヤニヤしたまま続けた。

「エミリアに聞いたところに寄れば、告白染みたことを言ったそうじゃないか。私としては平民が相手でも構わんど。」

「・・・はて？」

告白染みたこと？
馬鹿な事をお言いでないよ。

確かに僕は君に生きて欲しいとか、ずっといて欲しいとか告白・・・
染みてるな。これ。
て言うか聞いてたのね。

「い、いや！

そんなんじゃないよ！？」

シヤステイルは家族としてというか、妹としてというか！？
あくまでも妹として一緒にいるのが好きになっただけで・・・その、
あの！？

「母さんも孫の顔が早くに見れそうだって、喜んでいたぞ。」

「いや、だから！

妹としてのね！？」

そういう意味合いで言ったのであって、決して異性として！？
そういうものではないんですよ！！」

「くくく。オマエがここまでうるたえるのを始めて見た気がするな。
エンデ。自分に正直になれ。」

正直ですけど！？

「とまあ、冗談は置いておいてだ。」

「・・・父上も人が悪い。」

「ふふふ。許せ。」

私達としてもなかなか子供が出来なくて、女の子が1人欲しいと思
っていたところだ。

あの子が嫌でないなら、養子として引き取る。」

こんなに笑う父上は始めて見た。
それにしても養子か。

適当にメイドさんにとでも思っていたのだが、思ったよりも上等な物になった。

「いいの？」

「かまわん。領主に必要なのは知恵と知識だ。魔法を扱う才など二の次に過ぎん。」

それともう一つ。オマエ宛に手紙だ。」

「ん？」

これは・・・カトレアからの？」

「ああ。」

なんでも、ふるーつばと・・・とか言ったか？

その子供が産まれたとこのことで見に来てとのことだ。」

それは良い知らせだ。

ちなみにフルーツバットというのはコウモリのこと。

コウモリは意外と沢山の種類があり、昆虫を食べる者。血をすするもの。他のコウモリを食べる者。魚を食べる者。果物を主食とする者と多種多様な食性を持つ。

大半のコウモリは毎日、自分の体重分以上を普通に食べるので餌の確保が難しいとのことで地球ですらコウモリの仲間はペットとされていなかった。

一部をのぞいて。

その一部が果物を主食とするコウモリ。

フルーツコウモリと呼ばれる種類だ。

果物なら普通に流通するので、手に入れやすく、またそれもある

多少高価だが、人工飼育されたフルーツコウモリが流通していた。

そのフルーツコウモリと思わしき種類をこのハルゲニアでたまたま僕が怪我してるところを拾ったので、ディテイクトマジック兼魔眼で病原菌の有無、寄生虫の有無を調べて、治癒魔法の応用や水魔法の応用でそれらを排除し、怪我也治癒。

結果、カトレアの家でフルーツバット2匹が仲間入りしたのだった。なぜカトレアの家にしたのかはちゃんとした理由がある。コウモリは運動量が多く、広い家の方が基本的に良いのだ。

また、カトレアはなぜか動物達のしつけがやたらと上手い。

本来意思疎通の出来なさそうな動物までトイレのしつけが出来るんだから、あれはある意味では虚無を越えるチートだろう。

あのほんわかオーラに秘密があると見たね。

我が家の動物は全てカトレアに一度預けているくらいだ。

不思議と聞き分けの良い子になって戻ってくる。

カエルや蛇といった生き物までもがトイレを覚えるとか、ありえない。

まあそれはともかくとして。

「早速言ってきました!!!父上!!!」

「いや、まて!?!」

誘いを受けたとはいえ、一度手紙を返すのが礼儀……」

「まあまあ、カトレアなら分かってくれるよ!」

「いや、そうじゃなくて……鋼鉄の規律を誇るカリン様に私が怒られるんだが……」

「がんば!」

「ボコられるであろう父親に向かって、それだけ!?!」

「パパ、大好き!!!」

だから何とかして!!!すぐ行きたい!!!」

「全て任せる!!!」

あ、扱い易いなオイ。
それと怒られるのは公爵から・・・じゃなくて公爵夫人のカリン様から怒られるんだね。

というわけでヴァリエール邸。
相変わらず無駄にでかい。

エミリアとなぜかメイド服を着込んだシヤステイルもいる。
メイドとしてご奉仕するとか言ってたけど、メイドとしてじゃなくて兄妹としてそばにいて欲しいんだが。そう伝えたときも分かったとか言ってたのに、なぜまたメイド服なんだろうか？

今更ながらにシヤステイルの容姿に触れておくと、一言で例えるなら彼女は野に咲く強かな花。という感じだろう。
10歳ゆえに体の凹凸はまだ無いが、顔はなぜか美女美男の多いハルゲニアゆえの美少女。髪型は赤毛のポニーテールがチャーミング。将来は男性人から引つ張りだこになるに違いない容姿である。

ここまで来たことだし、ついでに軽くカトレアを見て治せそうなら治しちやおう。

「あらあら？ やっぱり来たわね、エンデ。」
「カトレア・・・待っててくれたのは嬉しいけど・・・というか、僕がすぐに来なかつたらどうしたのさ。」

屋敷の門前で待っているカトレア。

「そんなわけないじゃない。

あの子達の子供が産まれたって聞いたら、地の果てだろうと飛んでくるでしょ?」

まさか。

それはさすがに・・・ないとも言い切れない・・・かもしれない。

「体だつて・・・まだ治つてないんだから、無理したら倒れちゃうよ?」

「あら?」

その言い草だといつかは治るって言ってるみたい。」

「みたいじゃなくて、そう言ってる。

手紙で言ってるでしょ?

おそらくもう治せるって・・・僕を信じてくれればだけど。」

「ええ。大丈夫。信用してるし信頼もしてる。私の大切なお友達だもの。」

お友達という言葉に少し胸が痛む。

・・・わけがない!

惚れてないからね!!

当然のことよ!!

「むむつ。お兄ちゃん・・・ラブってる!?

そういう顔してた!」

「ぶぶつ!?!?」

ら、ラブって無いわ！
ラブってる顔ってどんな顔！？」

いきなりなんてこと言い出すの！？
この子は！？」

ちなみに今でこそお兄ちゃんと言っているが、ここに来るちょっと前まで僕をお姉ちゃんとして思っていたらしい。
そつえば男だって言っただけ？
一緒に風呂に入ったこともあるのに、気づかなかったのかな？

「・・・そちらの子は妹さんかしら？」

カトレアから笑みが消えた。

表面上は笑っているが、僕には分かる。

内心ではなんか真面目な何かを考えてときの雰囲気だ。
警戒・・・なわけないか？

シヤステイルはただの女の子だし。

「ええと・・・新しくレイフォール家に加わった家族だよ。
ほら、自己紹介して、シヤステイル。」

すると彼女は優雅に一礼して、口を開く。

「私はシヤステイル・ド・レイフォール。
兄様の妹であり、レイフォール家の長女です。

以後お見知りおきを。カトレア様。ちなみに兄様とは妹とは言え血は繋がってませんから、普通に子供を産めます。」

聞かれてないことをなぜ答えたの！？

「そう、シヤスちゃん・・・って呼んで構わないかしら？
私もただのカトレアで良いわ。」

「分かりました。カトレア。お兄ちゃんは渡しませんよ。」

いやいやまでまで。

色々ツッコみたいところばかりだが、とりあえず僕はカトレアとは
ただの友達だと声高に言うておこう。

確かに美人だと思うし、好みにドストライクだがとにかく異性とし
ての好意を抱いていないということは強調しておく。

そしてさらに言えば、初対面の相手に会ってそうそうお兄ちゃんは
渡しませんよとか言うのはどうかと思うし、そもそもいつの間にあ
んな優雅な一礼や口上を覚えていたのかとかも気になるが、まあ良
い。早く産まれ立てのコウモリが見たい。

カトレアの表情が微妙に厳しいものになったが、それは一瞬のこと
ですぐにいつもの笑顔に戻る。

「なんにせよ、いらっしやい。エンデ、シヤスちゃん。」

「おじやまします。」

「おじやまします。」

エミリアは背後で「青春ね。」と呟いていた。

違うと思うし、空気になってるよエミリア。といったら殴られた。

最近、エミリアが暴力的になった気がする。

特に血を浴びて帰ったあの日から。

むむっ、まだ護衛を追いつたことに腹を立てているのだろうか？
細かいことでいちいち怒ってたら、小じわが増えるよと言ったらま
たまた殴られた。

「エミリア姉ちゃんなんか嫌いだ！！と言ったら、いきなりカトレアに僕の寝小便の話などし始めようとしたので、すぐさま土下座した。大好きですよ！お姉ちゃん！！」

「ヴァリエール公爵、公爵夫人。
お久しぶりです。」

「一番初めはやっぱり、家の主に挨拶だよね。」

「ああ、久しいな。エンデ君。」

公爵が答える。

「カトレアから聞いてはいるが、病の治療に関してはどうなのだ？」
「ソレに関しては今日見て、治せそうなら治そうと思います。」

「うむ、もし治せるというなら礼代わり・・・と言っては難だがカトレアを嫁に出そうと思っっているのだが・・・構わないか？器量よし。スタイル良し。正確良しの嫁が手に入るのだ。」

「嬉しいだろう？」

「・・・はあ、別に構いませんけど？」

なぜわざわざ嫁に出すことを言ってくるのかが意味不明なんだが？別に勝手に嫁に出せば良いじゃないか。

それが礼代わり？

なんの礼だ？

カトレアが嫁にくるならそれは嬉しいだろう。

中には特殊嗜好の方がいるかもしれないけど、あらかたの人にとっては素晴らしいものになるはずだ。公爵家とのコネも作れる。

うむ。もしかしたら、僕が彼女を助けるのは彼女を異性として好き

だからと勘違いしてるのかも知れない。

だから長女の縁談が失敗中、三女も魔法が微妙。男児がない今の公爵家を継げる人がいない。もとい公爵様としては「公爵家を継ぐに値する他家に嫁がせるしかない。カトレアを君にあげたいけど、そういうことで位の低い君にカトレアはあげられない」ということを言いたいのだろう。

確かに一緒にいるとホツとするし、なんか安らぐけど、別に異性としては好きじゃないからそれは別になんら構わない。

勘違いしてるな、公爵様は。

ただ、これだけは言っておきたい。

「構わない・・・とはいえ、彼女の意味を尊重してもらいたいです。彼女が幸せになる。」

それが僕の唯一の望みですから。例え誰が彼女の隣に立とうともそれだけを望みます。」

友達としての鏡なんじゃない？

僕って。

我ながら良いことを言ってるわ。僕。

「そ、そこまで娘を思ってくれてるとは・・・」

公爵様はなんか泣してるんだが。

黙って聞いていた夫人のほうも目が潤んでるように見える。

エミリアは「あの子は本当にもう・・・」となんか馬鹿を見るような目で見てくるんだけど、なんで？

ここは感動するところだよ？お姉ちゃん？

シヤステイルなんか僕を今にも殺しにかかりそうな目で・・・なん

でそんな目!?

カトレアは少し頬が染まっているけど、なんだか残念そうな顔をしてる。

・・・不思議空間?

あまりにも反応が違いすぎる気がする。

「す、すまない、みつともないところを見せたな。」

「いえ。そんなことは無いですよ。」

僕の言葉に感動したつてのもあるだろうけど、親ばかな感じがするから娘の嫁入りの姿を思い浮かべて泣けてきたのかもしれないし。

僕もなんだかウエディングドレスを着たカトレアがどこぞの貴族様と腕を組んでる姿を思い浮かべ・・・ないんだけど?

なんだか、不思議と心が拒否するような、忌避するような?

といつかなぜか隣には僕がいる。

・・・いや、まあまで。

なんだか、顔が火照ってきたような気がするが・・・あくまでカトレアとは友達であつてだな。

べつに照れも悔恨も嫉妬も無い!ということをちゃんとっておく。好きじゃない。そう、好きじゃない。

まだシャスティルとの結婚のほうを思い浮かべー何を言ってるの
だろうか?

僕は。

まあそれもこれも治せたらの話だ。

「治せたらの話ですし・・・公爵様の気持ちも分かるつもりです。」

人によって感じ方も考え方も違うから、十全に分かるとは言えませんが・・・少なくとも向こう5年以内には治せると思います。」
「ああ、是非とも頼む。君がカトレアと共にいてくれると言っつのは心強いことこの上ない。」

それは褒め過ぎじゃ？

病気を治すだけですよ？

「ありがとうございます。」

「ああ、下がってくれて構わないよ。」

「はい、失礼します。」

ふう緊張した。いまだ慣れない。

カトレアの部屋に入るとすぐにシヤスティルが掴みかかってくる。

「あうっ!？」

な、何すんの!？

シヤスティル!？」

「お、お兄ちゃん、純潔が奪われるくらいなら、今この場で奪ってやるの!?!」

「わ、わけの分からんことを言い出した!？」

「落ち着いて、シヤスちゃん。」

残念だけど・・・本当に残念だけど、そういうことじゃないから。えっとね・・・ごによごによ。」

なにやらシヤスティルに耳打ちをするカトレア。

何を言ってるのだろうか？

まあカトレアのことだろうから変なことは吹き込むまい。

「・・・ねえお兄ちゃん。」

「何？」

「お兄ちゃんのお嫁さんって誰？」

「誰・・・って？」

別に嫁なんて取ってないよ？」

というか、僕はまだ11だということを思い出してもらいたい。
第二次成長がまだ始まったばかりの僕に嫁は早すぎるだろう。

「ね？」

「うん。安心した。」

何の話かさっぱりである。

「私としてはどちらも応援したいところね。」

「エミリア？」

言いたいことがあるならはっきり言ってよ。」

「鈍感・・・とはちよつと違うか。」

「スルー!？」

「さて、では早速お披露目と行きましょう。」

でも、その前に。」

「エンデ。おめかししましょう。」

「ま、またやるの？」

「当然よ。」

一年に一回か二回、ヴァリエール家にお邪魔するのだが、3年前くらいからヴァリエール家にお邪魔すると必ずといって良いほどやらされることがある。

10分後。

「うわ・・・お姉ちゃんだね。完全に。」

「うふふ。あいも変わらず可愛いわ。」

私のお古もびつたりね。」

「私としてはもう少し派手なのが好きかな？」

一言で言うなら女装。

もう少し詳しく言うなら着せ替え。

さらに言うなら着せ替え人形である。

「うう・・・相変わらずこれは好きに慣れん。」

中がスースーする。」

カトレアのお古だと言うワンピースを着用してる僕。

肩くらいの髪は常に母上からの髪で軽く止めてあるため、自分で言うのもなんだが、下手な女の子より女の子してると言える。

いい加減止めたいんだけど、なかなかどうして女性はパワフルなのである。

このままの姿でコウモリを見て、和んだり、久々にカトレアの家の動物達と戯れてそろそろ帰る頃。

なかなか切り出せなかったのだが、思い切って言うてみた。

「ちょっと・・・カトレア。服を脱いで見ない？」

「・・・育て方を間違えたかしら。」

「・・・お兄ちゃん・・・見たかったら私を見せるのに!!!」

待ってくれ、2人とモ！
そういう意味じゃない。

まあ確かにテンパツてやたらとアホ丸出しな切り出し方になってしまったが、これは必要なことだね。

「わ、分かったわ。」

「うん、確かにこれは難しいと思うんだけど・・・カトレアの病気を見るためには必要な・・・ってはい？

分かつちやつたの？」

「ええ。問題ある？」

カトレアは微笑みながらそういった。

とはいえ、さすがに頬が少し赤かったが。

「ええと・・・言い出しといて、こういうのも変だけど胡散臭いとは思わないの？」

「あら？

ウソなのかしら？」

照れているとは思っただけど、それをおくびにも出さないカトレアは普通に凄いと思う。

「ウソじゃないけど・・・。」

「じゃあお願い。」

は、恥ずかしいから早くしてね。」

「え・・・あう・・・えと・・・うん。分かつてる。」

スルスルと衣擦れの音を発てて脱ぎ始めるカトレア。

だが、すぐに手が止まった。

「後ろを向いていてくれるかしら？」

脱ぐところをそのまま見られるのは・・・普通に見られるよりちょっと・・・は、恥ずかしいわ。」

「あ、ごめん！」

慌てて後ろを振り向く僕。

衣擦れの音が半端ないです。

心臓が凄くバクバク言ってる。

「ど、どうぞ。」

「あ、うん。」

振り向くと女神がいた。

胸は押さえているが腕で隠す分には問題は無い。

それでも凄く・・・なんというかどきどきした。

腕で押さえてる胸がこう・・・なんというか変形して、けしからん形に歪む。

おほんっ！と咳払いをするエミリア。

そ、そうでした！！

見とれてる場合じゃない。

すぐに魔眼を発動して、ディティクトマジックも併用しよう。

一時間とも二時間と感じられる間が空く。

実際には一分ほど。

「ど、どどど？
治りそう？」

不安げに聞いてくるカトレア。

顔はどんどん赤くなっていったが、その瞳には不安が見て取れる。やっぱり、内心では治るかどうかが期待と絶望がせめぎあっているのだらう。

「・・・大丈夫。

心臓の弁が元々薄いのと、肺の動き・・・多分横隔膜の障害だ。

一緒に併発してるのを治したことは無いけど、別々の人ならすでに治して完治してるから大丈夫。

外で運動も出来るし、魔法も使える。

せきも治るよ。」

「そ、そうなの！？」

それを聞いて一気に満開の笑みを見せるカトレア。

・・・はっ！？

み、見とれてなんかないからな！？

というか、一気に顔を近づけてくるカトレア。

僕の手を両手で力強く握ってくる。

ちよつと、それは別に良いんだけど、か、隠してくれないと！？

自然と豊満な乳房も目の前に迫り来るわけで・・・先っばの部分とかもしっかり見えています。

僕の目線で気づいたのか、すぐに「ふにあっ！？」とかおおよそ始めて聞く意外な奇声を上げて、胸を再び隠すカトレア。

か、可愛かった。

少しなみだ目にもなっていた。

なんだろうか？この生き物。
抱きしめたくなくて・・・

おほんっ！

シヤステイルの咳払いで正気に戻る僕。

と、とにかく！！

とっくと治そう。

「それじゃ、治すね。」

「は、はい。」

呪文を唱えて、リザレクシオンを発動する。

ざっと20分ほどかけて心臓が治り、横隔膜はすぐに治った。

「どう？」

肺のほうは多分・・・すぐに実感できると思うけど。」

「・・・確かに・・・いつも必ずあった息苦しさが・・・き、消えてる。」

「成功したみたいで良かったよ。」

「・・・よ、良かった・・・こ、コレで・・・ぶ、うえ・・・ふあ
あああああああんっ！！」

大声で泣きながら涙を流すカトレア。

可愛い泣き声だなんて不謹慎なことは思っていない。
思っていないと思ったら思っていない！！

とにかく良かった良かった。

これで当面の懸案事項は消えた。

「さて、これで僕達はかえ・・・」

「あ、ありがとう・・・ありがとう、エンデー!」

豊富な胸をさらけ出しながら、抱きついてくるカトレア。

「ふ、ふみあつ!？」

だ、抱きつきはまずいと思いますですよ!？」

ちよ、ちよっと、いきなりのごことで反応が・・・

「お兄ちゃんは私のだって言ってるでしょおおおおおおおっ
!？」

さつきから漂う良い雰囲気到我慢が出来なくなったのか、シャステイルが僕とカトレアの間に入り込んでくる。
というかほぼ突撃である。

倒れこむカトレア。多い被さる僕。

「「あ!」「」

2人の声が重なる。

そして僕の右手はラブコメの主人公よろしくカトレアの乳房に吸い込まれて・・・柔らかい。

「あうんっ!？」

つい揉む。

揉んでしまった。

色っぽい声を出すカトレア。

顔はまっかつか。なみだ目。

目は……まず気のせいだと思っただが、もっと強く欲してるよ
うな……まあ気のせいだろう。

そこへ娘の鳴き声を聞きつけた公爵登場。
何？このお約束展開？

あ、あれだな。

これが死亡フラグっていうの？

覆いかぶさり、なみだ目のカトレアの乳房をわしづかみ。
なおかつ僕は女装した変態的な姿。そして先ほどの泣き声。

誤解をしてくれと言っているようなものである。

「……た、確かに嫁……よめよめ……嫁に出すとは言ったが・
……」

青筋を立てて、今にも杖を抜きそうな公爵様。

空気を読んだエミリアはとっととシャスティルをつれて、馬車へ。

グッジョブだよエミリア。

「……だが、だが!!」

嫁入り前の娘の胸を無理やり鷲づかみに……なおかつ……」

「と、父様!？」

こ、これは違って……その、嬉しかったけど……」

誤解を解こうとカトレアは言ってくれてるようだが、ぶっちゃけ彼

の耳には何も入るまい。

僕もそつちに注意を向けてる場合じゃない。

とにかくこの場を切り抜けることに、頭をフル回転させるが、大し頭の良さを持たない僕には何も思いつかない。

一応、言い訳をしておこう。

「ご、誤解ですよ・・・公爵様？」

「・・・なおかつ・・・娘を泣かせたなああああああああああ
ああっ！！！」

修羅光臨！！

ダメだこりゃ、ここにいたら殺される！？

「カトレア、誤解を解いておいてね！！

頼むから、解いておいて！！」

とにかく、逃げるが勝ちである。

まさかぶつとばすわけにもいかないし。

というか、夫人は何してんの！？

烈風とか言うぐらいだから、盗聴の一つや二つしてるはずじゃないの！？

止めにこいよ！？

この親ばかを！！

「さいならっ！！」

この日を境にヴァリエール家に訪問することは無くなった僕であっ

た。

後日、こんな手紙が届いたからである。

“誤解だとは聞いたし、確かに君には一目置いてるが、いざ目の当たりにすると自分で思う以上に感情としては認められない。一発殴らせる。いや、少なくとも次に見かけたら半殺しにはするので覚悟しといてね!”という感じの内容が書かれた手紙である。

二度とヴァリエール家には足を踏み入れないと誓った僕である。

8 ページ目（後書き）

カトレアと絡む際のキーパーソンになるはずのシャスティルはそうでもなくなりました。

元々はこの話で公爵がブチ切れた際について、お付きのメイドであるエミリアとシャスティルをバカにしていまい、主人公が激怒。

公爵と決闘の流れに。その後、例えついバカにしたとは言え、平民を蔑視する親を持つカトレアとは関係が悪化。

主人公はなんだかで傷つき、そこでシャスティルが支える。

しばらく経ってカトレアが名を捨ててまで主人公に会いに来て結婚を申し込むが、主人公は自分を支えてくれたシャスティルとカトレアとの間で心が揺れる。

そんな優柔不断な主人公に業を煮やしたシャスティルはカトレアに当たってしまい、カトレアはそんなシャスティルを見て・・・てな感じだったんですが、ちとドロドロし過ぎかなと思ったのでボツにしました。

9 ページ目

あれからさらに3年が経つ。

僕は14歳。

カトレア18歳。

シャスティル13歳。

エミリアにおいては21歳。既婚。

そう、エミリアが結婚してしまい、寿退職してしまった。
い、いつの間に男を作ったんだ!?

エミリアああああああっ!!

と叫びたいほどのなんだか良く分からない、嫉妬がわきあがる。

お姉ちゃんっ子だった僕としてはかなり気が狂いそうだった。

相手の男を見定めて、適当な理由をつけてぶん殴ろうとかなり本気で理不尽かつ迷惑極まりないことをしようとしていたのだが、・・・
幸せそうにどこぞの知らん男と笑うエミリアを見て変な気持ちに襲われたが、幸せそうなエミリアを見たら男を殴る気も起きず。

カトレアとの僕の文通を止めさせたがったり、僕とカトレアが仲良く喋っていると割り込んでくるシャスティルの気持ち分かるよ
うな気がした。

ブラコンやシスコンの人には結構辛いんじゃないだろうか？

シャスティルは順調にブラコンの道を辿っている。お兄ちゃんとしては将来のシャスティルが不安です。

とにかく、見ず知らずの男に今まで頼ってきた姉を取られるこの虚
脱感。

娘を送る父の気持ちもこれに近いのだろう。

こりゃ、殴りたくもなるわ。

あれからヴァリエール家には父しか行ってないが、半殺しにされてやっても良いという気が今更ながらにしてきたからさあ不思議。嫁入り前の大事な娘の胸を鷲づかみにされたらそりゃ、怒るわ。誤解でも殴りたくなるわ。

僕も姉が好きならともかく、その辺の男に姉の胸をまさぐられたりしたらどんな正当な理由があれ・・・殴る・・・というか殺す！！

きつちりかつちりばつちり殺してやりたくなる！！

てか、マジ殺す！！

殺気が漏れていたのだろうか？

目の前のフルーツバットがおびえた様子でこちらを覗き込む。

「あ、つと・・・すまん。フルーツ。」

ちなみにこのフルーツバットはあの子供。

三匹生まれ、そのうちの二匹を受け取った。

カトレアの体が治ったがてら、カトレアが遊びに来たのである。

その際に一緒に来たこの子。安直にフルーツと名を付けてそれ以来一番面倒を見てる可愛いやつである。

姉さんの結婚式を見届けた後の悲しい気持ちを癒してくれた最高の相棒でもあるのだ。

そして僕がヴァリエール家に行かなくなったため、あれ以来ちよくちよく遊びに来るカトレア。ルイズも一緒である。

そしてカリン様。

護衛・・・として来てるらしいが、毎度家に来るたび父親と一緒にしごかれる僕としては溜まったもんじゃない。

来るなよ！！とはつきり言ってやりたい。

というか、言ったんだが。

あまりにも強くて、ついつい言ってしまったのが悪かった。

ついでにDSババアとかペチャパイが！！とかいつかぶっ殺してやる！！とか。

我ながら、結構ぶっ飛んでいたのである。あまりにもしんどくて。

ふっへへへえへへ。地獄を見ましたぜ。

地獄をね。

で、カリン様は何をしたかというと、単純である。

走らされた。

だが、ただひたすら気絶するまで走らされた。

気絶するまで走らされるといふこの苦痛。

“気絶するまで走らされる”と文字数にすれば11文字しかないこの表現だが、良く考えて欲しい。

気絶するまで走るとかどれだけ走ればそうなるのか？

これがどれほどの責め苦だったか、どれほどの地獄だったか。

神様に与えられた能力は魔眼と驚異的な回復能力。

この回復能力が厄介だった。

疲れたそばから回復。足が痛くなったそばから回復。

すなわち、僕には普通に走るぶんには限界がなかった。

そう。

どれほどか。

時間にして約72時間。

一日は24時間というのは日本と変わらず。

すなわち72時間というのは。

3日だぞ！！！

3日走り続けさせられた僕のこの苦痛を誰がわかる！？

カリン様が先にへばるだろと思って、きついが先が見えないわけじゃない。ってなことでもがんばって8時間は走った。

日が暮れ始めたところでもう大丈夫だろうと思ってたら、あのババア！！

あるうことか偏在まで使って一日中はしらせやがったのである。これには参った。

が、さすがに一日走れば許してもらえるだろうと思っただのだが、そのまま次の日へ。

うん。

肉体的にもだんだん回復力よりも疲れのほうが増してきて、途中でカトレアの手作りだという弁当を差し入れられたのだが、それすらも走りながら。

水と食い物を抜くというまでは無かったが、とにかくひたすら走り続けて二日目の夜。

この辺に至るともう走ってるんだが、走ってないんだか分からなくなってきた。

そして三日目。いつのまにか僕は気を失っていたというわけである。もちろん途中で逃げようとした。が、逃げられないのだ。

偏在が6体、本体が1体。合計7人の烈風が行く手を阻む。肉体的にも精神的にも疲れててろくに魔法を使えない僕に適うはずも無く。

下手に生傷を増やすだけだと思ってただひたすら許されるまで走り続けた。

僕の魔法と近接を特訓する際の理由に“あのババアにババアと言って逃げられるようになる”という目的が増えた瞬間だった。

もちろん両親やカトレア、シャスティルも庇ってもらった。

が、あるうことが説得してしまった。

「彼のためです。」

という一言で。

それで納得するなよおおおおおおおっ!?

明らかに過剰だろ!?!と。

「自分の限界を知ることはいくらから先において大切なことです。」
とか良さげなことを言って、カトレアにも何か耳打ちしていた。

死なない程度に。とさすがにお風呂（汗がすごい）と食事はしつかり取らせるという条件の下に続いてしまったんだから仕方が無い。シャスティルだけがずっと異論を唱えてくれていたが、カリン様から「これを差し上げます。」と言われて、どう作っただかいつのまに作ったのだから知らない僕の形そのままの人形を貰って、そのまま部屋へと戻っていった。

やたら嬉しそうだったが、本物のお兄ちゃんが苦痛で倒れそうなんですよ!?!

そして、この死なない程度にというのが僕にとってのネックである。なかなか死ぬほどの疲労が来ないからだ。

結局、3日続いてしまったというわけである。
倒れたのも疲れも確かにあったが、一番は眠気と精神的苦痛であった。

そんなこともあって、とある日。
軽くサモン・サーヴァントを試してみることにした。

魔法学院に入る話を父上にされてから、サモン・サーヴァントのこととも思いだし、一体どんな子が来るのだろうと思うとウキウキして待ちきれなかったのである。
とりあえず、唱えてみた。

「・・・閉じるか。」

目の前には超でかいゲートが出現した。
閉じた。

屋敷の庭先であんなの呼べないわ。
原作ではコルベール先生が立会いをしてたっけ？
あんなのに万が一暴れられたら屋敷が潰れる。
こういうときのために立会人を用意して、魔法学院でサモンを行うのだろう。
と、なんか納得。

「てなわけで、誰もいない辺境へ着てみました！」

誰に言ってるんだらうか？
僕は。

そして、もう一度サモン・サーヴァントを唱えると再度あの馬鹿でかいゲートが。
一体、何が出るやら。

というか、内心フルーツを使い魔にと期待してただけに見るたびに

残念に思う。

「・・・は？」

出てきたのは水色のデカイデカイ竜。

シルフィードを大きくして薄い水色に着色した感じである。そして竜の周りに精霊が一気に集まりだした。

精霊が集まるってことは！？

「っ！？」

韻竜か！？」

魔眼発動。

すぐさま雷神降臨状態に。

50個ものアイスジャベリンがこちらに襲い掛かる。

アイスジャベリンは直径1メートルもの大口径である。

ナイフを取り出してブレイドも発動。

アイスジャベリンを避けて避けて時に切り飛ばす。

『韻竜って言葉を知ってるのは最近の人間にしては珍しいね。私を呼んだの君だよ？』

「うん、まあね。」

で、いきなり攻撃してくるのはどうしてかな？」

『そんなの決まってるじゃない。

契約しようとしたんでしょ？

私はそんなの嫌だもの。とっとと殺すに限る。』

「・・・もっともな話だね。」

もっと友好的な幻獣に来て欲しかった。

「もう呼ばないから、帰ってくれないかな？」

『私をこんなところに呼びつけておいて契約もせずに返すってふざけてると思わない？』

せつかく母様と一緒に空の旅を楽しんでいたのにさ。』

「・・・僕もまあそう思うけど、そこを曲げて頼めないかな？」
『駄目。』

少なくとも死に掛けては貰う。』

「ヒステリックだなあ。」

『そんなには怒ってないけどね。』

水竜を呼び出すメイジにも興味がある。』

「す、水竜？」

水竜って確か竜種で一番でっかくて、海に住むとかいうやつか？

その割には空を飛ぶとか水っぽくないけど。

体の形も向いてないが、まあそういう水竜もいるんだろう。

実際、幼体のようなだから幼体でこの大きさともなれば納得いく。

『もし、私に勝てたら使い魔になってあげるよ。』

「・・・勘弁してくれ。」

もうお帰り願いたくて仕方が無い。

『ほら？』

準備は良い？

手加減しないから、死んでも恨まないでね。』

「そりゃこっちのセリフだ。」

ただの火竜なら討伐経験があるんだが、水竜。その韻竜がどれほどの攻撃が通用して、どれほど以上になると死ぬのか全く分からん。

「とりあえず、手始めにこれで。」

アクアベールを発動。

僕の周りに三つの水塊が発生した。

そしてそこから圧縮水。もといウォーターカッターを射出。

『あれ？』

あなた、先住魔法が使えるの!?

母様によるとメイジ“だけ”は出来ないって言ったのに。』

「僕の目は特別製だ！

てか、普通に弾くのね・・・」

なんら防御手段がないと思われる鱗なのに、簡単に弾かれた。

でかい分、堅い。

ちなみにこの間、彼女(?)は凄まじい速度で爪を振るいつつ、アクアジャベリンを打ちはなってくる。

全て切り伏せ、急接近。

今度はブレイドで叩ききる!!

「ちっ!!」

『その程度じゃ私の鱗は斬れないよ!!』

こっちの番ね!!』

弾かれたことで体勢が崩れ、のけぞったところに豪速の尻尾による薙ぎはらいが襲い来る。

それをジャンプで避け、今度は思いつきりぶん殴る！！
現在の雷神降臨状態は風を纏っているので、飛ぶのも可能だ。
彼女の腹のあたりをぶん殴った。

『ただの素手で私を倒せるとは思わないことーひあつ！？』

バキヤアツ！！

体がくの字に折れ曲がって、吹き飛んでく彼女の巨体。

『う、うぐ！？』

ほ、本当に人間なの！？

あなた！？』

失敬な！！

ちゃんとした・・・はともかく人間であることは間違いない。

拳がインパクトする瞬間に体を待とう風も一緒に圧縮、開放。

それによって一気に吹き飛ばしたのだ。

これでもダメージがないとは恐れ入る。

いや、少しはダメージが入ってるようだが。

やはりこの辺一体を更地にする覚悟で持って臨むしかあるまい！！
死にたくないしね！！

ブレスを放ってくるが、それをアクアベールでガードする。

吸収できるかと思っただけど、さすがに勢いが強すぎてあまり出来な
かった。

間髪いれず次の攻撃が飛ぶ。

爪を避け、ジャベリンを打ち落とし、ブレスを弾いて、懐に入る。

そしてアクアベールを爆発させた。と言っても圧縮を解いただけだ

が。

「これも通用しないのか。」

『なかなかやるわね!!』

なんか魔眼で見ると彼女の体表を薄い水が覆っている。

ただ、つねにかなりの速度で動いており、あれが受け流してダメー
ジを軽減してるのだろう。

水竜の韻竜というだけあってなかなかどうして水の扱いに長けてい
る。

あんな薄く体に纏わせるなんて僕にはまず無理だ。

ついでに水の精霊さんに好かれているみたいで、こっちの水魔法が
微妙に使いづらいのもあるかもしれない。

だったら、風で攻めていくのみ。

火や土は僕に合う系統じゃないので、威力が心もとないし・・・い
や、錬金を使ってあれも試してみるか？

「ぐうっ!?!」

『鈍くなってるよ!』

考え事をしていたら腕にぶち当たって、千切れかけたが即刻修復さ
れ始める腕。

秘薬も飲んでおこつ。

これレベルの相手だと、少しでも精神力を攻撃にまわしたい。

「だりやあつ!?!」

『ひあんっ!?!』

雷神状態の偏在を一体作り出し、接近させてライトを出力全開で発
動。

足跡の閃光玉を作り出す。
音と臭いを頼りにしてるか？精霊に教えてもらっているのか？
そのまま偏在とやりあう彼女だが、命中率は格段に落ちている。
偏在が注意を引く間に僕はちよつと高めの位置に陣取り、錬金を開
始。

とにかく錬金で鋼鉄の弾丸を作る。

弾丸の大きさは2メートル。

土台も作り、砲台も作る。

適当にライフリング的なものもつけた。

そこに弾をセットアップ。

弾には水がたつぷり入っている。

これを合計3門。

「発射あー!!」

砲台の中を水を圧縮したものを使って打ち出すと、砲が半壊しながらも弾はしっかりと飛んでいった。
ぶち当たる。

『ぐうっ!!?』

・・・ったいなあっ!!!』

バッキンツとおおよそ生物に当たったとは思えないほどの音が鳴り響いたが、これでも駄目か。
鱗が一つほど剥げたただけ。偏在もいつのまにかやられていた。
こうなればしかたない。

「見せてやろう!!」

僕の必殺技!!」

まずはタイダルウェイブで一気に押し流すため、超大量の水を発生させる。

山クラス洗濯機を生み出すようなものだ。

なおかつ凄まじい勢いで彼女は押し流され、山へ激突する。

『・・・水竜である私に水は・・・』

「だろうね、これはあくまでも君を空に逃がさないための布石だから。」

『う、上に!?!』

『・・・偏在!?!』

僕は上空で偏在による分身を7体ほど作り出している。

本体と同じ偏在を作り出すのにスクウェアのワルドで3〜4体。カリン様で6体。スクウェアだった僕は5体が限界だが、ペンタゴンメイジとなった僕はそれを大きく越える。ただ、今は全て雷神降臨状態。

雷神降臨状態でなければ、12体ほどまで作れる。

『何をする気かわからないけど、そうはさせない!』

飛び上がるうとする彼女。

さすがのタイダルウェイブでもそう長くは捉えられないか。

スクウェアのときよりも威力が上がってるんだけどね。

相性の悪さもあるだろう。

もちろん、空に逃がすつもりはない。

一気に畳み掛ける。

「必殺!」

超拳！百烈拳！！」

7体の分身による、超連打。猛攻撃を浴びせる技である。

ちなみに偏在の体にはヒーリングに使っているの水を減らし、その分拳に圧縮した水を纏わせて拳を巨大化させている。

7体の同時攻撃は秒間約100発以上もの攻撃を叩き込むまさに一撃必殺の技である。

一撃一撃が竜を吹き飛ばす威力。

それが飛びすさぶ、超荒業である。

彼女はなす術も無く地面に叩きつけられた。

ちなみに必殺技の有効時間はたったの2秒。

偏在は反動で全て吹き飛んだ。

物を殴るとき、拳が痛いのは対象に加わった力と同じ力の分だけ拳に跳ね返ってるからである。

もちろん拳で殴った相手が骨折すれば、拳も折れる。そのためにプロボクサーはバンテージやグローブをつけるのだ。空手などで拳を鍛えるのも自身の拳が壊れないようにするである。

だからこそ100パーセントの力で殴らないようにー殴れないように人体は出来ている。

そんなことをすれば対象を碎けるだろうが、自身の体も碎けるからそれを防止するために雷神降臨は治癒に半分以上の力を使っている。碎けたそばから治るように。

そのヒーリングを・・・一部とはいえ攻撃力強化にまわしたのだから、偏在が衝撃を殺しきれずに潰れてしまったのは当然の帰結ともいえるが、それだけの手ごたえはあった。

「これで・・・フィニッシュブローだ！！」

彼女を絡め取っていた大量の水を拳に圧縮！

拳があまりの圧縮具合に潰れるが、痛みはとづくにオフ状態。

そして、圧縮作業は10秒という実践では致命的なまでの隙を作ったが、相手は叩きつけられて怯んでいる。

そのまま一気に水をぶっ放した。

まさに水のビーム。

水の暴力。

水の衝撃。

さすがの水容量に打ち出すのにちよつと失敗して、範囲が広まり威力が落ちたが、それでも凄まじい威力である。

結果、かなり大きな竜が地面にめり込む姿はかなり圧巻の光景じゃないだろうか。

地面はえぐれ、土砂が流れ、木々が押し流される。

というか死んじやったんじやない！？

と思ったが。

・・・化け物かよ。

「なんで・・・普通に立ち上がってるわけ？」

足がめり込んでいるが、普通に立ち上がって、こちらを見据えている。

「・・・これは・・・」

5つの精霊が一緒に集まり、彼女の周りを包んでいるように見える。知識としては知らないが、あらゆるものを視認する魔眼で、その効果を確認した。

「これが反射か。」

カウンター

なるほど。

カウンターとはメイジが無理やり使役する精霊に“私のとこくればもっと良い待遇で迎えるよ？”と言ってメイジを裏切らせる行為だ。魔法が相手に触れた瞬間に精霊は取り込まれ、そして取り込まれた精霊は“今までよくも命令しやがったな！これはお礼だぜ！！”と怒って返す。

それが反射のようだ。

だが、僕は無理やりという形では使役してない。いまや精霊とのコミュニケーションが取れるので、基本お願いである。

が、これには通常、精神力の消費を軽減するが、僕が使った大規模魔法クラスにもなるとチップみたいな感じで精神力をむしろちよつと多めに与えないといけないのだ。

例えるなら“ここまで頼まれるんだったらさすがに精神力軽減のサービスは出来ないよ！むしろもつとくれないと、赤字だし！”という感じだろうか？

精霊の赤字ってナンだ？って言わないで。単なる例えだからね。

（「契約」はあらかじめかなり多めに精神力をあげておき、そのかわり好きなタイミングで力を貸して！という形。

長期戦ではこちらのほうが割が良い。なおかつ呪文の手間が無いのだ。）

威力を増すことが出来るため、すべてそうしたいのは山々だが精神力節約のために、三割は無理やり使役し、残り七割はお願いという形で呪文を発動していた。

3割が裏切って、残り7割分の内の3割と打ち消しあい、残った4割がダメージとして食らったということだろう。

半分以上とは言え、それなりの威力だったはずなんだけどね。

さすが最強の竜種の韻竜。

エルフしか使えないといわれてるカウンターすら使って見せるとは、さらには肉体強化の魔法も使ってるね。

全身にブレイドと似た魔法を纏ってるのがわかる。ブレイドは木の棒が剣として使えるようになる魔法だが、剣と打ち合える堅さと切れ味を持つ。

その堅さを利用した魔法だろう。

シールドとでも呼ぼうか。

この発想は無かったな。

『・・・驚いた。』

私達以上に精霊と仲良くしてるなんて・・・というか、精霊が見えてるの？

あなた？』

「まあね。」

さて。

どうしよう？

不利が悟られないように不敵な笑みでまあねと言っては見たものの。

死ぬよ？

このままじゃ。

内心、冷や汗だらだらです。

というか、さっきの魔法を七割お願いにして良かった。

死ぬとこでしたよ！？

ちなみにたとえ命令でも相手がこめた精神力の量や反射を使う者の力量によっては反射が破られることもあるみたいだ。

「さて、まだやる？」

心底から謝るし、後日大量の食料を持って改めて謝りに行くから許してくれない？

こっちが悪いのにこれ以上やるのはちょっと・・・」

精神的にもちよつと辛いです。

もしまだ続けるといふなら即刻逃げよう。

『・・・とか言いながら、あなたもいい加減限界が近いんじゃないの？』

「・・・ば、ばかなことを！！」

やばっ!？

声が裏返つてもうた!!

『・・・ウソが下手なのね。声も震えてるし。』

「・・・褒め言葉として受け取っとく。」

とにかく本当に誠心誠意謝るから、帰っていただきたいよ!!

「で、お願いだから許して欲しいです。

帰ってください。」

頭を下げてお願いする。

というか、土下座だ!!土下座!!

これくらいして当然だろう!!

誠意を見せなければ!!

全面的に僕が悪いし!!というかサモン・サーヴァントなんて魔法を作ったブリミルが悪い!!

すると笑い声を上げる水竜。

こ、これは帰ってくれる!?

『いいわ、あなたの使い魔になってあげる。』

「ほ、本当ですか!?

帰って・・・は?」

いいわ、のあたりで凄く喜んだのにその後で絶望した。

「いや、別にそこまでして貰わなくても・・・帰っていただけだから・・・」

動物大好きな僕としては竜がいるってのは嬉しいことだけど、こんなでかい竜はいらない!!

電車の車両分はあるんだよ!?

でかすぎる!!

しかも確か竜は生後5年で親元から巣立ち、10年ほどかけて成体になるといから「母様と一緒に空を飛んでいた」と言う彼女は少なくともこれから10年ほどかけて大きくなる。

この子と過ごすスペースがまず困るし、餌代とか馬鹿にならん!!

「ええと・・・遠慮していい?」

『わ、私が嫌なの!?!どうして!?!』

予想以上に取り乱した!?

「いや、別にそこまで取り乱すほどじゃ・・・」

『だ、だって・・・せつかく・・・と、友達が出来ると思ったのに・・・』

「竜の友達は?」

『私・・・嫌われてるっていうか・・・水竜の中でも唯一空を飛ぶ種だから馴染めなくて・・・かといって風竜も火竜も私の方が大きいから基本的に食べられると思ってるのか、皆近づいてくれないの・・・』

意外な竜事情に戸惑うしかない。
むしろ気の毒だ。

「何も僕じゃなくても・・・」

『私をおびえずに立ち向かってきたのは人と竜を問わずに貴方が初めてだし、自分から非を認めることの出来る竜に悪い竜はいないって母様も言ってたし・・・てつきり逃げ出すと思ってたのに。』

「気に入ってもらえたってことかな？」

嬉しいような嬉しくないような。

『それに・・・実は私・・・人間の食べ物に興味があって・・・』

「そのサイズじゃ味を感じられないと思うけど!？」

なんにせよ泣いてる女の子・・・というかメスだが、それを放っておくのは動物好きとしての矜持が許さない。

「しょうがないか・・・いいよ。契約しよう。

友達にもなってあげる。

これでいいか？」

『あ、ありがとう!』

奇妙なことになったよ。

「で、契約するには口にキス・・・するらしいんだけど・・・どの

辺にせいって言うの？これ？」

でかすぎて、どっからどこが唇なんだ？って感じである。

「それなら大丈夫。」

「・・・えい！」

彼女の体が光り輝いて、人間の姿になる。

「・・・そういえば、そうだったね。」

韻竜は人間体になれるんだったな。

そこから現れたのは金髪に青い目をした巨乳美女だった。

少し釣り目。アルトネリコ2のクローシェ様に似てる感じ

つか、ある意味でさらにしづらくなっただけだ。

しかも裸。

かなりドキドキしてる僕です。

「いつでも良いよ。」

「・・・僕はさっぱり良くない。」

ファーストキスの相手が竜なんて・・・別に良いか？

むしろ下手なアイドルより家のフルーツの方が可愛い！！むしろフルーツと結婚したい！！という感性を持つ僕にとって見れば、むしろ望むところじゃないか！？

どんな動物愛好家でも竜とのキスなんてしたことが無いはずだ！！

そう考えればこれは貴重な体験であり、僕のハルゲニア動物博士としてのキャリアの一つに相応しい・・・

いや、誤魔化すのは止めよう。

「や、やっぱりデカイ私との契約なんて嫌なの!？」

「そ、そんなことないってば!」

ちよつと涙目で擦り寄ってくる少女。

どうでもいいけど、その姿でデカイと言われると違う意味に聞こえる。

・・・こほん。まあそこは置いておく。

どんなに誤魔化したところで人間の姿をしまっている以上、抵抗があるのは仕方ない。

もちろん嫌じゃないけど、やっぱり初めては好きな人が・・・

ところで口内細菌なんかはどうなっているんだらうか？

やっぱり竜独特のものか？

だとしたら粘膜接触で本来、人間が接触したらまずい菌などが口に入るかもしれない。軽々しくキスなんて行為は止めるべきだらう。

そもそも、変温動物なのだらうか？竜って。

爬虫類のような外見からは変温動物というイメージしか沸かないが、日向ぼっこしてる姿を見ないし、冬眠するという話も種類によりけりで寒くなつたらとかではない。トカゲと哺乳類が合わさったような動物なのか？

いや、今はそういうことを考えてる場合ではなく。

「もういい、私が力づくで無理やりやる!」

「えっ!？」

ちよ、ちよつとっ!？」

待って、やっぱり竜の姿になつむぐ!？」

10秒ほどキスし続ける。

やばい！！

前世も通しての初めてのことに顔がかなり熱くなってる！！

「ぶはっ。

あれ？ルーンがでないけどなんで？」

「いや、それは僕がコントラクト・サーヴァントの呪文をまだ唱えてないからで・・・」

「じゃあ早く唱えてよ！！」

もう一度しよ！！」

「あ、うん。分かってるから！！

とりあえず顔を離して！！」

距離感が近いんだよ、この子は！！

竜だからか！？

「ええと・・・我が名はエンデ・ド・レイフォール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ。・・・で終わりがむぐっ！？」

再度キスされる。

大丈夫・・・大丈夫。これは見た目だけ。

中身は竜。

中身は竜。

イヌにキスをする愛犬家と変わらない。

そう、変わらない。

カウントはしない。

カウントはしないんだからね！！

「ぶはっ。

これで・・・あら？

い、いったあああああああああああいつ！？」

急に痛がつてどうした！？

とちよつと焦ったけど、ルーンを刻む行為は確か結構しんどい行為
だったんだっけ？

こうして僕の使い魔が決まった。

気絶した彼女にマントを被せて抱き上げ、父上や母上にどう説明する
か悩みながら僕は家に帰るのだった。

9 ページ目（後書き）

本来の予定を潰した途端にシャスティルの扱いがめっちゃくちゃ困ってしまった。

本来ルートだと確実にシャスティルを泣かせてしまう訳で・・・不老だからそもそもカトレアとしか一生を過ごせないし・・・シャスティルをどうやって不老にすべきか？

主人公がシャスティルにあそこまで言っておいて、いい仲間にならないのはいかがな物か？

とか、オリジナルキャラを不用意に出した結果がこれだよ！笑

2人までならなんとかハーレムにならないよね？

いやしかし、2人となると・・・微妙だ。

個人的に一夫多妻は好かん！嫌いでも無いんですけども。

さあどうするべ？

元々考えてた展開の方が良かったという人もいると思いますが、ちと現実的なドロドロが作者的に苦手なのです。

せっかくの夢ある物語の中までドロドロというのはどうなんだろう？という考えがあるからです。

それとカトレアは主人公がすでに好きです。

魔法学園編の終わり（テファ登場まで）にまとめてカトレアの心境を書く予定ですから理由はそこで。

ちなみに病の治療はあまり関係無いです。正確には治したという結果が関係ないです。

自分が不治の病いを患い、それを治してくれた医者が美男美女だろうと感謝こそすれ、惚れはしませんよね。普通に考えて。

ちなみに使い魔は竜なので恋愛感情は持ち得ません。

そして、アルトネリコ2に登場するクローシエ様が大好きな僕です。

3ではテイリア。

1は未プレイです。

アルトネリコは戦闘システムこそ並、ないしは人を選びますが、音楽とストーリーはかなりの物があります。

是非にオススメするゲームです。

ギャルゲーとRPGを混ぜた感じでしょうか。

ヒロインの深層心理に深く入り込んでいくのですが、この深層心理世界のシナリオがまた良く出来ていて、さらにはいい方向にぶっ飛んでいます。

使い魔を抱えて帰宅すると。

「お、オマエ・・・裸の女の人とどこで何をしていたんだ？

ま、まさか・・・無理やり寝ているところをなんてことは・・・」

と父上からは侮蔑を含んだ眼差しで見られた。

ち、違うんだ！！父上！！

「ふ、冗談だ。」

「良い性格になりましたね・・・父上。」

パパなんてだいつきらい！！と吐き捨てて、父上の執務室を出た。

後ろで「き、嫌われたあああああああつ！？す、すま・・・こちら！？

何を、ツエツペリン！！・・・な、ナンだと！？公爵家からの

招待・・・知るか！！私にとっては今、このときが一番大事なこと

・・・だから・・・後生だから・・・離してくれツエツペリン！！・・・

・カリン様からのおしおき？はっ！！あんな時代遅れのババアより

も我が愛しい息子からの好感度の方が・・・ええいつ！！離せっ！

！とにかくH A・N A・S E E！！という悲痛な父上の叫びが聞こ

えたが、無視である。

おじいちゃんには迷惑をかけてしまった。おじいちゃんの目は“ふ

ふふ、わかっていきますよ”みたいな慈愛溢れる目でこちらを見つめ

ていた。

明日あたり手作り料理を振舞うことにしよう。

「あら？」

・・・エンデ、貴方・・・ちょっとこっちに来なさい！

見た目こそ貴方は女の子ですが、男児たるもの女性にマントを一つ・

・・・というのは如何なものかしら？
多少見栄えは悪くとも上着くらいは着せてさしあげなさい！！」

相変わらずツツコミどころが違う母上にそのまま説教された僕。
使い魔ですと言ったら、そんなことはどうでも良い、女性に対する
エスコートの仕方がうんぬんかんぬん。確かに上着着せようと思っ
たけど、下にシャツもナンも着てなかったから上半身、裸になりな
がら街道を歩くのは色々とまずいなあ・・・と思ったんだよ。
顔がほら？女の子にしか見えないし、下手したら痴女としてみなさ
れるわけで。

シャスティルの部屋にて。

「お、お兄ちゃん・・・不潔よおおおおおおおおおお！！」
と行って、泣いて出て行かれた。

無性に悪いことをしたような気になったが、まあいいや。
ふと目に入った、いつぞやにカリン様から渡された僕の人形が綺麗
に宝物のように飾られていて・・・やっぱり追っていて、説明した
のは致し方あるまい。僕は良きお兄ちゃんなのである。

あれから一年。

いよいよ魔法学園へと入学である。

ちなみに使い魔の名前はヒスカ。

歳のに我が家の末娘・・・みたいな位置づけになった。

それ以来、シャスティルはヒスカにかかりきりで、僕に甘えてこな
くなった。

・・・末っ子が出来ると真ん中の子はしっかりするようになるとか
聞いたことがある。

少し冷たくなったのがお兄ちゃんとしては悲しい。かといって、こ
れでブラコンが直ったかと言うとそうでもない。

普通にカトレアと話していると割り込んでくるので、やはり複雑な思いがあるのあろう。

原作で言うところのサイト君がカトレアに抱きついていた時、ルイズが騒ぎ立てた時の気持ちに似ているのかもしれない。ルイズの場合はそれだけじゃないだろうけどね。

「オマエも大きくなったな。

今日から魔法学校へと入学することになるが、がんばって来るんだぞ？」

「は、はい。父上。」

楽しみでもあるが、逆に不安でもある。

着々と戦争へのカウントダウンが始まっているからだ。

あれからさらに腕をあげ、今では素の状態でも父上を圧倒できるようになり、ナイフの腕も飛躍的に上昇。

投げナイフなんて基本的に100パーセントの命中率を誇り、ナイフとナイフをぶつけて角度を変えたり、通常当てられないような場所を狙うことも出来るようになった。

ナイフマスターとでも名乗ろうか？

射程距離は短い。筋力が無いためだが雷神降臨状態では普通に100メートル先の的を当てることが出来る。

ちなみに僕の身長はカトレアと同じくらいに、なおかつ一目見れば今にも死にそうな儂い深窓の美少女・・・みたいな見た目になっていた。ありがたくない。全く持ってありがたくない。

ナンパがうざいし、男だといっても男装だろうと思って変わらず話しかけ続けてくる馬鹿の多いこと多いこと。

なおかつカトレアから見ればどうなんだろう？という思いがある。

男なのに女の顔ってのは、男から見れば体はしっかりとした女なの

に顔だけハンサム。

・・・正直、僕的には異性としては見れない。女性の感覚は分からないが、男とさして変わらないんじゃないだろうか？

いや、別に異性として見られたいってワケじゃないから、心配スナ。

僕に好きな人はいないし！！

惚れてもいない。ただのお友達です。

ツンデレでもないからな！！

そして、さすがにヴァリエール家に一度も出向かないのは無いだろうと思ひ、殴られるのを覚悟して出向いたのだが、公爵は一瞬目を見開いて固まっていた。

見とれていたのか？見とれていたんか！？

カリン様にぶつ飛ばされた。ざまあみろ。

ちなみにカリン様とは一緒に風呂に入ったことがある。

あの走り続けさせられた地獄を終え、しばらく滞在してるときにいきなり風呂に押し入ってきたのだ。

男だと聞いていたけど、もしかしたら男装してる女の子だと思つてたらしいが・・・“そんなことするヤツなんていないでしょ？常識を疑いますよ、H A H A H A H A H A！”と笑つたら、なぜか殴られた。

風呂というものをカトレアから聞いていて、是非とも入りたかつたそう。

男の勲章を見ても出て行かないカリン様。

僕から石鹸の使い方を聞いて体を洗い始めたから、凄い度胸だ。いや、こんなガキ相手に恥ずかしがるのもおかしいか。

まあ僕も11だし、問題あるまい。とそのままのほんと裸の付き合いをしていたのである。

緊張もあったが、あの地獄に比べれば。と思うと自然とその程度、どうでも良くなってくるのが不思議だ。

まじまじと見てしまったが、子供が三人いるとはとてもじゃないが思えないスレンダーさでした。

一部、スレンダーだと人気が出ない部分も“すれんだーすれんだー、ぷっ”と内心で嘲り笑っていたら、殴られた。

あのカトレアの母のだけある。勘がするどいじゃない。もしくは表情に出っていたのかも。

このとき以来、石鹼がヴァリエール家のみならずヴァリエール領で流通しまくったのは言うまでも無い。

レイフオール領ですでに流通済みである。

「今年からあなたも魔法学院入りですね。

私から教えられることは全て教えたつもりです。良い成績を出さねば容赦しませんからね？」

そんなスレンダーオブスレンダーなカリン様に、戦争で頼られないように水のドットで行こうと思ってる僕としては、自分がいかに目立ちたくないかをウソ八百を並びたてて、なんとか納得してもらった。

カリン様は僕がペンタゴンメイジだとは知らないが、僕の奥の手の雷神降臨は知っている。

・・・訓練中について使ってしまったのだよ。

ていうか、あそこで使わなかったら死んでました。

「・・・まあカトレアのためにもそれが良いでしょう。

全く早くに結婚してくれれば安心なのに・・・カトレアったら、自分で言うと聞かないのだから・・・とこれは関係ない話でした。

とにかく、あなたの言い分は分かりました。ただし、魔法以外ではしっかりとした成績を残しなさい。」

カトレアのためとか、その辺が良く分からんが、納得してもらえて

何よりだ。

「エンデ、鯉に餌をやっていかない？」

「ん？」

ああ、そういえばここの奴らに餌をやるのも・・・4年ぶりか。」

帰り際、カトレアにそう話しかけられて鯉の池に行く。

ちなみにこの家での鯉の餌も僕が作った鯉専用の餌である。

そのため、我が家とヴァリエール家の鯉はやたらと巨大化している。通常の倍サイズだ。

この世界の鯉の餌が元々悪かったというのものもあるから、地球で見た鯉に比べれば一回り大きいという程度だけだね。

僕もカトレアも無言で鯉に餌をやり続ける。

この時間が結構好きだったりする。

「エンデが魔法学園に入学するってことは、私も入学しないとね。」

「うん、そう・・・だね？」

はい？

「え？」

何で？」

「なんでって？」

別に私が通うのはおかしい事じゃないでしょ？
病気も治ったんだし。」

「うん・・・確かにそう・・・なのかな？」

「ルイズと一緒にでもあるからとつても嬉しいわ。」
「うん、まあ・・・おめでとう。」

あれえ？

僕がおかしいこと言ってるのかな？

カトレアって今19歳だよな？

魔法学園は15歳からなんだが・・・まあいいのか？

まあいいんだろうな。

魔法学園は基本的に入学における絶対の規則は無い。

確かに15歳からというちよつとした決まりはあるけれども絶対では無い。

中には一年遅れで入る人間もいるし、逆に早く入る人もいるらしい。

「私、学校に行くのが夢だったの。」

「ふうん。でも動物達はどうする・・・ってそういえばカリン様も動物の飼育に目覚めたって言ってたっけ？

カリン様にまかせるの？」

多分、娘達の世話がかからなくなってきて、寂しくなったんだろう。息子や娘が嫁入りなり、外に出てくなりすると母親は途端に日常におけるやる気が沸かなくなり、うつ病になるといふことがあるらしい。

母親という生物にとって子育ては生きがいのようなものだから、それが急にパタと無くなるんだから無理も無い。その代わりとは言ってはナンだが、動物達の子育てにはまりこんだといふところだろう。あのカリン様が動物と戯れている姿が思い浮かばない。

そんな僕の心境を悟ったカトレアが笑って、こう言った。

「母様もなかなか可愛いところがあるのよ？」

「想像つかないけどね。」

ちよつと粗相をしたら、エアハンマーが飛びそうだ。
さすがにそれは無いと信じたい。

「ただ、この子達は連れてくつもり。」

と言つて、丁度飛んできたのはヴァリエール家で産まれたフルーツ
バットの子供二匹。

今は子供というか、ちゃんと大人になっている。
家のフルーツとの兄弟だ。

親は寿命ですでに亡くなつてしまった。

コウモリは寿命が短いのだ。

「久しぶり、ルナ、サン。」

お姉ちゃんのルナ。

その弟にあたるのがサン。

我が家のフルーツは末っ子だ。

地球のフルーツバットも確かになつくんだが、ここまで人間らしく
なつくのはカトレアあつてのものだろう。もしくはファンタジー世
界ゆえにか。

どちらもあるんだろうけどね。

カトレアに頼ずりをした後、僕のところにも飛んできて、頭やら肩
やらに乗っかる。

「カトレアが連れてくるなら、僕も連れてこようかな。」

フルーツも久しぶりに兄姉に会いたいだろうし。でも、餌がなあ・
・

餌がネツクだ。

餌は果物なのだが、果物だっていちいち学園と街を往復するのが面倒だ。

買い込もうにも、冷蔵庫の無いこの世界では果物がすぐに熟れてしまい、腐り始めるのも格段に早い。

帰ったら、幻想木箱を改造して冷蔵木箱を作ってみようか？

ちなみに果物を放っておくと熟れるのは、果物自身から熟れるためのフェロモンが分泌されているらしい。このフェロモンは熟れるほど増えていき、熟れた果物が近くにあると青い果物も熟れ易くなるのかなんとか。

腐ったみかんはいらないうことわざ？があるが、それはここからきたものである。

熟れたみかんは他のみかんを早く熟れさせる。

そして通常よりも早く腐り始める段階になるのだ。

とまあ、そんなことはさておき。

「まあカトレアも入るってんなら、楽しくなりそうだ。」

「ええ、私も色々と楽しくなりそう。」

カトレアは相変わらず笑みを絶やさない。

見慣れたはずの僕ですら、はっとしたときに惚れそうになるくらいだから恐ろしい。

惚れてはいない。

これは言っておく。

入学式までまだちょっとある。訓練を休んで冷蔵木箱の製造に本格的に乗り出すべきだろう。

「それはそうと、使い魔さん・・・ヒスカちゃん？でいいのよね？
会ってみたかったのに、どうして連れて来てくれなかったの？」

御伽噺でしか出てこないような韻竜さんに是非とも会ってみたいわ。

「今は里帰り・・・だったかな？」

なんか母親に使い魔になったことを連絡し忘れてたみたい。一年以上も音沙汰無しはさすがに心配かけるだろうからって、一度帰った。

「そう。」

残念ね。」

「学校で会えるさ。」

「ええ、楽しみが増えたわ。」

それにしても、どうしてももっと早くに連絡しなかったのかしら？」

その疑問はもつともだ。

僕は苦笑して答えた。

「人間の料理にはまりまくって、一年ほど食ったり習ったりしてたからだよ。」

普段は適当な大型陸上動物とか鯨を食べてたらしいけど、人間の料理がかなり美味しいってことだね。

僕や家のコックさんにも料理を習って、今じゃプロ級の料理人と化したよ。ヒスカは。

料理竜か？

で、そうして習った料理を母親に食べさせるためにも帰ったわけ。」

「へえ、私も習いたいな？」

近いうちに遊びに行つて良いかしら？」

「カリン様が一緒にいなければいつでも良いんだけど・・・まあ護

衛としてあれほど心強い存在もないし、それは無理だろうけどさ。

「

あいかわらずしごいてくるのは変わらないカリン様。

いい加減、勘弁して欲しい。

人間が相手と言うくくりでは、雷神状態の僕を捉えることが出来るのはあのくらいだと思う。

というか、あれは人間なのだろうか？

ブレイドがビルほどの高さとかシャレにならんし、同時魔法も余裕で使ってくる。

反射神経なんて尋常じゃないレベルだし、不意打ちなんかも常に周りを覆っている風で防がれる。

風メイジは吹き飛ばせないくらいの物量で叩くのが常套手段なのが、それがまるで通じないまさに烈風。

無詠唱も平気で使ってくるわ、接近戦の技量も凄まじいわで、この人ならサイトが命を賭してやっとで止めた7万を軽々蹴散らせるのでは？と思わずには居られない。

ババアと吐き捨てて無事に逃げることの出来る日は遠い。

「お兄ちゃん!？」

魔法学校に行くって本当!？」

「うん、本当。」

「私」

「駄目。無理、不可能。」

「まだ何も言っていない……。」

一緒についていくとでも言おうとしたんだろう？
それは無理だよ。

魔法が使えないのにさすがにそれは。
ルイズですら爆発するのにこれは無い。

「ううう・・・でも、カトレアも行くんでしょ？」

「そりゃ、彼女はメイジだから。」

父上も母上も出来ることならシャスティルも通わせたいと思ってる
みたいけど・・・さすがに誤魔化せ・・・るだろうけど、難しい
ことには違いないよ。

ていうか、校長やハゲメガネ・・・じゃなくてコルベール先生は気
づくと思う。

まあこの2人ならそのまま黙認してくれそうだけども。」

「だったら、いいじゃない!!」

「駄目!!」

何よりもシャスティルは可愛い。

変な男に言い寄られないかが心配だ。

お兄ちゃんとして。

ギーシュ辺りなら許せるが、あれは浮気性だから駄目。

他の連中も原作を見てると浮気をしそうだから軒並み論外。

マルコリ又は・・・もともてないから大丈夫かもしれないが、
変態だからいや。

サイト君はもちろん無い。

あんな浮気ばかりする野郎のところなんかお兄ちゃん絶対許しませ
ん!!

ルイズとラブってる!!

まあルイズとも仲良くしてるから、ルイズも軽く妹として感じてい
る僕としてはサイト君にまかせるのはむかつくし殺したくなるのだ

が、まあ抑えて置く。

最終的にルイズはサイトがないと自殺未遂を起こすほどに好きになるんだから、まあよし。

「ど、どうしても駄目？」

なみだ目で上目遣い。

これは効く!？」

「だ、だめ……です!」

お兄ちゃんとしてこれは絶対。

僕が守れば良いのだが、いつまでも一緒にいられるわけじゃない。

トリスティンの貴族は馬鹿が多いんだから、安心できない。

中には手籠めにしようとするヤツも居るはずだ。

そうなれば魔法の使えないシヤステイルなんてちよろいだらう。

まあもちろん、そんなことしたヤツは即刻、百烈拳でむごたらしく殺すが。

なおかつ、そいつの実家の両親や家族、家もまとめて叩き潰します!

「どうしてそこまで行きたいんだよ？」

「だって……まだカトレアを認めてないもん。」

……くそ。

半ば気持ち分かるだけにとにかく駄目と斬り捨てるわけには行かない。

くそっ!! エミリア!!

どうして結婚したんだよ!!

また、復帰するかもしれないと父上は言っていたが、あと一年は先

のことだそうだ。

子供が産まれたんだってさ。

どこのどいつが父親じゃああああああああああっ！！
エミリアを孕ませるたあ良い度胸だ！

一族皆殺しにしたるわい！！

・・・といえればどれだけ楽か。

エミリアの子供を見た瞬間にその気持ちなんて全部吹き飛んでしま
ったのさ。

顔がにやけてしまうのを我慢して抱っこさせてもらつとまあ、笑顔
で「あう〜」と喋るエミリアの赤ちゃん。顔が崩れまくりでした。

男の子だそうで、アルバと名づけられたあの子。

今年で3歳になるんだっけか？

ああ、僕もエミリアとその旦那さんに混じってあの子を育てたい。

というか、子供欲しい。

この段階で、エミリアの旦那への怒りが消えうせ、むしろ良くやつ
たと褒めてやった。

年上の人の上から目線で生意気なことを言うんじゃないと、エミリ
アに拳骨を食らったが、そんな拳骨の痛みすら飛ぶくらいの可愛さ
だった。

アルバは天使だ。

天使の生まれ変わりに違いない。

シャスティルに単純といわれたが、単純でも何でも良いと思っぜ！！

閑話休題。

まあとにかく、そういう気持ちでシャスティルの中にあるんだろう。
僕としても無下にはできん。

「それに、ヒスカは行くんでしょ！？」

そう、ヒスカは僕のメイドとして来る。
本当は使い魔で水竜だが、あんなでかい使い魔が過ごせるスペースなんてどこにもない。

竜形態だと1、5倍の大きさになっているのだからなおさらである。
かといって、使い魔を置いて行くわけにも行かず。

本来、メイドの連れ込みは不可だが、そういう事情を話して先方の校長に話して許可を取ってあるのだ。

「私もメイドとして行く!!」

なんですと!?

「1人行くんだから、2人も3人も変わらないよ!!」

それにお兄ちゃん、動物の世話はやたら几帳面なくせして身の回りはだらしないんだから、妹としても心配だもん!!」

それは暴論だと思っぞ!?

そしてなみだ目で頼むな!!

悪いことしてる気になるでしょ!?

心配してもらってるのはありがたいけどさ。

「・・・はあ。分かったよ。

父上に掛け合ってみる。」

「や、やった!」

すっごい満面の笑顔を見せてくれるシャスティル。

この笑顔を見ただけで、ま、いっかとなるのは甘いのだろうか?

「ね、頼み込めばいけたでしょ？」

「うん、ありがとう！！」

ヒスカ！！」

ん？

なぜヒスカがここにいる？

というか、今の会話は？

「せつかくの私の二人目の友達兼お姉ちゃんを置いていけるわけ無いじゃない。」

エンデ、私の主人の癖してこのくらいのことも気を利かせられないなんて、不甲斐ないよ！！」

「・・・いや、僕はシャスティルのことを思ってたな・・・」

2人はグルだったのか？

多分、僕が認めなかったらヒスカが肉体言語で僕を説得したんだろう。

具体的に言えば、ぶん殴られるわけである。

・・・もとが竜なので、ヒスカは非常にアグレッシブだ。

率直に言うなら暴力的。基本におしとやかだが、ここぞという時は遠慮なく力を振るってくる。

人間形態とはいえ、竜の力はシャレにならないから勘弁してもらいたい物だ。

ちなみに父上に鍛えてもらっているので、世にも珍しい剣を扱える竜である。

僕との組み手戦績は156戦12勝67敗79引き分け。

お互いに急所部分に水球を設置し、それが一つでも破られたら負けというルールである。

力が強いし、反応も人外だしでかなり手強いのだ。

もちろん父上は片腕でひねられる力量を持っている。

たった一年でこれなのだから韻竜の恐ろしさを確認したしだいです。

このときのことを父上に話しに行くと、二つ返事で了承を貰った。

「全然構わんぞ。私達としては生徒として入れてやりたいのだが・
・シヤステイルはどうも、オマエと一緒にいられば構わないよう
だからな。むしろ下手に貴族としての肩書きをつけるよりはメイド
の方がいいだろう。」

「ありがとう、父上。」

「ついでに軽く、ご機嫌取りもしているからな。我が家印の石鹼と
いう、な。」

そんなことまでしてたのね。

もともと僕が作った石鹼なのだが、それがレイフォール領、さらには
ヴァリエール領で流通しているのは普通の錬金メイジが作る量産
タイプの石鹼だ。それにこうして石鹼が売れ始めるともちろん、真
似をしてくる家や商家も出てくる。

そんな中、石鹼に我が家の家紋を彫り込んで作られた、僕が自らの
手で作り出した超高級品とも言える石鹼がある。

これは僕が作り出すという都合上、月に50個という数だが、高値
で他貴族の家に売りさばかれる。

これは今、貴族間でかなりの話題となっており、レイフォール家紋
入りの石鹼は貴族なら一つは持つておくと金持ちの証拠というくら
いの物になっていた。

日本で言う、キャビアやフォアグラといった高級消耗品のようなも
のである。

もちろん効果もすばらしい物で、どんなに荒れた肌でもびっかぴか

の肌に優しい弱酸性仕様。

一つあれば4人家族が一ヶ月は使えるというたっぷり容量に加えて、甘い臭いも付いているので体臭が加齢臭を誤魔化したり、夜の営み前等にお勧めと言う人気商品である。

香りは一日続くという長時間仕様でもあり、かなり人気だ。

お得意様や仲の良いヴァリエール家では特別に香りがそれぞれ違うプレミア10個セットを販売している。

この香り付き石鹸が出来てからは、カトレアの誕生日には幻想木箱と一緒に個人的に好きな百合の香り使用の石鹸もプレゼントしている。

それがばれて、カリン様からも“YO・KO・SE!”と要求されたが、カリン様には日ごろのお礼という名の嫌がらせがたら馬糞の香りがするものを送った。

したら、我が家に乗りに込んでぶっ飛ばされた。

・・・まあ、そうなりますよね。

お詫びに何か作れと言われたので、適当に作ったものを渡したらほくほくとした笑顔を浮かべて帰っていった。

せめてもの抵抗にゴキブリの形にしてみた。

せいぜい風呂場で開封したときに悲鳴を上げればいいさ!!

また乗り込まれたの言うまでも無いことだ。

10ページ目（後書き）

気付いた方も居るでしょうが、ヒスカとシャスティルという名前は映画版テイルズオブヴェスペリアに出て来た双子から取っています。悩んでいたカトレアとシャスティルの絡み。

パツと閃きました。

多分、他には無い展開でしょうから少しは期待して貰っても良いかもしれません。

カトレアの使い魔で迷い中。

11ページ目

そういうわけでトリスティン魔法学院にやってきた。
今日がいよいよ入学、入寮の日。

馬車の中にはヒスカとシャスティルがいる。

僕はそとで馬2頭の手綱を握っている。

そして僕の隣で寝転んでいるフルーツ。

あいつも変わらず可愛い。

ちなみに、この子たちは僕が丹精込めて育て上げた馬で、馬としての能力は普通だが、信頼関係で言えばかなりの物がある。たとえばク鬼に襲われようと逃げ出しはしない。

「人間の学校か・・・楽しみね。」

「ふふ、私も楽しみ！」

魔法使いの学園に入るなんて、平民だと選ばれたエリートメイド達しか入れないって聞いたし・・・ううむ・・・どうせなら生徒として来たかったな。

あ、でも、サモン・サーヴァント・・・だっけ？

あればかりはごまかしがちょっときついかも・・・いや、お兄ちゃんみたいにすでに契約してることにすれば良いだけか。」

「そのときは私が使い魔ってことにしちゃえばいいよ。」

エンデの使い魔は出なかったってことにして。」

「それだとお兄ちゃんが可哀想じゃない。」

「そう？」

エンデからそう言い出しそうだけど？

それにそっちの方が実力が無いという風に見られて良いでしょ？
目立ちたくないエンデとしては。」

「・・・確かに。」

やっぱり、生徒として入学しようかな・・・？
そしてお兄ちゃんと甘酸っぱい学園生活をするってもいいかも。」

せんわ！と心中でツツコンでおく。

「カトレアとなんて私は許さないからね！！」

「何の話だよ？」

というか、なぜまたここまで目の敵にするんだ？
そんなにカトレアが嫌いなのか？

「なんでそこまで嫌うんだ？」

「ううう・・・なんだかむかつくの！！」

他の人なら良いんだけど、あの人だけは駄目！！
あの人と結婚するくらいなら、私と結婚しなさい、お兄ちゃん！！」
「何を言ってるんだ、オマエは。」

そもそも結婚はしないって。

公爵が嫁に出すって言ったのに。

そういえば、なかなか結婚しないな。カトレアって。

・・・この世界だと19でも行き遅れと見なされるんだっけ？
行き遅れってことでなかなか結婚相手が見つからないのかもしれないかもしれない。
い。

「・・・お兄ちゃん・・・まだ勘違いしたままなの？」

「うん？」

何が？」

「・・・別に私としては良いけどね。」

公爵様の言い方が悪かったのか・・・それともママの血筋ゆえか。

この隙に他の人をあてがうか・・・私自ら・・・」

「・・・何のことはなんとなく分かるが、とりあえずカトレアと僕の仲はそんなものじゃないぞ？」

「・・・どうだか。」

ぶすつと頬を膨らませてそっぽを向くシヤステイル。
年頃の女の子は分らんことばかりだ。

「お、やっと付いたか。」

目の前にはトリステイン魔法学院が徐々に大きくなって見えてきた。すでに何個かの馬車を通っており、学院の門で検閲みたいなのをしているコルベル先生を発見した。

「ようこそ。トリステイン魔法学院へ。」

君は・・・レイフォール家の長女・・・で良いのかな？

長男のエンデ君がやってくると聞いていたのだが？」

門の前でコルベル先生が僕達を止めて見る。

「そのエンデですよ。」

僕はこう見えて男です。」

「そ、そうなのか？」

声と良い、容姿と良い・・・分からなかったよ。

失礼した。私はコルベルという者で検閲をしている。
学院への入学許可証はあるかい？」

「はい、これです。」

「うむ確かに。
それにしても君はあの・・・まあここで話す様なことではないか。
馬車の中に居るのかね？」

使い魔のヒスカとシャスティルのことを言っているのだろう。

「はい、いますよ。」

無理を聞いてもらってすみません。」

「ははは、構わないよ。と言いたところだが、本来自家のメイドを連れてくるのは禁止になっている理由はわかるね？」

「はい、もちろん。」

他の家の人のメイドや執事にまで来られると住居の用意や不審者の潜入を許しちゃうからですよね？」

「そのとおりだ。」

分かっているなら、大丈夫か。

出来るだけ目に触れないようにして欲しい

彼女達には申し訳ないけどね。

一応、対外的にはここに勤めることになっているから、その点は話を合わせて貰うけどそれも大丈夫かね？」

「大丈夫ですよ。」

普通に笑顔で答えた。

うむ、やはり能無しトリスティン貴族どもとは違うね、コルベール先生は。

原作キャラではジョセフの次に好きなキャラである。

というか、内心テンション上がりっぱなしだ。

原作キャラに直接会う。

日本で言うなら、テレビでしか知らない芸能人を間近で見る興奮と似ている。

ついつい笑みがこぼれてしまう。

「そ、そうか。」

エンデ君の部屋は・・・相部屋になっている。
22号室だ。」

「あ、相部屋ですか？」

さつきからちよいちよい頬が赤くなっているコルベール先生なんだが、調子でも悪いのか？

「う、うむ・・・その・・・お願いをされてしまったな。もちろん全員分のベッドは用意してあるから安心して良い。」

「お願い？」

「あ、ああ・・・まあ行けば分かる。済まないね。」

「は、はあ。」

なんか歯切れが悪いな、コルベール先生。

それにたどたどしくないか？口調が？

緊張してると言うか、どぎまぎしてるといつか？

馬車の中からその答えが飛んできた。

「思い出して、お兄ちゃん。」

お兄ちゃんの顔はどんな顔？」

あっ！！

そうか、見ほれてた・・・んだな・・・あれだ。

一気にテンションが落ち込んだ。

がた落ちである。

そういえば、テンション上がってやたら顔を近づけたり、手を握っ

たりしていた。

「それじゃ、失礼しますね。」

とりあえず、とつとと領に入ろう。

周りの視線もうつとうしくなってきた頃だし。

馬車を馬車置き場に置いて、三人並んで寮に向かった。

ちらほら人がこちらを見てくるが、がん無視である。

いろんな意味で目立っていた。

メイド服を着てる二人が手ぶらなのに、僕だけが荷物を持っていたり見た目が華やかな三人が並んでいたりと。本来はメイドに持たせるべきものをなぜ持たせないんだ？という視線もある。

「ここだね。22号室って。」

それにしてもなんで女子寮なんだ？」

シヤステイル達がいるから気を回してもらったのか？

の割には相部屋とか。多分ばれても問題ない相手なんだろうけど、

誰だろう？

ルイズだろうか？

ルイズはお姉様と僕を慕ってくれている。同い年なのになぜお姉様なのか？そもそもなぜに男なのにお姉様なのか？

男だと言っても、信じてくれないのだ。

そしてシヤステイルはルイズとだけは仲が良い。

同じ妹分同士で気が合うのかな？

なおかつ僕はルイズの爆発魔法に対して凄いと心底から褒めていたので、ルイズにはなおのこと慕われている。

魔法至上主義の考えが強いトリスティンではルイズが苛められると

考えて多分、カリン様あたりが学園に頼んだのかもしれない。
僕とその周りの人間はルイズと友達になってくれると考えたんだろ
う。

だからこそお願い・・・だろう。

サイト君が来たらどうするんだろうか？

もちろん僕個人としては別に構わないんだが、妹達に襲い掛かった
りフラグを作られるわけには行かないので、追い出すつもりだけ
も。

さすがに酷すぎる気もしないことも無いが、会って早々の女の子に
襲い掛かるくらいのお調子者だ。

念を入れおくに越したことはないだろう。

「おじやましまーした！」

パタンとあけた扉を閉めた。

「どうしたの？」

「お兄ちゃん・・・なんかこの部屋からあの女の気配がするんだけ
ど？」

・・・鋭いな。我が妹は。

こめかみを押さえて俯いているとドアがひとりでに開いた。はずも
なく、ドアは誰かに開けられた。
言うまでも無い。

「どっして閉めるの？」

エンデ。

ニコニコ笑顔のカトレアがそこに立っていた。

「なぜまた・・・相部屋に？」

「びっくりした？」

「したよ。」

イタズラに成功した子供のように無邪気に笑うカトレア。

「・・・周りの皆は歳が離れているし、女の1人暮らしは危険だからって・・・お母様が貴方との相部屋を手配してくれたのよ？」

「・・・別にいいんだけどね。それは。」

ただ、問題があるでしょ？

年頃の男の子と年頃の女の子。

すなわち、年頃の男女が一緒の部屋で寝泊りするのはさ。

そもそも女の1人暮らしは・・・って。この学園の女学生は普通に1人暮らしだよ。

学園内の寮に危険も何もない・・・とは言いきれないけどさ。

公爵家の次女とその辺の下級貴族の長男が相部屋ってのは・・・要らない恨みを買うと思うけど・・・主に僕が。」

頭が痛い。

「大丈夫よ。エンデは強いもの。」

それに女の子の格好でいれば良いと思うわ。」

ころころと笑うカトレア。

「からかってるでしょ？」

「分かる？」

「分かるわっ！！」

女の格好とか無いです!!

「確かに迷惑がかかると思ったのだけど・・・一緒にいたかったから・・・ごめんね？」

本当に嫌ならルイズの部屋と交換してもらおう準備もあるから大丈夫。びっくりさせるためってのが一番の理由だし、私としてはどっちでも良いよ。」

カトレアは“変わらず”笑いながらそう言う。
表面上は。

「そんな不安そうな目でそんなこと言われてもね。」

「・・・良いよ。一緒に過ごそう。」

「っ!？」

「・・・隠してたつもりなんだけど、分かっちゃった？」

「何年、そばにいると思ってるのさ。」

それくらい分かるようにはなるよ。」

目には強い不安が見て取れた。

まあそりゃ、周りは自分より4歳も年下の人間ばかり。

不安の一つや二つ抱えて当然だろう。

一番の理由もウソに決まってる。

不安だから。これが全ての理由だ。一割くらいはびっくりさせたかったってのもあるかもしれないけど。

「シヤスちゃんもごめんね？」

「・・・別に、良いよ。」

カトレアだし。そんな不安げな目で笑う人をほっばれるワケないでしょ。」

「ありがとう。」

目に映っていた不安が完全に消えたカトレア。
シャステイルもなんだかんだで優しいからね。
嫌いな相手でも弱っていたら見過ごせない良い子なのだ。

「それとそっちの子がヒスカちゃん？
韻竜なんだってね？」

「うん、そうだよ。」

貴方がカトレアか。

エンデから良く聞いている。

一番の友達だって。」

「友達・・・か。」

ええ、友達ね。」

少し悲しそうな顔をしたカトレアだが、どうしたのだろうか？
親友と言う表現の方が良かったかな？
恋人・・・ではないから問題あるまい。

「わ、私とも友達になって欲しいんだけど・・・駄目!？」

ちよつと頬を染めてそう言うヒスカ。

最近はやたと人間らしくなってきた。

「ええ、かまわないわ。」

むしろ私からお願いしたいくらい。」

「本当!？」

わ、私ヒスカって言うの!！」

「私はカトレアよ。」

よろしくね。」

「うん！
よろしくー！」

お互いにすでに名前を知ってるだろうに。

苦笑する僕とシヤステイル。

フルーツとルナとサンが戯れている姿が視界の端に映る。

お前達は幸せそうだなあ・・・となんとなくふと思った。

「とりあえず荷物を片付けてしましましょうか？

私も手伝うわ、エンデ。」

「助かるよ、ありがとう。」

「私も手伝うよ！お兄ちゃん！！

カトレアに頼るくらいだったら、この私を頼りなさい！！」

「私はお腹好いたんだけど・・・食堂ってどこにあるの？」

こうして僕の魔法学院生活がカトレアとの同棲という形で始まった。

次の日。

「ち、ちい姉様にエーデ姉様！！

どうして、私だけ別部屋なの！？」

ルイズが部屋に怒鳴り込んできた。

エーデは僕の愛称。

「それは僕に言われても・・・」

「お母様によると“ルイズには少し身の回りのことを自分で出来るようになっただけだから、甘やかしちゃだめよ”と私に言っていたから、そのためじゃないかしら？」

ルイズがいなと思ったたらそういうことか。
僕としては苛められたときのために一緒に部屋の方がいいと思ったけど、良く考えたら苛められても庇うのに部屋を一緒にする必要はないか。

「そ、それは仕方ないとしても、どうしてエーデ姉様も一緒なのよ！？」

私は1人なのに、2人ともずるい！！

しかもシヤスと見覚えの無い女の人まで一緒だし、楽しそうじゃない！？

私だけ仲間はずれ！？」

ちよつと泣きながら講義されて、さすがに気の毒になってきたので、ルイズも一緒に住むことになった。

まあ、サイトが来るであろう、来年。

そのときに戻れば良い。

それまで甘やかすくらいはカリン様とて許してーくれないだろうが、見逃しては貰えー無いだろうが、バレーーるだろうが、だめもとでバレルまで一緒にいれば良いのである。

一気にきゃっきゃウフフ空間と化した22号室。

男1人の僕にとっては色々辛いものがある。

ばったりと着替えに出くわしたり、ベッドに寝ぼけて入り込まれたり、また入り込んだり色々男の夢・・・みたいなハプニングが慣れない時こそ頻繁に起こったわけだが、これがまた心臓に悪かった。

エーデお姉様と慕ってきてるルイズはそもそも僕を女としてしか見てないしむしろ僕の布団やらカトレアの布団に潜り込んでくる。

カトレアはカトレアで「あらあら？見たいなら見たいって言うてくれれば良いのに。」とかベッドを間違えたときは「ん！？あう・・・へ、変なところ触っても良いけどもつと良い雰囲気がいいかしら？」とか「夜這いなの？」とか頬を染めながらもいくらか余裕を持って言い出してくる始末。

シヤステイルは言わずもがなだし、竜であるヒスカに人間のような羞恥心は存在しない。

非常に心臓に悪い、ピンクの園である。

初日の授業時。

問題なく自己紹介が終わった。

問題ないといっても、視線にさらされるといふ程度のものはあったんだけどね。

カトレアの時とか僕のとときとか。

僕は顔の割りに男の格好をしてるせいからより目立った。

面倒くさ。

タバサやキュルケ、ギーシユやマルコリヌといった原作キャラを見て内心テンションあがりっぱなしの僕。

教団でなにやら講義をしてるギトギトとかいう脂ぎった感じの名前の先生がどうのこうのと授業をしているが、正直耳に入らない。ずーっとそっちの方を見るだけだ。

やばい。

ただ原作キャラを眺めるだけで一時間も二時間も暇つぶしが出来て

しまつ。

とかのんびりしていると。

視界の端で風の精霊が集まりだしたのを見てからすぐに。

「危ないっ!!」

というカトレアの声が響く。

なんだ?と思つてカトレアの方を向く——前にカトレアに押し倒される僕。

ふにあっ!?

な、何事!?

む、胸が当たつて・・・ちよつとカトレア!?

遅れてゴガツ!と鳴り響く何かが壊れる音。

起き上がつてそっちの方を見ると軽くヒビが入ってる壁がある。

「どういふつもりですか?

ミスタ・ギトー。」

珍しくカトレアが怒りを顔にした声を上げる。

「え?

つと、何?」

「エーデ姉様!?!ちい姉様!!

大丈夫!?!」

「うん、大丈夫だけど・・・何が飛んできたの?」

いやあ、危なかった。

あんなのが当たつたら怪我してたよ。

「どづいつつも何も。」

風が最強という所以をその体に理解させようと思ったままでですよ。

ミス、ヴァリエール。」

「あれが当たれば大怪我したかもしれませんよ？」

「授業中に余所見をし、なおかつ二へらとしている生徒を少し教育しようと思ったまで。」

見た目が多少良いからといって、私を舐めた罰です。

それに怪我をしても治せるのですから。」

「だからと言ってこれはやりすぎではありませんか？」

「この程度でやりすぎとは・・・真の貴族ならばあの程度、片手間でも雑いで当然ですよ。」

ギトギトがなにやらカトレアと言い争っている。

「か、カトレア？」

僕はもう大丈夫だし、そのくらいで・・・」

「駄目。」

私の大切な人をふざけた理由で傷をつけようとして・・・許せない。

「

「ちょ、ちよつと!？」

気持ちはいがたいけど、カトレアがそこまで怒ることじゃ・・・」

「エンデはちよつと黙ってて!!！」

「あ、アイサー!!！」

つい敬礼をしてしまうほどのカトレアの迫力。

いつものほんわかカトレアお姉さんはどこへ行ってしまったの!？」

「許せないとは・・・コレは異なことを。」

単なる教育的指導だというのに。」

「嫉妬したんでしょ？」

エンデに。綺麗な外見を持つエンデに。
自分のそれと比べて。」

「っ!？」

「・・・そ、そんなわけないだろう!！」

「いいえ、きつとそうね。」

そういう目をしているもの。

私達と・・・公爵家と普通に仲良くしている下位貴族を見て、僻んだのでしょう?」

カトレアの勘の良さから考えて、まあまず間違いなくそうなんだろうね。

というか、カトレア怖い。

「このっ!？」

私を侮辱する気か!？」

「侮辱も何も真実でしょ！」

ちい姉様はウソを付かないもの!!！」

ルイズの援護射撃も入って、顔を真っ赤にするギトギトさん。
なんか僕が諸悪の権現なのに、申し訳ないです。ギトギトさん。

「お前達っ!！」

教師を馬鹿にして良いと思っっているのか!？」

決闘でも申しこみたいのかっ!？」

良いだろう!！」

そこまでコケにするなら相手をしてやるっじゃないか!！」

「・・・私は彼に謝って欲しいだけなの。」

謝って下さい、ミスタ、ギトー。あれはやりすぎです。」

「ここまでコケにしておいてあやまれたと!？」

どの口が言うのだ!？」

貴様などに・・・貴様のような公爵家など名ばかりのただの胸がデカイだけの年増のーひっ！？」

スカツと音を発てて黒板に僕のナイフが刺さる。

・・・年増ねえ。

「誰が年増だと？」

もう一度言ってみろ、油野郎。」

カトレアを馬鹿にする単語が聞こえたたん、切れちゃった。
てへー！！

「僕を馬鹿にしてくれるのは大いに結構。

むしろそうしてくれ。

叱ってくれてかまわん。

だが、それは関係ないだろ？

この場で悪いのは僕だ。

僕をのしろうと罰しようと別に問題ない。

だが、カトレアまで馬鹿にする必要は無いよね？

胸がでかいだけ？

ふざけたこと抜かすのはその舌か？

切り抜いてギトギトタンとして肉屋に出荷してやろうか？

カトレアの魅力が胸がでかいだけなわけねえだろうが。

というかカトレアにかかれれば公爵家という肩書きすら霞む、単なる

おまけなの！

それと年増？

年増の何が悪いの？

年増になれば確かに相手が減るだろうけど、僕としてはまるで問題ない。

むしろどんとこいだ！！

ていうか、カトレアが相手なら年の差なんてまるで気にならん!!」

「き、貴様!!」

き、教師にこんなことをしてただで済むと思ってるんじゃないかな?」

「オマエこそカトレアを貶めてただで済むと思ってたのか!？」

「「決闘だ!!」」

ギトギトさんとの決闘がこうして決まった。

目立ちたくないのに、どうしてこうなった!？

11ページ目（後書き）

とりあえずシャスティルは不老にはなりません。

妾になるかどうかは関係なく。

描写する機会が無いので、まだ本文中には出てませんが、ヒスカはルーンの効果で不老になってます。

厳密には不老という効果ではないんですけど、その辺はいずれ本文中にて。

そしてカトレアも不老になる以上、シャスティルだけ老いさらばえるのはね・・・ちよっとどうかかと。

12 ページ目

「だ、大丈夫なの!？」

「エーデ姉様!？」

「問題ない。」

何より、あんな暴言を吐いたあの馬鹿を一発殴らないと許せない。」

「ええと・・・私なら年の差は関係ないってことは・・・私との結婚を考えてたってことなのかしら？」

カトレアが顔を紅くしながらそう言ってくる。

・・・そういえば、僕なんて言っただけ?

なんか変に大事なことを勢いで言ってしまった気がする。

「い、いや・・・それは言葉のあやでね!？」

「・・・そんなことだろうと思っただけど。」

他にも・・・それだけじゃないわ。公爵家の肩書きすら霞むとか・

・胸だけじゃないとか・・・その、ありがとう。

ふふふ、ここまで思われている私って結構幸せ者かも。」

「え、あと・・・その・・・どういたしまして?？」

「怪我はしないようにね?？」

「うん。一発殴って終わりにする。」

ヴェストリ広場まで来る僕とギャラリーの生徒達。
ざわざわとつるさい。

「私は優しい。ゆえに一応、言っておこうか?？」

土下座して謝るなら許してあげよう。

君は水のドットメイジだったね?？」

スクウェアの風メイズである私にはまず適うまい。」

「良いからとつと始めるぞ。」

合図はどうするんだ？」

「ここにコインがある。」

これが地面に落ちたらとしよう。

本当に後悔しないのかい？」

「いいからさつさとやれ、ギトギト先生。」

「……私の名前はギトーだ。」

それを最後の会話にキンと音を発ててコインが空を舞う。

さて、どう倒そうか？

とりあえず、速攻で素手でぶん殴ろう。

開始直後に軽く肉体のリミッターを外して……右ストレートで様子見かな。

そんなことを考えて、コインが地面に付いた瞬間、僕は駆けた。

「私の二つ名はへぶしっ!？」

「は？」

きりもみ回転しながら飛んでいくギトー……じゃなかったギトギト。

ズンと音を発てて倒れているギトギト。

あっけなさ過ぎて、つい間抜けな声を出してしまった。

「……面倒くさ。」

まさか決闘は名乗り上げてからという決まりでもあったのだろうか？
まああるのだろう。

いつだかにそんなことを習った気がしないこともない。

僕がやりあうのはカリン様や父上などの一度でも詠唱を許したら――

気に不利な状況に追い詰められるクラスの相手ばかりだったから、
つい即殺の思考で戦ってしまったわけだが・・・どうしよう？

周りの生徒達からは「卑怯だ・・・」、「名乗りを聞かないとは・・・
・なんたる無礼」、「貴族にあるまじき戦い方・・・美しくない」、「
「悪逆非道だな。」、「決闘における最低限の礼儀すら弁えてない
のか？ふん、さすが下級貴族。」、「魔法を使わずにただ殴るだ
んて・・・野蛮だわ。」、「下品なゲルマニア人のようだな、H
A H A H A !」、「あいつ、本当にトリステイン貴族か？いい面
汚しだ。」などなどの批判が耳に入る。

そのたびにカトレアから黒いオーラが立ち上り、今にもそいつらに
物申しそうだが、ルイズが懸命に抑えている。

珍しい構図だ。普段ならば姦しく取り乱すルイズを諷めるカトレア、
という構図がすっかり定着していた僕としては意外に過ぎる。

まあ、誰だろうと自分の友達を馬鹿にされれば怒るだろう。

今、僕がカトレアのことを馬鹿にした阿呆をぶん殴ったように。

さて、どうするか？

のろのろと立ち上がるギトギトさん。

この間に5回は殺せる。

いや、10はいけるか？

「き、きさまあつ!？」

名乗りを上げる前に攻撃を加えるとは、どういつつもりだつ!？」

「あ、いえ。」

ほら。僕ってドットメイジで、しがない卑しい身分の雑魚メイジで
すから？

最強と仰る風のメイジである・・・しかもスクウェアのギトギト先
生ならばきつと卑怯な不意打ちにも対応なさると思いましたが・・・
・てつきり魔法で防ぐか、避けるかすると思つたのですよ？

まあ……結果はご覧のとおりですけど。
最強……なんですよね？

風メイジは。その風メイジが不意打ちという卑怯な手段で負けてしまっなんて……卑怯にも劣る風魔法が最強だなんて……僕にはとてもじゃないけど信じられません。」

もちろん、魔法は強い。

単体で見れば十分、素手よりも強いのは誰でも分かる。
ただ、それも扱う物の力量しだいで宝の持ち腐れになることもままある。

さすがに初撃ぐらいは避けると思ってたんだけど、この人は本当に魔法に頼りきりの人間だってことだ。

「ぐぬぬぬ……言わせて置けばっ!!」

相手を立てつつ、馬鹿にする。

楽しいね。特にカトレアを馬鹿にしたやつをコケにするときは。

今更だが、この学校内では決闘って禁止にされてなかったか？

そして、言わせて置けばとか言われてもどういっつもりだ？と聞かれたから答えただけなのに、酷い話だ。

殴りたいほどむかつく相手の質問に律儀に答える僕って、結構良いやつだと思っただよね。

あはははははは！

……こほん、ちょっと趣味が悪かったかもしれん。
とりあえず、場を収めなくては。

「……最強なのに僕みたいな雑魚が勝てるわけが……ま、まさか!？」

さ、さすがです!!

ギトギト先生!!

僕のような頭が緑色の道端の雑草にも劣る雑草・・・ベストオブ雑草が相手では簡単に終わってしまって、面白みも何も無いだろうと言うことで、“わざと”初撃を受けてくれたんですね!?

さすがスクウエアの最強の風メイジであるギトギト先生!!

その太っ腹な精神に感激しました!!ギトギト先生!!

敬服ものです!!」

「あ!?

あ・・・うむ!!

そのとおりだ・・・みつともなく転んだのは・・・ええ・・・ちなみに私の名前はギトーだ。」

・・・半ばヤケクソ。

確実に無理だろうと思いつつもやってみた・・・おだて作戦がここまで上手くいくとは。

なんて単純なんだろう。このギトギト先生。

この場ではありがたいが、アホ過ぎる。

多分、面子を何とか保ちたいがためのプライドゆえのアホらしい行動だろうけどさ。

「転んだのは貴族同士の決闘では、どちらがより魔法を扱えるかを競うものでもあるから、てっきり魔法が来る物ばかりと思って驚いてしまったんですよ?」

・・・申し訳ないです。

僕って魔法が人より弱くて、攻撃に向いてない水なので・・・平民と同じく武器を持つほうが手っ取り早く済むんです。

僕が未熟なばかりに・・・せっかくのギトギト先生のご厚意を無碍ずむにしてしまつて申し訳ありません。許してもらえますか?」

手を取つて、上目遣い。

くらうがいい!!
僕の美少女オーラを!!
・・・こいつの手、汗ばんでて気持ち悪い。
名と実のある油野郎め。

「あ、う、うむ。

そのとおりだ。

あはははは。

みつともないところを見せてしまったな。

何、私は教師だ。

そういつた未熟な生徒を導くのも教師の勤め。

許すも許さないも無い。

そして、私はギトーだ。」

ここぞとばかりに僕の話に乗ってくる。

こいつ、ちよろい!

さっきまでは自分でも苦しいか思っていたら、今ではすっかりノリノリである。

こんなのが横行するトリステインがよくもまあまあ生き残ってる物だ。

ある意味、そこがトリステインという国の凄さかもしれない。

できればゲルマニアかガリアに産まれたかったよ。

ガリアは・・・微妙か。ジョセフ王がいるし。

「じゃあ、やり直しましょうか?

僕は変わらず、卑怯だろうとなんだだろうと、拳でガンガン攻めて行くのでギトギト先生は魔法をじゃんじゃん使って、ギトギト先生の凄さを生徒の皆に見せ付けてやってください!!

卑怯な手段にも負けない、ギトギト先生!!

その姿に生徒は痺れて、あこがれるのです!!」

「あ、ああ！！」

まかせたまえ！！そして私の名前はギトーだ。」

「と、いうわけで、再度コインを投げますね。」

地面に付いた瞬間に開始です。

あ、今のうちに名乗りを上げてくださいね？ギトギト先生。」

「ああ、私の二つ名は疾風。」

疾風のギトーだ。ギトギトではない。

風のスクウェアメイジだ。」

「僕はありません。水のドットです。」

誰かが止めたり、冷静になる前にとつとこの流れを押し込まなくては。

コインをすぐに投げる。

そしてコインが落ちた瞬間、僕は消えた。

「ふふふ、風の魔法のすごぶっ！？」

顔面に突き刺さる僕の拳。

吹っ飛ぶ、ギトギト。

「ま、まで、まぢたまぶげっ！？」

再度、ギトギトの顔面に突き刺さる僕の拳。

また吹っ飛ぶギトギト。

カトレアを馬鹿にしておいて、あれだけのオシオキは無いだろっ。

大義名分もある。というか通した。

あとは・・・公開処刑だ。エグゼキューション

「まち・・・ぶへっ！？」

生徒達を見た。

みんな青ざめている。

ルイズですら青ざめている。

カトレアだけは・・・怒ってる？

黒いオーラが僕の方に向かってている。

・・・怖い。

怒りがすっと消えて、とにかく謝ろうとして近づいたら・・・ビンタされた。

「なんで、怒ってるか分かる？」

「・・・分からない。」

正直に答えた。

するとはあとため息を吐いてカトレアは言う。

「・・・私のことで怒ってくれてるのは素直に嬉しい。

でも、こんなことしたらただじゃ済まないわ。退学になるかもしれない。

私のせいで・・・ね。それに自分を卑下する言葉も好きじゃない。」

「別にカトレアのせいじゃ・・・それに卑下といっても、大したことでは・・・。」

「貴方を慕っているルイズ、シヤスちゃんやヒスカ、貴方の両親、果てには貴方に一目置いている私の両親も馬鹿にすることになるとに気づいてる？」

何よりも幼い頃からずっと一緒にいた私を貴方自身が貶めることになるのよ？

その辺の雑草と付き合う人間はなんだ？って話になるでしょ？」

「・・・はい、すいません。おっしゃるとおりでございます。」

確かに。僕自身がカトレアを・・・要反省である。

カトレアは僕の手をとる。

ギトギトの血で紅く染まった手を。

「・・・何よりも貴方が皆からどう思われるかを考えたら、私だつて心が痛いわ。

それなのに・・・ここまで遠慮なく暴れちゃったら、言い訳出来ないじゃない。」

「・・・その僕が怖くないの?」

ぶっちゃけ、自分でもやりすぎたと感じている。

そもそもどうしてこんなにむかついたんだらうか?

見た目だけだと怖さ百倍って感じだと思う。

「怖いわけじゃないじゃない。

これでも私だつて一応、水のトライアングルメイジよ?

常にヒーリングをかけてたのは分かってたし、見た目ほど酷いことじゃないのも分かってる。」

カトレアの言うとおり、見た目こそエグイが実際はそうでもないはずだ。

常にギトギトにはヒーリングをかけて置いたし、殴るのだって力を抑えてた。

とにかく殴らないと気が済まなかったのである。

「私を守ってくれてありがとう。

でも、自分も守らなくちゃ駄目。それが私の怒ってる理由。

分かった?

分かったら返事。」

「は、はい。」

そういつて、カトレアは怒りの顔から一転。いつものほんわかお姉様モードに戻る。

ルイズもその話を聞いていたのか、腰が引けていたのが直った。ちよつと恥ずかしそうだ。

「ごめんなさい、エーデ姉様。」

エーデ姉様のことを怖がったりして・・・」

「ははは、無理もないよ、ルイズ。」

僕も逆の立場だったら普通にビビってたよ。」

「ううん、違うの。」

私はエーデ姉様はエーデ姉様で、私に優しくしてくれたエーデ姉様に変わりはないってことを知ってたはずなのに・・・シヤスならきつと“もつとやれば良かったのに、お兄ちゃんも甘いね”くらい言つてたと思う。

それに・・・エーデ姉様がやらなかったら、私がああ馬鹿な風メイジを爆殺していたと思うわ。」

「・・・ルイズの爆発は強力だからね。」

ルイズの爆発の威力の検証のために僕が作った鋼鉄の塊を爆発させてもらったことがある。

普通に爆散したのを見て、冷や汗を流したのは良い思い出だ。

メイジは各々が得意とする系統魔法があるが、別にそれしか使えないというわけではない。

威力が落ちるが基本的に全属性を扱える素養を持っている。

僕ももちろん使えるわけで、しかもその辺の土メイジよりかは遙かに扱いが上手い僕の作った鋼鉄の塊がルイズにとっては一撃爆殺である。

魔眼で見ると、どうやらルイズの虚無はコモンマジックを扱う

時と同じ精霊が働くようで、その精霊にライト程度の精神力量を与えるだけでその威力である。虚無怖いと思うばかりだ。

しかも軌跡が辿れず、いきなり対象が爆発するので非常に避けにくい。

相手側からしたらこれほど強力な呪文もない。

騒ぎを聞きつけたコルベール先生が後始末をして、生徒は寮に帰された。

こうしてこの日は幕を閉じた。

後日。

校長室にて注意を受けたのはもちろんだ。

「オヌシには一週間の謹慎を命ずる。」

「はい、すみません。」

「な、納得いきませんか!? 学園長!?!」

オールドオスマンの決定に異を唱えたのはもちろんギトである。間違えた。ギトギトである。

「なぜじゃ?」

「なぜって・・・わかるでしょう!?!」

教師をタコ殴りにする生徒は退学にするべきです!?!」

「もとはと言えば、生徒に魔法を放つオヌシが悪い。」

「そ、それは!?!」

生徒への教育であって・・・」

「壁にヒビを入れるほどの教育・・・とはどんなものかちと聞いてみたいのう?」

「・・・ぐぬっ!」

「もちろん、ミスタ・エンデが悪くないというわけではない。」

彼が余所見をしていたのがもともとの原因じゃし、その後の対応も褒められた物ではない。」

「だったらっ!？」

「オアシが乗せられたのが悪かろう？」

実力も無いのに見栄を張るからそうなる。自業自得じゃ。しかも決闘という形なのだからそれくらいで騒ぎ立てるのもまたおかしい。そもそも入学して間もないエンデ君ならばともかく、ここに来て長年教師を勤めているミスタギトーならば、決闘が禁止されていることくらい知っているじゃろ？オアシのように負けても、納得しないプライドばかりの貴族がおるから禁止にしているというのに・・・かといってエンデ君に非がないというわけでもないし、暴力行為が許されるというわけでもない。」

謹慎一週間が妥当な線じゃろ？」

「ですが、平気で人を殴れるその精神は他生徒に悪影響を・・・」

「黙れ!!！」

「っ!？」

「生徒に魔法を放つ馬鹿がどの口でそのようなことを言う!？」

・・・ミスタギトー。オアシにももちろん、処分が課せられる。

今年一年の給料を大幅カット。さらにオアシには二週間の謹慎処分。そして壁の修理代は給料からさっぴかせて貰うぞい。」

「そ、そんなっ!？」

「オアシは学生ではない。」

きつちりと責任を自覚するべき立場の人間じゃ。

反省すると良い。・・・退室してよいぞ。」

肩を落として部屋から出る、ギトギト先生。

さすがにかわいそうになつてきた。

生徒の目の前でボコられた拳句、給料の大幅カットに僕以上の謹慎処分。

まあ、やりすぎというほどではないか。

「見苦しいところを見せたの。」

「いえ、そんなことは・・・」

「それにしても大した手並みじゃったぞ。」

「・・・別に殴っただけですから。」

僕を見定めるような目で見つめてくるオスマン。

エロ爺というイメージしかなかったのだけど、実際にこうして会うとそれだけじゃないってことが良く分かる。

多分、戦ったらかなり強いんじゃないだろうか？

弱そうでもあるが。

そもそも覗いていたなら、とっとと止めにこいよと思う。

「謙遜するでない。」

相手を理解した上での話術に、瞬時に相手との距離を詰める技量。身のこなし。

そうそう身につけられる物ではない。

さすがレイフォール家の息子といったところか。」

「父上をご存知で？」

「うむ。魔法の腕はそこそこドマリじゃったが、素手での近接戦における戦闘センスははずば抜けておったからな。オヌシはそれをさらに越えるようじゃがの。」

「・・・魔法学院なのに接近戦なんて物の授業があるのですか？」

でなければ、そのことをオスマンが知るわけがない。

「いや、ない。」

「・・・なんで知ってるんですか？」

「アヤツはこの学院で良くも悪くも目立っていたからのつ。」

今のオヌシのよう」。

「はあ・・・」

「オヌシはアレの子なのだから平民蔑視の意識はもちろん無いのじやろ？」

ああ、なるほど。

そこまで聞いて分かったわ。

察しが付いた。

「ふおおおお。」

察しが良いの。その考えどおりじゃ。学院に勤める平民に対して扱
いが酷いときが多々あったの。そのたびに貴族と喧嘩していたもの
じゃが・・・魔法を使う暇があれば素手で殴る、という戦闘スタイ
ルじゃったから・・・ううむ、懐かしいのう。アヤツを見ているよ
うじゃ。

容姿は似て似つかんが。」

一体、いくつなんだこの人？

「女のために怒るところとかもそっくりじゃ。カトレア嬢を胸だけ・

・・・などとは見る目が無いのう、ギトー君も。」

「・・・そこまで見てたんですか。」

「さて、話は終わりじゃ。」

オヌシも帰ってよいぞ。」

「あ、はい。迷惑をかけました。」

「よいよい・・・あ、ちょっと待ってくれんかの？」

ドアに手をかけた所で、オスマンの制止の声がかかる。

「なんですか？」

「オヌシのパンツをちと見してくれんかの？」

「は？」

何言ってるんだ？こいつ？

「いやぁ・・・オヌシがちょっと本当に男か気になって、気になって仕方がなくてじゃな・・・ちょいつと見せてくれれば良いんじゃない。ちょこつとだけ。」

なぁ、駄目かの？」

だからってパンツ見せてくれは無いだろう。

「・・・死んだほうがいい。」

そういつて学園長室を後にした僕である。

12ページ目（後書き）

カトレアとルイズの歳差が原作と違うのは仕様です。
色々な都合からそうしました。

今回はギトギト・・・じゃなかった。

ギトー先生に悪役ヒールになって貰った話。

ギトーには申し訳ないです笑

13 ページ目（前書き）

今回は何か食べながらは読まない方が良いかも？
誤字脱字はそのうち纏めて直します。
すいません。

13 ページ目

というわけで。

自宅……というか自分の部屋である22号室で謹慎処分となりました。

まあ今更だけど、やりすぎたね。

目立ちたくないのに目立ったり、ちょっと過激だったり。

見た目、肩くらいまでの緑髪がチャーミングポイントな綺麗な可愛さ？とも言うべき顔立ちをした美少女が、自分よりもふた周りは年上の相手を淡々とボコってるんだもん。

血が飛び散るのも構わずただひたすら殴る。

……客観的に見ても見なくてもシユールな光景だったのは間違いない。

そんなことをフルーツ達と戯れながら考えてます。

「お兄ちゃんも甘いよね。というか……馬鹿？」

「うるさいな。」

分かってるけど、しょうがないと思うんだよ。

カトレアを胸だけなんて……」

「はいはい、それはいいから。」

私が言ってるのは、もっとやりようがあったでしょ？ってこと。」

「……たとえば何さ？」

「普通にこっそり闇討ちでいいじゃない。」

「……普通にその言葉が出てくるのはどうなんだろう？それに一応、発端は僕だし。」

「生徒の前でボコボコにして体のみならず、プライドをもずたずたに引き裂いたお兄ちゃんの言うことは、さすがに違うね。」

自分が悪いって分かっているなら、なおのこと押さえるべきだったのに……」

なんかやたらトゲがある言い草だな。
珍しい。

「カトレアのためだつてのが気に食わない。」

「……だから、シャスティルがヤキモチを妬くような関係じゃないっての。」

「ふん、どうだか。」

「……それに、なんだかんだ言いながらもオマエだつてその先生に腹立ててるんだろ？」

「お兄ちゃんを怪我させようとしたからよ。」

「ウソ付け。その場にシャスティルがいれば、シャスティルがその先生に掴みかかるくらいはしただろうよ。私の友達を馬鹿にするな！って。なんだかんだでカトレアのことを好いてるしな。」

お兄ちゃんが気づかないとも思ってたのか？

ルイズも爆殺するとか言ってたし……僕の周りは僕を含めてすぐ手が出るやつばかりだな。」

「……そんなことしないもん。私、おしとやかだし。」

「はいはい。照れなくてもいいから。」

「て、照れてない！！」

妹よ。そういうセリフは顔を紅くして言ったところでなんの説得力もないぞ。

そして、現在は謹慎一日目の昼前つてところ。

学園長室から帰ってきたところだ。

そこで、シャスティルが昨日のことをまた持ち出してきたのだ。

「これで、昨日の話はおしまい。胸糞悪いし。」

「ちゃんと反省するんだよ?」

「分かってるよ。口うるさい妹だ。」

オマエは僕の母親か。」

「妻よ!」

「妹だろっ!?!」

「実は・・・子供が出来たの?」

「なぜ疑問系!?!」

そして出来るようなことはしてないでしょ!」

「ふふふ、それはどうかな?」

「ま、まさか・・・寝てる間に・・・」

「想像妊娠したから大丈夫。」

「全然大丈夫じゃないよっ!?!まさかの想像!?!」

平然と妻と言い切るあたりも恐ろしい物がある。

これから先、寝てる間に既成事実を作る・・・とか無いよな? さすがに無いと信じたい。

「久しぶりの2人きりの時間だし・・・何かやるっよ、お兄ちゃん。た・と・え・ば。服の脱がし合いだとか、愛撫とか、粘膜接触とかどう?」

「ふふふ・・・それもいいかもしれんな。」

「えっ!?!」

「だが断る!?!」

「・・・それが言いたかっただけでしょ?」

「・・・そんなことはない。」

やべ、見破られてら。

「2人きりと言えば、ヒスカはどうしてるんだ?」

ルイズとカトレアは授業である。

「食堂で料理を習いに行くってさ。

マルトーさん・・・だっけな？

その人の料理がなかなか上手くて、勝負したら良い仲になったんだってさ。

やたらと良い顔で“腕利きのコック？違うな。やつは強敵と書いてトモと呼ぶ・・・そんな野郎さ。ヤツを見るとオイラも忘れてた情熱を思い出させてくれる”とか黄昏てたよ。」

「・・・それはまあ、イタい話だな。口調まで変わって・・・変な子にならないか心配だ。」

「黄昏たいお年頃なんですよ？」

「そんなお年頃があるの!？」

「無いんじゃない？」

「・・・投げやりっすね。」

「青春してるって事でしょ。私達にはちょっと理解できないってだけ。」

「うん、まあ・・・それならいいか。」

「うん、いいの。」

2人してあはははと笑う。

「さて、出来れば子作りへと励みたいところだけど・・・」

誰と励みたいかは聞かないで置こう。

きっとシャスティル流のジョークなんだから、そこを明らかにする必要はないさ。うん。

「せっかくだし、二人で昼ご飯でも作る？」

私がレイフオール家に来た後は良くやってたけど・・・お兄ちゃんが私に料理を教えてくれるがてらね。

今では逆に教えてあげる。」

「・・・ふふ、お手柔らかに頼むよ。」

今更だがヒスカとシヤステイル、カトレアが料理にはまっつていているということまで22号室ではキッチンがある。別に特別扱いされてるわけではなく、僕が錬金とエルフ式魔法で火石や風石を作りだして作ったものだ。ちなみにエルフ式を使えることは僕の回りの人間は知っている。

具体的には両親とヒスカ、シヤステイル、カトレア。

おじいちゃんにはさして言う必要が無かったし、カトレアは自力で気づいた。さすがのカトレア。

ばないっす！そして、ルイズはポロつと口に出してしまいそうなのと、腹芸が明らかに得意そうではないだろうから言っていない。

これから異端審問の本場。ロマリアのヴィットーリオとジュリオが彼女には接触してくる。

あまり僕の情報は渡さない方が良さだろう。

別に彼らが信仰から僕を叩いてくることはまず無いだろうが、その情報を秘密にする代わりに聖戦に強力しろ、くらいは言ってるか知らない。

そんなのはごめんだ。

道徳的にも力量的にもエルフと戦うってこと自体もごめんだし、エルフみたいな偏屈野郎どもを相手にもしたくない。

あいつら、人間を野蛮野蠻とか見下しておきながら、トリスティンの馬鹿貴族どもと変わらないんだもん。

人間に色々いるようにエルフにも色々いてあたりまえ。

ちよっと人間の血が混じったからって、ティファニアを汚らわしいとか言い出す偏見まみれの偏屈ども。

現代日本という科学のみならず、精神的にも高レベルにある日本人

からしたらぐっだらねーと思うんです。

「お兄ちゃん、ぼーっとしてないで。

たまねぎの皮をむいてよ。」

「ああ、悪い悪い。」

話を戻すが、料理はヒスカとシヤスティルは基本的に趣味と化しているし、カトレアは花嫁修業だと言っていた。趣味の面もあるのだろうけどさ。

相手がいないのにがんばるね。と言ったら正座させられて女心とは何か？ということを読教された。意外とためになったのはありがたい。

が、終始カトレアが不機嫌で怖かった。

だが、その説教で学んだことを当てはめて考えてみるとカトレアは僕に惚れていることになる。

ということは遠まわしに僕にそれを伝えたかったのかな？と思ったのだが、父上によると“エンデ。オマエは母さんと同じで変な受け取り方をすることがままある。時には素直に感じたままを基準とするのは待ちなさい。”とのこと。

乙女心は繊細で男には分からない物だと聞く。

今まで前世含めてろくな恋愛を・・・ろくな、どころか全く恋愛をしたことのない僕を感じたままは当てにならない。そう考えるのが妥当。

感じたままが駄目となると・・・単純に僕の無神経さに腹を立てたということなのだろうか？

ちくりと胸が痛む気がしないこともないが、ちよつと残念に思うのが僕の正直なところ。

べ、別に惚れては無いからね！？

単純に美人なカトレアに思われていると思ってぬか喜びさせられたってことでの痛みだからな！！

決して惚れては無い。そう言える!!

「・・・鋭いけど、アホね。パパも・・・よくやったと言っべきか、余計なことを言うべきか。」

「うん？あれ？声に出てた？」

「別に。ほら、ジャガイモ切って。」

「はいはい。」

材料からして肉じゃがだろうか？

僕がシャステイルに。シャステイルがヒスカに。ヒスカがカトレアに。

と言伝ゲームのように伝わっていき、今ではそれぞれにバリエーションがある個性が溢れる料理の一つとなった。

個性が溢れるといえば、僕達のそれぞれの料理には特徴が出る。

素材そのものの味を引き立てて、万人受けな物を作るのが僕。万人が万人に美味しいと言わせる自信がある。野菜ならば大地の息吹を。果物ならば秋の実りを。魚ならば偉大なる海の母を。肉ならば荒々しくも雄雄しい命の残り火を。それらを殺さず、質素な味付けでむしろ際立たせて、舌と言う感覚を通して食べる者への魂に打ち付け、食材そのものの美味しさを提供する。

言うなれば“食材の求道者”とでも呼ぼうか。ありとあらゆる食材の命に感謝し、最大限に利用させてもらう。

いただきますの精神を大切に作る料理と言えよう。

ふっ。自画自賛かよ!?!とかいうツツコミはノーサンキューだ。

そして、技巧に技巧を重ね数多の隠し味を用いた匠たくみの技で、食べる者の舌を攻めるのがシャステイル。

その技巧は今となっては千を越えると言われており、（誰からだよ!?!というツツコミもノーサンキュー）言うなれば“料理の錬金術

師”。等価交換？知るか！？とばかりに次々と信じられない食材の協奏曲を書き上げていく彼女が作り出した料の原材料を当てられる人間はまずいまい。塩一つをいかに使ったのか？誰も想像も付かない手段で次々と魔法のような料理を生み出していく。

誰もか思いも寄らぬ奇抜な発想で、時には王道で。誰よりも何よりも美味しく結果を出す。

我が妹ながらその技量には感服する。

一見、丁寧に見える盛り付けをするヒス力だが、味は以外にも荒々しくインパクトのある印象強い料理を得意とするのがヒス力。“得意”と評したのは彼女がやるうと思えば一度食べた物は必ず模倣できるほどの技術を持つからだ。何かのみ、という言葉が彼女の辞書には存在しない。

彼女の料理の腕は伊達ではないのだ。剣の腕と良い、どこその風韻竜のスペックを遙かに上回る。

学園でサモン・サーヴァントが行われてないから、彼女にはまだ会ったことがないが。

彼女のことは“料理界の異端児”とでも呼ぼうか。彼女の前に立ちふさがることのできる料理人は僕達を除けばマルトーくらいだろう。なによりも恐るべきは料理に対するその向上心。彼女の鬼才とその誰にも負けないほどの料理への情熱。それが重なったときに仕上がる料理は天上の果実とも言うべき、抗あらいがいがたい超絶の至福。その至福に腰が砕けるのはもちろんのこと、胃も消化を拒否すること間違いが無い。

彼女の料理は美味すぎて、いまや一種の凶器と化すのだ。

そして、ある意味でダークホース。

カトレアが作る料理は一見、何の変哲も無い料理だが不思議と故郷を思い出させるじんわりとした暖かい味が持ち味だ。いわゆる“おふくろの味”というものだ。

これはさしものヒスカとて模倣できずに悔し涙を流していた。もちろん味はそんじょそこらのコックに比べるべくも無い。

彼女の料理から漂う、溢れんばかりの母性。暖かい空気は振舞われた物の体を癒し、心すらも癒すという。まさに癒しの境地とも言うべき恐ろしくも頼もしき慈愛の料理である。

彼女の料理は舌という感覚器を通して心を攻める。

そして、どんな相手だろうと関係ない。その人が本来持ちえる“良心”を無理やりにも引き出し、改心させる。狂気を癒し、体を癒すその姿こそ。

“料理の女神”という称号が相応しい。

と。

それぞれの料理の個性を散々と語ったわけだが、単純な料理の腕ということならばヒスカが一番で、次にシヤステイル。そして僕とカトレアが同列と言った所か。

多少オーバーな部分はあるとしても、概ね変わらない。

そしてこの料理四天王のうちの1人。

ナンバー1であるヒスカと勝負しうる実力を持つ、料理人マルトー！
彼奴きやつの腕前。是非とも見せてもらわねばなるまい。

くくく。

あはははは。

ぐあつはつはつはつはつ！

その首を洗って・・・いや、手を洗って待っているよ!?

戦士マルトー!!

いや、学園の料理人マルトー!!

近いうちにヒスカを良くしてもらった礼をせねばなるまいて!!

ただ、食堂のものを食べた限りじゃそれほどでもない・・・って気がするんだけどな。

確かに美味しいが、僕達には一步届かないというレベル。もしかしたら貴族に合わせて多少レベルが落ちてるのかも。

あーはっはっはっはっはっ！！

恐れるに足らず。マルトーよ！！

「うるさい！！」

「はっ！？」

フライパンで殴られた。

いきなり何すんの！？

「痛いよ、シヤスタイル。」

「さつきから、ぶつぶつうるさいの！！

料理をするときはキッチリと食材に感謝をしながら！

これを教えてくれたのはお兄ちゃんでしょ？

真面目にやんなさい！！」

「す、すいません。」

ちょっと、悪乗りしてしまった。

本当、すいません。妹に怒られるとは面目ない。

ちなみにさっきの表現は過大評価ってわけでもないよ？

肉じゃがが出来たようなので、あとは味噌汁と魚あたりかな？

ちなみに味噌や肉じゃがに使う醤油等は僕が作った。

石鹸と同じようにこれらにも我が家印のプレミアム品と平民でも普通に買える量産版がある。

プレミアム品は味も風味も一段違うのだ。

特に味噌のプレミア版は専門の職人を育てて、発酵を常に監視。

途中で温度や風のある無しを変えて特別な作り方をしている。

コクの深さが違い、しょっぱさも少し緩くなっており、香り豊かというのが特徴。

食品のため、石鹼に比べると安く、これも色々な方面で売れに売れていて、いまやレイフォール領は国が相手でも防衛に全力を尽くせば半年は持つほどの潤沢な資金と貯蓄がある。

あとはカトレアに上げた幻想木箱の劣化版なども儲けが良い。

これは貴族、平民の差は無く一律休めの値段で買える金額にしてある。

ただ、どうせなら利益が欲しいということで平民ならば、日本人が奮発して秋の味覚の王様、マツタケを買うくらいの値段で設定してある。

貴族相手ならば少し装飾を凝って、その分ぼったくってる。

どうせ横領したり、平民から雀り取った金だろうから問題ない。

笑みが止まらんよ！はははははははは！！

いまや王宮の所持する財なんか軽々と越してますよ？我が領は。

もちろん色々根回しして、それを隠してる。

あんなバカどもに知られたら、必ずよこせとか何とか言ってくるだろうし。

貴族の誇りってもんは平民を虐げることにはしか使ってないんだよ、トリステインの上層部のほとんどはさ。

たまにはれそうになつた時はもう亡くなったフルーツの親から水魔法で剥離して培養した改良型赤痢アメーバを食事に混ぜたりして、それどころじゃなくしてやった。

さすがに暗殺は気分的に良くない。てなわけで改良型で常に腹を下した感じ、プラス下痢になり易い、プラス血便が出てくるという悪夢の三段コンボを食らわせてやった。

今頃、どうなってるんだらうか？

僕は元々お腹の緩いほうだから、なおのこと恐ろしさが分かる。

ちなみに改良型なので体外に出ると死ぬようにしてある、赤痢アメーバ君。人間の都合のために・・・ごめんよ。その代わりずーっと体内に留まって美味しい思いを出来るように遺伝子改良したから、それで勘弁してほしい。腸内である程度まで繁殖したらそこで繁殖がストップし、腸壁と同化して生きるようにした。寿命は10年ほどだと思っ。寿命で死んでも死ぬ前に子を残すから一生、赤痢と下痢と鈍い腹痛に悩まされるようになるということだ。

同化しているため“体にとって自然な状態”を作り出す改良型赤痢アメーバはヒーリングでは駆虫できず、僕のリザレクションで治すしかない。

ヒーリングではしばらく赤痢を抑える程度の効果しかあるまい。重ねて言うが恐ろしいものを培養してしまったものだ。

脱水を起こさないように、宿主を殺さない程度に下痢に追い込むため、生かさず殺さず。

本当に性質の悪い原生物ちゃん達である。

そこが可愛いんだけどね、このこの！

・・・冗談だけでも。

体外へでたら死ぬ様にしたのはもちろん他の人間への感染を防ぐため。

簡単でもいいから下水配備があればね〜と思うが、しかたあるまい。もちろんレイフオール領は配備して、肥溜めなんかも作るようにしている。

一応、煮詰めたお湯と混ぜて寄生虫の殺菌も行うように厳守させてるのでいずれ寄生虫も撲滅できるだろう。

僕はすでに駆虫済み。魔法ってイメージ次第であらかた出来てしまっから超便利。ちなみにカトレア達や母上にもこっさり健康診断だという名目で駆虫しているし、父上やおじいちゃんには理屈から説明して駆虫した。ちょっと汚い話だが、お尻から生のサナダムシが

出てきたのは今となつては良い思い出だ。僕の“動物全般が好き”の動物には寄生虫も含まれていたりする！

さすがに生のサナダムシは引いたけれども。両親達はそういうものだとして受け入れている・・・というか大抵の人がそうだったから驚きだよ。内臓の一つとして考えてたらしい。

ちなみに。

なぜ両親達にはちゃんと説明してカトレア達には黙っていたんだ？とか言うヤツはとりあえず女心つてのを勉強して来い！

そんな感じでレイフォール領は発展を遂げているのだが、他の街では貯めて、集めて、日々の食い扶持を稼ぐために平民が捨てに行くその辺に捨てないだけ、地球の中世ヨーロッパあたりよりはマシだけど。

王都ですらそんなんですよ？赤痢アメーバの対象にもなった・・・ええと？

リッシュモンって言ったっけ？王都の上層部の人間らしいこいつ。どっかで聞いたことのある名前だからなんとなく覚えてただけ、どこで聞いたんだっただかな？

あいつは何をやってるんだか。というか、なんのためにいるんだかもちろんこれらの情報は平民のために、余計なトラブルを防ぐためにも製法や論述も発表しているが、どこの領もあまりよろしくは無

い。

製品関連はともかく、衛生的な部分が半信半疑なのだ。

「よし、これで完成。」

お兄ちゃん、食器並べて。」
「あいよ。」

今更だけど食事前に考えることではないな。

軽く反省をしつつ、食器を並べて飲み物を用意したら準備完了。

冷蔵木箱から果物を数個取り出して、フルーツたちのご飯もあげる。

「いただきます。」

「いただきます。」

「「「きゅーっ!」「」」

ルナ、サン、フルーツも一齐に声を上げる。

多分、いただきますといってると思う。

ブリミルなんてクソ食らえだと思ってるので、ブリミルの祈りはしたことが無い。

学園の食堂で食事をするときも基本的に口パクである。

食材に感謝するのが僕の主義。

そこに妥協は一切無い。

わざわざサイレントをかけてまで言う僕って偉くない!?

「お兄ちゃんは馬鹿なのよ。基本的に。」

「・・・辛らつな物言いだな、シャスティル。泣いちゃうよ?お兄ちゃんは。」

「それって・・・泣いて弱っているところを突いて、口説き落としてくれっていうフリ?」

「僕には高度過ぎるフリだ!??」

「冗談よ。本当は私が泣いちゃうの。」

そしてお兄ちゃんが慰めに来たときに、「っつ言っの。」

悲しそうに目を伏せて、シャスティルは芝居がかった口調で言った。

「お兄ちゃん・・・私を滅茶苦茶にしてって。」

「文脈って言葉を知ってるかな!？」

「全世界を巻き込む感動大作になること間違いないわ。」

「その図太さに僕はまさに感動だ!！」

ふふふふと笑うシャスティル。

僕も釣られて笑う。

「ねえ、お兄ちゃん。」

「ん?」

シャスティルは急に真面目になったと思うと、口をパクパクして喋ろうと思ってるけど、喋らないその言葉を飲み込む。と思いきや、口を開いた。

「お兄ちゃん、私、お兄ちゃんの妹で良かったと思う。」

新しく出来たパパ、ママも優しいし。」

「・・・そうだな。」

「お兄ちゃんは言ったよね？」

自分を産んだ母親を父親を忘れるわけが無い、って。」

「・・・言ったな。」

シャスティルはより深い笑みをして。

「母さん、父さんじゃなくて・・・呼びなれないパパ、ママって呼んでるのはね。」

もとの私のお父さん、お母さんを忘れないためだったの。忘れないって言うてくなくても不安だったから。」

何より、もともとの私の親が悲しむと思ったから。」

「・・・分かつてる。」

シャスティルは一瞬悲しそうな顔をするが、すぐに笑顔に戻る。

「でもね、全然忘れてない。」

忘れることなんか、出来てない。

今でも母さんの怒った顔を思い出せるし、私を撫でてくれる優しい顔も昨日のことのように目に浮かぶ。

父さんの気弱そうな目も思い出せるし、たまに見せる凜々しい顔も忘れてない。」

「・・・うん。」

ふうと軽く息を吐いて、にっこりと微笑むシャスティル。

「お兄ちゃんの言ったとおりだった。」

あそこで絶望して歩みを止めてたら、私に今は・・・幸せな今は無かった。

もちろんあの日のことは今でも思い出すの。

時々夢に出ることもある。

でも、私は幸せ。

お兄ちゃんの妹で幸せです。」

「そう言っただけで、あの時がんばったかいがあったよ。」

突然どうしたのか？と聞くと。

「別に。ふと思ったただけだもん。」

恥ずかしくなったのか、真っ赤な顔を背けるシャスティル。
そんなシャスティルの頭を撫でる僕。

フルーツたちが出すぎゅーきゅーと言いつ鳴き声がやたらと耳に残る
午後の幸せなひと時だった。

13 ページ目（後書き）

フラグは立ってないんだからね！

あくまでも兄妹の親愛の情が垣間見得る午後のひと時って感じですよ。赤痢アメーバは普通に死ぬ可能性もある感染症です。

野良ネコなどにも感染してるので、小さな弟妹を持つ兄、姉。

ないしは子供を持つ、親御さんは気を付けた方が良いかと。

また、ネコは放し飼いはやめましょう。

そう言えば女性の読者はいるのだろうか？

原作の主人公が浮気性だから、女性には人気ないんじゃないかな？
と思います笑

そして次回は挿絵入り！

かもしれない。色もペンも入れないし、素人の域を出ません。すでに頭の中で主人公のイメージがある人や男の娘が苦手、ないしはその設定をスルーしてる人、または素人の絵なんて見るに値しないと考えてる方は、このページの段階で挿絵表示をOFFにすることを勧めます。

モンモラシー家の血を引いていますが、主人公はモンモンには全く似てません。

14ページ目(前書き)

結局、色まで塗ってしまった。

一応言っておくと、絵を書いたから更新が遅れた訳じゃないんだからね！

だいぶ手抜きだし。

14 ページ目

そんな感じで、のんびりとした謹慎タイムは過ぎていく。謹慎が解けた日は虚無の日で学校は無かった。そんな時。

ルイズが朝っぱら早々、僕に抱きついてきた。

「エーデ姉様！

皆で服を買いに行きましょう！！」

「ルイズ、年頃の淑女が所構わず、男性に抱きつくのはどうかと思うよ？」

「エーデ姉様は女でしょ！」

「男だよ！？」

「男でも、男という名の女であり、男という名のエーデ姉様なの！！」

「変態という名の紳士というフレーズを思い出すね！？」

「なにそれ？」

「いや、なんでもない。

というか、ルイズと僕は同年だしさ。姉様つてのもまた・・・」

「姉様は姉様！！」

私よりもずつと大人っぽいからそう呼ぶの！！」

寝起きでイキナリのことなので僕の頭はちょっとボケていた。

「ちよつと！！」

気軽に抱きつくくな！！」

「別にシヤスが決めることじゃないでしょ！！」

この光景も慣れたものだ。

「あらあら？」

朝っぱらから元気ね。

おはよう。」

騒がしいからか、カトレアも起き出した。

ちなみに現在のカトレアの服装はルイズとおそろいのピンクのネグリジエである。

目のやり場に困る？

H A H A H A H A H A !

僕を誰だと思ってるんだ!?

姉様と言う名の紳士だぞ!?

その程度、気合で無視できー！

「どうしたの？」

「い、いや!？」

ど、どうもしないぞ!!!」

ませんでした。

可愛い過ぎるんだよ、こんちくしょう!!

カトレアってやつは、こんちくしょう!!

微笑んでるカトレア。

分かってやってるんだらうな・・・この人は。

今のルイズは普通に学校の制服を着ている。

早めに起きてすでに準備をしていたのだらう。

何を間違えたのか僕までネグリジエだったことはこの際忘れよう。

これもまた、いい加減慣れた。

せめて透けないものを!としたのが僕の精一杯だったのだ。

変態とか言つなよ!?

なぜ、そうなったのかはいずれ語るときが来るだろう。

・・・いや、永遠に語るつもりはないが。

「さあ、早く!!」

行きましよう!!」

「はいはい、分かったから・・・とりあえず顔とか歯とか準備させてくれ。」

こうして僕達の休日のお出かけが決まった。

「で、なぜ僕はまた着せ替え人形にされているのだろうか?」

服屋の更衣室内でぼやく僕。

室内にあるハンガーには女物の服がずらりと並んでいた。

なんでやねん!!

「まだかしら?」

「ま、まだまだよ!」

「着れなかつたら言つてね?

着せてあげるから。」

「い、いらないっ!!」

「まあまあ、照れなくても良いのに。

なんなら着せ合いでもしましようか?」

「せんわ!!」

更衣室の外から話しかけてくるカトレア。

もう、声がやたらとウキウキしてるのが子憎たらしい。
・・・憎めないんですけどね。
意外とカトレアは小悪魔タイプってヤツかもしれない。

「・・・着たよ。」

「開けて大丈夫？」

「大丈夫。」

不本意ながら。」

「ま！」

「さすが、お兄ちゃん!!！」

「エーデ姉様・・・綺麗。」

「私も何か着たいな・・・これなんてどうかな？
いやでも・・・布の肌触りが良くないな。」

上からカトレア、シャステイル、ルイズ、ヒスカの感想だ。

ヒスカは感想と言うべきじゃないかもしれないが。

僕が現在着用してるのは、黒と白の混ざったモノクロのドレス。

更衣室に三人が持ち込んできたのはどれもがドレス系で、その中でも派手にならず可愛い物を選んだ。・・・つもりだ。

なんでドレス系ばかり持つてくるのか理解に苦しむ。

そこまでして僕をドレス風に仕立て上げたいのだろうか？

> i 2 2 1 3 0 — 2 2 3 8 <

「さて、それじゃあ今度は私達の番ね。

まずは・・・シャスちゃんから行きましようか？」

「ふふん。カトレア!!！」

私の美しさをその目に焼き付けてあげるんだから!!！」

目を洗って待つてなさい。」
「ええ、洗って待つてるわね。」

シャスティルの敵意を軽々と受け流すカトレア。
というのに、嫌な感じは全くしない。

それを成すのも、カトレアが持つほんわかオーラゆえだろう。
このオーラが曲者なのだ。

更衣室に入っていたシャスティルを見送って、カトレアは両手に服を持って僕に問いかけてきた。

「どうしたの？」

「どっちが良いかと思って。」

カトレアは軽く笑んでから、僕に見せるように二着の服を広げた。

「どっちが良いと思う？」

「カトレアの？」

「そうよ。私が着るもの。」

ふむふむ。

カトレアが着るならば・・・どっちが似合うだろうか？

カトレアの右手は露出の多いブイネツクのドレス。これを着れば大抵の男どもは大半が彼女の胸元にいくんじゃないだろうか？

キュルケにも合いそうだ。

女の色気を醸し出すことは間違いないだろうが、不思議とカトレアの場合は清楚さも内包してるように思える。

清濁合わさった、新天地の魅力？とも言うべきか。

対して左手のほうは、白の純白のドレスといった感じである。

露出は特にあるというわけではないが、いささか普通過ぎるように思える。が、着用するのはカトレアだ。カトレアがこれを着た姿を頭の中で思い浮かべて見ると、清廉潔白という四字熟語を具現化したような神々しいとも言えるカトレアの姿が頭に思い浮かぶ。

どちらかといえば、後者がカトレアには合っているだろう。

「左手の方が良いんじゃないかな？」

内心、前者が気に食わないと思ってしまったと言つのも理由の一つだ。

というかそれが概ねの理由だったりする。

カトレアの胸をじろじろ見まくる男ドモ。その姿を思い浮かべるだけで不思議と言ひ知れぬ不安と怒りがこみ上げて来る。

・・・我ながら不思議だ。

なんか嫌だと感じている。

「ふふふ、エンデがそう言つならそうするわ。」

全てを、見通すような目で僕を見るカトレア。

むむつ。なんかスツキリせんぞ。

「待たせたわ!!」

「おう、来たか、シャスティル・・・これはなかなか。」

更衣室から出てきたシャスティルはどっかのお姫様のような美しさを携えてやってきた。

赤色の派手なドレスだが、彼女が着るとそれは決して派手に映らず、むしろそれくらいでなければ彼女の容姿に釣り合いが取れないだろ

う。

心なしか、服自身も“ふっ、良い仕事をしたぜ”みたいな感じがあ
る。・・・気がしないこともない。

胸も大きいほうなので、特に露出が多いわけではないが艶やかさが
どこことなく漂う。

兄としてはやたらとスリットが深めなのがいただけなのだが。

「・・・スリットはどうかならんのか？」

「コレくらいでガタガタ言っただけじゃ駄目だよ、お兄ちゃん。

で、率直な感想を聞きたいんだけど・・・ど、どうかな？」

髪をくるくる弄りながら、顔を赤くしてそう聞いてくるシャステイ
ル。

「大丈夫。綺麗だよ。お姫様みたいだ。」

「・・・ふ、ふふん！」

ようやくお兄ちゃんも私の魅力が分かるようになって来たのね！！

すっごく嬉しそうに笑うシャステイル。

褒められたことがそんなに嬉しいのかな？

「驚くほど可愛くなったわね・・・シャスちゃんは。

ふふふ。私の妹に欲しいくらい。」

カトリアは僕とシャステイルを交互に見ながら、そう言った。

ふふん、僕自慢の妹はさすがのカトリアと言えどやるわけにはいか
ないな！！

「・・・そんな回りくどい言い回しじゃ、お兄ちゃんには伝わらな
いわよ。」

カトレア。」

「残念だけどそうみたいね。」

ん？

2人して阿呆を見る目でどうしたんだ？

視線の先は・・・僕のようだが？

「何を伝えたかったんだ？」

「まあまあ、ほら、お兄ちゃん。ルイズがイジケてるからフォローしてあげないと。カトレアも実妹がイジケてるのをスルーしてちゃだめじゃない。」

「あら？」

そういえばルイズは？」

カトレアと僕が首をめぐるらせて探す。

シヤステイルが視線で指し示した場所へ目を向けると、座り込んだルイズがいた。

「いいもん。私なんて、どうせ胸も無いし身長だって高くないし、エーデ姉様みたいな綺麗なお顔もしてないし、ちい姉様のような優しさも無い私だもん。」

・・・もげればいいのに。」

何かもげればいいのかは聞かないでおこう。

「ま、まてまて！！」

ルイズだって十分に綺麗じゃないか！？」

「エーデ姉様に言われても、嫌味にしか聞こえないし・・・皆私をすっかり忘れてたくせに。」

「ぐぬ・・・それはちよつと、夢中になりすぎたといつか・・・」
「ちい姉様の服選びとシャスの鑑賞に夢中になってたつてことですよ？」

ちい姉様と2人だけの空間なんか作っちゃってさ・・・私がどれほど虚しい思いをしたか・・・」

「ぐむう・・・たしかに・・・それは・・・」

幽鬼のような目で恨み言を言ってくるルイズ。

くそ！！僕にはこれ以上、何も言えん！

カトレア、交代だ！！

「ほ、ほら、私がルイズの服を選んであげるから・・・将来的にはルイズは私よりも魅力的な女性になるはずよ？」

「胸も？」

「え？」

「胸もしっかり大きくなる？」

ちい姉様よりも大きくなる！？」

「えつと・・・それは・・・」

カトレアが鬼気迫るルイズから目をそらす。

この場で気休めを言うべきか迷っているのだろう。
原作でもデルフが言っていた。

「オマエさん、いくつよ？」

「15よ？それが何？」

「そりゃ無理だ、あきらめな。まな板のままだよオマエさんは。」

「溶かすわ。この駄剣、虚無で溶かしてやるわ。」

みたいな感じのやりとりがあつたはず。

僕から見ても、成長の余地は・・・絶望的な気がする。

そんなところに。

「エンデ！」

私も着てみたんだけど、似合う!??

似合わない!?」

「ん？ヒスカ・・・うおっ!?」

ヒスカはやたらと豪勢なドレスを着飾っていた。

一見すると地味なのだが、装飾がかなり凝っていて、職人芸を思わせるドレスだ。

あまりにも細かく、左右対称であるその柄は、僕が魔法を使っても作れないであろう精巧さだった。“いい仕事”と呼べる典型的な例だろう。平民が作るらしいので、これを素手で作ったというのは恐ろしいものがある。そしてそれを難なく着こなすヒスカ。

かつ、今はまずいその自己主張の強い、胸に聳え立つ双丘。ヒスカも決して小さくは無い大きさを誇る。

計算された装飾は、胸によって歪んだ模様すら完成された芸術に見える。

「・・・み、みんなだいつきらいなんだからあああああああああああ
ああっ!」

走り去っていくルイズの姿は至極当然とも思えた。

だいつきらいと言われて、地味にショックを受けたのはまた別のお話。

父上にむやみやたらとだいつきらいと言うのはちょっと控えようかとも思った。

会計を済ませて、ルイズを探しに行く。

ルイズは大通りの端で見つけた。

「ルイズ。気を落とすな。」

「・・・気休めなんて、いらないもん。」

「ルイズは綺麗だよ。保障する。」

いつか体型なんて気にせず、ルイズを好きになってくれるルイズだけのナイト様に出会えるさ。

気休めとかじゃなくて、本当にそう思うよ。僕は。」

サイト君のことだ。

まあ・・・テファのバストエヴォリューションに釘付けになったりしてるところから多少なりとも体型を気にしてるし、ルイズ以外にもシエスタとか、ケティだとか、テファだとか、タバサだとか、姫様だとかにフラグ立てたり、つついキスしたりと気が多いけども根っこではルイズ一筋のようだし、胸を気にするのは男として仕方が無い。

精神年齢で言えば40近くなってる僕ですら、カトレアのネグリジエ姿に反応してしまうときがあるのだから、これはどうしようもないことだろう。

そういう時は、前世でガチムチが好きだったという数少ない女性友達からガチムチ専門誌『ガチに生きる』に書かれていたガチプレイ100選の部分を思い出して興奮を沈めている。

悲しい沈め方だとか言うなよ・・・発散しようにも相手がいらないか

らどうしようもないんだ……。

話がそれてしまったが、男として胸というのはどうしても気になっ
てしまうもの。

そこに年齢は関係ない……みたいだ。

16、17くらいのサイト君は青春真っ盛りの時期。

そんな彼に胸を気にするなと言うのはかなり酷なことだろう。

ただ、彼はルイズを命がけで守れる。

女性にとつて、ナイト足りえるかはその一点があれば十分なんじゃ
ないかと僕は思うわけだ。

多少の余所見、隙は仕方が無い。

キスはどうかと思うが、迫られてついつい流されちゃうのも仕方な
い。

いや、僕は流されないが。

とにかく命を懸けてもいいほどに自分を好きになってもらえる相手
がいるのは何よりも幸せなことだろうし、僕もそんな伴侶を見つ
きたいものである。

「……本当に？」

「ああ、本当だよ。」

ルイズ、君は自分が思ってる以上に魅力的な女性だ。

もうちょっと自身を持っていいと思うよ。」

「そ、そうよね……私にもちい姉様と同じ血が流れてるんだし……
・いずれは胸だって!!」

結局、そこなのかい!?

とはいえ、一つ訂正しておこう。

「ルイズ。」

カトレアの血・・・は関係ない。

君がカトレアの妹だから魅力がある、と言ってるんじゃないよ。僕がルイズはそういう子だ！と見たからそう言ったんだ。」

「え、エーデ姉様・・・」

少し、涙を潤ませて今にも嗚咽をあげそうなルイズ。
ちよっとくさかったかな？

「そして、これがルイズに似合うかな？と思って買ったドレス。帰ったら、着て見せてくれる？」

「も、もちろん！！」

嬉しそうにドレスの入った服を抱えて喜ぶルイズ。

これで多少は自身を持ってくれると嬉しい。

「ありがとう・・・ルイズは私に対して自分が劣ってるっていうコンプレックスを持ってたみたいだから・・・魔法でも女性としても・・・ね。私が何かを言っても説得力が無いし、これで多少は自分に自身を持てるといいのだけど・・・ご苦労様、エンデ。」

カトレアがいつものように笑みを向けてくる。

「別に、苦労なんてしてないよ？

大事な妹分のためだもの。」

「ふふふ、そうね。」

「お兄ちゃんにここまで気を遣わせて、まだ自分に魅力がないとか言い出すようなら、私が引っぱたいてたわよ。」

「ルイズからツンデレを移されたの？シヤス。」

「ば、ばかつ!？」

何言ってるの!?!ヒスカは!?!」

顔を紅くするシャスティル。

確かに、ツンデレがルイズから移ったのかもしれないね。

「ところで、なんでドレスばかり選んだの？」

という僕の今更の疑問は風に流れて消えていった。

このときに気づいて、行方をくらませることが出来ればと悔しい思いをするのはまだ先のことである。

14ページ目(後書き)

今回はタバサとキュルケのあのエピソード。

そのままだと他のゼロ魔のファンフィクション物と一緒につまらないので、色々変えるかもしれません。

15ページ目(前書き)

長くなったので上下に分けました。

あれからさらに2週間ほど経ち、特に何も無く日々を過ごしていたある日のこと。

僕はあれ以来、怖がられて誰も近づくことは無くなった。

ルイズをゼロと呼び始めた馬鹿が出始めたので、そいつらを“軽く懲らしめてやると尚のことであった。”

鉄拳とか流血とかいう二つ名まで付く始末。

不本意極まりない。

一部では僕の外見から取って、妖精とか幻惑のエンデとか呼ばれるようになる。

妖精のような可愛らしさを持つと言う由来と、妖精のような外見のくせして男だと困惑させるところからこのような二つ名も出始めた。
・・・らしい。

ヒスカとシャスティルは厨房で働いており、その職場の人達からの情報だ。

これもまた不本意極まりない。

全く最近是不本意極まりないことばかりだ。

ネグリジエ着させられたり、ドレス着させられたり、一緒に寝泊りすることになったりと・・・本当に不本意極まりない。

「やあ、エンデ。

今日も可愛いね。

ミス・ヴァリエールのお二方もこんにちは。」

「ギーシュか？」

可愛いって言われても嬉しくないと・・・何度言えば分かるんだよ。」

「エーデ姉様が可愛いなんて当然のことじゃない。今更何を言ってるの？」

「こんにちは、ミスタ・グラモン。」

はあとため息をつく僕。

周りの人間が近づかない中、数少ない例外がいた。

それがタバサ、キュルケ、ギーシュ、モンモラシーの4人である。

さすが原作キャラ。

器が違うんだろうな、多分。

タバサはそもそも気にしてないようだし、キュルケはむしろ逆に興味をそそられたみたいだし、モンモンは一応従兄弟にあたるから多少は怯えていても、あれから話していくうちにいつの間にか仲良くなった。

そしてギーシュ。こいつが一番分からん。

これがまたイラつくことイラつくこと。

初めて話しかけてきたときは僕を女として扱って来たからまあ男だと修正したわけだ。

そしたら男装してる女性だね？みたいなことを言ってきたので、違うと言っても聞かないからスルーしてた。

ところがヤツは飽きもせず毎日毎日話しかけてきて……いつの間にか僕の周りに常にいることになっていた。

今尚、彼は僕を女だと絶賛勘違い中……というよりそう信じてやまないようである。

しかもカトレアやルイズを口説きに来ると言う軟派ぶり。

カトレアには回りくどいが、決して首肯しないと思われる断固とした拒絶を受け、ルイズには何も着飾らない拒絶の言葉を受けて尚、こうして僕とコンタクトを取っているのだから恐ろしく打たれづよい男である。

その点だけは同じ男として尊敬してもいいかもしれない。

「で、今日はなんだ？

ギーシュ。」

「いや、君達は一体どんなドレスを召してパーティに参加するのかと気になってね？」

パーティ？

えっと・・・なんかあったっけ？

「新人生歓迎の舞踏会がウルOfMonth・・・すなわち今月の第2週、ヘイムダルの週の週末にあるってことをミセス・シュヴァルーズが言っていただろう？

そのときの君の召し物がどれほどのものか。気になるのは男の性というものだ。

さぞかし綺麗なドレスで着飾るのだろう？」

・・・アホか？こいつは。

男だというのに。ドレスなんて着るわけなからうが。

というか、ドレス自体持って・・・ないわけじゃないけど一着しかないし。

「ま、まさかこの日のために買いに行った・・・わけじゃないよな。うん。」

ねえ、ルイズ。カトレア。」

「え、ええ、そうよ。エーデ姉様。」

目を逸らしながら言わないでくれよ、ルイズ。不安になるよ？

「もちろん。エンデにはエンデに相應しい姿があるでしょっ？」

ドレス姿が相応しいとか言い出さないよね？カトレア。

と、とにかく！

いくらなんでもアレを着て出るとは言わないだろう。

カトレアもルイズも。

・・・無いよね？

「おや、何か買いに行ったのかい？

これは楽しみだ。」

「だから、僕は男だといつとろーが。」

あははは、そういうことにしておいて上げるよ、と言っただけ言って去っていくギーシュ。

ちなみに今の時間は放課後にあたる。

今日の授業はすでに終了済みだ。

「エーデ姉様、今日の晩御飯は何かしら？

今日の食事当番は姉様よね？」

「うん、僕だよ。」

・・・そうだなあ。今日は揚げ餃子を作っても見ようかな？」

「揚げぎょうざ？」

「あら？」

ルイズは餃子を食べたこと無かったっけ？」

「・・・確か、始めて餃子を作ったのはカトレアが僕の家に来たときだから・・・ルイズはいなかったかなあ・・・あれ以来作ってなかったし。」

「・・・ちい姉様ばかりずるい。」

「まあまあ、そう言うなよルイズ。」

腕によりをかけて作ってあげるからさ。

ね？」

「約束ですよ・・・エーデ姉様。」
「おうさ。」

その晩、僕の作った揚げ餃子はルイズに好評。
機嫌が直ってよかった。

次の日。

ギトギト先生の授業がしょっぱなである。

僕にぶっ飛ばされて以来、ギトギト先生は僕を親の仇を見る様に睨むようになったが、僕は素知らぬフリをして何のその。

授業と言う形で言い訳のきく嫌がらせを今日に至るまでやってくるのだが、それもなんのその。
あえて、スルーしている。

「では、これを・・・ミス・レイフォールにやってもらおうか？」

「僕は男です。ミスタとつけて欲しいのですが？」

「そのような顔でそんなことを言われても説得力の欠片も無い。
それよりも早くしたまえ。」

こういう地味な嫌がらせを毎日してくる。

そして、風の魔法の実演もさせるのだ。

水のドットメイジとしては成功してしまうわけにもいかず。
適当に失敗を装っている。

「うむむむむむ・・・」

難しそうにやる演技をする僕。

最初こそ、道化を演じることに楽しさを感じていたが、こつも何度

も何度も実演と言う名の公開嫌がらせを受けていると、面倒になってくるから困り者だ。

学園長あたりに相談しようとも思ったが、告げ口みたいで面白くない。

そして失敗した僕を見て、嘲り笑うギトギト先生。

「ふふん、この程度も出来んのか？」

とんだ落ちこぼれが入ってきたようだな。

他の奴らはこの程度なんてことは無い様にな。

まあ、これより酷いヤツなど平民の方がいくらかマシだと言えるが。

「

カトレアモルイズも怒りを通り越して、幼稚すぎる彼の行いには呆れが見えているらしくスルーしている。

僕から頼んだつてももあるしね。

いずれ飽きるだろうから、下手に相手をしても付け上がるだけである。

「いや、平民同然だったな。

魔法ではなく名乗りも待たずに拳で教師をいきなり殴るような不良生徒だ。

他のものはこのような輩に成り下がるなよ。」

こんな公然とした嫌がらせや中傷を校長あたりが知ったら、今度こそ首になるかもしれないってことが分からないほどの阿呆が良く言う。

ていうか、校長に頼んでマジでクビにしてもらおうか？

でも、こういうネチっこいヤツは逆恨みで何かしてきそうなんだよな・・・名前どおりのギトギトっぷりである。

こいつの嫌がらせが落ち着くまであと一ヶ月つてところかな？
いつそのこと殺せたら良いのだが、こんな馬鹿相手に手を汚すなんてこと勘弁だ。

というか、もと日本人として殺しという手段は最終手段としてできるだけ使いたくない。

たとえ、殺しに関しての敷居が低くても、ね。

「今回の授業はレビテーションとフライだ。
各自、呪文を覚えたらヴェストリ広場へ集合。
いいな？」

と言って、さつさと外へ出て行くギトギト先生。
授業も心なしか投げやりなのは給料大幅カットが効いているのかも知れない。
やる気を無くしたんだろう。

「・・・相変わらずね、あのボコられ教師は。
エーデ姉様になんの恨みがあるって言うのよ！！あの下種は！！」

まあ色々あるんだろうね。

「ルイズ、そういう汚い言葉を使っちゃ駄目よ？」
というカトレアも今にもギトギトを殺しにかかりそうな殺気を振りまいてるんだけどね。

「ありがとう、2人とも。でも僕は大丈夫だから。
そもそも僕は目立つちゃったからね。
ここであいつが僕をこき下ろしてくれるのはむしろ好都合。」

腕っ節だけの無能メイジとして評価されるから。」

他の人がやったら大なり小なり必ず成功するような魔法をわざと失敗することで、魔法を扱うことが苦手だと言う印象をつけることが出来るのはかなり、ありがたいのだ。

「・・・前々から疑問なんだけど、貴方ってどうしてそこまで目立ちたくないわけ？」

「ん？」

あれ？モンモン。

おはよう！」

「モンモンって呼ぶな！！」

モンモンが話しかけてきた。

「いずれ戦争が起こったときのためだよ。

実力があつたら、最前線に置かれたり、徴兵される回数が増えたりとか危険な目に合う可能性が増すじゃないか。

そんなの嫌なもの。」

「貴方って本当に変わってるわよね。

メイジとしての力が無いからって、近接術を学んだとか言うし、徴兵されたくないとか。

普通、メイジならむしろ最前線に出て手柄を立てたいって吼える物よ？

叔母様の自慢の一人息子だって聞いていたからどんな子かと思えば・・・女の私でも嫉妬するほどにやたらと可愛い、平和主義者。

お母様から、火竜の討伐だって経験があるって聞いたわ。

まあ綺麗だけじゃなかった叔母様の息子だから当然とも言えるけど。」

「モンモンも十分に可愛いよ？」

それと火竜の討伐とかそういうのは出来るだけ黙っておいてくれるとありがたい。」

「・・・貴方に言われてもお世辞にしか聞こえないけどね・・・一応礼は言っておくわ。ありがと。」

「私も話に混ぜなさいよ、モンモラシーにエンデ、カトレア様。」

「私にも断りを入れなさい！！ツエルプトーっ！！」

「あら？いたの？

ルイズ。

「ごめんなさい、胸が小さすぎて見えなかったわ。」

「む、むむむ胸の大きさと視界に入るかどうかは関係ないでしょうがっ！！」

キュルケも話に混ざる。

そして、キュルケは毎度のごとくルイズをからかう。

この2人、会うと必ず喧嘩するから困った物だ。

昔からツエルプトーとヴァリエールは恋人を取り合う仲だと聞くから、家同士の仲が悪いのは仕方ないと思うが・・・別にそれを世代を超えて引き継がなくても良いだろうに。

そんなワケもあってキュルケは最初、カトレアともことを構えようとしたのだがさすがのカトレアにキュルケはいつの間にかほんわかムードに引き込まれていたと言う。

カトレアは呼び捨てで良いと言っていたのだが、同じ女として敬意を込めてカトレア“様”と呼ぶようにしたのだとか。

自分以上に良い女には敬称を付けるのは当然のことだとか。

貴族としてのプライドよりも女としてのプライドを大切にしている気のあるキュルケにそこまで言わせるとは・・・カトレアってやっぱり凄いな・・・と再認識したものだ。

こうして学年でも・・・というより学園中でトップクラスの華やかさを持つ女性たちが集まってくると、ギーシュもまた花に吸い寄せ

られえる蝶のようにやってくる。

「レディー達。そこまでにしておかないと、ヴェストリ広場でギト
ーが煩くなるよ？」

早く行こうじゃないか。」

「レディー達と言言葉には僕も入ってるのか？」

「ん？当然だが。」

何を言ってるんだ？君は。

僕は美しい女性を差別することは一度たりとも無いよ。」

「いや、そういう意味じゃなくて・・・僕は男だと・・・まあいい
か。」

もう男と訂正するのは諦めた。

ちなみにギーシュはギトーを呼び捨てである。

女性に対して無礼に過ぎる男に礼を尽くす義理はないだとか。

そのせいで僕と同じくらいギトーに恨まれている。

もしかしたら一人、僕だけギトギトからいびられるという状況で二
人いれば嫌がらせも分散するだろうと、わざと恨まれてるような行
動をしているのかもしれない。

そんな感じを受ける。

・・・本当、こいつって浮気性さえ無ければ良い男んだけどなあ。
その一点が無ければ顔良し、器量良し、魔法良し、優しさ良しとか
なりの優良物件である。

サイトと関わるようになれば平民蔑視の意識も弱くなって、ギーシ
ュが領を引き継げばグラモン領はさぞかし良い領地になるに違いな
いと思うのだが。

そうなるように暗躍しようかな？と思いつつ。

ヴェストリ広場にてレビテーションの練習を開始する。

周りが皆、普通に浮く中、僕は地面から10センチほどだけ浮いてすぐ落ちるということを繰り返して、ルイズは爆発。

カトレアはそんな僕達を見て、飛ぼうとすらしない。

ヴァリエール家の2人の家自体を怖がって、見て見ぬフリをするギトー。

僕には毎度のごとく、適当な罵倒を浴びせて他の生徒を見る。

ルイズに対する生徒の反応は見て見ぬフリである。

僕が“軽く”お話させてもらった成果だ。

「まったく……いちいち悪口を言わなきゃ気がすまないの？あのギトギトは。」

「……そういえば今日の晩御飯は何？」

「そうね……アサリの酒蒸しなんてどうかしら？」

「あ、私、それ好き!!」

もう今に始まったことじゃないので、カトレアとルイズと僕で今日の晩御飯の話をする。

基本的に晩御飯の話は毎日する話題の一つである。

今日の当番はカトレア。

カトレアは僕直伝の和食系を好んで作る傾向があった。

「アサリか……冷蔵庫に入ってたかな？」

「無かったら、厨房から分けて貰いましょう！」

「ちい姉様！」

「あらあら、ルイズ。」

「よだれが垂れてるわよ？」

「じゅるり……あ、あう……」

ソデでよだれを拭くルイズ。

花より団子つてところか。微笑ましい事である。

「カトリア様って自分で料理をするの？」

「ええ、キュルケも食べにくる？」

「ち、ちい姉様！？」

ツウルプトーなんか呼んでは駄目！！」

「あら、いいじゃないの、まな板ルイズ。

胸だけでなく、肝っ玉も小さいのね。」

「ななな、ななななぬあんですつてえええええつ！？」

毎回毎回、あんたは私の胸を馬鹿にしすぎなのよ！！」

・・・ヒステリックだなあルイズは。

いや、胸のことを気にしてるルイズとしては胸に関する悪口だけは聞き逃せないのかも知れない。

「あんた達つてよくもまあ飽きもしないで、そう喧嘩ばかりしてられるわよね？」

「違うわよ、モンモラシー。」

これは喧嘩じゃなくて、からかっているの。」

「どう違うんだい？」

と言うギーシュと同じ疑問を抱く僕。

「私から一方的に相手をしてあげてるだけで、私はルイズを相手にしていないってことよ。」

「はあ？」

変わらないんじゃないか。」

「馬鹿ね。」

全然違うわよ。

喧嘩つてのは同レベルの人間がするのよ？

私とまな板ルイズが同レベルなんて身の毛もよだつ冗談はやめてよね。」

「そ、そそそそれはこっちのセリフでしょうがっ!!!」

「それは貴方が勝手にそう思ってるのでしょ?」

確かにキュルケの言うとおり、ルイズは怒り心頭という感じだがキュルケは単に軽くちよっかいを出しているだけ。

これは喧嘩とは呼べないだろうね。

と、僕達が適当にだべっていると“わあ”と言う歓声が鳴り響いた。

タバサのレビテーションだ。

入り方と良い、速度と良いなかなかの腕だ。

タバサの顔を見るとしまったという感情が微妙に見てとれた。

僕達と同じく手を抜いたつもりが予想以上に上手く飛びすぎたところだろう。

僕の場合、正確には“目立ちたくない”というよりは“落ちこぼれとして実力を隠したい”というのが一番の目的だが、タバサの場合は逆で純粹に目立ちたくないと考えている。

つまりだ。良い方向だろうと悪い方向だろうと度を過ぎれば目立ってしまうのが物の道理。

適度に力を見せて適度に力を抜くつもりが、周りのレベルが思いのほか低いゆえに加減を間違ったところだろう。

タバサ基準でコレくらいが普通と思っていたのが、周りの生徒と比較すると十分に優秀に映ってしまった。

確かすでにトライアングルだっけ?

天才ゆえの過ちというヤツだろうね。

僕はそれを越える鬼才なワケだが。

「“ドット”にしてはなかなかやるではないか。」

と、ギトーが珍しく機嫌良さそうにタバサを褒める。

ドット？

そういえば、タバサもドットってことで実力を隠してるんだっけ。

「クラスの一番年若い少女に負けて悔しくないのかね？諸君。」

そんなことも言い出すギトギト。

そんなことを言ったら・・・ほら。

無駄にプライドの高い坊ちゃん嬢ちゃんの多い、トリスティン貴族のこと。

要らぬやつかみを受けるだろうに。

生徒達の目の色が変わっている。

さすがのタバサも気の利かない無能教師にうんざりしているようだ。表情にそれが出ている。

「どごぞの男女おとこおんなは相変わらず、無能に過ぎるようだが・・・H A H A H A H A H A !」

と僕に嫌味を言うのも忘れないギトギト。

はいはい、分かった分かった。

そうして、授業が終わり。

昼休みになると、タバサに決闘を申し込む輩が出てくる。

ド・ロレーヌとか言う坊ちゃんである。

授業が終わってしばらくしてから言い出したので、教室に残っていた生徒の注目を全てかさらう。

カトレアとルイズはアサリを買いに行った。

前々からヒスカの背に乗りたかつたらしく、アサリが無くて丁度いいってことで買出しに行ったのだ。

ついでに城下町で昼ご飯を食べにいくそうなの。

ヒスカが竜だとばれないように少し魔法学院から離れて変身を解いたのは言わずもがな。

「ミス、貴方に風をご教授願いたいのだが。」

坊ちゃんはそう開口一番、そう言った。

阿呆め。相手の力量すら見極められんオマエには勿体無い位の優秀なメイジだぞ。タバサは。

タバサはというと、シカト。

ですよね。何言ってるんだこいつって感じだもん。

ちらつと目を向けた後はそのまま本に目を戻す。

「人が物を頼んでいるのだ。本を見ながら聞くとは無礼だとは思わんかね？」

ギトギトの子供かな？と思えるような自分勝手さ。

人のフリ見て我がフリ直せということわざを教えてあげたい物である。

オマエも相応に・・・いや相応以上に無礼だぞ、と言ってやりたい。言わないけど。

タバサ、変わらずシカト。

僕もシカトするだろうね。

というか、殴ってる。

殴ればすぐに手の出る野蛮人だ！みたいな風評が出て、近づく輩はいなくなるだろうという考えの下、殴っているだろう。

「なるほど。やはり試合ともなると勝手が違うようだ。飛んだり跳ねたりと言う授業とは別物だからな。」

タバサは本のページをパラリとめくる。

本って良いよね。あのパラリという音がたまらん。

個人的には日本で出始めていた電子書籍よりも、紙媒体の本の方が好きだったりする。

幻想木箱を作った僕が言うのも難だと思っけどね。

「ふん。」

なるほど。君がどうやら私生児というのは本当のようだ。おそらく母の顔すらまともに見たことが無い貧相な家柄なのだろう？

まあ、このような無礼極まりない娘を持つ母親だ。

さぞかし惨めな・・・」

地雷を踏みおったわ、こいつ！？

タバサは本を置いて、すっと立ち上がる。

「おや？やる気になったのかね？」

タバサはそれすらもシカトしてついつと外へと向かう。

ド・ロレーヌとか言う劣化ギトー君もそれに付いていく。教室にいた他生徒も付いていった。

「君のような庶子しよしに名乗るいわれはないのだが、これも作法。ヴィ

リエ・ド・ロレーヌ。

謹んで相手仕る。」

タバサは名乗らず。

僕もギトギトとやりあうときに名乗らないで、無視すればよかった。

「名乗れる名前もないとは……よっぽど後ろめたい血筋のようだね。」

手心は加えんよーいざー!」

違うよ、無礼な輩に無礼を返したまでだろ、多分。

そしてウィンドブレイクを唱えるド・ローレーヌ改めヴィリエとかいう劣化ギトー君。

タバサは微動だにしない。

まあ必要ないよな。

他の生徒は皆々戦々恐々として見守っていた。

劣化ギトーは少し怪しんでいたようだが、ウィンドブレイクを唱え終えた瞬間にやった!という内心が見て取れる。

表情に出したり、棒立ちしていたりと、試合とは名ばかりの試合にっこだが、それに対してタバサは一言。呪文のルーンを唱えると、少しの風でウィンドブレイクの軌道が誘導されて、劣化ギトーにぶち当たる。

あんな力の入ってない魔法じゃ、そうなるわな。

しかもドットクラスの魔法。

トライアングルのタバサからすればそれこそ見戯に等しい。

「うはあっ!?!」

間抜けな声を出して吹き飛ばす劣化ギトー!

そのまま壁にぶち当たり、「げひょっ!?!」という気持ちの悪い悲鳴を上げて倒れこむ。

そこにタバサがすかさず、氷の矢を打ち込んで地面に縫い付けられた劣化ギトー!

タバサがゆっくりと歩み寄る。

「し、死ぬ!？」

こ、殺さないでくれ!？」

た、頼む!!

決闘なんて形ばかりじゃないか!？」

僕とギトギトの決闘を思い出してああ、なると思ったのだろうか？
やたらと体を震わせてビビる劣化ギトー。

貴族同士の決闘とは本来、命を掛け合うものらしいから命を取られ
ても文句は言えないのである。

地面に縫い付けられているため、みっともなく地面に向かって命乞
いをする形の劣化ギトー。

僕はそれに対して笑いを堪えるので必死だったのだが、周りの皆は
本当に殺されるんじゃないか？と顔を青くしていた。

アレだけ馬鹿にしたのだから仕方ないという空気もある。

ところがタバサは彼の杖を拾い上げて、ただ一言。

「あなたの杖。」

劣化ギトー君に渡して去っていった。

親切からとかじゃなくて、杖を持っていたら自分で抜け出せるだろう
から。との考えでタバサは渡したんだろう。

あれだけ馬鹿にされて助けるのは嫌だったんだろうね、タバサも。

それに気づかない劣化ギトー君は単に情けをかけられたと憤慨して
る様子。

タバサは魔法の腕が良く、慈悲深い。

ヴェリエは下劣でみっともない。もとい劣化ギト！。
そんなイメージを作っただけのあくる日の昼だった。

15 ページ目（後書き）

アサリの酒蒸しは今日の”うちごはん”でやってた料理です。
簡単なレシピは以下。

うちごはんは個人的に大好きな料理番組です。

『アサリの酒蒸し』

アサリを入れ、酒と水も入れる。酒と水は比率同じ。

昆布だし（粉末少々

貝が開いた物から撤去

最後に全部纏めて温め直し。

温め直しの際、バターと大葉を加える。

完成。

何か分からないところがあれば、うちごはんのHPを見てください。

（4 / 17 . 放送）

16 ページ目（前書き）

主人公が流され過ぎとか主人公を女として見てるギーシュがキモいという感想を受けました。

確かに主人公が流され過ぎな感があったが、まさかこの僕が読者の予想通りに話を運ぶとでも！？

舐めんなよ！読者様方！！

普通にエンデが女装するとか思ってるんなら、まずはそんなありきたりな幻想をぶち壊す！！

てな訳で16話目ですww

タバサと劣化ギターのイベントから数日後。

いよいよ待ちに待った（？）新入生歓迎会の舞踏会の日である。

会場は賑わい、綺麗な子とダンスをして、あわよくば恋仲にと下心満載の男子生徒は我先にと血眼になって、周りの女生徒に声をかけている。

女生徒は女生徒で自分の魅力で出来る限り良い男を釣り上げるべくおめかしに気合を入れて、優良物件とお近づきになろうと言うこれまた下心満載の……女性はリアルな分だけ尚のことシビアな基準で目を光らせて、自分のメガネに適う相手から誘われるべく、“私声をかけられるの待ってます”オーラを醸し出して、一見平然と座っていた。

そんな中、わっと声上がる一団がやってきた。

カトレアとルイズ、キュルケ、モンモラシーの一団である。

クラスでもトップクラスにあたる美人達が集まることによって、尋常ではない美人オーラが吹き上がり、誰もが声をかけたくてもかけられないという一種の余人を寄せ付けない圧力が発生していた。

そしてそれに後々ながら恥ずかしげに会場に入場する緑と黒、白の影。

言わずもがなドレス姿の僕である。

ここで会場は騒然。いや、騒然を通り越して絶句していた。

会場の誰もがあまりの光景に驚嘆したからである。

その絶句具合ときたら、もしかもしゃというタバサのハシバミ草を食む咀嚼音が会場一杯に広がるほど、と言えばどれほどの物か分かってくれよう。

絶句の理由はもちろん、男子生徒であるはずの僕がドレス姿で来たということもそうだが、それが似合っていると言つのもそうだろう。美人軍団の中でも一際異彩を放つ、圧倒的存在感を持つ姿。我ながら凄まじいと畏怖するほどである。

ただ、何よりも驚きなのが・・・

「む、む、むむむ胸があるじゃないか!？」

ギーシュが驚いた声音で取り乱す。

くはははははっ!

やばい、その驚き様に笑ってしまった。

変わらず静かな会場。

ギーシュの声だけが虚しく木霊する。

その虚しさ溢れる会場の静けさときたらタバサが食む肉を噛み切る音が会場に響くほどの静けさである。

「ほ、本当に女だったのかい!？君は!？」

ギーシュ。オマエは僕を女だと認識してたくせに別にどうでもいいだろう。

そこは。

いや、実はあまりに美しい僕に恐れをなして“彼みたいな存在が男であるはずがない。きっと彼は女だ!女なのだ!!”同じ男として、僕の美しさが全く通用しないなんてウソだ!!”という嫉妬混じりの複雑な思いの元、僕を女として扱っていた・・・扱いたかったというのがギーシュの本音かな?

心なしかホッとしている顔がむかつく。

そう、実は僕は男の娘・・・ではなく。

さらしを巻いて男のフリをしていた男装女。もとい真正銘、女だったのだ！！

超展開に驚いているだろう？

僕もフルーツを弄りながら、自分の脚本に恐れをなすよ。

なおかつ笑いが止まらない！！

ぷくくくっ！あはははははっ！！

アホ面下げてるクラスメイトドモが愉快愉快。

痛快痛快！！愉快痛快極まりない！！

ちなみにこの新入生歓迎会はもちろんのこと上級生も参上している。それはそうだろう。

“歓迎”会なのだから、上級生がこの場にいなければ誰が新入生を歓迎すると言うのだ。

その上級生も開いた口が塞がらないようだ。

変わらず静寂なままの会場。

タバサは再度ハシバミ草に手をつけたようで、ハシバミ草を咀嚼するパリパリという生野菜独特の音を発して胃の中に収めていく。

さつきから見ているとタバサは肉とハシバミ草を交互に食べているようだ。

焼肉をレタスで包んで食べるようなものだろうか？

通な食べ方をする。

「……私だって偏在が使えれば胸を増量して……さらしにしたって……大きすぎ。エーデ姉様はずるい。」

悔しそうなルイズの呟きは幸いにして誰にも聞き取れなかったようである。

ということ、このあたりで種明かしと行こう。

僕が笑ったにも関わらず、会場が変わらず静かだとか静寂なままだと表したのはどうして？と思っただろう。

なぜならば僕は現在、部屋でフルーツと戯れているため、部屋で笑っても誰の迷惑にもならないというわけだ！！

と言うと、オマエ会場にいるんじゃないの！？なのに部屋って！？結局、どこにいるんだ！？ワケが分からないぞ！？と言いたくなるだろうが、どちらかではなく。

どっちにもいるというのが正解である。

つまり、会場にいるのは僕の風魔法による偏在で、僕自身。本体は部屋でのらりくらりと堂々と。

会場入りをばっくれているのだ。

ちなみに密かにカトレアも僕が作った偏在で、現在は自室の22号室でカトレアと2人で料理中だったりする。

カトレア曰く、「他の殿方のお誘いを断るのが面倒なの。」とかぶっちゃけたため、カトレアの偏在も作ってあげた。僕自身、なんとなくカトレアと他の男が手をつなぐのも見たくないというのがあった。というのはカトレアには秘密。

仲良くしてる友達が違う友達と遊びに行く約束をした時のような気分似ている。ようで似てない気もするが、まあ一緒にいいだろう。「他の」ということは誰かの誘いを受けるつもりはあったということ、その誰かとカトレアと一緒に楽しそうにしているところを見たくないってという理由もある。

くそう。

なんなんだ。

この焦りに似た不安は。

エミリアが嫁に行ってしまった時とはまた違うえぐみを感じる。

閑話休題。

まあ、ここまで話せば大まかな話は分かってもらえたと思う。
まず舞踏会に出る際に、カトレアとルイズにドレスを着るようによ
請された。

しかし、僕としては男として女装まではまだしも、女装して衆人環
視の視線を受けるのはさすがに嫌過ぎるということ勘弁してもら
った。

とはいえせっかくカトレアに選んで貰ったドレス。

着ないと言つのはちよつとだけ・・・ほんのわずかばかり良心が痛
んだ。

だったら、僕は着ないで偏在に着せればよくない!?

という妙案を思いつき、偏在に着せるがたら軽くイタズラ心を発揮
して、女体化させて会場を混乱に落としいれようというのが今回の
顛末である。

僕の使う偏在は水も入っており、常時、情報の共有が可能と言う自
立型無線機とも呼べる便利代物と化している。

容姿を変えれば間諜なんかにも使えるし、怪我したように見せかけ
て不意をつくなんてことも出来る超便利仕様である。

ちなみにこのことを知っているのはカトレアのみ。

周りからすれば「オマエ、実は女だったのか!？」と驚くこと間違
いなし。

会場の驚きようがあまりにも面白くてつい声に出して笑ってしまっ
たと言うわけである。

さすがに仲良くしてるキュルケやモンモンには一時的なものだろう
けど、ルイズは“やっぱり・・・でもそれだと・・・”とぼやきな
がら複雑な表情をしていた。

僕を男だといつても聞かないのはもしかしたら何か複雑な葛藤があ

るからかもしれない。

「エンデって悪趣味ね。」

「ノリノリでルイズにもドツキリをしかけましようって言ったのはどこの誰さ。」

「さて？」

「誰でしょう？」

とぼけてケタケタと笑うカトレア。

年を幾ら重ねても、カトレアのこの無邪気な笑いには和まされる。

いつもは着替えは基本的には一緒にしないのだが、今日だけはルイズと僕は……分身の僕は一緒に着替えた。

さらしを巻いていたことにびっくりして、さらしをとった後の僕の胸の大きさにびっくりして、ウエストのくびれにびっくりしてとびつくりしまくっていたルイズの顔が面白かったのは言うまでも無い。もちろんさらしを巻いても分身体にとっては痛くもなんとも無いし、胸の大きさについても自由自在である。ウエストのくびれは胸と比べて相対的にそう見えただけだろうが、ルイズは今にも泣きそうな顔で僕を睨むのだった。

ちよつとやり過ぎた気もする。

ちなみにヒスカとシヤステイルは今日の舞踏会に向けての厨房へのヘルプに入っている。

ももとは“メイドの体”^{てい}だったのに、最近は本当にメイドと化してきている2人である。

シヤステイルと僕は昔は一緒にお風呂に入っていたし、ヒスカは臭いで分かるだろうから速攻でバレルだろうけどね。

「それじゃ、僕は行ってくるよ。」

「大丈夫だろうけど、気をつけてね。」

「うん。今日はまたアサリの酒蒸しだったよね？」

「ええ。ルイズの好物なもの。」

「ちよつと苛めすぎたから、そのお詫びも兼ねて。」

「そう。僕も何か詫び変わりに・・・ルイズ用に石鹸を作るかな。」

その後、僕は二言三言喋って、その場を後にした。
目的はもちろん。

ヴィリエの報復を上手く無効化することである。

カトレアには軽く事情を説明した。

報復する馬鹿がいるかもしれないから、母上に紳士とあれと教育された僕としては見過ごせないうんぬんかんぬんと。

あ、分身体に寄って来る“まるでダメな貴族”。略してマダキがワラワラと寄ってきてる。

・・・面倒だから全部シカトして料理を食わせるとしよう。

とはいえ、あくまでもフリだけどね。

分身だから食べられない・・・と思うし。

おい、なぜ貴様まで混じっているんだ、ギーシュ!?

顔を紅くするな!？気持ち悪いぞ!!

そんなことを分身体に命じて、僕は現在、会場の隅で目立たないように草の影に隠れて“そのとき”を待っていた。

「ねえ、早くやってよ!」

「そうよ！」

早くしないと彼が・・・って何！？あの子は！？

ちよつと、ミスタ・ヴォンバイエがあの子の方にいつちゃったじゃないの！？」

「あの野蛮人に早くお灸を据えてよ！！」

・・・あつ！またあんな胸だけのゲルマニアの女にデレデレして・・・って、あつちの子は誰！？

あの子・・・ミスタ・エンデ！？た、確かに男の子としてはありえないと思つてたけど・・・女だと分かつた途端にあつちにまでも・・・結局胸なの！？っていうか、早くしなさいよ！？

あの2人に搔つ攫われちゃうわ！？」

「急かさなくてくれたまえ。」

手元が狂えば余計な騒ぎを生むのだからな。」

よし。

ヴイリエとそのほかの女生徒を確認した。

僕と同じように草陰からキュルケをじつと見ている。

僕が話題になつているようで、こちらとしてはドツキリは大成功。

笑いを堪えるのが大変である。

恋人を取られた彼女達には申し訳ないが、少なくとも分身体の目を通して映るミスタ・ヴォンバイエとかいう男は止めておいたほうがいいぞ。

こいつ、さつきから僕の胸元にしか目がイってねえ・・・男としては仕方ないと思うんだが、人と話すときくらいは目を合わせる！と思わないでもない。

目を合わせた途端、顔を紅くしてそっぽを向くこいつ。無礼極まりない。

というか視線はもちろんのこと、全体的に気持ちわるい雰囲気を纏っているのだ。

見た目はハンサムで確かに良いんだが・・・内面がアレの方の様だ。

ぼっちゃりだけど内面が意外とイケテルメンズ、略してイケメンのマルコリヌの方が何百倍も良いと思うよ？

“イケテル面”の略ではないと言っておこう。

おっと、いよいよやるようである。

この事件がきっかけでタバサとキュルケが仲良くなったはずなので、僕がやるのは服を切られたキュルケのフォローだ。

母上なら「そんなの待たずに女性を辱めるような下種はとっとと、きつちりかつちり半殺してしまいなさい！キュルケさんとタバサさんと言う女の子の仲はエンデがとりなせば良いだけよ！！」と言うだろうが、さすがにそれはね。

キュルケたちの友情に関係がないなら是非ともそうさせて貰いたい訳だが、これはどうしようもない。

僕がああ2人の仲を取り持つのかも却下。

まるで成功できる気が沸かないから困ったもんだ。

「さあ、食らえ！！」

とか考えてる間に魔法を放つ、ヴィリエ。じゃなかった。

劣化ギトー君。

キュルケの服が舞いとび、壁が舞いとんだ。

キュルケの服に魔法があたると同時に僕の鍊金によって、即席の更衣室を作り出したのである。

ヴィリエ達は驚きで声を上げられないようだ。

そりゃそうだろう。

完全な不意打ちは片方は成功したけど、満足いく結果ではなかったのだから。

そしてもう片方。

すなわち、僕も狙ってきたのだからさあ大変。

会場の分身体の僕へも風を放ってきたのである。とはいえ常に分身体とリンクしている本体の僕があいつらを視認している以上、そんな不意打ちが通じるはずも無く。

分身体はこけるフリをして避けさせてもらった。

そして、避けた風は僕にしつこくまとわり付いていたヴォンバイエのパンツを中身の下着ごと切裂いて、ヴォンバイエ君の下半身を露出させてしまったものだから、これまた驚くだろう。

男の子の男の子。すなわち股間に生えるパオーンな物体を舞踏会と言う場でぶちまけてしまったのだからヴォンバイエ君は泣く一步手前だった。なおかつちよつと粗末なのが会場の失笑を煽った。

周りから見たらイキナリ服を――下半身だけをストリップした変態と映るだろうか？

きつと今日の出来事はトラウマばりの出来事として彼の黒歴史に加わるだろう。

大丈夫。

ヴィリエは僕が個人的にぶつとばしておくから、好きなだけ泣いて、好きなだけぐずるといい。

たとえ女物といえどカトレアに選んでもらったドレスに一筋の傷が入って、スリットが出来たドレスの下^け。もとい白いスカート。そのドレスに傷を付けた、そのお礼のついでだとしてもね。

鉄拳の名は伊達じゃないと言うことを知らしめてあげよう。

タバサのほうへの嫌がらせ。

すなわち本をびりびりに破くと言う（これは僕がすでに本物を回収しておき、偏在による偽者を置いておいたので、本物の本は無事である。ちなみに風のトライアングルであるタバサに偏在だとばれないように、念入りにコピッたので多分気づいてない。）暴虐を見て

タバサは憤慨していた様子だった。

本物は無事だから安心するといい、タバサよ。

ちなみに勝手に部屋に入ったわけじゃないからね？

あいつらが入るところを見計らって、先に侵入、すり替えを行い、手近な場所に本を置いたのはあくまでもヒスカであり、僕ではない！！

さすがに男が女の子の部屋に勝手に入ると言うのはどうかと思った次第です。

もちろん、ヒスカの技量は僕と同等なので、すり替え作業がばれるなんてヘマはしない。

2人を決闘させないといけないという条件を守りつつの完璧なアフターフォロー。

僕って紳士過ぎないか？

そんな自画自賛をしつつ、次の日を迎えると。

僕に突き刺さる色目色目色目色目！！

それをシカトしながら、授業を終え、放課後になる。

今更ながらだが、イタズラの後始末を考えていなかった。

そろこうなるわな。

ルイズやモンモンに種明かしをすると「そんな下らない事をした罰が当たったんだ」と怒られた。

適当に胸に詰め物をしていたと言っても・・・まあ信用できないわな。

普通に胸元の開いていたドレスだし。

ま、これはおいおいというわけで。

本題はここからである。

原作どおり、タバサとキュルケの決闘が始まったわけだが、僕に立会いを求められてしまった。

「あなたなら止められる。」

「この子相手じゃ私も加減できないもの。」

という理由で。

理由かな？これ。

「僕は水のドットで……」

ヴィリエ達と同じく観戦予定だった僕としては遠慮したい。

「貴方は力を隠しているように見える。それに昨日の貴方は偏在。貴方は私以上のメイジの可能性がある。」

「私も同意見ね。それに、魔法の腕が無くてもあの身のこなしなら私達を止めるくらい出来るでしょ？」

友人としての頼みよ。お願い。というか、昨日の貴方は偏在だったのね……どおりで……。」

そこまで言われては仕方ないと、決闘の立会いを請け負った。

教師に頼まないのももちろん、決闘が禁止されているからである。

で、結果は知ってとおり、タバサが勝ち、小細工を見破られた。

そこで僕は言っただけだ。

「ヴィリエってヤツがこの元凶だよ。」

それとミス・エレデーム、ミス・ヴォルガノ、ミス・アタナシアが

考案者・・・かな？」

草むらの影でギクという擬音が聞こえた気がした。

「貴方・・・知ってたの!？」

「・・・ええと・・・まあね。」

「悪趣味。」

そう言わないで。タバサ。

仕方なかったんだよ!!

というか一応、君達のためだからね!?

「ここに呼び寄せたかったんだよ。」

「誰を？」

「タバサはもう気づいてるんじゃないかな？」

「・・・さつきから覗いていたのが、そう？」

「そういうこと。」

ここまで話したところで、草むらからゴソゴソと音が鳴り、人影が一目散に飛び出した。

そのまま逃げようとするがそうは問屋が卸さない。

「タバサ、実は本物の本は僕がすでに回収してる。

それを返すから、代わり・・・と言うのも変だけどヴィリエを譲って欲しいんだ。」

「わかった。」

というわけで捉えた女生徒はキュルケへ。ヴィリエは僕がオシオキすることになる。

「さて、ヴェリエ。いや、劣化ギトー。昨日はよくもやってくれたじゃないか。」

「ぼ、僕はド・ローヌの長子だぞ!？」

そのぼ、僕に何をする!？」

何かすれば父上が黙っていない!！」

何もしないさ。

何もね。

「ひがつ!？」

急に近くにあった壁を殴りだした劣化ギトー。

おいおい、どうしたんだ?

急に壁を殴ったりして?

「ち、ちがつ!？」

か、体が勝手に!？」

「ま、まさか・・・おまえ・・・急に壁を殴りたくなる性癖を持つ変態さんなのか!？」

「ち、違うって言うてるだろ!？」

い、いだっ!？」

あがつ!？」

ひ、ひいっ!？ち、血がつ!？」

壁を殴りつける劣化ギトー君の拳の皮がめくれて、血が飛び散る。

「いや・・・もしかして・・・拳を鍛えてるとか!？」

そうだとしたら、邪魔をしては悪い。

僕たちは退散しようじゃないか。」

いきなり壁を殴りだしたヴェリエにドン引きしてる女子生徒達。
キクルケとタバサも少し顔色が優れない。

「何をしたの？」

「いいや、何も。」

彼が変態だったってだけでしょ？」

「やっぱり、悪趣味。」

「見た目が派手なだけ・・・だと思っよ？」

タバサはなんとなくでも僕がやらせていることに気づいているようである。

もちろん何もしてないなんてことはなく、彼の今の状態は雷神降臨の変則版を彼にかけただけのことである。

体の神経を操って、壁を殴るようにし、水の魔法で皮膚がめくれたそばから拳がなおり、再度拳を打ちつける。

ただただ、いつ終わるともしれぬエンドレス血飛沫タイム。

目の前で自分の拳が壊れて直る、壊れて直るというのを自分の血にまみれながら見せ続けると言う心をおるためのオシオキ魔法である。もちろん痛覚はあるので、ずっと痛みが続く。

ちなみにディイクマジックの変則版もかけているので、体にある程度異常の危機が迫ると同時に魔法が解けるようになっていく。

逆に言えばそこまで追い詰められるまで解けないと言う、肉体的にも精神的にも結構キツイ魔法だ。

我ながらえぐいと思う。

二度と使っまいと誓った今日この瞬間だった。

「僕も予想以上にえぐいことに使ってみて気づいたわ。」

「貴方って結構、怖いよね。」

「・・・悪趣味。」

「人が沢山いる中で女性の衣服を切裂こうとする輩だよ？」

多少敵しいくらいが良いよ。

タバサだって、また逆恨みとかされて本を破られたら嫌でしょ？

勝手に人の部屋に入って、勝手に本を破く。こんなことする連中だよ？

下手に甘くしたらまた逆恨みで、今回以上のことになるかもしれない。

ああいう手合いは体じゃなく、心を痛めつけるのが重要。

その三人も覚えておいてね。ちなみに僕が水以外の魔法を使ったことは秘密。

目立ちたくないから。もし今回のことを色々含めて言ったら・・・分かるよね？」

僕の言葉に千切れんばかりに首を縦に振る女生徒三人衆。

「君達だって、十二分に可愛いし、将来は結構な美人になることは想像に難しくない。

キュルケをひがむほど酷い容姿はしてないと思うよ？」

しっかりおめかしすればキュルケ以上になる可能性もあるし。

君達を選んだのは全て見た目の良い男ばかり。中身は・・・どうしようもない連中さ。あの程度の男に君達が入れ込むのは時間の無駄だと思うよ？」

そんなことするくらいなら僕の彼女になって貰いたい位だ。」

という顔を真っ赤にする三人衆。

これくらい言っておけば彼女達も僻みから嫌がらせ・・・なんてこ

とは無くなるだろう。

ふふふふ、母上！！

見ましたか！！この僕のすばらしき紳士っぷりを！！
褒めて褒めてーっ！！

というか、ハルゲニアは美人美男が多いんだよ！！

「・・・ギーシュ以上ね。しかも天然。」

「・・・悪趣味。」

何がギーシュ以上なのか？
分からない僕である。

16 ページ目（後書き）

偏在を女体化させて、それに女装させる！

前書きで偉そうなことを書いた割りには凡庸だったぞ！とお怒りになる読者様がいたらごめんなさいww

そして、ギーシュは主人公を女として見てるのではなく、そう見たいというのがギーシュの本音。

自分が一番美しい男だと感じていたギーシュですが、そこに自分を超える美男子が！

最強のナルシストたるギーシュにすら敗北を認めさせる主人公の容姿に無意識的にせよ意識的にせよ、男として見たくないというギーシュの複雑な心境もちよつとだけいれて見ました。

ギトーに揃って恨まれたのは自分が唯一認めた自身以上の美男子をギトーなどに馬鹿にされるのが我慢ならなかったからとか、ギーシュは色々複雑な気持ちを抱えています。

前話の主人公の地の文にもそれが伺える一文があったりします。

ちなみにルイズも近い思いで主人公を女として見ています。

元々はギーシュの心境で一話書く予定だったのですが、千文字ほどで終わりそうだから、分かりづらいのでしょうね。

申し訳ないですが、作者の技量ではこれが精一杯。

17ページ目(前書き)

後半の前々から考えていた外伝で遊び過ぎた。

後悔はしてないw w

眠い中書いたので、雑な仕上がりとなっています。

17ページ目

あの事件から1週間が経った。

「やってくれたのう。」

「何のことだか？」

僕は学園長室に呼び出されていた。

「別に罰するつもりは無い。

顛末は分かっているから。どう考えてもミス・ローレーヌが悪いのはこちらも把握している。

ワシ個人としても女性に対する対応とすれば許せん。

貴族として……というより男としても失格じゃ。

脱げるのはまあ良しとしても……じゃなくて、あれじゃ。

あれあれ。なんというか……あれ？」

「じゃあ、なぜ僕は呼び出されたんでしょうか？ オールドオスマン。」

「

このエロジジイ、と思いつつ僕は尋ねる。

というと、オールドオスマンは、はあとため息を吐く。

「やりすぎだと言っくんじゃ。

前にも言ったじゃろうに……オヌシはどうも暴走気味……とい
うか暴走癖があるというか……」

「……つぐ……それは……その。」

聞くところによると、かの劣化ギトー君はあまりの衝撃で自分の部
屋にこもって、ただただブツブツと「ごめんなさいごめんなさい」

めんなさい」と繰り返していると言う。

教員が彼に気づいたときには彼の体は拳から吹き出る血で真っ赤になっており、ただただ泣いて失禁して“ごめんなさいごめんなさい”と呟いて、虚ろな目をしていたとか。

現在ではご飯もろくに食べれて無い様で、げっそり痩せていつてるそう。

・・・確かにやり過ぎたかもしれん。というかやり過ぎた。

学園の宝物庫にある記憶を消すマジックアイテムである日の出来事を綺麗さっぱり消すという対応をするらしい。

いや、その、ね。

僕個人としてはもうちょっと早めに魔法が解けて、適度に心を折るだけのつもりだったんですよ。

言い訳がましいとは思っけども。

意外と人体ってのは頑丈だったことだろう。

心が折れる・・・複雑骨折する前に体が参って魔法が解けると思っていたのだが、体よりも心の方がヤワだったらしい。

再度、この魔法は二度と使うまいと誓う僕である。

というよりも、日本人として・・・文明人として魔法の危険性は十二分に分かっていたつもりなのだが、ここらで一つ気を引き締めなおす必要性がありそうだ。

ここ最近はヘキサゴンメイジへの扉が見えてきて、浮かれていたというのもあるかもしれない。

きっかけは水複合の偏在だ。

「その点は申し開きも出来ません。すいませんでした。」

「・・・はあ、頭が痛いのが。」

生徒といえど貸し一つじゃからな。いくら相手方が最低な行いをしたとしても、宝物庫のマジックアイテムを使わざるを得ないような案件はさすがに庇いきれん。今後、何らかの形で無償奉仕をしても

らつというところでなんとか他の先生方には納得してもらった。

本当ならば退学と言う話もある。元々は相手のやり方が・・・と言
う点もあるからなんとか免れただけじゃ。そこを肝に銘じての。」

「・・・ご迷惑をかけます。」

「別に迷惑だなぞ思っちゃおらんよ。」

その辺の・・・ええ、アレじゃな。トリステインのアレな貴族に比
べたら遥かにマシじゃ。

ただ、やりすぎと言うわけでの・・・自重してくれい。」

「はい、すみませんでした。」

今回の件は猛省ものである。

いつからか安易に魔法を頼る癖が付いてしまっていたのかもしれない。
い。

便利だからと使い続けていたら、いずれ間違つて人を殺しかねん。

今後は拳で語ることにしよう。

そっちの方が人間らしいし、なにより僕好みだ。

「オヌシ、本当に分かっておるか？」

神妙な顔つきをしてしまったであろう僕にオスマン校長が、不安げ
に尋ねる。

「ええ、大丈夫です。」

安易に魔法に頼らず、やりすぎず、拳で語れつてことですよね？

すなわち拳のみで敵の心を折れ、と！」

「あれ！？分かってなくね!？」

「冗談ですよ。自重します。」

「・・・いたいけな老人をからかって楽しいのか？」

むかつくヤツがいたらぶん殴ることに躊躇はしないだろうけど、それはそれ。

ようは加減をすれば良いだけである。

「・・・まあ、ハンニバルの息子じゃいな。このくらいでいいじゃろ。

帰ってよいぞ。」

「はい、本当にすいませんでした。」

なんだかんだで庇ってくれたのだろう、この人は。

エロでなければ、この人は尊敬に値するのだが。

僕がドアに手をかけた時、オスマンに待ったの声をかけられる。

「なんですか？」

「いや・・・その・・・のう？」

これはなんというか・・・知的好奇心と言うやつで・・・決してやましい思いを抱いてるといふわけじゃないということをおことう!!」

「はあ・・・それで？」

嫌な笑顔を浮かべて、オスマンは言った。

「オヌシの偏在の胸をちと揉ませてくれんかの？
ほら・・・本体じゃなくてあれは幻じゃぶっ!？」

さっそく、拳で軽く語って僕はその場を後にした。

「死ね!!」

と吐き捨てて。

本当に。コレが無ければ尊敬に値するのだが。

「た、っだいまあー!!」

「おかえりなさい。」

「あれ？」

カトレアだけ？」

「ルイズ達は特訓よ。」

「ふうん。」

ルイズは最近、爆発魔法をもっと上手く扱えるようにと特訓をし始めている。

真面目なルイズのことだから、爆発以外が使えないならせめて爆発を使いこなしてやる！みたいな考えだろう。

そしてシャスティルとヒスカはお互いに組み手をしている。

シャスティルも護身術としてある程度ヒスカと父上に武芸・・・というより実践式の接近術を教えてもらって会得しており、現在もヒスカと鋭意特訓中で、そこらのメイジにはまず適わない腕を誇る。

接近術に置いては竜の身体能力を持つヒスカを除いて、僕よりも才能があるから困ったものである。というより、僕のナイフの技は全て幼い頃からの努力の結果であり、才能自体はそこそこどまりである。

父上はシャスティルはいずれスクウェアも圧倒するメイジ殺しに育つだろうと言っていた。

我が妹ながら恐ろしい。

父上の弟子であるワルドとの模擬戦も勝ったことがあるというナイフ捌きを持ち、シャスティルも僕と同じバトルスタイルである。

スピードで相手を翻弄し、隙を見つけて的確に攻撃を叩き込む。防御は最小限に抑え、手甲で受け流す。

筋力が無い人間は概ねこれに近いスタイルだろう。そのため、急所が人間と似通っていても、分厚い筋肉に覆われているトルル鬼やオーク鬼、竜などといった飛行生物とも相性が悪い。が、逃げに徹すれば必ず逃げられる実力もある。

「それに私だけではないわね。」

「ん？」

つと・・・タバサ。

なんでここに？」

タバサが我が家の昨日の残飯を文字通り貪り食っていた。

ていうか、それ僕の今日の昼ごはんにしようと思ってたのに！！

「大丈夫、エンデの分は残してあるから。」

「ふうええ！？」

あ、ありがと。」

僕の心配に気づいたらしく、カトレアが補足を入れた。

食い意地の張った意地汚いやつとでも思われただろうか？

ちよつと恥ずかしい。

「あれから、よく来るな？」

「迷惑？」

「いや、別に。」

タバサに本を返すとき、タバサには22号室に来てもらった。

たとえタバサのためで、たとえ本をすり替えて本物を守ったとしても勝手にあったことが悪いことには違いなかったので（一応、ベッ

ドメイクを名目にヒスカはタバサの部屋に入った。)、お詫びがてら料理を振舞ったわけなのだがそれ以来ほぼ毎日、我が家に来るタバサである。

時には朝昼晩、三食食っていく。

あれ？迷惑じゃね？

主に食費的な意味で。

「そんなに美味しい？」

「美味しい。」

学園の料理も美味しいけど、あれは胃がもたれる。

こっちの方が好み。毎日作って欲しい。」

ある意味、プロポーズに聞こえる。

「レシピいる？」

「なんなら教えるけど。」

「ありがたい。でも、作れる場所が無い。」

「今なら出張大サービスでキッチンもお付けしよう。」

「・・・貴方は水と風のメイジじゃないの？」

「一応スクウエア（以上）だからね。」

基本的に四属性全て扱える。錬金もちろん。

僕個人に合う系統が水と風ってこと。」

「・・・驚いた。予想以上。」

少し目を見開くタバサ。

「タバサなら分かっていると思うが、僕は目立ちたくない。このことは秘密にね。」

「・・・目立ちたくないと言う割には貴方は考えなしに見える。」

・・・馬鹿？」

ぐはあっ!？

は、はつきり言うじゃないか!？

「すまん、訂正しよう。」

目立ちたくないと言うのは正確じゃなくて、正確には戦争で活躍したくない、戦争で徴兵されても能力が無ければ危険なところに配属される可能性が減る。だから秘密にしておきたいんだ。」

もちろん目立ちたくないってのもあるけど。

「納得。でも、戦争が起きるとは限らない。」

「・・・まあ、ね。」

起きると僕は知っていたりするのだが、
具体的には来年。

というよりこの国の貧弱さから考えて、なぜこの国が今も表面上と
はいえ平和なのかが理解に苦しむ。

いや、実際はどうとでも出来るから放っておかれてるといふ側面が
強いのだろう。

戦争にはお金や資材がかかる。

もはや伝統だけの弱小国家トリスティンとは言え、やりあえばやり
あつた国もただではすまない。

多少なりとも国は疲弊する。

そこを襲われてはたまらないからトリスティンを相手取るのは一時
保留にしていると言ったところだろう。

実際はガリア、ロマリア、ゲルマニアの三竦み状態で、アルビオン
は空を飛ぶ土地柄ゆえに籠城に置いてはどの国よりも力を発揮する
が、進軍がしづらいという決定的な欠陥を持っている。兵士は全て

空から降りていかないといけないからだ。そのためにはなから論外。ロマリアは坊主どもが持つお布施で集めた資金、すなわちお金の力が侮れないし、ガリアは全ての国でもっとも広い土地を持つ大国だ。安定した土台というのはそれだけで大きな武器になる。

なおかつトップはあの無能王とは名ばかりの切れ者ジョセフ。

ゲルマニアはゲルマニアで平民すら貴族にするというここハルゲニアではかなりの革新的な社会システムで急激な発展を遂げている。いつの間にかレイフォール領の肥溜めや簡単な下水技術が向こうに流れ出しているという噂も聞く。益と見たならば即取り込むその柔軟性といい、勢いだけならばどの国よりも強いだろう。

トリステインがあまりにも貧弱ゆえに平和でいられるとは皮肉なものである。

さつきはロマリアを加えて三竦みと評したが、実際はガリアとゲルマニアの二つがトリステインをどうするかで拮抗している、トリステイン・ガリア・ゲルマニアの三竦みとも言える。

ロマリアのお布施と言う名目で各国から金をむしりとるクソ坊主どもからすれば諦観して、儲けのでそうなところに味方する。からロマリアも実際は除外でいいのかもしいない。

トリステインがどちらに味方するか。ないしは取り込まれるかでこの大陸の力関係は変わる。

このままの状態を保てる、なんてことはまずもって無いはずだ。

なぜならばこのままならば、ゲルマニアは確実に大陸最強となりえる力を持つだろう。

平民が貴族になれるという国柄もあって、トリステイン、ガリア、アルビオン、ロマリアというゲルマニアを除く国の平民達がそつちに流れていつてるし、何もせず放っておけばトリステインを潰して尚、ガリアをも潰せる力を持つことになる。

そうなれば真っ先に雑魚であるトリステインは戦果の炎に包まれるのを想像するに難しくない。

日本の大方のRPGやアクションゲームでもボスクラスの敵を殺す

前に、周りのうつとうしい雑魚から殺す。

それが国レベルで行われると言うだけである。

そもそもトリステインには本来王座を継ぐべきアンリエッタの母であるマリアンヌが王座に座って無いという段階でありえない。

下が馬鹿なら上も馬鹿ということか。

サイトに感謝する前にルイズに国レベルでの感謝をしると言っ
てや
りたいものだ。

彼女が虚無に目覚めるからこそなんとかトリステインは発言力を保
つていられるようなもの。

僕が王なら真っ先にルイズを確実に取り込むべく動くね。

そういう点から考えれば、本来の義務を果たさぬマリアンヌの尻拭
いをさせられているアンリエッタですらこの馬鹿な国の被害者とも
言える。というか、最大の被害者だ。

恨むなら母ととつとと死んでしまった王を恨めよ、アンリエッタ王
女。

とか今まであえて無視していたこの国の現状を考えていると、ソデ
を引つ張る小さな力を感じる。

「さっそく、やってもらおう。」

「い、今から!?!」

「そう、今から。」

「いや、だがしかし・・・僕はこれからご飯を・・・」

「勝手に部屋に入ったくせに。」

「ぐむっ!?!」

それを言われると・・・」

「これでチャラにしてあげる。」

勝手に部屋に入ったのはキュルケと仲良くなるフラグを折るわけに
もいかず・・・かと言って放っておくのは紳士ではないと思った次

第で・・・タバサからしたらヴィリ工達が自分の部屋に忍び込むのを見ていたなら、どうしてその場で取り押さえないのか？という疑問もあるだろうし、それを聞かないのはタバサなりに気を遣ってくれている訳で・・・
軽くこの世界の歴史を知っているとかが言うわけにもいかず・・・しようがないか。

「分かったよ。でもこれで貸し借り無しね。」
「ん。」

こくつと頷くタバサ。
小動物のような仕草に自然と手で頭を撫でてしまう。

「何？」
「あ、いや、つい・・・ね。
嫌だった？」

「・・・別に。」

なんとというか、娘が出来たらこんな気持ちになるのかもね。
こういうおとなしい娘が欲しいものだ。
カトレアも近い思いを抱いたらしく、いつもよりも違うベクトルの暖かさを感じる目をしていた。

「私がお母さんで、エンデがお父さん。
タバサちゃんがその娘。こういふのはどう？」
「ぶはっ！？」

何を言い出しているのっ！？カトレアさん！？
ちよっと顔が赤いけど、恥ずかしいなら言わなくても良いと思っよ！？

「・・・悪くない。でも、お母さんは・・・間に合ってる。」
「そう、それは残念。」

「し、失礼でしょ!?!カトレア!?!」
「あら?そうだったかしら?

「ごめんなさい、タバサちゃん。」

「・・・不快じゃない、むしろ嬉しい。」

「何かあつたら遠慮なく相談してね。」

「・・・そうする。それとエンデ。あなた顔が赤い。
照れてる?」

「べ、別にカトレアとの新婚生活を想像したわけじゃないぞ!?!」
「・・・口は災いの元。」

ぐむはあっ!?!?

僕としたことがこんな分かり易い間違いを犯してしまうなんて!?!
これまた猛省せねば!?!

そ、そもそもカトレアなんて好きじゃなーーーないし!?!

「惚れてないぞ!?!」

惚れてないんだからな!?!」

一緒にいるとほっとするとか、ずっとそばにいたいと思うことは
あつても、惚れてないぞ!?!

というか惚れるとか分けわかんないし!?!

わけワカメだし!?!(??)

好きじゃないもん!?!

好き?惚れた?何それ?食えんの!?!

誰かを好きになったことなんて前世含めて経験ないし!?!

「別にそんなこと言ってない。」

「わ、分かってるよ!!」

カトレアも分かっているよね!?

って何!?

その全て分かっているって目は!?

やめて!!

その目で僕を見ないで!!」

カトレアは頬を紅くして、というか耳まで真っ赤にしてこっちを熱っぽく見つめていた。

「早く来て。そういうボケは2人っきりの時にでもして。」

「あ、ちょ!?!」

ちよつと!?!

ご、誤解を解かないと!?!腕引つ張らないで!!

というかボケてないよ!?!

これが素だ!?!ってこれが素じゃむしろ不味くない!?!」

「ノリツツコミも要らない。」

くそおおおおおおおつ!!

違うんだ!!違うんだからなあつ!!

タバサの部屋にキッチンを作り、軽くレシピを書いた・・・という

か打ち込んだ幻想木箱劣化版を渡して僕が部屋に帰る頃。

赤飯が炊かれていた。

カトレアに聞くと、「なんとなく作りたくなった」とのことだ。

ち、違うんだからな!?!

と言っても分かっていますと行ってそこで話が終わる。

分かっているよ!?!

絶対違う風に解釈してるよ!?!

と騒ぎ立てていると、あまりのやかましさにシャスティルにぶん殴られる僕であった。

外伝！！

マルトーとヒスカの料理バトル！！

さて、ここにはヒスカ・・・実は水竜で韻竜で人間ではないと言う彼女。

一方向かい合うマルトーはここ学園で“理想開発者”の名を欲しいままにする凄腕料理人である。

食べる側の人間の希望・・・その豊富な経験に裏打ちされた実力と知識を持つ熟練の技で希望を・・・すなわち理想を完璧に再現することからつけられた名である。

その料理の腕を飼われてこの学園に赴任したのが料理長マルトーだった。

そんなマルトーとヒスカがお互いを見据えている。

2人の視線は互いに互いを敵と見ている目であり、そこに友情などは皆無。

そう見えた。

こうなつた原因は数十分前に遡る。

「今日もヘルプ助かったぜ！我らが救世料理人ヒスカ！！いや、料理界の異端児、ヒスカ！！」

「ふっ、貴様に今死なれては困るからな。別に構わん。」

マルトーを相手にすると不思議と口調が変わるヒスカである。

そしてヘルプを断つたところでマルトーさんは死なないと言うこと

は一応言っておく。

「けっ、素直じゃねえなあ。おい、シエスタ!!
オレの強敵トモにあのワインを振舞ってやんな!!」

マルトーは付近で皿洗いをしていたシエスタに声をかけた。

「あ、はい。あの、これ。ヒスカさんクラスの料理人の口に合うかは分からないんですけど、実家で作ってるワインです。

お酒は大丈夫ですか?」

「あ、ありがと!？」

シエスタ!!」

私、お酒って始めてで・・・大丈夫かな?」

シエスタ相手だと普段どおりの口調なのに。

とその場にいたマルトーを除く誰もがそう心中でツッコミをいれた。

「大丈夫よ。料理人だし。」

「がははは、そうだろうそうだろう。で、もちろんこれからちよつと飲んでいくだろう?」

「・・・ふっ。たまには強敵トモと友好を深めるのも悪くはあるまい。」

そうして2人が周りのメイドを含めて酒を飲み始めた時。

とあるメイドの一言がきっかけとなった。

「料理長よりもヒスカちゃんの方が美味しい料理を作ってない?」

「あ、馬鹿!!それを言ったら・・・」

酒で気持ちよくなってつい言っではいけない一言を1人のメイドが

言ってしまったのである。

「ああん？

聞き捨てならねえな？

俺が本気を出せばこの小娘ごとき・・・片手で捻られらあ！！」

マルトーもまた酒の影響を受けていた。

そしてこいつもまた受けている。

「ほほう・・・大した自信だな？

ただ、出来ぬことは口にせぬ方が良く・・・とだけ言っておこう。

はつきり言えば私にかかれれば強敵たるマルトーとは言え、指一本で勝てるな。」

「・・・ほづ。」

だったら勝負するか？

ためええとの勝負はまだ決着が付いてなかった・・・いや、あれは完全に俺が負けていた。

が、才能^{センス}だけで勝てるほど料理は甘くねえってことを、先達たるこの俺が教えてやるうじゃねえか。」

「また負かされたいと言うのなら、その希望を叶えてやるのも吝^{ちか}かではないぞ・・・マルトーよ。」

「はっ！上等だ！！内に入れ！！」

料理対決だ！！」

として、急な料理対決が決まり、冒頭へと――回想が終わる。

そしてこの対決の審査員はこの方々。

「さて、実況兼司会進行を勤めさせていただく、メイドのイチゴと

申します！！

今回の料理対決にあたり、審査員の方々をお呼びいたしました。

この至高の料理人対決をジャッジするのに相応しいと僭越ながら、
わたくし私が依頼をしたところ！！

快く引き受けてくださったお三方です！！ではどうぞ！！お三方！！

ヴェストリ広場に机が置かれ、そこには三人分の席が用意されていた。

マルトーとヒスカの作った料理はメイドによって運ばれてくるよう
だ。

ちなみにギャラリーはメイド達のみ。

「まずは一人目！！」

食材の探求者と呼ばれるその料理の腕は食材本来の力を殺さずあじに余すことなく発揮させる料理が得意なエンデ・ド・レイフォール様！！
先日の舞踏会の際のドレス姿はともお綺麗でした！！

お姉様と呼ばせてください！！」

ちよつとおっ！！抜け駆けは許さないわよ！！とか私だって呼びたい！！とかちゃっかり何言ってるのよ！？と他メイドによる野次が飛ぶ。

エンデは何が起こっているのか困惑してるだけである。

なおかつカトレアの嫉妬から来る黒いオーラにたじたじとなっていた。

エンデは平民蔑視の意識が無いので、メイド達にとっても受けがよく、
たまにハンドクリームの試作型や石鹼なども差し入れしているので
かなりの人気を博している。

レイフォール領と言えば石鹼と言うほどに石鹼は有名になっており、
レイフォールの家督を持つエンデからの石鹼にかなり喜んだのがイ

チゴの記憶に新しい。
エンデ本人にその自覚は無い。
エンデが男性だろうと女性だろうと抱いて欲しいと願うメイドたちが多いそう。

「続いてはそのエンデお姉様の妹君！
もとい料理の錬金術師と呼ばれるまでの腕を持つ、義理の妹、シャステイル・ド・レイフオール！！
彼女が生み出す料理はまさに魔法！！
隠し味のレパートリーは千を越えると言う！！
彼女の名言は“食材の数だけ隠し味がある”！！
ヒスカの師匠でもあった人物で、ヒスカと一緒にヘルプに入ってくれる我らの力強い味方！！
というか私もお姉様に妹にして欲しいの！！」

「そっすうだ！！、私だつて妹になりたい！！、私は姉になりたい！！というメイド達の野次が再度飛ぶ。

「最後は一番お姉様との仲が怪しいとされているカトレア様！！
公爵家という身分なんておまけだ！！そのくらいの魅力を持つ彼女に合う女なんて私は知らない！！身分、容姿、性格！！男にとっての理想郷がそこにある！！しかも料理の腕もエンデお姉様と同等だと言っ！！」

誰が呼んだか料理の女神！！彼女の料理にかければロマリアのクソばーちよつといけないオジサマ方すら改心するだろう！！
彼女に嫉妬する女は数知れず！！

でも、なぜだか恨めない！！そこがまた凄い！！」

私なんて！！私なんて！！、神は私達を見放した！！、天は二もつを与えず！なんてのはウソだ！！私なんて一物すらないもの！！と

いうメイドの悲嘆の嘆きがあちらこちらから聞こえる。

「さあさあ、審査員が揃ったところで今回の料理の勝敗を決する案件を決める!!」

単純なことさ。“投票”である!!

どちらがより美味しいか!?

ジャンル!?ざけんな!?

自身にとっての最高の一つを持ってきやがれおめえら!!
ただどちらが美味しいか?

好み?

ざけんな!!

好みすら跳ね除けた至高の一品をもってこいや!!
てなわけでマルトー!!

ヒスカ!!

でてこいや!!

2人の料理人がヴェストリ広場にやってきた。

そして、メイド達によって三人の審査委員に料理が運ばれていく。

「どっちが勝っても恨みっこなしだぞてめえら!!

んじゃま、エンデお姉様!

シヤステイル!!

カトレア様!!

試食タイムをどうぞ開始しちゃってくださいな!!」

こうして特別審査員による試食が開始され、結果は、
満場一致によるヒスカの勝利だった。

「おや・・・こ、これは!？」

ま、まさかまさかのマルトーの連敗が決まったぞ!？」

というイチゴの声が会場に鳴り響き、会場が騒然とする。

「ば、馬鹿なっ!？」

こ、この俺がまた負けたっていうのか!？」

い、一体何が悪かったって言うんだ!？」

なぜ勝てないんだ!？」

と悔しさに涙するマルトーにエンデが口を開く。

「マルトーさん・・・料理は勝つ負ける・・・じゃないんですよ。」

「な、なんだ・・・と?」

「自分の料理を相手に食べてもらって美味しいと感じさせる・・・笑顔にしてあげる。」

それが料理の・・・料理人の本懐だと僕は思います。

あなたが作ったのは魚料理ですよね?」

「ああ・・・たまたまヒスカと被っちまったが・・・余計に納得がいかねえ!？」

どうして俺が負けたんだ・・・どうして・・・」

「簡単な話です。」

ヒスカの料理には食べる人のことを考えた1手間が加わっていたんです。」

「1手間・・・だと?」

「食べてみてください。」

エンデが差し出したヒスカの料理を食べた瞬間、マルトーが目を見開いた。

「こいつは・・・骨がない!？」

骨を取る1手間ってわけか!？」

だが、それくらいなら俺も・・・いや、待て!？」

この濃厚な旨み。かつ後味に残らないあっさりとした脂。

まさか・・・チャシユキヤットか!？」

マルトーが驚愕に目を見開いた。

「ええ・・・一部の高山に流れる清涼な小川に住むとされる魚です。」

「あの・・・内陸部で摂れる魚の中で一番美味しいとされる・・・だが、この魚は骨が異常に多いことで食べることへの面倒さ、かといって骨を取るという面倒な作業ゆえに美味いとされながらも滅多に使われない魚だ・・・」

「ええ・・・その1手間が今回の勝敗を分けたと言うことです。」

「だ、だが・・・1時間という制限時間内で三人分ものチャシユキヤットの骨を取り除くなんてことは・・・それに取り除く際はどうしても身がばらばらになつてしまつてしまう。焼く前にせよ焼いた後にせよ身がボロボロになつてしまえば旨みが逃げるし、油も落ちる。舌触りも悪く・・・まさか・・・魔法を使い・・・いや、それは無いかどうやつたんだ?」

そのマルトーの疑問にはシャスティルが答えた。
ヒスカの師匠でもあつたシャスティルが。

「あの子の凄いところは才能^{センス}だけじゃない。食への執念が一番の恐ろしいところよ。

そして、食べてもらう側のことを常に考え、そのためにはどんな努力も厭わない・・・美味しい食べ物を・・・“食のおいしさ”を求めめるためには何事も一切妥協はしない。

これは私やお兄ちゃん、カトレアも持っている料理人としての誇りよ。

食材になった命に感謝をして、それを最大限に活かす。

チャシユキャットの骨の位置を始めから覚え、それを元に極力余計な傷を入れずにチャシユキャットを調理する。・・・私達なら誰でも持つてる技術ね。」

「んなつ!?!」

マルトーが再度驚愕した。

「マルトーさん。

料理人つてのは結局のところ、美味しく食べてもらうためにどれだけのことをそれまでにやってきたかってだけなんですよ。

ただ単に料理の腕を求めたマルトーさんが、食べてくれる人のことまで考えたヒス力に適うわけが無い・・・道理ですよね。」

「・・・ふふふ、俺つてやつは・・・貴族のわがままな注文を受けるばかりでそんな当たり前のことすら忘れてたつてのか・・・こいつは完敗だぜ。

忙しさに忙殺されて・・・料理人としての誇り・・・食べてもらう嬉しさつてやつをずっと忘れていたんだな・・・目が覚めた。

そんな俺が勝てないなんてのは当然だつたつてわけだ。」

ふっ!と自嘲する様な笑いを出してマルトーは言った。

「いずれ、てめえらをぎゃふんと言わせる料理人になってやらあ、首を洗って・・・いや、手を洗って待ってやがれ！！」

こうしてマルトーとヒスカはこの事件をきっかけに一層に料理人としての腕をお互いに磨きあっていくのだった。

これが後に料理王と呼ばれるマルトーの原点でもあったのだ。

この日の対決がメイド達から巷に広がり、とある国から来たという“グルメじいさん”が彼等と交わるのはまた別の話である。

17ページ目(後書き)

”グルメじいさん”を聞いたことのある人は居ますでしょうか？
サモンナイト4に出てくる個人的に全漫画、全ゲームの中でも結構好きなキャラです。

ここハルゲニアにもいずれ登場するかも・・・しれないですww
知らない人は是非とも知ってもらいたいww
もちろんサモンナイト4に出てくるグルメじいさんとは性格、容姿
が同じなだけで別人という設定で出すつもりです。

18ページ目(前書き)

短めです。

さて、舞踏会も終わり、それからしばらくして半年が過ぎた頃。夏がやってきた。もとい夏期休暇である。

あれから僕が学園の男湯に入ると男子が股間を隠しながらワラワラと出て行くという面白くも、面倒で、便利な現象が起こったり、中には僕の股間を凝視して「一体どうなってるんだ!？」と混乱する姿も見れたり、イタズラ心満載でお送りした半年だったが一結果、僕が女である派と男である派が学院にできたと言う噂もあったりで・・・個人的には愉快的な半年間であった。

男だと思つて近づいてくるヤツには敢えて女の子っぽく振る舞い女性化した偏在と入れ替わつてみたり、女である派と見て近づいてくるヤツには日ごろよりちよつと男らしさを意識して生活してみたり、風呂の誘いをあえて受けたりと、実にからかいがいのある充実した日々であった。

そういうことをしていると、彼ないしは彼女は真面目に本気で雌雄同体なんじゃないか? という両性偶有派まで出てくる始末。実に面白い。

あの舞踏会以来目立つてしまったので、いつそのこと目立つ目立たないをスルーしてとにかくかからかまくろうとした結果がこれである。

オスマンにまたもや“やりすぎじゃ”と注意を受けたのは言うまでも無い。

僕を男だと確実に知っているのは僕の周りの人物と、強制的に裸の付き合いをさせてもらい尚且つ風の偏在も使えると明かしたギーシユ、あとはオスマンと偏在を見破ったコルベール先生のみとなる。

もちろん僕の女体化がなんらかの魔法、ないしはマジックアイテムではないのか？と偏在に向けてディディクトマジックを使ってきた輩もいるが、その辺のドットメイジのディディクトマジック程度に見破られるような偏在を使うはずもなく。結局、分からないままとなっている。

「悪趣味。」

とタバサに言われ、我ながら結構悪趣味なんじゃないか？と自覚し始めたこの頃である。

予後話はここまで終わり、話を進めるとしよう。

夏期休暇にあたり、僕とヒスカ、シャスティルは実家に帰省していた。

最近、吸血鬼が我が領に出現すると言う話で、さすがに先住の魔法を使いつつも身体能力、回復能力が人外の吸血鬼ともなると父上だけでは怪我をする可能性もあり、協力してくれとのことと帰ってきた次第である。

「父上、ただいま！」

「パパ、ただいま！！！」

「ハンニバル！」

私はまた料理の腕が上がったよ！！！」

呼び方で分かるだろうが、上から僕、シャスティル、ヒスカである。

「おかえり。」

「お帰り、エント。」

「お帰りなさいませ、若様、お嬢様、ヒスカ様。」

父上と母上が迎えてくれる。
おじいちゃんもいる。

「魔法学園はどうだ？」

友達は出来たか？」

「うん、個性豊かな友達が出来た。」

「私も出来たよ。」

イチゴっていうやたらノリの良い女の子とか。」

「ふっ・・・私も出来たよ・・・生涯の好敵手・・・すなわちライバルというものがな。」

相変わらずヒスカはマルトーさん相手だと口調がおかしい。

「そうか、それは何よりだ。」

まあ、あらかたエンデの手紙で知っているのだが・・・やはり直接聞きたい。

食事をしながらでも話そうじゃないか。

ツエッペリン。

食事の用意はー」

「すでに出来ております。」

「さすがだな、ツエッペリン。」

「旦那様が幼少の頃からお任せさせていたでいてこの私にかかわたくしりますれば、造作も無いことです。」

旦那様が粗相をしてしまった布団・・・すなわち、おねしよの処理や、おねしよの処理。おねしよの処理まで私は完璧でございます。」

「そ、それは言うなって言っただろうがああああああっ!？」

「おや、申し訳ありません。」

つい口が滑って滑って・・・」

「べ、別にほら、父上・・・誰だっておねしよくらいは・・・ねえ。」

「シャスタイル！」

「わ、私はしなかつたよ!?」

「おねしょ?おねしょって何?」

「ちよ、ちよつと!?!」

「フォローが台無しに!?!」

「そこはウソでもホントでも乗ってくれないと!?!」

「そして、ヒスカは竜だからか?」

「おねしょを知らないらしい。」

「エンデ。」

「母上!?!」

「まさかあのズレた母上からフォローが聞けるのか!?!」

「ど、どんなフォローなのかちよつと楽しみだ。」

「どんなズレ方を・・・」

「女の子に対して、そういう話をフルというのは・・・よろしくな
いわね。」

「しばらく見ない間に紳士の精神を忘れてしまったのかしら?」

「・・・ちよつとこっちに来なさい。」

「久しぶりに私からの説教よ。」

「相変わらず目の付け所が違う!?!」

「そもそもフォローですらなかったよ!?!」

「あぐふつ!?!」

「母上!?!」

「痛いっ!?!」

「痛いよっ!?!」

「首根っこ捕まえて引きずるのやめてっ!?!」

髪の毛巻き込んで、髪の毛引つ張ってるっ!？
髪の毛抜ける、はげるっ!？はげてまうっ!？

「あなた、私はエンデに説教してからご飯を食べるから先に食べて
おいていいからね?」

「あ、ああ、わかった。

その・・・ほどほどにな。」

ちちうええええええええっ!!

もう少ししっかり念を押しておいて!!

最近、母上も年を重ねてきたせいか、徐々に説教臭く・・・長くな
ってるんだよ!？

下手したらご飯は3時間後くらいになるかもしれないのに!？

「すまん。アリイには逆らえんのだ。」

「ぱ、パパの意気地なし!!!!!!」

今更であるが母の名前はアリイ・ド・レイフォールである。

ちなみに彼女の使い魔のミルクィは地球で言うミルクィフロッグと
言う、ホルスタイン柄に十字の目が特徴の白黒のカエルである。

カエルの寿命の関係上、二代目。

体長は約6〜7センチのカエルで、和名がジユウジメドクアマガエ
ルというカエルだ。

日本では体表から乳液状の白い毒液を分泌することからドクアマガ
エルという名前が付いたカエルで、ミルクィフロッグという英名も
この毒液を牛乳に見立てているからであるそう。

あいつも変わらず、我が家は賑やかである。

次の日。

久々の自家風呂と布団はとっても温かった。

ただ、失ったエミリアの温もりが無いことにちよつと涙した。

「ううう・・・昨日は酷い目にあった。」

「お兄ちゃんはデリカシーが無いのよ。」

「ふむふむ・・・女の子におねしょのことを聞くとデリカシーに欠けるとされるのね。」

それに始めて知ったわ・・・人間って寝てる間に漏らす・・・ぷくくく。」

「ちよ、ちよつとヒスカ!？」

「アンタだっておねしょの一つや二つしたことあるでしょ!？」

「残念でした!」

私達、竜は“分かれて”ないからね!!

今の体ならともかく、竜の時にはまずおねしょはしませ〜ん!!」

ああ、やっぱりか。

おねしょを知らないって段階でもしかしたらと思ったんだけどね。

竜は爬虫類と同じ排泄器官を持つてることだろう。

爬虫類の排泄器官は“総排泄腔”と呼ばれるもので、鳥などもこれである。

“総”というだけあって、排泄物がおしっこと一緒に出てくるのだ。鳥の糞に混じる白い部分がおしっこになる。

そのために構造的におもしろしがしづらい。

そもそも動物がおもしろしをすることはおそらくもって無いだろう。

する動物もいるかもしれないが。

ちなみに総排泄腔は産卵管などとも統合されているため、鶏の卵は

糞の出てくる穴から出てくると言う衝撃の事実があったりする。

「なるほどなるほど・・・良いことを知った。」

「お、お兄ちゃん？」

「・・・へ、変態・・・おもしろいかどうかで何でそこまで綺麗な笑みを・・・へ、変態に・・・お兄ちゃんが変態に・・・」

「うおおおおおいつ!？」

な、何を言ってるの!？」

あくまでも知的好奇心をみたー!」

「女の子がおもしろいかどうかの・・・知的好奇心!？」

へ、変態がここにいた!？」

い、いや!ベストオブ変態よ!？」

「ちよ、ちよおおおおおと!？」

ド派手に勘違いしてらっしやる!？」

「だ、大丈夫・・・お、お兄ちゃんが女の子のおしっこを浴びたいとかいう変態的な性癖を持ってても・・・わ、私がお兄ちゃんを愛してることには違いなからっ!！」

どんなお兄ちゃんでも愛する覚悟が私にはある!！」

「そこまでの愛を持っててくれたのは純粹に嬉しいけど、盛大な勘違いだからね!？」

そして、そんな覚悟はまったくもって必要ないって事を声高に宣言して置こう!！」

そんな時、部屋のドアが開く。

「お、お前達はなんつう話をしてるんだ?」

「あ、ち、父上・・・これは別に何でも。」

それで、父上が来たということはもう馬車の準備はできたの?」

という僕の質問につむと頷く父上。

「ああ、行く先はユワツシャー村だ。」

またあの村か!?

あそこの村、揉め事多いな!?

やはり北斗の拳けん的な名前をしてるのが、戦乱せんらんと言っか・・・騒動を呼んでいるんでは無いだろうか?

え?拳けんだろって?

な、何の話かワカリマセン。

と、とにかく名前変えればそれだけで平和になる気がしないこともない。

ラピユタ村とか。

いや、真っ先に火竜山脈よりも先に地殻内の風石の飽和で浮きそう
だ。

止めといたほうがいいな。うん。

「それと、シャスティルには私からのちょっとしたプレゼントだ。」

と言って、父上がシャスティルに渡したのは六望星の紋様が刻まれたナイフだった。

「これは?」

とシャスティルが聞くが、僕には一目見て分かった。

マジックアイテムだ。

それもかなり高度な魔法語マジックの刻まれた・・・僕も知らないルーンが刻まれている。

虚無をのぞいた全属性の魔法が使える僕にとって知らないルーンは無いはずなのだが・・・となると四属性以外のルーンとなる。

すなわち先住の魔法が込められたナイフということだ。
久しぶりに魔眼を使って見てみると・・・やはり虚無の魔法が込められたナイフだ。

「父上・・・一体どこでこれ？」

「ふむ。」

エンデは覚えているか？

ユワツシャー村が大量発生したオーク鬼から被害を受けたときのことを？」

もちろん、忘れてない。

あの日がきっかけでリザレクションを開発したのだから。

「なぜ大量発生したのか？と調べたところ、あのときより数ヶ月前に大規模な地震があった。

その地震で、今まで土に埋もれていた遺跡が浮き上がったみたいだな。

そこをオーク鬼が住処にして人知れず爆殖していたというのが、原因のようだった。」

そんな裏話があったのか。

「別に特別言うことでもないし、黙っていたんだ。

そして、その遺跡へ巢の破壊と討伐の遠征に行った際に見つけたマジックアイテムがそのナイフだ。

いずれはエンデ、オマエにやろうと思っていたのだが・・・オマエは私からあげたコンバットナイフをすでにマジックアイテムに改造していたみたいだし、どうせならシャスティルの護身用にと考えてな。」

確かにソレのほうが良い。

僕のナイフには固定化とブレイドのルーン、フライヤレビティション、ライト、ロック、アンロック、ディディクトマジックと言った、使い勝手の良い沢山のコモンマジックのルーンに切れ味を増すための風のルーン。

最後にサバイバル時の簡単な火種とするべく、火の初級魔法のルーンが刻んである。

マジックアイテムなので精神力を込めて、イメージするだけで使用可能で、野外兼屋内サバイバル(?)ナイフと化していた。

ブレイドに風と火を混ぜて、炎の剣と言ったカッコいい技なんかもある。

小さな頃は欲しかったが、それゆえに自分で作った僕にはあまり必要なくなっていた。

幻想木箱に比べたらちよちよいのちよいである。

ちなみに日常生活で役立つコモンマジックのルーンを刻んだ“メイジの七つ道具”と名づけた僕作成のペンが、かなりの売れ行きをはくしていたりする。

いちいちルーンを唱えなくてもいいと言うことで各国にほそぼそと叩かれない程度に輸出中である。

これもまた平民にも使える様に(多少の練習、すなわち精神力を扱う訓練は必要)、取扱説明書も同封した一般向けの品とレイフォーラ家紋を彫ったプレミア品がある。

プレミア品にはもともとある7つの機能の他に8つ目のシークレット機能である湯沸し機能をつけてあり、これを風呂に入れると暖かい水を作れると言うことで風呂に入ったり、冬場でも暖かい水で洗濯が出来る、平民受けがかなり良い。

この“メイジの七つ道具”に限らずプレミア品は少々割高で買うこと以外で、普通の商品を買ってポイントを貯めると手に入れることが可能。

平民にも優しい仕様となっている。

「でも、パパ。私・・・メイジじゃないんだけど？」

お兄ちゃんが作ったものならともかく、大半のマジックアイテムはメイジにしか使えないんでしょ？」

「それならば、大丈夫だ。」

これはメイジ以外でも使えるようだな。

しかも刻まれている魔法は爆発魔法。

攻撃力不足を嘆いていたシヤスにびつたりだろう。」

そう、このナイフの驚きの効果とはルイズが使うエクスプロージョンを使えることである。

「威力も申し分なしだ。」

固定化を物ともしない威力だから、気をつけないと怪我をするがな。軌道を見られず、着火点に直接打ち込むようだから、初見ではまず防げまい。」

あのチート爆発魔法を使えるナイフ・・・敵に渡つたらと思うと恐ろしい。

あの魔法、相手の体内・・・特に頭を照準に当てたらまず避けられず、即死だと思っんだ・・・。

「しかも対象を任意で決めればそれ以外には飛び火しないと・・・
・恐ろしいナイフだ。」

な、なるほど。

原作でルイズが特大のエクスプロージョンで船を落としたとき、中の人々が死んでなかったように“ を破壊する ”というイメージの元、それ以外には影響しない効果も持つみたいだ。

ルイズがサイトにぶっ放しても彼が死なないのはルイズの“ 吹き飛

ばす、ぶつとばす。でも殺すつもりは無い。”というイメージがあるからだろう。

ホントに便利かつ恐ろしい魔法である。

これは・・・ちょっとロツクしといた方がいいかもしれない。

「ち、父上。

ちょっとそれを貸して。」

「ん？

ああ。分かった。」

軽くルーンを唱えて、ルーンを刻んでいく。

「何をしたんだ？」

「認証・・・って言うのかな？」

ロツクの改良魔法で僕と次に触った人間以外にはこのナイフの魔法を使えないようにしただけ。

ついでに何かとあると便利なブレイドとライトとレビテーション、デイデイクトマジックに火種代わりの火の初級魔法も刻んだからかなり使い勝手が良くなるはず。まあ練習が必要になるけどね。はい、シヤステイル。」

「え、う、うん。あ、ありがとお兄ちゃん。」

恐る恐るナイフを手取るシヤステイル。

ナイフがぼつと光り、シヤステイルを無事認証したようだ。

シヤステイルの顔は思わず漏れたと言う具合の笑みを浮かべていた。まあ、そりゃ平民なのに魔法が使えるとなれば嬉しいよね。

とはいえ、魔眼で見るとシヤステイルの精神力はラインくらい。あまり大規模な爆発は使えないし、他の魔法もそんなに頻繁に使うとすぐ精神力が空になるだろうけど。

「あ、ありがとう、パパ。」

「ふふ、構わん。」

その笑顔が見ただけでもやったかいがあった物だ。しかも、それが護身にも繋がるのだから尚のこと。一石二鳥というやつだな。

今回はエンデとのみ一緒に行こうと思っっているのだが・・・どうせ付いてくるのだろう？」

「もちろん。」

お兄ちゃんたちが危険なのに私だけのほほんとしてられるワケないでしょ。

ヒスカだつて行くんだし。」

ヒスカは使い魔だしな・・・最近バリバリ強くなったとはいえ、やっぱり家において欲しいというのが僕の本音だけれども。

「では、行こうか。」

無理はせずヒットアンドアウェイで相手の出方を見ながら徐々に弱らせていく。

決して無茶はせず、少しでも変なそぶりがあつたら逃げるぞ。いいな？」

「うん。」

「そのときは私が皆を乗せて飛んで逃げるよ。」

僕とシヤステイルの返事に次ぎ、ヒスカの返事。

それに頷き返してから、父上は部屋を出て行き外の馬車へと乗り込んだ。

僕たちも付いてって、馬車に乗り込む。

「留守は頼んだぞ、アリイ、ツエツペリン。」

「かしこまりました、旦那様。」

「エンデ、気をつけてね。それと常に紳士的に振舞うこと。」

わかったわね？」

「分かってるよ、母上。」

こうして吸血鬼退治に出かける僕達。

この先に辛い辛い別れがあるとも知らずに僕はのんきに笑っていたのだった。

・・・ということにはまあならなかったワケであるが。

18ページ目(後書き)

吸血鬼はエルザでは無い・・・予定です。

あと数話挟んで魔法学園編が終わり、サイトが召喚される予定。

本当はテファが出るあたりまでを魔法学園編とするつもりでしたが、かなり長くなりそうなので区切ります。

関係ないですが、今日、作者はナナフシモドキの幼虫を捕まえました。

ナナフシモドキ可愛いです。

ナナフシモドキは九割以上がメスでオスは滅多に存在せず、メスだけで増える単為生殖を行う昆虫です。

餌となる植物も以外と幅が広く、一匹捕まえると累代飼育がそれなりに簡単な生き物でもあります。

ちなみにモドキとつくのは枝に似ているから枝モドキという意味で、ナナフシに似たナナフシではない昆虫という意味では無いそうなの。

19ページ目(前書き)

今回も挿絵あり。

ラフだけど。

主人公はエルザを知りません。

19 ページ目

「ホアタタタタ、ようこそおいでくださいました。
領主様、エンデ様、お嬢様方。」

おなじみのケンシロウ村長が迎えてくれた。
もちろんツッコまない。

「そう堅くなくてよい。

大方の話は聞き及んでいるが、念のため最初から最後まで詳しくもう一度聞かせてくれ。」

「はい、わかりました。」

父上がそう言って、そのまま村長の家に行き、僕たちは今回の吸血鬼事件の詳しい話を聞くことになる。

「普段と変わらず生活していたある日のことです。

とある家屋・・・ここから一番北にある家屋のことなのですが・・・

一番初めの被害者は北の入り口付近にあった家屋に住んでいた初老の夫婦だったそうだ。

夫が干からびた状態で、なおかつ首筋に二つの穴・・・すなわち吸血鬼と思われる傷口を発見して、吸血鬼の仕業であることが発覚した。

それから妻の方は夫を亡くした事によって泣きじゃくり、その日が経たないうちに衰弱死したそうだ。

ろくにご飯を取れなかったことと、歳が歳でなおかつ風邪を引いてこじらせたとのことである。

次の被害者は両親を亡くして、隣の領から逃げ込んできたと言う少年だ。

亡くした原因は貴族に少年が誤ってぶつかった時、両親が庇ってくれ、そのときの怪我に雑菌が入り込み破傷風に。

両親を亡くして途方にくれ、この領にたどり着いてきたときには大層やせ細っていたという。

色々苦労した少年だったが、ようやく人並みの幸せをつかめたと思っただとたんにこれである。

ケンシロウ村長は涙しながら語った。

三人目もこれまた不幸な境遇に遭った女性だった。

もともとはとある隣領の貴族のお屋敷で奉公していたそうだが、彼女を見初めた雇い主がむりやり手籠めにしたとのことである。

その後、子供を授かった彼女は飽きて捨てられ、この地で新しい生活をもったところ子供もろとも血を飲み干されたとのことであった。

合計5人、内1人は衰弱死したというのが村の被害であった。

「ここ最近、やってきたという村人は何人いますか？」

「それなら3人でございます。」

ただ私達も怪しいと思ひ、私達なりに監視をしていたのですが……誰もこれだと言う人はいませんでした。」

「……そうですか。」

父上は彼の話を聞いて、何かを考えていたようだった。

「念のため、その人達に会わせて貰っても？」

「は、はい、それは構いません。」

というわけで、その3人に会う事が決まった。
真正面から魔眼は使わない。

アレは普通に目の色が変わることから下手に警戒されるのを防ぐためである。

この場で戦いになったら村長が巻き込まれるし、下手したら他の民家の人も巻き込みかねない。

おびき出して1人づつってのもナンセンスだ。これもまた警戒させてなんらかの手段を講じられるかもしれない。

ちなみに魔眼のことは家族は全員知ってたりする。

村長がその3人を呼びに言ってる間に僕達は話しこんでいた。

「父上……何を考えていたの？」

「いや……村人の監視と言うのをどこまで信じるべきかと思っ
な。」

「大丈夫じゃないの？」

シヤスティルの疑問はもつともであるが、父上は監視役を請け負った村人がグールなんじゃないかと疑っているのだろう。

「ここに来る前に馬車の中で話したろう？」

グールの可能性がある。

吸血鬼が餌である人間の血を吸い尽くした後自身に自身の血液と先住の魔法を込めて作り出す操り人形だ。

首筋の咬傷が目印になると言われるが熟練の吸血鬼はこの傷も治すことができると言うし、ディイクトマジックでも分からない場合がある。

楽観視は出来ん。

その監視員も監視せねばな。

これがあるから吸血鬼の相手は厄介だ。

シヤスティルとヒスカはすでに隠行術は会得していたな？」

「うん、私達がそれをするの?」

「ああ、お前達には危険だが私とともに3人の新しい村人とやらを監視する。」

1人につき1人だ。

浅眠せんみんは覚えているな?」

「大丈夫よ。」

「私も。というか竜である私は元々出来るしね。」

浅眠とは犬が一見寝てるように見えても、ちょっとした物音で目を覚ますことの出来るように、ぐっすり眠るワケではない浅い眠りの状態を保つテクニクである。

もちろん、これはかなりの練習を必要とした。

僕は3年前からやっていて、ようやく最近できるようになったばかりなのに、シャステイルは一年くらいでできたと言うのが、才能の差を感じさせてくれて悔しい。

「それは重畳。」

エンデには監視員を確認してもらいたい。全てを視認すると言う“魔眼”でな。

出来るな?」

「うん、それはもちろん。」

神様による力が吸血鬼の隠蔽術に負けるってことは無いだろう。

「では、後で村長に誰が監視員をしたかを聞いてその人たちを真っ先に確認。念のため村人も全員訪問して確認することだ。

その後は私達が監視する3人の人間を確認。

これで見つからなかった場合は少なくとも村に入り込んでいるという話は無くなる。

今日の予定はこれだな。

質問は？」

僕は特に無いかな？

「それと、もしグールを見つけたとしても倒すな。

気取られて相手に逃げられかねん。」

「分かってるよ。」

この後、三人に会い、そのまま僕は監視員を請け負った村人はもちろん他の人達もばれないように見て回った。

三人は1人がエルザと言う女の子に、他の2人は好青年という感じの男でガタイの良い方がゴルバット、こう言うては失礼だけでもひよる長い方がバンデットというどちらも名前からしたら吸血鬼みたいな感じで不謹慎ながらもちょっと笑いそうになってしまった。

話した感じはどいつもこいつも見た目どおり。

ヒスカの竜の嗅覚でなんとかなるかな？ともちよつと思っただけどニワトリの血の臭いがゴルバットと言う男から臭ったのみ。

ニワトリのシメ作業を生業にしてるそうな。

一応体をどこかで洗ったと言うことなのか？

そもそも吸血鬼ではないのか。

まだまだ油断は許さない。

村人を魔眼で確認したところ、グールが二体。

案の定監視員がなっていた。

首筋に傷が見当たらないことからかなり力を持つ吸血鬼が潜り込んだみたいで気を引き締める必要があるそうだ。

すくなくとも偽装を出来るほどの吸血鬼がいる。

父上の話によれば偽装が可能になるのは最低でも2000年は生きた個体がいるとのことだ。

もともとの身体能力や経験、彼らが使う先住魔法も相まって、かなりの強敵になるという。

本来なら一個大隊並みの人数の熟練のメイジをつれて討伐できるかどうかの話だという。

王都に応援を要請するべきらしいが、その間に被害者は増えていく。なおかつその間に逃げられるとまた別の村で被害が出て、グールの特定が困難になる。

そうなると面倒だ。

相手は2000年の経験がある老獪さを持つ強敵。

確実に逃げられるだろう。

トリスティンのプライドばかりが先行するアホには荷が重い。

そう父上も考えたらしく、この四人で不意打ちを行い一気に勝負を決める作戦となる。

これで決められなかった場合はヒットアンドアウェイで叩く。

とはいえ目的は討伐ではなく、撃退。

決して無理はせず、近くに寄らず、血を吸われない様に戦って撃退する。

殺せば殺すという形になるのだ。

これは現状の戦力上致し方ないことだった。

僕が周りを気にせず1人で戦えば確実に殺せるとは思っただが、過信は禁物である。

グールを数体、外の森に待機させているかもしれないし、実は屋根裏に一体仕込んでおいて村人を人質に取る・・・とか色々考えられる。

相手の虚を取るために逃げる際、自ら腕を千切って腕を爆発させるとか・・・15年生きた僕ですらそういうことを考えられるのだから

ら、搦め手を警戒するのは当然だ。
いや、前世を含めると30は普通に越えてるんだけどさ。

不意打ちで仕留められなかった場合、感覚の鋭いヒスカが村の防衛兼監視。

残った三人で吸血鬼を村から叩き出し、相手が逃げて“くれる”まで追い込んでいくことになる。

“くれる”・・・そうだ、逃げてくれるのを待つというのがこちらの現状。

はつきり言って、情けないったらありやしない。

逃げればもちろん別の被害者が出てくる。

逃がすわけには行かない。

でも、逃げてくれなければこちらが返り討ちにあう可能性がある。
最近の鍛錬不足が悔やまれる。

せめてヘキサゴンメイジになっていれば・・・と今更後悔しても遅い。

少しテンションが落ちたが、3人を確認しようとエルザという少女すなわちシャスティルが監視をしている少女を魔眼で確認すると、
ビンゴである。

本体である僕と交信が可能になった偏在・改を通じて父上とヒスカに連絡。

四人が揃ったところで、一気に潰しに行く。
役目を終えた偏在・改はグールを潰しに行く。

一見すやすやと眠っているように見えるが、全てを視認する魔眼に

は狸寝入りなど無意味。

油断せずに。と小声で忠告した後、四人での一斉攻撃を開始した。

「あぐつ!?!?」

バカアアアアアンツ!とド派手な音を発てて、家屋ごと吹き飛ばされた少女。

片腕が千切れ飛び、はらわたがちよつとはみ出ているのを視認した。見て目幼女が怪我したところを見るのは結構、心が痛い。

完全な不意打ちなのに、シャスティルとヒスカの攻撃を受けて死なないとはそこそこやるらしい。

首が繋がつてるとは凄い。

そのまま家屋を吹き飛ばした父上と僕のダブルエア・ハンマーによって村はずれに吹き飛ばされる少女。流血を吹き上げながら吹っ飛んでいく様は痛々しい。

「ちよつと。」

お兄ちゃん、パパ。

どういうこと?

なんで攻撃しないのよ!?!?」

とはいえエルザという少女の首が繋がっているのは僕達、父息子が攻撃しなかった・・・いやできなかったこともある。

「その・・・こんなたいけな少女を・・・と思うと気が進まなか

「たつていうかね？」

「エア・ハンマーでなるだけ傷を付けずに村はずれに吹き飛ばしたかったというのが本音と言うか・・・なんというか。一応、殺すつもりはあつたよ？」

「ひ、ひつどおおおおおいっ！！」

「私達だつてそうに決まつてるでしょ！？」

「自分達だけ手を汚したくないってのはちよつと卑怯よ！！」

「うぐ、それを言われると。」

「ち、違つんだよ！？」

「一応、やむを得ない事情があつてでね！？」

「ちなみに現在、吹き飛ばしたエルザを高速移動しながら追いかけて。ヒスカは村で警戒中。」

「3人がザザザと車以上のスピードで併走する姿はちよつと怖い。というか、人間って鍛えればコレくらいは出来るようになるんだね。」

「いや、母上が・・・」

「いや、アリリイが・・・」

「とにかく、父と息子は同時に言い訳をした。」

「ママがどうかしたの？」

「しようがないんだよ。」

「だつて・・・」

「女の子を斬ろうとすると母上の顔がフラッシュバックして・・・その、紳士たるもの女の子を傷つけることはいけないという刷り込みが・・・その、ね？」

「私も右に同じだ。」

そういうと、アホの子を見る目でこちらを睨むシャスティル。

「いや、でも……戦わないと殺されちゃうんじゃない?」

「いや、でも……女の子を傷つけると母上に殺される気がする。」

「私も同じ気持ちだ。」

「さすがにママだって……そこまではしないとと思うけどな……いや、するかな?」

……多分、そこまで馬鹿じゃないわよ。

せいぜい……例えばのエルザって子を殺さなくてはいけないとしても、説教くらいでしょ?」

「理不尽だと僕は思う!」

「わ、私も同じ気持ちだ!」

「私もそう思うけど……感情と理屈は違っていてことでしょ?」

わかるようなわからんような。

「ただ、少し吸血鬼の体を見てみたいってのはあるかな?」

知的好奇心がうずく。

特に血を吸うと言う牙の仕組みが見てみたい。

不老とも言われる吸血鬼の細胞がどうなってるかも見てみたいし。

「お、お兄ちゃん……その……ろ、ロリコンはちょっと……」

「……は?」

い、いや!?

べ、別に違うぞ!?

そういう意味じゃなくてな!?

あくまでも体の仕組みがどうなってるかを知りたいだけで……」

「体の仕組みって・・・も、もしかして・・・おしっこをぶっ掛けてもらうためには体をくすぐればいいのか・・・女の子の体のツボがどこかということ・・・吸血鬼が人間じゃないからってことを理由に壊れるほどに試しまくる・・・そして夜な夜な鬼畜なプレイを・・・だ、大丈夫・・・わ、私は例え鬼畜プレイでも・・・お、お兄ちゃんなら受け入れてみせる・・・」

「またおしっこの話!？」

だからあれは違うと言うに!!

そして僕は鬼畜じゃないからね!？」

「幼女のおしっこをご所望とは・・・レベルが高い・・・けど!! わ、私がんばるからね!!」

「どどん話がねじれていく!？」

というか、人の話聞いてくれる!？」

がんばらなくていいから!!」

「そ、それは・・・私の物じゃどんなにがんばってもぶっかけて貰うのには適さないってことなの!？」

・・・せ、成分的には同じはずなのに・・・幼女と言う付加価値が出来た瞬間に私のおしっこじゃ満足できなくなったの!？」

「シヤステイルは僕を変態に仕立て上げてどうしたいの!？」

というと。

「冗談よ。」

お兄ちゃんが最近、カトレアと良い雰囲気だったから・・・私をほったらかした罰ね。私がメイドの仕事をしてる間にイチャイチャして・・・甘酸っぱい、ラブコメ学園生活を送っていたんでしょ!？」

「そんな風に見えた!？」

「ほらあ!?!」

「い、いや!」

別に僕はカトレアを好きでも何でもないからね!？」

「じゃあ嫌いなもの!？」

「き、嫌いと言うわけでは……なんというか……暖かいと言っ
か……一緒にいたいというか？」

「の、ノロケなんて聞きたくない!!」

「しょ、正直に言っただけだよ!」

「の、ノロケとか……じゃないし!!」

「顔を紅くしながら言っても、説得力無いよ!!」

と、軽快に僕達が言い合っていると。

「ねえ、そろそろ私をシカトしてアホ話するのやめない?」

エルザからそういうご注意を受けた。

とっくにエルザの場所には着いていて、そこで言い合っているの
ある。

怪我まで治ってしまった。

せつかくの緊張感がシャスティルのせいで台無しになー

「お兄ちゃんのせいで吸血鬼に馬鹿にされたじゃない!!」

「ぼ、僕だけのせいじゃないだろ!？」

「うるさいな!!オシッコフェチ!!」

「人聞きが悪過ぎない!？おしっこからまず離れて!？」

また言い合いが始まりそうになるのを父上が拳骨で止めた。

「いだっ!？」

「あうっ!？」

「いい加減にしないで。」

それを見てエルザはため息を付く。

「はぁ・・・こんな馬鹿な貴族たちは始めて見たよ。」
「し、失礼だな。」

「・・・まあ事実だが。」
と、とりあえず、話を聞こうか？

「・・・話すことなんて何も無い。」

「人の血を吸い尽くすほどに大食漢だとは恐れ入る。」

「・・・あれは・・・私じゃない。」

ん？

どういうことだ？

まさか、2人・・・ま、まずい!?

「父上!?!」

「ああ、わかつてがはあっ!?!」

父上が目の前でいきなり吹き飛んでいく。

そのまま近くに生えていた大木に叩きつけられる。

「っなっ!?!」

横合いからの敵の攻撃だ。

あれで死ぬほど父上はヤワじゃない。
すぐに動揺を殺す。

次の狙いは僕かシャスティルだろうから。

「ゴルバットさん・・・あんたも吸血鬼だったんだな。」
「・・・まあな。」

それにしても驚いたぜ？
どうやってゴールを特定したんだ？」
「言うわけ無いでしょ？」

そこに立っていたのは筋骨隆々の男。
ゴルバットだった。

「まあ、そりゃそうだな。

とはいえだ。これで一番厄介であろう男は潰した。
残りは女のみ。

どうする？」

「・・・倒すだけだ。」

そして僕は男だ。

「オイオイ・・・それが可能だと思ってるのか？」

「どういうこと？」

「誰が・・・2人だけ？と言ったんだ？」

仮に俺達を殺せるほどの力をオマエさんが持っていて、手を出せば村人を殺す事だって出来るんだぜ？

あまり下手なことはしなさんな。」

・・・なるほどね。三人とも吸血鬼だったわけか。

まんまとしてやられたな。

1人しかいないと思いついた故の敗因か。

3人とも確認すべきだった。

「バンデットのヤツは狡猾だからなあ・・・くくく。

とはいえ、あいつには血のこだわりがねえのがいけねえ。

そのおかげで、俺とエルザは貴族の精神力がたっぷり滲んでいるで

あろう貴族様の美味しい血を飲めるってワケだが・・・特にこの前に食べた子持ちの女はかなり良かった・・・いやぁ・・・やっぱり女は熟年のに限る。・・・まあ子供も頂いたわけだが。貴族の血が入ってたみたいでなかなか良かったぜ。」

その時の味を思い出したのか、恍惚とした表情を浮かべるゴルバツト。

「・・・一つ聞きたいんだけど・・・あんたらって一回にそれだけ吸わなくちゃ生きていけないわけ？」

「まあな。」

と、言いたいところだが、そうでもない。

俺達は獲物を殺すまで飲まないと気がすまない類の狂人さ。

吸血鬼の中でもとびつきりのな。」

「わ、私まで貴方達と一緒にしないで。」

ゴルバツトの言葉にビクビクしながらエルザが修正をいれる。

ゴルバツトはそんなエルザをイキナリ蹴りだした。

「ひぐつ!?!」

「黙れよ、エルザ。」

吸血鬼の落ちこぼれが何をほざいてやがる。」

「う、ごめんなさいっ!?!」

も、もう言わない・・・がつ!?!」

もう・・・いわないから・・・」

ドカドカドカと何度も蹴りを叩き込む。そのたびに少女の体が気味悪く震える。もちろん。

「あ？」

「どういつつもりだ？」

「どうもこうも。」

「殺すつもりだけでも？」

僕はゴルバットという男を気づいたら殴っていた。

いやはや、殴り易く殺し易くてよかった。

話を聞く限り、エルザという少女には話し合いの余地がある。

紳士でありながら、今回の事件を解決できそうなことに僕は自分でも分かるほどに獰猛な笑みを浮かべた。

雷神降臨を発動する。

> i 2 2 5 5 4 — 2 2 3 8 <

「もう一回、言ってくれねえかな？」

わかんねえようだから言っておくが、村を人質に取られてる状態で・

・なんだった？」

「殺すって言ったんだよ。」

わかんねえようだから言っておくが。シャスティル、手を出さないでね。

こいつは僕がやる。身のこなし的にもおそらく、バンデットって言うほうが200年生きたやつだろう。ヒスカー1人じゃ荷が重いかもしれないから、援護に行つて。

無理はしないようにね。」

「お兄ちゃんもね。」

僕の言葉におとなしく従うシャスティル。
シャスティルも同じ判断をしたのだろう。

「・・・いい度胸だ。」

妙な魔法を使うようだが、無駄だったことをがはっ!？」

瞬時に距離を詰めてどてっばらに拳をめり込ませる。

そのまま吹き飛ぶゴルバットをすぐに追いかけて追い討ちで叩きつける。

今度は地面にめり込むゴルバット。

そして土魔法を使って拳を土で包んだ。

そのまま錬金をして、直径30センチの鋼鉄に変えた。

「・・・くらいな。

アイアンナツクル!!」

「ぐがはっ!？」

さらにめり込み、陥没するゴルバット。

少し距離をとって、再度拳を構えて、火の魔法で拳を包む鋼鉄を赤熱させる。

拳の内側には焼けど防止に水を挟んである。

なおかつ痛覚遮断。

溶け出していく鋼鉄が地面を焼き、ジューツと音を発てる。

手を薄く包むくらいまで鋼鉄を溶かし流すと、赤熱した右手が完成する。

「見せてあげるよ。

僕のネタ技を。」

「ぐう、ぐうぐ・・・」

まだ上体を起こしているところのゴルバット。
結構効いた様で、なにより。

潰すと同時に体の内側から火の魔法できつちり焼き焦がす。

肉の焼ける香ばしい臭いがあたりにたちこめ、僕の腕が貫いた傷口から火が吹き出る。

そのまま体の穴という穴から火を噴出したゴルバットは物言わぬ屍と化した。

「ああ・・・熱かった。」

痛覚が無いとはいえ、ある一定以上の痛覚をなくしているだけで暑さは感じる。

ヒスカとシャスティルの援護に行きたいが・・・蹴られた衝撃で失禁し、気絶したエルザという少女も放っておけないし、父上も治さないといけない。

無事でいてくれよと思いつつ、少女と父上の介抱をする僕だった。

19 ページ目（後書き）

エルザを主人公は知りません。

作者も知りませんw w

タバサ外伝は読んでないんです。

他のファンフィクションで作者は知ったわけです。

っーことで他のファンフィクションをちよちよいと参考にしつつ、オリジナル展開でいこうと思います。

主人公は挿絵でニーソを履いていますが、これはニーソではなくハイソックスですよ!？

勘違いしないでよね!! w w

まあ無いものとして扱ってもらって構わないです。

20ページ目(前書き)

シャスティールとヒスカが頑張ります。

ヒスカは苦戦していた。

バンデットという男がいきなり襲い掛かってきたのは少々驚いたが、ハンニバルから動揺や戦鬪面以外での考え事は相手を叩き潰してから考えるという基本を叩き込まれている。

慌てずにバンデットが持つ剣を自身が持っている刀で受け流し、弾き、斬り返した。

この刀はエンデが試行錯誤をして作った物であり、エンデが言うには斬れ味だけを追求した片刃の剣だと言う。

実際、初めて使ったときは驚くほどの切れ味を見せてくれて、それ以来私の愛刀と化している。

エンデのペンタゴンクラスの固定化をかけているため、従来の刀ならば相手の攻撃を受けるのはタブーとされていた剣だが、問題なく防御にも使える。ある意味、最強の剣だ。とも言っていた。

「ほう。」

私の剣を捌くとはね。

なかなかの腕を持つようだ。」

「複数と一緒に人里にやってきたってワケね。」

「ふむ、まあそうなる。」

グールを潰し、エルザを吸血鬼と見抜いたところまでは良かったが、
・・複数入るとは思わなかったか？

いや、一人残したところからしてその可能性も視野に入れていたのかな？」

「どうでいいでしょ、そんなこと。」

「確かに、こうなってしまうた以上どうでも良い事だな。」

まあ許せ。この歳になると刺激が少なくてな。ちよっとしたことだ

も知りたがりになつてしまつ。」

のらりくらりと会話しているように見えるが、この間、ヒスカとバンデットは100を越える剣戟を繰り広げていた。剣と剣がぶつかり合う、金属音が鳴り響く。

「良く、食らいついてくるものだ。

とはいえ、身体能力でなんとか・・・と言つたところだな。」
「くうっ!？」

200年以上の経験は伊達では無く、詰め将棋をするようにヒスカを追い詰めていくバンデット。

ヒスカの体に傷が増えていき、血が飛び散っていく。

時にはわざと隙をみせ、時にはフェイントを入れ、時には魔法を、離脱をとあらゆる手を使ってヒスカを追い詰めていく。

「これでトドめだ。」

バンデットはそう呟いて、ヒスカの心臓目掛けて剣を突き出すが、その剣は“翼”によつて阻まれた。

「っ!？」

「隙アリ!！」

「ぐがあっ!？」

突然のありえない光景に虚を突かれたバンデットは袈裟切りを受け、尚且つヒスカの馬鹿力による拳を顔面に受け、吹き飛び、地面を何度かバウンドして木に叩きつけられた。

「がはっ!？」

そして、さらにヒスカの追撃は続く。
ヒスカの口腔から直径30センチほどの水球が発射される。
それが次々とバンデットの体に着弾し、圧縮された水が小規模の爆弾として爆ぜる。

「ぐうっ!？」

「ちょ、調子にのるな!!」

バンデットは向かってくる水球を切り落としながら距離を詰め、近距離で炎の魔法を発動させた。

「フレアバーストツ!!」

だが、その炎は突如出現した太い竜の腕に阻まれ、ヒスカの体には届かない。

そしてその竜の腕がバンデットをなぎ払う。

ボキボキと肋骨の折れる音を聞きながら、バンデットはまたもや地面に体を打ちつけながら、近くにあった大木にぶち当たったところで止まった。

「ごほっ!？」

「がはっ!？」

「ごほっ、ごほっ。」

「き、貴様・・・人間じゃないのか？」

「別に誰も私が人間だなんて言っていないじゃん。」

「貴方が勝手に勘違いしたただけでしょ？」

「普通、初めて出会った人間を竜だと疑ってかかる人間はまずいないだろう。」

それはちよつと難しい。

「部分的に偏在を解くとは・・・“大いなる意思”の力を使いこなしているな・・・人間で言うところの先住の力だが・・・それに先ほどの水球。かなりの量を圧縮した水のプレスだ。

・・・貴様ほどの水韻竜がなぜこんな場所にいる？

いや、ヒレではない翼を持っていたことからして・・・水竜の中でも唯一、空を飛べるといふ天海竜か。」

「そこまで分かるの？

2000年生きてれば、確かに知つてもおかしくないか。」

「・・・これだから人生は止められぬ。

時たまある予想外。奇天烈なこと。これゆえに生きている意味があるというものだ。」

「・・・変態ね。」

「そうなるな。」

まあ・・・こういう人生も悪くない。

そしてまだ死ぬつもりも無い。」

バンデットはそういふと、おもむろに森の方へと目を向けた。

「私のコレクションを見せよう。」

奥の手でもある。」

「・・・この臭いは・・・っ!？」

森のほうから地響きが鳴り、土が盛り上がって村のはずれであるこの場所はもちろんのこと村全体に粉塵が舞う。

「紹介しよう。」

私がつっていたグル・・・1000体を犠牲にしてまで手に入れた・・・地韻竜。

グランドブレイズだ。常に大地を介して私と共に居る最強最悪の我が分身。

それを倒せるか!？」

「天地竜!？」

そこに出てきたのは一つの屋敷並みはあろうかという山一つ分の茶色い外甲に包まれた巨大な竜だった。

「くくくくく・・・あはははあははあははははっ!!」

さあ、これをどうする!？」

私が殺した天地竜の死体を使い、なおかつ人間の扱う金属、さらには私のそれまでのグールコレクションの各部位を組み込んで作り上げた、最強の人工竜でありキメラ!!

グランドブレイズ!!

貴様程度の幼竜にあれを押さえることが出来るか!？」

これは私でも辛いものがある。

でも、これだつて術者を倒せば・・・小回りがきかないであろうあの化け物は捨て置く!!

「私を倒す算段か？」

無駄無駄無駄無駄!!

私を倒したところで止まらんよ!!

一度暴れだしたアレを止める術は私が待ったをかけるか、下した命令を達するまでは止まらん!!

私は殺されても撤回するつもりはないし、拷問も200年の内に慣れている!!

無駄だぞ!!」

「な、何を命令したの!？」

「村を潰せ・・・だ。」

言うまでも無いだろう!?

ほら、のんびりしていいの!?

貴様のような韻竜がどうしてこんな場所にいるのかは分らんが・
・なにせよ村人を助けるために来たんだらう?

早く止めねば大惨事になるぞ!?! いいの!?!

「・・・こ、このっ!?!」

「貴様がグランドブレイズを相手にしてる間に私は悠々自適に逃げ出すとしよう。」

「ま、待ちなさい!?!」

優雅に一礼して、余裕綽々で“歩いて”逃げていくバンデット。

捕まえたくてもグランドブレイズが村に向かっていて止める
なければいけない。

そんなに距離が離れてもいないし、意外と素早い。

「くそっ!?!」

ヒスカは偏在による変身を久しぶりに解いて、グランドブレイズと
呼ばれた人工竜を組み伏せる。

が、大きさにいかに大きいヒスカといえど、グランドブレイズの
二分の一しかない上に元々は空を飛ぶ体であるヒスカには地竜ほど
の馬力や腕力は無い。

大して速度を変えずに突き進む、グランドブレイズ。

『とまれっ!?!とまれっ!?!とまりなさいよ!?!』

ヒスカの叫びも虚しく、グランドブレイズは変わらず進む。

『こうなったら・・・この場でこいつを殺す!?!』

この私を退治すると!?

こ、これは・・・あはあはははははっ!!
お笑い物だ。」

「・・・そうやって見た目で舐めると痛い目に見るわよ。」

「くくく・・・これは失礼。」

いやあ、今日はなんと面白い日だ。

・・・貴様の使い魔・・・かね?

あそこで私のグランドブレイズと戦っている天海竜は?」

グランドブレイズとバカスカやりあっているヒスカに目を向けてバンデットはそう言い放つ。

「・・・なんであんなにそんなことを教えなくちゃいけないのよ。」

とにかく、死んでもらうから。」

「物騒な小娘だな。」

まあ良い。少々おながが減っていたところだ。」

「しっ!!」

「むっ!?!」

“吹き飛ばす”という意味でもってエクスプロージョンを足元で発動。

シヤステイルは一気に距離を詰め、尚且つブレイドを発動したマジックナイフでバンデットに切りつける。

「ぐぬっ!?!」

これは・・・虚無か!?!

貴様・・・担い手なのか!?!」

「はあっ!?!」

バンデットの質問はシカトして、軽く腕を切りつけただけに終わつたナイフを再度切りつける。

が、どこからともなく出したバンデットの黒剣によって遮られる。シャスティルは瞬時に距離を取り、投げナイフを投げつけ、ソレで怯んだバンデット相手にさらに切りかかる。

剣と剣がぶつかり、火花を散らす。

そして頭にエクスプロージョンを発動するシャスティル。が、避けられた。

「っ!？」

「私は勘が良いんだ!!」

「あぐっ!？」

決め手を避けられたことにより、一瞬の間が出来たシャスティルの腹に蹴りが飛ぶ。

そのまま地面を転がるも、すぐに体制を立て直すシャスティル。そこへ火炎弾がいくつも投下される。

「ファイアボールツ!!」

ファイアボールによる雨だ。

それ避け、時には手甲で弾き、ブレードで斬り飛ばす。

そこへさらに黒い斬撃がシャスティルの首に襲い掛かる。

それを左手の手甲で受け流し、お返しにとばかりに斬り返す。

バンデットの腹に横一文字の浅い切り口が出来る。

「ぐぬっ!？」

こいつ・・・とかく攻撃の転換が早い!？」

ヒスカは防御をしつつ相手の隙に一撃必殺を叩き込む剣。
シヤスティルはエンデと同じく、相手の反撃を封じるほどのスピー
ドでとにかく攻め続ける。

前者が技巧派ならば後者は力技派。

“筋力的な技”、“パワー的な力”という意味ではない“特化した
力での力押し”の技”という意味での力技。

ただただ圧倒的スピードによる手数で押し込んでいく。
バンデットはヒスカと同じく技巧派であるため、ただ単に経験で庇
えないほどに早すぎるという攻撃が不得手だったのだ。

そこへ頭目掛けてのエクスプロージョンが連続で炸裂する。

目線や呼吸で“次で殺す”という思考を先読みしているからともか
く、そうした殺気と呼ばれる気配を殺しきるほどに成長した場合の
ことを考えて、眼前の少女にバンデットは恐怖した。

ナイフに込められた魔法を扱うのもどこか拙い。
おそらくだが使い始めて一度、二度のはず。

魔法の扱いも慣れ、殺気を殺しきるほどに成長した場合を考えて、
バンデットは悔えることを止め、将来の脅威を排除するべく、全力で
殺しにかかることにした。

「っ!?!」

相手から繰り出される斬撃を敢えて受け、なんとか辛うじて腕を掴
む!!--

すぐに視界では自身の腕を斬るべくナイフによる斬撃が腕に迫って
おり、バンデットはその切り替えに再度、感嘆しながらも、やむを
得ない手を講じた。

「貴様は危険だ。」

たとえ自身の肉を焼こうが、死んでもらう！」

バンデットは剣では間に合わないと判断。

魔法によって自身ごと少女を焼く！！

「あぐっ！？」

「ぐはっ！？」

炎による爆発を受け、お互いに反対方向に吹き飛ぶ。

が、吸血鬼であるバンデットはすぐに再生が始まる。

少女はうめいて、立てないようだ。

炎の中心地にあったバンデットの右腕と少女の左腕はお互いに炭と化して焼け飛んでいた。

少女は体の左半身に軽くやけどを負っていた。

「・・・その胆力。小娘と侮ったことも詫びよう。

私が自爆をするつもりだと判明した瞬間、自らの爆発魔法で腕を干切り、私のフレアバーストを避けるとはな。」

「あぐっ・・・ぐ・・・ひうっ！？」

バンデットは左腕の傷を押さえながら痛みを耐えていたシヤステイルを蹴り飛ばす。

シヤステイルは血を撒き散らしながら転がる。

「だが、その傷と痛みでは魔法はもちろんのこと、ろくに戦えすらい。しまい。

その歳でその力。敬意を表してグールにしてやるっ？

光荣だろう。」

「ば、ばか・・・言わな、い、で・・・よね。」

わ、私、はお兄ちゃんやパパ、ママ、ヒスカと・・・ずっと・・・
ずっと・・・一緒に・・・いるんだから。
それに・・・まだ、戦える。」

血を流しながらもナイフを構えるシャスティル。
体は震えて、生まれ立ての小鹿のようだった。

「・・・余計に気に入った。
貴様はグールにするだけではなく、私の妻にふるっ!？」

シャスティルの眼前に立っていたバンデットが、横合いからの蹴りに吹き飛び、転がり飛ぶ。

「お、お兄ちゃん・・・パパ・・・。」

エンデとエンデの父、ハンニバルによるダブルキックで吹き飛んだバンデットだった。

「良くがんばった。
傷は今治す・・・これは・・・腕の復元にしばらくかかるな・・・
大丈夫。」

元に戻せるから。」
「ふう・・・ふうえ・・・ふくつ・・・ふうええええええええええええええええんっ!!
こ、こわがっただよおおおおおおおっ!!!!」
「ああ、よしよし。」

良い子良い子。良く頑張ったなあ。」
シャスティルの健闘と、こんなになっても泣かなかった妹を撫で、抱きしめるエンデ。

「な、なんだ・・・このメイジ・・・がはっ!？」

ハンニバルは喉に抜き手を食らわし、そのまま背後の木にぶち当たるバンデット。

喉を貫通した腕は背後の木も貫通していた。

「ごぼおおおおおっ!？」

「黙れ・・・ゴミ野郎・・・貴様はただただ、断末魔の叫びを上げてればいい・・・」

「な、なべるな“あああああっ!!”」

怒りで振り上げたバンデットの腕を小指一本で止める、ハンニバル。抜き手を抜いたハンニバルは不敵な笑みを浮かべて、言った。

「その程度か？」

「・・・ぎいっ!！」

吸血鬼を舐めがぼっ!？」

ハンニバルの膝蹴りがバンデットの腹にめり込む。

「ありがとうございます・・・クソ蛆虫が。」

貴様のおかげで私はスクウエアになれた・・・いままでどんな努力をしても越えられなかったスクウエアの壁・・・トライアングルからスクウエアに・・・」

「ごぼっ・・・ごぼっ・・・」

ハンニバルの独白を聞いている余裕の無いバンデット。胃が潰れたらしく、大量の血反吐を吐いていた。

「な、なぜ・・・人間にこれほどの筋力が・・・」

「私オリジナルスペル・・・ウィンドアーマー・・・攻撃時に風の力を継ぎ足す物だ。」

貴様への怒りがきつかけとなり、スクウェアと化した私の拳はいまや火竜のブレスすら素手で弾き飛ばす。」

「ごばあっ!？」

ハンニバルはバンデットが体を治すための休憩を入れながら、バンデットの体を壊していく。

「ほら？」

どうした・・・吸血鬼？

貴様の力はそんなものか？

もつと気張れよ・・・吸血鬼・・・オラッ！オラッ！」

「がはっ!？びぎゃっ!？」

ハンニバルはただただ蹴つて殴る。が、一発一発が岩を砕く威力である。

「父上・・・とりあえずシャスティルの治療がひと段落着いたから・・・僕も混じる。」

前々から試してみたかったんだよね・・・治療用魔法ってどこまで治せるのかってことを。

体が治るには細胞が分裂するためのエネルギーが必要なはず。それが体内に溜め込まれたものを使用するのか・・・それとも直す際にこめた精神力でそれが賄われるのか。

幸い、壊れにくい上に妹を傷つけ、尚且つ妻にとか言い出した身の程知らずのゴミだ。同情するまでもなく心置きなく実験が出来る。

ついでに各部位の内臓も切り取って帰ってから調べたい。

まずは・・・筋組織の剥離から・・・他の動物とどう違うのか・・・

ワクワクするね。エルザ相手だとせいぜい牙を見るくらいしか出来なかったから・・・これでじっくり調べられる。」

エンデはいつもよりも怪しく、黒く艶光る目を・・・もといヤンデレの目をバンデットに向けてナイフを取り出した。
バンデットは思った。

逃げなくては確実に殺されると。

「ま、まで・・・グランドブレイズを止めたくはないのか!?

わ、私を逃がすというのなら・・・グランドブレイズを・・・」

「グランドブレイズ?

あの竜モドキのこと?

それなら、ほら。

ヒスカが殺しちゃってるけど?」

「な、なんだとっ!?

ばかなっ!?!?」

ヒスカがグランドブレイズの上にまたぎ、勝利のブイサインをして『しょおおおおおりっ!』と叫んでいた。

ヒスカの体はところどころ血が流れ出ていたが、致命傷と思われる傷は一つも無い。

「ぐら・・・ぐらんどぶれ・・・ぐらんどぶれいず・・・グランドぶれいずううううううううううう!?!」

「さあ・・・おしおきの時間だ。

安心するといい。全て終えたら殺してあげるから。」

「ひ、ひいっ!?!?

や、やめっ!?!?

ぶげらっ!?!?」

「私の娘を貴様のような下種の妻にやるわけがないだろう・・・恥

を知れ！！」

「ここに住み着いた村人だって・・・ようやく幸せな生活を送れるはずだったろうに・・・」

「き、貴様らだってか、家畜を食うじゃないかっ！！」

だ、だから・・・弱肉強食で・・・たとえ私が奴らの血をどう使っ
ていようと私の・・・強者の勝手なはずだ・・・人間は奇麗事ばか
り・・・」

という醜い命乞いにエンデはばっさり切り捨てた。

「そうさ。」

この世は所詮、弱肉強食。

弱い人間は泣き寝入りしかない。

だからこそ人間はお互いに力を合わせ、生き残ってきた。弱いもの
は弱いものなりにね。

奇麗事？ふざけるなよ。

それがあるから人間はこのときまで生きてきた。

それに今、この場では僕達が強者で貴様が弱者。

貴様の理屈で言えば僕達が貴様をどうしようも無問題だろう？
今まで強者として好き勝手に来たんだ・・・自分が弱者の立場に
なったからといってみっともない命乞いはやめろよ。」

こうしてエンデたちによって吸血鬼事件は解決した。

犠牲となった村人の墓をつくり、エンデたちはユワツシャー村から
無事。とはいかずとも帰ってくるのだった。

吸血鬼少女。エルザの扱いだが・・・

身寄りが無いということで、レイフォール領でメイドをすることに

なる。

20ページ目(後書き)

次回はエルザの予後話。

魔法学園も始まり、ちょこちょこ話を挟んでサイトの登場の予定。

21ページ目

「で、言い訳はあるかしら？」
「ないでございます。」

現在、母上からのお説教中。

シヤステイルをみすみす怪我させてしまったので、母上からお怒りの雷を落とされてるわけで。

父上と一緒に正座させられて足がガタガタなのです。

「全く・・・二人もいて腕一本なくすほどの怪我をさせてしまうとは何事なの？」

「申し訳ないです。」

「マ、ママ。それくらいで・・・その、私から行くって言ったんだし、覚悟の上だったからお兄ちゃんたちを責めるのはお門違いだよ。私だって・・・覚悟はあった。」

母上の背後でシヤステイルの表皮を軽く切り取った物にリザレクションをかけた。万能細胞に還元。それを元に腕を作り出す。
やけどは傷に残らないように治したが、片腕を押さえてるのが痛々しい。

現在、シヤステイルの表皮を軽く切り取った物にリザレクションをかけて、万能細胞に還元。それを元に腕を作り出す。
万能細胞というのは簡単に言うと“何にでもなれる細胞”で、本来、皮膚は皮膚、肝臓は肝臓、肺は肺、心臓は心臓とそれ専用の細胞はソレにしかなれない。

すなわち、心臓や胃は筋肉の変形した形と言われているが、筋肉に似た組織だからといって筋肉を切り取って、欠損した胃や心臓のかわりに移植することは出来ないということである。

しかし、万能細胞は何にでもなれる・・・すなわち、本人のDNA

と全く同じ体の組織を死滅したらそれで終わりといわれる脳細胞に至るまで培養が可能なのだ。

現在、吸血鬼の細胞を組み込んで復元力を底増ししたシャスティルの左腕を培養中である。

そもそもなんでこんな面倒なことをしだしたかと言うと、さすがに腕丸々一本は僕でも治癒をするのが辛かった。というのが一番の理由である。

吸血鬼で実験して分かったことだが、回復魔法はまず体内の筋肉や骨、脂肪、肝臓に蓄えられたミネラルやたんぱく質を使って再生するようだが、それが尽きると術者の精神力を使って肉体の復元を開始するようである。

すなわち、体に蓄えがある状態ならば回復魔法のみの精神力で大丈夫のようだが、体の蓄えがなくなった途端、再生する時に必要な物質やカロリーと言ったものを精神力でカバーするため、ある一定量の再生を行ってもまだ傷がある場合、一気に精神力の減りが激しくなるようである。

しかもこれによって出来た骨などは骨密度が普通の人よりもすくなかったり、筋繊維が切れ易い（筋肉痛になりやすい）かったりと少し貧弱な組織に仕上がるようなので、将来的に何があるとも分からないため、大事をとって培養した腕をつなげる・・・もとい移植するという治療方法をとった。

培養はあと2、3日はかかりそうだが、順調である。

その間はお風呂に入れず、濡らしたタオルで体を拭くくらいしか出来ないが、そこは勘弁してもらいたい。

さらには鎮痛剤と抗生剤も欠かさず服用。
腕をつなげるために傷口は敢えて塞いでないためである。

毎日、アルコールを付け、煮沸消毒したタオルを巻いて過ごしてもらっている。

ただ、これさえ終われば半吸血鬼化した左腕を通して、次第に肉体が変化していき、劣化吸血鬼として歳の取り難い肉体とちよつとや

そつとの怪我ならば自己治癒が即刻可能な左腕に、通常の人間よりも遙かに治癒能力の高い体が入ることになる。

これは腕をさつさと培養したいがために治癒能力の高い吸血鬼の細胞を組み込んだゆえの副作用だが、シヤステイルは嬉々として喜んだ。

もちろん始めはあくまでも純粋な人間の腕を培養するつもりだったが、“魔法で5〜6日かけて治癒する”（骨密度や筋繊維の復元、補強にそれくらいがかかる。）のと“一ヶ月くらいかけて人間の腕を培養、移植する”（普通の人間の細胞を腕ほどの大きさになるまで培養するのにこのくらい）のと“不老になって、半吸血鬼化してしまうが、2、3日で完治する”（一番早く、しかし副作用が微妙に人間をやめてしまうこと）の三つで一番最後の選択肢を選んだのである。

女性としては化け物と化すよりも老化を防げることを重視するみたいである。

丁度いい機会なので、僕も不老だということを適当なウソを交えて告白したところ、尚のことそれを望んだシヤステイルである。

「確かにシヤステイルの言うとおり、シヤステイルの覚悟ゆえの傷やむを得ずというなら私もここまで言わなかったわよ。

でも・・・どこぞの馬鹿息子は一人目を発見した段階で、油断していたみたいだし。」

「ぐぬっ！」

「どこぞの使えない亭主は敵の不意打ち一発でグロッキーだったんだって？」

「ぐはっ!？」

「複数犯でないと・・・決め付けていたのが今回の敗因ね。

もっと上手く出来たはずなのに、その能力があったのに、それが出来ていない。

だから私は怒ってるの。

というわけで。

反省しなさいね、2人とも。」

「「ごもつともでございます。」」

そう、今回は吸血鬼が1人だと無意識的にも思い込んでいたことが一番の悪手であり、ミステイクだった。

そこが無ければ、シャステイルが腕を無くすまでの大きな怪我は無かつただろう。

下手をすればシャステイルは死んでいたかもしれないし、グランドブレイズとか言う竜のグール一体ではなく、グールの大群が控えていたりしたらヒスカでは押さえきれずに村に余計な被害者が出ていたということもある。

今回の討伐はどう考えても慎重さに欠けていた。

反省どころか猛省ものだ。

父上と僕は揃って頭を下げた。

「奥様、旦那様、若様、お嬢様。

ヒスカ様が呼んでいらっしやいます。

どうやら、エルザという吸血鬼少女が目覚めたようです。」

「そう・・・お説教はこのくらいにして、エンデは事情を説明してきなさい。

途中で起きないようにスリープクラウドを使ったのでしょうか?」

「うん。一応眠ってもらったんだよ。敵対することは無いと思ったけどな。」

ついでに眠ったときに牙の仕組みを見せてもらった。

なかなか興味深い構造だった。

吸血鬼といえばコウモリ、というイメージがあるだろうが、牙を見た限りではコウモリよりも蚊や吸血ダニに近い牙の仕組みである。ここハルゲニアでは不明だが、日本では吸血を行うコウモリは確かに存在する。が、牙ではなく普通に舌で舐め取るのがコウモリ。牙・・・というかアゴにあたるのだが、蚊はアゴ、すなわち口吻で皮膚を突き刺し、それで吸血する。ダニも同じだ。

牙を介して吸血を行う吸血鬼というのがどちらに近しいかは言わずもがな。

「その対応は誉めて挙げる。」

「あ、ありがとう、母上。」

「私も行こーー」

「あなた。」

あなたはまだお話があります。」

「え、あ、いや!？」

わ、私も反省してーー」

「つべこべ言わない!

あなたはあの場で一番の年長者かつ熟練者でありながら、複数居ることをちりりとも考えなかった・・・その甘さはレイフオール当主としても、戦地に息子と娘を連れて行った親としても油断が過ぎます。

二度とないようにこっぴどく苛めてーーもといしかってあげるから覚悟するのね。」

「いや、そのっ!？」

あだっ!？」

こ、こら!？」

ひ、ひっばるなっ!！」

髪の毛ごと引っ張ってる!！」

イタ、イタダダダッ!？」

つて!?

お、おい!?!その部屋は・・・その部屋にだけは行きたくないっ!?!
や、やめて!!!

やめてくれっ!!!

わ、分かったっ!分かつてるからっ!!!

その部屋だけは・・・あああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああっ!!!

そういつて父上は母上の部屋のさらに奥の部屋。“アリのイの玩具箱”と書かれた看板が下げてあるドアの向こうに連れて行かれた。
あそこには・・・あらゆるオシオキ道具が・・・ガクガクブルブル。

「お兄ちゃん、早く行きましょ。」

どうしたの?

顔色が悪いけど?」

「い、いや、なんでもない。」

あれは全ての趣味思考を持つ人間に対応できる調教・・・ないしはおしかりが出来る道具が揃っている部屋だ。

苛められることが快感とか、痛みに強いとか、僕みたいに痛みのお
N・OFFが切り替えられるとかそういう特殊な人間にも対応でき
るほどの多種多様な武器、拷問具、調教道具などがそろえられ
た玩具箱とは名ばかりの、地獄を具現化したような部屋である。

おそろしい・・・。

父上は見なかったことにして、僕達はエルザを止めている客間へと
向かった。

でもって。

「ど、どういっつもり?」

「いきなりなんだ？」

いきなりの質問。

エルザはどこからともなく出した黒い剣を構えて——吸血鬼の特殊な術で出す剣なのかな？
僕にそう聞いてきた。

警戒されてる様である。

「あ、あなたから……あいつの……バンデットの血の臭いが……かすかにする。」

それに……この家からもぷんぷんとあいつの血の臭いが匂ってくる……あなたは何者！？」

一応、丹念に体は洗って一晩は経ってるんだけどな。

血の臭いには他の生物以上に敏感なのかもしれない。

気づいたら血まみれで色々……口には出せないグロイ物体を切り刻んでいた僕。

吸血鬼は原型をとどめていなかった。

途中から記憶があやふやだったりするが、どうも切れて暴走して、どんどんエスカレートしてしまっただようである。

父上が“やりすぎだ！！”と言って拳骨を貰うまで僕は切り刻んでいたそう。

何を切り刻む……とは言わない。というか、言えない。

我ながらグロイというか……やり過ぎというか……二つの意味で切れすぎというか……身内が何かされるたびに暴走する癖を直さないと大事を起こしてしまいそうで我ながら自分が怖い。

ヤンデレ……というヤツだろうか？

いつか自分が惚れた女性に対して“一緒に死のうよ”とか言い出さないよね！？

しっかりしてくれよ！！僕！！

家から匂ってくると言うのは、その切り刻んでいた肉片……もと

い筋繊維の一部だろう。

内臓やら何やらを切り取って回収すると言ったのは“中学生が切れてすぐに相手に死ね！！”というくらいに“死ね”と同じくらい考えなしのただの脅し文句で、まるつきりウソだったのだがシャステイルの腕の治療に使えると思っ一部を持って帰ってきたのである。もちろん、内臓なんかいらないます。

普通に気持ち悪いがな。

話は変わるが、中学生って二言目にはすぐに“死ね”という安直な悪口をチヨイスしていた。他の国の人は分からないが、日本人ならば誰にでも経験があることだと思う。

僕は女子ではないから分からないが、すくなくとも男子はそうだった。

自身のボキャブラリーの無さを露呈してるだけ・・・と考えるとかなり恥ずかしい思いがこみ上げてくる。

「ど、どうしたの？」

いきなり顔を紅くして？」

「い、いや、なんでもないよ・・・ちょっとした黒歴史を思い出しててね。

えと・・・エルザ・・・だったよね？」

「・・・そうだけど、結局貴方は私をどうしたいわけ？」

「とりあえず聞きたいんだけど、家畜の血とかでは吸血鬼は生きられないの？」

「・・・無理よ。

人間が必要なの・・・じゃなきゃ、わざわざ人間を襲うわけが無い。家畜の血でも代用は可能だけどあくまでも一時的なもの。私達は人間の血が無ければ生きていけない、それゆえに見つかったら害獣として・・・他の獣と変わらず簡単に殺されるし、一部の吸血鬼は犯されて殺されるって話も聞く・・・何？貴方？

レズな上に小さい女の子・・・私みたいのとそうしたいから生かして捉えたの？

い、韻竜なんて監視役までつけて・・・」

エルザが非常に困った勘違いをしてみましたようである。

エルザはこの世の絶望を一身に受けたように暗い表情をしていた。これから捕まえられて、どうされるかを想像したのだろう。

「い、色々と勘違いしてるね。

まず僕は男だ。

そして、ロリコンでもない。

なおかつ韻竜・・・ヒスカは監視役 ではあるけど、それは君が勝手に逃げないようにするため。下手に逃げてこの屋敷にいる人間に加えられたくないからね。」

「・・・私の体を解剖するの？」

声を振るわせながら聞いてくるエルザ。

足に力を込めていることから、無理かもしれないけどなんとか逃げ出そうとしているのだろう。

「そういう趣味は無い。

確かに人間とどう違うかってのは気になるし、解剖してみたくないというとうソになるけど、それよりもグロイものを見たくないって気持ちの方が遥かに勝っている。

かりにその気持ちが無かったとしても普通に生きてる生き物を殺してまでするほど僕は研究者然とはしてないし、女の子を殺すのは――僕のを考えうる限り一番したくないことだ。」

「でも私は吸血鬼で・・・」

「人を殺さないって誓うならどうでも良いってこと。

吸血鬼とかトロール鬼とか、種族の違いなんてのもどうでも良い。

さすがに吸血行為をやめると言ったら、実質種族の存在否定のようなものだし・・・殺さない程度に節度ある吸血なら何も言わないよ。多少の被害は目を瞑るし、なんなら僕が定期的に提供してあげてもいい。

人を殺すって言うなら・・・次期領主としてもこの国の人間としても民衆を殺されるわけにはいかない。

君に罪は無いし、悪いとは思っけどーこればかりは仕方が無い。

この場で殺す。」

「こ、殺さないわ。」

殺気を込め、それをエルザに向ける。

エルザは少し後ずさりしながらもそう答えた。

殺気を当てたのは彼女が人間を殺さないように敢えて僕の力を見せつけ、“人間を殺せばこいつに確実に殺される”と思わせるためである。

軽く脅したということだ。

本当なら女の子にこんなことはしたくないんだけどね。

「ならよし。」

で、どうする？

君が望むならどこへなりとも送ってくけど？

それともこの屋敷で働く？」

「・・・あなた本気なの？」

「何が？」

エルザが信じられない物を見るような目で見てきた。

「わ、私は吸血鬼で・・・定期的に血をくれるとか言うのも。」

「だから、どうでもいいってば。

あ、血を吸うと見せかけてグールにしちゃヤダからね？」

「ほ、本当にいいの!？」

わ、私をかくまっていたら貴方もただではすまないかもしれないのよ!？」

「だから?」

「だからって・・・異端審問というのがあるのではよ!？」

「・・・うだうだうるさいな。」

僕とエルザのなかなか進まない会話を聞いてイラ付いたのか、ヒスカがぶつきらぼうに言い放つ。

「貴方、どうせ行くところも、あてもないんでしょ？」

血の提供もしてくれるんだから、何が不満なのよ!？」

「うっ・・・でも・・・人間は信用ならない・・・そう言って殺された吸血鬼だっているし・・・」

「だったら、とっとと出て行けばいいだけの話しよ。

さようなら。」

「え、つと?」

ヒスカ、話の割り込みは・・・」

「エンデは黙ってなさい!」

「あうっ!？」

す、すいません。」

「エンデは優しすぎるの。」

こんなのほっばればいいのに・・・」

ヒスカは見るからにイライラしていた。

なんでだ?

カルシウム不足?

にぼし食えよ。と呟いてみたら殴られた。

まあ・・・ですよね。

「シヤステイルとラブラブさせたいっていうのに・・・お邪魔虫を増やすような真似を・・・」

とぼやいていたが僕は殴られて壁にめり込んでいたので、聞こえなかった。

「わ、わかったわ。私、貴方の提案を受ける。

その・・・本当にいいの？」

「良いつて言ってるだろ？」

でも、もちろん無料じゃない。

きっちり働いてもらうから。」

「わ、分かってる。」

そう言うと、めりこんだ僕が人型の穴から平然と出てきたことにおっかなびっくりとしながら、エルザは頷いた。

ふっ。ヒスカに殴られたところは普通に折れたが、即修復。なおかつ体の粉碎骨折は持ち前の回復力プラスヒーリングを兼用で即修復されている。

父上が怒りでトライアングルからスクウェアになったように、僕もシヤステイルを傷つけられたことによる怒りで、ペンタゴンからヘキサゴンへと魔法の腕が上がった。

これによりヒーリングの効果も従来に比べて3倍近くになっている。今までワンランク上がることにざっと2倍だったのだが、ペンタゴン、ヘキサゴンへの変化時には3倍に。

もちろんこれはドットの水魔法時。

水を六個まで掛け合わせたヒーリングはもはや神の領域に達している。

腕を丸々一本というのは難しくても、足が取れても一秒とかからず

繋がるし、皮膚がはがれても瞬時にはがれた皮膚が体に吸収され、傷ついた皮膚が内側から盛り上がる。

元になる素材があれば幾らでも治せる勢いである。

バンデットとか言う吸血鬼で軽く100回以上は使ったことにより、腕の底上げもされ、リザレクシオンとあわせれば治せぬ病はもはや無いと言えるかもしれない。

ペンタゴン時の僕には“見てないから分からないけど、多分治せる”というレベルのタバサの母すら今なら“エルフの秘薬による心の病？ぶっ、なにそれ？擦り傷並みにチンケなんですけど”状態である。

精神力量もドットメイジをコップと同等の容量とするなら、僕はダメである。

我ながら恐ろしい力よ。

今ならカリン様にクソババアと言って逃げることも容易い・・・はずだ。

うん、容易い。容易いに決まってるよ！！

勝つ事だつて楽々　では無いだろうが、そこそこーでもないだろうけど、苦戦はしてでもー勝てないだろうけど、あれも人間だしがんばれば何とかーいけなこともなくもないような気もするような？

「ほ、本当に・・・いいのね・・・ひぐっ・・・ひぐっ・・・」

「えっ!？」

なんでイキナリ泣き出すの!？」

カリン様とのバトルのシミュレーションを止めて、エルザを見ると声を押し殺して泣いていた。

「・・・ご、こんなに・・・親切にされた・・・こと、なんてなくて・・・ひぐっ・・・ひぐっ・・・ふあああああああああ

「ああんんっ!!」

「うわぁあああああつ!？」

「ちょ、ちよつとっ!？」

泣くのは良いけど・・・いや、良くないんだけど、泣き止んでくれないと母うー」

「バタコンッ!

ドアが開いてそこには満面の笑みの母上が立っていた。

手にはトマトケチャップラーというには水っぽい赤いケチャップがビチヨビチヨと。

「あれ?おかしいな?

「ケチャップを作ったっけ?

「まだ作ってなかったハズナンダケド。

「オカシイナ?

「女性が泣くときはすみやかに黙って去り、一人にしてあげる、親しい相手ならば抱き寄せて強く抱きしめる。

「このどちらかだと言ったわよね?

「エンデ?

「はははははは・・・ええ、母上。

「言われました。」

「ではなぜまだ、ここに居るのかしら?」

「え・・・つと?」

「胸を貸して差し上げようかと・・・思ったりなんか・・・しちゃっ

て・・・」

「ほぼ初対面相手の女の子相手に・・・ねえ?」

「・・・あつ!ユーフォー!?!」

母上の後ろを指差して、僕は母上の右横を通り抜けようとしたところ・・・通り際に足払いを受け、倒される僕。そしてのしかかって

くる母上。

「そして、言い訳がましいことをするのも・・・変なウソで注意を引こうとするのも・・・看過出来ないわ。というわけで・・・ちょっとオ・ハ・ナ・シ。しまししょうね？」

「い、いや・・・いやだ・・・いやだ・・・逃げなきゃ・・・逃げ・・・あだだだだだだっ!？」

ちよつと、母上!？

また髪の毛を巻き込んで・・・というか今更だけど、これって絶対わざとだよねっ!？」

あああああああっ!!!

ドナドナよろしく僕は引きずられていった。

引きずられる際に部屋の中でヒスカに抱きついてエンエンと泣いていたエルザを見て、良かった良かったと胸を撫で下ろしたのだが・・・僕の現状は全くもって良くなかった。ということは言うておくべきだろう。

それから2ヶ月ほどが経ち、雑用がかりとして働いてきたエルザを今日から正式に雇用することにした。

「んじゃ、仕事だけど今日からメイドね。」

「はい？」

「シャスティルの護衛とか・・・して欲しい気もしないこともないんだけど・・・母上はそんなことするくらいなら“エンデが常に偏在でシャスティルの身を守ればいいじゃない、というか女は守られ

るだけの者ではありません”と説教を食らいそうなので、とりあえず平和的にメイドをしてもらうのが良いかな・・・と。
今のままお手伝い・・・って立場はいやでしょ？」

「え、え？」

ええええええええええつ！？

で、でも私、エンデみたいな貴族の坊ちゃん夜の相手とかとてもじゃないけどできなぶっ！？」

「何を言ってるんだ、お前は。」

ロリコンではないというに。

そしてメイドの仕事に夜伽は含まれてない！・・・はずだ。

少なくともウチはそんなことはない。」

「えへへへ・・・冗談だよ、冗談。」

エルザは泣いたせいか、次の日には多少明るくなって、今では満面の笑みを日々浮かべている。

馬鹿なことを言い出したので、チョップを食らわせたのだが・・・
明るくなりすぎて感もしないでもない。

「明日から僕は夏期休暇が終わって魔法学園に行く。

というわけで僕とヒスカ、シャスティルはこの家からいなくなるけど、悪さしないでなおかつ僕があらかじめ採決した血液パックを計画的に飲みすぎずに・・・あがぶっ！？」

「ずるーいつー！」

私もエンデたちと行くー！」

「いや、さすがにそれは・・・というか、不満だからと殴らないで。」

「血液パックで冷蔵保存したのはまずくなる！！元が元だけに十分な味はしてるけど・・・もったいない！！」

エンデの血は私が飲んできた中で一番の極上物の血だよ！？その血をみすみすまずい状態で飲むなんてありえないよ！！やっぱり人肌

の温かさが一番美味しいし何よりも、寂しいじゃない!」「
「スルーかい。まあいいけどさ。とにかく、そんなわがママを言われましても……」

とかなんとか言う、やりとりがあったのだが。

結局、懇願されて負けてしまう僕は甘いのかもしれない。

21ページ目（後書き）

単なる予後話。

吸血鬼はグールを一体しかもてないという設定があるとの感想を受けましたが、バンデットは200年生きたためにそれを可能にしたと考えてください。

万能細胞は実際にあるものです。体細胞は全て元は万能細胞から出来たからこそ、皮膚組織を還元して万能細胞を抽出したってことになりません。

地球では実際に可能かどうかは分かりませんが、ヘキサゴンになった主人公だからこそできる魔法の神秘（もといご都合主義）だと思ってください。さすがに腕一本再生するのは便利すぎだろ？ってことでこういう設定にしました。

でない！と雷神降臨状態（回復力促進状態）の主人公が強すぎるww

22ページ目

魔法学園が始まり、いつもの寮、ないしは22号室での暮らしもまた始まる。

「久しぶり、カトレア。そしてルイズ。」

「ええ、久しぶり。」

「といっても手紙のやり取りをしていたからあまりその気はないんだけどね。」

「エーデ姉様、久しぶり。」

「ところで……またメイドが増えてるけど……その子は誰？」

さっそく、エルザに対しての疑問を口にしたルイズ。

「私はエルザって言うの。」

「うーんと？」

「今年の夏……もとい二ヶ月前くらいからエンデのお世話になっているメイドさん？かな。」

「メイドさんと言う割には、普通に私にため口なのね……一応、私公爵家よ？」

「……まあ、いいけど。」

ふむふむ。僕の影響のせいかな、サイトがまだいないにも関わらず、ルイズは平民に対する態度がなかなかいい具合になっている。いい傾向だ。

「ふふふ……可愛い友達が増えたのね。」

カトレアはそれだけ言った。

・・・気づいてるのかな？エルザが吸血鬼だつてこと。

鋭い人間なら気づくだろうし、これから一緒に暮らす以上、どうせばれるのだから言うておくでしょう。

「ちなみにエルザは吸血鬼だからね。」

「うええええええっ!?!」

「あらあら？」

本当に？だとしたら牙を少し見せてもらいたいわね。」

ルイズは驚きで声をあげ、カトレアは変わらず。

僕と同じで牙の仕組みをまず気にするとは・・・さすが我が友である。

「あ、あ、ああああ、あの!?!」

だ、大丈夫なのっ!?!

エーデ姉様!!」

「大丈夫だよ。な？エルザ。」

「うん、大丈夫だよ。」

寝てる間に干からびるくらい血を吸っただけだから。」

「だ、大丈夫じゃないっ!?!」

死ぬでしょっ!?!」

「大丈夫、そしたらグールにしてあげる。」

「い、いやよっ!?!」

「それじゃ死ぬだけね。」

「吸わないって選択肢を取りなさいよ!?!」

「い、いやよっ!?!」

「私の真似して言うなっ!?!」

「こら。あまりルイズをからかうんじゃない。」

「あ、ばれた?」

「普通にわかるっつての。」

「か、かかか、からかうんじゃないわよっ!!」

「あははは、ごめんね。ルイズ……だよな？ルイズちゃんを見た瞬間に無性にからかいたくなつて……」

「おちやめな子ね。ふふふ。」

エルザの冗談をすっかり真に受けてしまったルイズ。

まあ、吸血鬼はその狡猾さと相まって一番に恐れられてる妖魔だつて言うし、無理も無い反応かな。

むしろカトレアのように華麗に流せるほうが珍しい。

「ところで、シヤスちゃんとヒスカちゃんはいないの？」

「厨房の方にいるメイド仲間のイチゴ……ちゃん？とかマルトーさんとかに挨拶してくるつて言つてたから、後で来るよ。」

「そうなの？」

ならエルザちゃんがどうしてエンデの家のメイドさんになったのか、話して欲しいな？」

「……まあいいかな。」

というわけで、二ヶ月ぶりのお話は後から来たヒスカとシヤステイルを交えて十二分に盛り上がり、その日を終えた僕達である。

それからの日々はあつという間で、なんら問題なく過ごし、二年生になる春を迎えることとなった。

余談だが、僕の性別は男派と女派がいつの間にか自然消滅していき、雌雄同体派がほとんどとなっていた。

きっとそういう体に産まれたんだろう、みたいな感じで僕は女であると同時に男としても扱われるという酷く変な目で見られたのである。

……夏休みが終わっても、相変わらず女体化した偏在と入れ替わ

って遊び、調子に乗りすぎた結果がコレ。
後悔は先に立たずと言うが、本当にそのとおりであることを身にし
みて理解した半年だった。

「では、皆さん。毎年恒例のサモン・サーヴァントの季節がやって
きました。

ご存知のとおり、サモン・サーヴァントは貴方達魔法学園生徒の一
年生が二年になる際に行く・・・すなわち進級試験のような物です
が、まず失敗することはありえません。

安心して呪文を唱えてください。」

ヴェストリ広場で拡声魔法を使いながら、コルベール先生がそう言
った。

「呪文は先日教えたとおりですので、皆さん、リラックスして唱え
てくださいね。

ではまず・・・出席番号一番のミスタ・アイガーから順々に唱えて
いってください。」

サモン・サーヴァント。

いよいよこの日がやってきたわけであるが、さあどうなることやら
僕は必要ない・・・だが、生徒の目もあるので風邪ということにし
て後日改めてサモン・サーヴァントを行うことになる。いや、行っ
たということになる。

対外的にはフルーツコウモリのフルーツを使い魔とする予定だ。

フルーツには悪いが、ルーンは適当に表皮にペイントすれば良い。

さすがに生徒のまん前で韻竜の・・・それも大型の水竜であるヒス

力を披露するわけには行かない。

コルベール先生には生徒の混乱を防ぐためだと言っているが、もちろん最早目立ちまくった僕がそんなことを気にするワケではない。今更何言ってやがるボケエってところだ。

問題はそうした強力な使い魔を召喚することによって戦争で――以下略。

とにかく僕は戦争ではできるだけ人を殺したくないし、殺されたくない。よって辺鄙なところに配属されたいのだ。

そのためには使える使い魔はダメ。

論外だ。それにメイジの世界では韻竜は絶滅した生物とされている。これがアカデミーに知られれば下手をすればヒス力は研究所送り。んなことされたら、たとえ国に喧嘩を売っても僕はヒス力を取り戻すわけで・・・かといってそうなると行くアテが無い上に父上、母上というレイフォールの家にも迷惑をかける。というか下手をすれば没落。

というもろもろの事情から、フルーツの偏在・改を作り出し、それを經由して部屋にいながらヴェストリ広場を見ているのである。

そしてフルーツの偏在は常にサイト君の監視をさせる予定。

フラグを全て叩き折るつもりだからだ。

ルイズは僕にとって最早、妹同然。

あの子を悲しませるのは僕の望むところではない。

というわけで、シエスタ、アンリエッタ、ティファニア、タバサというもろもろの女の子を僕が横から搔っ攫うつもりだ。

もちろん搔っ攫うと言っても、僕が彼女達にフラグを立てるということではない。

サイトに惚れる原因を全て無くしてしまうということである。

すなわち、目的を纏めると。

僕が変わりに活躍するのが手っ取り早いのだが、僕は戦争で活躍し

たくない。

かといってサイトが活躍すると惚れられてしまう。

それをどうにかこうにか妨害しつつ、ロマリアの陰謀からルイズを守り、なおかつ大陸に飽和するという大量の風石をエルフの里に攻め込ませないようになんとかする。

タバサの母さんを僕が助け、なおかつフーケが捕まった後のティファニア達孤児の生活資金をどうするか、シエスタとのイベントの妨害、あの頭の弱いアンリエッタにはウェールズを生かして当てればいいだろう。まさに当て馬。まあ両思いみたいだしウェールズも幸せになれるだろう。

とはいえ、ルイズの精神力は他メイジとは違い、寝て回復するわけではない。嫉妬や怒りで回復する。ようはストレスが精神力となる厄介な才能だ。

そうしたストレスから遠ざけたいのに、そうしたストレスが必要になる。

それもまた多大な問題である。てか、こんなシステムを何千年にも渡って今に至るようにしたブリミルをぶん殴りたい。

あとは・・・サイトたちが活躍した武勇伝の隠蔽。トリスティンの馬鹿どもに暗殺とかされかねないし。

コルベール先生が持つ、始祖の指輪をヴィットーリオに渡る前に回収。

そうなるとジヨセフとの戦いにヴィットーリオが加勢出来ずにサイトが死ぬ。その阻止。

こうしてちよつと考えただけで問題の山済みである。

・・・どうしてこんな苦勞を僕が被らなくちゃいけないのだろうか？ルイズのためだと・・・妹分のためだと思っただけでもさすがに辛い。でも、そうしないとルイズが悲しんで、そんなルイズを見たカトレアも同じく悲しむだろう。

くそう・・・サイトが浮気性じゃなければ良かったのに。

サイトが流されるタイプじゃなければ良かったのに・・・NOとは言えない日本人、なんて大ッ嫌いだ。

NOって言えばよ、性欲に負けんよ、思春期脱しろよ。と言ってもたかだか17のサイトにそれを求めるのは酷か・・・もともとモテてないって言ってたし。

精神年齢で言えば軽く30過ぎの僕ですらいまだカトレアとの同居にはどこか落ち着かないっていうんだから、男というのはどこまで行っても女性には勝てない生き物なのかもしれない。

「はああああああ。」

「きゅー？」

「あははは。ありがとう、フルーツ。」

大きなため息を吐いた僕に、フルーツが大丈夫？という目で僕を気遣わしげに見てくる。

こっちの世界の動物は不思議と言葉が分かるようで、使い魔になった犬猫はさらに喋ったりできることもあるというのだから驚きだ。昆虫ですら大型のはそういう気があるのだからなおのこと。

こっちの動物は同じようで同じじゃないんだろうな、多分。

「ヒスカとシヤステイルはいつものように厨房だし・・・オマエくらいしか話し相手がいないというのね・・・暇だね。ルナとサンはお見合い中だって言うし。」

ルナとサンはしっかりと成熟し、大きくなってきたので、現在はヴアリーエル領の一つ。

とある森にて、自身の伴侶を探しに行ったとのこと。

もちろん離す前に森は彼らを食べるような肉食獣がいなかろうか

ディディクトマジックで探査済み。

これがなかなか骨が折れ、フルーツバットはそこその大きさしかないために天敵のいない、なおかつ同属が生息している森を探すのに苦労した。

「オマエも旦那さんが欲しいだろ？」

「きゅー！」

「ああ・・・可愛い。」

首を横に振り、僕に抱きついてくるフルーツ。

“いらにゃい！”

パパ様と一緒にいるほうがいい！！”

と言っている。ような気がしないこともない。舌足らずなところがポイントである。

舌足らずなところがポイントだ。
大事なことから二回ね。

「愛いやつめ、愛いやつめ。」

可愛かったのでモフモフして顔を擦り付けていると、きゅきゅーっ！きゅきゅきゅーっ！と叫んで、気持ち良さそうに身をよじる。

“ひぁん！！”

くすぐったゆいよっ！パパ様！！”

と言っているんだろう。多分。とりあえず嫌がってはいない。

と、一見美少女が動物と戯れている微笑ましい光景が続いていたのだが、ずとーんっ！

ばーんっ！！どがーんっ！！

と無粋な爆発音が聞こえてくる。

「・・・そういえば、ルイズは何回も失敗してどうにかこうにかサイトを召喚したんだったね。」

「きゅ〜、きゅ〜。」

「ああ、よしよし。」

大丈夫、大丈夫。僕が付いてるからね〜。」

爆発音でおどろいたフルーツが僕の服に顔をうずめて震える。

本能的に虚無の爆発の威力を理解してるのかもしれない。

固定化がかかっているはずの教室とかも普通に壊せるほどの爆発だし、というよりは固定化を解除した上で壊す。というほうが正確かも。

このままサイトが呼ばれなければ良いな、とちよっと思っただけど、それだとトリステインな確実に潰れる。

ルイズの心の平穏を犠牲にして、後々の盛り返しがあると言っても過言ではない。アンリエッタもストレスを抱えながらがんばるのは・・・それもこれも王妃としての役目も果たさんマリアンヌのせいだ思うとまあイラツク。

のくせして平民から絞り上げた税で豪勢な生活をしてるのだろうか、なおのことムカツク。

かわいそうなアンリエッタとルイズだ。

この2人は結構似ているのかもしれない。

しょうもない国のために四苦八苦するってところが特に。

そう考えると、ウエルズはなんとしても捕まえたい。

とはいえ、ウエルズは名誉のために死ぬとか、良くも悪くも貴族らしい貴族だ。

さてどう説得・・・ないしは掻っ攫うべきだろうと思っけると、人のどよめきがここまで聞こえてくる。

フルーツの偏在の目を通してヴェストリ広場を見ると、ようやくサイトが召喚されたらしい。

きよるきよる辺りを見回して「どこだ？ここは！？」と日本語で叫んでいた。

久しく聞いていない日本語に、じーんと来る物があったが・・・フルーツの偏在はここらで十分だろう。カトレアの使い魔は後で聞いておくとして。あ、キスした。

・・・エミリアが嫁に行ったときと同じ感じの・・・なんかイラッとくるが、しょうがない。

ルイズを泣かしたら、半殺しだからなサイト君。

偏在の魔法を解いて、冷蔵木箱から果物を取り出し、りんごの皮を向いてフルーツにあげる。

「きゅー！」

「あわてなくても沢山あるよ。」

あとはのんびり、今日という日を終えよう。

机の上でりんごを食むフルーツを見ながら、うとうとし始めた頃。と思った矢先だ。

足元になにやらコモンマジックを司る精霊が集まるのを視認して、瞬時に飛びのく。

フルーツがなにやら驚いているが、そんなことを気にしてる場合ではない。

なんか、楕円形の光る物体が地面に出てきたのだ。

サモン・サーヴァントの扉？

誰かがサモン・サーヴァントを唱え、その対象が僕・・・ということか？

でも、歴史上では虚無の四人しか人の召喚は出来ないはず！？

僕というイレギュラーによってパートナーが変わった使い手が出た

のか？

可能性としてはサイトがすでに召喚されたルイズを除き、ティファニア、ジヨセフ、ヴィットーリオのいずれかだ。

ティファニアはサモン・サーヴァントの呪文自体知らないだろうし、知っていたとしても今このタイミングで呼ぶ意味が無い。ということとは必然的にジヨセフかヴィットーリオである。

どちらに呼ばれようと僕の未来はお先真っ暗。

ひどく面倒くさい！！

なんとしても避ける！！

「どわっ！？

後ろに！？」

飛びのいた後ろの方にタイミングを合わせてまたもや扉が出現する。が、舐めるなよ！？

「ウインドっ！」

初級の初級にあたる風魔法で、横に軌道をずらす。

へキサゴンメイジの僕ならば例え普通のメイジにとつては扇風機程度の風でしかなくとも、僕ならば人体といえど、吹き飛ばすことぐらいお茶の子さいさいである。

ハッ！ざまあみるっ！！しょせんブリミルの魔法なんてせいぜいー

ー

「な、んですとっ！？」

今度はとんだ先に前、後ろ、横と四方を取り囲まれた。

このままでは前の扉に入ってしまう。

「い……んにやるおおおっ!!」

そうは行くかと僕は杖を抜いてブレイドを発動。それを床に突き刺し、一瞬動きを止める。が、勢い全ては殺せない。そこで僕はそのままブレイドを軸に飛び上がる。

ふっ！あのクソババーじゃなくて、カリン様の特訓を受けた僕にとつてみれば、この程度のアクロバティック。造作もなーうおおおおっ!?

今度は飛んだ先に扉が出てくる。

そこまでして僕を召喚したいのかっ!?

ジョセフとヴィットーリオのどちらかは知らんがっ!!

どちらにせよ男とキスなんざ、まっぴらごめんである。

全力で拒否させてもらう。

「エア・ハンマー!!」

せまい部屋にはいずれ追い詰められる。

てなわけでエア・ハンマーで僕自身を吹き飛ばし、壁を突貫!!
外に出る。

ばっかーんっ!と凄い音が鳴るが、そこはサイレンスで隠蔽。

さっそく進路方向に出現する扉。

もう一度、ブレイドを使って地面を軸に飛び上がる。そして着地。する瞬間に扉が出現する。

全て避けられると判断したヤツ(?)は待ち構えるのではなく、ぎりぎりまで引き付けてその魔の扉を開くことにしたようだ。

だが、甘いっ!!

開脚をして、回りの地面に足を引っ掛け扉に落ちるのを防ぐ。

僕の体の柔らかさは体操選手並みだ！舐めるなプリミル！！
そしてすぐにウィンドで舞い上がり、体制を立て直す。

と思ったとき、扉は何を思ったのかあつちから“飛んできた”！！

「ひあつ！？

そんなのアリっ！？」

間一髪で避ける。僕。

そこにまたもや足元から浮き上がる扉。すぐに飛びのいたが。

「ま、まじっ！？」

扉は特大。

普通に飛びのくのは無理。

「あ、あんたっ！？

ここまで手段も選ばないってのはちと卑怯　　・・・ありえないわ・・・」

そしてその特大の扉が前、後ろ、横とまた四方向に。

さらには上にも出現。

これだけならまだしも、これら合計6方向から一気に扉が迫り来る。

「・・・無理です。」

ジョセフやヴィットーリオじゃなくてティファニアであること祈つて、僕はせめて男らしく行こうと仁王立ちで腕を組んで扉を潜り抜

けた。

ジョセフやヴィットーリオだけは勘弁してください。ファーストキスルーヒスカのはカウントしないルーの相手がああ2人のどちらかなんてことだけは止めてください。神様仏様ブリミル様。

ティファニアみたいな美人とは行かずとも、この際、女性なら誰でもいいです。

男とだけは・・・もう女性の心を持つって事でスカロン店長でもいいから、とにかくああ2人だけは・・・いやっぱり、生のスカロン店長は勘弁してもらいたいような・・・でも厄介の固まりでもあるああ2人は・・・かといってスカロン店長は・・・と悶々としながらやたら騒がしい喧騒を耳にしながら目を開けてみると。

「か、かこれあ？」

「えと・・・あ・・・エンデ？」

目の前には杖を持って呆けてるカトレアがいた。

「What is this？」

Who are you？」

（何これ？君は誰やねん！？僕の知ってるカトレアなんかいなっ！？こりやおでれーたべよっ！注・エキサイト翻訳です。）

つい英語が出てしまうほどに僕はパニックっていた。

たしかに人間を呼び出してしまうことは無いとは言いつつたメイジはいないが、かといって僕がカトレアに呼ばれるってのはどういうこと！？

「ま、また人が・・・それもミス・エンデ・・・じゃなかった、ミスタ・エンデが呼ばれるとは・・・」

コルベール先生も驚いている。
はらりと落ちた毛がその驚きようを語っている。

「つと。ミス・カトレア・・・コントラクト・サーヴァントを。」
「あ、はい。」

カトレアも茫然自失状態から立ち直る。
もといコントラクト・サーヴァントの詠唱を始めた。

コントラクト・サーヴァント。
すなわちキツス。
口付け。
ルーンを刻む行為。

「・・・いや。いやいやいやっ！
まてまてっ！？
ほら！？
僕人間ジャンっ！？」

詠唱を終えたカトレアも意識しているのか、顔がほんのりと赤くな
っていて色っぽいーじゃなくて！！

「エ、エンデは・・・私とのキスはいや？」

不安げな目をしながらそう聞いてくるカトレア。
仮に嫌だと言ったら、この場で泣き崩れそうな勢いだ。

「い、いやじゃない・・・むしろ・・・」
「むしろ？」

「い、いやっ!?
なんでもないですよっ!?」

嬉しいはずが無いっ!

たとえカトレアが相手といえど、僕のファーストキスはまだ見ぬ結婚相手のためにとっておくわけで・・・カトレアが相手なら別にいかなあゝなんてことは思っていないぞっ!?
ましてや嬉しくなるなんてことは断じてないっ!!

「じゃ、じゃあ・・・行くね。」

「あ、はい・・・お、お願いします。」

お願いしますっ!?

自分で言っておきながら意味不明の切り返しなんだけどっ!?
というか、ダメだっ!!

断るのだっ!!断ると言えっ!!僕!!

結婚相手のために始めては・・・いや、だかもはや体も心もカトレアの唇に吸い込まれるように抗うことができない。

カトレアだから良い、カトレアじゃないとダメとどっかで囁いている。

なんでこんなことを思うのか?

どうしてカトレアじゃないと分からないのか?

熱病にかかったように熱い頭でぼんやりと考えながら、僕はカトレアのキスを待つ。

ふるふると震えながらこちらに近づくとカトレアの顔。
目、鼻、唇。が近づいてくる。

「あ・・・う・・・あう・・・」

我ながら酸欠で苦しむ鯉のように口を軽く開閉するだけで何も言えん。
あいつも変わらず騒がしい外野もいつのまにか僕達に見入っているようだ。

「むぐつ。」

唇と唇が重なる。

一見余裕そうに見えるが、カトレアの唇は緊張だろう・・・やたらと震えていた。

顔も真っ赤で、茹蛸のようだ。

僕も真っ赤だろうなと言うのが自分で分かる。

30秒ほど経っただろうか？

カトレアが変わらず震えている唇を僕の唇から離す。

「えへへ・・・ごちそうさまでした。」

「あ、うん・・・お粗末さまでした？」

いつもより幼くも可愛い笑い声を上げてカトレアは感想を言った。
いや、感想・・・ではないか。

そして、何を言っているのだろうか？僕は。

痛みが出るはずのルーンの出現も、僕とカトレアを邪魔することを遠慮するように。

静かにゆったりとした痛みで、僕はいつの間にか気を失ったのである。

僕は心から沸き上がるよく分からない気持ちを誤魔化すように、ジヨセフとヴィットーリオじゃなくて良かったと気絶しかけながらも無理やり思考を切り替えていたのだった。

なんだか良く分からないこの気持ちを自覚したら、どうにもならなくなってしまうようで。

カトレアと目をあわすことも出来なくなりそうで。

どうにかしたくなっても出来なくなるジレンマに陥りそうで。

それが面倒で怖くて、嬉しくて。

僕は敢えて“ソレ”を無視したのだった。

気づいたらあった“ソレ”を、今度はこれくらいで浮き上がらないように、深く深く沈めながら。

22ページ目（後書き）

今回で魔法学園編は終了。

次回からは漸く原作に突入。

ふふふ、腕がなるぜ！超なるぜ！。

さて、今回カトレアが主人公を召喚した理由は至極簡単であり、真つ当であり絶対で、この作品の根幹でもある理由から、真すなわち。

例え獣でメスであろうとも、カトレアのファーストキスは主人公以外にあり得ん！

っーか、許さんわぁあああああっ！！てことです。

例え世界観や設定が壊れようとも、有りがちになったとしても、カトレアとラブラブさせるといふこの作品の目的上、そこは譲れない。てな訳で有りがちとは思いつつも、カトレアにエンデを呼んで頂きました。

そしてこれからは”ルイズのため”にサイトのフラグ折りに四苦八苦していきます。

今以上に面白くなる・・・というか、作者である僕自身楽しみながらもそうしていきます。

どうぞ期待しすぎない程度に期待して下さいませ。

23 ページ目

「はぁ・・・」

「どうしたんだい？」

「これ見よがしにため息など付いて？」

ヴェストリ広場で僕があることで悩んでいると、ギーシュが声をかけてきた。

「なんだ・・・ギーシュか。」

「し、失礼だねっ！君は！！！」

「すまん・・・と形式的には謝っておく。」

「尚のこと失礼だねっ！！？」

それは、まったくもってすまないという気概が無いということだろう！？

「まあ、そうなる。」

「・・・いいけどね、別に。」

そういう扱いは慣れてるから。」

「噛ませ犬キャラだもんね、あんたは。」

「どんだん失礼の具合がエスカレートしていくっ！！？」

「なあ、ギーシュ。カトレアとアレ以来、まともに目を合わせられないんだが・・・どうしたらいいと思うっ？」

「スルーされた！？」

あの・・・き、ききき・・・キス以来。

カトレアを見ると恥ずかしくて恥ずかしくて、ついつい目を逸らしてしまっ。

どうしたらいいのだろうか？

カトレアもその点は分かっているのだろう。

ただ微笑んで、気にしていない。ように少なくとも見える。

「くそう・・・こんなに・・・腑抜けるなんて・・・我ながらなんともありえん!!」

「・・・き、君は変なところで男らしかったり、女らしかったり・・・下手な女性よりも純真というか・・・初々しいというか・・・乙女というか・・・」

「う、うるさいなっ!!」

恥ずかしいもんは恥ずかしいんだ!!

アドバイスをくれないならもうどっか行けよ!!」

「僕の扱いが酷すぎるっ!?!」

からかうだけならどっか行っただけ欲しい。

切実かつ深刻な問題なんだ。

これではまるで・・・ぼ、ぼぼ、僕が恋する乙女みたいな・・・カトレアにベタ惚れしているようではないか。

ほ、惚れてなんかいないんだからなっ!!

「なんとというか君ほど純真な男というのも珍しいね。

まあ、あのカトレア様が相手なら致し方ないというか・・・それよりも気にすることがあるだろう?」

「あのこと以上に気にすること?」

なんだそれ?

「いや、人を召喚したということだよ。

これは前代未聞の事件だよ?」

「そんなことはどうでもいいっ!?!」

どうしたらカトレアと普通にお喋りできるようになるか教えてくれよっ!?!」

プレイボーイなんだろうっ!?

女性の扱いには慣れてるんだろうっ!?

キスくらい・・・ってキスとかハッキリ言っなっ!!

「がふっ!?

自分で言っておいて、僕を殴るとは酷い・・・というか、さっきから酷すぎるぞっ!?

「た、確かに・・・すまん。

気が動転していて・・・とにかく教えてくれよ・・・ギーシュ。

カトレアを見るたび、顔が瞬時に湯だつんだ。

そうするとカトレアも顔が赤くなって・・・お互いに喋るどころじゃなくて・・・今まで見たいに普通に仲良く“友達”としていたのに、それが酷く困難なんだっ!!

助けてくれるなら、僕はブリミルではなくギーシュを始祖として生涯奉ろうと思う!!

だから教えてくれっ!!

僕の懇願にちよつと引いて(なんで?)、ギーシュは苦笑しながら答えた。

「いや、僕も実は・・・そういうところまでは・・・まだ・・・モンモランシーとは良い感じなんだが・・・

それと仮に僕が助けられたとしても奉らなくて良いから。」

「・・・口先男だな。」

「ぐはあっ!?

い、言い返せない・・・。」

使えん男よ。全く。

「それと、もう一人の呼ばれた人間・・・ええと・・・ヒリガル君・・・だっただか?

ルイズが召喚したあの平民はどうなんだい？」

「元々ルイズがいた部屋で過ごしてもらってる。ルイズと一緒にね。」

これから先、色々な面でそうした方が良い。

ルイズは最初不平を唱えたが、どうせなら私もエーデ姉様が良かったとか、見ず知らずの人間と2人つきりなんて嫌だとか、さびしいとか。使い魔と交友を強める意味でも2人つきりであることが大切と言い含め、2人つきりで過ごしてもらおう。

なによりもサイトはお調子者だし、カトレアは優しい。

サイトが原作でカトレアに抱きつくシーンがあったが、それを妨害するためでもある。

良く分らないが、胸がモヤモヤして許せないのである。

カトレアに甘えるよりもルイズに甘える。

それくらい受け止める度量がルイズにはあるのだから。

「大丈夫なのかい？」

見ず知らずの平民なんかと一緒に？

君の影響で平民に対して見下す・・・ということじゃなくて平民だろうと貴族だろうと見ず知らずの人間に呼ばれて、はいそうですかと従うほど大人しそうな人には見えなかったが・・・」

ギーシュは多分、信用できるのか？と言いたいのだろう。

概ねの平民は貴族に対して良い印象を持ち得ない。

なおかつ普通に生きていたのに、家族と離され、こちらに呼び出されている。

そんな平民がすることと言えば決まっている。

現在の状況をなし崩し的に受け入れるか、もしくは寝首をかいて主人を殺し、ルーンから開放されることだ。

本来、ルーンを刻まれた動物は従順になるはずである。

が、サイトとルイズは仲たがいはかり。これはおかしいとさすがのギーシュも不安なのだろう。主人に逆らえる以上、いずれルイズを殺す可能性もあるのではないかと。

「大丈夫でしょ？多分。」

多分というか、絶対大丈夫だ。

僕はこれから先どうなるという歴史を概ね知っているし、そもそもサイトは現代日本人。

パーカーのデザインや質から察するに、僕が生きていた時代と大して変わらない。

ということとは人殺しは一番のタブー……ないしは考えもつかないはずである。

それも相手は15、16という自分と同じくらいの少女。

それも美がつく……である。モテナイ男子としてまず無いと考えられる。

「君が言うなら……大丈夫なんだろうが……」

「なんだ？」

その僕に対する信用は？

そんなに信用されるほどのことはしてないと思うけど。」

「君は女性関連になると厳しい。上に優しい。

下手をすれば僕以上の紳士だ。

なんらかの根拠があるのだろうか？」

「……ふん。」

ふむ。

やっぱりギーシュは大物なんじゃないか？とちよつと見直したが、なんとなく気恥ずかしくて目を逸らす僕だった。

それからしばらく。

ルイズを馬鹿にしたマルコリヌと拳で語り合ったり、（あくまでもお話である。暴力ではない。）ミセス・シュヴァルズが作った真鍮を見て「ゴールドですか！？」と目の色を変えたキュルケがいたり。

相変わらず爆発するルイズの魔法を馬鹿にしたヴェリエをトラウマにならない程度にボコボコにしたり。てか、引きも籠ってればよかったのに。劣化ギトギトめ！

ようやくカトレアと普通に話せるようになったり、ラッキーとかいうカラスの使い魔を大蛇の使い魔が飲み込んだりと色々あった。

とある日の昼時。

ギーシュとヴェストリ広場で話していると、サイトが給仕をしているのを見かけた。

シャステイルとヒスカもせっせと運んでいる。

ヴェストリ広場にもともと食事をするためのスペースは無かったが、外で食べるのもまた違った楽しみがあるだろうと言うことで僕が適当に外で机を用意して食べていると。いつの間にかヴェストリ広場での食事が普通のこととなった。

それにもなつて、メイドさんたちも食堂のみならず、昼時はヴェストリ広場にも足を運ぶ。

余計な仕事を増やして申し訳ないです。

ちなみにヒスカ達は頻繁にナンパされるそうだが、僕の名前を出すだけでイソイソと逃げ出すそうである。

下手に手を出すとボコボコにされると思ったのだろう。
なんか複雑だ。そこまで怖がることもないと思う。
ちよつと傷つく。

「で、ギーシユ。」

モンモンとはどこまで行つたの？

あの後、僕には“君が泣いて羨むほどにラブラブになってあげよう
じゃないか！口先だけではないということを示レで証明しよう！！”
”とか言つてたくせに。”
「ふっ。」

今はケティとの間柄を深めているところなんだ。

モンモンとはじつくりやっている。」

「・・・うわ、最低。」

「な、何を言う！？」

薔薇は多くの人を楽しませるために咲くのだからね！？」

「いや、子孫を残すためだろう・・・受粉して、種を作って・・・
なんだ、そのほぼ100パーセント人間の身勝手な理屈は。」

「そういう話じゃないよ！？」

真顔でツツコまないでくれたまえ！あくまでも喻えなのだから！！」

ぷっ、薔薇もいい迷惑だな。

「笑うことないじゃないか！？」

「すまん。真顔で酷く滑稽なことを言う物だから。」

ギーシユ、お笑い芸人になれ。天下取れるよ？多分。」

「これくらいで取れたら本職の人に申し訳ないだろ！？」

僕は真面目に言ってるんだよ！？」

「さいですか。」

なおのことたちが悪いな。

あ、このケーキ美味しい。

うん、デリシヤス。

うむ、シェフを呼び！！

これを作ったシェフを呼びええええええい！！

「き、君は僕を惚れさせたいのかね？」

そんな可憐な笑顔でケーキを・・・」

「はあ？」

何の話だ？」

頬を染めるな。気色悪い！！

「いや、なんでもない。

・・・男だ・・・目の前の彼は彼女ではない・・・男だ、男、男なのだ・・・」

「何をブツブツと？」

まあアホは放っておこう。

というか、周りの視線もどことなくうつとつしいような？」

何かしただろうか？

ギーシュがうるたえていると、ポケットからなにやら香水らしき物が落ちる。

あれは・・・モンモンのかな？

そこへサイトがスツと来て。

「落とし物だぞ。」

と、言った。

しかしギーシュは振り向かない。

なおかついつの間にかケティ・・・だったか？

貴族の女の子が1人、こちらに向かっていた。

なるほど、決闘イベントだな。これが原因でシエスタから好感を受ける。

それはルイズのためにも避けたい。

どうするか？と考えたが、今のギーシュなら大丈夫かな？ということとでとりあえず傍観に徹する。

「おい、落とし物だったの、色男。」

僕を一瞥しながらサイトはそう言った。

ちなみに僕とサイトはあまり話していない。

自己紹介をした程度で、サイト側も僕の放つ無自覚の殺気を苦手としているらしく、「よう、エンデ、おはよう。」と言っただけで終わる。特に話題もないしね。

なんというか、浮気性でルイズを喜ばせつつも悲しませる原因だと思つと、どうも好きになれん。

むしろ殴りたくなる。

サイトはそれでも僕に話しかけてくるわけだが・・・多分同じ召喚された人間として・・・同じ境遇の人間として仲間意識を持っているのだろつ。仲良くしたいと思つてるんだろつね。

まあいいけどさ。

「こ、これは僕のじゃない・・・え、エンデのだよ！」

冷や汗を垂らしながら、悔し紛れにそう言ったギーシュ。

ケティもギーシュの隣でなりゆきを見ていた。

てか、僕を巻き込むな。

僕はケーキに夢中のフリをして、スルー。

浮気をするお前が悪い。適当にケティに懲らしめられるが良い。決闘さえなければどうでもいいのだ。ぶっちゃけ。

それを除けばむしろ僕はサイトの味方である。紳士として浮気は許せん。

「いや、お前のポケットから落ちたのを見たんだが・・・エンデのなのか？これ。」

「いや、香水とか体に塗ったくるものって僕は好きじゃない。」

ワックスとかも一度もつけたことはなかった。

ハンドクリームなども嫌いだ。

体になんか付くのが嫌いな僕である。

なりゆきを見ていた周りのギーシュの友人達が騒ぎ立てる

やれ、モンモンの香水だ、やれモンモンと付き合っているのか？やれ、モンモンという恋人がありながらうんぬんかんぬん。やれ、モンモンやエンデのような美少女を囲っておきながらうんぬん。僕は男だが。

騒ぎ立てているのは殆どがブサイクな輩である。

心までブサイクなんだな・・・こいつらは。

とか思いつつ。僕は素知らぬフリをしてケーキを食べ続ける。ショートケーキが特に好き。

「ち、違う！

彼女の名誉のために言っておくが・・・」

「ギーシュ様・・・やはりミス・モンモランシーと・・・」

「け、ケティっ！？」

ち、違うんだ・・・これは・・・僕の心はすべて君の物だ！！」

近くにいたこと、気づいてなかったのか。

はらりと涙を一筋垂らし、ケティは走り去っていった。

・・・もつといい男がいるよ。うん。
というか、彼女はサイトにもなんか良い感じの好意を寄せるように
なるはずだ。

なんだかねで、カツコよければ誰でも良いのかも知れない。

そして、遠くからカールが見事な金髪の女子。

それがカツカツとギーシュに歩み寄ってきた。

言わずもがなモンモンである。

「やっぱり、一年のあの子を口説いていたのね・・・」

「それもまた違うんだ!!」

可憐な君の顔を怒りでゆがませないでーっ！ぶばっ!？」

「僕の紅茶・・・」

「うそつきっ!!」

机にあった僕の紅茶を掻っ攫って、それをズビシャツ！とギーシュ
にぶちまける。

僕の紅茶が・・・そしてどんな理由があろうと食べ物と粗末にする
のはいけない。

モンモンに一言言ってやろうと思ったが涙を一筋流すモンモンを見
て、固まる僕。

モンモンはうそつきと吐き捨てて、走り去ってしまった。

“うそつき”という言葉にどんな感情が込められているのか。
ちょっとそんなことを思った。

この短時間に2人の女性を泣かすとは・・・なんて最低なヤツだ、
ギーシュ!!

もとい恐ろしいぞ!!

「ふう・・・彼女達は薔薇の存在意義を理解してないようだ。」

「少なくとも人間の女性を喜ばせるためじゃないぞ。花粉を集めに来る昆虫のためだろう。ちなみにナナフシという昆虫はバラ科の植物・・・バラやミニバラ、桜なんかを主食にするんだ。イチモンジセセリの幼虫なんかもそう。」

ハンカチを取り出して、黙って顔を拭くギーシュ。

僕のツツコミ兼うんちくはスルーされた。ちよつと悲しい。

「・・・付き合ってられねえ。」

あからさまなギーシュの女性関連のだらしなさにサイトは呆れた目を向けて再度給仕を続ける。

僕も同感である。

本当、これがなければ良いやつなのに・・・もったいない。

「待ちたまえ。」

「なんだよ?」

ギーシュとサイトが少し険悪なムードになる。

決闘とか・・・言い出さないよね?

「君が軽率に小瓶を拾い上げたせいで2人の女性の名誉が傷ついた。どうしてくれるのかね?」

八つ当たりはみつともないぞ、ギーシュ。

「二股かけるお前が悪い。」

そのとおり。

リアルな修羅場を見て、黙っていた周りの友人達が再度騒がしくなる。

あの平民言うなあとかギーシュが悪いとか、確かにとか。

「いいかい？

ヒリガル君。

君が机に小瓶を置いたとき、僕は知らん振りをしたじゃないか。知らないフリをしてくれる機転があっても良い筈だ。」

「どのみち、二股なんてばれるよ、ギーシュ。

ついでに言えば、あんたにその甲斐性は無い。と僕は思う。」

「エンデ！？」

君はどつちの味方だね！？」

「俺の味方だろ？」

ありがとう！エンデ。

そして、俺の名前はヒラガサイトだ。

ヒリガルじゃない。」

一途な男の味方だ。

よってどちらの味方でも無いと言っておこう、サイト君。

いや、わざわざ言わないが。

「ふん。まあいい。君のような得体の知れない男に期待をした僕が間違いだったね。

・・・いきたまえ。話は終わりだ。」

平民蔑視が普通の貴族ならこの場でサイトをけちよんけちよんにするとこなのだが、僕がいないもとの世界でもギーシュはこんな感じでサイトを逃がそうとしたっけ。

なんだかねで自分が悪いということとは理解してるのかもしれない。

そこはちょっとだけ見直した。

たとえ自分が悪くとも平民の言うことには耳を貸さないのが普通。その点で言えば、ギーシュはかなり良い貴族だ。

重ねて言うが、本当に残念なやつである。

この女癖がなければねえ。

あ、メイドさん。

・・・えーっと？イチゴちゃんだっけ？

チョコレートケーキもお願い。

「うるせえ。キザ野郎。バラでもしゃぶってる。」

「どうやら君は貴族の礼儀を知らないみたいだね。」

どうして、そう喧嘩を売るようなことをするかなあ。

あ、このチョコレートケーキ・・・美味しい。

はうあ・・・笑顔が自然とこぼれる・・・美味しい料理ってのは宝だね！うん！！

それにしてもサイト君。今のは単なる中傷。

ギーシュも怒って当然。その前のギーシュの発言もまあ悪かったけどさ。

どっちもどっちだなあ。

「あいにく貴族なんか一人もない世界からやってきたんでね。」

一応、地球にもどっかの国では貴族はいたはずだと思っただけ。

この世界ほどの身分の差はないと思っただけ。

「よかるう、君に貴族の礼儀を教えてあげようじゃないか。

丁度良い腹ごなしだ。」

「おもしろえ！」

貴族の礼儀は面白くないと思うぞ。
堅苦しくて。

てか、決闘すんのっ!?

ギーシュは椅子から立ち、翻る。

「逃げんのかよ!？」

「ふざけるな。」

食卓は食事を取る場であって、争う場ではない。

こっちに來い。

周りを巻き込まないように叩きのめしてやる。」

ちよつとカツコいいぞ!!ギーシュ。

ちなみにシエスタとサイトの面識ははまだ無い。

フルーツの偏在で妨害したり、ルイズの平民蔑視の意識が弱まったことによつてマルトー達に賄を貰う機会が存在しなかったり。

ここまでは概ね順調である。

ゆえに、ここでサイトが勝ってしまったても大きな問題は無い・・・
と思うが念のためだ。

ギーシュに剣を渡さないように言つて、サイトは負けてもらう・・・
と思つたのだが、それではガンダールヴの力を自覚する機会が無くなる上に僕の周りにいるギーシュ達以外の平民に対する印象が変わらない。

将来的にはそれは困る。かといつて、勝つてしまつと貴族を平民が倒したとしてシエスタの好感度を上げてしまふかもしれない。

これから先、彼女とサイトが接触しないと限らないし。さて、どうしようか。

と悶々と考えているとルイズがサイトになにやら言っている。

絶対勝てないとか、そんな感じだろう。
説得が無理だったのか、僕のほうに走り寄ってくるルイズ。

「エーデ姉様からも言ってる!!」

あの馬鹿、言うことを聞かないの!!

し、死んじゃうって言ってるのに!!」

「・・・大丈夫だよ。」

なんだかんだでギーシュは良いヤツだからね。

少なくとも殺すことは無いはずだ。

傷なら僕が治せるし、いざとなったら僕が止める。」

「どうして!？」

どうしてあいつは止めないのっ!？

死ぬって言ってるのに・・・下げたくない頭は下げられないとか・

・変な意地を張って!!」

「男の子から意地を取ったら何も残らないよ。」

意地ってのは、男の子にとってはそれくらい大切なもの。

黙って彼を信じてあげる。

誰かの使い魔やただの平民じゃない。

他の誰でもない、ルイズの使い魔だろう?

主人が信じてあげないで誰が彼を信じるんだよ?」

「し、信じられる根拠が無いじゃない・・・」

「・・・ヘドロにまみれても、汚物に頭から突っ込むことになって

も、サイト君はギーシュに頭を下げないだろうね。」

「・・・どうしてそんなこと分かるの?」

「ルイズの使い魔だもの。分かるよ。」

ルイズを見てたら分かる。

全く持って同じタイプだよ。ルイズと彼は。」

という僕の言葉にルイズは何も答えず。一言言った。

「・・・怪我したらちゃんと治してね。」

「心配なの？」

「好きになっちゃった？」

「そ、そんなわけないでしょ!？」

顔を少し紅くしてそっぽを向くルイズ。

やっぱりツンデレなんだ。

生のルイズのツンデレを見れるとは、ちょっと感動。

「あいつ・・・私がまともに魔法が使えないって言っても、笑わなかったから・・・爆発させるだけなのに・・・馬鹿みたいに・・・尻尾を振る犬みたいに嬉しそうにやたらと興奮してさ。」

「・・・そ、それだけなの!！」

「ふふふ・・・はいはい。」

「わ、分かってる!？」

「エーデ姉様!！」

「分かってるよ。」

「そ、その顔は分かかってないじゃない!

あんなヤツ好きでもなんでもないんだからね!？」

まったく、可愛い妹だ。ルイズは。

やっぱり彼には勝って貰おう。

ルイズにいいところを見せるよ、サイト。

とかなんとかやってる間にサイトはボロボロになっていた。

展開早いなっ!? オイ!!

ルイズはいつ飛び出してもおかしくない。

というか、辛そうだ。

まあ、目の前で自分を庇ってくれた少年がボロボロにされてるんだから当然か。

とつかそんな顔をいつまでも見ていたくないので、助け舟を出すとしよう。

「ギーシュ、素手の彼相手にそれはいささか男らしくないと思うぞ。」

「・・・確かに、君の言うとおりだ、エンデ。」

さて、ヒリーガル君。

そんなになってまでがんばる君に敬意を表して一つ。ささやかな塩を送ろう。」

と言って、ギーシュは錬金で剣を一本作り出した。

「君がまだやるつもりならば、その剣を取りたまえ。」

ギーシュは剣を投げ入れ、剣はサイトの目の前で突き刺さり、聳え立つ。

「サイト！」

もう、あなたは十分やった！！

それを取ったら、今度こそギーシュは容赦しないわ！！

おねがいっ！もうやめて！！」

ルイズが我慢なら無いという様子で叫び、サイトを止める。

が、彼も男の子だ。

女の子にそんな風に庇われて黙れるような性格ではないだろう。

こいつもまた浮気性さえなければいい男なんだけどなあ・・・本当に。

なんでこう、もったいない男ばかりなんだ？

この世界は。

「別にいいさ・・・ルイズが俺を呼んだってのも良い。母ちゃんや父ちゃんに会えないってのも、仕方ない。」

あの魔法は誰かを任意に呼べるってもんじゃない。そうエンデから聞いた。

ルイズは悪くねえ。仕方ない。それなのにルイズは俺の面倒を見てくれてる。

本当にありがたい。

出会って間もない俺なんかのために心配してくれる優しいご主人様だ。

そんなルイズのお願いだ。

聞いてやりたいさ。

でも、悪い。それは聞けねえ。

後で召使いだろうとなんだろうと俺に出来る限りはなんでもやってやる。

だから許してくれ、ルイズ。

さっきも言ったけど・・・俺はな。

どこまで行っても、どんな世界だろうとも男なんだよ。

よくも悪くも男の子なんだ。

下げたくない頭は下げられないし、一度張った意地を途中でなかったことにするなんてこともできねえ。

だから、ルイズ。

わりい。俺はこいつをぶつとばす!..!」

そんなサイトを見てか、ギーシュの目の色が変わる。

サイトを敵と認めた目だ。

なんだかんだで、熱い男の子だなあ・・・ギーシュも。

「・・・僕の名はギーシュ・ド・グラモン。グラモン家の末っ子だ。君の名を今一度、聞こう。」

「俺の名前はヒラガ・サイト!..!」

しがない地球人だっ！！」

一息に剣を抜くサイト。

吼えるサイトに呼応する様に左手が、まぶしく光り輝く。

そして、瞬時に加速する。

周りのギャラリーたちもそのいきなりの動きにどつとぎわめく。

ギーシュのゴーレムを一息に切り裂き、そのままギーシュとの距離を詰めようとする。

ギーシュもいまだ未熟と言えど、軍を取り仕切るグラモン家の血を引くだけのことはある。

虚を付かれてもすぐに反応し、自身に出せうるゴーレムを一気に作り出す。

サイトを敵と認め、侮ることを止めたという面もあるのだろう。

ギーシュは多少の遅れはあれどしっかりと反応した。

にも関わらず、サイトは1体、2体とゴーレムを次々に斬り捨てる。それを見たギーシュはゴーレムを全て崩し、再度一体を作り出した。おそらく複数に向けていた精神力や集中力を一体に集中させてサイトとやり合わなければ負けると判断したのだろう。その判断は正しい。

ギーシュのゴーレムは一体のみに全神経を集中させて操った結果、サイトの動きにかろうじて付いていけるが残念ながら数秒した後、に切り捨てられる。

そのままギーシュに接近したサイトはギーシュの杖をも斬り捨て、一言。

「まだやるか？」

「ふっ……見事だ。完敗だよ。」

その決着を見て、ギャラリーが今まで以上に沸く。こうして決闘騒ぎが終了したのだった。ちなみにシエスタはフルーツの偏在を通してシヤスタイルにお願いして、遠ざけてもらっている。生で見るのと又聞きでは憧れの度合いを低く出来るだろうと考えた結果である。

ガンダールヴの力を持つサイトの實力を見れたのもラッキーだった。僕の雷神降臨と同じで肉体のリミッターを外すようである。とはいえそれだけだ。

僕がサイトに迫るフラグを叩き折る以上、ルイズの魔法はほぼ使えない。その分、サイトには強くなってもらわないと困る。

どんな相手からもルイズを守るように・・・というわけで、サイトを鍛えるメニューを考えつつ。

僕はサイトに駆け寄り、治癒魔法の準備をするのであった。あ、気絶した。

23 ページ目（後書き）

セセリチョウの仲間は鳥の糞に自分のおしっこをかけて吸うという特徴的な生態を持ちます。

恐ろしいゲテモノ食いだぜ・・・

24 ページ目 (前書き)

今回はちょっと感想でエンデにはネコミミが似合うんじゃないか？
という方が居たので、絵の練習がてら書いてみた。

あとがきに掲載してます。

希望があれば色を塗るかも？

そして重ねて言いますが、トーシロの絵なんざ見るに耐えんという
方や、すでにイメージのある方、男の娘という設定を無視している
方はお手数ですが挿絵設定をOFFにしてからご覧下さいませ。

ちなみに、絵は右手とアゴのラインだけトレスだったりするww他
は普通に書いたのだが・・・どうだろうか？

24 ページ目

「ぐあつ!?!」

「大振りで来るなって言ってるでしょうに。」

現在、サイト君を鍛えてる最中である。

もちろん物音を気にして誰かが来ないように周囲にサイレンスをかけて、一種の結界みたいな物をつくっている。

サイレンスをそのままかけてしまうと僕たちまで会話できないので、サイレンスの有効範囲を四角い箱のようにして箱の面の部分にのみサイレンスを使っているわけである。

「いててて。」

「どうしても大振りになっちゃうなあ。」

この世界では色々な理由で簡単に死んでしまう、何かを為すにも生きるためにも力が必要だ、とサイトを軽く脅して訓練をするようになった。

僕としてはもちろんルイズ、ひいてはカトレアのためであるが。

現在のサイトの訓練は体力づくりが八割。のこりはひたすら組み手である。

「わりいわりい。」

「つい、ここだつて思うと・・・な。」

「単純だねえ・・・隙を見つけるまでは良い。」

ついこの前まで素人だった君がたった2週間ほどで隙を見つけれられるようになるのは、かなり才能がある方だ。

でも、その隙をわざと作り出して相手の攻撃を誘つやつも出てくる。というかそこそこ強いやつだとだいたい使ってくる。

すなわちフェイントだね。

そこで大振りの攻撃を出してしまうと、カウンターを受けることになる。

そうしたら速攻で殺されちゃうよ？

フェイントと本当の隙を見極められるようになるまで大振りの攻撃はしちやだめ。

というか、人間相手ならほぼ大振りな攻撃は必要ない。急所を狙えばいいんだからさ。」

「うぐ・・・ああ、分かってるんだけどさ。

それに急所って・・・狙ったら死ぬ・・・だろ？」

「ああ、だね。

でもそんな甘いことを言っていれば自分が死ぬ。

相手を殺さずに止めるというのは単に殺すよりもはるかにテクニクがいることだ。

そんな戯言をほざくくらいならとっとと、鍛える！

相手を殺さずにいけるくらいに強くなるしかない。」

「・・・ああ！！」

筋は良い。

というか、かなり良い。

さすが接近戦主体の使い魔として選ばれただけのことはある。

剣の才能を見出されてわざわざ他の世界から呼び出されてきたのだろつ。

最近はエルザも自衛として鍛えているのだが、反射神経が並みじゃない上に元々剣を扱う才能があったようで、ヒスカと特訓中。

めきめきと力を付けている。

ナイフは並みだった。

ちなみに僕は才能で言うならナイフはそこそこ。剣は並み以下という程度。

どうしてこう、僕の周りには超天才型ばかりなんだ！！

ナイフだってそこそこは言え、それはあくまでもシヤスティルと比較したからであり、世が世なら最強の使い手になれたらうに・
・シヤスティルの才能には適わないという。
なんでやねん!?

天才に嫉妬する秀才の気持ちを理解できる気がする。

やっぱり世界には天才ってのはいるもんなのだ。

あ。

また、大振りだな。癖だなこれは。

少し荒療治でもする?

大振りで攻撃をすると致命傷を受けると体に覚えさせるのも良いかも知れない。

ふふふふ、・・・斬り捨ててみる?

どうせ治せるし。

いや、まあそれはもう少し経ってからでも良いかな。

やり過ぎでやる気を削いじゃうかもしれないし、今はまだ動機が弱い。

やるとしたらしっかりとルイズに惚れてもらってからにしよう。

「てい。」

「ぶわっ!?!」

足を引つ掛けて盛大に転ばす。

「くそあつ!!」

ギーシュには余裕で勝つたのに!!

エンデにはどうしてかすりもしないんだ!!」

さすが男の子。悔しさが良い具合にやる気へと変換されてるようで何より。

ルーンの力は上げ下げが激しい。
通常時のテンション時が身体能力が2倍。ギーシュとの時は3倍。
つてところか。
通常時でもワルドと互角の勝負をしてくれるくらいまでには育って
もらわないとね。

「身体能力だけの素人に負けるほど柔な鍛え方はしてないから・・・
というか、そうそう追いつかれたら、僕は泣くよ？」

才能があるにしろ、僕は幼い頃から鍛えてきたのである。
そうそう負けるわけにはいかない。

「今日はこのくらいにしておくか・・・素振りを忘れないようにね。」

「俺・・・進歩してんのかな？」

「してるよ。」

着々とね。サイトには才能がある。

自身を持つといい。」

微笑んで、そう言ってあげる。

ルーンの力もそうだが、サイトの性格自体落ちと上がりが激しいお
調子者だから・・・精神面でのアフターフォローまでしなくちゃな
らない。

良いヤツなんだが、非常に面倒なヤツでもある。
頬を染めて（なんでえ？）、サイトは頷いた。

「お、おう・・・あ、ありがとう。エンデ！」

エンデくらいの美少女にそう言われると俄然自身が出てくるぜ！！
ルイズもこのくらい優しければ良いのに・・・」

「ルイズは素直じゃないだけだよ。」

・・・そして僕は男だ。」

なるほど。

訓練中や特訓をすると言ったとき、変に渋ったり、顔を紅くしていたのは僕を女だと勘違いしてたからか。

納得がいった。そういえばサイトには男だと言ってなかったな。

毎回、初対面の人と会う度に男だと注意を言っておかなくちゃいけないのだろうか？

難儀な顔である。

というか、今までの振る舞いで気づいてなかったのか？

「はっ？」

「んじゃ、また明日。給仕のバイトもかんばって。」

ちなみにサイトが給仕をしているのは女の子に世話されてるだけでは面目ないかららしい。

自分のメシ代くらい自分で稼ぎたいのだろう。

本当、浮気性さえなければねえ・・・いい男だ。

そんな日々が過ぎていったある日のこと。

「お兄ちゃん、これ。」

「ん、何々シャスティル・・・今日は休日だし、まだ寝たいんだけど・・・」

「ショートケーキ作ったから・・・早く起きないと上げないよ?」

「なんですとっ!?!」

それを早く言え!?!」

虚無の日の朝。

カトレア達はまだ寝ている。

基本的にその日の朝ごはん当番が皆を起こすのだ。

ケーキをもぐもぐしながら、カトレアの寝顔を見ると……うう……唇に目が言つて……つい……

「お兄ちゃん？」

「はっ!？」

いや、キスを思い出してなんかならないからなっ!？」

「……不潔。」

「不潔言っつな!？」

ジト目で見てくるシヤステイル。

シヤステイルは一息吐いて。

「パパからの鷹便が来てたよ。

なんか緊急の用事みたい。」

「父上から？」

珍しいな……僕に頼らざるを得ない事態になるまで父上が放っておくなんて。」

緊急の用事とあれば、まずいい報告ではないだろう。

そして親ばかな父上のこと。

例え何か困ったとしても学園で励んでいる僕にわざわざ手紙を寄越してまで何かをさせることはまずしないハズ。

僕に苦労をかけようとはしないはずなのだ。

なのに緊急の用事ということは僕の力がなければいかんしがたい何らかの問題があるということ。

そしてそうなる前に大抵のことは対策を練り、そもそもそうした大

きな案件になるまで放っておくことを良しとしない人だ。かなり大きな連絡であることは想像するに難しくない。

「え……っと、拝啓、愛しの息子達へ。」

お前達が変な女や男に捕まっていけないか心配で心配でたまらない私だが……エンデは可愛いから変な男に絡まれたり……ヒスカは竜だが私にとっては大切な娘であり……シヤステイルに彼氏とか出来ただろうか？もしできたならエンデ。妨害をしなさい。私が許すから……カトレア嬢たちとは変わらず仲良く……あのクソバ……じゃなかった。カリン様もつと頻繁に遊びに来いと……」

手紙は二枚で、一枚目は全て僕たちに対する心配や病気をしてないかとか、友達とは相変わらず元気になっているかとか……はつきり言っただけか丸出しな文面だった。

夏期休暇時に戻ったときはここまであからさまな感じは無かったのだが……手紙になって、ついつい内心が溢れて止まらなくなってしまったということだろうか？

全く。心配性な父上である。

ちよつとうざいけど悪い気はしない。シヤステイルもまんざらではない様子で“パパツたら……私の旦那様はお兄ちゃんなのに……馬鹿ねえ。”と苦笑していた。その発言に僕は苦笑していたが。

とりあえず、触れないで置こう。下手に弄るとなんか余計なトラブルを招きそうだから。

二枚目から本題のようで、まとめると隣の領主がうざったくなくなったからいつだったか？

セキリアメーバとか言う毒物……じゅなくて原生物とか言ってたか？それを使って病気を引き起こして領主を降格させて欲しいとのこと。

僕がトラブルがあるたびに行くユワツシャー村。

あそこはもともと隣の領から逃げてきた難民であり、最近ほとんどその数が増えてきているというのだ。

最近では続々と村が立ち上がってるそうので、デモンズソウル村なんてのもあるらしい。

村のいたるところに“心が折れた”、“これを見てる場合か？”、

“かぼたん萌え”、“ソウル体生活も長くなった”、などの落書きがあるそうなの。

何その村？怖い。

領内が活気で溢れるのはいいのだが、このままでは隣の領に残った人たちがより搾取されかねない。

平民が減れば当然のごとく税収も減る。税収が減れば税が上がる。

税が上がれば数の少なくなった残りの人たちは数が減った状態で増えた税を払わなくてはいけない。そうなれば税が払えなくなり難民が出る。逃げ出す。後はこれのループである。

野党に身をやつす輩も多くなっているようで、平民の中には襲われたり、奴隷として売られた人達も出てき始めているという。

もちろん隣接しているレイフォール領にも野党は増える。

だまってやられるわけには行かず、警備や傭兵を雇うことによって出費が増える。

平民も村の外に1人ではむやみやたらと出ることが出来ず、商人が行き交う人数、回数も自然と減る。

家の経営にも影響が始めてきているとのことだ。

このまま看過するにはあまりにも酷いということと2年前には父上がすでに直談判に行ったのだが、改善のほどが全く見られず、いい加減あれを引きずり落とそうという話になった。

そこで必要になったのが僕が作った赤痢せきりアメーバの改良型である。

領地経営どころではなくして、そこに父上の配下にある貴族をあてようというわけだ。

下痢だけで領を明け渡すことにはならないと思うのだが・・・そこは父上がなんとかするらしい。

暗殺をしちゃった方が早いんじゃないかと思っただけど、きっと父上はそうすることを僕に求めたくはなかったのだろう。そんな背徳的なことを進んで息子に望む親はいまい。その気遣いに感謝しつつ。僕は手紙を閉じた。

「二枚目はなんて？」

「隣の領がうざいから領主をこらしめろ・・・かな？簡潔に言っと。」

「ああ・・・確かにね。あそこド・ロレー又領って名前だっけ？

酷いもんねえ・・・私達の領にまで被害が来たってとこ？」

「さすが。シャスティルは頭も良くて、お兄ちゃんとして誇らしいです。」

シャスティルの頭をなでなでしながら、僕はそう言う。少し頬を染め、シャスティルはそっぽをむいて俯いた。うん、可愛い。

「で、忍び込むの？」

「・・・嬉々とした笑顔でそういう不穏なことを言わないでよね・・・まあ忍び込むだけだよ。」

目立たないように使用人の服装で、厨房に。

そのまま料理にアメーバを混入。こんなところかな？」

「面白そうね・・・私も行くからね！！」

「・・・物好きだなあ。」

「あらあら？」

なかなかいけないことを考えてるのね？」

「か、かとれあつ!？」

お、起きてたの!？」

ちなみにヒスカとエルザは爆睡中。

「そういう悪巧みはいけません……と言いたいところだけど奇麗事だけじゃ世の中は回らない物よね……動物の世界も一緒……悲しいことに。」

「カトレア？」

少し悲しそうにするカトレア。

「エンデ達みたいな誇り高い貴族だけだったら良かったのにね。」

「……僕って誇り高いか？」

「お兄ちゃんの誇りか……貴族にとっての誇りってなんだろうね？」

貴族にとっての誇り……ね。

考えても何も思いつかん。

「そんなこと言われても……意外と分からん物だ。」

「エンデの誇りなら私……分かる気がするの。」

「僕自身分からないのに!？」

「……くっ!」

何、その“私は旦那を理解してる女”然とした態度は……これはなかなかのジャブね!!

でも私は負けない!!」

今のカトレアはそういう態度なの!？」

「僕の誇りって何？」

「秘密。」

「僕の誇りなのに秘密にされたっ!？」

「とうかなんか馬鹿っぽい会話だなコレ!？」

まあいいや。なんか僕が自分のこともろくに分かってないニブチン
みたいじゃないか。

とりあえずこの話題はおしまい。

「まあちょうど休みだし。

ヒスカに乗れば明後日には帰れるかな？

授業の休みの連絡は・・・まあいいか。

面倒だし、サボったってことで。」

「エンデ、それはダメだと思うわ。

ちゃんと説明しないと先生だって心配すると思う。」

「いや、別にこのくらいなら・・・。」

「エンデ。」

「はい、わかりました、カトレア。」

「よろしい。」

・・・なぜか逆らえない。

「こ、これはあああつ!？」

“旦那を尻に敷く若奥様”の図!？」

み、見事なボディブロー・・・私は・・・ノックアウト寸前よ・・・

「

「さつきから何を言ってるの？シヤスティルは。」

馬鹿だな、我が妹は。

だが、そんな妹も可愛い。
アホっ娘というやつだろうかばあずっ!?

「生暖かい視線は止めて。

馬鹿にしたでしょ?今?」

「ああ・・・確かにそれはすまんかった。

しかし、鳩尾に蹴りをくれるのはどうなんだろう?」

「何言ってるの。」

私のパンツ見て少し顔を紅くしてるくせに。」

「な、なななにやにをいつてらっしやるのかなですかっ!?!」

ちよっとドキっとしただけでそれ以上のやましい気持ちはないぞ!?!
ホントだぞ!?!

「私のも見る?」

そ、その・・・産まれたままの姿で。」

顔を紅く染めて感じてそう言うカトレア。

冗談でもそういつの止めてっ!?!?上目遣いだし!?!

すっごい心臓に悪いです!?!

バクバクですよ!?!

「い、いいいえ!?!

遠慮しておくよ!?!

ていうか、何を言ってるの!?!?

カトレア!?!

恥女!?!

恥女なの!?!?」

動転してもう何がなにやら。

「・・・そう。」

僕の恥女発言を受けて目を伏せてやたら悲しそうにするカトレア。
これは新しい反応だ!?

というか、そんな悲しそうな顔をされるのはちよつと!?

「私の裸は・・・シヤスちゃんの下着にも劣る物なのね・・・」

「・・・最低ね、お兄ちゃん。」

「えええええええつ!?!」

いつのまにか敵が僕になつてる!?

「女心が分かつてないのよ・・・お兄ちゃんは。」

カトレアが恥女なわけないでしょ?

お兄ちゃんが相手だから恥ずかしいのも我慢してーひあんつ!?

ちよ、ちよつと何するの!?

カトレアつ!?!

「そ、それ以上は・・・言わないで。お願い・・・は、恥ずかしいから。」

胸の前で手を合わせてもじもじするカトレア。

やばい・・・大きなお胸が右往左往して自由自在に形を変えて・・・

シヤステイルの話が耳に入らなかった。

というか、何?この乙女?

僕を萌え死にさせる気?

死ぬよ?マジで?

というか・・・胸が・・・ですとろい。

「・・・お兄ちゃん、鼻血出てる。」

・・・えっち。というかいまどきこのくらいで鼻血とか・・・」
「え、えっちとか言うな!？」

えっちとかじゃなくて男として仕方なくてだね!？」

というわけで。

そんなハプニング(？)もありましたが、ヒスカに乗って現在、僕はヴァリエール領を除けば初めての他の領に来た。

いくら酷かろうと、その領独得の空気を味わえるかとちょっと楽しみだったんだけど。

「痛い目に遭いたくなかったら、金目の物を出せ!！」

楽しみした僕が馬鹿だった。

24 ページ目 (後書き)

ちなみにエンデのイメージは妖精のような美しさを持つ美少女に見まごうような美少年、もといサモンナイト4のエニシアだったりするのだが、まるで似てないww
うる覚え良くないねww

> i222995 — 2238 <

書きなれないキャラはその時々によって別人に見えてしまうという困った癖を持つ僕ですww

トレス元に引つ張られたというのもありますけどね。

25ページ目(前書き)

主人公にメイド服を着せたかっただけという。

結果、微妙な話になった。

当初はメイドとして潜入を一ヶ月くらいする予定だったりWWW

25ページ目

「どうする？」

「お兄ちゃん。」

「・・・どうしようか？」

「ぶっ飛ばしちゃえばいいと思うよ、私は。」

「ヒスカは単純だなあ・・・まあそうするのが一番なんだろうけど・・・この人たちも被害者だろうしな・・・大きな怪我はさせないよ
うに、適当にのしちやおう。」

「了解。」

「・・・ぶつとばしちゃダメなのね。」

適当に野党を気絶させてから僕達はそのまま領主の元へと向かう。

いつものようにメイド服を着たヒスカとシャスティル。

最近この2人は私服ですらほぼメイド服と化している。

・・・そして不本意ながらも僕もそうだった。

女装した理由は単に変装という意味で。

フェイステンジで髪の毛を黒色にしている。

これならたとえ姿を見られても僕達だとは分からないだろうということ。
こと。

顔はわざわざ変えなくても良いだろう。髪の毛を変えるだけで結構
別人のように見えるし。

顔を変えるのって結構面倒なのである。

人の顔の造形となるとイメージがなかなか難しい。面倒なんで手抜
きした。

髪の毛の色が違うだけといっても、ヒスカやシャスティルの姿がこ
れまたいつもと違って新鮮である。

僕の女装は性別すら誤魔化すため・・・という建前だ。

単に面白がつてヒス力達が僕に着せたという意思があることは否めない。

まあ・・・ネグリジエを初めて着せさせられた時に比べればこのくらいはね・・・ぐず。

泣いてはいないぞ!?

泣かないんだからな!?

だって男の子だもん!!

「あだつ!?!」

「お兄ちゃん・・・馬鹿なことをぐちぐち言っていないで、とっとと済ませて帰ろう。」

「ここ・・・あんまり長居したくない。」

「それは僕も同感だが、最近、ツツコミが暴力的になってきてお兄ちゃん悲しいです。」

「お兄ちゃんが馬鹿なことばかり言っていてふざけるからでしょ。」

「一応・・・真面目に言ってるんだけども。」

「エンデたちは本当に仲良いね・・・」
ほら、ついたよ。予定調和はそのくらいにしてとっとと忍び込もうよ。

私も長居したく無いし・・・そこらじゅうの排泄物が酷い・・・土に埋めなさいよって物申したくなる。

私達、竜にも劣る清潔意識ってそんだけって話よ。」

「それだけ領主が馬鹿なんだろう・・・というか、そこまで気を回してる余裕がないんじゃないかな。」

さすがに酷くなりすぎたことで領主もこのままじゃダメだと気づいてるだろうけど・・・復帰の仕方が分からないから放っておくしかないんだらうね。」

「本当にメイジってろくなヤツが居ないよね・・・お兄ちゃんたちを除いたらさ。」

王族ですら・・・確か跡継ぎが居なくて、戴冠式も無いんだよね・・・
・マリアンヌ王妃が継ぐべきなのに・・・未だに喪に服してる・・・
トリストインの腑抜け具合には嫌になっちゃう。
ゲルマニアに生まれたかったなあ・・・私。
そしてお兄ちゃんと幸せに暮らすの。
子供は男の子が1人で女の子が1人。
ペットは・・・フルーツでいつか。」
「・・・ツツコマないよ？」
「ん？」
別にボケてないけど・・・どうしたのお兄ちゃん。」
「・・・まあいいです。」

聞こえなかったことにしておこう。うん。

「おじやましまあーす。」
「おじやましますも何も無いけどね。」

今更だけど、料理にアメーバをしこんだとしてもそうなると厨房の
人が疑われて、下手をすれば殺されるんじゃないだろうか？
ううむ・・・ちょっとそれは嫌だな。

「あえて見つかるべきかな・・・ここは。」

怪しい人間がいれば確実にそっちに疑いが行く。
でも、父上からは出来るだけばれないようにと言っていたし・・・
どうしようか？

まあ、出来るだけ・・・だしね。
ばれちゃってもいいか。

さっきの野党から聞き出した領主の屋敷の窓を開け、忍び込む。

「僕は敢えて他の使用人達に見つかるように動くから、二人はこっそりと厨房に行ってくれろ？」

「パパから言われたこと忘れたの？」

私達は使用人に扮してるとは言え、あくまでも見つかったとき誤魔化せるようにするためであって見つからない分にはそれはそれで万々歳なんだよ？」

「でも・・・厨房の人が・・・」

「何を言ってる・・・ああ、そのことね。」

それなら大丈夫。

すでにパパが手を打ってるから。」

は？

「ハンニバルから聞いてないの？」

すでにこの屋敷の人たちは買収済みだっただけのこと。」

「・・・ほんと？」

2人して、「こいつ作戦の説明を聞いてなかったな？」みたいな目で見てくる。

聞いてたぞ!？」

概ね聞いてたけど、その辺の部分だけまたま聞いてなかっただけで・・・ちよつとフルーツが飛び乗ってきて・・・可愛くて・・・つい撫でるのに夢中に・・・ぼ、僕は悪くないんだからなっ!？
フルーツが可愛いのがいけないんだ!!

「聞いてないんじゃない。」

「・・・ごめんなさい。」

はい、すいません。

悪かったです。
ていうか父上凄いですね。
根回しお上手。

「だから、飯に見られたとしても口裏を合わせてくれるわ。
分かってないようだから言うておくけど、要はこの家の血筋の人
間に見つからなきゃ良いの。
分かった？」

「はい、分かりました。

本当にごめんなさい。」

「全く……。」

父上から貰ったこの家の見取り図を開いてーー良く考えたら、買収したからこそ地図を持っていたんだよね、うん。気づくのが遅かったーー厨房へと向かう。

途中、メイドさんとすれ違ったが、会釈してそのままスルーされた。話を通っているのだろう。

「ここかな？」

厨房は……あつと、こんにちは。」

「こんにちは。

若様、お嬢様、ヒスカ様。」

厨房のドアを開くとメイドさんたちに迎えられて、頭を下げられた。

……領主……もといローヌさんよ。

ここまでされてなぜ気づかんだ……アホとしか思えん。

いや、それだけ切羽詰るとのことだろう……この領は。

本当に馬鹿としか思えない。

メイドさんたちから話を聞くと領主は今更ながらに色々頑張ってる

いる様だが、安定するまで向こう半年はかかるということ、そんなの見てられなくなった父上は領の乗っ取りに乗り出したそう。そして、この人達がレイフォール領から派遣されたという。もともといた使用人はすでにレイフォール領で最近出来たデモンズソウル村で幸せに暮らしてるそう。

メイドは普通に操を奪われ、執事は安い賃金で働かされる。そんな劣悪な環境から逃げれるなら・・・それも良心的だと評判のレイフォール領へいけるならと二つ返事だったという。ちなみにメイド達は全て魔法使い。フェイステンジで成りすましていたため入れ替わったことがばれない。

いつの間にか中身が全て変わっていたということだ。怖っ!!!

夜の相手をさせられないのか？と聞いたところ、妊娠してしまったということ、大きなお腹に偽装して避けたそう。

ご苦労かけます、皆さん。

「この避け方もなかなかどうして難しくなってきたところでしたから、ここらで来てくれないとちょっと覚悟しなくちゃならないところでした。フェイステンジはあくまでも視覚的なものだから・・・

もっと早く着て欲しかったですよ、若様。

俺達、皆男なんで・・・」

「・・・なんですとっ!？」

ま、まあ・・・ですよ。

母上がそんなことを許すわけないと思っていたが・・・そういうカラクリか。

ていうか、フェイステンジって本当に怖っ!!!

父上もしんどいことをやらせるものである。

使用人は20人ほどだと言うから・・・20人ほどの男に女装させ

て潜入させたとか・・・本当、ご苦労様です。

「まあ・・・同性でも行けるってヤツもいましたから問題ないと言えど問題なかったですけどね。」

「もし呼ばれたらその人たちが行って・・・まさかあの・・・あっちの方で・・・」

いや、止めよう!..!

考えるのは止めよう!..!

想像も止めよう・・・恐ろしいことだ!..!

下手に強者と戦うよりも恐ろしい・・・エルフと戦うよりも恐ろしいことだ・・・

「ええ、そのまさか。ケツを掘られにいかー!..!ぶるあつ!..?」

「言うなああああつ!..!」

そんなの聞きたくないいいいいいっ!..!

言うんじゃないよっ!..!ばかちゃん!..!

つい殴ってしまった。

「ご、ごぶっ・・・す、すみません・・・気遣いが足りなかったです。ね。」

「・・・あ、いや。こちらこそ・・・頑張ってもらってるのに・・・その・・・頑張ってください。」

とりあえず、話を変えよう。

忘れよう。

考えないようにしよう。それは。

「で、若様。

本題ですが・・・セキリあめーば？とかいう毒物はきっちり持ってきてもらえましたかい？

出来れば無味無色が都合いいんですけど・・・」

「ああ、ここに。扱いは注意してくださいね？」

触れた場合は良く手を洗って、間違っても口にしないように。

口にした場合、酷い下痢に一生悩むことになりますから・・・しかも多分僕にしか治せない状態になります。

もし誤って飲んでしまったら、僕のところに来てください。」

「地味に恐ろしいものですね・・・相変わらず。」

リッシュモンの時もそうですけど・・・市場に出回ってるものって基本的に殺すためのものですから単に下痢を起こすものだけの秘薬は無い・・・まずはねない憔悴薬って所ですか？

全く・・・若様の才能には驚かされます。」

「そ、そんなに凄いかな？」

「ええ、もちろん。」

俺達からしたらこんなの発想すること自体無いですよ。

一度作成法を聞きましたけど、俺達じゃ小難しく何がなにやらって感じですし。

だからこそわざわざご足労を願ったんですけどね。

なんにせよご苦労様です。

若様たちはこのままお帰り下さって結構ですから、あとは作戦の成功だけ祈っててください。」

「これだけなの？」

なんか拍子抜けしちゃうな？」

「そうだよね・・・ちよつと戦えると思ったのに。」

くそう・・・シャス、帰ったら組み手しない？」

男メイドが沢山居る中で、この場で唯一生粋のメイドである2人はそんな物騒なことを言い出した。

まったく、平和のありがたみってモンを分かってないなあ・・・

「んじゃ、僕達はコレで。」

何かあつたら作戦成功よりも自分の命を第一にね。」

「ええ、分かってますよ。」

旦那様にもそう言われてますから、心配無用です。」

何事も無く、細工は流々と上手くいき。

あとは帰るだけ、となったはずだったのだが。

帰り際、ちよつと・・・油断していたせいか、出くわしてしまったのである。

当主に。

この領主に。

ド・ロレーヌさんに。

「し、失礼します。」

とりあえずスルーして脇を通り抜けるべく、そのままそそくさと出て行こうとしたのだが。

「待ちたまえ。」

「は、はい。」

なんででしょうか?」

でぶでぶに太って気持ち悪い男がこちらを見てきた。

視線が気持ち悪い。

体を嘗め回すように上から下に視線をめぐらすデブ男。

実に気持ち悪い。

「見ない顔だな？」

新人か？」

「は、はい。つい先日雇って頂いた者です。」

くう・・・こいつぶつ飛ばしたい。

ていうか、やたら僕だけに注目がくるな・・・と思っただら、ヒスカとシヤステイルはすでに逃げていた。

あいつらっ!?!?

ずるいつ!?!

すでに廊下の影に2人して隠れてこちらを伺っていた。

ていうか、気づいてたら僕にもしっかり言っただよ!?!?

デブ男は僕のアゴに手をやり、ゆっくりと顔をめぐらせて僕の顔を横から見たり真正面から見たりと・・・実に気持ち悪いことをしてくれる。

蹴り飛ばしたい。

てか、気安く汚い手で触るなよっていう。

帰ったらまずお風呂に入ろうと誓う僕である。

蹴り飛ばすわけにも・・・いかないし。

不審者・・・ってことになる・・・こともないか？

単に使用人が謀反したってことになるかな？

「ふむ・・・美しくも可愛い娘だ。

・・・決めた。

伽の相手をせい。」

いやに決まってるだろおおおっ!?!?

僕が女でも嫌だよ!?!?

何を言い出すの!?!?このデブ男は!?!?

自分のツラみて言えよ、そういうことは！！
昔はなかなかイケメンだったような面影が見えるところから、尚
のこと残念だな、こいつ。

いや、中身がアレだから特別残念でもなんでもないか。

「あ、えと・・・その・・・そういうのはしたことが無くて・・・」
なんて言っただ断ろう？
ていつか、多分断れないよね？

「怖いので・・・できれば遠慮したいです・・・」
「なんだ？」

経験が無いのか？
ならば私が優しくしてやろう。
幸せ物だなオマエは。

この私の所有物になれー」
「も、も・・・もうだめええええええええええっ！？」
「ぶろがはああああああっ！？」

もうだめ。

蹴りが出てしまいました。
だって、臭い息を吐きながら汚い面を近づけて来るんだもん。
つい蹴っても不可抗力だよな？テヘ！
ていつか我慢したほうだ僕も。

女性を所有物と扱かすのもイラつくし、優しくしてやろうとか見当
違いも甚だしい。

僕の性別以前に、とにかく鏡を照らして話である。

そして・・・シャスティル・・・オマエまで出てきてどうするのよ？

僕の蹴りと反対側からのシヤステイルのとび蹴りが上手い具合にジヤストヒットである。

蹴りのサンドイッチを受けた領主様はノックアウトされてしまった。さて、どうしよう？

計画丸つぶれじゃない？

「お兄ちゃんに汚らわしい手でベテタと・・・殺してあげるわ・・・家畜にも劣る脂肪の塊が・・・切り開いてウェルダンにこんがり焼き上げてあげる。」

マジックナイフを取り出すシヤステイル。

おおいっ!?

暗殺しちやだめですよ!?

と言いたいところだが、僕がすっかりして見つかった手前あまり強く言えない。

とはいえ止めねばなるまい。とりあえずは。

背後から羽交い絞めにして、なんとか押しとどめる。

「お兄ちゃん!?

こゝ、こんなところで抱きつくのはちょっと・・・は、恥ずかしい。

ようやく私の魅力に参ってくれたのね!?

「激しい勘違いをしていらっしやる!?

凄い思考回路ですね!?

「始めての喪失が・・・こんな他人の家のベッドで・・・なおかつこの豚に見せるながらなんて・・・アブノーマルすぎるよおおおおお!?!」

「シヤステイルううううううううううう!?

戻ってこいこいこいこいこいこい!?

すっごい発想してる！？やばい発想してる！？

やめてええええええっ！？

そんなモジモジしながらやたらと生々しいこと言わないでっ！？

その思考回路こそ最大のアブノーマルと知ってくれええええっ！

「！」

僕は頭を抱えて、純真だった頃のシャスティルを思い出す。

その結果、僕の羽交い絞めから抜け出したシャスティルはナイフを領主に向けて突きつける。

思いっきり腕にぶつささる。

「次は足ね……。」

「うおおおおおいつ！？」

だからそれはらめなのっ！？」

「くっ！？」

復活が早いじゃないっ！！お兄ちゃん。

せっかくの私の……ち、痴態が無駄になっちゃっ！！」

なっんですと！？」

さっきまでの変な発言は全て演技！？」

僕の羽交い絞めから抜け出すための演技だったと言うのかっ！？」

そこまで計算してたなんて……なんて恐ろしい子！？」

そして、一発で止めを刺さずに、鬨り殺そうとしてるのもまた恐ろしい！？」

ちよっただけヤンデレの兆候が入ってないっ！？」

「ひいひいひいひいひいっ！？」

お、おいつ！？」

だ、誰かいないのかっ！？」

し、侵入者だっ！！！」

侵入者が出たぞっ!？」

どんどん悪い状態になっていつてるっ!？」

そう騒ぐなっ!！」

領主よっ!！」

えいりやっ!！」

「あがつ!？」

手刀で意識を刈り取る。

どたどたとやってきたメイド（男かつ父上の部下）がやってきて、事情を説明すると後始末は全てやっておくからどうかそのままお逃げくださいとのこと。

本当にごめんなさいっ!！」

こうして僕たちは成功とは言えない盛大な失敗をして帰ってきたのだった。

結局、領主様はその後アメーバに無事（？）寄生され、そこで父上がどどここの地で療養なさると下痢が治るとかなんとかと言いくるめて、そこへ移転させ、症状が軽くなるだけの薬を毎日部下のスパイを通して摂取させるということになった。

メイドが無理やり孕まされないように、その先、ロレーヌとかいうあのデブ男は性欲どころじゃない程度の下痢に苦しんだそうなの。

どうしてこんなに回りくどいことをしたかと言うと、領主が居ない

間に色々根回しをして、戻ってくる頃には自身の息のかかった部下を領に当てて、奪い取れるようにと考えてるらしい。父上は。

殺しても良かったのだが、そういう汚い手段は極力最後の手段としたいと言っていたが、母上曰く“親ばかなのよ、あの人は”だそうである。

僕のクラスメイトの親がアレらしく、たとえアレなヤツだろうとクラスメイトの親を暗殺したのが父親だというのは僕に変な気を使わせるだろうと言う事で、“暗殺やアメーバを使ってその子が学校に通うどころでは無くなる”ということにはしたくなかったのだろう。と母上は言っていた。

まあ、どんなに憎たらしいヤツでも自分が退学に追い込む原因を作ったとなるといささか気分が悪い。

息子のちよつとした不快感を避けるためだけに部下に苦勞を強いたり、徐々に領地を乗っ取るという面倒な方法を取るのだからこれを親ばかといわずになんと言おう、って話である。

475

そしてそんな父上の思惑を知っていて付き合ってくれる部下の方々。「若様のため。しかたありますまい。」「旦那様の息子のためですからね・・・ちよつとした不快感といえどそれを退けるといいうなら喜んでやります。」「若様には傷を治してもらった恩がありますし、ここらで少しでも恩を返さないかね!」という気のいい奴らが今回の作戦に協力してくれたのだった。

全くもって良い男ばかりである。

そしてその忠誠心。

これが領主の器の違いってヤツか。

とりあえず今回の作戦に加わった人が領に戻り次第、ケーキを焼いてあげようと思ったのは当然のことである。

というか、ロレー又なんてヤツいたかな?と呟くと。

「お兄ちゃんが引きこもりになるほどに追い詰めた人じゃない？
ヴイリエ・・・とか言った格好だけのヘタレよ。」

キュルケのドレスを切り裂いたりした事件の主犯。」

「ああ・・・あいつね・・・別に殺しても良かったと思うけどな・・・
ああ、でもさすがに親が死ねば悲しむよな・・・それはちよつと
見たくない。」

「・・・全くお兄ちゃんは甘いんだから。」

「そんなエンデだからこそ私は使い魔になっただけだね。」

「いや、ヒスカが僕の使い魔になった理由って寂しいからって言う
てたばはっ!？」

「そ、そういうことは言わなくて良いの!!!」

顔を紅く染めて拳を突き出すヒスカである。

照れ隠しなのは分かるのだが、こう殴られるといくらすぐ治ると言
っても辛いんで勘弁して欲しいです。

とくにヒスカは馬鹿力だから。普通に骨折れるんだよね。

「さて・・・家での休養も終わったし。」

そろそろ魔法学園に帰らないとね。」

「そうね、イチゴへのお土産は買ったし。」

「ふふふ、私もマルトーへの土産はすでに買ってある。」

いつでもどんどこいだ。

これを貰って感激で咽び泣くマルトーの顔が目に見えかわっ!
ふふふふ、あはははははあはははっ!!!」

お2人とも、エンジョイしてるようで何よりです。

僕は僕でサイトへ適当なマジックアイテムでも作って渡すかな？

今頃何してるだろ？

デルフを買いに行ったのだろうか？

キュルケとルイズの間で遊ばれてる頃かな？

キュルケに関してはいずれコルベール先生に惚れるからそこは何もしてない。

ちよつと見てない間にシエスタと仲良くなつてたりしないよな？

・・・信じてるからね！？

サイト！！

と思つて帰ると仲良くシエスタと並ぶサイトを見つけました。

・・・この発情期の駄犬があああああああつ！！

ちよつと目を離れた隙にもう仲良しこよしかつ！！？

フラグを立てちまったのかつ！！？

ふざけんじゃないっ！！

僕の気遣いを返せよっ！！フラグ野郎っ！！

カリン様ばりの訓練をつけてあげたのは言うまでも無い。

まだ友達・・・という感じだったのでそこはセーフである。

26ページ目(前書き)

感想にメイド服や色付きが見たいと有りましたのでそのうち載せま
すw w

何度も言いますがトーシロなんであまり期待はし過ぎないようになし
て下さいませ。

「・・・どうするかなあ・・・ほんと。」

実に困ったことに、ちよつと目を放した際にサイトがシエスタとお友達になっていた件で僕は悩んでいた。

このまま放っておくのも良いが、いずれ確実に惚れる。

シエスタはサイトに惚れるという予感が僕にはある。

というか、予言といっても良い。

いい具合の歳に、似たり寄つたりの黒髪黒い瞳という容姿。サイトが平民でありながら貴族を倒し、なおかつ平民と同じ価値観。さらにはいずれタルブ村を救うことになる上に、その内彼女の祖父が同じ国の人だというのもバレル。

そして現在のサイトの給仕と言う立場。

知り合つた切欠は、給仕をしてる最中にお仕事を教えてもらったとか手伝つたとかそんなところだろう。

周りには貴族、もしくはマルトーという歳の離れた異性しか居ないゆえに恋することは無かつたが、サイトという身近で親近感の沸く男性が出てきた。

顔も悪くは無い。優しい。気さく。強い。

これで惚れない理由が無い。

何よりもシエスタにとって他に異性として見れる男性がないというのが致命的である。

恋をしたい年頃真つ盛り、もとい思春期の時期にサイトという手ごるな男の子がやってくる。

これはまず間違いなく惚れる。

それは困る。

実に困る。

どうするかと考えた結果、給仕を止めさせるのを前提に、いくつかのプランを考えた。

プランA

サイトを徹底的に叩きのめすところを見せて幻滅させる。後は適当にキュルケにーー正確にはキュルケの大きな胸にデレつてるところを見せてしょせんその程度の男だということを見せ付ける。

プランB

シエスタが関連するサイトの活躍の場をひたすら横取りしていく。ゼロ戦もタルブ村に僕が行ってそれを錬金で複製。

それをサイトに渡す。

サイトのタルブ村行きフラグを断ち切る。

タルブ村の戦いでは僕が近くの森に潜伏してこっそり敵軍を潰していく。

ないしは適当に変装して謎の魔法使いとしてぶっ潰すのも良いだろう。

ルイズが持つ虚無の力の覚醒イベントを潰してしまいかねないが・

・ルイズに直接“ルイズは虚無ですよ”と言う事にしよう。

プランC

シエスタにサイトの汚点を吹き込む。

あることないこと滅茶苦茶に。

プランD

タルブ村を買収。

タルブ村のワインを全領に普及するべく動く。

結果、実家が忙しくなり、シエスタが呼び戻される・・・ことになるハズ。

学園で働いているのは家族のためとかそんなところだろうから、十

分に可能なはず。

プランE

むしろ僕が仕事を斡旋。

良いメイドさんが必要になるってことで引き抜く。

プランF

シエスタを殺す。

プランEX

いっそ僕に惚れさせる。

・・・最後の方はもう適当なのが分かるかと思う。殺すとか色々な面でまず無理。不可能。

なんで僕がこんな面倒なことを・・・と今更ながら嘆くがこれも妹分のルイズのため。

そしてルイズが悲しむとカトレアも悲しむため。

やむをえない・・・多分。

とりあえず細かく考えずにいくつかプランを考えて見た。

今度はそれを一つつつ吟味していく。

まずAだが、これでは訓練で叩きのめしたところで“単にまだ力が及ばない”ってだけになるだろう。

いつかは倒す。もしくははもともと平民は貴族には適わないとされているのだから負けても憧れを少々無くすくらいで、幻滅・・・とまでは行かない可能性が高い。

胸に注意の行く男のだらしなさを見せ付けても、“男性はそういうものですから仕方ないです・・・でも2人きりの時だけはちゃんと私を見てくださいね？”と笑顔で言いそつだ。

まっことシエスタは手ごわい。

だからこそ、なおのこと今の初期段階でシエスタの恋愛フラグだけは叩き折っておきたい。

完全に惚れた後だと何があってもあきらめそうに無いから一番面倒な相手だろう。

プランBが目立つ障害は無い。

だが、これで安心というほど決定的な物ではないし、僕自身の最大の目的。

戦争に参加したくない。したとしても誰にも覚えられないその辺の歩兵の役割程度が良いという目的から大きく外れることになる。

死ぬことはないだろうが殺すことはあるだろう。

・・・人の恋路の邪魔のために兵士をバカスカ殺しに行く。

こう書くと本当にあほらしくなってくる。

てか、そもそも戦争をいかに回避するかが王の腕の見せ所だろうに・
・マザリーニもそうだしアンリエッタもマリアンももしかりしてくれよって話である。

いっそのことゲルマニアと婚約外交でもしてくれれば安心だということに。

プランCの汚点を吹き込む・・・だが、これも無いな。

一応友人だと思ってるし、そもそもルイズの使い魔だ。使い魔の汚点は主人の汚点に見られるためにルイズにまで危害が及ぶ。

そもそもこういう姑息な手は好かない。というかやりたくない。

相手がロレーヌさんとカリッシュモンみたいな私欲を満たすためだけの下種な輩ならば遠慮なく出来るけどね。

プランDが一番楽のように思えるが、これが一番難しい。

お金はかかるは人が動くわ、根回しが必要だわで色々大変である。

時間もかかるし、そもそも他領の村の特産品を独占するなんて不可能である。

領主から文句を言われるに決まってるし、回りの貴族の受けも悪くなる。

実質不可能と言っても良いかもしれない。

プランEはそこそこの手。

が、どんな仕事を斡旋して、どんな理由で引き抜くか。これがちよつと面倒だ。

が、現状考えた中で一番の手だろう。

プランFは言うまでも無く論外。

恋敵が邪魔になるので殺すとか・・・ヤンデレかつ！？って話である。

んな理由で人を殺せるはずも無く、そもそも紳士として女性に何かするなど出来ない。

プランEXだが・・・一見、全てのことを収まりよく解決するには一番なのだが、女の子を自分に惚れさせる方法なんて僕には分からん。

惚れさせて、僕も惚れるかといえばそれは分からんし、シエスタは確かに可愛いけど結婚したいとか恋人にしたいなんてことは思わない。

惚れさせることが出来たとしても、惚れさせてはい終わり・・・というのは無責任すぎるだろう。

紳士的じゃない。

第一、シエスタと結婚するくらいならシャスティルと結婚する方が何倍もマシというものである。

というか結婚するとしたら僕は誰がいいのだろうか？

か、カトレアの顔・・・が浮かぶ・・・わけがない！

カトレアなんか思い浮かべてないからなっ！？

ほんとだからなっ！！

「プランBのシエスタの好感度を稼ぐと思われるイベントをかった

ばしから潰していく作戦とプランEの兼用が一番・・・かな？
でも、僕の勝手な都合で・・・いずれ惚れるかもしれないからって
どっか行って貰う為に、わざわざ違う仕事場へ行ってもらう・・・
ってのはちょっと傲慢が過ぎて嫌だな。」

形は違うけれど大部分の自分勝手を通す貴族そのものである。

新しい職場へ行ってもらうにあたっても“上手く出来るだろうか？
”という不安を味あわせることになる。

前世での初めてのアルバイトを思い出した。

僕の初めてのアルバイトはペット屋の店員で、一日中不安で一杯だ
ったりしたっけ？

もし間違えたら？とかクレマーが来たらどうしよう？とかレジ打
ち間違えたりお釣りを間違えたりしたらお客さんに怒られるだろう
か？とかとにかくマイナスなことばかり考えていた。

シエスタはシャステイルとヒスカとも仲が良い。

せっかく職場に友達も出来たというのに・・・そこからまた新しい
所というのはシエスタに申し訳なさ過ぎる。

もともとシエスタを遠ざけようとしているのはサイトの流される性格
が概ねの原因なのに・・・なんでその割りをシエスタが食わなくて
はいけないのだろうか？

サイトの浮気性が原因なのだからサイトが苦勞するべきだろう。

「うし、決めた。

プランBを主軸としてサイトを遠ざけていくようにしよう。

もしくはサイトとルイズをとっとくっ付ければ、横恋慕の可能性
は格段に下がるだろう。」

どうしてシエスタを遠ざけなければならなかったのか？

サイトを遠ざければ良い話である。

もともとサイトが悪いし、サイトが浮気するのだって要は迫られたからなのだ。

迫ってくるのをなんとかしさえすれば自分からは浮気すまい。

サイトの浮気性を直すことになるのだから、むしろサイトのためにもなる！

「うし、そうと決まったら性欲や愛欲が沸かない位にしごくことにしよう。」

やる気を削いでしまいかねないが、そこは僕が手加減をしてわざと攻撃を当たってあげるといふ形にすればいい。

それで自身の力が付いたとある程度調子に乗らせれば、よくも悪くも乗り易い性格のサイトのこと。

やる気が十二分に稼げるだろう。

ルイズにしっかりと惚れた頃を見計らってどんどん厳しくして……いずれはあのクソババーじゃなかった。

カリン様と渡り合えるようにしてやるうじゃないか。

それまではシエスタを敢えてサイトと近づけないようにシヤスティルとヒスカに協力してもらって……僕自身が友達としてシエスタと面識を持つのも良い。

とにかく一緒にお風呂に入るイベントとタルブ村でのサイトの活躍イベントを潰す。サイトの活躍が色あせるぐらいに僕が活躍せねばなるまい。

よし、それで決まり！！

「んん、ああ、ホツとしたらお腹すいたな。

あ、イチゴちゃん……！」

現在の位置はヴェストリ広場。時刻は朝の10時ごろ。鳥の鳴き声がちゅんちゅんと聞こえる洗濯日和である。授業はサボった。

だって、つまないんだもん。

とたとたと洗濯物を持って歩くイチゴちゃんを見つけて、声をかけた。

「あ、エンデちゃん。

どうしたの？」

「ちゃんづけは止めてっていつてるのに・・・まあいいや。

暇だから僕も手伝うよ。

ついでに・・・というかこっちがメインなんだけど、イチゴちゃんのショートケーキが食べたいな？」

決闘の時に食べたケーキだが、驚いたことにイチゴちゃんが作ったものだという。

なんでも実家が定食屋を営んでいて、小さな頃から料理をしていたとか。

その中でも甘味類が大の得意。

シャスティル達と仲良くなった切欠も、僕がシャスティル達に教えた和菓子が切欠だという。

女の子だけあって、甘味が大好きで、いや、大好き過ぎるといふ。

大好きすぎるゆえに最高峰の甘味を作り出すべく菓子職人になったのだとか。

お菓子の腕前ならばヒスカをも越える。

ヒスカは竜なので、好みがワイルド。もとい肉料理や魚料理と言った高たんぱくな食べ物を好むためマルトーと違って彼女と競うことはあまり無いらしい。

甘味以外は僕達よりちょっと腕前が落ちるくらいだという。

「暇って・・・授業をサボるなんて悪い子だな、エンデちゃんは！
ダメでしょ！！」

「・・・子って・・・どう見てもイチゴちゃんの方が僕より年下・・・」

「し、失礼だよっ！！」

エンデちゃんっ！！

私、こう見えても21なんだからねっ！！

立派な“れでい”なんだよ！！

紳士ならちゃんとエスコートしてもらわないと！！」

な、なんだとっ！？

に、に、に・・・にじゅういち！？

どっからどう見てもちんちくりんの可愛い女の子・・・とはもちろん口には出さないが、ちょっとありえないと思うんだけど！？

頬を膨らませて手をわたわたとしながら怒ってますアピールをするイチゴちゃん。

狙ってる！？と思うほどの子供っぽさ。凄く子供らしい可愛さを感じる。

さすがにこれはキャラ作ってんじゃない？

とこっそり魔眼で“視認”してみたところ、“素”だった。

・・・ある意味恐ろしいな。そしてなおさら21という歳が怪しくなる。

ちなみにイチゴちゃんの容姿は飴色の髪を両側で結んでいるツインテールにーこれがまた子供っぽさを加速させていることに気づいてないのかな？ 身長は145くらい。

胸も無く、お尻もあまりという感じで・・・顔も童顔。

無邪気さを演出するようなくりくりっとしたぱっちりお目目。

高く見積もっても中2が限界って感じの容姿なのに、ハルゲニアは

もちろん日本基準ですら成人しているという。学校七不思議というものがあれば、確実にその一つにカウントされているであろう容姿である。

「トイレの花子さん・・・いや、メイドの花子さんか!？」

「花子さんて誰っ!？」

馬鹿にしてるのはなんとなく分かるけど!？」

つい口に出てしまった。

「ま、まあいいや。

とにかく手伝うよ。

ほら、半分持つね。お礼にっ形でショートケーキをくれると嬉しいな?」

「・・・しょうがないなあ〜エンデちゃんは。

そ・し・て。

半分といわずに全部持つてもらっていいよ?」

「・・・持たせてもらいます。」

念のため言っておくと、イチゴちゃんが普通に僕と話してるのはシヤステイル達と友達だから自然と僕も友達になったわけで、僕にここまでフランクに話しかけてくるメイドはイチゴちゃん以外は居ない。

大抵の人は敬語を使ってくる。

初対面というのもあるし、貴族だからというのもあるが一番はやはり僕がやりすぎたせいだろう。

困ってる女の子を見過ごすわけには行かず、貴族と揉め事を起こしたメイドを助けたり、前にも言ったとおり石鹸やハンドクリームを差し入れしたり、せっかくの石鹸だし、しっかりと体を洗いたいたいだ

ろつということでおスマン校長に許可を取ってメイド専用のお風呂を増設したり（もちろん僕は純粹な善意だったが、おスマンはあれである。エロジジイであるからして・・・そういう目的のために許可したのだから）がそうは問屋が卸さない。僕の前世の知識、魔法の技術の粋を集めた風呂場にしたため、貴族用の物よりも覗きが困難になった。おスマンは血涙を流して悔しがって僕に縋ってきたが、蹴り飛ばしてそのまま帰った。）、今しているように洗濯物の手伝いをしたりとしていると・・・あれだ。

皆が皆、僕をそれこそ神様を見るかのように尊敬の眼差しで見てくるのである。

君達は僕の部下じゃないし、敬語なんていらないう言っても、“私達にここまでしてくださってる方にタメ口なんてとんでもない！”と凄腕勢いで首を横に振られた。

僕の容姿と相まって“女神”のエンデなどという今までで一番恥づかしい2つ名が付いたりもしたのだ。

ヴイリエのように平民を良く思っていない貴族からは“卑下”という2つ名を付けられた。

貴族に生まれながらにして平民と同じ立場に立つとする・・・すなわちメイジの誇りを自ら卑しいものに行っているということに付いたそうだが、もちろん僕は気にしてない。

子供を相手に本気で喧嘩をする大人がいないように、いちいち相手にする気にすらならない。

いや、彼等は羽虫に過ぎんな。

道端で見かけたその辺の羽虫に向かって“お前ら、俺の服に張り付いたな！？しかもその羽音は実は暗号で、仲間内だけに通じる俺に対する悪口だろう！？そこになおれ！！斬り捨ててくれる！！”とか言い出す人間はいないだろう。

・・・羽虫の例はちよつと違うか？

とにかく全然気にならない。

「これでラスト・・・と。」

「ありがとう、エンデちゃん。あとはただ干されるのを待つだけだから・・・」

さて、じゃあお礼のショートケーキと・・・ついでに新作の感想も聞かせてくれる？」

「新作!？」

望むところですよっ!?!奥さん!?!」

「私、まだ旦那さんいないよ?」

「・・・だよね。」

「そ、そこで同意するのは酷いと思っっ!?!」

ぷーぷーと言う擬音が妥当のように怒るイチゴちゃん。(これもまた魔眼で見ると素だった。)

ごめん、ごめんと言っつて僕達は食堂へ。

ケーキを頬張りながら僕は毎度のごとく恍惚とした笑みを浮かべる。

「ああ・・・しああせ・・・」

「呂律が回ってないよ?エンデちゃん。」

本当、料理つてのは一種の魔法である。

良く味わいながらワンカットのショートケーキをたっぷり20分ほどかけて食べ、いよいよ新作の披露である。

なになな?なになな?

とウキウキしながら厨房からくるイチゴちゃんを待つと、イチゴちゃんの手に持っていたのは・・・なんとフルーツポンチだった。

さ、サイダーがこの世界にはあったのかっ!?

「私ね・・・前々から思ってたの。」

砂糖を混ぜ込んだ水とドライアイスを組み込んだら一体どんな飲み物が出るかってこと。」

な、なるほど!?

その発想はありそうでなかった!盲点だったよ!!

炭酸飲料の炭酸は二酸化炭素を溶かしたもの。

砂糖を大量に混ぜ込んだ水にドライアイスをぶち込んで・・・と考えたのは凄いことである。

ドライアイスは僕が饞別にとイチゴちゃんにあげた冷蔵木箱の改良型。シユワシユワ君試作型を使って作ったのだから。

急激に冷やすことの出来るものというのは結構使える。

ドライアイスを作ったのは単に水に入れて霧を出すというあれを唐突にやってみたかったというのと、結構昔に使ったシャスティルとの出会いの日に野党を殺した際のミストカーテンのイメージをより強めるためである。

あれは視認が不可能なほぼ最強の暗殺スペルゆえに強化しておきたかったのだ。

まあよっほどのことが無い限りこれは使うつもりはないけどね。

「ふふふふ、驚いているね!?

私も驚いたよっ!

これはたまたまの産物だったんだけど、シャスティルにディディクトマジックで害が無いのも調べてもらったし、問題なかった。

いや、多少は体に悪いみたいだけどその多少は無視できるほど軽いもので・・・」

シヤステイルがマジックナイフに僕が刻んだ魔法も使いこなしてる
ようで何より。

そして、うんぬんかんぬんと製作秘話を語ってもらってるところ悪
いけど早くくれないかな!?

フルーツポンチとか・・・個人的にはかなり上位に食い込む甘味で
ある。

「ちょっと体に悪いけど味は良いしーそれに油物だって食べる
ぎは体にーだから多少悪いといってもこれはやむをえないんだ
よ! てなわけで安心して・・・とはいかずともーそれと
シヤステイルたちも呼んだから一緒に食べー」

もう、その辺どうでもいいから早く食べさせ・・・じゅるり。

ああ、もう我慢ならん。

「いいから早く頂戴!!」

食べさせてええええええええええつ!!」

とがばつと立ち上がり、僕はイチゴちゃんが持つ皿へ向けて手を伸
ばす。

が反射的にイチゴちゃんは後ろにさがり、運悪く足を踏み外した。

いかんつ!!

僕の甘味がーじゃなくて、イチゴちゃんが怪我をしてしまう!?

とっさに抱き寄せて、顔が近づく僕達。

フルーツポンチの容器はこぼれかけた中身を上手く皿で受けて、机
に置く。

お互いにちよつと顔が赤くなるけど、別に好きな人同士とかじゃな
いし、ちよつと恥ずかしい程度。

なんの問題もーバキンツ!!

無いと思っていた頃が僕にもあつたんだよ。神様仏様。

おーまいごつと。

神はいない。

「お、お兄ちゃん・・・食べさせて・・・って？
ナニヲタバタイノカナ？
イチゴニオソイカカツテ・・・ドウシタイノカナ？
イチゴノナニヲタバタイノカナ？」

黒いオーラが背後に見えるよ？

周りの・・・固定化がかかっているはずの壁にビシビシと、ひび割れが入ってるよ？

ナゼカナ？ドウシテカナ？

黒いオーラ・・・は比喻ではなくしっかりと確認できる。

どうやらエルザやバンダット？バグダット？そんな感じの名前のいつぞやのバカタレが持っていた黒い剣と同じ物質・・・だと思う。多分。

劣化吸血鬼なのに・・・ちゃんとした吸血鬼としての力を使いこなし始めてるんだね？

いや、ていうか、エルザのあれよりも威圧感が半端無いんですけど！？

「はははははははははははははは・・・シヤスティル。

まあ待て。

待つんだ。

話せば分かる。

そして扉のドアノブは回すものであって握り潰すものじゃないことを自覚して欲しいな、お兄ちゃんとしては。」

今の僕の体勢はイチゴちゃんを抱きしめている。
そしてさっきの“食べさせて”発言をバツチリ聞いているようだ。
都合の良いことに、いや、悪いことに丁度そこだけしか聞いてない。
それどころか僕が立ち上がったところから・・・という最悪のタイ
ミングでドアを開けたようである。

「モウイチドキクネ？」

「ナニヲ・・・ダレノ・・・ナニヲタバタイノカナ？」

シヤスティルの目はうつろで真っ黒。もといヤンデレっぽい感じである。

背後にいるヒスカは笑いを堪えていた。

助けて・・・頼むから。

「・・・あれだよ・・・」

なんで、僕がこんなラブコメの主人公みたいな状況になっているのか？

小一時間ほどじっくり考察して、二度と無い様にしたいのだが、とにかく現実逃避をしても始まらない。

こついう場合、大抵事実を言ってもぶっ飛ばされるのが関の山である。

ならばどうするか？

簡単だ。

何か面白いことを言って、笑わせれば良い。

このシリアス(?)な空気を霧散させてしまえばいいのだ。

笑いは世界を救う。

そんなの奇麗事？

馬鹿野郎、ここで信じなきゃ、いつ信じるって言うんだよ？

今だけでも良い。

僕は全力全開でこの言葉を信じるぜ。

「ふ、・・・ふ、ふふ、ふつとんがふつとんだっ!!」

「・・・」

「・・・」

「あははあはあっははははははっ!!」

シヤステイルはそのままヤンデレモード。

イチゴちゃんはドン引き。

ヒスカはこの場でこんなチヨイスをして、なおかつ微妙に噛み気味な僕のこの状況自体を笑っているのだろう。大爆笑中だ。

いっそのこ他の2人も嘲笑でもいいから笑ってくれればよかったのに。

あれだ。お笑いの才能が僕には無い、ということが発見できただけでもラッキーだったと思う。

「お、お、お・・・お兄ちゃんのばかあああああああああああああああああああああっ!!」

というか、僕の脳ミソはどうしてここでこのチヨイスをしてしまったのだろう？

黒い本流と爆発の連撃に吹き飛ばされ、それこそ宝物庫のある塔まで吹き飛ばされて僕はそんなことを思った。

吹き飛ばされても視覚に入っただけでも爆発を放てるらしく、さらに壁際まで打ちあがった僕を的よろしく塔ごと爆破にさらされ僕は地べたに墜落。

首の骨が折れたが即修復されていく。

ヒビの入った塔。穴からかすかに見える宝物庫の中。
突如、出現したゴーレムがその穴をこじ開けて。

「・・・なんか良くわかんないけど、坊やおかげかい？
ありがとうよっ！！」

と吐き捨てて去っていたロープを被った女性。

すなわちフーケを見ながら。

布団じゃなくて僕が吹っ飛んだな。

とか思いつつ、僕は気絶した。

僕の分のフルーツポンチを残しておいてね？と願いつつ。

26ページ目(後書き)

ゲームのシナリオライターになりたいな。

と思う今日この頃。無理だろうけどな。

次回はフーケもといマチルダの姉さんがようやく登場！

27ページ目(前書き)

なりダンXを買いました。

楽しい、なりダンX！

しばらく更新がまばらになると思います。

27ページ目

「はぁ・・・やってくれたのう。」

「本当、すいません。」

「ごめんなさい。でも私のせいです、お兄ちゃんは悪くありません。」

「妹の責任は兄の責任です。」

罰するのは僕だけでじゅうーがふっ!?!」

「私を庇わなくていいから。」

「だからって殴るのはどうだろう!?!」

現在、学園長室に呼び出されてる僕。

オスマン学園長にお叱りを受けている最中である。

他にも教師陣が集まっていて、言わずもがなシャスティルもいる。

本来ならばルイズが放つエクスプロジョンが間違えてぶち当たり、フーケにまんまと盗まれるという歴史だったのだが、何がどう間違えたのか、シャスティルがその役を担ってしまった。

「学園長、これはどんなに大目に見てあげたとしても退学は免れないでしょう?」

そのメイドもレイフォール家の者だとか?

メイドを連れ込むという違反に続き、またもや問題を起こしたのがレイフォールの者とは・・・家の程度が知れるというものです。」

ここぞとばかりにギトギトが責め立ててくる。

楽しそうだな、おい。

今回ばかりはこちらが全面的に悪いだけに強く言えない。

「・・・ふむう、確かにのう。」

さすがにここまでされてはどうしようもあるまい。」

オスマンも今回ばかりは庇えないようだ。

まあ・・・ですよね。

こういう時はルイズの公爵家という身分が羨ましく感じるよ。

「とはいえ・・・じゃ。」

見張りの当番であるミスタ・ギトー。

オアシがどうこう言える立場ではないじゃろう？

しっかりと見張りをしていれば、捕えることが出来たかもしれぬだろうに・・・まんまと逃げられおつて。

逃げた方向すらわからぬとは何事か。

オアシにも多少なりの責任はあると思うのじゃが？

「ぐっ・・・確かにそうですが・・・こいつらが元凶であることは疑いようのない事実です。」

「・・・そうじゃのう・・・とりあえずオアシはさらに給料カット、三ヶ月じゃ。」

「そ、それは・・・あまりにもっ!?!」

いつぞやの事件で給料大幅カット一年が効いている最中、さらに給料カットされちゃうのか・・・ざまあみる、ギトギトめっ!

人の不幸を笑うからそうなるのだっ!!

つてまあ、今の僕の心の声も似たようなものか。

反省、反省。

ついつい恨み易くて恨んじやうんだよね、ギトギト先生って。

シャステイルはシャステイルでまた目がうつろになって、ギトギトを睨んでいる。

こ、殺しちゃだめだよ？

シャステイルさん？

ヤンデレに目覚めてしまったのかもしれない。

「仕事をしてなかったのじゃ。
これくらいは当然じゃろう?」

重ねて言うが、オヌシは生徒の手本である教師という立場。

ミスをするな・・・とは言わんが、ミスをしたさいの責任の一つや二つ、しっかり取ってもらわねばの。

仕事をサボっておったのじゃ、給料泥棒には丁度良い罰じゃろ。」

「・・・ぐ、ぐぬぬぬ・・・ですが、となれば今度こそこいつらは退学ですねっ!?!」

納得いつてないようだったが、ギトギトは“こいつらを罰するならば自分のことはとりあえず置いておこう、いつかの借りを含めてこいつらに憂さを晴らさせてもらおうじゃないか”とばかりに嬉々として「退学ですよね!?!」とオスマンに言う。

そんなあけすけな邪念が生徒を目の前にして丸分かりだということに、オスマンは少し辟易した様子でため息を付く。

オスマン学園長は“こやつに教師のなんたるかを教えるのは無理じゃね?”という目でギトギトを一瞥した後、僕に視線を戻した・・・ように見せかけてシャステイルの胸に行ってる視線をさりげなく前に出て妨害する。

ちっと舌打ちをするオスマン。

オマエもそのあけすけな邪念をどうにかせいやっ!!とギトギトとは別のベクトルで頂けない邪念を感じつつ心中でツッコム。

そのままオスマンが口を開くのを待つ。

「そうじゃのう・・・オヌシらにはフーケに奪われた物を取り戻してもらおうかの。」

「が、学園長っ!?!」

た、退学ではないのですかっ!?!」

甘い(？) 対応に異論をあげるギトギト。

「何も退学すれば責任を取れるというわけじゃないじゃろ？
むしろただ退学させるだけなんていうことこそ無責任かつ無意味じ
ゃ。

とはいえ、不問というわけにはいかぬ。

よって自分の尻は自分で拭いてもらおうではないか・・・というこ
とじゃ。

女性の尻ならばワシが拭きたいところー」

「学園長。」

「 じよ、冗談じゃぞ、ハゲテール君。」

「私の名前はコルベールです、学園長。」

コルベール先生が学園長のセクハラ発言を諷める。

というか、ハゲテールって・・・ぶっ。

新しいな。

「すなわち、フーケから宝を取り戻すことが出来たならば今回の件
における罰は謹慎一週間。

と、壁の修理の手伝い。ないしは弁償じゃ。

取り戻せなければ、・・・うむ。残念じゃが一度起こった以上、二
度無いとも限らぬ。

自身の犯した不始末を自身で解決できなとなれば・・・
本当に残念じゃが退学・・・じゃろうな。」

オスマンはしぶしぶと言った感じでそう言っつ。
退学を覚悟したのだが、これは思ったよりも軽くなりそうでありが
たい。

「が、学園長っ！」

い、いくらなんでもその対応は甘すぎー」

「だまれ、ミスタ・ギトー。」

何度も言うようにオアシがぐちぐち言う資格など無いわ。

見張りをしていなかったオアシにもそれなりの責任もあるし、我々他の教師にも、もちろんそれはある。こういう時のための教師・・・責任者というヤツじゃ。

優れた魔法使いが多々いながらも白昼堂々、たかが1人のメイジに宝具を盗まれたということは由々しき自体。

その発端が生徒だとしても、世の中はそうは見えてくれぬ。

生徒を退学にするとなればその不始末を世に公表しなければならぬが・・・1人の盗賊程度に負けるトリステイン魔法学園との汚名を被ることになる。

できればそれは避けたい。

というわけでこの処置・・・だが、納得してもらえたかの？」

ギトー以外にも学園長の甘い判断に納得がいかないという教師もいたが、いまの発言でそうした先生方も賛成の色を示した。

むしろ、どんな手を使ってでも宝を取り戻したい・・・そういう気色が見て取れる。

トリステイン産のプライドが高い貴族様方には耐えられない屈辱だろうから当然か。

「もし失敗した際はこういふときのための責任者がある。

すなわちワシのミスということで責任を取り、辞職。という形を取る。

これで最低限の体裁も取れるだろうから問題はあるまい。

じゃから、ここは彼等に任せようではないか。」

それを聞いてざわめく教師陣。

そう話を締めくくり、僕にウィンクする校長。
気持ち悪いが、今回ばかりは言わないで置こう。

・・・教師の鑑だよ・・・オスマン校長!!
さすが長なだけはある!!

というか、エロさが無い校長はここまで格好良いものなのか。

実に残念なご老人である。

前にも言ったような気がするが、本当、この世界って惜しいところ
で残念な人が多い。

「で・・・ですがっ!?

他の生徒に示しが・・・」

まだ粘るギトギト。

そこまで僕を退学にしたいのか。

他の教師も“おまえ・・・いい加減空気読め”みたいなうんざりと
した目を向けていた。

「くどい。

それに彼を退学とするならばオヌシも退職処分にせねば不公平じゃ
ろう?」

「なっ!?

ど、どうしてですかっ!?

わ、私はスクウェアのー」

「オヌシの方が問題があるとワシは思うのじゃが?

本来、守るべき生徒に対しての過剰な魔法の使用。

女性徒に対しての暴言。

同じく生徒に対して決闘を申し込む。

さらには今回の仕事を不真面目にやっていた件。

自身のことを棚に揚げ、反省の色も見せずに生徒への罰を重視する。
これだけ上げればオヌシを教師に相応しくないと証明する分には十

分じやるう？」

「ぐぬっ！？」

「そもそも罰とは与えるのが目的ではない。反省を促すのが目的じゃ。」

罪を犯した人間が自ら過ちを認め、反省できるのなら特別必要と
はしない。

反省しているかどうかは見れば一目瞭然。

二度と同じ過ちは犯さぬじゃろうて。

むしろ、オヌシのような人間にこそ罰というものを必要とする。

というわけで、ミス・ギトー。

これ以上、教師として相応しくない振る舞いをするというのならば・
・覚悟してもらおうことになるが・・・どうするっ？」

「ぐ・・・ぐぐ・・・し、失礼しました。」

顔を真っ赤にして、全く謝る気の無い表情で謝るギトギト。

大変だろうな、オスマンも。

こんな変な方向に頑固な部下を持つちゃってぞ。

「では・・・解散じゃ。」

手を叩いてオスマンはこの会議(?)をお開きとしたのだった。

「どうしたのじゃ？」

「いえ、お礼をと思ひまして。

ありがとうございます。」

「私からも・・・ありがとうございます。」

2人だけ最後まで残り、オスマン学園長に礼を言う。

「はて？」

「何のことが分からぬのう？」

「とぼけジジイめ。」

「オヌシらが礼を言う必要などどこにもありやせんわ。

教師として・・・学園長として当たり前前の対応を取っただけじゃ。

オヌシらのような20も行かぬ小童どもが気にすることではない。」

キセルをふかしながらいけしゃあしゃあと言うオスマン学園長。

これが俗に言う“カツコいい大人”というやつか。

僕が女でこの人が若くてエロくなかったら惚れてたかもしれない。

ドアノブに手をかけて出ようとした時、オスマンから待ったの聲がかかった。

「まあ、あれじゃ。

礼に感じている・・・というなら・・・なんじゃ、その・・・のう？

そちらのシャスティル・・・とかいったか？

その子の・・・その・・・言いつらいんじゃないが・・・

脱ぎたてパンサーー」

「どりゃああつー!」

「いぼはっ!？」

バゴンと音を発てて机にめりこむ学園長。

めりこむというかめりこませた。というか。

本当にコレが無ければ良いのに。

かかと落としを決めて、机にめり込んだ学園長を尻目に今度こそ学園長室を退室するのだった。

「な、なんならオヌシのパンツでも・・・ワシはイケル・・・男の娘・・・萌え・・・ガク。」

というボヤキは聞こえなかったことにした。

伊達に歳を食ってないということかもしれない。好みが・・・驚異的である。

恐ろしい老人である。と同時に重ねて言うが本当に残念な方でもある。

あれからしばらく経ち、学園長からフーケの潜伏先が分かったとこのことで、案内人がいるという学園の門前に言ってみると、1人のキリッとしたOL風の女性が立っていた。

「えと・・・秘書の・・・」

「ロングビルです。」

私が貴方達の案内をつとめることになりました。」

「どうして貴方が案内を？」

と、シャスティルが疑問を出す。

「私が現地に行って場所の確認もしましたので・・・私が案内をするのが一番かと思いました。」

ですのお気になさらず。」

戦闘になったら即逃げますから。」

僕としてはロングビルさんがフーケだと知ってるので疑問にはしな

かったが、シヤステイルはもちろん疑問に思ったようだ。ていうか一日経っただけでそこまで分かるってのは凄くないか？よくもまあウソだと見破られなかったな。

「貴方もメイジなの？」

「は・・・い、いえ、あの？」

どうしてそのようなことを？」

シヤステイルのさらなる質問にちよつとだけ慌てるロングビル。

質問の意図が分からないまま“はい”、“いえ”とも迂闊に答えることは出来ない。と考えたのだから。

質問に答える前に意図を聞きたいようである。

「じゃないと、早すぎるでしょ？情報の伝達が。」

実は貴方がフーケで、自作自演とか？

ぷっ、なんてね。

そんなのはありえないか。」

「え、ええ、もちろんです！！」

と、盗賊風情と一緒にしないでください！！」

「ご、ごめんなさい・・・何もそんなに怒らなくても。」

声を荒げるロングビルさん。

怒ってるというよりは、あまりの鋭いシヤステイルのツッコミにデーンパツて、つい声を大きくしてしまったところかな？可愛いところもあるじゃないか。

「それじゃあ、そろそろ行こうか。」

あ・・・それとロングビルさん。

もう1人連れて行きたい人がいるんですけど・・・いいですか？」

「・・・？」

ええと・・・自分の身が守れるならば・・・構わないと思いますが・

・・・」

「良かった。」

ちよつとしたら来ると思うので、待つててください。」

もちろん呼んだのはサイトである。

丁度良い実戦の機会。

メイジとの戦いというのをある程度は経験しておいたほうが良い。

これを逃す手は無い。

元々の歴史ならばルイズやタバサ、キュルケと言ったメンバーも居たが、ルイズをみすみす危険にさらしたくないし、ルイズの“覚悟”に触れる機会是他にもある。

今日必ず呼ばなくてはいけないというわけではないからルイズには声をかけていない。

他メンバーは例え死ぬことは無いと分かっているけど、不安にさせる出来事にわざわざ巻き込む必要は無いからである。
紳士の鏡じゃない？僕って。

そんな自画自賛をしていたところ、サイトが来た。

来たのだが・・・

なぜメンバーが勢ぞろいしてらっしゃるの？

僕が声をかけたのはサイトだけ・・・なのだが。

「いやあ、わりいわりい・・・皆も付いてくるって言うから遅れー
ーどわあっ!?!?」

む、僕の不意打ちによる拳を手加減したとはいえ、避けるとは……
なかなかやるじゃないか。

が、空気読め。ここは殴られるところだろう？（理不尽）

「おい、サイト。」

僕はアンタだけに声をかけたはずだよな？

なのにどうしてまたキュルケやタバサ……果てにはルイズまでい
るんだ？

てか、避けるな。

甘んじて僕の拳を受ける。

発情駄犬フラグメイカーが。」

「は、発情駄犬!？」

な、なに言ってるんだが分かんないけど……俺だって別に連れてき
たくて連れてきたわけじゃないって……」

「そうよ？」

エンデ、貴方達だけでこんな面白そうなことをしようなんてズルイ
じゃない。」

「……キュルケ……遊びじゃないんだよ？」

「ダーリンのいるところに私あり!……よ。」

貴方といえども私の微熱を止めることは出来ないわ。」

「……好きにしてください。」

……こう言っでは悪いと思うけど面倒な人である。キュルケは。
と、なつてくるとだ。

他2人が付いてきた理由も概ね分かる。

タバサは付き添い。

ルイズはキュルケに負けじと付いてきた……というところか。
多少は焼き餅もあるだろうが、今はまだその部分は弱いだろう。

まあ……これはこれで別に良いや。

面倒だし。

「エーデ姉様・・・ごめんなさい。
でも、私は危ないからってツエルプトーが行くのに反対したのよ!?
エーデ姉様がいるから問題ないって。

そしたらツエルプトーが・・・私の家を・・・馬鹿にしたから!!」

申し訳なさそうに、後半は憤慨してコロコロと表情を変えるルイズ。
嗚呼、手に取るように分かるよ。

どうせ「あら? ヴァリエールともあるうものが一介の盗賊風情にビ
ビるとは・・・落ちたものね。だから貴方達ヴァリエールは私の家
に代々殿方を横取りされてきたのよ!! その臆病さが恋愛にも顕れ
るってわけね!! おーほっほっ!!」、「ぬぁんですってええええ
ええええっ!! 上等じゃない!! むしろ私が捕まえてシユバリエの
称号を貰ってあげるわよ!! ほえ面をかけ!! 乳牛が!!」みたいな
な売り言葉に買い言葉だろう。

ルイズ・・・大丈夫。女性は胸じゃない。

むしろ太ももとお尻に女性の無限の可能性が秘められーおほん。
なんでもないよ?

「タバサも・・・キュルケの付き添い?

大変だね。アクティブな友人を持つと。」

「それもある。」

でも貴方に貸しを返すためでもある。」

貸し?

何か手助けしたっけ?

「料理を教えてもらった。」

和食・・・というのが好き。
それと勉強・・・戦い方の。」

なるほど。

タバサだが、アレ以来そこそこ頻繁に僕の部屋にやってきては料理を習っていく。

別に気にしなくても良いのに。

戦い方の勉強、というのはタバサが僕の力量を恐らく身内を除いて一番分かっているゆえの発言だろう。

「律儀だね・・・いちいち友達同士で貸し借りなんていらんよ。

困ったら助けるのが友達って言う物でしょ？」

気にしなくていいよ。」

「・・・友達？」

「少なくとも僕はそう思ってるけど・・・タバサはそう思ってくれてないの？」

「・・・ありがとう。」

「なんでお礼？」

頬を染めてそつぽをむくタバサ。

ん？

なんで？

何か思うところがあったのかな？

「あ、そういえば・・・サイト。

あれから剣は買ったの？」

買ってあげて言ったけど・・・その背中のがそつ？」

一応知らないフリをしておく。
サイトの背中にあるロングソードと言う感じの少し長めの長剣。
生デルフリンガーである。
ちょっと興奮するな、やっぱり。

フーケのイベントが早まったみたいだから少し不安だったのだが・

「ああ、昨日買ったんだ。

こいつ喋るんだぜ!？」

なあ、デルフ!！」

「その言い草は酷くねえか？

相棒。オレは見世物じゃねえ。」

「悪い悪い。」

ま、まじで剣が喋ってる・・・やっぱりアニメや漫画で見るとは違う。

生って凄い!!

「ちょ、ちょっとだけ触らせてくれない?」

触ってどうなる?とツッコまれるかもしれないが、有名人のサインを貰ってどうなる!?!と聞くのと同義だ。

触ることに意義があるため、そんな無粋なツッコミをしてくれるんじゃないよ。

「ああ、いいぜ。ほら。」

「おいこら、オレをそう簡単に知らない人間に渡すんじゃないよ・・・
っておいおい・・・もたれると分かるんだが・・・この嬢ちゃん、

凄い力量だな。

ここまでの人間には始めてあつた……ん？
オマエさん……本当に人間か？」

むっ、やばい。

多分、ガチムチ神様から貰った不老の力や魔眼の力まで感じてるみたい。

さすが虚無を使った剣。

やっぱり規格外のようだ。

「失礼な剣だな。」

もちろん、とぼける。

「精霊にもやたらと好かれてやがるし……エルフじゃないみたいだが……」

ぶつぶつ言い出す剣は放っておいて、サイトに剣を返して学園を出発することにする。

僕に対するデルフの失礼な物言いにルイズが怒ったり、ロングビルさんが微妙に警戒の視線を向けてきたり、タバサが興味を惹かれたように僕を凝視したりとされながら僕は馬車に乗り込んだ。

ちなみに今回の最重要目的はなんだかんだ言つて、ロケットランチヤーの複製だったりする。

火薬の複製なども魔眼を用いれば、知識が無くとも“視認”が可能。本当に便利な能力だ。

視認した情報を元に錬金で複製して、偏在でコピー。

27ページ目（後書き）

昨日、アシダカグモの幼体を捕まえました。

可愛いですww

アシダカグモというのは家屋内に侵入する大型のクモで、大型の個体はネズミや鳥まで捉えると云う日本版タランチュラ。と言えるようなクモです。とは言え人間に通用する毒は持たないので安心してください。

家の中でやたらと大きなクモを見つけた場合、概ねこいつです。

ゴキブリの天敵なので、こいつがいる家にはゴキブリも居るといふ。餌であるゴキブリを駆逐しない限り、何度でも侵入してくるのでそんなデカイクモを見たくないという方はゴキブリを駆逐しないといけないと言つ。

そんなこんなで馬車にて。

「ミス・ロングビル。

手綱なんて付き人にやらせればいいのでは？」

「……いいですよ。

私は……もう貴族じゃありませんから。」

キュルケはロングビルさんのその言葉を聞いて少し呆気に取られた。まあ……マチルダさんも複雑な事情がねえ……そういえばトリステイン学園で意外と国際化してるのかもしれない。

ガリアの王族であるタバサに、アルビオン王家に近いロングビルさん、もといマチルダさん。

ゲルマニアからの留学生であるキュルケまでいる。

さすがにロマリア出身の人間はいないが、こうして改めて考えると結構いい所……かもしれない。

「貴方はオールド・オスマンの秘書なのでしょう？」

さぞかし家柄の高い人かとお見受けしたのですが？」

「オスマン氏は家柄や立場にこだわらない方ですから。」

「差し支えなかったら、事情をお聞かせ願いたいわ。」

キュルケは聞きたがりだなあ……と思いつつ。

僕は馬車の窓から流れる景色をぼーっと見続ける。

窓からのぞく景色を見ると、日本の車や電車が懐かしくなってくる。

ロングビルは微笑んでそのまま。

言いたくないんだろうね。あまり。

「教えてくださいな。」

キュルケは興味津々といった様子でロングビルさんになじり寄る。その肩を掴むルイズ。

「よしなさいよ。」

淑女にあるまじき無礼よ。」

「暇だからおしゃべりしようと思っただけよ。」

「僕もルイズと同意見だよ。」

あまりそう聞きたがるものじゃない。」

もちろん、紳士としても看過できないのでルイズに加勢する。

「ほら、エーデ姉様もこう言ってるし。」

「まったく・・・ルイズはともかくエンデにまで言われちゃ、しようがないわね。」

ロングビルさんは僕とルイズに向けて会釈をして、前を向く。

キュルケは退屈そうに足を組んで、（サイトがキュルケの組んだ足に向けた視線を向けたのを見て、ルイズがサイトの耳をつねる。）ルイズに向き直り、愚痴りを始めた。

「はぁ・・・暇よね。」

「遊びに行くんじゃないのよ?」

「ダーリンが行くんだから、私が行かずにどうするのよ?」

「だから遊びじゃないって言ってるでしょ!?!?」

そのまま言い争いを始めるキュルケとルイズ。

それを見ていられなくなったサイトが喧嘩すんなよと間に割って入り、キュルケが「あら、ダーリン。私の味方をしてくれるのね!？」、「あ、いや・・・そういうわけじゃ」、「ちよつと、アンタ!! 主人の私よりもこんな胸だけのデカ魔人に味方するって言うの!？こ、こここここれだから男っていうのはああああ!!」と火に油を注いだだけだった。

平和だなあ・・・本当に。

喧嘩するほど仲が良いと言うし、放っておくことにした。

「お兄ちゃん・・・この人たち・・・連れてく必要あったの?」

シヤステイルがそんなルイズたちを見て、呆れた表情を向ける。

僕と同じくレイフォール領で火竜や亜人退治してきたシヤステイルとしてはルイズ達の浮ついた態度を見て、頼りなさに映るのだろう。

むしろ足手まといくらいに思っているはずだ。

シヤステイル基準だと大概の人間は足手まといなんだけども。

雷神降臨を使わない場合、マジで戦ったら僕でも勝てるか分からないよ?」

ナイフに刻まれたエクスプロージョンのルーンと僕以上のナイフ捌き。

貴方に比べたら大抵の人間は足手まといです。

「まあまあ・・・一応伝説の使い魔と主人だし。今のうちに実践を出来るだけ積ませておきたいんだ。

身にかかる火の粉のちよつとやそつと、軽々振り払ってもらわないと。」

シヤステイルとヒスカには虚無のことを話している。

カトレアに話すかは保留。というかいずれ勝手に気づきそうなもの

だけどね。

ルイズには折を見て話す予定である。サイトに立つフラグを叩き折る以上、ルイズは本来よりもかなり幸せな道をたどることになる。そうなると思わぬ嫉妬によって溜まる精神力が少なくなり、エクスプロージョンも扱いづらくなる。となればこれから先はサイトの実力頼みだ。

ガンガン戦わせたい。

「……ルイズのため？」

「そうだよ。それ以外に何があるのさ。」

「……別に。」

ん？

ちょっと不機嫌になったが、あいも変わらず良く分からないものだ。乙女というのは。

「ルイズばかり構ってるから焼き餅焼いちゃった？」

「……そうでもない……いや、それもちょっとはあるけど……本当にダメだからね？」

「何の話？」

「もっと細かく話してくれないと良く分からない。」

「……もういいよ！」

「？」

わからんなあ？

そんなこんなで、馬車は道なりに続いてきたのだが、いつの間にか回りはうっそうとした森に囲まれていた。深いところに来るとだんだんと光が遮られていき、薄暗い。

「ここから先は徒歩で行きましょう。」

とロングビルさんが言った。

「なんか暗い・・・怖いわ・・・」

「あ、あんまりくつつくなよ・・・。」

「だつてえ！」

すっごくこわいんですものお!!！」

凄くうそ臭いイントネーションで怖がるフリをするキュルケ。

キュルケの棒読みの“怖い”セリフと腕に絡む大きなお胸に鼻の下を伸ばしつつ。

サイトは頬を染めていた。

ちらちらとルイズに視線を向けて気にしているようだが、ルイズはそっぽを向いたままである。

「初心だねえ・・・」

「お兄ちゃんもね。」

「はっ。何を言う？」

なんだかんだでパーフェクト紳士たるこの僕がはっっ!？」

シヤステイルも腕を絡めてきた。

「ちょ、ちょっと・・・どういっつもりかな？」

「こっぴいっつもりだよ?」

そこそこ豊満な胸で僕の腕を挟めて、軽くこすり付けてくるシヤステイル。
顔が近いせいか「うん・・・あう・・・ふう・・・」とちよつとした息遣いまでバツチリ聞こえてくる。

や、やわい・・・やわこい・・・

「・・・ムラムラした？」

「し、しないもん!!」

「・・・の割りには顔真つ赤だよ、お兄ちゃん？」

「こ、これは熱いきやら・・・」

「噛んでるし。あの使い魔の子よりも耐性低いんじゃない？」

し、してない!!

妹に対してするわけがない!!
してないんだからね!?

「ふっ。」

「きゃあっ!!」

そのまま耳に口を近づけてきてフツと息を吹きかけてくるシヤステイル。

「あはははは。

“きゃあ”だつて、“きゃあ”!!

言葉遣いはともかく、悲鳴は見た目相応なんだね。お兄ちゃんは。」

「しゃ、シヤステイル!!」

と、年上の紳士をからかう物じゃありません!!」

「震えてるけど、どうしたのお兄ちゃん？」

ふ、震えてるのはまだゾクゾクするからで……このおてんば娘め
！！

そんなことをするやつにはこうだ！！

「ちよ、ちよっとお兄ちゃん……ひいあつ!？」

や、やめっ!!

く、くすぎゅったい……から……あはは、あう……ひづっ!」

脇腹が弱いつてことくらい何年も前から知ってるんだぞ!!
兄をおちよくった報いを受けるがいい!!

ふふふ、ふはははははは。

「まいったか!？」

この!!このおっ!!!」

「ご、ごめ……ごめんなさ……も、もう……や、やめってて
ばあっ!!!」

ふっ、反省したようだな。

これに懲りたらもう二度と――

「エンデ……見せ付けてくれるじゃない。」

「女の子同士のじゃれあいって男が見るとちよっとなんか……い
けないものを見てしまったような気が……いや、エンデは男だっ
たな……エンデは男、エンデは男……男男男男……あれは
男だ……」

「剣をやって長いこと生きてるけど、盗賊退治に行くって時にここ
まで幸せそうなバカッブルは始めて見たぜ。」

「シヤスズるい……私もエーデ姉様と……」

「・・・能天気。」

「気は済みましたか？」

その・・・私としても早く済ませたいのですが・・・」

皆が皆、僕達にたいしてジトつとした目を向けてくる。

そ、そんな目を向けられる謂われはないぞ!?

べ、別にラブラブしてたわけじゃないし、これくらい兄妹ならば普通のスキンシップ・・・なはずだ!!

「シヤステイルからも言つてやれ!!」

これはあくまでもオシオキで・・・」

「バカツプル・・・お兄ちゃんと・・・カップルか・・・えへへへえへ・・・」

だ、だめだ・・・シヤステイルはトリップしてやがる・・・

それからも色々と言いつけがましい(キュルケ曰く)事実を並べ立て
いったのだが、誰にも信じてもらえなかった。

別にシヤステイルと恋人というのもいいかな・・・とか思つてなん
か無いんだからね!?

「あの廃屋がフーケの潜伏先という話です。」

ロングビルさんが指差すのは、森が開けたところに突如出現した廃
屋である。

少し感動。

映画で言うところのロケ地に実際に行った・・・もしくは漫画やア
ニメに登場した高校などのモデルとなった場所に実際に来た時の感
動・・・といえば分かつてもらえるかと思つ。

これが原作の生の現場ってヤツか。
この感動は初めてレビテーションを使って空に飛んだとき以来である。

あの時は、勢いあまって木に思いっきりぶつかったっけな・・・懐かしい。

「あうっ!？」

「い・・・痛い・・・」

昔を懐かしみながら歩いていたせいか、木にぶつかる僕。

周りの人たちが皆一様に、癒される物を見るかのような目で見てくる。

やめろ!？

そんな目で僕を見ないで!!

たまたまちよつとぶつかっただけじゃん!？

人間、生きてればこのくらいの失敗は一度か二度はあるよ!!

「お兄ちゃんって・・・意外とボケてるよね。いろいろな意味で。」

「う、うるさいな!!」

ほら、行くんだろっ!？」

そのまま、恥ずかしさを誤魔化すように僕はズンズンと廃屋へ向かって歩いていく。

いや、別に恥ずかしいことなんてないけどね!!

だから別に誤魔化しでもなんでもないから!!

「あ、おい!

「1人だと危険だぞ!!」

「そんなこと言っても、結局誰かが入らなくちゃいけひぐっ!？」

サイトが止めようとしてきたので、僕がサイトの方に振り返りながら歩くと石に躓いてころぶ僕。

・・・もう嫌だ。

「ぶっ・・・お、お兄ちゃん・・・それは幾らなんでも・・・といつか可愛い過ぎる。」

「もうヤダ。僕帰る。」

「いららら、ふてくされるなよ、エンデ。

ほら・・・別に可愛いからイイダロ!？」

「うるさいうるさいうるさい!!」

サイトが言うなよ!! サイトのせいなんだから!!

サイトが変なタイミングで僕に話しかけるから!!」

「俺のせい!？」

「サイトなんて、寝てる間に圧死しろ!!」

「どうすればそんな器用な死因に!？」

「もしくは溺死しろ!!」

「だから、どうやって!？」

くそう、皆して可愛い物を見た・・・みたいな顔をしゃがって!! 被害を受けた僕からしたら、百害あって一利なしなんだよ!!

「お兄ちゃん、皆私達に付き合ってくれてるんだから、そういう」と言っっちゃダメ。」

「・・・分かってるよ。」

「ごめんなさいは？」

「・・・。」

「ごめんなさいを言わなくちゃダメでしょ？」

「ごめん・・・なさい。」

「声が小さい。」

「ごめんなさいー!」

「・・・はい、良く出来ました。」

「何?このノリ?

幼稚園?」

サイトのツッコミは無視。

とにかく、今度こそ気を取り直して、廃屋に入る。

「サイトも付いてきて。」

「あ、ああ。」

突入の経験もあったほうがいいだろう。

というわけでサイトと同時に部屋に飛び入る。

すぐに視線をめぐらせ、剣を前に構えるサイト。

なかなか良い動きである。

及第点つてところかな?

「誰もいないみたいだな。」

「そうだね。」

僕は宝が入ってると思わしき木箱を見つけた。

こ、この中にロケットランチャー・・・略してロケランが入ってるのか・・・ちよっとワクワク。

「・・・これが・・・」
「ん？これはっ!？」

サイトが宝・・・もとい盗み出された“破壊の杖”を見て驚く。
まあそりゃ驚くだろう。

ロケランが木箱に入って無造作に置かれてれば異世界どこのこのの
じゃなくても驚く。

サイトがロケランに夢中になってる間、魔眼を発動して“視認”。
ほう・・・こういう仕組みなんだ。

かなり難しいが作れないということは無い。

火薬もこの世界のに比べたら、やっぱりかなり上質なようである。
ふふふふふふふふ。

これで勝てる!! (何に?)

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「ああ、大丈夫。」

皆入ってきてても・・・っ!？」

周りの精霊があわただしくなる。
ようやくお出ましか。

「っ!？」

お兄ちゃん!？」

「分かってる!!」

サイト、外に出る!!

早く!!」

「え？」

あ、ああ!!」

僕とサイトが外に出ると同時に廃屋がつぶれる。
というか、潰された。
フーケのゴーレムに。

「サイト・・・これがメイジの中でも上位に食い込む、フーケのゴーレムだ。」

まずは1人だけで戦ってみて。」

「は、はあっ!？」

サイトが驚いたような声をあげる。

その驚きは目の前に立つ、2階建ての家ほどの大きさを持つゴーレムに自分ひとりで戦わなくちゃいけないということと、周りの加勢が貰えるという状況下でワザワザ1人で行かなくちゃ行けないことに驚いてるようだ。

行く前に言ったはずだろうに・・・実践の経験を積ませるために一緒に行くことって。

1人で立ち向かわなくちゃならないとは思ってなかったのかな？

「皆は手を出さないでね？」

「だ、ダーリンを囮にするってこと？」

「いや違うよ、キュルケ。」

そのダーリンに倒してもらおう・・・とまでは行かずとも経験してもらおうってことさ。

メイジとの戦いを・・・ね。」

「で、でも・・・エーデ姉様・・・」

「ルイズも出来れば我慢して欲しい・・・けど、無理だよな？」

「ええ・・・もちろん!」

使い魔が・・・あの駄犬が頑張ってるのに、私が頑張らないわけにはいかないもの!..!」

「分かった。」

必ず動きながら。

これをキモにね？」

「ええ！！」

ルイズもゴーレムに向かっていく。

「大丈夫なの？」

「大丈夫だよ、シヤステイル。親友が危険なことをするのに心配になるのは分かるけど・・・前にも言ったとおり、彼女は虚無だ。

これから色々な陰謀渦巻く混沌の中に身を置かなくちゃならない。

そのときになって、自分の身が守れませんでした・・・じゃお話にならないんだよ。

いざとなれば僕達が助けるしね。

だからいつでも出られるように身構えてて。」

「・・・わかった。」

キュルケたちも心配そうに見つめる中、結構上手く立ち回るサイトたち。

最初はルイズもやってきたことにサイトはびっくりしたようだが自身の剣が通じないと分かってからは、囷を担ってるようだ。結局囷になっちゃったか。

まあ、サイトじゃまだ岩は切れないしな・・・ちなみに僕もヒスカもシヤステイルも岩くらいは普通にぶった切れる。

そしてルイズはルイズで動き回りながら、決してゴーレムに近づき過ぎずにエクスプロージョンもどきでゴーレムを削っていく。

万が一が無いように僕も雷神降臨を発動して待つ。

10分ぐらいが経った頃。

徐々に追い詰められていく、サイトとルイズ。
まあこんなものか。

「くそ……一回、退却するぞルイズ！」

「嫌よ!!」

「な、何言ってるんだよ!？」

僕も同感。

「あいつを捕まえれば……誰も私をゼロのルイズと呼ばないでしよ!?!」

「ば、馬鹿やろう!!」

んなこと言ってる場合か!？」

気持ちは分からないでもないけど……一応帰ったら、説教だな。
多分、直らないだろうけどさ。

「……私はいつもいつもそうだった……ゼロと呼ぶ人こそもう居ないけど……それはエーデ姉様が周りを叱ったからで、皆私を本当の意味で見ようとはしてないもの!!」

影では相変わらずゼロと馬鹿にするヤツが多いし……私はそんなの嫌なの!!」

私は……私の力でそいつらを見返してやるの!!
誰の手を借りないで!!」

私の……力だけで……」

「そ、そんなの……命があつてこそその……」

「サイトだつて……言つてたでしょ?」

ルイズはサイトをじっと見て、口を開く。

「言つてたでしょ？」

下げたくない頭は下げられないって。」

「ルイズ……オマエ……」

「私だつてそうよ！」

「アンタほどでなくても、ささやかでも、私にだつてプライドくらいある……！」

「ここで逃げたら、虎キリネの畏おそを借る狐のまま……そんなのもう嫌なの……！」

「ここで逃げたら、今度こそゼロのルイズつて名実共に呼ばれることになるわ……！」

「それだけは絶対いや……！」

「本当に嫌なんだから……！」

「い、いつの間にか、そんな複雑な思いを抱いてたんだね、ルイズ。ちよつと考えが足りなかったのかもしれない。」

「いいじゃねえか……！」

「言わせておけよ……！」

「私は貴族よ……魔法が使えるものを貴族と呼ぶんじゃないわ。」

「どうでもいいけど、いつの間にかゴーレムが止まつてる。」

「サイトとルイズも止まつてる。」

「意外と空気を読むフーケだな。」

「敵に後ろを見せない者を貴族と呼ぶのよ……！」

「……ルイズ……」

ルイズが魔法を唱える。

それを受けて再度動き出すゴーレム。

踏み潰そうとするが、それをサイトがルイズを抱えて避ける。

「死ぬ気か!？」

「だってっ!!」

だってえ・・・悔しくて・・・私・・・ひくっ・・・いつもエーデ姉様に迷惑かけて・・・ちい姉様にも気を遣わせて・・・シャスにだって・・・ヒスカにだって負けてる・・・」

ポロポロと泣き出したルイズを見て、サイトはうるたえる。

僕もうるたえる。

というか、こういう経験をさせたくなくて、ルイズは置いて行くつもりだったのに・・・全く持って上手くないものである。ゴーレムがルイズに迫るがそこをシャスティルが蹴り飛ばした・・・って・・・え!？

バゴゴン・・・と音を発てて倒れ伏すゴーレム。

半吸血鬼化してるとはいえむちゃくちゃでないですか？

シャスティルちゃん!？

「泣くことなんかない!!」

ルイズだって、格好良いところ一杯あるもん!!

私もお兄ちゃんもカトレアもそれは知ってる!!

ほら!!

このポン骨倒すんでしょ!？」

「シャス・・・」

熱血だなあ・・・シャスティル。

と言う僕もちよつと火がついたみたいである。

「そのとおりだよ。ルイズ。」

その辺の赤の他人の言うことを気にする必要なんてない。
ルイズの誇りは今・・・僕達が見た。

受けた。知った。

どっかの誰かが馬鹿にしても僕達は絶対に馬鹿にしない！！
だから・・・泣くんじゃない！！

意地を張るなら最後まできつちり張り通せ！！
せつかくの晴れ姿が台無しになるだろ！？」

ゴーレムが立ち上がり始める。

僕は破壊の杖を持って、サイトに放って投げる。

「サイト！

それを使いえ！！」

僕が倒してもいいのだが、ここは彼らの独壇場。

出来ればルイズに倒させたいのだが、それは現状無理。

ならばせめてルイズの使い魔であるサイトに手柄を譲るのが粹と言
う物だろう。

「あ、ああ・・・でも使い方がわか・・・る？
なんでだ？

頭に流れ込んでくる・・・」

サイトがすぐに破壊の杖を構える。

そして。

「ルイズ！
下がれ！！」
「う、うん・・・」

ロケランが火を吹き、轟音を周りに響きたてゴーレムの上半身がぶつ飛ぶ。

・・・さすが、現代兵器。
とんでもない威力だ。

まあ僕も出そうと思えば出せる威力だけだね。

「すごいわ！！
さすがダーリン！！」

キュルケが興奮したのか、サイトに抱きつく。

「結局・・・フーケはどこだ？」

サイトがちょっと照れながらそう言った。

ロングビルさんがそんなサイトに近づいていき、ロケランをさりげなく取る。

「ロングビルさん？」

「ふふふ・・・あはははは。

こうまで上手くいくとはね！！

全く、青い寸劇を見せられてつい手を止めちゃったけど・・・全く、良かったよ。

空気を読んだかいがあつてね。」

皆がこのあたりで、ロングビルさんの正体に気づいて身構える。

「動くんじゃないよ？」

「今見ただろっ？」

「こいつの威力はさ。」

「貴族様たちは杖を捨てな。」

「そのメイドは特に・・・もつと離れな。」

「良く分からないけど油断ならないからね。」

「シヤステイルのことだろう。」

「まあ、ゴーレムを蹴り飛ばす女の子を見たら誰だって警戒するよね。シヤステイルにはエクスペーションで殺さないように魔法で伝えておく。」

「杖なんて無くても魔法が使える僕には武装解除なんてものはなんら意味を成さない。」

「貴方がフーケだったの？」

「キュルケが苦しげにそう言う。」

「ああ、そうさ。」

「破壊の杖を盗んだのはいいけど、使い方が分からなかったからね。」

「なるほど・・・だから自作自演をしたのね？」

「魔法学園の教師・・・もしくはその生徒を呼び出してゴーレムにそれを使わせるために・・・それを見て、自分が使えるようにと・・・」

「そのメイドは本当に凄いな？」

「一体、何者だい？」

「シヤステイルの鋭い指摘に驚嘆の表情を浮かべるフーケ。」

「それにしてもオマエさん。」

どうして剣を捨てないんだい？」

サイトに向けて問うフーケ。

サイトはデルフを持ったままである。

「捨てる必要が無いからだよ。」

「大した自身だね？」

アンタの速さは確かに大したもんさ。

でも・・・この距離ならアンタが吹っ飛ぶほうが先だね。」

「試してみるか？」

「さ、サイト!？」

自殺志願としか思えないサイトの言葉にルイズが慌てる。

「・・・まあいいさ。」

どうせ生かして返すつもりはない

誇り高い主人様と一緒に死んじまいな!!」

トリガーを引くフーケ。

僕とシャステイルとサイトを除いた皆が固く目を瞑る。

「なっ!？」

「それは単発式なんだよ。」

すぐに接近。

当身を食らわせてフーケを気絶させるサイト。

・・・これで一件落着である。

さっさと帰って、イチゴちゃんのショートケーキを食べたいね。

29 ページ目（前書き）

短いです。

今回の絡みは、あれば面白いだろうな〜と思って書いたのですが、意外にも中々に書きづらかったです。結果、微妙かも。

「ふう・・・こんなものかな？」

エンデがフーケを捕まえに行ってる間、私は新作の料理を作っていた。

エンデに聞いた特殊な料理。

“寿司”を作ってみたのである。どこでこんな料理の情報を仕入れて来るんだか。

私としては美味しい料理を覚えることが出来て良いんだけどね。

母様に振舞う料理のレパートリーも増えるし。

「おい、ヒスカ。

オマエさん、あいつについていなくて良かったのか？」

「ふっ、問題あるまい。」

マルトーがエンデのことを聞いてくる。

エンデがなにやらミスをしてフーケに宝を盗まれた・・・という話が生徒にはもちろん、平民の間でもちらほらと広まっているのだ。フーケを捕らえるのを失敗すると、退学になるという話まである。広めているのはどこぞの教師だとか何とか。

私としてはどうでもいいことだからその教師の名前なんて知らないんだけどね。

確か・・・ギトン？とかマトンとか？そんな感じの名前だったような・・・全く違うような？

油っぽい名前だった気がする。

シヤスからは“私のせいでお兄ちゃんは何も悪くない”と聞かされていたけど、話の顛末を聞いたところではエンデが悪い。

イチゴに手を出すくらいなら、シヤスに手を出してやれって話だよ

！！全く。

「本当に大丈夫でしょうか？

エンデさん。」

「大丈夫、大丈夫。エンデちゃんなら余裕でしょ？

というか・・・私のせいでもあるから・・・いざとなったら私が全部責任を被るから問題なし！

・・・でも、私1人の首で済むかな・・・」

シエスタとイチゴがそう話す。

イチゴは少し表情に影が入っているが、無駄な心配だ。

割りと明るいのは一晩経った後だから夜のうちに覚悟を済ませたとかだろうか？

普通なら夜逃げするところを・・・イチゴはやっぱり良い子だ。

「そんな心配は無用だよ、シエスタ、イチゴ。エンデは結構強いからね。」

フーケくらいなら余裕で捕らえられるでしょ？

それに女性に責任を被せるなんてことは何があってもエンデはしないから、無駄な考え。」

イチゴは普通にドシッと構えてればいいの。」

「シヤスもそういつてたけど・・・フーケは国を騒がせる大盗賊だつて聞くし・・・」

「いいからいいから。」

信じて待ちなさいって！」

「そうですよ！

エンデさんは紳士ですから！！」

まあ学校では落ちこぼれのフリをしてるから、心配されるのも無理は無いよね。

実際はこの学校どころか世界含めてトップクラスの力を持つんだけど。

天海竜の私をあそこまで追い詰められる人間はおそらく彼くらいな者だ。

あの時にカウンターを使うのが少しでも遅れてたら死んでいた可能性もある。

「・・・うん。」

分かったよ。エンデちゃんを信じることにする。」

「それでよし!!」

で、さっそくだけどここの寿司を試食して見てくれない?」

「う、うん!!」

そんなこんなな朝を終え。

昼時。

ヴェストリ広場でシエスタとイチゴとの一緒に昼食を取る為、ヴェストリ広場へ向かっていたところ。

「おや・・・あれはタバサが呼んだ使い魔ね。」

・・・シルフィードとか言ったかしら?」

虚空を見つめてなにやら呟いている、シルフィード。

ちよつと盗み聞きを試みると。

「きゅいきゅい・・・お姉様・・・どうして私を追いつたのよ・・・

・馬車があるからって私を追っていくなんて・・・酷いのね!!き

ゅい!!」

きゅい?

なんで鳴き声まで口に出すんだらう?」

というか、あの子は韻竜みたいね。

と、友達になつてくれるかしら？

いや、でも・・・私の竜の時の姿を見たら逃げ出しちゃうかな？

うう・・・でも・・・今まで立て続けに友達が出来たわけだし・・・大丈夫じゃないかな？

エンデに始め、シヤスにハンニバル、アリリイにルイズ、カトレア・

・・・イチゴにマルトーにシエスタ・・・

イチゴたちには私が竜だつて明かしても変わらず友達で居てくれるし・・・この勢いで竜の友達も・・・でも・・・どうしよう？

もし食べられるとか他の竜と同じことを言つて逃げられたりしたら・・・今度こそ立ち直れないかも。

いや・・・でも・・・ああ・・・けどな・・・

そ、そうよね！

とりあえずここは出直そう！！

だって、心の準備とかまだしてないし！！

今度頑張ればいいや！！

今度ね！！

「だ、誰なのね！？」

「おわうっ！？」

き、気づかれた！？

まだ心の準備が出来てないのに！！

「えーっつと・・・こんにちは？」

「ま、まずいのね・・・お姉様との約束が・・・」

お姉様との約束？

というか、この子は姉が居るのか？

それともタバサのことを言ってるのだろうか？

「お姉様ってタバサのこと？」

「……きゅいきゅい。」

「ん？」

「きゅいきゅい。」

「いや、きゅいきゅいじゃなくて……」

「私は喋れないのね。」

ただの竜なのね。」

「喋ってるじゃない……」

「し、しまったのね!？」

なんとと言う策略!？」

おそろしい女なのね!！」

「……。」

なんだろう？

この子。

言っではなんだが、大分アホ……なんじゃないだろうか？

「あ……」

「……こうなっては……オマエを殺して口止めするしかないのね!！」

もしくは半殺しなのね!！私が喋るってことを黙るなら何もしてあげないことないのね!！」

さあどうするのね!？」

使い魔が学園の職員を殺した場合、その責任は使い魔ではなく主人に行くことが分からないのだろうか？

そして発想が、幼稚というか……良くも悪くも竜らしいというか。

というか私が竜だということにも気づいてないみたいだ。こんなアホの子に見破られるのもちょっと嫌だけでも。なんか一気に友達になりたい感が消えてしまった。

あれだな。

無視に限る。

なんか面倒だ。この子。

とりあえず覗き見たことだけ謝って、帰ろう。

「……えと……覗き見たことはごめんなさい。

それと喋れるってことは秘密にしておくから安心して。」

「ほ、本当なのね!？」

オマエって、良い人間なのね!！」

「え……っと。あ、ありがとう?。」

私がウソを言っているということを考えないのだろうか？

もちろんウソではないけど、この子の将来が少し不安になった。

けど、タバサが多分その辺の教育はするだろうし、私と一緒に人間と過ごすようになればある程度は警戒心も芽生えていくだろう。

とにかく、今はお昼の約束もあることだしこの子と友達になるというのは一旦保留にしておこう。

友達となると私も竜だということがいずれば分かる。

でも、喋るつもりは無くてもこの子はうっかりと喋ってしまいそう
だ。

何かと秘密の多い私達の近くに置くのは望ましくない。

この子なら私の本当の姿を見てもビビらずに初の竜の友達になってくれそうだけでも、エンデや私の身の危険に繋がる可能性も多少なりとも、ある。

無邪気すぎるのだ。

それはまずい。

・・・初の竜友・・・欲しかったけど、エンデたちの害になりかねない以上、彼女とは深く関わらないのが無難か。

・・・いや大丈夫・・・だよな？

飯にバレてももみ消せば・・・でも私のわがままでエンデ達に迷惑をかけるのは・・・嫌だ。

はあ・・・残念。

「それじゃあ、私はこれから友達とご飯の約束があるからこれでね。」

「う、ごほん!？」

「・・・あ、貴方も食べに来る？」

「い、いいのね!？」

よだれを垂らしながら、そんなことを言われては断れまい。少なくとも私は“料理人”なのだから。

「私の作ったもので良ければね。」

「大丈夫なのね!!」

貴方のご飯は美味しいって、お姉様からも聞いてるのね!!
すっごく嬉しいのね!!
「ありがとうなのね!!」

「・・・べ、別にいいけど。」

面と向かってそこまで熱烈な礼を言われると照れる。

「というわけでつれてきたの。」

「ほほう……この子喋れる竜？」

「ええと……」

「きゅいきゅいー」

首を横に振るシルフィード。

喋れないよ！

とでも言いたいのだろう。

「喋れないただの風竜みたい。」

「なんだ……ちよつとがっかり。」

「そうですね。私も新しく竜のお友達が出来ると思っただけですけど・

……」

「……きゅい〜。」

がっかりした2人を見て、あからさまに気落ちするシルフィード。

友達になってもらえないようだとなったのと、本当は喋れるのに主人の言いつけで喋れないという二つの意味で気落ちしているのだろつ。

どうにかしてあげたいけど……こればかりは主人のタバサとシルフィードの問題だしね。

「あ、ごめんごめん！

喋れなくてもお友達にはなってあげるから、そう悲しい顔をしないで！」

「わ、私もごめんなさい！！」

「きゅいきゅいー」

友達になってあげるといふ発言にまたもやあからさまに喜ぶシルフィード。

すりすりとは頬擦りを2人にしている。

私が竜だと言うことで、本来なら平民にとって竜とは恐るべき猛獣なのだが・・・すっかり警戒の欠片もない。

基本的に竜は縄張りに入らない限り、積極的に人間を襲うということとは無い。

なぜならば、人間は群れで襲ってくるということを理解しているからだ。

これは韻竜でもただの竜でもあまり変わらない。

こうした竜に対する偏見が友達の2人にだけでも払拭できるというのはちょっと嬉しい。

「じゃあ、食べましょうか。

頂きます。」

「「頂きます。」」

「？」

何なのね？

その挨拶は？」

ああ、そういえばシルフィードは分からないだろうね、この挨拶はこの挨拶はエンデから習った物で、私達の身内や周りの人たちはブリミルに対する祈りよりも、こっちの挨拶を用いることのほうが多い。

特に私なんかは竜ゆえにブリミルとか言う始祖とやらにはなんら信仰心は無いので、この挨拶がじっくり来ている。

むしろ死人をいつまでもあがめる人間の“信仰”という文化はいまいち理解しがたい。

なんら関係ない相手に感謝を述べるよりも、日々の糧になってくれた食材にこそ感謝をするべきだろう。

「簡単に言うと、食材の命に対する供養……かな？」

食材になってくれた命に対する感謝の意……とも言えるかも。」

「ふーん……なのね。」

い、いただきます。

これでいいのね?」

「うん……いいんだけど……喋ってよかったの？」

シルフィード。」

秘密にしておいてくれと頼んでおきながら、この子はどっしてナチユラルに話しているのだろうか？

「……。」

あああああああつ!?!?

ま、また諮られたのね!?!?

ひ、酷い女なのね!?!?

「今の一連の流れのどこに謀はかりごとがつ!?!?」

「ぶつ、なんだ、喋れるんじゃない。」

しかも、かなり天然なのね。」

「ふふつ……そうですね。」

でも、大丈夫ですよ。

私達のみだりに秘密を話したりしませんから。

理由は概ね想像できますし。

多分、ヒスカと同じ理由ですよね?」

「お、お前達……い、良いヤツらなのね!?!」

改めて友達になって欲しいのね!?!」

「ええ、喜んで。」

「ヒスカちゃんと言い、シルフィちゃんと言い、面白い使い魔が多いのね。」

確かに。

ただ私は特別面白いことは無いと思う。

「そんなこと無いよ。

ヒスカちゃんも結構、浮いてるといつか・・・面白いよ？」

特に私達に友達になってくれって言うときのあの拳動不審ぶりは・・・

・ぶぶぶ。」

あ、あの時は仕方ないじゃない!？」

こ、断られたときのことを考えるとつい暴走しちゃうっていつか・・・

・というよりも、忘れてよ!！」

「ごめんごめん。」

「お前達といると楽しいのね・・・この料理も美味しいし・・・ん？」

ヒスカも使い魔なのね？」

ようやくそこをツツコムか。

まあ、良いよね？」

友達になっても、正体がばれても。

迷惑がかかっても、エンデなら大丈夫でしょ。

多分。

なんたつて私のご主人様なんだから。

「私も韻竜だからね。」

「・・・きゆい？」

・・・いん・・・りゆう・・・？」

ええええええええええええええええつ!？」

シルフィードの絶叫が木霊するヴェストリ広場だった。

とはいえ、すぐにサイレンスをかけたけどね。

ここには私達以外の人間も多々居るのだから、そうそう大声を出されるって困ってしまう。

少し、教育したほうがいいかしら？

29ページ目(後書き)

最近、FPS系のゲームが欲しくなってきた。
キルゾーン2かレジスタンスかで迷ってるのですが。
知ってる方は多少なりともアドバイス下さいww

30ページ目(前書き)

PCがボン骨過ぎて、5回の強制シャットダウン。
きついよ(泣)

今回はエンデメイド服。ラフをあとがきに掲載しました。
今回の話に出てきた戦うメイドさんスタイルです。

30ページ目

「うむ、無事取り戻せたようで何よりじゃ。

これでなんら心配事もなくなったわけじゃし、今日の晩のフリックの舞踏会は予定通り行っぞい。

ふるって参加してくれい、皆の衆。」

学園長室に報告に来た僕達。

大体は原作とおりの展開のまま終え、舞踏会の時間となる。

サイトとルイズが軽く頬を染めて踊っているのを見ると、結果的にはこれで良かったのかなあとも思う。

「お兄ちゃん、他の女を見ない！」

「はいはい。」

僕はというと、ちょっと離れた隅っこでシャスティルと踊り中である。

メイドと踊ってる僕を見て、不思議そうな顔をするもの。

僕達を見下すように見るもの。うらやましそうに見るもの、僕に対して熱視線を送る、とさまざまだがそんな視線が全く気にならないほどに、ダンスに熱中することが出来た。

熱視線は多分、僕がいつぞやにカトレア達に選んでもらったドレスを普通に着ているからだろっ。

スーツを持ってないため、ドレスを着るしか無いのだ。

望んで・・・ではなくやむを得ず女装をしているということをおく。

「いつの間に覚えたの？」

「ママに教えてもらったの。上手い？」

「うん、なかなかだよ。って言えるほど僕も上手いわけではないんだけどね。」

ヒスカは厨房側。

竜だし、踊りになんて興味をもてないのだろう。

「それにしても、あの杖って何？」

精神力は使ってなかったみたいだけど……っていうか、お兄ちゃんこつそり“見て”たでしょ？」

「ばれた？」

「というか、見てたの？」

廃屋に入ったのは僕とサイトだけだって言ったのに。」

「見てないわよ。でも、そうでないと、あれが単発式だってことが分からないじゃない。」

見た感じあれって銃……に近い物よね？」

威力こそ段違いだけど。」

まあ魔眼を使ったわけではなく、もともとの知識自体はゲームなどで知っていたのだが。

普通の人間ならば威力の大きさはかりに気を取られて、構造や本質などに目を向けようと考えること自体難しいだろうに。あいつも変わらず鋭いことで。

確かにあれは銃といえるかもしれない。

弾があり、射出可能、火薬を使う、鉄製などなど。

大まかに見れば銃と同じだろう。

もちろん構造は大幅に違うけれど。

結果は大小あれど変わらない。

我が妹ながら見事な戦闘勘^{センス}である。

「エンデ。シヤスちゃん。

ご苦労様。」

「むっ……カトレア。」

「やつほー、カト……レア？

……か、可愛い……」

踊り終えて、一休憩がてら料理に舌鼓を打っていると、

カトレアがやってきた。

カトレアもドレス着用で、露出は少なく、ブーケを取った状態のウエディングドレスのような感じで黒を基調とし、赤がところどころに入った派手なドレスである。

少し開けた胸元がいささか気になる。

……目に毒だ。

可憐さの中に可愛らしさも内包しているカトレアに可愛いとつい口に出しつつ見とれてみると、オホンと咳き切るシヤスティル。

そ、そんなジト目で見るでない！！

ちよっと目を奪われていただけなんだからね！！

「お兄ちゃんとのドキラブタイム中に来てくるなんて無粋じゃない？」

「あらあら？」

独り占めは良くないと思うわ。」

「独り占めなんかじゃないの。」

単に家族との親睦を深めてるだけ。ついでに男女の仲もね。」

「エンデの方はそうは思っていないようだけど？」

「どの道、カトレアくらいの歳の女性はお呼びじゃないの。」

お兄ちゃんの好みは妹属性プラスおしっこプレイなんだから。
それを受け入れるくらいの度量が無いとお兄ちゃんの隣は無理ね。」

ぶはっ!?!?

何を言ってるのシヤスタイルは!?

再度来た、おしっこネタ!?

もうそこは忘れようよ!?!?

それを聞いたカトレアは一瞬怯んだようだが・・・それでも顔を紅くしながらこう賜った。

「そ、それくらいなら大丈夫。

痛いのは・・・覚悟が必要だけどソレ以外なら答える自信があるわ。

」

「・・・むむむ。

さ、さすがにこの程度では倒せないようね。」

ちよおおおおおおおおおおおっ!?!?

どういつ会話してんだ!?!?

そして嫌な自信だな!?!?

ていうか、いいところのお嬢様なのにシヤスタイルの話が理解できてるの!?!?

「それにエンデは年上好きよ。」

「何を夢見てるんだか。

お兄ちゃんは年下好きよ。」

「年上。」

「年下。」

「年上って言ってるでしょう?」

「年下だって言ってるじゃない?」

そのままいささか以上に険悪なムードになりつつ、2人の言い争いはヒートアップしていく。

得てしてこういうときに男ができることは無い。

そしてなぜまた僕がこんな“ハーレム漫画における主人公が本人の意思を無視して女性達だけで言い争うという、微妙な状況でいたたまれなくなる”という経験をしなければならないのだ？

もちろん、この闘争の原因は僕であるということとは理解している。

こういう場合、あらかじめの漫画や小説では主人公はご都合主義よろしく、にぶちん極まりないことが多いがここは現実。

文脈や会話内容から察するに、僕が原因であると推察することは難しくくない。

僕の好みを気にするカトレアであるが、貴族間では20はすでに立派な年増。

そのために年増とされるカトレアは嫁の貰い手が一気に狭まる。

僕としては歳なんて気にならないほどにカトレアは魅力的だと思うのだが・・・まあそこはおいとして、とにかく彼女は日本で言う30後半の女性が婚期を逃して焦り始めた状態・・・と言えば全て分かるかと思う。

下手に馬鹿な貴族と結婚するよりも、結婚しても別にいいかなと思える程度に好きな身近な異性を“妥協”で選んでいるところだろう。

妥協で結婚するしかないという考えの下、僕を狙っている。というのが僕の見解である。

もちろん、元日本人である僕は体や美人だからという理由ではなく、恋愛結婚を望んでいるためその気持ち・・・というか打算には申し訳ないがこたえることは出来ない。

友人としてもカトレアにはシツカリと恋愛結婚をして欲しいとも思っているし。

そのためならば僕も協力を惜しまない。

ふふふ。

言動だけではなく、周りの状況まで推し量ったゆえの結論であるからして中々に的を射ているという自信がひそかにあったりするが、もちろんそんなことは言わない。

というか言えない。

気まずくなり過ぎるもの。

「お兄ちゃん・・・顔に出てるし、断片的にだけど口に出てるよ？」

「・・・夢は諦めるしかないのかしらね。」

「さすがにカトレアが可哀想になってきた・・・というか鈍いとは別の意味で厄介。」

「というか、やっぱりお兄ちゃんは基本アホね。」

ん？

おや、いつの間にか言い合いが終わり、2人して僕を空前絶後の天然さんを見るかのような呆れた目で見てくる。

どういう流れでこんな目線を向けられたのだろうか？

意味不明である。

「何？」

まさか僕をその辺のラブコメのような“にぶちん”主人公として見ているのか？

なんて失礼な!?

「一応、言っておくけどちゃんと分かってるよ？
僕が喧嘩の原因であるうということ“くらい”は。」

多分無いと思うが、自意識過剰な予測だったのかもしれないので
“くらい”を付けておいた。

これで勘違いしていたとしても最低限の体裁は保てるということこの用意のよさ！！

素晴らしすぎる！！

その用意周到さと女心を隅々まで理解する紳士魂！！

そこに世の女性達は痺れて憧れ、世の男性達は羨み妬むのである。
僕ってヤツは罪作りな男だ！！

「お兄ちゃんと踊ってきたら？」

「・・・少しは満たされると思うけど。」

「・・・いいの？」

「ええ。さすがにね。」

一時的に応援してあげようと思えるくらいにはお兄ちゃんがアホだから。」

「ふふ。」

ありがとう。

でも大丈夫。

エンデがこうなのは・・・13歳のときにすでに知ってるしね。

分かった上での夢だから・・・」

「そう。」

「でも、躍らせては貰うわ。」

「・・・まあいいわよ。」

カトレアからしたらお兄ちゃんと踊れなきゃ何のために出席したかも分からないし。」

僕と踊って何が満たされるんだ？

これはマジで分からん。

そしてカトレアの夢？

そんなの初耳だ。

どうして一番の親友である僕が知らなくてシャスティルが知ってるの？

なんか疎外感を感じる。

というか面白くない。

「お兄ちゃん・・・嫉妬？」

「な、何言ってるのさ！？」

そんなわけ無いだろ！？」

た、確かになんか変に嫌な気持ちだが別に嫉妬なんかじゃない。

妹に・・・嫉妬する意味が無いし。

きつと違う。

そうだ、違うに決まってる！

この嫌な気持ちはもつと別の・・・何かだ！！

というか、顔に出てたかな？

「素直じゃないなあ・・・んで、あからさまに嬉しそうな顔されるとむかつくんだけど・・・カトレア。」

「ふふふ、今度はシャスが私に嫉妬かしら？」

「う、うるさいなっ！？」

今更だけど、カトレアはどうして今回の舞踏会には出席したのだからか？

前回の舞踏会では僕と同じく偏在で出たのに。

「そういえば、今回は出ることにしたんだね？
カトレア。」

「お、お兄ちゃん・・・本気で言ってるの？」
「ん？」

何が？」

信じられない物を見るかのような目で僕を見てくるシヤスティル。

「お兄ちゃんが居なかったから欠席したに決まってるでしょ？」

「ちよ、ちよっと、シヤスちゃん！？」

そこは言わなくても良いところでしょう!？」

という一連の会話を受け、なるほどと納得。

そりゃ知り合いが少ない場所でわざわざ舞踏会に出るなんてことはしたくないよね？

562

「合ってるけど・・・合ってるない。」
「？」

カトレアが不満そうにこちらを見る。
珍しいな？

「とにかく踊ってきなよ、二人とも。」

「うん、そうするね。シヤスちゃん、ありがとう。」

「今夜だけよ。」

頬を紅くしながらそっぽを向くシヤスティル。

なんだかねで恋敵にも優しいシヤスティルである。

まあ“妥協”である限り、僕はそれに答えるつもりは無いんだけどね。

もしくは僕が好きになるか・・・な、ならないし、なってないからな!?

一応言っておくけど!!

「ねえ、エンデ。」

「何？」

2人で踊っていると、不思議と周りの視線がこちらに釘付けである。顔の造詣の面もちろんあるだろうが、一番は誰の誘いも全て断ってきたカトレアと、シャスタイルとしか踊っていない僕とが二人で踊っている。

だけならばともかく、2人ともドレス姿なのだからそれがイタズラに目立つ。

どこかしこで“妖精の演舞だ”とか“なんて蟲惑的な”や“御伽噺の一節の現場にいるようだ”とか言う声が聞こえてくるが、耳には入っても頭には入ってこなかった。

密着式のダンスを選び、それを使ってきたカトレアの胸やら太ももがちよいちよい体に当たり、なおかつほんのりと頬の染まったカトレアの顔が近くにあるのでそれどころではないのである。

よりもよってこの型のダンスを選ばなくてもいいだろうに。

「エンデは好きな人はいる？」

「いるよ。」

「誰？」

「父上に母上に・・・」

「そういう意味じゃなくて・・・」

まあ、だよな。

「異性としてってこと？」

「・・・うん。」

そういうことなら。

「いない。」

「・・・。」

「僕は分からないんだ。

人を好きになるってことが・・・恋をするってことが。

どんな気持ちで、どんな物なのか？

全く分からない。」

前世からそうだった。

可愛いとは思っても、この人と結婚したいと思うほどの人には出会ったことが無いし、彼女にしたいと思ったことも無い。

彼女が欲しいとは思っている。思っているのだが。

「あまりにそういう気持ちからなくて、僕は病気なんじゃないかと本当に思ったこともある。

とにかく分からないんだ。

そうだと“思う”。」

「・・・きつと分かるよ、エンデは。」

「・・・うん。そう“とも”思う。」

「分からなくても私が分からせるから。だからきつと分かる。」

カトレア？

「私は分かる、分かりたい、分かせたい。だから夢をあきらめない。」

どれだけかかってても、どれだけ苦労しても。

絶対に・・・あきらめない。

叶えて見せる。」

とって笑うカトレアの笑顔は女神のよう。

なんか小難しくてさすがに“にぶちんではない主人公”を自負して
る僕と言えどカトレアの気持ちを推し量ることは出来なかったのだ
が。

その笑顔を前に真っ赤になりながらも僕は言った。

「カトレアに惚れてなんかやらないんだからね!？」

その言葉を聞いて、尚くすくす笑い出す余裕なカトレア。

うつむ・・・我ながら素直じゃない・・・かもしれない。

そんな舞踏会が過ぎ、僕は変装をしてとある場所に来ていた。

舞踏会でルイズが自分に惚れたと勘違いして、サイトがルイズを襲
ったというイベントが起こっていたりしたが幸せそうでは何よりであ
る。

もちろんサイトはボコボコ。
いいさま。

無駄話 というか無駄思考はここまでにして、話を戻そう。
僕は現在、チエルノボーグ監獄にいる。

有数の犯罪者が集まるトリステイン王国で最大級の監獄である。
現代と違って、監視カメラが無いので進入に際して注意が必要なのは人の気配のみ。
非常に楽だ。

どうしても倒さなくちゃいけない位置にいる職員さんには申し訳ないが、ちょちょよと接近して当身を食らわせて気絶させた。

風邪を引かないように錬金で作っておいた毛布（こうなるであろうことは事前に予想済み）をかけて、目当ての場所へ行く。

「こんにちは。

フーケ様。」

「こいつは・・・驚いた。

こんなところにメイドさんかい？」

僕は女装中。

戦うメイドさんスタイルである。

スカートの端をつまみあげて優雅に一礼する。

女装した理由は、なぜかというと僕が僕だとばれないようにどうすれば良いかと考えたところ。

まさか男が女装してまでメイドさんの格好でこんな場所までくるワケが無いと意外性を突き詰めたらなぜかこうなった。

シヤステイルとヒスカ、エルザと一緒に四人で考えたんだが・・・

そのせいかな？

何にせよ僕にたどり着くのは無理だろうと思う。

そのために魔法を使わずに気絶させたんだしね。

見張りも数人、わざと分かるように魔法を使わず剣で潰させてもらった。

もちろんメイジであることを秘密にするためである。

髪を黒く染めているので、これで十二分に騙せるはずだが念のため平民としての犯行に見せかけたのだ。

マスクを付けようと思ったのだが、視界を狭める上に息をするのが困難になったりするので付けなかった。

「それで？」

オマエさんみたいな得体の知れないメイドが何のようだい？

争う音が聞こえたからね。

正式な手続きをふんでここに来たってわけじゃないんだろう？」

「さすがフーケ様。

各国に名を知らしめる大盗賊なだけがありますね。」

口調変えも僕の印象と結び付けないようにするため。声も裏声だ。

ちなみに声優さんで言うなら田村ゆかりさんボイス。

髪を変えるだけで印象はガラリと変わるがそれでも普段どおりの振る舞いではすぐにバレルだろう。

それはまずい。

「どっかで見たとような気もするけど・・・会った事あるかい？」

「無いと思われますよ？」

「まあ・・・言うわけ無いか。

とっとと本題に入っとくれ。」

あんたが無駄話をしてきたんだろうに。
まあいいや。

こほん。

「ええ・・・では。」

本題に入らせていただきます。

結論から言わせていただきますと・・・貴方が養っている子供達。
いえ、正確にはティファニア様に用があるのです。」

「っ!？」

いい感じの驚きようを見せてくれるフーケ。もといマチルダさん。

「貴方を脱獄させて上げます。」

なおかつ、向こう10年は飢えることのお金を貴方に渡
したいと考えております。」

「・・・どうしてそんな偽善をするんだい？」

油断無く僕を見つめるフーケ。

まあ警戒するよね？

美人さんに睨まれて興奮するなんていうマルコリヌのようなレヴェ
ルの高い性癖を持たないので、この視線にさらされ続けるのは少々
以上に心臓に悪い。

とつと話を終わらせよう。

「もちろん条件があります。」

聞きますか？」

言外に“やる気はあるか？”と聞いている。

「あたしの状況を知って言ってるんだらう？」

「やらないわけには行かないね。」

「そもそも選択肢なんか無いじゃないか。」

「それは重畳。」

「ありがたいです。」

「いいからとつとと話しな!!」

「まず言わせていただきたいのですが、私の主人（もとい僕）は紳士であります。」

「ですので選択肢が無いということはありません。」

「ただ逃がすだけ。というのも可能です。」

「お金も差し上げます。」

「・・・とことん上手い話過ぎて胡散臭いねえ。」

「紳士だと言ったでしょう？」

「偽善者と呼んでいただいても結構ですが、誰になんと言われようと女性には優しくする主義なのです。」

「とある筋から貴方達の境遇に大層な同情をした私の主人は貴方を助けるように私に命じました。」

「ここまでではよろしいですね？」

「そういうとまたもや驚き、フーケはこちらを見定めるように見つめてくる。」

「ふん、優しすぎて涙が出るね。」

「それは良かったです。」

「オマエさん、つまらないね。」

「皮肉にまともに返すんじゃないよ。」

「・・・理不尽です。」

「くくく。でだ、条件とやらはなんだい？」

「これから先、近隣で戦争が起こります。」

「詳細や情報の出所を言う事はできませんが、確実に起きるかと思わ

れます。

そのため、彼女には戦争時。

決して外に出歩かず、食料などの必須品の物資は全て貴方に確保してもらいたいです。」

「・・・？」

つくづく分からないやつだね。

アンタの主人つてのは。」

「そしてこれから先。

出来れば貴方が常に彼女のそばに控えていただきたい。」

「なんのため？」

「簡単な話です。」

彼女は虚無ですから。」

「っ!？」

またもや驚くフーケ。

「信じがたいね。」

「信じなくても信じていただいても結構。

虚無であるかどうかは重要ではなく、結果的に重要なのは貴方が行うことです。」

そして伝言も頼みたいですね。」

「・・・言ってみな。」

「“サイトに近づくな”です。」

「サイト・・・?どこかで聞いたような名前だね?」

「貴方を気絶させた平民の少年ですよ。」

「むっ・・・あの坊やかい。」

「なかなか良い表情ですよ?」

「う、うるさい!？」

少し頬を染めるフーケ。

「アンタ・・・本当に何者なんだい？」

さつきから頼まれていることに共通点すらなんら見いだせない。

「アンタの主人は何を考えてる？」

「主人はただのしがない貴族。そして私はメイドです。」

さつき言っただけではないですか。」

「ふん。まあいいさ。」

で、それだけかい？」

「やっていただけるので？」

「本当に金はくれるんだろっかね？」

「もちろんです。」

腐るほどありますから。」

「・・・嫌味だね。」

「そうですね。お金ほしさに盗賊をし続けて現在はこんな場所で女としての幸せも知らずに、身を落とした貴方からすれば嫌味になるでしょうね。」

「っその言い草の方がよっぽど嫌味だろっ！？」

「ごめんなさい、悪気はないこともないんです。」

「くそつたれな性格してるね。」

「てへ、冗談です。」

「・・・忌々しい小娘だよ。」

「それは心外です。」

こんなにも優しい僕なのに。

フーケの緊張を解こうとちょっとしたジョークを言ってみただけだ。

「お金が足りなければ言っただければ。」

しばらく経ったら様子を見に行きますので。」

「・・・これだけは言わせて貰うけど、テファに害を及ぼそうって

んなら私の全てをにかけてでもその主人とやらを殺しに行くからね？
伝えておきな。」

「かしこまりました。」

その心配は無用ではありませんようが。」

今回のチエルノボーグ侵入はもちろん目的がある。

まず第一にテファとサイトと関わらせない。

ルイズとのみラブラブさせる予定なので、これが一番の目的である。
七万と戦った際に知り合うことになる2人だが、これで少しでも友情にヒビを入れられたら。と思う。

酷いとは思うが、そのときには代わりに僕が友達になってあげるからそれで勘弁してもらいたい。

サイトへのフラグを立てさせるわけには行かないのだ。

これまたシエスタと同じような理由で近くにサイトがいれば惚れる可能性が高い。

よってその可能性を排除するためにサイトが知り合う前に仲良くなりづらいようなフラグを立てておくのである。

二つ目がマチルダさんにも平和な生活を満喫して欲しいという紳士魂ゆえに。

王家に追われて、盗賊に身をやつさずを得なかったマチルダさんに少しでも幸せになってもらいたい。自己満足に過ぎないが、まあそこは考えない。

何よりもワールドが接触する前で良かった。

三つ目がワールドに協力されると面倒だから。

兄弟子にあたるので何とか上手くあたるつもりではあるが、レコンキスタは出来れば早々に潰したい。

七万が集まる前に。頭を。

クロムウエルを殺っておきたいのだ。

理由はもちろんサイトと七万の軍を戦わせたくないから。

ルイズが悲しみ、ひいてはカトレアも悲しむ。

そんなのは見たくない。

たとえ戻ってくる。生きていると分かっているてもである。

というか、今回の件でもしかしたら本来の歴史が変わるかもしれないし。

下手をすればマジ死にである。

四つ目にロマリアから彼女を隠すため。

時間稼ぎにしかならないと思うが、サイトと接触すれば彼女が虚無だということもすぐにバレル。

聖戦なんてばかげたことはもちろん、僕も反対だからだ。

なんとか風石を片付けるまでの時間を稼ぎたい。

そのための“準備”や“力”は5年ほど前から用意してある。

が、まだ時間が必要だ。

そのためにはロマリアを調子付けないようにしないといけない。

本当、トリステインは大変である。

30ページ目(後書き)

FPSについて感想を頂いた皆様。
ありがとうございます。

CODはお金が足りず。

レジスタンスは売り切れてた。

結局、キルゾーン2になりました。

他のものについてはいざれ買おうかなと思っています。

トリニティユニバーズやネプテューヌ、アガレスト戦記と買いたい物は多い。

いやはやお金が足りないですww

ロストプラネット2も欲しい。

ロストプラ買った時は誰か一緒にプレイしてくれると嬉しいです。

メイドさんスタイルのエンデ

> i 2 4 1 9 3 — 2 2 3 8 <

今回はヒスカとシャスタイルのラフを公開予定。

ちなみに線入れはしても色塗りをする予定は無い。

ただの立ち絵であるからして。

前回のネコミミエンデのイラストの色塗りはまだ待ってくださいな。

今、ちょっとリアルが忙しいのです。

インターンシップの申し込みやら面接で。

今週末か来週末あたりには見せられるかも・・・しれない。

就活やりたくないよおおおおおっ!!

ゼミ入ってれば良かったよおおおおおっ!!

31 ページ目 (前書き)

なんか頭だるい。

ヒスカのデザインは変更しました。

本文中にはアルトネリコ2のクローシェ様に似ていると表現したけれど、ヒスカは完全にオリジナルデザインに。

フーケを逃がし終え、しばらく経った頃。

僕が普通に授業に出てる姿をいかにも忌々しそうに見るギトギトをスルーしつつ、授業を受けている・・・フリをしていると。ミスタ・コルベールが教室に入り、慌てた様子で言った。

「失礼いたしますぞ！ミスタ・ギトー！！」

「授業中ですよ。」

ギトーが乱入してきたコルベール先生を睨む。

「本日、アンリエッタ姫殿下がゲルマニアの訪問からお帰りになる際にこの魔法学園に行幸なされるとのことですよ！！」

今の時期。やってくるとなるとアルビオンの王子に対する恋文の回収イベントが近いのかな？

というか手紙なんていうものは燃やしておいて欲しい。

国のトップ同士が恋仲というのは他の国にとって見れば面白くないだろうしね。

何よりもトリスティンがまずい。

今を逃せばトリスティンと同盟しようなどという機会、国は出てこなくなるだろうからだ。

今回の姫殿下の外国への遠征はマザリーニが苦肉の策としてトリスティンが生き残るために出した“婚前外交”だ。

現在のゲルマニアは勢いあれど、国土あれど、民あれど。

国のトップであるアルブレヒト・・・だっけ？

その二世だか三世が始祖の血を引いていないということ、由緒正しいアンリエッタの血が欲しい。

始祖の血ぐらいなんだと思われるだろうが、この世界にとってブリミルの。始祖の血というのは何よりも重要視される。

平民にもブリミル教が浸透しているのだから、アルブレヒトから見たら自身の地位の向上、安定。

国の力。発言力を増すためにも喉から手が出るほどに欲しいだろう。長期的に見ればトリステインというお荷物を負ってでも、ありあまるメリットがあるのである。

これは地球と違って、各国間共通の宗教概念を持つてるからこそそのメリットだ。

トリステイン側から見ればこれを逃すと生き残る道は無い。

メリット、デメリットが他の大国と重なるなんて事はおそらくもってこれから先、まず無いだろう。

まあ最終的に、始祖の再来とも呼べるルイズの力で辛くも生き残るわけだけどね。

現在のトリステインは汚職まみれの人間。

程度の低いモラル。

数の少なさ。国土の狭さ、ガリアとゲルマニアに挟まれているという地理的特徴。

見得を張って商家や商人達に借金をするばかりの概ねの赤字貴族ども。

そしてその割りを食い、野垂れ死んでいく労働力と言い換えることの出来る財産。もとい“平民”が減っていく。

餓死や借金による奴隷化。夜逃げなど。

安定して経営している領などせいぜいが僕のとこのレイフォールと

ヴァリエール。そして堅実に稼いでいる下位貴族の一部のような物である。

他の貴族ドモは基本赤字。

日本で言うところの財政赤字だ。

ちよつと違うかな？なにせよこの婚前外交が上手くいけば現状を自力で回復させるよりも遥かに簡単に国力を上げることが出来る。

（もちろん比較的、と頭に付いての話だが。）

トリステインという国にとってもこの“同盟”は望むところなのである。

一応“同盟”という名目ではあるが、これは貴族お得意の見得。ないしは建前で、実際は助けてもらうに等しいけれども。

むしろ渡りに船。 棚から牡丹餅な案件だ。

アンリエッタの意思は別として。というのがいささか寝覚めが悪いが、そこは安心しなさいな、アンリエッタ姫！！

僕は紳士だからね。

一応だが、君の幸せも考えている。

何よりもサイトに惚れさせないために！！

マザリーニ辺りは内心、“始祖の血を引いておらぬゲルマニアの野蛮人どもに頼らねばならぬとは。今は亡き王に申し訳が立たぬ”とストレスまみれで今以上に体重が激減していくかも。

ご苦労様です！マザリーニ閣下！！

僕はもう彼を尊敬して止まない。

ゲルマニアは各国から基本的に見下されている傾向があるからね。見下しつつも認めることの出来る点といい、枢機卿というロマリアの坊主ドモの結構なトップの立ち位置にしながらも国を思い、献身的かつ宗教の考えに縛られない柔軟な思考。

時には自身の宗教観を捨ててまで合理的な考えを示したりと、僕が王ならば彼を次王に任命していいほどの人材である。

もはや僕の仲ではマザリーニ“閣下”だ。
今度、胃に優しい食べ物でも送ってあげようか？

とか考えつつ。

「アンリエッタ姫殿下のおなあああああり〜。」

レッドカーペット？

それを敷いて、その上をガラコロガラコロと音を発てて道を行く馬車。

ある程度近くなったところで、ようやく顔が見える。

生王女はちよつと感慨深い物がある。

なかなか綺麗だと誉めてあげないこともないね。

カトレアの方が可愛いし、綺麗だと思うけど。

中身もスタイルもすべてにおいてカトレアの方が僕は好きだけれども。

ノ、ノロケじゃないぞ！？

単なる“客観的”事実だからな！？

むっ、あれは・・・ワルドもといワルっちじゃないか。

ルイズもハツとしている。

ちなみに僕がいてもルイズはワルドと一応の口約束程度の婚約者ではある。

その辺は特に関与しなかった。

というか出来なかった。

ルイズが10にも満たない頃の話であるからして、その辺の話に他人が100それもちうらも同じく100に満たないガキンチョがそんな話に割り込むのもどうかと思っただし、サイトにベタぼれになるから良しとしている。

ちなみにルイズの悲しむ顔を見たくはないので、アルビオンでのワールドとの結婚式イベントは妨害させてもらっ心積もりである。取って置きを考えがあるから楽しみにしておいて欲しい。

ふふふふ。

今からイタズラ心が沸き立つよう。
と言いたいところなのだ。

“とある理由”から、それをさせなくてはならないかもしれない。
どっちを取るか悩むところである。

そしてその日の夜。

女の子の部屋を覗くのは紳士にあるまじき行為だが、こればかりは勘弁してもらいたい。

ルイズたちのためであるからして。
部屋にはフルーツの偏在を仕込んであるのだ。

フルーツの偏在を通して見たところ。

ルイズはぼーっとしている。
彼女にとって憧れとも言えるワルっちに出会えたから仕方ないと言えは仕方ないが、サイトは当然ご機嫌斜めになっている。

まあ、そりゃそうだよな。

サイトはルイズに一目惚れだそうだし。

“ほのじ”ってやつだ。

サイトは気を引きたいあまり、「ぺったんこ！」とか「まな板娘！
！」とか悪口を言ってみたり、鼻をつまんだり髪の毛を引っ張って
みたりと気を引こうと必死だが、全無視である。
拳句の果てに服を脱がし始めてみたり。

それでも反応しないルイズ。

そして、サイト。

脱がすのはダメだろう。

サイトは頭を自分で打ち付けて「オレはなんて寒いヤツなんだあ
あああああっ！！」と自己嫌悪に浸っている。

浸る前に服を着せる！！

と、そんなこんなで部屋に誰かがやってきた。

ようやくお出ましか。

サイトはハッと気づいてブラウスを着なおしたルイズにボコボコに
されていた。

当然である。

「誰？」

「開けるか？」

「お願い。」

「わかった。」

開いたドアの先にはロープを目深に被ったアンリエッタが立っ
ている。

そしてデイデクトマジックを部屋にかけた。

もちろん僕の偏在にそんなちやちな物は通用しない。

フルーツを弾膜ゲームよろしく華麗に動かして避ける。

僕にとっては造作もないことだ。

デイデクトマジックと一言で言ってもいきなり周囲を調べること

ができるわけではなく、“照準”が必要だ。

ファイアボールのように一定の効果範囲があり、照準を付けて、周りを調べる。

これはディディクトマジックも同じである。

その効果範囲は杖を機軸に円周上に広がっていくため全方位を調べられるのだが、これは術者によって“ムラ”がある。

効果の薄いところ。ないしは効果が無い部分がわずかにだが存在するのである。

このムラを利用したのが吸血鬼のソレとばれないように扱う隠蔽魔法だったりするため、熟年の吸血鬼はディディクトマジックを誤魔化したりできるわけだ。

つまり何が言いたいかというと、いつぞやのレイフォール領で吸血鬼と戦う時にそのテクニクを魔眼で見ている上、エルフ式魔法もとい吸血鬼と同じ先住魔法を扱える僕にとって、アンリエッタのよくな日ごろ魔法を使わない、鍛錬が足りないメイジのディディクトマジックで攻略できるほど僕の偏在は甘くないのである。

たとえ魔眼が無くともムラを見切り、円球状に広がる範囲をやりすぎることなど造作も無い！！

イージーモードは小学生までだよねえ！！

円周上に何度か広がるディディクトマジック。

目には見えないが精霊を見ることが出来る僕にとっては見ることが可能。

魔眼が使えれば完璧だが、さすがにフルーツの偏在では無理。

というわけで精霊の動きから薄いとこ、効果のかすかな隙間を狙いフルーツを操作してそこを通り抜けていく。

ちなみにそうしたムラがあるため、それをカバーできるように何度

かに分けて円周上の索敵フィールドが展開される仕様なのはさすがである。汎用性に優れて、今の今まで伝わってきたコモンマジックなだけはあるが、僕には通用しなかったただけの話。人間、やれば意外とやれることは多いのだ。

「大丈夫なようですね。」

安心したようにそう呟くアンリエッタ。

ふう。なんとかばれずに済んだ。

ちなみに現在位置はルイズの部屋のベッドの影に居る。

その後の話は概ね歴史とおり。

これ見よがしにため息を吐き、心配してたずねたルイズに思わせぶりに――

“いえ、なんでもないので。ごめんなさい。あなたに話せる話じゃないわ・・・いやだわ。私。”

と言い出したアンリエッタ。

アンリエッタだって無責任な親の被害者であるからして、例え横恋慕大好き、少し頭が弱い、ウェールズが死んであまり経たない内にサイトに乗り換えるとしても特別嫌いでは無かったのだが。

こうして改めて彼女のこうした態度を見てると“残酷な稚拙さ”とでも言うべきか？

それが目立つ。

真面目かつ優しいルイズは「そんなことはありません！あんなに明るかった姫様がそのようにため息を付くなんて見ていられません！！」
と言い出し、「いいえ、言えませんが！！貴方を巻き込むわけには行きません！！」、「話してください！！姫様！！昔は何でも話したではありませんか！？私をお友達と思っているなら、話してくださいませ！！」という話の展開を見せる。

色々ツッコミどころ満載であるが、まああれだ。

アンリエッタにはルイズに心配をかけたくないのならせめてため息を隠す程度の腹芸は身に付けて来いと言いたいし、ルイズはルイズでもう少し後先考えてから言葉を発して欲しい。

“巻き込む、アンリエッタ、話せない”の三つの情報から判断しただけでもこれがなかなか面倒なことになることは予想できるだろうに。

まあそこがルイズの魅力なんだろう・・・サイトに言わせれば。

「私をお友達と呼んでくれるのね・・・嬉しいわ、ルイズ。

そうね、今から話す話は誰にも話してはいけません。」

お友達を大切にせいや!!

話すなよ!?巻き込むなよ!?お友達だからこそダメだろう!?とツッコミたいところだが、アンリエッタもまだ16歳。

周りは宮廷の汚職まみれの阿呆ドモ。親は無責任。

父方はとつとと早死に。母方は喪に服し、政治に携わる気が微塵も無し。

そんな環境で生きてるアンリエッタを友達と呼んでくれるルイズ。感極まってついつい口が緩んでしまうのも仕方ないか?

というより頼りになる人間が周りに皆無だな・・・こうして考えてみると。

鳥の骨、もといマザリーニ枢機卿は“支え”とはちょっと違う気がするし。

頼ってくれと言うルイズの言葉はアンリエッタにとって蜂蜜以上に甘い言葉だったのかもしれないね。

しょうがないか。

今日の今をもって“WTAOL計画”を成功させることを心に決める僕であった。

“WTAOL計画”と書いて、“タオル計画”と読む。頭文字は発音しないYO！

詳しいことはまだ秘密。

これで残念ながらルイズとワルドの結婚未遂イベントを阻止することとは適わなくなった。

が、今回ばかりは仕方あるまい。

もちろん王女にキスをするところは妨害させてもらった。

フルーツにサイトを襲わせたのだ。

迷い込んだできたのか？とアンリエッタとサイトは怪訝な顔をしたが、僕のペットであることを知ってるルイズがそのまま姫様と話を終えて、僕にフルーツを届けようとドアを出ようとしたとき。

ドアからどたばたと騒がしい音がする。

焦って姫様がドアを開けて見ると、そこにはギーシュが。

盗み聞きはよろしくないぞ！ギーシュ！！

僕も人のことを言えないが、これはあくまでもルイズ達のためであるからして。

興味本位で会話を盗み聞きなんていう悪趣味な真似は普段はしてないよ？

姫様たちは今の話を聞かれてまずい！？と焦っていたがデイディクトマジックだけで安心していた姫様の完全なミスである。

もちろん僕は気づいて黙っていたが。

そもそも知らせようとしたとしても、フルーツの偏在じゃ喋れないしね。

今回の件でアンリエッタには密談の難しさ。というのを学習してもらおう。

ちゃんと自分で失敗を経験したほうがためになると敢えてギーシュを放っておいたのだ。

こういう時はサイレンスまでかけないとね。

その後の話は省略する。

代わり映えしないし。

最後にアンリエッタからルイズに水のルビーを渡されていた。

ううむ・・・回収しておくか？

いや、でも。

ルイズにはこれから先、戦場で確実に必要になる物だ。

回収するならば厄介であろう、ヴィットーリオの分。

コルベール先生が持っている始祖の指輪だ。

偽者とすりかえれば楽なんだけど・・・難しいよね。

あの先生が相手だと。

普通に戦えば苦戦はしてもまず勝てるだろうが、そうした物品に対する観察眼は研究者ゆえにばれそうな気がする。

本当、どうしましょう？

でもって、次の日。

連れて行くのはヒスカとエルザ。

シヤステイルはお留守番。

よって寒さに強い野菜や果物が特産となつて各国に輸出されている国である。

ちなみにハルゲニアは生活様式が未成熟であるため、もちろんのことこうした農業形式も未成熟である。

レイフォール領やヴァリエール領、そうした技術を盗んだゲルマニアでは僕発信のカルガモ農業があり、収穫は安定しているが他は虫や病気にてんてこ舞いで苦勞しているらしい。

大変だなあ、他の領地は。

太ったカルガモを食料にもできるので便利である。

ただ、卵の場合は食中毒の危険性があるため、少なくともレイフォールとヴァリエール領では出荷禁止である。

にわとりと違って、水場という雑菌や菌が繁殖し易くも伝播しやす^{てんば}いところに住むカルガモの卵はにわとりの卵以上に危険と考えたためだ。

とまあ脱線した話を戻すが、そんなこんなで市場に並ぶ野菜類は不恰好な物が多かつたりする。

虫がついてたり、虫食い状態のものもあるがそうした物も普通に食べられている。

それも“虫ごと”。貴族間ではさすがに無いようだが、平民から取ってみれば仕方ないことなのだろう。

えり好みが出来るほど豊かな生活水準を保ててないのだから。

腐ってない限りは食べるのが普通だ。

ほとほと日本は豊かだなあと感じるね。

料理人としての興味本位でこうした虫料理（日本では馴染みが無いが、食虫文化というのは各国にある。日本ほど虫を忌避する国は世界的に見ても珍しいらしい。そりゃ自分の体積の100分の

1に満たないゴキブリを見た瞬間、大の男ですら“きゃーきゃー”
言うなんて国はなかなか無いだろう。()といったものもヒスカと一
緒に作ってみたが、これが意外なことに意外と美味しく無いという
ことである。

見た目に反して美味いというイメージだったのだが、それが見事に
裏切られた。

イナゴやセミ、一部のゴキブリなどは美味だと言っが、そうした昆
虫に“すごいなあ”と地味に感心したりした僕である。

ちなみに僕達はもちろん、走って馬を尾行中。

もちろん三人とも風の魔法を使っています。

一時的ならばともかく竜も吸血鬼も人間も長時間、走れるような生
き物ではないからね。

あ、サイトがギーシュに組みかかって馬から転げ落ちた。

なにやってるの、あいつらは。

31ページ目(後書き)

ヒスカのイラスト。

> i 2 4 2 7 5 — 2 2 3 8 <

全体の立ち絵はまた今度。

翼や角、尻尾は出し入れ可能。

竜形体時にも尻尾は二本あります。

32ページ目

「ふむふむ・・・ここがラ・ロシエールか。」

「うわぁあああつ！」

「凄い、凄い！！」

「船だ船！！」

「船だよ！？エンデ！！」

「ちよ、ちよつとつ！？」

「ひ、引つ張らないで、エルザ！？」

電車を始めて見たような子供の反応をするエルザ。

一応、エルザは成人以上の歳ではあるはずのだが。

こうして見ると歳相応にしか見えない。というか普段から歳相応の振る舞いなのだが、鋭い人間ならばなんとか気づく程度のどこか演技くさい部分がある。

それが今は無いのだ。

いたって自然に無邪気に笑うエルザを見て、まあいいかと思いつつ。

「おおうつ！？」

「こ、これはなかなか・・・」

ヒスカはというと八百屋さんで食材の品定めをしているようだ。

「状態が良いのが多いが・・・なかなか良いわね。」

「ほほう、お嬢ちゃん。」

なかなか見る目があるねえ！！

しかもアルビオンは反乱軍によって国が乱れてる。次に入るのはいつか分かんねえ。

今買わないといつまた手に入るか分からんぜ？
どうする？」

「買ったわ！！」

「まいどありっ！！」

食材を買い叩くヒス力。

あんまり荷物増やさないでよ。

ていうか、すぐには帰れないから腐るかも。

冷蔵木箱は持つてきてはいるが、あくまでも3日分の食材が入る程度
の大きさである。

あまり買い込まれても持つて帰れませんよ？

ていうか、見るからに買い過ぎだつてば。

「ご、ごめんね。」

つい、良い食材が揃つてたから・・・それにしばらく手に入らなくなる
つて聞いたら。」

「まあ、気持ちは分かるけどね。」

作物というのは基本的に地域によって特色が出る。

寒い地域なら寒さに強い食材があらかただし、また逆に温暖な地域
ならば熱帯性の野菜が特産となる。

トリストインに流通する寒い地域、ないしは涼しい場所にある野菜
や果物は7割以上がアルピオン原産でここラ・ロシエールに一端集
められ、その後船に積み込まれてトリストインにやってくる。

その間、やはり野菜、果物の鮮度は落ちるのである。

しかし、ここにある野菜群はアルピオンで収穫されて間もない新鮮
な野菜が大方なため、トリストインの八百屋で見る野菜、果物より

もかなり良質なのだ。

ラ・ロシエールはトリステインの港であるため、他にもゲルマニアやガリア、ロマリアとトリステインに送り込まれる各国の食材や家畜なども集められている。

地理の関係上、もちろん一番近いアルビオンの作物や家畜が多いけれども。

僕としてもできれば帰りに買い込みたいものだ。

というわけでわざわざ3日分の食材が入る、旅に持っていくにはちよつと大き目の冷蔵木箱を持ってきたわけだが・・・こんなことからもう少し大き目のを持ってくるんだつた。

ていうか、このままアルビオンの王族に倒れられると辛いよね。

アルビオン原産の食材が手に入らないという意味で。

特にリンゴは日本で言うところの青森のリンゴ。のような物であるから特に美味しいのだ。

この世界には農薬なんてものは無いので、たとえ虫食いで見た目が悪かろうとなかなかに美味しいが多い。

ワルっちたちはここで一泊するはずだから、僕達もここで一泊することにしよう。

鮮度の良い食材を使つての晩飯だ。

食べるのはもちろん、作るのも楽しみである。

食材たちの味をどれだけ引き出せるか。そう考えるだけでワクワクしてくる。

夜。

ワルっちとルイズの部屋を覗く影が一つ。

言わずもがなサイトである。

そしてその影を除く影。もとい僕がサイトのヤキモチの焼きっぷりに見ていられなくなつたので、ちよつとだけお節介をしてあげようと気になった。

「情けねえ。」

「黙れ。」

「ヤモリみたいに窓にへばりついて、惚れた女とその婚約者が仲良さそうに談じる姿を見て、齒噛みするやつがオレの相棒とは切なくて涙が出るね。」

「うるせえよ。」

「そんなに心配なら言えばいいじゃねえか。

オレを見てくれ・・・とか、そんな男よりオレのここに来い！！とか。

こんな女々しいことをしてるよりも、よっぽど男らしくて有意義だと思つがねえ、オレは。」

「俺の純情が剣なんかに分かつてたまるか、馬鹿やろう。そしてオレはあんなツンツン頭髪女に惚れてねえ。」

「ひでえ。でも許す。相棒だかね。」

人間のオマエさんが言うなら、剣には分らんことなんだろうさ。

ああ、そうさ。」

「いじけんなよ。オレがいじけたいってのに。」

「あんなにオレが尽くしてやって、守ってやってるのにどうして振り向いてくれないんだ？オレはこんなにご主人様が好きなのに！！・・・ってか？」

「うるさいって言うてんだろ、駄剣。」

「駄“犬”はオマエさんだろうに。あ、オレ様、今上手いこと言っ

た。

剣にしては気の利いたこと言った。」

「うるせえってのっ!?!」

といってるサイトの声がうるさかったのだろう。

ルイズが気づいて窓を開け、へばりつくサイトに声をかける。

「……何やってんの?」

「……イモリごっこ。」

「イモリは両生類。こんな場所にいねえよ。それを言うならヤモリだろ? 相棒。」

「うるせい。」

「……あんたら、馬鹿じゃないの?」

「うるせ。」

……ちよつとカツコいいからって、ぽけつとしやがって。

きもちわりいんだよ!」

ああいうことを言うからすれ違っただろうに。もっと素直になればいいのに。

まあサイトの気持ちも分からんでもないが。

「き、きも……気持ち悪いですってっ!?!」

あ、ああああアンタになんでそんなこと言われなきゃなんないのよ!?!

この恩知らず!?!」

「うるせっ!?!」

デレデレしやがって!?!」

「はあっ!?! 何わけわかんないこと言ってるのよ!?!」

てか、デレデレしてんのはアンタでしょうにっ!?!」

「オレがいつデレデレしたってんだよっ!?!」

「キュルケ。」
「んぐつ!?!」

確かに。
キュルケに抱きつかれるたびにサイトは鼻の下を伸ばして、まんざらでも無い様子をルイズに見せている。

「ていうか、盗み聞きなんて最低!!」
とつとどっか行け!!」

といつてサイトを蹴り飛ばすルイズ。
サイトはすぐにデルフを抜いて、ガンダールヴの力でもって着地する。

「あ、危ねえなっ!?!」
怪我したらどうする!!」

「うるさい!!」
とつと寝なさいよ!!」
ふんっ!!」

そのままボタンと窓をしめてカーテンも閉めるルイズ。
はぁーいささか女心という物を理解して無いな、サイトは。

「さて、ちょっとだけ慰めに行きますかね。
とおりすがりのメイドを装って。」

ときばきと着替えて、サイトのところに着地する。

「だ、誰だ?」

「通りすがりのメイドでございます。
いえ、何。

少々騒がしかったので・・・気になって見ていたのですが・・・
「
というサイトは鼻の頭を搔いて、気まずそうに視線を逸らす。

「み、見られてたのか・・・」

「ええ、うるさかったので。」

「ご、ごめん。」

「いえ、謝る事ではございませんよ。

ただ、見ていた限りでは貴方の心配は杞憂と思われれます。」

「な、何の話？」

「・・・あのお嬢様と貴方がお似合いだということですよ。」

「・・・そんなことないよ。

オレ・・・犬扱いだし。」

「愛情の裏返しでございましょう。」

「どうしてそんなこと分かるんだよ？」

「勘ですよ。」

「・・・勘かよ。」

「私の勘は良く当たるのです。」

「くくく、相棒。」

そいつの勘は信じてもいいと思っぜ。」

むっ、デルフめ。

多分僕だと気づいてるな？

さすがチート剣。

「・・・まあ、参考にはするよ。」

ありがとう・・・ええと・・・とおりすがりのメイドさん？」

「いえいえ、礼には及びませんよ。」

私は買出しがありますの

で・・・これにて。」

ガンダールヴは精神の高ぶりがその戦闘力に影響する。明日にはワルっちとサイトの模擬戦だ。

出来るだけ気力を充実させたい。

サイトは僕の弟子。ワルっちは父上の弟子。

どちらの弟子が強いか。

勝負だぞ、パパ（パパンでも可・・・なんちつて）！！

「どこ言ってたの？」

「ちよつとしたお節介。」

「ふうん。」

あ、これこれ。

サラダが出来たよ。」

「おうさ。エルザ、皿並べ手伝って。」

「おうさ！まかせて。」

「真似っこかい。」

そして次の日。

ちなみに寝る時はエルザと一緒にベッドである。

魔法学園の22号室では新しいベッドが入るスペースが無かったの
で、止むを得ず僕のベッドと一緒に寝るようになった。

カトレアやルイズ、シャスティル、ヒスカと一緒に寝たことがある
のだが、エルザと寝るのが一番落ち着く。

なんか沈静ホルモンみたいな物でも放っているのだろうか？

多分、ぬいぐるみを抱く、抱き枕を抱く。みたいな感覚で落ち着く
のだろう。

最初は今は居ないエミリアと一緒に寝ていた頃を思い出し、不覚に

も泣いてしまった時もあったがそれ以来、エルザとは一緒に寝ている。

ちなみにエミリアの息子であるアルバは現在もすくすくと成長中。エミリア似の美少年だ。

そしてエミリアも子育てがだんだんと落ち着いてきたのもう少しで我が家に帰ってくるらしい。

久しぶりにエミリアと一緒に寝たいなあ。

なんてことを思いながら、サイトとワルっちの戦いを観戦中。

原作よりも強くなっているサイトならワルっちくらい楽勝だと思っていたのが、思いの外苦戦しているようである。

シヤステイルに負けて以来、滅茶苦茶頑張ってたし、僕というイレギュラーのせいでは本来のワルっちより2倍って感じの強さではないか？これは。

あ、ばか！

突っ込むな！！

サイトがギリ貧に追い込まれ、焦ったサイトが無闇に突っ込むがそこをエアハンマーで潰され、蹴り飛ばされた。

くそう、せいぜいこんなものか？

さすがに付け焼刃じゃ勝てないか。

ていうかそれで勝たれたら、ワルっちの面子が丸つぶれだもんね。

「君はすばやい。

さすが伝説の使い魔だ。

技術も・・・とてもじゃないが少し前まで一般人だった素人とは思えないほど。

まあ・・・少々荒削りだがね。

どこで習ったかは知らないが、その点は師匠が悪かったようだ。」

ふ、ふざけんな!?

サイトはまだ特訓してそんなに日が経ってないんだぞ!?

むしろ二ヶ月ほどでここまで仕込んだのは僕の技術があつてこそで
・
・

「エンデを・・・オレの友達を馬鹿にすんな。んで、まだ終わつて
ねえ。」

「エンデ?
なるほど。」

どこか見た動きだと思つていたら・・・彼女・・・では無かつたな。
彼が師匠か。

ふふふ、例え師匠のご子息・・・神童とは言えど人に教えることは
別物か。

さすがの彼でも教える才能は無かつたようだな。」

こ、このやろっ!?

言わせておけば好き勝手言いやがって!!

だから、期間がな!

んでもつてずっと面倒を見てるわけじゃないし!!

「うるせえ。

てめえなんかクソ雑魚だ!!」

そうだ!!

ワルっちなんてクソ雑魚だ!!

所詮中ボスだ!!

中ボスが何を偉そうなことを!!

てか、ちよつくらボコつてー！ーこらっ！？
何をする！？ヒスカ！！

離せ、離してくれ！！

羽交い絞めにされては、あの身の程知らずをボコれないではないか
！！

「ボコつちやまずいでしょ！？」

「ぐぬぬぬぬ・・・確かにそうだが・・・別にボコってしまったも
・・・所詮、ヤツは中ボス。

大局に影響は無い！！」

「ば、馬鹿言つてないで、少し落ち着いてっば！！」

「ひやあんっ！？」

脇腹はやめてっ！？

脇腹は弱いんだから！！

僕にとつての性感帯？ってヤツなんだから！！

その後はあっけなく倒されたサイト。

ルイズはそつとしておいた方が良くというワルっちの言葉に渋々従
い、去つていった。

残されたサイトは今にも泣きそうである。

「いやぁ・・・負けちまったな。相棒。」

「。。。。。」

サイトは無言。

余談だが相棒と無言って、イントネーションが似てるよね。

うん——この場では関係ない。

「気にすることはねえよ。

相棒は強い。でもあいつはもつと強かった。それだけだ。それに服一枚だったけど、一太刀入れられたじゃねえか。」

原作と違う部分は薄皮一枚、ワルっちに傷を付けたと言うことである。

頑張ったよ、サイトは。

「いずれ確実に勝てる日が来るって。

そもそも相棒は戦い始めてからまだ二ヶ月も経ってねえ。あいつは師匠が悪いとか言ってたけど、エンデはなかなか教えるのが上手いぜ？

だから心配すんな。確実にオマエさんはあの貴族を超えられる。」

いいことを言うじゃないか、デルフ。

「それにしても、さつき握られていたときに思い出したんだが・・・なんだっけな？

ええと・・・あつ、こら、しま——」

サイトは服に付いた埃を払って、デルフを鞘に収めるとぼとぼと宿へ帰っていった。

その後姿はまるで、リストラされた全国各地の今にも自殺しそうなお父さんのような哀愁を漂わせていたのだが・・・ガンバ！サイト！！

んでもってこの日の夜。

傭兵達がサイトたちを襲った。

もちろん同盟を組まれては困るアルビオン側　　もといアルビオンで主権を握りつつあるレコンキスタの仕業だ。
恋文回収をひそかに狙ってるワルっちの策略一だ。

原作どおり、キュルケとタバサ、ギーシュが囷になってその間にサイトとルイズ、ワルっちが裏口から逃げていく。

僕達も移動だ。

「行くよ、ヒスカ、エルザ!！」

「ふふふ、こういう尾行ごっこも乙なものね!」

「エルザ、油断はダメよ。」

「分かってるから、心配しないでよ、ヒスカ。」

サイトたちについていくと、丁度ワルっちの偏在にサイトが伸されていた。

危ないなあ・・・あれは殺すつもりだったな、ワルっちめ。
悪^{ワル}っちめ。

おほん。面白くなかったね。
すいません。

「いつそのこと殺す?」

「そういう短絡的かつ物騒な発想はやめようよ、ヒスカ。」

「じゃあ、捕まえてグールにしちゃう?」

あのメイジ、なかなか使えるし。」

「・・・勘弁してあげて。」

一応、あれは兄弟子だから。」

ちなみに2人とも仮面をつけたあの偏在がワルドのものだと見破っ

てる。

精霊が見える先住種族にとっては偏在かどうかを見抜くのは簡単である。

そしてその偏在が誰の物かも。

ワルドたちが乗る船に先に侵入。

積荷に紛れる。

硫黄臭い・・・気持ち悪い。

「こついつとときに便利だね・・・風魔法は。」

風で風通しを良くして、臭いを飛ばす。

ふふふ。

待ってるよ、ウェールズ！！

そんな感じで快適な空の旅を満喫していると、船があわただしくなり、あちこちで悲鳴や怒号が起こる。

空賊に扮したウェールズご一行のお出ました。

積荷の部屋にも空賊がやってきたが、やり過ごす。

つかまるわけにはいかないのである。

彼らの船であるイーグル号だっけ？

それに乗り換えし、尾行を続ける。

おおう、生のウェールズ皇太子はなかなか美形である。

しっぺはいたが・・・あれだ。
イケメンは皆死ねばいいのに。

僕達は影でウエールズたちを観察。
無事にルイズは大使として仕事をまっとうできそうだ。

さて。

ここから本番。

クロムウエルを殺しに行かないとね。

空賊船を装ったイーグル号が大陸の下からニューカッスルへと向かう。

無事着陸したのを確認した後、僕対は船から脱出。

ヒスカと観光目当てのエルザには申し訳ないが、今からクロムウエルの情報を探りに行ってもらう。

僕はウエールズとワルっちの監視だ。

その日は特に何事も無く、一日が終わった。

そして、本番の日。

すなわち今日。

目の前ではルイズとワルっちの拳式が繰り広げられていた。はずだったのだが。

「オマエか？」

ターゲットは？」

誰よ？こいつら？

「くくく・・・なかなか可愛いじゃねえか？
どうだ？」

楽しんでから殺すつてのは？」

「くひゃひゃひゃひゃ。いいねえ、いいねえ。」

目の前には明らかに雑魚的なモブキャラが僕の行く手を阻んでいた。
その数、30人。

周りの連中もゲラゲラ笑っている。

「不振な黒髪メイドがこの辺に来たら、妨害するように言われてん
のよ。変なヤツからな。」

殺しても犯しても構わないらしいが、最終的には“壊せ”だそうだ。

「

俺ら全員相手にしたら、壊れちまうなあ、オイ！

ふひひひひひ！」

ちっ！

面倒な！！

こいつらのせいでルイズ達を見失っちゃった。

確かどつかの礼拝堂で拳式されるはずだが・・・

スルーしたいがこいつらに僕を襲うように頼んだ変なヤツとやらも
気になる。

誰のことだ？

ワルっち？

でもワルっちは僕のことを気づいて無いだろうし、そもそも襲えと
言ったとしても僕の背格好はワルっちの知っている物とは全く違う。

暗躍中はメイド服と決めており、現在はメイド服に黒髪だ。

そうした特長を伝えておいた・・・というのは考えにくい。

しかし、こいつらははっきりと僕の姿を知って、知った上でこの場
にいる。

・・・どういうこと？

「まあ、秒殺だけどね。

この程度の人数なら。」

今、逃げるか、黒幕が誰かを言うなら殺さないであげるけど・・・
どうする？」

「おいおい・・・何をふざけたことを言ってるんだ？
ぶくく。恐怖で頭がおかしくなったか？」

ま、そっちがその気なら構わないけどね。

殺すのは嫌だが、そうも言ってもらえん。

このままではW T A O L 計画もといタオル計画が失敗してしまう。

悪いが、邪魔をするなら本気で行く。

時間もかけてられないし。

「雷神降臨・・・しっ！！」

雷神降臨発動。

ナイフで瞬時に5人ほどの首を掻っ切る。

次の踏み込みでさらに3人。

この段階で漸く構えを取り始めるが、構えを取る暇があるのならそのまま攻撃をしろという話だ。

そのままさらに4人を斬り捨てる。

これで12人が死亡した。

「な、なんだこいつ！？」

「は、はやすぎ・・・」

「ひ、ひいつ！？化け物！？」

「め、メイジかつ！？
だが詠唱が聞こえなかったぞ！？」
「どうなつてやがるっ！？」

口々に騒ぎ立てる傭兵達。

本気を見せた段階で、こいつらは死亡決定である。
逃がさないよ。本当に悪いと思うが。

「く、くそおっ！？」

こんな化け物に適うわけがはっ！？」

投げナイフで逃げようとした男を殺す。

これで13人目。

残り17人。

「逃がすつもりは無い。
全員、ですとろいだよ。」

そのまま僕の一方的な虐殺により、16人が死亡。
残りは1人だ。

「で、誰に頼まれたんだ？」

「ひい、ひいつ！？」

「言ってくれば殺さないけど？」

いや殺すけどね。

酷いと思うが、僕の情報が少しでも漏れる方が遥かにまずい。
できれば黒幕も殺しておきたい。

「へ、変なやつだよ!？」

「どんな変なヤツだよ？」

「ふ、フードを目深に被った・・・気持ちの悪い黒髪のーーがぶあつ!？」

っ!？

うわ、汚なっ!？

頭が破裂して死亡した最後の1人。

そのまま、僕は横に転がって爆発と思わしき魔法を避ける。

ちっ!？

気配のした方向へ投げナイフを投擲し、そのまま距離を取る心積もりだったが投げナイフはあっけなくすり抜けられた。

そして背後に忍び寄る死の気配。

なんて曖昧な物よりも、簡単に分かる精霊の動きで爆発を避ける。

これは完璧に僕を殺そうとする一撃だ。

「誰なの？」

お姉さんは?」

誰・・・と聞きつつも“知っている”相手だったが。

「私？」

シエフィールドーとでも名乗っておくわね・・・可愛いメイドさん。」

なんだって、この場所にミョズニルトンの“シエフィールド”がい

るの!?

32ページ目（後書き）

> i 2 4 2 9 6 — 2 2 3 8 <

シャスティルラフ。

ティルズオブヴェスペリアの映画に出るシャスティルまんまの外見です。

私服兼仕事着であるメイド服のデザインを見せるのが主なところ。周りのオーラの的な物は半吸血鬼化した時に獲得した力によるもの。エルザが使う黒い剣を扱うことが出来る。

ちなみにこの黒いのは砂鉄。

土中の砂鉄を雷系であやつるのがこの魔法。

禁書目録のビリビリなレベル5と同じ能力です。

33 ページ目

ど、どないしよう？

マジで、なんでこの人がここに？
今大事なときなのに・・・

「それで・・・シエフィールドさん？

貴方が私のようながないメイドに何の御用ですか？」

「とぼけなくても良いわ・・・お見通しよ？」

だから、なんでそんなプライバシーを無視されるような状況になつての！？

不可思議極まりないんだけど！？

レコンキスタはジョセフと繋がっている。

それは良い。

僕がレコンキスタにちよっかいを出した後でこの状況になるならばまだ納得できる。

でも、現段階で襲われている理由が分からない。

監視されている理由が分からない。

まだ目を付けられるには早い・・・というかこれから先、関わるつもりは無かったのだが！？

名前までばれてないのが幸いか。

「なぜか不思議そうね？」

「なぜでしょうか？」

「教えると思う？」

「・・・思わないですね。」

というと、何が面白いのかクスクスと笑い出すシェフィールドさん。

「ふふふ。そうね。教えてあげる。今、私はとても気分が良いの。

見つけたのは偶然。

ほんの偶然よ？

あの“傀儡”^{かいらい}に指輪を渡しに来たらまたまた面白いのが居るじゃない？

皇太子とヴァリエールの息女。同じくトリステインの貴族で割りと有名な“閃光”。

それを尾行する変なメイド。あからさま過ぎて気になったから尾行してみたのよ。」

変装のためのメイド姿があだになったか。

「どうせどこかの国の間諜かと思って放っておこうと思ったんだけど・・・なかなか興味深い会話をしていたじゃない？

吸血鬼らしき少女と・・・良く分からない女の子もいたし。」

ヒスカ達と一緒にいたころから監視していたのか？

僕ともあるうものが全く気がつかなかった。

何かのマジックアイテムか？

遠視の類だとして、どこまでの効果範囲なのかも知っておきたいが・・・。

なににせよ、ヒスカたちまで見られていたとはこれは辛い。

「クロムウエルを殺す・・・とか。

レコンキスタを潰そうとしてるのよね？

貴方達。」

「さあ？」

何のことだか。」

ヒスカ達をクロムウエル搜索へ向かわせたこともバレタみたいだね。

これは本当にまずい。

ヒスカ達にも下手をすれば誰かが殺しに向かっている。というか確実にそうだろう。

・・・ヒスカは大丈夫だろうが、エルザはちょっと危ないかもしれない。

ジョセフ王に目を付けられるのも本当にまずい。

「ジョセフ様に報告したら“是非とも会いたい”だそうよ？」

「私のような卑しいメイドなど・・・」

なんつータイミングで、なんつーヤツに目を付けられちまったんだ、僕は。

「私も良く見つけた、と。」

オマエが使い魔で無ければそこまで面白そうな輩に会えなかった、と。

オマエが使い魔で良かった、と。

貴方達には感謝してもしきれないわ。」

「・・・このヤンデレめ。」

感謝しておきながら、僕を襲うってどういふことよ!?

「ただ・・・嬉しいのだけど・・・誉めてくれたのは良いのだけど・・・ジョセフ様が今度は貴方達に夢中になってしまっわ。」

夢中になるものは虚無だけで良いの。

これ以上、玩具が増えてしまったらジョセフ様は……私を見てくれない……」

この……ヤンデレめえっ!!

なんてご迷惑な思考回路してんの!?

「命令を無視してでも貴方達を殺させてもらう。ごめんなさいね。恨みどころか感謝しているのよ？」

これでも。」

「なんて自分至上主義の怖いヤンデレさんだ……もう少し冷静に……」

「私は十分に冷静よ？」

だから殺すの。

貴方達を。

玩具は一つで十分。

壊すならば危険なほうを……ね？」

「しがないメイドに過剰な心配し……ひいあっ!？」

またもや爆発を食らわせてくるシェフィールド。

おしゃべりは終わりってこと!?

というか、これって爆発魔法か?
エクスプロージョン

ちよつと違うみたいだが……

さつきからボカボカボカうつつとうしい!

何かのマジックアイテムなんだろうけど。

というか原作ではこんなの持ってなかったらっ!?

魔眼でしっかり見とかないとこれはきつい。

下手すれば一撃で致命傷である。

「あら？」

目にマジックアイテムでも仕込んでいるのかしら？

それとも人間じゃないの？」

「言つと思つ？」

「ふふふ、そうね。

殺すだけだもの。」

このヤンデレめえええつ！！

どわっ！？

「火石と風石の混合爆発をここまで避けるなんてね。

やっぱり貴方達は危険だわ。

例え・・・命令違反をしても、ジョセフ様に殺されてしまつても・・・私は貴方達を殺す。

貴方達はジョセフ様にとって危険すぎる。」

虚無による爆発ではなく、火石と風石の混合爆発魔法。

これが今僕を襲っている魔法の正体である。

軌跡が見て取れるからルイズのアレよりかは少しはマシなのだが、これはこれでキツイ。

火花のようなものが走ってくる、と思つたら即爆発である。

しかもタメや予備動作が殆ど無し。

爆発魔法をサブマシンガンレベルで速射されるようなものだ。

サブマシンガンと違って、飛んでくるのは弾薬ではなく爆風という

“面”による攻撃。

しかも規模や温度の調整が可能。

応用が利きすぎるだろ！？

顔を知ってるのと知らないのとでは全然違う。

くそっ。

しかたない。

へキサゴンメイジになって考えたオリジナルスペルを見せてやろうじゃないか。

ためしに使ったとき、かなりシンドかったから出来れば使いたくないのだけでも。

ヒスカ達も心配だ。

「界王拳っ!!!

三倍だああああああっ!!!」

ゴツッと音を発てて僕の周りの物が吹き飛んでいく。

界王拳。

某ドラゴンなボールの漫画の主人公が使う、肉体強化術。

一時的に身体能力地を2〜30倍に出来る技である。

もちろん原理的には違うし、ノリで界王拳って言うてみただけで、

実際の魔法名は“雷神顕在”と付けてある。

雷神降臨の上位互換魔法と思ってもらえれば良い。

へキサゴンメイジになったので、合計6つの属性を掛け合わせるこ
とが出来るようになった僕の肉体強化技の最高峰である。

スクウェア段階の雷神降臨は水2つに風2つ。

効果は反射神経強化と超高速治癒、体のリミッター解除に伴う身体
能力強化である。痛覚のON、OFFも可能。

ペンタゴン段階ではそれに風をつけたし、水2つに風3つ。

上記の効果にさらに身の回りを纏う風による防御力UP、一時的な

加速（瞬時加速）、攻撃時に風によって敵を切り裂くか吹き飛ばすことが出来るようになり、飛行も可能。

そしてヘキサゴン段階になるとそこに火をつけたした。

上記の効果に比べ、さらに熱により細胞を活性化。

汗がにじみ出て、体が赤くなり、風呂上りのような状態になる。

僕の肌は真っ白白すけなので、よけいに赤っぽくなる。

この魔法を見ていたシャスティル曰く“無駄に色っぽい”だそうだ。

嬉しくない。

効果は活性化によって今までの雷神降臨はあくまでも体のリミッターを外すだけだったために、リミッターを外しても上限100パーセントの力までしか出せなかったが、活性化により一時的に身体能力を130パーセント前後までに上げることが可能になった。

さらには体の活性が上がることによって新陳代謝が常人の遙か上をいくために治癒能力UP、毒物耐性UPの効果も付く。

凄まじい能力を発揮できるようになった。

「ヒス力達も心配だからね・・・悪いけど、とっとと終わらすよ。」

ゴンと音を発てて踏み出す僕。

さらに瞬時加速イグニッションでさらなる初速をひねり出す。

「そおおおおいっ！！」

「あぐっ!?!」

軽く当身を食らわせ、そのまま腹に手を回して力の限りで投げ飛ばす。

ひ、ひいっ!?!?

は、母上の顔がアブリなおんれおいらおえぴろえにれーはっ

!?

意識がほんの一瞬飛んでいた。

今度から女性とは戦わずに話もせず、攻撃の意思が見られた瞬間に速攻で逃げるとしよう。

「・・・一応打ち身程度に抑えたつもりなんだけど・・・。」

シェフィールドさんはあまりの僕の速度になんら反応できずに投げ飛ばされ、背後の壁に強かに打ち付けられて気絶した。

女性に怪我を負わずのは如何せん、後味が悪いな。

気絶してるのを確認したら、傷を治してとっと逃げよう。

たとえ殺されかけようと、女性は手にかけない。

それが僕クオリティですよ!!

何より、ちょっと気絶させようとするだけで母上の顔が出てきて・・・

・軽く気絶するほどのトラウマがよみがえるのだ。

殺した時なんて、下手をすれば廃人に・・・はならないと思うが、危険なことには代わりが無い。

僕の精神的な意味で。

なんていうか、母上のおしおきって一種の洗脳じゃないかな？

「とりあえず見てみ・・・あぐあっ!？」

足元が爆発する。

軽く足が吹き飛ぶが、瞬時に再生されていく。

「化け物だね・・・貴方。」
「浅かったかな？」

一時的に意識が逸れたから加減が利き過ぎたのかもしれない。
すぐに意識を取り戻してしまった。

「化け物って言い草は無いでしょ？
ていうか、僕からしたら虚無を扱う連中もそれなりに化け物染みてるよ。」

「ジヨセフ様を化け物呼ばわりとは・・・殺されたいんだね？
小娘が。」

「うわっ！？
こわっ！？」

そんな親の仇を見るような目で見ないで欲しい！！
ていうか、人のこと化け物呼ばわりしといて、この言い草は無いだ
る！？

「まあ、でもこれで終わりだよ。」

この距離なら確実に当てられるから・・・スリープクラウド！！」

「舐めるなっ！！」

「ふえあっ！？」

すぐまん前で倒れこむシェフィールドさんに向けた魔法が爆風で吹き飛ばされた。

それが出来ないだろう距離で使ったのに！？

ここまで近距离なら自分ごと巻き込むと思ってー！ーなのに綺麗にスリープクラウドだけを吹き飛ばされた。
ついでに僕も一緒に爆発に巻き込まれる。

「マジックアイテムを使いこなすミヨズニルトンとは良く言ったものだ！」

ここまで細やかな操作が可能なんてね。

僕はそのままバックステップで爆風の効果範囲から離れたところで周りから大量の鳥人型ゴーレムが飛んでくる。

「ちっ!？」

いつの間に。」

100体ほどのゴーレムが同時に襲い掛かる。

襲い掛かるというよりは飛び乗ってくるといったほうが正しいかもしれない。

壁兼重りってところか？

とにかく僕を捕まえたいようだが、無駄無駄!!

「超拳!

百烈拳!!」

この状態の僕ならば偏在と合わせて1秒間に百発ぶち込むという必殺技、百烈拳も1人で出来る!!

僕に接近してきたヤツから殴り碎いて突き進む。

後方は無視して超速接近。

この程度で僕の足止めをしようなんざ片腹痛い!!

2、3秒稼ぐだけで終わーはちゃあっ!?

ゴーレムの中に紛れたシェフィールドさん。

つい拳が向かってしまったのを寸止めするが、すぐにそれが血を吸わせた対象に化けるゴーレム“スキルニル”であることを魔眼で理

解するが致命的な隙が出来たのは変わらない。
女性の形をしているとはいえ、所詮は人形。
さすがにこれは大丈夫だ。

すぐに偽者を打ち砕こうとするが、周りに鋼鉄の壁が出来上がり、
僕を囲った。

シェフィールドさんの偽者による錬金だろう。

一体、いくつのマジックアイテムを持ち込んでるの!?

この人!?

だが、甘い!!

これくらいならまだ反応できる。

すぐに壁を粉碎。

そのまま今度こそ偽者を砕こうとするが、そこへなだれ込むゴーレムたち。

「こなくそっ!?!」

質量で僕を押さえ込もうとするゴーレム達。

甘い!

甘すぎるわ!!

すぐにぶち砕く!!

「だりやりやりやりやりやっ!!」

次々と打ち砕いたゴーレムから血のように吹き出る砂塵。

火石の粉末のようだ。

これが動力なのかな?

ちっ!!

偽者がもうあんなところに。ていうか、本体は逃げたの!?
見失っちゃったんだけど!?

とにかく僕はそのまま踏み込んで、まずは厄介な偽者へと向かおうとしたがそこで地面が爆発する。

「ぬああっ!？」

さっきから悲鳴ばかり上げている気がする。

いつの間にかこんな火石地雷を仕掛けてたんだか。あっ、やばっ。

これを狙ってたから――

「粉塵爆発を知ってるかしら？」

というシェフィールドさんのセリフを聞き取る前に周りの地雷の火が周辺を舞っていた粉塵に引火。瞬時に大爆発と化した。

粉塵は火石の粉末だったため、火石自体も爆発の助長をしてドーム型にあたり一面が吹き飛んだ。

こゝこれは――まずいっす。

「これだけやれば大丈夫かしら？」

「甘いつて言ってるでしょ？」

「っ!？」

シェフィールドさんの背後に回り、スリープクラウドで眠らせた。

「はぁ・・・はぁ・・・甘いいつつもさすがに死ぬと思ったけどね。」

粉塵爆発で周りごと僕を吹き飛ばす心積もりだったみたいだ。
てか、ここら普通に民家だよ？

今が戦時中で一般市民が避難している時、かつこの拠点を捨てる準備中でなければ兵隊さんか市民が100以上は少なくとも吹き飛ばされた。

ヤンデレってホント怖い。

まあ、だからこそ途中で偽者と入れ替わったのだろう。

ゴーレムは入れ替わるための時間稼ぎ兼、囮。

ここまで強かったか？

シェフィールドさんって。

「さて・・・ヒスカ達はーっつと。」

がつくしと膝を付く僕。

まだ慣れないね、やつぱり。

この新魔法“雷神顕在”は細胞を熱で強制的に活性化するため、体内温度が異常に上がるといふ欠点を持つ。

人間は40度が限界と言われ、41度を越えると意識すらろくに保っていらなくなる。

というか命の危険に達する。

しかも動けば動くほど運動により体内に熱が溜まるので、それに応じて汗がダラダラ。

長期戦は向かず、下手をすれば脱水症状を起こすという危険きわまり無い魔法である。

今も体内に熱が溜まってフラフラ。

水魔法による回復力の水増しと雷魔法で神経を麻痺させて無理やり体を戦闘ができる状態に持っていつてる様なもので、本来なら病院へ搬送されるレベルの体調状態である。

ただ、その圧倒的な力は爆発を拳による連打で打ち返すという漫画

のような荒業すら可能にさせるのだ！！

さっきの粉塵爆発はこれで防いだ。

もちろん連打といっても風や水魔法も使ったよ？

いくら身体能力の限界を超えらるといっても人間が本来出しえる力より30パーセント多いだけだからね。

それだけで爆風を押し戻せる拳の連打なんて無理です。

まあそんなわけで唯でさえ体内の熱で死に掛けているのを無理やり動かしているため、熱系の攻撃にめっぽう弱いという弱点を持つ。本来なら神様から貰った回復能力と水二つによるヒーリングでもうしばらく持つのだが・・・バカスカバカスカと熱にさらされ続けたもんだから、思いの外早くにオーバーヒート状態になってしまったようである。

こうなると頭痛やめまい。貧血や息切れ、動悸、吐き気、悪寒、意識混濁、多汗、極度の熱感　と。　
コンディションが凄まじく悪くなるのだ。

ちなみにこうなると魔法を維持できることもなく、純粹に神様から貰った治癒能力だより。

そうなると5分ほどこの状態が続くから嫌だったのである。

うっうっゝぎもぢわるいよお。

死ぬよおおお、おろしリンゴが食べたいよおおお。

母上えええ、エミリアああああ、おろしリンゴ食べたい。

おろしリンゴ頂戴よおおお。

はっ！？

幼少の頃にインフルにかかった頃の思い出が頭をよぎった。

あの時は朝起きたら唐突に熱で倒れこんじゃって・・・母上も父上も焦ってたっけ？

すぐに母上に治してもらったんだけど、治り切らなくて母上とエミ

リアに付きつ切りで看病されたっけな。
ていうか、地べたに倒れこんでるんだけど地べたがヒンヤリしてて
気持ちいいいいいいいい。

「エンデ？」

「何やってるの？」

「その声は！？」

「ヒスカか！？」

「私もいるよ！！！」

「良かった、エルザも無事だったんだね。」

「あれ？」

「知ってたの？」

「私達が変な奴らに狙われたってこと。」

「うん、こっちも狙われてー！ーこうなってるんだ。」

「ああー！ーそういうことね。」

僕は膝を付いた後、そのままつぶせに倒れてしまったので上を見
上げられないのだ。

関節痛や筋肉痛も併用しているのでちょっとしばらく動かせない。

動かそうとするとー！ーあだだだだっ！？

ちよつと、もう少し優しくオブつてくれないかな！？

今現在の僕は結構、ひ弱なんだぞ！？

「わがまま言わないでよ。

早くしないと・・・タオル計画？だっけ。

それが失敗するでしょ？」

「う、確かにそうだ。」

「ちなみに回復魔法はかけて上げられないよ？」

こっちは襲われた時に使ったり負った傷を治すので精神力が切れちゃったから。正直、今変身してるのもギリギリ。」

「私も同じく。」

は？

ヒスカとエルザの精神力が切れるくらいの相手？

誰だよ？

そこまで強いやつは！？

ヒスカは普段から先住魔法を使って人に化けているため、その分の魔法で使える精神力の上限が低いが、それでもスクウェアを軽く越す力を持っている。

エルザはエルザで精神力自体はそこまで無いが、メイジに追われながらという過去ゆえに戦闘経験は父上かそれ以上であるし、元々の身体能力だつてヒスカに負けていない。

「確か・・・元素の兄弟の長兄のダニなんとか・・・って名乗ってた。」

「長兄？」

げ、元素の兄弟！？

これまた出てくるの早いだろ！？

いや、ここはフィクションではなく現実だからそういうこともあるだろうけど・・・

「初めての任務失敗だとか言っただけで悔しそうにしてたよ。

・・・結構厄介そうなヤツ。

殺せなかった。」

「私のほうは女の人と馬鹿っぽい人。

女の方はジャネットで馬鹿っぽい方はドウドゥーって呼ばれてたかな。

どうも私をある程度侮ってみたい。
おかげでなんとか退けられたって感じ。
でもジャネットって方はちょっと気持ち悪かったかな。」

むむむ・・・今回は結構ギリギリだったのかもしれない。
なによりもこの2人も危険な目にあわせてしまったのは何よりの失敗である。

依頼主であろうシェフィールドさんをどうにかするまでは2人の身の安全に気を向けないとダメだろう。

「ごめんね・・・2人とも。」

それらも含めて謝るが、それらの“含み”を理解しつつも二人はにっこりと。

「主人のためだからね。」

忘れがちだけど私ってエンデの使い魔だし、そんな水臭いこと言わないですよ。」

「そのとおり。
エンデを狙った段階でどの道、私達から首を突っ込むことになるだろうしさ。」

私の居場所なんだからね！

エンデは！！

むしろ私達も一緒に狙ってくれるのは好都合。
戦力が分散するから。」

い、良い家族に恵まれてるなあ、僕って。
・・・ぐず。

「分かったよ。」

でも、無理はしないでよ?」

「分かってるって。」

2人揃った満面の笑顔を見ると本当に分かっているのかなあ?と思いつつ。

つてっ!!

こんなことをしてる場合じゃない!!

「ヒスカ、僕を乗せてこの辺の教会へ行ける様をお願いできる?」

「お安い御用よ!!」

こなくそ!!

頼むから間に合ってくれよ!?

33ページ目（後書き）

一応、書いて置きますと主人公が女性に優しいのは母親からの教育や紳士だからというワケも有るんですけど、根本的な理由は違います。

結構、身勝手かつ下心？と言いますか？

それがあります。

良い子ちゃんってワケじゃないですよ？

その理由はもつと後の方で明らかにあります。

予定ではシャスタイル目線で分かるかと。

34 ページ目 (前書き)

まずは言っておきます。主人公は甘いという感想が多数でした。
(といっても2つ、3つだが)

殺されかけといて女性だからと殺さないのはどうなの？みたいな感じ
です。

これにはまあ理由があり、今回の後書きにて。

微妙なネタバレ？を含むので、主人公は甘いままでもとりあえず構
わないよ。

という方は見ない方が良くかもしれません。

もしくは作中に出た理由で納得された方は見ないほうが後々、楽し
めるかと思えます。

多分。いえ、きつと。

これは関係ない話ですが、ps3のロストプラネット2がベスト版
になって出ていた！

これは買うっきゃないです！！ww

34 ページ目

ううううだるい。

超だるい。

まあ僕もだるいが、ヒスカもふらふらとして頼りなげな飛行中。

現在、ヒスカは変身を解いて僕とエルザを背に乗せている。

「ヒスカ・・・大丈夫？」

「大丈夫大丈夫。」

なんとか・・・ね。」

竜は魔法の補助と翼を使って飛んでいる。

精神力がギリギリのヒスカは飛ぶのもやっとなのは仕方が無い。

なんじゃそりや？と思う人も居るかもしれないが、あの形態で空を飛べることのほうがなんじゃそりや？って感じである。

鳥の努力を全て踏みにじる形で空を飛んでいる竜は恐らく、全鳥類から恨まれているだろう。

鳥なんて翼に直結する筋肉をこれでもかど発達させて、なおかつ骨密度を下げて、翼をグライダーのように使って、風を翼で掴める様に表皮を羽毛という形に変形させて、体自体を流線型に近い形に進化して、さらには上昇気流なども利用して漸くよっや飛べるのだ。

まるで逆の進化をした竜のくせして風竜なんかは下手な鳥よりも上手く飛び、人を乗せてまで飛び上がることが出来る。

鳥はもちろん人なんて乗せられない。

衝撃に弱くなるというリスクを抱えつつも骨密度を下げて、翼に関わる筋肉以外の筋肉を落としてまで体を軽くしたのだから。

その鳥からしたら、舐めてんのか！？ああん！？って話である。

ニワトリは空を飛べない。あれくらいだけでも体が“しっかりして

る”だけで飛べなくなるのだ。
空を飛ぶ鳥類がいかほどの努力をしているかが分かると思う。

地球の有名な例に、プテラノドンという空を飛ぶ翼竜がいる。ジュラシックパークという映画にも出てきた恐竜の一種だ。もちろんすでに絶滅した過去の生き物。

あれだって飛べたんだから、竜だって飛べるんじゃないの！？と思うかもしれないが、体調が9メートル近いものも居るにも関わらず、骨格が弱く、筋肉量も少なかったため、体重が中型犬くらいしかなかったという。

しかもコウモリと同じように皮膚を伸ばしたような翼であり、羽毛による揚力を得られなかったため、滑空が主だったとか。

普通に鳥よりも飛ぶのが下手なのが地球産翼竜。もはや竜とは名ばかりでただの飛ぶのが下手糞なでかい鳥と考えたほうが良いが。

だというのに、こっちの竜ときたら——鳥と真逆の進化をしておいて、普通に飛び回る。

はてには獲物を掴んで持ち上げたり、人を乗せたりと・・・ふざけんなってレベルの話である。

もちろんプテラノドンはそんなことは出来ない。

そもそも獲物を掴むような構造でもなく、筋力も無いため、肉食ではあつたそうだが魚食性だったらしい。

というわけで魔法の力を変身する分しか残してないヒスカにとって、下手な竜よりも遥かに大きな自身の巨体を空に舞い上げるのは簡単なことではなく、今のコンディションで飛ぶと安定しないのである。落ちそうで怖い。

周りが喧騒で溢れているところから判断するに、あつという間に王

党派は倒されて、いまや残党処分といったところだろう。
あちこちで悲鳴が響き渡る。

「……。」

「エンデ？」

一緒に乗っていたエルザが話しかけてきた。

「何？」

「怖いのか？」

「……。」

怖くないと言えばウソになる。

目の前で、この世界初の戦争。

いや前世も含めて見たことない戦いが繰り広げられているのだ。

誰であれ、多少の戸惑い。困惑。恐怖は感じるはずである。

周りの人間は捉えられたり、殺されたり、少ない女性隊員は見てられない状況へと追い込まれていた。
出来れば助けてやりたいが……兵士である以上、それも覚悟の上だろう。

何よりもその余裕が僕らには無い。

優先順位を間違えてはいけない。

確か、サイトがワルっちを倒してすぐにこの状況になったから……
多分、ワルっちは倒されたのかも。
となれば急がなければ。

最悪、手遅れだ。

原作よりもワルっちは強くなっているからまだ戦っているかもしれないが、ぶっちゃけ“タオル計画には”サイトの勝ち負けは“どうでもいい”。

ワルっちとバカスカやりあっててくれても、死ななければ良いのだ。サイトたちに関しては。

出来れば追っ払った後だとありがたいが。

「・・・よしっ!!」

見つけた!!」

風と地の精霊の精霊をフル動員で索敵をしていたので、思ったよりも早くみつかった。

体調もすでに回復済み。

「六時の方向!!」

お願い!ヒスカ!!」

『あらほらさっさー』

「・・・どこでそのネタを?」

ヤ、ヤッターマン?だっけ?

リメイク版が放送されたようだけど・・・僕はちょっと見ただけで終わったな。

なにせ平成産まれだった者でして。

「この辺か・・・あった。

あれの上空まで行って!!」

その後は安全な場所まで退却。そのまま僕を待ってて。」

『わかった。』

ちなみであるが、ヒスカはかなりデカイ。
竜形態時はさすが水竜。

最初に出会った頃と比べて、今ではなかなか大きくなっており、他の竜なんて子供のように見える巨体を持つ。
すなわち。

“目立つ”のだ。

あちこちで「あ、あの竜はなんだ!？」、「ひいーこええええよ、おつかちゃあああん!」、「ふえ、ふえにつくすか!？」と悲鳴が巻き起こっている。

これ以上、目立つ前にすぐに回収しなければならない。

「たあっ!！」

ヒスカの背から飛び降りて、そのまま雷神顕在を使う。

最後の火属性を風にして、体からバチバチと高圧電流が流れるようになる。

これが本来の雷神顕在の使い方だったりする。

ただ、これをする则微妙に反応速度が落ちるのだ。

体を巡る高圧電流が体内に流れる微弱な電気を狂わせるための結果。
まあここは要改良である。

ぶっちゃけ未完成だ。

「どっせいっ!！」

教会の天井をそのまま打ち砕いて、中に侵入。

すでに索敵済みで、ワルっちゃサイト達を潰さない位置だから安心してくれ。

登場と同時に誰かを踏み殺すなんて目も当てられない情けない勝ち方だ。

男なら正々堂々、真正面からだろう。
なんてね。

卑怯もクソも勝てば官軍だ！！

ふははははははあはは！！

今回は使わないというだけである。

敵相手に情けをかけるなど愚の骨頂！！

・・・シエフィールドさんはどうなんよ？と思うだろうが、重ねて言うがアレは殺すほうが面倒。

顔を知らないよりかはあれの方が顔が分かる上に思考をある程度読める分、有利。

なによりも僕をこんなに苦労させたジヨセフへの嫌がらーじやなくて、紳士として彼と彼女の恋を応援しているのだ！！

適当に法螺を吹き込んで、シエフィールドさんとあのヒゲ野郎で遊んでくれる。

舐めるなよ！？

たとえ、切れ者と隠れて評価されるジヨセフと言えど僕が出し抜いてみせる！！

ズダン！！と音を発てて地面を踏み締める僕の両足。

教会の丁度、ど真ん中のようだ。

ちなみに仁王立ち状態で落ちてきたのでスカートがめくれ上がると思っただろう？

ふふふふ。甘いな。

「スカートの中だった？

くくくく。

スカートの中は・見・れ・な・い・ぞ！！てへ！！
風魔法でその辺を上手く調節しているのだ！！」

キラって感じで、決めポーズを披露。

どんなポーズかは好きに想像しても良いし、想像しなくても良い。
ジヨジョ立ちでも良いし、マッスルな感じのポーズを思い浮かべて
も良い。

まあなんだっていいってことである。

「……………」

あ、まだいたんだ。

ワルっちにサイト君。

・・・誰もいないと思ってーその。

ふぎけたんだけども。

しかもドン滑り。どころかドン引きですね。

あふん！？

そんな目で僕をみるなああああつ！！

見ないでくれええええつ！！

「エンデ・・・頭が・・・あれなんだな。」

「エンデ君・・・君は相変わらずどつかズレているんだね。

天才と馬鹿はなんとやらってことか。」

うあああああああああつ！！

2人して僕を何か生暖かいものを見るような目で見てくるよおおお
おおおつ！

ちよっと言ってみただけじゃないか！！

頼むからそんな目を向けないでよおおおおおおおつ！！

「まあ、いいや。

エンデ。

ルイズを頼む。

オレはこいつを倒してから行くから……」

「……いいや。

サイト君。

悪いが……こいつは僕が貰おう。」

つと。

ウェールズを忘れていた。

偏在を向かわせて、と。

「は？」

「どうやらワルっちは片腕が無いようだし……借りは返したんだ
ろ？」

ならとつとと逃げたほうが良い。

もうすぐ戦火がここまで届く。

ウェールズ様の遺体は僕が埋めて置こう。」

「いや、けど……」

「いいから。

僕の心配なら無用だ。

僕の強さは知っているだろう？」

「……ああ。わかった。

死ぬなよ？」

「おつさ。」

まあ死なないが。

というか、これからやるのはちょっとした“おしおき”である。

そして、サイトが居らねれば都合が悪い……ということも無いか。

多分ばれるから。

と。

思った矢先。

丁度、ギーシユのモグラが登場。

そのまま見送った。

皆して僕がここにいることに驚いていたが・・・そういえばサイトは驚いてなかったな？
なんでだろ？

実は尾行に気づいてたとか？

(エンデの登場が悪い意味で衝撃的だったからです。)

タバサは残りをそうにしてたが、キュルケに“シルフィードがいなければ私達がここから逃げられない”と説得され、渋々といった様子で帰って言った。

多分、日々料理を教えているから借りに思ってたのかな？

「さて、これで邪魔者は消えた。

あれからどれだけ強くなったのか、少しだけ見てあげようじゃないか。」

「・・・相変わらずだな。

エンデ君。

この際だ。言っておこう。

私は君が嫌いだ。

いや、君達ハンニバル家の者が嫌いだ。」

「僕は嫌いってわけじゃないけどね。

だから忠告をしてあげる。」

ヒーリングでワルっちの腕を治してあげる。

腕無しじゃ勝負が見えてるからね。

「なんだい？」

「レコンキスタはとつと見限るに限るよ？
痛い目に遭いたくないなら別だけど。」

「・・・君は私の目的を知っているだろう？」

「まあ・・・ね。」

「そのためにはこの聖戦が都合が良いのだ。

私は・・・聖地を目指す。」

「そうかい。」

まあ人が自身の誇りを命を賭して成し遂げようとすることに、いちいち口を出すほど無粋ではない。

勝手に死ぬなり、生きるなりしてくれて感ずる感じだ。

確か、ワルっちの母親は優秀なアカデミーの職員で、優秀であるがゆえに大陸の殆どが風石によって浮き上がることを突き止め、気が狂う。

母の気を狂わせるほどの物をどうにかできる物が聖地にある。

つてことでワルっちは聖地を目指してるんだっけ？

母が望んだものをその目で見るとために。

エルフと仲良くなって、案内してもらおうように頼むってのもいいけどね。

それは最終手段か。

下手をしたら心を壊されるし。

「んじゃ、お話の時間もあまり無いし。

とつとやりますか。」

「そうだな。ウィンドアーマー。」

むっ。

父上のオリジナルスぺルを盗んでいたのか。
やるな、ワルっち。

「閃光のワルド。
参る。」

「ただのエンデ。
いくよ。」

勝負は瞬時に決まる。

僕がブレイドを唱え、ワルっちもブレイドを唱える。
お互いに踏み込んで、切り抜いた。

「がはっ!？」

「なかなか腕を上げたね、ワルっち。」

ワルっちの体は袈裟懸けに切られ、僕の体はメイド服がちよつとば
つさり切れたくらい。

軽く脱げて、色っぽくなったーことなんて無いんだからね!!

「く……そっ!

ごほっ……これ、だ、から……天才というのは……」

「全く……今回は見逃してあげるけど、あまりオイタが過ぎると
今度は殺しちゃうぞ!」

「……ごぶっ……好きにしろ。」

私はこれをあきらめるつもりは無い。

例えどんな手を使おうともだ。」

んじゃ?

なんか勘違いしてる。

「違う。」

そっちなじゃない。

サイトに対して師匠が悪い・・・もとい僕の教え方が悪いとかいったことを僕は怒ってるんだ！！

あれは期間が足らなかつただけなんだからな！！

もう少し経てば、サイトはワルっちなんてお茶の子さいさいになるくらいに育つんだぞ！！」

「は？」

別に今みたいに敵対するのはワルっちの夢なんだから別にどうでもどうせ最終的にはサイトに負け通しだし。

その・・・可哀想なことに。

「は、はははは、そんなことのためにわざわざ私をボコりにきたのか？

全く・・・これだから・・・レイフォール家の者は嫌いなんだ。

シヤステイル嬢といい・・・多才に過ぎる。

全く・・・最近は嫉妬や僻みというものに慣れ親しみすぎて、親近感すら感じるな。」

自嘲めいた笑みを浮かべるワルっち。

「ワルっち・・・」

「それと、ワルっちと呼ぶのを止めてくれ。
気持ち悪い。」

「あ、そう？」

ちなみにワルっち・・・じゃなかつたワルド兄にはヒーリングを使

用中。

兄とつけるのは単純に兄弟子だから。

「いずれレコンキスタは潰れるよ？」

ボスからしてそういうタイプの人間じゃないからね。分かってるでしょ？ワル兄なら。」

「ああ。」

背後で糸を引いているのはガリアだろう。

実質、不気味な女が牛耳ってるようなものだ。」

不気味な女・・・シエフィールドさんのことかな？

「潰れると分かっているけど・・・やらねばならん。

そして、何度も忠告してくれた礼だ。

エンデ。

オマエにも忠告をしておいてやる。」

忠告ね。

一体なんだろうっか？

「例え知り合いといえど、敵の傷を治すなど甘い。甘すぎる。」

「いつか痛い目を見るぞ？」

「ははは。耳が痛いね。」

でも大丈夫。痛いのは・・・カリン様の特訓で慣れてるからね。それに助けるのは周りの人だけだもの。」

「・・・分かってないな。」

私はオマエのそういうところも嫌いだよ。

無知に過ぎる。いや、無垢とも言っべきか？

どちらにせよ害悪だな。」

「何が言いたいのさ？」

ちなみに僕は割りときなんだけど？

ワル兄のこと。」

「・・・言つたらう？」

私はお前達が嫌いなんだ。

だからそこまで言つてやる気にはならん。

せいぜい手遅れにならんようにな。忠告はしてやったぞ。

ついでに言つと・・・ウエルズはどうするんだ？」

何が言いたいんだらう？

ワル兄はウエルズに眼を向けた。

僕の偏在が治療をしているところである。

なんとか間に合いそうだ。

「多分、僕の傀儡かいらいかな。」

「半死人すら生き返らせるか・・・つくづく恐ろしく思うよ。

その才には。」

そういつてワル兄は背を向けた。

「何を企んでるにせよ、ウエルズを使うならばバレないようにな。」

もちろん。

多分、ワル兄はウエルズ様を僕がどう使うかの“使用用途”を分かっているのだらう。

タオル計画。

これで完遂となりそうだ。

ふふふ。

34 ページ目（後書き）

後書きです。

まず主人公がヤンデレネエさんに殺されかけたのにも関わらず生かした理由は幾つかあります。

まず第一に”殺し”という短慮な考えに日本人として自重したという点。

確かにエンデはちょっとピンチになりましたが、相手を殺すという方法を取るほどでは無かったということです。

第二に、殺しに慣れたくないため。

今までに何度か殺してますから何を今更って感じの考えがもちろんあります。

あるゆえに自ら戒めてる。という感じ。

これの伏線もあつたりして・・・まあ劣化ギトギトもといヴィリエの事件です。

後は単に殺し自体嫌だとか紳士的ではないという理由もありますが、この辺はぶつちやけ些細な理由です。

これらを踏まえて最後に一番の理由があつて、主人公の未熟さの演出にあります。

要はこの甘さは物語上の”伏線”だと言つワケです。

因みに、ヤンデレネエさんの登場も伏線。

紳士然とした姿も伏線だったりします。

読者がすぐにソレと分からないような伏線を貼るのが大好きな僕なのですww

35ページ目(前書き)

今回、武装神姫の2が出てくるということを知った僕は有頂天になって武装神姫風のエンデを書いてみた。
詳しくはあとがきにて。

35 ページ目

ニューカッスル城。

かつてはアルビオンの名城と呼ばれた城はその様相を荒廃した物に変えて佇んでいた。

城壁は見るも無残に崩れ果て、辺りには腐敗し始めた兵士の遺骸がところ構わず晒されていた。

中には野生動物に漁られて、人の原型をとどめて無いもの。虫の湧いているものと悲惨な状況である。

おおよそ誰もが近づかないであろうこの場所には人の賑わいがあった。

アルビオンを転覆させた張本人。オリヴァー・クロムウエル、その人が率いる傭兵やメイジ達が勝利の余韻に浸りながらも死体を漁っているからである。

「……人間とはかくも醜くもなれるものか。

いや、自身の欲求に従って“プライド”、“理性”などという物で着飾るよりも……よほど人間“らしい”と言えるかも知れぬな。むしろ“美しい”。と言っても過言では無いかもしれん。」

自嘲めいた笑みを浮かべてそう独白をするのはワルドである。

そしてその背後にはフードを目深に被った女性。

シェフィールドが居た。

「……そんなくだらないこと、どうでもいいわ。

それよりも。あのメイドを殺し損ねたんだって？」

シェフィールドは今にも目の前のワルドを殺しかねないような視線をワルドに向ける。

「ふん、それはお互い様だろう？」

“加減”されていなければ貴様は死んでいたんだぞ？

それを理解しているのか？」

「っ！？」

・・・殺されたいの？」

「バカも休み休み言え。」

自殺志願者がわざわざ“こんな組織”に入ると思うのか？

相手があの甘ちゃんだったことを感謝するんだな。もちろん・・・

オレにも言えることだが。」

「・・・ちっ。」

次は無いわ。

あのメイド・・・確実に殺す。

今度は手加減できる間も無く、余裕も無いまま躍らせ殺してあげる

わ。」

「そうしろ。」

下手に追い詰めてもアレは殺せない。

本気にさせるだけだ。

殺すなら一気に。

最大の手段で一速に殺せ。

“この程度で人を殺すのは”とあいつが躊躇している間に・・・な。

「

ワルドは淡々と述べた。

「あら？」

ずいぶん良く分かっているのね？あのメイドは知り合いなのかしら？」

「それこそどうでもいいことだ。

オレにとって優先すべきはアレではない。

むしろ障害になるだろうな。

貴様が殺すというのなら、オレも出来うる限りでヤツを殺す手伝いをしよう。」

「・・・本当かしらね？」

ウソを付いても意味が無いだろうに。

と思いつつもワルドはそれ以上は話さず、とある人物の前に並ぶ。

「閣下。」

「おや？」

ワルド君！！そしてシェフィールド殿！！

ご苦労様。

報告は聞いた。

“全て”失敗だそうだね？

確か・・・」

ワルドの前にはオリヴァー・クロムウエルが立っている。

「エンデ・ド・レイフォールです。」

「そうそう！」

そのレイフォール君とやらが邪魔をしたせいで失敗したとか。」

名前を聞いてシェフィールドが目の色を変えた。

自身の殺す相手の名を間違えぬように、きつちりと魂に刻むために。

「申し訳ございませんぬ。

このワルド。」

いかなる処罰も受ける所存でございます。」

ワルドが頭を垂れ、膝を突いてクロムウエルに侘びを入れる。

「よいよい。」

聞いてみれば、そのエンデというメイジは10歳にもならないうちからスクウエアになったという天才だと言うではないか。さすがのワルド君にも相手が悪かったというところだろう。さらには虚無もいたんだ。

これでは例え君でも任務の達成は困難だったと思われる。むしろ、生きて帰ってきただけでも重畳！！
良くぞ生還してくれた！！

君でなければ死んでいただろうし、これで虚無とそれに加わるエンデという不確定要素がハッキリしたのだ。

それが分かっただけでもよしとしようじゃないか。

確かにウエールズを殺せなかったのは痛かったがね。」

「・・・ありがたきお言葉。」

クロムウエルは次にシエフィールドへと目を向けた。

「それで、シエフィールド殿。

指輪の件は？」

「これよ。」

シエフィールドはクロムウエルに“とある指輪”を投げ渡した。

「おっとと。」

もう少し丁寧に扱っていたら良かったいな。

これはラグドリアン湖に住むと言う水精霊が持つ唯一無二の宝なのですから。」

「その程度で精霊の宝がどうにかなるわけないでしょうっ？」

「そうは言ってもですね・・・」

「黙りなさい。」

殺すわよ？」

「・・・わかりましたよ。

まあ言うとおりでしようし。

やたらと不機嫌なのは貴方もそのエンデという少年に倒されたからですか？

私に八つ当たりししないで欲しいですね。」

「・・・アンドバリの指輪。

確かに渡したわよ。」

クロムウエルの文句に耳を傾けずにスツと消えたシエフィールド。

「あらゆるマジックアイテムを使いこなすミヨズニトニルンすらを下すメイジ・・・ですか。

魔法使いの頂点・・・魔法使いの王・・・“魔王”のエンデとも呼びますか？

それとも・・・我々にとつての悪・・・鬼のような強さ・・・ということで“悪鬼”とでも？

どちらが良いと思います？

ワルド君。」

「・・・シヤレになつてませんね。」

ワルドが苦い顔をする。

クロムウエルはそんなワルドを見て、カラカラと笑い、一言。

「ふふふ。冗談ですよ。本物の魔王や悪鬼ならば私達に勝ち目はないかもしれませんが・・・彼は良くも悪くも人間です。

人間である以上、弱みというものはどんな強者にもあるものですよ。

」

「人質・・・ですか？」

「ええ、それが手っ取り早いでしょうが・・・エンデ君とやらは甘

いとはいえ、頭が悪いわけではないようですから対策も取られていくでしょう。

さらには周りのご夫人方もあの元素の兄弟を退けるほどの実力者。下手に仕掛けて失敗でもすれば警戒されるだけ。下手をすればこちらの戦力を削られかねません。

背後からこそそとやっていたところを見ると、大きく動くつもりは無いようですね。

それに、こちらにはミヨズニトニルンが付いているのです。

もう少し斜めった策でいかなくては芸が無い。

そうは思いませんか？」

「閣下の御意のままに。」

「では、当分は彼のこれからの目的の確認。そして、あわよくば殺す。」

そして殺せなかったとしてもこの指輪さえあれば問題ありません。」

「死者を生き返らせる指輪・・・でしたね。」

「ええ。」

何も問題ありません。

何も、ね。」

ふふふふと不気味に笑うクロムウエル。

「・・・すでに手遅れ。かもしれんな。」

オレが言うのもなんだが。」

「はい？」

何か言いましたか？」

「いえ、何も。」

そう言ったワルドの目は熱くも複雑な感情の入り混じった目をしていた。

「うぐ……ここ……は？」
「起きましたか？」

さて、この僕。

エンデ・ド・レイフォールがどこにいるかと言うと。

ちよつとした山奥の小屋にて、回収したウエルズを運び込み看病をしているところ。

戦争から3日経ったところである。

僕の偏在がウエルズの治療に当たったとき既に心臓が止まっていたので、さすがに一度の魔法で体のダメージを治しきることは不可能だった。

よって目立たない場所で錬金を使って家を作り、ウエルズの看病をしたのである。

傷自体はその日のうちに治したのだが、目を覚まさなかったのだ。なぜ、山小屋にいるかと言うと、さすがに学園や領につれてくのはどうかね？と言う訳である。

ヒス力達には先に戻ってもらってシャスティルたちにこの顛末の報告などをしてもらってゆっくり休んでもらっている。

「そうだった！私……私は……子爵殿に刺されて……
私の……部下達は……戦争はどうなった!？」

「少し落ち着いてください。」

「落ち着いてられるか?!」

は、はやく……部下達のところへ……ぶるあつ!？」

「落ち着けての!?!」

こちらら3日の看病で結構、くたくたなのである。

そのイライラも募って手が出がちなのは勘弁して欲しい。

野郎の体拭きとか二度としたくない。

女性なら良いのか？とか言われても多分、断るだろう。

精神的ストレスがさらにご機嫌な勢いでガリガリと削られていきそ
うだ。

水分取らせたり、うなされてるのか油汗まみれの服を代えてやった
りと・・・とつとアンリエッタに引き渡せればと思った。

ストレス満点の介護生活でした。

看護師を心から尊敬したね。うん。

あれを職業にとか思う人とか、本当に凄いなと思うわ。

僕にはなんと転生してもそんな人生はありえんだらうと断言できる
ほどの手間隙である。

さて、ここらでタオル計画の全貌を明らかにするとだ。

まずはウェールズをワルっちもといワル兄が殺しかけるところまで
待つ。

その後でこつそりウェールズを回収。

死に切る前に治療。

僕が命の恩人つてことで“アンタの命は僕のもの”とする。

プライドの高い、名誉がうんぬんという良くも悪くも貴族らしいウ
ェールズならば渋々承諾するだろう。

つてなわけでアンリエッタとともにトリストインを切り盛りさせる
ことを命令する。

これが計画の全貌。

ウェールズはタラフ
WTAOL計画である。

Tは「TO」で「と」、Oは「OF」で「の」と訳して欲しい。

トリステインが廃れるのは頭であるアンリエッタがいささかアレであるから。

まあそれでも良い。

16歳の女の子に国を背負わせるってのが元々阿呆極まりないのだからして。

お飾りでも良い。

それとは別に“本物”を用意してあげれば良いだけの話である。計画を順序だてて説明すると、下記のようになる。

- A まずはウエルズをワルっちもといワル兄に半殺しにしてもらう。
- B サイトとワル兄が戦ってる最中にこっそりウエルズを回収。
- C ウエルズを治療。
- D 治療した後で“オマエの命はあそこで尽きてたはず。そこを助けてやったんだからお前の命は僕のもの、言うことを聞け”と命令。戦争で死んだならばともかく、名誉を示す前にトップが真っ先に死ぬという不名誉を被った現状の彼ならば原作でサイトが彼を説得しても無駄だったが、説得が成功する可能性が高い。
- E こっそりアンリエッタに引渡し、アンリエッタはラブラブアンド頼りになる相手をゲッチュー（死語？）。
- F 好きな女の祖国であり、あのままでは不名誉を被ったままだ。死にいくところを助けてもらった恩を返すためにウエルズは影でアンリエッタを支える。
- G 2人で国を切り盛りしてる間にさらに仲が促進。ラブラブしていき。なおかつそうした政治に向かないアンリエッタの代わりに裏からウエルズが動くことよって、トリステインが良くなる。
- G トリステイン貴族として産まれた僕としても安心。ルイズも安心。ひいてはカトレアも安心する。

良いことだらけなのだ!!

まあ前半はシエフィールドさんというイレギュラーにより、ちょっと計画が狂ったが、結果オーライである。

指しあたっての問題は、ウェールズの説得である。

名誉という理由だけで無駄死にしようとしたウェールズをどう説得するかだ。

しやすい状況とはなっているが、もちろん楽観視はできない。

「まずは状況のご説明からー」

ちよつと強く殴りすぎちゃったのかな？

咳き込むウェールズに僕は概要を話す。

もちろん殴ったことも詫びて置く。

「そ、そんなことに・・・」

「まずはご確認です。」

貴方はこれからどうしたいですか？」

「わ、私は・・・守るべき国も・・・守れない私が・・・名誉も示すことも出来ずに・・・真っ先に死ぬとはな。

・・・そうだ。これを受け取ってくれないか？」

「これは・・・風のルビー？」

「ああ。」

せめてもの礼だ。

君の主人とやらに渡しておいてくれ。今の私に出来ることはソレくらいしかない。」

「ありがたく頂戴しておきます。」

ほほう。

ここでもらえるとは。

さりげなくルイズに渡すか？

まあ後で考えよう。

メイド服のポケットに入れて、話の続きを促した。

「・・・君は確かあの戦地で私を・・・治療し、逃げおおせる實力を持つのだろうか？」

「はい。」

「ならば介錯を頼めないだろうか？」

っ！？

ちよ、ちよつと！？

ちなみにこの世界の介錯とは貴族がこの世界独自の死に装束を来た上で、他のメイジに首を刈り取って貰う事である。

日本では切腹をした後に首を切ることを介錯というーんだったかな？

「家臣が身を投げ打つてまで、名誉を示したというのに私がコレではふがいない。

なおかつ王族であるこの私がこうして生きながらえている。

それ自体が不名誉の塊でしかない。

未練はー無いらしい。

ー思いにやっってもらえないだろうか？」

・・・はあ。

・・・こんのっ！！

死にたがりがつ！！

王族なら・・・すべてを統べるトップであり、リーダーならばどん

なに惨めでも泥にまみれてでも生き残って、国民を導くべきだろうにっ！！

そもそも名誉だとかそんな非生産的なことで死ぬバカがどこにいやがる！！

って・・・ここに居たね。

あそこは死ぬべきではなく、部下を見捨てるという不名誉を背負ってでもこいつは生き残って国を支えるべく動くのが一番だろうに。名誉を示す？

そんな自由が王族にあるとも思ってるのかな？この人。

トップとしてどんな手を使っても、罪の意識にさいなまれても生き残るのがこの人の責務だろうと思うのは僕だけだろうか？

そもそもお前ら王族がしっかりしてればティファニアもマチルダさんも国民も彼等に忠誠を誓った、貴族たちも死なずに、大変な思いをせずに済んだだろうに。

その責任から丸逃げですか。そうですね。

まあいいや。

これはあくまでも僕の考え方。

死ぬというなら存分に使わせてもらおうじゃないか。

ふふふふ。ウェールズ。

貴様の頭脳と血筋は惜しいのだ！！

いや、特別頭脳が良いようには思えないが（効率よりも名誉を重視する点から）、アンリエッタよりはマシだ。

何よりもアンリエッタは不遇極まりない。

好きな男は早々会えない相手。

そいつが惚れた女よりも名誉を大切にした拳句、死亡。

王位を継ぐべき母親は腑抜け。

周りに頼れる味方無し。

死んだ男の次は自身の親友の男に手を出してしまう。(男運悪いよね?)

16歳という歳で国を背負わされる。

いつ政略結婚を迫られるか分からない立ち位置。というかすでにそうなってる。

年頃の女の子にどんだけ押し付けてるんだって話である。

それを助けようと思うのは同情であれ、自己満足であれ、偽善であれ。

多少冷たい人でも涙が一筋流れるくらいには辛い境遇だろう。

ゆえに助けたい。紳士とかの前に人としてちょっと手助けぐらいはしたいよね?

ひいてはウエールズには僕とその周りの人間の生活の安定のために粉骨碎身で働いてもらおう。

ぶっちゃけこっちが主な目的だったりするのだが。

まあ命を放棄した輩だ。多少の道具扱いは問題あるまい。

「わかりました。

貴方に生きる意志は無いと。

命を捨てるというのですね?」

「ああ・・・そうだ。

軽蔑するかい?」

「いいえ。

別に。人の勝手ですから。

ただ・・・捨てるというならば、私が拾いましょう。」

「・・・どういう意味だ?」

「私は貴方を助けた。

貴方の命は私の物ということですよ。」

「ずいぶん勝手な言い草だな？」

礼はしたし、勝手に助けておいて勝手に命を――」

「黙りなさいな。」

どうせ死ぬんだから、良いでしょう？

勝手に死に掛けて勝手に生かされて、身勝手に死んでいく。

おや？

貴方の周りは勝手が良いですね？

ならば私の勝手くらい今更どうということもないかと。」

「・・・私を侮辱しているのか？」

この私をアルビオン皇

」

「初代アルビオン帝国皇帝クロムウエル。」

アルビオンはすでに乗っ取られ、貴方にはなんの権力も名誉もないことをお忘れなきよう。」

ちよつと無理やりな交渉だけど、無理にでもここは通したい。
ヒスカやエルザに迷惑をかけてまでこの人を回収したのだから。

しかもシエフィールドさんに目を付けられてまで。

はあ、やっぱり殺しておけばよかったかもしれない。

いや、でもジョセフに知られた段階で今更殺しても無意味か。

「貴方は本当に未練が無いのですか？」

「・・・無い。」

「アンリエッタ王女殿下がゲルマニアとの婚姻を正式に決められた
ようです。」

「・・・言われなくとも分かっている!!!」

「惚れた女性を助けてあげようと、自由にして差し上げようとは思
わないのですか？」

「・・・今の私には何も出来ん。そもそも・・・今更どの顔で会え
というのだ。」

「どうせ死ぬならば意味ある死にしませんか？」

どうせ死ぬならば惚れた女性のために。」

いや、死んでもらうわけではないよ？

もちろん。

「・・・それで？」

どうすれば良いというんだ。

こんな死に損ないに何を期待している！？

ただ・・・名誉も示せずにもつともなく生きながらえただけの情けないこの私にっ！！」

ああもう。

うじうじと。

命が助かったんだから喜んでおけばーよくも悪くも扱いにくいわ。

「簡単な話です。」

貴方がトリステインを強くすれば良い。

アンリエッタ王女殿下がゲルマニアに嫁がなくてはならなくなったのはトリステインの国力が著しく削れていったから。すなわち。

わかりますよね？」

「私にトリステインの力づけの・・・その手伝いをしろと？」

「そのとおりでございます。」

まあどのみち婚約外交は失敗する。

ルイズたちのおかげだね。

だが、このままではいずれどうなるとも分からない。

僕の持っている歴史に関する知識はあくまでも原作19巻まで。

それから先、どうなるかが分からない以上、力をつけておくのに越

したことは無い。

惚れた女を守るためだ。

これもまた一種の名誉だろう。

そのままチヨメチヨメしてくれても構わない。

サイトに立つフラグを叩き折るという意味でも。

「だが・・・力をつけるにしても時間が足りない。

トリステインに自力をつける前に・・・アンリエッタはゲルマニアと・・・」

「問題ありません。」

「・・・根拠はあるのかい？」

「もちろん！」

営業スマイル営業スマイル。

元気が出てきたようで何よりである。

「こんにちは。」

アンリエッタ王女殿下。」

「なっ!？」

またまた場面は変わり。

現在位置はトリステイン王城。

アンリエッタの寝室に忍び込んでいる。

ちよつと後ろめたいが、彼女に保護してもらわないと。

僕の背後には怪しいローブを被った人間。

もといウェールズがいる。
震えているようだが・・・泣いてるのかな？

「誰です!？」

・・・だ、誰かいまーっ!？」

っ!？」

っ!!

っ!？」

騒がれては面倒なので、サイレンスをかけさせてもらった。

本当に便利な魔法だな。サイレンス。

アンリエッタは喋れない。

すぐにドアに向かったが開けられない。

ロックもかけさせてもらったからね。

「では。

ウェールズ皇太子殿。

後はお任せします。」

「ああ。

・・・結果論になってしまいが、君の主人と君には礼を言わせて貰う。

自分自身、アンリエッタに会えて・・・これほど・・・ぐっ・・・
うっ・・・嬉しいと思うとは・・・怖かったんだ・・・本当は・・・
何よりも・・・アンリエッタに会えないことが・・・二度と会えない
ことがこわがった・・・」

泣くならアンリエッタときっちり再開をしてからにして欲しい。

どうやらアンリエッタもセリフの内容と声で薄々と気づいたようだ。

ちよっとアレなアンリエッタにしては上々の鋭さか。

いや、それとも恋する乙女の力？

僕がもう口に出しちゃってるしさ。

もう魔法サイレンスは必要ないかな？

「 エ ルズ様なのですかっ!？」

すぐに駆け寄ってフードに手をかけるアンリエッタ。

そこにはもちろんウエルズの姿が。

「・・・死に損なった・・・名誉もなにも無いただのウエルズさ。幻滅したかい？」

「い、いいえ・・・いいえ!!」

し、死んで・・・死んでなかった・・・それだけで・・・それだけで・・・アンリエッタは幸せです。

うえ、ウエルズさま・・・ウエルズさまあああああああああ
あ。」

そのまま抱きついて泣き崩れるアンリエッタ王女殿下。

詳しい事情説明と僕のこととは彼から聞いてもらうとして。

お邪魔虫はここらでさようならと行きますか。

ちなみに連絡は僕の作った試作の新作木箱。

“無線木箱”を使用する。

この無線木箱は無線木箱に込めた声を中継ポイントにおくり、それから中継ポイントをいくつか経由して目的の場所にある無線木箱に送り届けるという、現代で言うところの携帯のようなものである。

いや留守電かな？

もちろん欠点はいくつか存在する。

中継ポイントを経由する過程で声。すなわち“音”が劣化して元の声が分からなくなったり、音割れが酷いこと。

中継ポイントをリーすなわち中継機箱を設置しなければ遠距離の連絡は不可能であること。

無線木箱同士ではせいぜいが5キロメートル圏内までしか連絡が出ないこと。

会話が不可能。

たまに通信不具合が出る。

木箱が大きめ。(ルーンの書き込みが多いため)
などなど。まだまだ改良余地のある木箱である。

帰りは五キロごとに人が来ず、できるだけ高さのある場所を探して中継機箱を設置しなければならない。

ちなみに風や亜人、魔獣にイタズラされないように鉄仕様である。

見ためはただの鉄の長方形だ。

裏側にルーンを彫ってあるため、なんだこりゃ?としか思われないだろう。

もちろん埋める際には錬金でさらに鉄を継ぎ足して、長方形の形をした中継機箱のした部分にくっつけ、そこを地面に深く埋めて掘り返されないようにするつもりである。

なににせよ、これでしばらくゆっくりできるよ。

35 ページ目 (後書き)

> i 2 4 7 1 4 — 2 2 3 8 <

エンデのさらなる強化にゴレムを装着するのはどうだろうかと考
えていた僕は、武装神姫を思い出したのであるww
よってこのデザインプラスポニーテールにしてみた。

まあボツですがww

今回はカトレアとの久々の絡み。

そろそろ進展を！と思っております。

36 ページ目

王城の一件から三日。

帰るのに中継機箱を設置しながらだったせいか、学園までにかかなりの時間をかけてしまった。

「たっただいまあー!!」

「エンデ！」

おう、カトレア。

ただいーーーぐふるっ!?!?

「大丈夫!?!」

「え、な、なんなの!?!」

いきなり飛びついてきて状況が読めないよ!?!?

「ヒスカとエルザから聞いたわ。

あまり危ないことしないで……お願い。」

「いや、そこまでは……」

「エンデ。」

「あ、うん。」

自重します。」

まあ、親しい人が戦争の中心地に行ったとなれば多かれ少なかれ心配の一つや二つはするか。

でも、回りまわってカトレアのためだからしょうがない。

トリステインが危うくなればその国に属する貴族が一番の損害を受けるのだから。

大きな家であればあるほどその影響は強くなる。
王族の遠い親戚にあたるヴァリエール公爵家は特にそれが強いだろう。

「それで・・・カトレア？」

「これって何？」

「何って忘れたの？」

「忘れたもなにも部屋をここまで“飾る”ようなことは無かったはずだ。」

「今現在、僕の目の前にある領の部屋。」

「もとい22号室はなんかやたらとデコレーションされていた。」

「誰かの誕生日とかクリスマスとか。そんな感じの・・・誕生日？」

「エンデの誕生日でしょ？」

「今日は。」

「帰ってくるのが遅くて心配したのよ？」

「アルビオンから帰るところまではヒスカから聞いてたけど・・・帰りに何かあったんじゃないかと思って・・・それに誕生日の今日までに帰ってこれるかもちよつとある意味で心配だった。」

「そういえばそうだった。」

「ウェールズの件ですっかり頭から抜け落ちていた。」

「というか精神的な・・・中身は良いオッサンとなっている僕にとって今更誕生日などは・・・むしろ歳を重ねていくだけであまり嬉しくない。」

「これ以上おっさんになりたくないーと思う割りには自分自身、結構若く振舞えている物だと思っているが。」

「まあ肉体年齢も影響してるのかもね。」

とはいえもう歳は取らないだろうけどね。
この体。今より成長することはもう無いみたいだし、忘れがちだけ
ど僕って不老なのよね。

『誕生日おめでとう！！』

うわっ！？

垂れ幕のような物の後ろからわっとな音が響いてくる。
シャスティルとヒスカ、エルザ。ルイズにサイト、タバサ、キュル
ケ、モンモン、イチゴちゃん、シエスタである。

「僕もいるよ！？」

「なぜ居る？」

ギーシュ？

「いや、それは僕も君の誕生日をーー」

「男体盛りをして盛り上げようだと！？」

「そこまで体を張る必要があるかい！？」

「というかそんなこと一言も言っていないよね！？」

「というかここ女子寮だぞ。
なぜいる？」

しかも、ここは一応カトレアやらシャスティル、ヒスカと複数の女
性が過ごす場所なのだが？

勝手に入ってきていいの？」

「いや、ちゃんと君の妹君やカトレア嬢には許可を・・・」

「僕の部屋でもあるゆえに僕の許可を取って無いじゃないか。
不法侵入だな。」

もとい痴漢め！

「ひ、酷い言い草っ！？」

「罰としてギーシュは男体盛り決定だな。」

「とてつもなく酷いっ！？」

「というかソレを言えばサイトだってそうだろう!？」

「サイトは使い魔。」

あんた貴族。

対外的にはギーシュのみしか罰せないな。

使い魔相手にムキになるのは身内内ならばともかく、外面が悪い。

使い魔相手に何してんのさって笑われちゃう。」

「人の目を気にしてこなかった君が今ここに来て気にするのかいっ
!？」

「ふっ、冗談だ。」

「・・・意地が悪いね、相変わらず。」

「サイトに関することだけね。」

「フーことで男体盛りへレッツゴー!！」

「フエイントっ!？」

「ちなみに僕には見せるな。」

気持ち悪いもの。

そしてシャスティルやヒスカ、カトレアに見せることも許さん。」

「とてつもなく自分勝手な言い草に気づいてくれっ!！」

頼むからっ!！」

「今度こそ冗談だ。」

ツッコミが冴え渡るな。

ギーシュ。」

「。。。。。」

ギーシュがジト目で見てくる。

なんだよう。

ちよつとからかったただけだろう。

照れ隠しでもあるけどさ。

こんなに沢山に祝われたことなんて無いし。

・・・といいつつも実は、て、照れてなんかないんだからね!！」

自分の世界についていつい入り込んでしまったというところかな？

後から女性陣に対して“これは芸術なんだ”と言い訳を（特にモンモンに）していたが・・・終始、ギーシュへの視線が変わることはなかった。

まぬけめ。

もちろん（？）貰ったからには大切にしよう、ということでも飾ろうとは思っただが。

服を着ていない像なので酷く扱いにくい・・・飾りどころに困る。

実家に持って帰って部屋に飾るか？

とりあえず、この部屋に飾ることはないだろう。

ちなみに、シャスティルがアルビオンに付いてこなかったのはこの日のためだったようである。

手編みのセーターを貰って、ちょっと恥ずかしかった。

セーターにはレモンの花？

それが刺繍されていた。

なんでレモンの花なんだろうか？

なんか意味あるのかな？

そしてカトレアからのプレゼントは無い。

いや、正確には誕生日が終わって次の日である、今日もらせることになってる。

「カトレア、遅いな。」

場所は学園に一番近い街。

なかなかの賑わいを見せている。

ちよつと出かけた先で、プレゼントを渡したいということでここに
いる。

別にそんな七面倒な・・・とは言わない。

僕は鈍くないからね！！

きつと“今日はこの景色を見せたかったの”みたいな外に出な
ければならないプレゼントを渡してくれるのだろう。
ふふふ、見事な洞察力！と自画自賛をしていると。

「お、おはよう！え、エンデ。

ご、ごめんなさい。

遅れちゃって・・・その、服選びに・・・」

「別に。

僕も今来たところだからね。」

あれ？

僕の今のセリフ。

どつかで聞いたことあるような？

でも実際に生では聞かないような？

まあいいや。

待ち合わせ時間は8時半。今は8時35分。

カトレアは5分ほど待ち合わせの時間から遅れているのだが、別に
そのくらい気にしない。

普段しつかりしてるカトレアが、遅刻というのは珍しかったから
“遅いな”とぼやいただけだし。

実際はもう五分くらいは余裕です！！

なんせ紳士ですから！！

そして何より、服選びに時間をかけるのは女性だし仕方ないことな
のだろう。

女性は色々と準備があると聞くしね。

「それで、今日は何をするの？」

何よりも普段着ている私服も似合うけど、今日みたいにおめかししたカトレアを見れるだけでもなかなかの誕生日プレゼントとなるのではないだろうか？

僕だって姿はともかく中身も股間もちゃんとした男であるからして、綺麗な女性を見れば多少なりともテンションが上がることに違いは無い。

カトレアはヒラヒラの多いドレス型？とも呼ぼうか？

そうしたワンピースを着て、ニーソックス（ここ重要）を履いている。

靴はロングブーツ。

スカートが長いがスリットが深く入っており、ちらちらっと見える太ももがちょっとアレです。

ぐっと来ます。

「うん。」

その・・・今日は一緒に出かけようと思って・・・プレゼントはこのお出かけの最後に、ね？

つれまわすことになるけど、ごめんなさい。」

「謝る事無いよ。」

今のカトレアのおめかしした姿を見ただけでも今日来た元は取れた気分なもの。」

「・・・あづ。」

「・・・あ、えと!？」

あの・・・その!?!」

つ、つい口にでてしまった。
顔を真っ赤にするカトレア。
なんだか今日のカトレアは5倍増しに可愛い気がする。

「ま、まずはその、ここに行きたいの。」

パンフレットのようなものを取り出したカトレア。

「これは・・・劇場？」

「うん。」

「恋愛映画みたいだね？」

「い、嫌かな？」

上目遣いにそんなことを言われても。
断れません。

その不安げな目がちょっと・・・あの・・・こまーーガタンッ！

「ん？」

何、今の音？」

「え？」

何か言った？」

「いやなんでもないよ。」

後ろでやけに大きな物音がしたんだが、気のせいかな？
ていうかここ大通りだし、誰かが転んだとかだろう。
カトレアはそれどころじゃなく、テンパツてる様子だ。
なんでそんなに落ち着かないんだろう？
珍しい。

ちなみに映画のタイトルは「Angel Beats!」。
どこかで聞いたことがあるような？

「あぶっ！」

「か、カトレア！」

人ごみがそこそこのので通りすがりのオバサンと体がぶつかってカトレアが弾き飛ばされた。

そこを僕が抱きとめる。

オバサンはそのままさっさと行ってしまった。

なんて失礼なオバサンだ！！

「大丈夫？」

「え、ええ……ありがとう。」

「人が多いし……手をつな……いや、なんでもない！！」

ぼ、僕は何を言ってるんだ！？

ま、全く！！

全く！！

全く全く全くもうっ！！

手をつなぐとか恥ずかしくてでき……

「エンデ……その。」

「え、えと……うん。」

結局繋いじゃったけどね。

自然と差し出されたカトレアのやわこそうな手。

条件反射的に繋いでしまったとしても仕方があるまい。

い、いや、別に問題ないし！！

こ、恋人同士つてわけじゃないんだから!!
別にしちやだめつてことも無い!!

あくまでもはぐれないためであり、さつきみたいなきが無いようにするためである!!

邪念も恥念も下心もないんだからな!!

ガタタタンツ!!

と、またどこかで誰かが暴れてるような音がする。

さっきのオバサンがまたもや誰かにぶち当たって、もめてるのだろうか?

ちよつとだけ良い気味である。

「なかなか・・・」

「・・・ええ。」

劇場に付くとほどなくして劇が始まった。

予想以上に演技が上手く、火薬などを仕込んでいるのかアクションシーンではなかなかド派手だった。

もちろん魔法には劣るが日本で言うところのちよつと予算が足らなかつたヒーローショーくらいのクオリティは十二分にある。

そして、なによりの目玉はストーリーだろう。

誰が書いたかは知らないが、良く出来た話である。

ここに来てようやくタイトルの意味が分かった。

くそう・・・目から滝がどばどばと流れ来る!!

最後の奏かなでと音無君とやらの抱き合うシーンが特に・・・こつ鼻の奥にツーンとくる!!

奏ええええええええつ!!

行くなあああああつ!!

と思わず僕も叫びそうになっただくらいである。

この劇は最終公演であり、春と秋に全13回の公演の一回目をするらしい。

今回の劇は13回目。

一回目から話が繋がっているらしく、途中からで微妙に話が読めなかったが、ダイジェストで前もって話を聞いていたので思いのほか感情移入できた。

このダイジェストもまた、なかなか上手いのだ。

ほ、本当に困る。

涙がさつきから止まらないよ。

あ、涙じゃない。

滝だった。

隣に座っているカトレアを見るとカトレアも結構号泣している。

うんうん。

ですよ。

劇を見終えて、次は昼食である。

「カトレア、何食べる？」

「ええとね。

お弁当を作ってきたから。

そこの噴水広場で食べましょう？」

「おっけー。」

なんか楽しくなってきたぞー！！

「もぐもぐ。」

「美味しい?」

「もちろん。」

「ていうか、今更だよな?」

普段からカトレアの料理を食べているのだから、美味しいことなど百も承知である。

「そ、そうじゃなくて。」

「ん?」

なんか呆れた目を向けられたが・・・なんで? むっ!

今、気づいたが僕の好物が殆どではないか!! なるほど!!

そういうことか!!

「ありがと!カトレア!!」

「・・・う、うん!

・・・ちよつと違うけどこれはこれで。」

いやはや。

ありがたい気遣いである。

この好物フルコースがプレゼント?

「次はあつち。」

「服屋さん?」

「ええ。」

ここで服を買ってくれるとか?

「どっ、エンデ？」

「う・・・ん？」

僕は右のほうが好みかな。

あくまでも個人的な感想だけだよ。」

いつぞやのようにカトレアの服を選ぶ僕。

今回も清楚系である。

「うふふ。そう。」

じゃあこっちにする。」

「別に僕の意見をそこまで反映させなくても・・・。」

「いいじゃない。」

そのほうがエンデに買ってもらったって気が。。。さあ、買いましよう。」

慌てて言葉を嚙んだ様だが、もう遅い。
なるほど。

服を買って欲しいのかな？

そういえばカトレアの誕生日は今の今まで幻想木箱と石鹸しかプレゼントしていなかった。

いい加減、それを变えるのも良いかもしれない。

「僕が買うよ。」

「・・・っ！」

別にそんなつもりじゃなくて・・・。」

「いいってば。」

ね、僕に払わせて。

日ごろの感謝のつもりだから。」

「・・・そう、じゃあお言葉に甘えさせて貰おうかしら。」

「うん。」

そして。

「どうしたの？」

「いや、なんでもないよ。」

カトレアは先に外に出てて良いよ。」

「・・・そう。」

わかった。」

む、あの含みのある笑み。

ばれたかな？

会計を済ませて外に出ると、カトレアが絡まれていた。

・・・イベントが多い日だな。

それだけカトレアが可愛いつてことか。

「ちょっとだけ俺たちとお茶しないか？

お姉さん。」

「いえ、ごめんなさい。」

人と待ち合わせてますから。」

「何？」

男？

別に良いじゃんさ。

ちょっとだけ。

ちょっとだけでー！がだあっ!?!？」

後ろから傭兵のような背格好をしている男Aの腕を捻り上げた。

問答無用は酷くないかって？

何を言う。

これくらいでも押さえたほうだ。

「人のー」

「なんだ、この女はっ!?!
いだっ!

は、離せよ、いてえだろ!?!」

「ヤコブソンッ!?!」

てめえっ!?!」

ヤコブソンをはな・・・と思ったら、オマエさんもこの女に負けず
と劣らずの・・・」

ヤコブソンとか・・・ぶっ。

それはともかくとしてなんでこんなに僕はイラついてるんだろっか?
カトレアに絡まれたからというだけではない気が・・・しないこと
もない。

「うるさい!?!」

人の女に手を出すな!?!」

とっくと失せる!?!」

こんなの相手にいちいち相手取るのも面倒くさい。

殺気を込めて言い放つ。ついでに魔法で気絶させてしまおう。

男達の周りを局所的に酸素を排出させて窒息させる。

肺の中の空気も引き抜かせてもらおうか。

「ひゅっーあ、がーっ!?!」

「なにひょーっーふがっ!?!」

ビクビクと痙攣した後、失禁して倒れる男2人組み。
ちよっとやりすぎちゃったかな?

「ごめんね、カトレア。
カトレア？

どうしたの？」

なんかカトレアの顔が真っ赤だけど。

「え、エンデ……う、うれしいけど……ちょっと衆人環視の前
では……」

「は、はい？」

野次馬が周りを囲っていた。

そしてなにやら“おおー”とざわめき、拍手が巻き起る。

なんで？

この傭兵っぽい男がとても強くてそれをなんか知らないけど気絶さ
せた僕が凄いつてこと？

それともこいつらはとても嫌なやつで……

「エンデ……自覚無いの？」

「何を？」

「いや……その……“人の女に”ってやつなんだけど……」

「は、はあああああつ！？」

つて、あああああああつ！？」

いやちょっと待ってっ！？

あ、あれはっ、ついつて感じで別にカトレアにそついう思いをとい
うかそんな気は無くて……！

「あ、あれはっつい言っちゃっただけ……」

「ついつてことは……本音がつい？」

「いや、ちがつー!!」

「どう違うの?」

「いやそのっ!!」

あれはその・・・っていう言うか・・・つい思ってなかったことを言っただって言うか・・・」

「思う前に感じたことがつい口に出ちゃったって事?」

「いや、だからそれもちがつんだようっ!!」

顔をほんのりと紅くしながらも僕を攻め立ててくるカトレア。

ニヤニヤしてる。

すべて分かってますって感じの笑顔がまた悔しい。そして可愛いな
と思う。

いや、そんなことを思ってる場合じゃない。

く、くそう!!

ほ、ほんとうに違うんだから!!

つい言っちゃっただけで・・・特に深い意味は・・・いや深いも何
も言葉のままだろと言われては何も言い返せないけどもっ!!

いや、ちゃんと他意はあつたぞ!!

あ、あれだよ!!

あれ!!

なんだっけ!!

あれあれ!!

あれっていうやつのおれ?

あれ?何言ってるんだ?

僕は。

「エンデ!」

「ひゃいっ!!」

うわたあっ!?

声が裏返って・・・これではまるでその通りですと言ってる様なものではないか!!

ガタタタタンツ!!

と、衆人環視の仲からけたたましい音が鳴り響くが、喧騒でそれは掻き消されてしまった。

そして場面代わり。

今度は公園を腕を組みながら散歩である。

「か、カトレア?

引っ付きすぎじゃない?」

「ふふふ。

別に良いでしょ?」

やたらとご機嫌な様子だが、どうしてだろうか?

いや、分かってはいる。

前にも言ったが、“妥協”で選んだとはいえ結婚相手と定めている僕の自分に対する好感度が高いことを知って嬉しいのだろう。

「ねえ、エンデ。

キスしようか?」

「ぶはっ!?!」

な、何を言ってるのっ!?!?

イキナリっ!?!?

今にも倒れそうなほど真っ赤なお顔して!!

内心、カトレアも凄く恥ずかしいんでしょ!?!?

無理しないでっ!?!

「エンデ。」

はつきり言わないと伝わらないみたいだから・・・言っね。
このまま変な勘違いされたままも嫌だし。」

勘違い？

なんかしてたっけ？

「私ね。」

最初はエンデのこと嫌いだったの。」

「はい？」

一体、何をいきなり？

というか・・・き、ききききらいつ！？

“不思議”と足が震えてくるよ！？

「ど、どどどど、どうして嫌いだったの？」

「そんなに不安そうな顔しないで。」

今にも首を吊りそうだよ？」

くすくすと笑うカトレア。

「い、いや、別に！！」

全然、吊ろうとなんて思ってないよ！？

僕を吊らせたら大したもんですよ！！（？）（？）

「ぶくくく、何言ってるのよ、エンデ。」

「ほ、僕も我ながら何がなにやら・・・」

というかカトレアからちょっと嫌いと言われたくらいで二二二までと
は僕って結構・・・いや、止める！！！！

考えたらダメだ!!
なんか取り返しがつかなくなりそう!!
具体的には直視が出来そうに無い。

「デリカシーが無いなあって。

13歳頃かな。

特に嫌いだった。でも好きでもあった。
ううん。

まだ憧れと親愛か情愛に近かったと思う。」

「ええと?」

何?

矛盾してない?

「そのときのこと覚えてる?」

「あの・・・時だよね?」

覚えてるよ。

僕は言ったもの。

“君が生まれてきて少なくとも嬉しい!!” って。」

「・・・ええ。」

まあそこはあまりそうでも無いけど。」

「ん?」

「ううん。なんでもない。」

カトレアはどこか遠くを見つめるように、そっぽを向く。

「それが切欠。

それからはどんどん好きになっていった。
もうね。

押さえられないの。」

「カトレア？」

「私の夢はね？」

私の好きな人。

この世で一番愛してる人。

その人から告白を受けること。

プロポーズを受けて、一生・・・ううん。

出来ることなら100年。200年。

1000年以上、ずっとそばにいたい。

それが私の夢。

やっぱり私から・・・というよりプロポーズは男性から。

女性ってそういうものよ。

でもね。

もう・・・じれったくて。

すぐにでも抱き合いたくて。好きすぎて。

私はずっといたいの。

貴方と。」

ええと？

頭が追いつきませんか？

「はい、これ。

私のプレゼント。」

「あ、うん！

あ、ありがとう。」

カトレアのプレゼントは手編みのマフラーのようである。

マフラーには・・・カトレアの花が三輪。

中心にはなんだろう？

何かの花がある。

「トヲユリって言うの。」

花言葉は・・・『私を愛して』。」

「か、かどれあ?」

「私を愛して、エンデ。」

私がプレゼント・・・だから・・・その・・・ね?」

そのまま目を瞑り、こちらに顔を近づけてくるカトレア。

あ・・・あう。

えと・・・どうすれば?

こ、これを据え膳と呼ぶのかな?

据え膳食べねば恥とも言出し・・・いや、でも僕はカトレアを異性として好きというわけではないのにキスというのは・・・いやしかし、使い魔契約のときすでにキスは・・・一度したら二度目以降は・・・いやしかし、気持ちを不分明のままではつきりさせずにカトレアとこのまま口付けを交わすというのはどうなんだろうか?

そう、好きな女性とするべきで僕はカトレアを・・・愛している?でも、カトレアは妥協で・・・いや、もう違うなんてことは分かってる。

分かって“しまった”。

僕なんかでいいのだろうか?

僕なんかで。

僕が女性に優しいのは・・・僕は・・・汚くて、卑怯で、しょうもない・・・

「だめええええええええええつ!!」

「はっ?」

「えっ?」

なにやら公園の散歩コースの茂みから人が・・・ていうか、シヤス

テイルが飛び出して・・・ぐぶるあっ！？
背中が猛烈に痛いっ！？

「きゃっ！？」

どたたん！

と僕はカトレアを巻き込んで倒れこむ。

カトレア！

大丈夫！？

と声をかけようと思ったのだが、声が出ない。

いやはや。

もちろん、実は僕の声は使用回数に制限があったとか突然声を出せなくなっただとかではなく、口が塞がっていたからだ。

何に？

アンサー。

カトレアの唇。

おう！いえええええい！！

すぐに反射的に唇を離す僕。

そしてあるうことが、僕は黒歴史を築いてしまったのである。

「ひ、ひ、ひ・・・ひやああああああああっ！！」

36 ページ目（後書き）

ちよいとした解説。

シヤステイルの編んだセーターに刺繍されたレモンの花。

もちろん意味があつて、その意味は「忠実な愛、心からの思慕」だ
そうです。

思慕は恋しく思うことという意味。

シヤステイルの性格と、シヤステイルの愛がどうという意味の愛を持
つのか？

それをさり気なく表現したつもりです。

余談ですが、異性を思う愛には幾つか種類が有るんじゃない？とい
う持論を僕は持っています。

まあ、異性と手を合わせたことすらない僕が何を言ってるんだって話
ですがww

異性を好きになった事すらないのにww

また、カトレアのマフラーにはカトレアの花とトラユリ。

カトレアの花はカトレア自身を表現し、その中心にトラユリ。

「私を愛して」という気持ちをさり気なく表現したわけです。

カトレアの性格上、相手に攻めるとした場合でも優雅に自身をアピ
ールするかな？と思つたゆえの淑女的なアピールです。

因みに、カトレアの花言葉は「優雅な女性、成熟した魅力、魔力、
魅力」とカトレアをまさに指し示すような花言葉です。
いえ、逆ですね。

原作者がカトレアの花言葉を元にカトレアのキャラを作ったのかも？
今回は後編。

最近、気づきました。

この作品のコンセプトはカトレアとの恋愛模様なのに、肝心のカト
レアとの絡みが少ないと！

お話の都合上仕方ないのですが、これから先はいくらか意識していきま

す！
どうぞご期待下さいませ！

とは言え。し過ぎない程度にお願いしますww

37ページ目(前書き)

今回は主人公がちょっと強引に？

エツチな表現がありますので15禁です。

賛否両論かもしれませんが、後悔はしてない！

37ページ目

3日後。

僕はあれです。

一度、学園に戻ったけどそのままだとカトレアに会ってしまう事に気づき、急いで学園を出て外で宿を取った。
そして悶々としながらずっと頭を抱えていたわけである。
が！！

これではただのニート！！

いや、ニートですらない！！

室内でひたすら同じことをループして考え続けてるだけのーい
わばただのヘタレ！！

ただひたすらどんな顔で会えば良いんだということを考えている。
キスだけならばまだしも、愛の告白を受けてしまったからでして・
。

699

こんなことではダメだと分かっている！！

分かっているが・・・

というか、なぜ誰も探しに来てくれないの！？

僕なんてどうでもいいのかっ！？

行き先も告げずに三日もいなくなってるのに！！

せめてヒスカかシャスティルあたりは探しに来てくれると思ってた
のに・・・もしかして、僕って嫌われてる！？

なににせよ、このまま引きこもってるわけにはいかない。
いい加減ね？

どげんかせんといかん!!

「そ、そうだな!

と、とりあえず、学園に戻るう!!」

ここで悶々としても一向に解決はしない。

とにかく学園に戻ることを重視せねば。

戻れば・・・戻りさえすれば意外といけるかもしれないし。

というわけで学園。嫌だ嫌だと思いながら帰ったせいか半日以上かかったので、あたりは結構真っ暗である。

んで、戻るわけだが・・・やっぱり会えない。

どうしたら会えるかと考えて、こういう色恋沙汰に強い(自称)ヤツがいたじゃないか!!

と思い立ち、さっそくヤツを頼ることにしよう!!

ヤツの部屋をぶち破って、突撃した!!

寝てるかと思っただけど、そしたらごめんね?

ドアが粉碎する。

「ギシユえもおおおおんつ!!」

「ど、どうしたんだい?こんな時間に・・・エン太君。

つて、何をやらせるんだねっ!」

「な、なんで知ってるの?

それに、やらせるっていうか勝手にやったんじゃない。

ま、まあいいや。

ギシユえもん!!

カトレアと会う勇気をもてる道具を出してよ!!」

「そんな都合の良いものを出せるわけが無いだろう!?

っていうかドアっ!？」

「ドア？」

「どこでもドア？」

「そうじゃなくて、僕の部屋のドアが見るも無残な姿に!？」

「後で直すから、それよりも話を聞いてくれ!！」

「わ、分かったから!！」

分かったから、胸倉を掴みながら喋るのを止めてくれ!！」

「あ、すまん。」

「つい。興奮してたから。」

「ついって・・・前々から思ってたけど・・・君は僕のことを嫌いに思ってるのかい？」

「何を言う!！」

僕を嫌ってるのはお前達のほうだろ!！」

「唐突過ぎて、わけがわからないっ!？」

「どうして僕を探しに来てくれなかったんだっ!！」

「わけは分かったけど、酷く面倒な性格だなっ!？」

「で、道具は無いのっ!？」

ギシユえもんっ!！」

「だから、そんな便利な物は無いというに・・・あれだ。」

とりあえずカトレア嬢の告白にはなんと返事するか決めたのかい？」

「そ、それがわかんないんだ!！」

「い、いばって言うことじゃないだろう。」

ギシユえもんはため息をついて呆れた目を向けてくる。

でも、仕方ないだろう!！」

本当に良く分からないんだから・・・恋心って何？食べれんの？状態だからして。

確かに好きだ。

カトレアは大好きである。

個人的な好みでもあるし、スタイルも良い。
性格も良いし。

友達としても女性としても大好きだ。
だが。

異性としては？

と聞かれると良く分からない。

他の男と一緒にいるのを見ればむかつく。

結婚とかそういう妄想には必ずカトレアが無意識的に相手になっちゃってたり、幸せな家庭を夢に見たりとそうなのかな？とは思う。
でも、それは酷く曖昧で・・・

そして何よりも、なぜだか“好きになっただけ”とはいけない”。

カトレアを意識すればするほど、そういう良く分からない暗い気持ちも強くなっていく気がするのだ。

最近では不思議と“後ろめたい”とを感じるようになる。

平たく言えば、自分で自分がカトレアとつりあわない。

そう感じている。

のかもしれない。

これもまた曖昧で、それもちょっと違うような。合っている様な・・・
・酷くぼんやりとした物なのだ。

好きになる。

人を好きになるという感情はプラスな気持ちであり、おそらくもって大概に置いてそこに暗い気持ちを併発する人は居ない。と思う。
ということは逆説的だが、僕の気持ちは“恋”とはちょっと違うんじゃないか？

とも思えるのだ。

簡単に言ってしまうはとにかくどういう“好意”なのかが分からないという」と。
それに尽きる。

「む、難しい問題だね。」

「これって恋なの？ギッシュえもん？」

「とりあえず、ギッシュえもんと呼ぶのを止めてくれ。」

そして・・・僕には分からないことだよ。それは。

結局のところ、人の気持ちなんてものはその人自身にしかわかりっこないものだからね。

夫婦にしたってお互いの気持ちを分かり合うのは大変なことさ。それは分かるだろう？

君の気持ちは君が分かるしかない。」

「わ、わかるけど・・・わかんないのがこの場の問題なんだ!！」

「・・・時間をかけて悩むしかないと思うよ？」

「そういうものなのか・・・？」

「そういうものさ。多分。」

「曖昧だな。」

「そういうものさ。」

「二回言っただよ。」

恋多きーー気の多いと言い換えることも出来るーーギッシュえもんがそういうのならそうなのかもしれない。
と、そこへ。

「あら、貴方達何をやってるの？」

ていうか、エソデ。

あなた三日ぶりね。どこ行ってたのよ？」

「モラえもん？どうしてここに？」

「だ、誰がモラえもんよ!？」

モラえもん。もとい、金髪ドリルのモンモランシーがやってきた。手にはグラスに注がれたワインがある。

これから酒盛りかな？

というかグラスに酌んでから持ってきたのか？

んで、酒の勢いでーあ、あれなのかな！？

ちよ、ちよっとっ！？

15歳はま、まだ早いと思うよ！おじさんは！！

「エンデ？

顔赤いけど・・・どうしたの？」

「いや、なんでもないから！！

それよりもモンモン・・・ここ男子寮だけど・・・」

「べ、別に良いでしょ！！

ギーシュと2人きりで飲んでも！！

それに貴方だつて居るでしょうがっ！！」

「いや、僕は男だから本来はこっちだよ？」

「そういう意味じゃないわよ！！

そんな外見して・・・説得力無いわ！！

「男だつてば！！」

「で、なぜ貴方がギーシュと2人つきりしているのかしら？」

「いや、普通に・・・」

「ギーシュ？

まさか浮気？

可愛ければ男でもいいわけ？っ、っつ・・・ついてても良いって言

うのね！？」

「い、いや！？」

ち、違うぞモラえもんっ！？」

「アンタまでその名で呼ぶなっ！！」

「がほっっ！！？」

・・・ぐむ・・・ぐああああ・・・あく・・・」

うわ、股間に蹴りが・・・むごい。

完全な言いがかりで男のアレを蹴りおった!!

こやつ・・・できる!!

ルイズ並みの兵じわもののう!!

うずくまったギーシュがうめいてるのを見て、さすがに同情した。
というか半分は僕のせいだし。

後日、ギーシュの大事な蹴られてしまったアレのお見舞い兼お詫び
ということ、石鹸を贈ってあげよう。

「で？」

エンデはいつまでギーシュの部屋に居る気がしら？」

「ひ、ひいつ!？」

す、すみません!!

すぐに出て行かせていただきます!!

「はぁ・・・これじゃ・・・今日は無理ね。

まあいつか。

こんなことだね・・・」

「どうしたの? モンモン?」

モンモンはなにやら付き物が取れたような晴れやかな表情をしてい
た。

「ううん。

別に。

あ、そうそう。

ワイン飲む?」

「あ、でも・・・」

「ギーシュは見ての通り。

私も気分じゃなくなっちゃった。

これからオシオキタイムだから。」

「は・・・はははは。」

「ご苦労様です。んじゃ頂きます。」

私の酒が飲めないんか!?

という雰囲気を出すモンモンに負けて、僕はワインを片手に取る。

「そ、そっちはダメ!!」

「お、おわあっ!?!」

いきなり焦りだすモンモン。

なんー!ーああ、そうか・・・これ、惚れ薬のあれかな?

危ない危ない。

「んじゃ、こつちを頂きます。・・・んぐんぐ・・・ぶはあ。

ご馳走様でした。」

「お粗末さまでした。

あ、ドア、直していつてね。」

「わかったよ。」

そしてドアを直した後、振り返らずにそのまま僕は自室へと帰った。深夜近いだけあって、誰にも会わなかったが・・・もうカトリア寝ちゃってるんじゃないかな?

これって明日のほうが悪くない?

うん!

きつと良い!!

明日の方が良いに決まってる!!

そうと決まれば適当にテントあたりでも錬金して、外で寝よう!

そうしよう!!

だって、寝てる場所を起すのは可哀想だからね！！

紳士としての気遣いとしても当然のこと！！

というわけで、僕はドアの前にながら色々、やむを得ない事情（言い訳ゆえに）から野宿へとシフトする。

というわけで22号室を去ろうと思ったら、ギィと扉が開く。

なんで！？

暗い廊下で、僕が出すライトの呪文による懐中点灯ほどの光源のみ。そこで人知れず動き、開きだすドア。

開くとも思ってたかったので、つい悲鳴が喉まで出掛かるが、なんとか堪えるとそこにはおなじみ、ピンク色の頭髪が見え、大きくて人を吸い込みそうな可愛い目。

整った鼻。キスをすればとても柔らかく、弾力のある唇。

カトレアが姿を現した。

「おかえりなさい。」

何も言わずにただ微笑みたらずむカトレア。

緊張はそれだけで一気に吹き飛ぶ。

単純だな、僕。

「た、ただい・・・あれ？」

なんだろうか？

不思議と・・・こう・・・内からあふれ出るこの思いは？

あれ？

なんだ？

無性に・・・すごく無性にカトレアとーいや待て！？

何を考えてるのだ！？

僕は！？

「どうしたの？
エンデ？」

俯いてる僕の顔を覗き込んでくるカトレア。
そのために上目遣いとなり・・・はうあっ!？

「か、カトレア・・・」

「な、何？」

「好き・・・大好き。」

「ふうえっ!？」

そのままカトレアを抱きしめる僕。

あれ？

なんで!？

ど、どうしようも無くカトレアが好きになってるけど!？

カトレアは顔を真っ赤にしてあうあう言ってる。

こんなカトレアもまた新鮮で可愛い。

「え、エンデ・・・そ、その、今はちょっと・・・」

「どうして？」

嫌？」

「い、嫌じゃないけど・・・その・・・こ、心の準備が・・・」

「大丈夫。」

すぐに気持ちよくなるから。」

「あ、あう・・・そ、そこあ・・・」

そのまま僕の右手はカトレアの胸へと向かい、下側から手を入れてカトレアの胸を・・・まあアレしてしまう。

「ふ、うあ……あう……」

「カトレア……可愛い。」

「い、言わないで。」

「どうして？」

「こんなに可愛いのに。」

「言わないでっいたら……は、恥ずかしいもの。」

「そんなことないよ……カトレア。」

「ひうつ!?!?」

カトレアの柔らかな胸を堪能した後、僕の手はそのまますると下へ向かい、カトレアはビクビクと体を震わせて声を漏らす。

「ら、らめ……しゃ、シャステイル……あうつ!……達が……いるから……あう。」

ときおりビクつとしながら瞳を潤ませて、僕を退けようとするカトレア。

でも、力は弱弱しく、理性と欲求がせめぎあっているようである。いわずもがな、このまま僕と抱き合うか抱き合わないかで。

本音はこのまま……だろうけど、雰囲気微妙な今は気分じゃない。といったところかな？

少し強引だというのは自覚しているが、どうしようもないのだ。

三日もカトレアにあってなかったという反動もあるかもしれない。というか、そうだろう。

なんだか無性にカトレアが“欲しい”。

「あうむつ!?!?」

カトレアの抗議を聞かずにそのままキスをする。

キスをして唇を塞ぐとカトレアはびくりと震えて、とろんとした表

情をする。

そのまま舌と舌が絡み合い、艶かしくも響き合う水音を部屋に響かせた。

カトレアの恥ずかしい場所をまさぐる右手からも同じような音が発ち、いささか湿り気を帯びてくる。

カトレアと僕の唾液が混ざり合って糸を引く舌を引き抜き、唇を離して、僕は言う。

「待たせてごめんね。

カトレア・・・僕のお嫁さんになってくれる？」

おかしい。

すぐに私は気づいた。

最初はそうでもなかったけど、それからすぐにおかしくなっていることに気づいた。

どうも違う。

言ってることは“嘘ではない”。

目の前にいるエンデは“本物である”。

それも間違いない。

でも、不思議と私は違和感を感じた。

本来ならこのような態度を取るはずが無いとかそういうことでもあるけれど、どこか違う雰囲気・・・身にまとう空気が違うという違和感。

いや、違いは無い。

違いというにはあからさまに不自然であり、不気味。

例えるならば水は水でも少しの塩が混ざったようなそういうもの。
本質は変わらない。

言ってることも本当。

でも普段とはどこことなく“ずれている”。
目の前のエンデに対して私はそう感じた。

もしかしたらこの三日で、ふっきれて私をこうしてくれたのかも
しれないけれど・・・やっぱりこういうことはもう少し雰囲気を作っ
てくれるからの方が良い。

でも、普段のへたれたエンデとは全く違って、この積極的なエンデ
も良いと感じている。

少し積極的過ぎる気もしないこともないけれど。

「カトレア・・・その・・・僕じゃ君のお嬢さんには役不足かな？」

「ううん。

嬉しい。

そう言ってくれて泣くほど嬉しいわ。」

私の目には嬉しさのあまり涙が溜まってきている。
でも。

「“今の”エンデのお嫁さんは無理かしら。

私は・・・やっぱりいつものエンデがいいの。」

「え？

あうっ？

あらら？眠気が・・・」

「おやすみなさい、エンデ。」

そのまま私はスリープクラウドをエンデに使ってエンデを寝かしつ

「どうしたの？
シヤステイル？
土鍋釜が欲しいの？」

何か料理を思いついたのだろうか？
というか土鍋が必ず必要な料理なんてあったっけ？
朝からずっとこんな調子のシヤステイル。

「んなわけないでしょっ！！
どうして、また・・・そんなカトレアを後ろから抱きしめつつ頭を
撫でるなんていう・・・高等テクニクをなぜにお兄ちゃんがっ！
？ うらやまーじゃなくてっ！！
どないして!？」

「どないしてって・・・関西の人かよ・・・カトレアを撫でてはい
けないなんて法律は無いじゃないか。
それにカトレアもこの通り。
嫌がっでないし。」

「い、嫌じゃないけど・・・その・・・恥ずかしいからできればや
めて欲しい。 とうかやっぱり変 「
「ん？」
「なんでもないわ。」

腕にすっぱりとはまりながらなにやらゴニョゴニョと言っカトレア。
今も現在進行形でカトレアは震えて、可愛らしい。
緊張か、嬉しさか。
少なくとも嫌がっているということではないだろう。

「と、というか、明らかにおかしすぎるでしょおおおおおおお
おおおっ!？」

お兄ちゃんのむかつくほどのヘタレっぱりはどこにいったのよっ!？

たった3日で、産まれたばかりの子馬が火竜並みの進化を遂げるじゃないっ!?

草食系から・・・肉食系への転換・・・男子3日会わざれば活目せよ・・・みたいな感じのことも言うし・・・でもどうしてカトレアに・・・」

むかつくほどのヘタレっぷりだったんだ・・・僕って。

だから3日間放って置かれてたのかな?

・・・ぐず。

な、泣いてなんかないんだからねっ!!

「とにかくこの三日は引きこもってたよ?」

「なんで!?!」

「そりゃ・・・カトレアに会うのが・・・恥ずかしかったから・・・その・・・カトレアの告白の返事もろくに考えられずに。ね。」

「だから、そんなお兄ちゃんがどうしてまたっ!!」

そんなガン攻めモードになってるかってことよっ!!?

あきらかにおかしいでしょ!?

なんていうか・・・偽者ではないけど・・・偽者みたいな・・・変な違和感もあるし。」

ぎゃーぎゃー言うシヤステイル。

ふっ。

シヤステイルよ。大丈夫だ。

カトレアと一緒にいるだけじゃなくて、ちゃんと構ってあげるからね。

姉代わりのエミリアが既婚し、僕を放って旦那とラブラブしまくっていたときの僕の寂しい気持ちは忘れていない。

そんな気持ちはエミリアに味あわせるなんて事はしないよ絶対。

今にして思えば時たま休みを取っていたのは旦那と乳繰り合ってた
ってことだよな。

まあそうした結果が可愛い可愛いマジ天使のアルバたん（ ）が産
まれたというわけだから、結果的には良かったのかもしれない。

父上によるとあと数ヶ月でエミリアはメイド業を再会するらしい。
もちろん勤め先は我が家。

アルバたんに出会うのも一年振りである。ふふふふ。今からウキウ
キする。

つと何を考えているのやら。
とにかくだ。

「いや、ね。

思い切つて会つてみたら唐突に心が沸いたというか？

ついつい、好き好きオーラが吹き出てしまったというか？」

「好き好きオーラって何よっ!？」

死になさいよっ!!!」

「なんでっ!？」

「ま、んまさか・・・

もう一線を・・・越えたとかないでしょうねっ!？」

「うん・・・まあ。」

昨日のアレは越えてないと言って良いだろう。

ギリギリだったけど。

腕の中のカトレアは昨日のアレを思い出したらしくもじもじとし始
めた。

耳まで真っ赤で、カトレアってマジ天使!

「な、何よっ!？」

その歯切れの悪い感じっ!？」

「ごめんね、カトレア。」

昨日はちよつと・・・3日ぶりのカトレアだったから・・・カトレア分を補充するためにちよつと暴走しちゃった。

強引過ぎて・・・その、僕を嫌になったとか・・・ないよね？」

そういえば昨日の僕はいくらカトレアが大好きだと言っても、強引過ぎた。

これは紳士的に・・・というかカトレアを大切にしない。
猛省物である。

というか、き、き、きらいになってたりしないよね？

「え、ええ。」

大丈夫。

で、でも・・・気持ちよかったしーじゃ、じゃなくて、あの！
た、たまにはああいうのもいいかなって・・・思ったりもしなくも
なかったり。」

「き、気持ちいいことおおおおっ!？」

私にもしなさいよっ!!

お兄ちゃん!!

「カトレア。」

「え、エンデ。」

「つて、私をスルーするなあああああっ!!」

「シヤス・・・とりあえず落ち着こうよ。」

「どうも・・・匂うんだよね・・・これって大いなる意思の・・・
結構強いやつ。」

薬・・・なのかな？」

騒がしいシヤスティルに強制的に起こされたヒスカがシヤスティル
を宥め、エルザはボソボソと何かを言っていた。
なんだろうか？

そんなこんなで朝からシャスティルの絶叫が響く魔法学園だった。

37ページ目（後書き）

ここまで読めば分かるかと思いますが、モンモンによる惚れ薬イベントです。

カトリアが飲むかエンデが飲むかで迷いました。

38 ページ目 (前書き)

後半はカトレアとエンデ。

お互いに可愛らしく。

そんな風に書いたつもりです。

ちょっとあざとすぎるかな？

地の文を三人称かカトレアの一人称かで迷いました。

結局、カトレアは書きづらいということで三人称に。

「ぬ、ぬぬぬあんですつてえええええええつ！！」

シヤステイルの声が響く、22号室。

「あは、はははは、わ、悪気は無かったのよ？」

シヤステイルの向かいで気まずげに顔を青くしているのはモラえもん。ではなくモンモン。

「ま、間違えて惚れ薬の入ったワインを飲ませたって何を考えてるのよっ！！」

「わ、悪かったっては・・・わ、わざとじゃないし・・・ってか苦しい。」

シヤステイルは興奮冷めやらぬ様子でモンモンの襟を捻り上げる。それをドウドウと宥めるヒスカ。他にはギシュえもん、サイト、ルイズもいる。

エンデの変わりようは惚れ薬が原因であり、その惚れ薬を間違えて飲んだのが今回の発端とのこと。

カトレアとエンデはデート中。

朝、起きるなり飛び出していった。

授業はどうした！？

授業は！！

「そ、それにあの惚れ薬は誰かれ構わず惚れさせるわけじゃなくて、

好意を増幅させる効果しかないから・・・元々十二分に好きだった
つてことでむしろ自身の行為を自覚する切欠になるし・・・結果的
には良かったっーぐえっ!?

ああああああつ!?

回さないでええええええっ!!

「なおのこと良くないわよおおおおおおおっ!!

モンモンの胸倉を掴んだまま振り回すシヤスティル。

半吸血鬼化してるシヤスティルの腕力の前になすすべもなく、ぶる
んぶるん回されるモンモン。

「こ、こら。妹君!

ぼ、僕のモンモンを苛めるのもソレくらいに・・・」

「何よ!?

「あ、いや。なんでもないです、はい。」

ギーシュ弱い!!

まあそれほどに鬼気を発しているシヤスティルが怖すぎるといっわ
けであるが。

モンモンの話を聞いていたエルザが呆れを含んだ目で言った。

「なるほどね。

浮気性のギーシュが本当に自分を好きで居てくれているのか不安に
なっただってところ?

自身への好意があるかどうか。それを知りたかったってところかな
あ?

でなければ元々好きで無い人間には効果が無い、なんて中途半端な
惚れ薬を使うわけが無いし。技術的にも手間がかかるしね。」

「な、ななな、な、なんでそうなるのよっ!!

ち、違うに決まってるでしょ!!

赤面して否定するモンモン。

しかしそれは世のちよっとした趣味を持つ大人達にとっては大好物です。

ツンデレもえもえく・・・なんてね。

そんなモンモンの心境を知り、赤面してる姿を見て、ときめいてるバラ男が一名。

“ そうだったのかい、モンモランシー・・・僕というヤツはなんとー” うんぬんとうぬぼれが始まった。

「直接聞けば良かったらろっくに。ぷぷぷ。」

「う、うるさいわね!!」

お子様の貴方には分からないわよ!!」

「見た目で判断すると痛い目に遭うと思うけど? というか、解毒薬は作れないの?」

「うっ・・・作れるには作れるけど・・・材料が・・・その・・・」

「貴方のお小遣いでしっかり出してよ?

間違った物を飲ませたんだから・・・」

「・・・む、無理です。」

家は貧乏だから・・・」

モンモンが頭を垂れた。

その姿はお金に苦勞をしてると一目で分からせてくれる悲壮感漂う物だったということと言っておこう。

「月々のお小遣い・・・最近、5エキューを切ったの。」

「え!?!」

ルイズとギーシュがモンモンのその言葉に驚く。

サイトはお金の価値がいまいち良く分からない。

シャスティルとヒスカは貴族のお小遣いの相場なんて知らない。

エルザは気の毒そうな目を向けていた。

1スウは10円。1エキユーは1000円。

すなわち、モンモンのお小遣いは5000円を切ったということになる。

とはいえ、野菜や果物、お肉などは基本的に一人前、5スウ前後が普通。

毎日三食食べるとして、15スウ。

ソレを三十日過ごすとして450スウ。換算して4エキユー半もあれば一月の一月分のご飯は苦勞しないということである。

日本とは物価が違うので、平民ならば十二分に過ごしていける金額ではある。

実際は平民は貧しいので三食食べれるところは少ないが。

平民からしたら小遣いとしては十二分に多いが、貴族としては大分すくない。

下級貴族でも10エキユーはあるのだが・・・開拓に失敗した影響というのはかくも強いということを示している。

モンモンが悲壮感漂うのも仕方あるまい。

なおかつ秘薬は安く“ても”5エキユー。

ほとんどメイジとしての活動は出来ないと言っても等しいのである。

ちなみにギーシュは10エキユーを切ったところ。

エンデは？というと。

石鹼や平民にも使える魔法のペン。

幻想木箱や冷蔵木箱、冷凍木箱、無線機箱（少量ながら出荷中）、貯蓄木箱（ハルケギニア版金庫）もあって、月収はそこら辺の中堅貴族なみの領地なみの月収があるのである。

ざっと3000エキユーから4000エキユーである。

領地全体の収入ならばさらに何倍もあり、他の領地から逃げてきた

領民による拡大や経済成長も相まって前にも言ったようにトリステインの国家予算を遥かに超える潤沢なお金が集まっている。

お金の規模。領地の安定性で言えばトリステインどころか周りの国々を含めてトップクラスに立つほどの家となっていた。

ちなみにヒスカ、シヤステイルの小遣いは一律10エキユー。

これはケチなのではなく、下手に贅沢になれるのはよろしく無いというエンデの母、アリリーの教育方針である。

これ以上お金が欲しいなら自分で仕事をしろということだ。

まあそれでも小遣いとしては破格。

エルザは一応、エンデお付のメイドということになっているので小遣いではなく給料として100エキユーを毎月貰っている。ちなみに正式なレイフォール家メイドは月収が150エキユー。

昔は今ほど豊かではなかったため、10エキユーほど。

なににせよ他家のメイドに比べると破格の給料であり、他貴族家ではまあある手付けをされないということも手伝ってレイフォール家のメイドになるには競争率が高いため自然とメイドのレベルが上がる。

そのため情報通の貴族間ではメイドの最高峰と呼ばれるまでの家となっている。

レイフォール領ではメイド学校、執事学校なども設立されている。

閑話休題。

「だ、だから・・・材料が買えないって言うかね？」

「・・・材料があれば直せるのね!？」

「ひい、ひいつ!？」

え、ええ、そうよ!？」

時たま見られるシャスティルのヤンデレ目にびびりながら辛うじて
そう答えるモンモン。

「これで足りる？」

シャスティルは部屋にある自分の貯蓄木箱を開く。

貯蓄木箱は魔法ペンと同じようにロックが平民にも使えるように作
りこまれている。

これには魔法を無効化するルーンが刻んであり、ちやちな魔法は効
かない為にそれなりのハンマーを持ってきて、物理的に壊すしか
ない。

もしくはトライアングル以上の魔法が必要だが、トライアングル以
上のメイジは窃盗などせずとも暮らしていけるのでそこまでは考
えられていない。

そして、持ち出せないように底には分厚い鉄板を敷いて重さを持
せている。

据え置き型の金庫のようなもので、平民ならば大きさにもよるが1
0〜20人がかり。

一般的なラインメイジならば2〜3人がかりでの取り付け作業にな
るため、手間賃ということでもそこそこ高価な木箱である。(もはや
木箱ではないが。)

開いた貯蓄木箱から乱暴に取り出したのは500エキューほどの金
貨の山である。

フライを使ってモンモンの目の前に持っていく。

(シャスティルは半吸血鬼化によって先住魔法としてのコモンマジ
ックも使えるようになった)

「う、これは・・・くり。」

見たことも無いであろうモンモンの生唾を飲み込む音が聞こえた。

「日々のお小遣いと、お兄ちゃんの手伝いとして領内での亜人の討伐なんかをしたときの報酬。」

あまり使うことがないからそこそこあるんだけど……まだ足りない？」

「と、とんでもないわっ！！」

じゅ、十分よ……これだけあればね。」

「そう、それは良かった。」

……ちよるまかしちゃダメだからね？」

「わ、分かってるわよっ！！」

「じゃあ、とつとと買ってきなさい。」

「い、いや、ちよつと待って。」

じゅ、授業もあるし……」

「今すぐに買ってきて。」

流るモンモンに擦り寄るシヤステイル。

その目は暗く深い。

すなわち、怖い。

「あ、いや……でも……」

「もともと禁制の品でしょ？」

「刑務所のお世話になりたいのかなあ？」

「お、脅し……はちよつと酷いと思うな……えへへ。」

「もともと、惚れ薬に頼ろうとなんてした貴方の性根が今回の事件を招いたんでしょ……早くしないと……オシオキするわよ。」

「は、はい、ただいま行ってまいります！！」

そのまま速攻で部屋から出て行くモンモン。

ちよつと涙目である。

それを買っていくと品切れで、今後の入荷のめども立たないということだ。

「……自然に解けるのを待つしかないかなあ……っと。」
「いつなのよ？」

「一日後？あるいは一ヶ月後かしら？」
「一年後……かもしれない。」

「そんなに待ってたら、お兄ちゃんとカトレアは確実に結ばれちゃうでしょうがっ!!！」

「べ、別に元々両思い同士なんだし……問題は……」

「あるわっ！ポケエっ!!！」

「ごふっ!!？」

なぜ僕がッ!!？」

モンモンの隣に立っていたギーシュがシャスティルの怒りの鉄拳もとい八つ当たりの餌食になった。

「……取りに行くわよ。」

「ええっ!!？」

そ、それは……」

「精霊の涙はどこで手に入るのよ？」

「水の精霊様をお願いして体の一部を分けて貰いに……」

「簡単そうじゃない。」

「いやいやっ!!？」

精霊はとっても気が難しく、下手をすれば心を狂わされるのよっ!!？」

「……ふうん？」

それでも、行くしかないけどね。」

「……まあ、勝手にして頂戴。」

私は疲れたし、もう部屋に戻ってやすーい」

「誰が、休んで良いと言ったのかしら？」

「・・・着いていけ、と？」

「ご名答。」

モンモランシー家は代々、水の精霊との交渉役を勤めていたのでしよう？

手伝いなさい。」

「・・・いや、でも・・・それは数年前の話で・・・」

「あん？」

「なんでもないですハイ。」

シヤステイルのドスの利いた声と、今にも殺しにかかってきそうな据わった目を見て、有無を言わさずハイと答えるモンモン
哀れなモンモン。

惨めなモンモンである。

かわいそうなモンモン。

不憫なモンモンでもあった。

まあ、間違えて惚れ薬入りを渡したモンモンの責任だしね！

ということがある一方。エンデとカトレアはというと。

「はい、あーん。」

「え、エンデ・・・は、恥ずかしい・・・」

「いいから、口あけて。」

僕が食べさせてあげよう！..」

「・・・う、うん・・・あ、あーん・・・むぐもぐもぐ。」

「美味しい？」

「うん。」

美味しいけど・・・また新しい料理？」

「うん。」

チャーハンを作ってみました。」

「チャーはん？」

「そこそこポピュラーな食べ物かな？」

それより、はい、もう一口。」

「い、いいってば。」

自分で食べられるから。」

「だーめ。」

僕が食べさせてあげたいの。

カトレア、雛みたいで可愛いんだもの。

こんなカトレアを見れるのに止めるなんて・・・ありえないよ。

嫌じゃないならもっとカトレアの恥ずかしいところを見せて欲しい

な？」

「・・・あう・・・うううう。」

カトレアはエンデの甘甘アタックにノックアウト寸前である。

なおかつ、男女のラブラブは病弱な頃から夢見ていたカトレアの一種の憧れでもあり、実際に経験すると多幸福感が半端なく、今までに無い充足感とともにただただぼんやりとエンデにされるがままになっっているカトレアである。

「さて、次はどこへ行くかうか？」

「え、エンデ、そろそろ帰りましょう？」

「もう？」

まだ来てそこそこしか遊んで無いよ？」

「でも・・・」

「わかったよ。」

カトレアが帰りたいつて言うなら帰る。

シヤステイルたちのお土産を買って帰ろう?」

「え、ええ。」

このままされるがままだと危険と判断し、カトレアは帰る事を提案した。

カトレアとしては今の惚れ薬状態のエンデではなく、普通のエンデにこうして欲しいと少し残念に思いつつ。

普通のへたれなエンデも良いといえば良いのだが、やはりいささか物足りなくはある。

ゆえに例え惚れ薬の効果といえど、好きな男性にここまで迫られてはいささか分が悪い。とはいえ、エンデが自分のことを好きでなくても愛人としてでもいいから傍らかたわりと自然に思えるほどに好きな相手。

カトレアとしては既成事実を作っておくのも無難か。と、のぼせ上がったるくに働かない頭から、ちらりと黒い考えが沸き上がる。そのためにもこのまま最後まで言ってしまうてももちろん良いのだが、エンデが後から後悔するだろうと思うと自分の気持ちだけを先行できるはずが無い。

やはり始めてのそうした“コト”はエンデが正気るときに雰囲気を作つて。と考える乙女なカトレアであった。

今の自分がエンデに出来ること。

それはエンデのアタックに耐え切ること。

普段はこちら側からだというのに、何がどうなつてここまで皮肉な状況が生まれたのやら複雑な心境のカトレアであった。

「っ!?!?」

「えへへ、キスしちゃった。」

考えてるところに不意打ちの口付けをしてくるエンデ。

いたずらっ子のように無邪気にかラカラと笑ってこちらを見つめてくるエンデの頬は染まっており、きゅんと胸が締め付けられたのは致し方ないと言えるかもしれない。

「・・・早く行きましょう。」

「照れてる？」

「・・・うん。まあ。」

「やっぱり可愛いね。」

カトレアは。

仕草がもう・・・こう、グッと来るって言うか。」

「べ、別にそんなこと無いよ。」

「あるよ。」

少なくとも僕はそう感じるもの。

他の誰がなんといいっても、カトレアは可愛いです!!」

「・・・あつ。」

またもや頬を紅くして俯くカトレアは、まんま初心な生娘そのものである。

38 ページ目（後書き）

更新がまあ遅れました。

最近、大学から帰ったら昼寝。

昼寝して起きたら晩御飯を食べて就寝。

そんな感じの生活習慣で、なんかやる気が沸かなかつたというのが一番の理由。

もう一つはゲームと他の小説が面白すぎるのが悪いんだ！！

ゲームはティアーズトゥティアラ（PS3）とかグラディエータービギンズとか。

グラディエーターをやってみて、もう一つほどオリジナル小説を書きたくなったのは秘密・・・になってないけどね。

他に二つもあるのに書いてらん無いというのが正直なところ。

この小説が完結したら書こうかなあとか思っていたり。

余談ですが、妹の友達からインコを貰ったということで、最近インコが我が家にやってきた。

とても可愛いです。

39 ページ目（前書き）

後半、うんちくになってしまったww
ちなみに今回地味に、この作品の核心を付く一行が書かれていたり
もする。

おはようございます。こんにちは。こんばんは。初めての人は始めてまして。

僕たちは現在、ラグドリアン湖に来てます。いや、正確にはまだ着いてないですが。

向かってる途中とでも申しましょるか？

シヤステイルが言うには惚れ薬の解毒薬の原材料である、『精霊の涙』を手に入れにラグドリアン湖に行くとか。

危ないので僕も付いていこうと思っただけです。

もちろん、アンリエッタが水浴びしてそこをウェールズが覗いたとかなんとかでひっそりと有名なラグドリアン湖にて、カトレアと真つ裸になって一緒に泳ごうなんて気はさらさら無い。

というか、勝手に水浴びでもした日には精霊に心を狂わされそうだが許可を取れば平気だろうか？

僕の神様から貰った回復力は精神的なものにも効くのだろうか？とちよっと思っても見たり。

「シヤステイル、ところで誰が惚れ薬なんてものを飲んだわけ？」

「・・・お兄ちゃんでしょうが。というか惚れ薬って飲んだって言う自覚が無いのが一番の厄介どころよね。」

「え？なにその、新事実。というか、飲んでないよ。飲んでたとしても惚れ薬という名の何かだよ。」

「惚れ薬と名が付いたらそれはもうそのものでしょうがっ！ー！というか、何かって何よっ！？」

「カトレアのぼにゅーー」

「え、エンデエっ！ー！そこから先は言っちゃダメっ！ー！」

「冗談だよ。カトレア。」

“まだ”出ないものね。出たら真っ先に飲んでいい？もしくは唾液

でも可。」

「お、お兄ちゃんがカトレアを好きすぎて変態に……」

「こ、これから先も出ません!!」

「え?」

それってもしかして、僕の子供は産みたくない!!僕とのえっちことはしたくない!!僕のがきらい!!僕は死ぬしかない?

「こ、ここでも新事実が……というか、きらいだったのになぜ僕と一緒にいたの?僕とのことは遊びっ!?

っはっ!?!まさか僕の財産が目的!?!カトレアってそんな悪女だったのかっ!?!

というか、死のう。」

鍊金で縄を作り、馬車から飛び降りて適当な木を探す。

僕1人で舞い上がって僕がバカみたいじゃないか。とにかく死のう。

「ちょ、ちよつと何を言ってるのっ!?!

え、エンデー!?!」

「か、かとれあ……嫌いな相手でもいちいち止めようとするなんてなんていい娘ッ子なんだ。

どうかお幸せに。僕はもちろん死ぬが。

カトレアの隣に他の男がいるなんてこと、僕にはとてもじゃないが耐えられない。

さようなら。カトレア。

どうか、ささやかながらに君を愛した男が居た……と心の片隅に置いておいて貰えると嬉しい。」

「何を意味不明なことを言ってるのっ!?!

さ、さっきのアレは恥ずかしかったからつい言っちゃっただけで……

・その・・・だ、だいー！ー大好きだからっ！！

死んじゃヤダっ！！お願い！！」

「か、カトレア・・・本当に？」

「ほ、本当よ。その・・・こんなこと嘘でも言うわけ無いじゃない。その・・・私ももし貴方が死んだら生きていける気がしないし・・・」

「

「うへへえ。」

「うわ、お兄ちゃんキモ。

そのデレデレ顔がキモイ！！けどそんなお兄ちゃんも可愛いと思っ
てしまう私が私は憎いっ！！」

「そしてそう言いながら身を悶えさせるシヤスこそが可愛いと私は
思うー！！というか恋愛という感情に乏しい韻竜の私ですら羨ましく
感じる甘ったるさ。私も良い番つかいがいればなあ・・・」

「か、可憐だ。」

「ちよつとっ！ギーシュ。

あんた・・・まだ懲りてないのね。エンデのデレデレ顔を見て倒錯
してんじゃないわよっ！！」

「あ、いや、あの、モンモン！？こ、これは違っただっ！！浮気で
はないぞー！！

ふつくしい物に惹かれるは男の性とかねー！ごふうっ！？」

「だから、アンタまで私をモンモンと呼ぶんじゃない！！」

「何このカオス？」

『ケケケ、あいも変わらず騒がしくも面白おかしい連中だあね。と
いうか娘ツ子と相棒の普段もこんな感じだぜ？』

「なにそれこわい。」

「ふ、ふざけないでよ！それって私と犬の普段の“しつけ”が目の
前で繰り広げられてる痴話喧嘩みたいだって言うわけ！？」

『わかってんじゃないか。しつけて言葉で飾るところが特にな。

どうせアルビオンあたりで結構相棒に惚れー！」

「・・・この剣、粉々に吹き飛ばしてやるわ。」

犬、少し離れてなさい。いや、やっぱりいいわ。一緒に吹き飛ばしてあげる！」

「なぜにそんなご無体なっ!?!」

「やかましいわ。あんたもエーデ姉様のあの顔見て頬を染めてたでしょうが。同罪よ。」

「どういった罪でっ!?!というか毎度のごとく理不尽すぎる!?!」

「いいから吹っ飛んどきなさい。さっぱりするから。」

「何がっ!?!」

「頭が。」

「首の上がさっぱりってことかっ!?!?てか、冗談だよな?」

「今までぶっ飛ばすと言ってぶっ飛ばさなかったことが一度でもあったかしら?」

「・・・残念なことにネエでございます、ご主人様。」

「物分りの良い犬で私も助かるわ。ご褒美と言ってはなんだけど、さらにさっぱりとしてあげましょう。」

「・・・嬉しい気遣いで。嬉しすぎて涙が出てくらあ。」

「・・・いっつもいっつも・・・綺麗な人を見るたびにニヤニヤしてんじゃないわよっ!?!このバカ犬ウウウウウウウウウウウウっ!」

カトレアを抱きしめつつ、視界の端にサイトが空を舞っているのを捉えて僕は思った。

『嗚呼、次はヒスカの背に乗せてもらって空のドライブとしゃれこもう』と。

ラグドリアン湖。

「ほら、とつとと呼び出して。」

「き、貴族使いの荒いやつね。というかアンタ達くらいよ。貴族を貴族として扱わないの。」

「やかましいわよ。とつととやる。」

「・・・はあ。はいはい。わかってますよ。」

目の前の湖を見て、呼び出そうとしてるモンモンだがハタとその手が止まった。

「変ね？」

「何よ？早くしなさいよ。」

「え、ええ、それは分かっているのだけど・・・ここまで水位があつたかしら？」

岸边はもう少し向こうだったはずなんだけど・・・ほら、あれ。家が少し浸水してる。」

「本当だ。でも、どうでも良いわ。早くお兄ちゃんを戻すことが先決なの。とつととしなさい。」

「そ、それはちょっと酷いわね。まあ、私たちに何とかできることでもないけどさ。」

「どうも精霊様は怒ってるみたいね。」

「そんなこと分かるの？」

「私はこれでも代々水の精霊様との交渉役を務めてきた由緒ある水メイジの子孫よ？それくらい分かって当然よ。」

威張ってるところ悪いけど、同じくモンモランシー家の血を引いてるはずの僕にはそんなこと分からないんだけども。

正直、これを見ても特別思うところは無い。

状況的にまあ何かあったんだろうと人並み程度の予測しか出来ないのは血が薄いとかそういう理由なのだろうか？

どうでもいいけどね。カトレアを愛すことに支障は無い。

というかカトレアを愛し、一緒に居られれば何があるうと概ねどうでも良い。

このことはカトレアに内緒。

“カトレアに嫌われちゃうから”ね。

そんな話もさせておき。

モンモンは腰に下げていた袋から一匹のカエルを取り出した。

前進黄色い体色のところどころに黒い斑点。

ふむふむ、キイロヤドクガエル（キイロフキヤガエル）かな？

確か最大全長が5センチで大半が5センチにも満たない小型のカエルが多いヤドクガエルの仲間としては大き目の種類・・・というか最大種である。確か地球ではベネズエラとかコロンビアあたりに生息してたと思うんだが・・・この世界でのコロンビアにあたる地域ってどこなんだろう？

なんとなく遠い場所から来たということとは分かる気がする。そんな場所からわざわざトリスタニアまで召喚されて、ご苦労様です。

というか、キイロフキヤガエルって地球上でもっとも毒性の強い生き物と呼ばれるほどに強い毒性を持つ生き物なんだが・・・そんなのを素手で持つても大丈夫なのだろうか？

他のヤドクガエルの20倍の毒素を持つとか言われるほどなので、コントラクトサーヴァントをしたときに死ななかつたモンモンはもしかしたら人間じゃないのかも知れない。

それともカエル側でコントロールしていたのかな？

ちなみにであるがカエルの持つ毒は医薬品の元として結構注目されていたりする。

俗に言うガマの油。もとい日本でも名前だけならばとりあえず知っているであろうヒキガエルから取れる毒。ブフォトキシンと呼ばれるものは強心剤のヒントとなった。ヤドクガエルの毒なんかも強力な鎮痛剤の元となったりと意外と自然と言うのは侮れないものなのである。

ちなみにであるがヤドクガエルの毒は現地で日ごろ捕食している昆虫に含まれる毒を体内に溜め込んでいるものと分かっており、人工的に繁殖させたヤドクガエルには毒性は検知されない。

なおかつ、鮮やかな種類が多いので実はその名前と毒々しいとまで言える位のカラーリングゆえにヤドクガエル専門の愛好家居るくらいである。

宝石に例えられるほどの色鮮やかさと言えば見たことが無い人でもある程度の凄さは分かると思う。

まあヤドクガエルって一番安いものでも一匹5000円くらいはするし、体が小さいから小さめの餌を用意する手間のせいで個人的には飼育しづらい種類なんだけどね。

しかも体が小さいから“持ち”が悪い。

他の両生類と比べて断食に弱いのである。

普通の両生類ならば暑い時期以外（変温動物のために気温によって新陳代謝速度が変わる）は1週間に一回の餌やりでも十二分に持つのだが、ヤドクガエルの場合は2、3日に一回はやらないと痩せていくと言う。しかもできれば毎日やるのが理想だそう。

と、カエルの話で脱線もほどほどに。

「ひ、ひいつ！か、かえるっ！？」

「あらあら？可愛い子ね？」

「なんだよ？その毒々しい・・・見るからに毒ガエルっぽいカエル

は。警戒色バリバリじゃねえか。」

姉妹でここまで変わるものか?と思えるほどに差のある反応をするルイズとカトレア。ついでにサト。

どちらがどうだとかは言うまでもあるまい。

さすが僕の妻!とは言っておかなくてはなるまい。

「言わなくてもいいわよ!」

「シャステイル?最近、イライラしてない?」

「だ、誰のせいだと思ってるの?!?だれの!」

「文脈的に雰囲気的に僕だというのは察っせるのだけど・・・納得がいかない。」

「それは私のセリフでしょ?!?」

モンモンが針で指を刺し、そのから一滴の血がキイロヤドクガエルに垂れる。

「いいこと?ロビン。貴方達の古い友達と、連絡がとりたいの。お願い。」

モンモンはすぐに魔法で指先を治す。

ロビンとはカエルらしくない名前である。

もう少しカエルっぽい名前を付けてあげればいいのに。

余談だが、僕の前世のときに買っていたモリアオガエルというカエルの名前はオタマジャクシから育てていて、カエルになって上陸した順に名前をつけていた。

最初に上陸したのをドイツ語で1の意味を持つ『アインツ: Eins』と名づけ、二番目をそのまま2の意味を持つ『ツヴァイ: Zwei』にした。

数字をふだん知らない外国語に変換するだけで格好よく聞こえる不思議。

我ながらお気に入りの名前である。

モンモンのカエルはキイロヤドクガエルなのでキー助はどうだろうか？

なんかジブリ映画に出てきそうな名前だ。

ということもまた、さておき。

「これで相手が私を覚えていてくれれば対応してくれるはず。」

キイロヤドクガエル改め、ロビンは水の中にちゃぽんと入ってそのままスイスイと泳いでいった。

大きな魚に捕食されたりしないのかなあ？と結構本気で心配しつつ。というかあのカエル地上棲なのにやたらと上手く泳いでいく。ルーンの手だろうか？

カエルには大まかに分けて地上棲、樹上棲、水棲、半水棲とあり、生息域によって生活様式がガラリと変わる。

地上棲は地中に潜って待ち伏せ方の狩りをしたり、歩き回ってあまり飛び跳ねない種のことを言う。ヒキガエルやヤドクガエル、ツノガエルといった種類の仲間がここに入る。

ちなみにツノガエルは昆虫ではなく熱帯魚用の餌やカメの餌なども貪欲に食べると言うカエルなので、初心者向けのカエルでもある。

樹上棲は文字通り木の上での生活を中心とするグループで、アマガエルやモリアオガエルといった種類が居る。（ちなみに地上棲、樹上棲ともに水辺の近くにはいても、水辺にいるわけではない種はお腹から水分を吸収して蓄えるという特殊な器官を持つ。）

種類を問わずカエルの表皮にはカエル自身を雑菌や天敵から守るための毒が含まれるが、アマガエルは意外と比較的強い部類に入り、アマガエルを触った手で目をこすると重度の結膜炎を起こしたりするので注意が必要。飼う場合はオタマジャクシから育てると人工飼

料に餌付け易く、昆虫要らずとなる場合が多い。
つぎに水棲は生涯水から出ないタイプ。とはいえ肺呼吸と皮膚呼吸であることには変わりないので息継ぎが出来ないと死んでしまう。匂いと食感で餌を認識するのが多く、また餌い易い種類も多い。
半水棲は水辺付近でのみ生息するタイプ。お腹に水を溜める器官を持たない、もしくはあまり蓄えられない種類が多い。チヨウセンスズガエルやウキガエルといったカエルが人工飼料に餌付け易いため、
楽。

て、あれ？

なんでこんなカエルのことについて考えてるんだらうか？
というか後半、餌い易いカエルに付いてだったし。

あるえ〜？

「エンデ・・・きてくれたみたい。」

カトレアの言つとおり、目の前には水の精霊が姿を現したのだった。

40ページ目（前書き）

とりあえずこの作品を終わらせよう！ということからこつちの更新を頑張ろうと思います。

ちなみに予定では60ページ目くらいで終わる？のかな。

今回の主人公は覚醒、ヤンデレ素養！って感じの話。キリが良いので短いけど切りました。主人公は今更ですけどヤンデレです。ちなみに好きすぎて殺しちゃう！とかいうタイプではない、病むほどに愛しいという感じのヤンデレ？純愛的な？

今回は惚れ薬の影響で殺し殺しいっ！みたいなヤンデレ化してます。惚れ薬で行き過ぎてるだけなのでご安心を。

40ページ目

『何用だ？単なるものよ。』

水の精霊が体を震わせて発声する。

「これでようやくお兄ちゃんを戻すアテが出来た・・・本当に長かつたわ。特に目の前でイチヤイチヤされるのがまた・・・」

「戻す？」

僕を？何のこと？」

「だから言ってるでしょうが。お兄ちゃんだって！」

「いや、だから言ってるでしょうが。惚れ薬なんて飲んで無いつて。」

「

「・・・自覚が無いってのが一番の脅威よね。惚れ薬って。はあ、まあいいや。モンモン。」

早く貰って頂戴。」

「上から目線つてのがイラ付くわね。まあ私のせいだから構わないけど、本来なら打ち首モノよ？」

ええと・・・水の精霊様、貴方の体の体の一部をいただけないでしょうか？

少量で構わないのです。」

『断る。単なるものよ。』

「はい。無理。帰りましょ。」

「あきらめるのが早いわっ！...！」

「ひでぶっ！...？」

どこからともなく取り出したハリセンでモンモンを引っぱたくヒス力。

ハリセンでのツッコミか。

ふむ。検討しておこう。

「なんでもしますので、そこをどうにかできないでしょうか？」

『・・・断る。人間は信用できぬ。』

「そこをなんとかっ！！」

見てられなかったのかサイトも説得に加わると途端に水の精霊は顔色を変えた。

いや、顔色なんて分からないけど。

モンモンの姿かたちはしてるとはいえ水の彫像？って感じののっぺらぼうだし。

そこから先は概ね本来の歴史と同じ展開であったので、略すとしてよ

結論から言えば、『私の体を少しづつ燃やし消す敵をどうにかしろ』
と言うことである。

ううむ？

これって結局誰がなんだったんだっけ？

まあいいや。とりあえず話して解決できたという記憶だけはあるし。

「よし、きたか。」

サイトが身を潜めながらそう呟いた。前方には二つの人影。

こら、もし聞こえたらどうすんのさ。

ちなみに茂みにはサイト、僕、シャステイルの3人が潜んでいる。

とりあえず戦闘メンバーをそろえたわけだ。

ヒスカ、ギーシュ、エルザの三人は戦えないカトレア達の護衛兼お留守番。

危ないのでちょっと離れたところに居てもらっている。

「……。」

手をあげて、GOのサインを出す。

するとサイトがまずは飛び出し、僕とシャスティルは左右から回り込んで相手を囲む。

作戦は簡単。

サイトがデルフを構えながら囲をして、そこを僕とシャスティルが左右から攻める。

出来れば何の目的で攻撃してきたのかを聞きたいので、殺すのは却下。生け捕りにしたいのでサイトよりも力量が上で、手加減をし易い僕とシャスティルの攻撃が本命だ。

理由を聞いて根源を断たなければ同じことが繰り返されかねない。結構、重要である。

「っ!？」

「ウインドニードルっ!」

大きいほうは虚をとられていたが、小さいほうは実戦経験が豊富なのかすぐに反応する。

が、魔法はデルフに吸い込まれる。

それを見て少しの身じろぎをするが瞬時に魔法の目標を地面に向け、巻き上げた地面の土を介してサイトの進行を妨害。なかなか良い判断。本来なら実戦慣れした兵士ですら虚をつけるデルフの能力にくさま反応、対応策を練るとはエクセレント。敵ながら天晴れである。

ここで大きいほうが反応をして、ファイアボールを撃ち放つ。

大きいほうもすぐに態勢を立て直して詠唱をしたことから多少の実戦経験はあるようである。

大きいほうも小さいほうの対策を見て地面を巻き込むように撃って

ることから、こちらも臨機応変に対応する能力が高い。

なかなかの強敵だ。
が、敵ではない。

僕としてはとつとと終わらせて、カトレアと早く抱きしめあいたい。
キスしたい。さあとつとと終わらせるぞ!!

小さいほうの背後に回り、手を捻りあげてから押し倒す。そのまま
首にナイフを当てる。

「動くな。喋るな。聞いたことにのみ答える。でなければ殺す。」

まったく、こいつらがいなければ今頃ラグドリアン湖でカトレアと
優雅な水辺デートとしゃれ込むところだったのに。

片方が生きてれば良いし・・・こいつは殺しちゃっても構わないか
な？

痛いように殺してあげるのもまた良し。

僕たちのデートを妨害するとは、万死に値する。かもしれない。

いや、きつとするよ!!

概ね万死に値するよ!!多分!!

悶死にも値するよ!!

「つと、やばいやばい。殺しちゃだめだよ。カトレアに嫌われち
やう。」

殺すにしても正当防衛とかそんな感じじゃないとね。

苦しめて殺すとかしたらカトレアに引かれそうだし。

カトレアをありがたく思っよ。小さいの。

じゃなければ今、ここで殺してたんだから。

「でもばれない殺しは殺しじゃないよね？
元から居ないことになるだけだし。」

結果的に死んだことが誰にも分からなければ？
結果的に死んだことに気づかなければ？

それは元々死んでいる、ないしは居なかった人間と“結果的には”
変わらない。

残された家族が喚けば、それも殺せば良い。

そうすれば元々誰も死んだ何かが居たということは気づかない。分
からない。

“観測されなければ無いものと同じ”である。

こういう哲学的な話がどつかであったような気がするけど・・・ま
あいいや。

「でも、シャスティルもサイトもいるし、今回は殺さないであげる。
良かったね？というわけでラグドリアン湖を襲った理由を教えてください
れる？」

殺すところを見られたら、見られた人間を殺せばいいだけなんだけ
どシャスティルは殺せないし、サイトを殺せばルイズが悲しむ。ル
イズが悲しむとカトレアも悲しむ。結果、無理。
しょうがないよね。

「あ、あなたは・・・エンデ？」

「ん？そういうアンタは・・・ええと？タバサ？なんでタバサが僕
とカトレアのデートを邪魔したの？」

「え？」

「どうして？」

「あの？」

「どうして?」

「ええと・・・」

「ねえ、どうして?」

「エ、エンデ、怖い。」

「答えてよ。ねえ。」

ただ聞いているだけなのに、なんで泣きそうになってるの?泣きたいのはこっちなのに。カトレアとのラグドリアン湖デート。略してドドリアさん(?)があ・・・

「答えようによつてはタバサでもちよつとおしおきしちゃうかー

ーあだあつ!?!」

「お兄ちゃんはなにやってんの?!?」

スパコンとシャスティルのハリセンで引っぱたかれる僕。いったあつ!?!?

こ、こんなに痛かったの?!?これ!?

つて、さっきの紙製のハリセンと違って、シャスティル、それ魔法で作った砂鉄のハリセン?!?

そんなのぶつたたかれたら下手すりゃ死んじゃうよ!?

「お兄ちゃんが幼女を苛めてるからでしょ?!?」

「い、苛めてつて!?!」

人聞きのわるいつ!!

普通にたずねてた・・・だけ・・・なのかな?」

あるえ?

思い返して見ると結構アレじゃない?

「なるほど。これが噂に聞く、貴方に夢中になる!ということ?」
「違うわよっ!!!」

スパコーン!!

「いつだあっ!?!」

「あんな据わった目して迫ったら誰だっって怖いでしょう!?!」
「え?」

そ、それってカトレアもっ!?!

カトレアも怖がるのかなっ!?!」

「ま、またカトレアカトレアカトレアと・・・いい加減にしなさい
よおっ!!!」

「!はあっ!?!」

砂鉄製のずっしり重いハリセンがアッパーカット気味に僕にクリーンヒットする。
痛いッ!?!

「お兄ちゃんのおほおおおおおおおおおおおっ!?!ふうええええええええんっ!!!」

「がふっ!?!」

さらにもう一発が決まり僕の意識が暗転する中、シャスティルの泣き声が聞こえてきたのは気のせいだったのかもしれない。

その後の展開はご想像の通りである。
と、行きたいところだったのだが。

そう、記憶は“残っている”のである。
僕は大いに狼狽した。

40ページ目(後書き)

ちなみに今までのお話でも地味に主人公のヤンデレパワーは常に発揮されています。

外伝 ウェールズとアンリエッタ（前書き）

今はアンリエッタたちどうしてるの？という話です。

四巻の最後のエピソードと混ぜ合わせてます。本来ならば三巻終わりのワルドとのタルブ村付近での再戦話に突入。となるはずなのですが、その前にこれを書きたくなったのです。外伝という括りですので、時系列的にはこのもう少しあとの話。

ほかのファンフィクションではボロクソに言われてるんですけど、アンリエッタってゼロ魔では一番不幸な子なので個人的には幸せになってもらいたいですよね。

ウェールズが生きていたら？原作でウェールズが死んだ後のアンリエッタの気持ちやアンリエッタの身になったつもりで書きました。

外伝 ウェールズとアンリエッタ

ここは王宮。

大きな天蓋付きベッドで裸に近い様相で眠るアンリエッタ。

アンリエッタは今、幸せを感じていた。

アンリエッタは自分の親友。そしてその使い魔から自身の思い人であるウェールズが致命傷を受けて死んだらうということを知った。悲嘆に暮れ、慟哭し、ただただ何もする気の無いまま、気も入らぬままに王女としての責務を果たしていたそんなある日のこと。

寝室で休んでいると、背後から人の気配。そして。

「こんにちは。アンリエッタ王女殿下。」

「なっ!？」

つい声が出てしまったのは無理も無い。

この国の中で一番厳重な警備をかいくぐってここまでくるとはありえないからだ。

賊っ!？

私は何をされるのか!？

メイド服に扮装している見目麗しき少女と、隣には黒いローブを深くに被った・・・男性?が佇んでいる。

一見ミスマツチに過ぎる組み合わせだが、メイドがスパイでここまで賊を手引きしたということも考えられる。

一気に冷めていく体の熱がこれを現実だとイヤでも分からせる。

その恐怖を押さえ込んで、アンリエッタは人を呼ぼうとするが声が出ない。

いや、出ないのではない。出ているけど音として認識できない。

いや、音が相殺されている。魔法、サイレンスで。

速読詠唱？

いや、もとから唱えてあったのだろうか！？

今は杖も無く、とにかく逃げるしかない。そう思ってアンリエッタはドアへ向かうがドアノブが回せない。

ロックをかけられてるようだ。

「では、ウェールズ皇太子殿。後はお任せします。」

という少女の声は聞こえなかったが、次に耳に入る声を聞いてアンリエッタは耳を疑った。

どこかで・・・いや、聞き違えるはずがない。

自身の思い人と瓜二つの声。

その声が少女の背後に佇む黒いローブを被った人から聞こえる。

それだけではない。

内容、震えてる。。。泣いている？

その仕草を見て、不思議としっくりきた。

彼は。。。

彼は。。。

「ツェールズ様のですかっ！？」

少女によるサイレンスが解かれたらしいことも気づかずに私は、黒ローブの人へと駆け寄る。

フードを手にとってそれを剥くと、そこには。

少し居心地が悪そうにはにかむウェールズ様の顔が現れた。

「・・・死に損なった・・・名誉もなにも無いただのウェールズさ。幻滅したかい？」

嗚呼、ウェールズ様。

そんなこと・・・そんなことありえませぬっ！！

今の今までどれほどー

どれほどーこのような都合の良い展開を望んだことか！

御伽噺にあるような、実は生きていたということ。

死んだと聞かされても、どこかで生きていると！

死んだことをダダをこねる子供のように否定して、否定し続けて！！

それはありえないと冷静な部分の私が囁くのを無視しつつけて。

枕を濡らし、ただひたすら王女としての責務を果たして気を紛らわせる毎日。

寝ても覚めてもただただ死んだであろう、ウエルズ様のことを考えるばかり。

何ゆえ、何ゆえに私を放って名誉などを大切にされたのか！？

私は名誉にも劣る女だったのかっ！？

ただただ、自身の価値の低さに嘆くばかり。

自分ももう少し、もう少しだけでも魅力的であれば。

死にたくない。

名誉を失つても彼女と一緒にいたい。

そう思わせられることのできるだけの器量があれば。

ウエルズ様の戦死の報を聞いて以来、そう自分を責めなかった日

は一日たりともありません。

後悔しなかった日はありません。

そのウエルズ様がここにいて、今触れ合える距離にある。

夢だろうか？

否、夢でも良い。

私はもう自身を責め、瞼を泣き腫らすだけの日々には耐えられない。目の前のウエルズ様が夢の産物であろうとも、たとえ他国のなんらかの策略であっても、王族などとは名ばかりの弱いアンリエッタにとっては継りつく他ないのです。

ウエルズ様のように誇りなど何も無い私ですが、貴方はそれでも

私を好きで居てくれるでしょうか？

いえ、そんな弱い私だからこそ貴方は私を捨てたのですね？
ですが、私は捨てられていたとしてもそれでも、
貴方がどう思っていたとしても。

「い、いいえ……いいえっ！！」

し、死んで……死んでいなかった……それだけで……それだ
けで……アンリエッタは幸せです。

うえ、ウエルズさま……ウエルズさまああああああああ
あああああああ。」

泣き崩れる私を優しく抱きしめ、頭をなでてくださるウエルズ様。
嗚呼、これが幸せなのだとはほんやりと思っただけです。

あれから、2ヶ月の月日が経つ。

ウエルズが生きていることがばれるわけにもいかず。

アンリエッタとは滅多に会えないが、それでも王族であったときよ
りは遥かに多く会い、話している2人にとって。

少なからず幸福な日々を満喫していた。

そんなある日のことである。

すっかり夜の帳とじが落ちた頃。

アンリエッタの寝室に尋ねる物がやってきた。

今はすでに就寝する時刻を過ぎている。

そんな時間にアンリエッタへ話をするのは非常に無礼なことであり、
家臣はありえない。

ありえたとしても緊急事態である。

ウエールズがたずねてくるのはありえない。

ウエールズはアンリエッタに比べ、ずっと賢い。

そのウエールズがたとえ緊急事態とはいえ、不用意に寝室に尋ねてくるとは思えないからである。

仮に何かあれば無線機箱　　何時の日かに来た協力者らしき美しい王女と評判の私ですら嫉妬するほどに可愛らしいメイドの少女から貰ったリーで連絡を取ってからのはず。

ウエールズが生きていたことよって、今まで以上に王女としての次代の王としての勉強に力を入れてきたアンリエッタにとってはそれを理解し、緊急事態であろうことを自然と受け止め、王としての顔を作り、話を聞く準備を進める。

国のトップたるもの下のものに自身の心の内をさらけ出すわけには行かない。

「どうぞ。」

軽く身だしなみも整えた後、何を聞いても驚かないという気概を持つて入ってきてても良い旨を伝える。

そして入ってきた人間は驚くことにウエールズで、その格好は多少貧相であれ、正装に近いものだった。

なぜそんな格好を？ばれるのは不味い。そのはずで、メイドの少女もウエールズ様もばれないことをまず第一に。そういう方針のはずだ。

我慢できなくて会いに来たのかしら？ともとのポヤポヤ具合が首をもたげたが、そこは例え王族といえど16の恋する乙女。

ウエールズの性格くらいは理解しているつもりである。

女としては非常に残念でこの上ないことだが、ウエールズの性格的に自身の欲求を押さえ込むくらいは出来るはず。会いたくなっても王宮で動くのは不味いと理解してるウエールズがそのような衝動的な行動をすることは十中八九ありえない。

それらの多少の不審を心に留め、アンリエッタはとりあえず用件を聞くことにした。

「どうかされたのですか？ ウェールズ様？」

「アンリエッタ信じられないかもしれないが、僕だ・・・むっ？」

するとウェールズ？ はなにやら不審げな目をアンリエッタに向ける。そしてアンリエッタもここで違和感がより強くなる。ここでアンリエッタはカマをかけてみることにした。

「い、ごめんなさい！」

あの、ウェールズ様ですよ？ “死んだはず”の。」

「あ、ああ。そうだ。信じられないかもしれないが、アルビオンで死んだのは僕の影武者さ。」

アンリエッタは混乱した。が、それを表情に出さず、冷静に考えることにする。

ウェールズ様が“実は”生きていて驚いたという演技をしながら。これでも小さな頃は演劇の女優さんが夢だったのだ。このくらいの演技はワケが無い。

さて、どちらかが偽者であることは間違いない。それは分かる。

そして今まで過ごしてきたウェールズ様が本物である。という証拠は極論的には無い。

だが、目の前が本物であるという証拠も無い。そして目の前のウェールズは“影武者”が死んでいる。と思っている。

仮に今まで話していたウェールズが影武者だとしてもその影武者が生きていることを、少なくとも目の前のウェールズは知らない。そういうことであろう。

「ウエルズ様・・・失礼ですが・・・信じられませぬ。」

とにかく目の前の彼の目的を聞いてみることにしよう。

今のままでは情報が少なすぎてどうにも判断が出来ない。

1人の乙女としては今まで会っていたウエルズ様が偽者であったとは思いたくは無い。

「・・・僕を信じられないのかい？アンリエッタ？」

「っ！？」

悲しそうに顔を伏せるウエルズ。

それを見て息を呑むアンリエッタだが。

「・・・どうしてこちらにいらっしやったのですか？」

ここで揺さぶられるわけには行かない。

衝動的にウエルズに駆け寄りそうになったが、それをなんとか堪える。

情に流されては王は務まらない。

それをなんとか頭の片隅に引っ張り出して、ウエルズ？との話を続ける。

「レコン・キスタからアルビオンを取り戻す。そのために君の力が必要なんだ・・・僕にとっての女神であり、戦を勝利に導く“聖女”の力が。」

「・・・わ、私にそのような力ありません。」

「違う！」

君が僕の隣にいてくれるだけで、僕は強くなれる！！

だから・・・頼むっ！！

「一緒に来てくれないか!？」
「……うえ、ウエルズ様。」

強く抱きしめられるアンリエッタ。
甘い言葉、そして力強く求められる。
女冥利に尽きるというものであろう。

アンリエッタは辛うじて保っていた自制を徐々に失っていく。
本物のウエルズであればその名誉を、建前を重視する良くも悪くも貴族らしい彼が減多に言わないであろう甘い言葉にアンリエッタは落ちそうになる。

そのまま顔を近づけあう二人。
キスをするかどうかの距離で。

「いやですっ!」
「っ!？」

アンリエッタがウエルズを突き飛ばした。
ウエルズはしりもちをつく。
少し驚いているが、ウエルズは疑問を口にした。

「ど、どうしてなんだいっ!？」
「私の知っているウエルズ様は……ウエルズ様はもっと気高く、美しい方です。」

貴方ではありません。」
「そ、それは……死を間際にして君への愛を……」
「黙りなさいっ!
ウエルズ様のお声を使う賊がっ!!--その声で軽々しく愛を語るなっ!!--」

もしかしたら彼の言うとおりかもしれない。

今のように弱い彼もまた愛しい。

そう感じる事が出来る。

でも、違う。

“これ”はウエールズじゃない。

分かっているはずだ。

死を前にして惚れた女性を捨てる事が出来るほどに気高い彼を。

誰が語れようか？

死を前にして愛を？

ふざけるな。

たとえ思っていたとしても、私を求めてくれたとしても。

悲しいことに彼は意地を、名誉を取るくらいには大ばか者なのだ。

そんな彼がそんな“賢い”生き方を。考え方を出来るならば私は苦

勞しない！！

影武者？

まさかっ！！

今まで出会っていたウエールズ様は本物だっ！！

私が好きなの、私が惚れていたウエールズ様だ。

さらに言えば私の知る限り、彼は誰よりも王族らしい王族。

どこに戦力を持っているのかは知らないけれど、アルビオン落ちた

今、彼に持てる軍は無い。

レコンキスタから国を取り戻す術があるはずが無い。

あつたとしても戦火飛び散る今時期に戦えば飢餓で多くの民が死ん

でいく。

あの彼が国民を二の次にするはずがないじゃないか。

「残念だけれど・・・ウエールズ様はそんな軽い男ではないの。

男を磨いて出直してらっしゃい。」

杖を突きつけてそういつてやる。

「そうか。残念だ。」

目の前の偽者はニヤリと笑うと、スリープクラウドを唱える。けれど私の方が早い。

水の槍が偽者の胸を貫くが、そこから血は出なかった。そして詠唱も止まらない。

「スキルニルっ!？」

「・・・あぐ・・・うえ・・・ず様・・・。」

私は気を失った。

目が覚めると、そこは街道だった。馬車の中のようにである。

「どうだい？お姫様？」

目の前には見知らぬ男達。

視線が色を持っていて不快、怖いがそんなところをこのような賊に見せるつもりは無い。

そしてさっきの偽者は壊れたのだろうか？

「無礼ですよ。」

縄を解きなさい。」

「といつて解くとても?。」

「・・・でしょうね。」

目的はなんですか？」

「さてね。」

お偉いさんの考えてることなんか俺たちにわかるか。」

お偉いさん・・・となると少なくとも貴族以上の身分を持つ人間が彼等に依頼した。というところですか？

まあ平民がそのような大それたことをしようとするはずも理由もありませんね。」

「さすが姫様・・・ってところか？」

こんな状況でも気丈に振舞うとは、やるじゃないの。ガハハハ。」
「不愉快です。」

今すぐにその臭い口を閉じなさい。」

「あん？」

「あぐつ！？」

男は私の言葉に苛立ったのか、殴りかかってくる。

「下手に出てればいい気になりやがってよ？」

あんま調子に乗るとひん剥いちまってもかまわないんだぜ？
てか、それをするために起きるまで待つてただけだな。」

「っ！？」

「そうそう、そのツラを見せてくれねえとっ！！」

そういつて私のスカートをビリビリに破き始める男。

周りにも4人ほどの男達がいやらしい目で私の体を見る。

「良い足してんじゃないの！」

さて、起きるまでわざわざ待つててやったんだから悲鳴まがいのあ

えぎ声をたつぷり聞かせてくれよ。たく、お姫様を無理やりとか、俺たちはついてるぜ!!」

「や、やめなさいっ!!」

貴方達が何をしようとしているのか分かってるのですかっ!?!?
打ち首に・・・っあっ!?!」

また殴られる。

男は喜悦に富んだ表情を浮かべて得意げに語る。

「オマエさん、意識を保ってられるとでも?

詳しくはしらねえが、オマエさんの国がゲルマニアと組まれると困るらしいんだわ。

となればだ。どうするか分かるな?

殺すか、取り込むか、操るか。

でもって、俺たちのお偉い依頼主さんは操ることにしたってわけよ!心を狂わせて傀儡にされるそつだぜ?

で、俺たちは護送の任務を受けたわけだ。

報酬は金とオマエさんの体。

てなわけで頂くわけよ。」

「くっ!

や、やめなさいっ!!」

「いやだよっ!!」

「私の始めては・・・うえ、ウエールズ様のもー」

せつかくウエールズ様と会えたというのに、私は汚されてしまうのだろうか?

そんなのはイヤだっ!!」

「残念だっ たなっ!

オマエさんのは俺たちが美味しくいただぶろっ!?!」

目の前で1人の男の体が倒れこんだ。
あれ？

「ほう、ウエルズ様。なかなかやりますね？」

「君ほどじゃないよ。」

それよりも・・・彼等は皆殺しでかまわないのだよね？

私の・・・愛しい愛しいアンリエッタを傷物にしていた場合、僕のこの怒りはどこへ向ければいいのだろうか？

彼等に向けるしかあるまい？

とてもじゃないが、加減できる気がしない。」

「アンリエッタ王女殿下は・・・大丈夫・・・みたいですよ？」

風がそう教えてくれます。」

「風が？」

良く分らないが、そこまで分かるとは一流以上の優秀な風メイジのようだね。」

「それはどうでも良いことです。」

とにかく、アンリエッタ王女殿下を助けに参りましょう。」

「ああ、今はどうでもいいことだ。とにかく、やつらを殺しに行こう。」

あらま？

ウエルズがキレてらっしやる。

まあ気持ちは分かるけどね。

僕もシャステイルたちが・・・と思えばヤツの家族も突き止めて親や子、友人もろとも皆殺しにするレベルだ。

いや、簡単には殺さないけどね？

とりあえず僕はアンリエッタの乗っている馬車に乗り込んで、男達

を適当に蹴りまわした後にアンリエッタを回収。瞬時に後方へ飛び出す。

着地。この程度、雷神降臨状態ならばわけないね。

「ウエールズ様っ!!」

「アンリエッタっ!!無事か・・・ではないね？」

この赤く腫れた頬はどうしたんだい？」

「そんなことはどうでも良いのです！」

それよりもどうしていらっしやっただのですかっ!？」

いくらウエールズ様でも・・・きやつ!？」

アンリエッタを地面に下ろすとすぐにウエールズが駆け寄ってくる。そして縄をほどきながらアンリエッタの安否を気にする。

もちろん賊どもが黙ってるはずも無く、馬車が急停止し中から蹴り飛ばした四人。

その馬車に併走していた馬車からもぞろぞろとチンピラが溢れ出てくる。

「て、てめえらっ!？」

よくもやってくれたなっ!？」

最初にウエールズの風を受けてぶっ倒れた男が肩から鮮血を噴出しながら前に一歩出る。

うむ。ボスっぽいこいつを生かしておけば後は要らないかな？」

「あのボス以外は殺してかまわないですよ・・・って聞いてませんね？」

ウェールズとアンリエッタはお互いにお互いの身を案じていた。ウェールズは傷や、何かされなかった？とか。

アンリエッタは姿を見せては！とか、私の事よりも自身を大切にとか。

らぶらぶつすね。

まあいいんだけど。

「さて、空気を読める子と書いて、KYの私としては貴方達は私が相手してあげましょう。」

「あん？てめえが俺たち相手に腰振ってくれるってかつ！？」

「まあ、下品。」

そんな貴方達には股間をクラッシュ！の刑に処します。」

「あん？なんだって・・・っ！？」

男達の股間がリーダーっぽいヤツを除いて全員、クラッシュ・・・というか破裂した。

まあウェールズに譲っても良かったんだけど、惚れた女性の前で殺しをしたくないだろう。と僕はKYとしての気遣いをしてあげる。

いつぞやの魔法、ミストカーテンである。

体内に僕の水を潜り込ませ、それを操り、血を通して目的の場所へ。一気に凍らせてそのまま外に噴出すようにコントロール。

破裂。というわけである。

毎度のごとくエグイ魔法だよね。これ。

「な、なにをしゃがっ……！？」

リーダーのもとに瞬時に詰め寄り、スリープクラウドを命中させる。これで一件落着かな？

「アンリエッタ・・・怖くは無かったかい？」

「……ええ、大丈夫です。」

「声が震えているよ。王としてむやみやたらと感情を表に出すのはだめだといった。が、こういったときくらい……身内には……家族にはあけつびろげでも良いんだ。怖かったらう？」

「アンリエッタは……アンリエッタは……うわああああああんっ！」

そんな寸劇を見つつ。

ちなみに種明かしをすると、実は何かあれば無線機で緊急信号を出すようにとっていたのである。

もともと無線機箱は魔法具マジックアイテムなので魔法を使える人間にとってそのくらしいの操作はなんでもない。

アンリエッタの緊急信号。それを聞いたウェールズが僕に連絡。僕がヒスカに乗ってウェールズを回収、そのままアンリエッタを追ったと言う事である。

無線機箱はすでにある程度改良しており、ソナーの機能を持つ。音波を発信し、跳ね返ってくる音波の形や速度を見て周りの地形や生物を認識するソナーだが、それを風の魔法で再現したものだ。

夜の場合、人がほとんどであるかないのでアンリエッタの搜索が簡単だったのも良かった。

「貴方にもお礼を言わなければなりませんね。言うどころか謝礼を上げて良いのですが……」

「かまいませんよ。こちらとしては貴方達2人がこの国を安定させてくれること。」

それが一番の報酬となりますので。」

「……貴方は何が目的なのでしょう？」

「……今言ったこと以外にはありません。」

安定させるためならば同盟を組むなり、現状のゲルマニアとの政略結婚に甘んじる成り、自力をあげるなり。どれでもかまいません。」

「ということは貴方の主人は・・・この国の貴族なのですね？」

「・・・是とも否とも言わないでおきましょうか。」

無線機箱のログを見て思ったんだけど、このアンリエッタ、賢くない？

別に良いんだけどさ。

さっきの偽者とのやりとりでも思ったんだけど、あのままウェールズがすでにいることを喋っていると不味いことになっていた。が、それをいち早く気づいて素知らぬフリをするとか。

いつからこんな子に？

「では私はこれにて。

せつかくですから、ウェールズ様はアンリエッタ陛下を王城まで送って差し上げてくださいませ。

竜を貸して差し上げます。夜の空の散歩・・・というわけですね。」

「恩に着ます。」

「恐れながら・・・簡単にそういうことを言うてはいけませんよ？中にはそこに付け込む輩もいますゆえ。」

「貴方は違うでしょう？」

したとしてもそれはこの国に必要なこと・・・だと思います。」

「・・・信用しすぎるものまた問題ですよ？」

「ふふ、では今の言葉は忘れてください。」

そして、こう言い換えましょう。

個人として・・・王ではなくただのアンリエッタとして貴方には感謝しています。」

そういう言い回しも出来るようになるとはね。

「僕からも感謝する。君がいなければ彼女は無事ではすまなかっただろう。」

「個人として・・・とならば、快く受け取りましょうか。ではこれにて。」

その後はヒスカに2人を乗せて送ってもらった。

アンリエッタの成長が凄いことになってるといふことに気づいた今日だった。

外伝 ウェールズとアンリエッタ（後書き）

アンリエッタは出来る子！！

というところを見せたかった。

それといつぞやのエンデの色塗り版。超手抜きだけど、なんか味があるように感じたのでそのまま出してみた。

> i29932 | 2238 <

41ページ目(前書き)

シャスティルは良い子なんです。

不器用な2人を見ていられずについ応援してしまつくらいには、
なんか周りのキャラばかりよくなつていくなと思つ今日この頃。主
人公が廃れていくだけな気がする。

デザインで言えば一番のお気に入りなのですが。

「さあ、お兄ちゃん。これ飲んでっ!!」

「やっ!!」

「ど、どうしてよっ!?っつて、そんなかわいい言い方してもキモいだけよ!と言いたいんだけど、それがやけに似合うのが女としては悔しいっ!!」

「なんで解毒薬とやらを飲まなければいけないのさ。惚れ薬?僕のこの気持ちが嘘だっつてことになってしまっじゃないか。いや、嘘じゃないけどさ。でも、それを飲むこと自体カトレアに対する僕の愛への冒涇になる。そんなこと僕は出来ないよ!!」

「い・い・か・ら!飲みなさいよっ!!」

「いやだあっ!!」

口をワシ掴みにして僕の口を抉じ開けようとするシャスティル。ヒスカも僕を羽交い絞めにしようとする。

くそっ!!ここは多勢に無勢!!一旦引かなくては――

「お願い、エンデ。嫌だというのは分かってる。でもそれを飲んで欲しいの。」

というカトレアの嘆願。か、カトレアまでそんなことを言うのかっ!?

たとえカトレアといえども、これは・・・

「カトレアがそういうならば、是非もない!!」

まあ二つ返事でOKだけどねっ!!

「な、なんでカトレアの言うことだと素直なのよ!!お、お兄ちゃ

んの・・・ばかたれええええええええええええええええつ！！」
「ごぶつ！？なぜ僕がつ！？」

シャスティルが何やら思いつきり殴ろうとしてきたので近くにいた
ギーシュを盾にする。

あ、ついやってしまった。

ごめんね、ギーシュ。タルブワインをおごるから許して欲しい。

「あ、その・・・ごめんなさい・・・バラ男さん。お、お兄ちゃん
が避けるからでしょっ！？」

「そもそもすぐに暴力に訴えるのはどうなんだろうかつ！？」

シャスティルの言葉に対してギーシュ改め、バラ男の叫びが木霊す
る。

人間よりも遥かに力の強い吸血鬼の拳を受けてもそこそこ元気なギ
ーシュ。

最近打たれ強くなってきてる気がする。

ぼそりと呟くと。

「どっかの誰かさんたちのせいだね。」

とこちらを見ながら言った。

なんのことだろうか。

「とにかく！はいっ！！とっくと飲んで！！」

と違って差し出される解毒薬は真っ赤でちょっと体に悪そうだ。と
いうか凄く不味そうでもある。

ちよっのご遠慮願いたいなあ。

とか。だめ？

以上が昨日から冒頭までのダイジェストである。

うん。

どうしよう？

何をしよう？

いや、そもそも僕は何がしたいんだ？

というか何？

どうしよう？どうすればいいのだろう？

端的に言うならば、僕はただただテンパッているのである。

「お、お兄ちゃん！？いる！？」

「ん？

シヤステイル！！

あ、あのっ！！

カトレアとのあれは僕だったけど、僕じゃなかったというかねっ！

？」

「わ、分かってるわよ！！

って、そうじゃなくて！！」

僕は学園の庭でテントを張って生活していた。

いや、だって恥ずかしいもん。

そこにやってきたシヤステイル。

ちなみにカトレアが見に来たこともあったのだが、やはり即行で逃げだしてしまった。

という話は置いておいて。

「戦争が始まるってのは聞いたっ！？」

「え？」

え？なにそれ？聞いてない。

いや、もともとこの世界はちょいちょいドンパチあったね。

すっかり頭から抜け落ちてた。

ウェールズとアンリエッタとも連絡とってなかったし。

今時分だと・・・タルブ村付近での新生アルビオン王国・・・じゃ

なかった。“帝国”だったね。

アルビオン帝国とトリステインとの初戦だったっけ？

「いいの？

ルイズたちはもういつちゃったよ？」

「は？」

「なんだかんだでシエスタとは仲がいいからね。2人とも。シエスタの故郷を守るんだあって飛んでったよ？何か変な・・・固い鳥？みたいなに乗って文字通り飛んでっただけど・・・いいの？」

「ヴアカなっ！？」

「いつの間にゼロ戦をゲットしてたっ！？」

「くそっ！」

最近、ウェールズたちのサポートや無線機箱のアップグレードでそつちに注意を向けられなかったせいかつ！？」

「いや、まあいいや。」

これでセーラムーンに出てくるタキシード仮面のような格好をして（正体がばれないように）、風竜を落とすという作戦をする手間が省けたということだ。

「ぐずり。」

「け、決してせっかく用意したタキシード仮面コスチュームが無駄になっただからって泣いてなんかいないんだからねっ！？」

「・・・こほん。」

とまあ、それはともかくとして。

うううむ。どうしよう。

特に手を出す必要は無いが、ルイズの精神力は取っておきたい。ヤキモチを妬く機会がだいぶ少なくなっている今、ルイズの精神力は非常に溜まりづらくなっているはず。

というか、今はシエスタとの仲はどんなものなのだろうか？
友達であっては欲しいけど。

「さりげなく会わせない様にはしてくれてるよね？しっかりルイズが惚れ込むまでは妨害しておかないと・・・」

ルイズとサイトが完全に惚れあつてるといふ兆候が目で見ても明らかになる頃合いになるまであわせないようにすれば十分なのだが、これがまた難しい。

「してるってば。お兄ちゃんもどうしてそこまでするんだか・・・」

「そ、そんなこと言われても・・・ほら、ルイズのためにね？」

「うそつき。そんなことちよつとしか思っていないくせに。」

「ちよ、ちよつと？・・・そ、そんなことないよ？」

「・・・まあいいけどね。」

なに？

その含みのある言い方は？

ルイズのため・・・であるはずだよ？うん。

何が言いたいんだろうか？

「結局のところはカトレアのため・・・でしょうっ？」

「うん・・・そうだけど、それが？」

「・・・はあ。」

「なぜため息？」

カトレアのためなんてのはもちろんじゃないか。
今更そんなこと言われても。なんだろうか？

「で、今から行くの？」

行くなら私も付いていくからね。お兄ちゃんが心配だもん。」

「うん、それは構わないけど、どうせ様子見て終わるつもりだよ？」

「万が一に備えてよ。」

「そう。じゃあ行こうか。」

とりあえず、戦うメイドさん服で行くか。

タキシード仮面コスチュームはいざというときに取っておこう。

どういうときがいざなのかは分からないけれど。

「ヒスカは呼ぶの？」

「いや、二人だけで十分かな。」

「2人きりのラブラブ戦場デートねっ!？」

「そのデートのどこにラブラブ要素がつ!?!? 殺伐としていることが分かるだけではっ!?!？」

「え？」

でも花火とか見られるじゃない。」

「花火って、もしやファイアボールとか大砲とかのことっ!?!？」

結局殺伐としてることには代わりが無いよねっ!?!? ソレ!?!？」

「それじゃなくて、それが当たって弾けて飛んだ人体が汚ねえ花火だぜ!?!？」

「そっち!?!？」

というか、汚いんじゃないかっ!?!？」

「あ、間違えた。」

綺麗な花火だよ、お兄ちゃん。」

「そんな満面の笑みで言われても、可愛いけど可愛くないからねっ！？」

結局のところ人体がはじけ飛ぶのは変わらないんだからっ！！」

「とりあえず、行くなら行って来ますしてからじゃないとね。」

「？」

「カトレアに行ってくるって挨拶しないと。」

「あぐっ！？」

そ、それはちよつと難しいかな？

別に言わなくても大丈夫じゃない？

ほら、今まで特にそんな報告もしてなかったし。」

「カトレア・・・ちよくちよく会いに来たでしょ？」

しつこいくらいに。」

「え、うん。まあ。」

大体1時間おきぐらいにはやってくる。

そしてこつそり近づいてきてはテントの入り口に張り込もうとするが、素人のスニーキングなんて僕くらいになればなんのその。まるで意味を成さない。

というか、やろうと思えば1人くらいの学園内での一人くらいの行動を監視することくらいは可能なのである。

ビバ、風メイジ、土メイジ。

時には走って追いかけてきたり。

胸がですとろいだった。ごほんごほん。なんでもないです。

というわけでカトレアとは万が一にでも鉢合わせしないように避けて通ってるんだけど、それがどうしたのだろうか？

「どうしたのか？じゃないでしょっ！！」

「がぶっ！？」

なつかしの砂鉄ハリセンっ！？

いや、なつかしいというほど間が開いてるわけでもないけど！

「・・・はあ、カトレアってば結構気落ちしてるのよ？
パツとみ変わらずおっとりしてるけどね。」

「隠し切れないため息ってのが出てるわ。無意識みたい。」

「ど、どうしてっ!？」

「どうしてもこうしてもお兄ちゃんがカトレアと口を利かないから
でしょうが。顔すら合わせてないのに・・・」

「それがどうして・・・へぶっ!？」

また砂鉄ハリセンで頭をひったたかれる。死ぬよっ!？

「お兄ちゃんが避けてる。すなわち今回の一件でカトレアがお兄ち
やんに嫌われたんじゃないかって不安になってるのよ。」

「いや、それは違って・・・」

「んなこと人が息をするのが当然とばかりぐらいには当然に分かっ
てるよ。」

「そこまでっ!？」

「カトレアだつてバカじゃないし、恋する乙女。」

お兄ちゃんのことをずっと見てきたんだから、恥ずかしがってる“
だろう”ということとは分かる。でもね。女の子は何時だって不安な
の。

お兄ちゃん、カトレアの告白の返事してないんでしょう?」

「え?なぜそれを!？」

「それもまた見てれば・・・ってか、黙って聞いて。話が進まない
から。」

好きならばすぐさま返事を返せば良いのにまだ返してない。

それがカトレアには“好きと言ってもそこまではない。ないしは、
ほかに好きな女の子がいるんじゃないか?”とか思ったってことで
しょう?」

具体的には私とお兄ちゃんが実はすでに夫婦だつたりするとか。不倫はいけなとか考えてるわけ。不倫はいけなよね？お兄ちゃん。

「分かってると思うけど、夫婦じゃないからねっ!？」

「話が進まないっていつてるでしょっ!！」

「あうちっ!？」

ちよっ!？

ここでハリセンはちよつと理不尽じゃないかっ!？

「まあ残念なことに・・・ひじょおおおおおに残念なことに後半はともかく、前半の“そこまで好きじゃない”くらいは思ってるんじゃないか？ってこと。」

私はカトレアじゃないからはつきりこうだとは言えないけど、カトレアがお兄ちゃんのことと悩んでるのは確かだね。

何？お兄ちゃんって惚れた女性を困らせる趣味でもあるの？

私はそんなお兄ちゃんでも構わず好きだけど・・・きゃ、告白しちゃった。」

「後半、蛇足だよね？一応、つつこんでおくけどさ。」

「黙って聞けって言うてるでしょ!！」

「なぶっ!？」

再見！理不尽な暴虐!!

「一度タルブまで言ったらどんなに急いでも帰ってくるのは夜。最悪明日になりかねないのよ？」

いいの？それで？」

「良くない・・・けど、どうしよっ。」

「私も付いてってあげるから。ね。」

一緒に行こうっ?」

「あ、うん。ありがとう。シャスティル。持つべきものは優しい妹だよね!!」

「お礼はお兄ちゃんの子種がいいな。」

「あっはっはっはっ、冗談きつついなあ、シャスティルは。」

「別にお兄ちゃんは寝てるだけで良いんだよ？私が動くから。」

「あはははは。聞こえない聞こえない。冗談でしょ？ジョーク、そうジョージだ。」

「ジョージって誰？」

お兄ちゃんの息子の名前？下半身的な意味で。」

「あれに名前を付けるとしたらエクスカリバー……ってそういうことじゃないよっ!？」

てか、ほら、早くいこう!!

とったと行こう!!

ヒスカで空を飛ぶわけにもいかないし、馬でいかないといけないんだから!!

さあとったと行こう!!

ダメだ!

この話題はダメだ!!

なんかダメだ!!

「え？この前のお兄ちゃんのは、はがねのつるぎクラスだった気が・

・

「それは通常時で……って、はいっ!？」

寝てる時になんかしたのっ!？」

「ううん。何もしてないよ。」

強いて言えばパンツを脱いだけ。私が。」

「なぜにっ!？」

「そして私の体をお兄ちゃんに擦り付けたらこう……あれの形が分かったんだよ?」

「あれ？なんかしてるよね！？」
「お兄ちゃんは何もしてこなかったよ？」
「僕の話っ！？だぁもうっ！！」
「話が遅々として進まないっ！！」
「とにかく行くよっ！！」
「あ、カトレアには良いの？」
「あう・・・そうだった。」

と、とにかく。

カトレアに会いにいかないとな。

「お兄ちゃん。」

「何？」

「カトレアになんかしちゃダメだからね。」

「しないよっ！！」

絶対にしないよっ！！カトレアにそんなことするわけ無いでしょ！

！（大切にしているという意味で）

まったく、どうして、こう・・・

「え、エンデ・・・」

「ん？」

まだ何かって・・・シャスティルは名前では呼ばない・・・あれ？
カトレア？」

「あちゃー・・・」

わふー、振り向くといつの間にか、カトレアがいるよ？

全部聞いてた？

全部聞いてくれてたら良いな。

最後のセリフだけ鉢合わせた・・・とかだと困っちゃうな。
主に誤解が深まるという意味で。

「やっぱりそうだったのね。」

「・・・ご、ごめんなさい。」

ぼろぼろと涙を流すカトレア。

あわあわ・・・ど、どうすればいいのっ!・

これってどうすればいいのっ!?

誤解が深まったであろうことは分かるでヤンス!

「あっ・・・カトーーー」

とりあえず声をかけようとしたのだが、そのままダツと走り去って
しまった。

え?

逃げられた?

え、嫌われた?

ど、どうすればいいの?

ねえ?これって?

誰か教えてよ。ねえ。

41ページ目（後書き）

この日の夜、寝る頃になってシャスティルは後悔するのですね。
「ど、どうして私、あの2人を応援しちゃってるのよおおおっ！
！」と。

あの人は優しいけど、良い人止まりで終わるタイプという言葉があります。

その女性版がシャルティル。

こんなことでシャスティルの恋は叶うのでしょうか？w w

42ページ目(前書き)

バイオ5面白いYO!アクションゲームとして・・・だけど。
今回は短めです。

42ページ目

「お、お兄ちゃん!？」

「何やってるの!!早く追いかけて!!」

「いやでも……」

逃げた以上、会いたくないってことなんじゃないだろうか？

「そ、そんなわけ無いでしょ!!早く追いかけてなさい!!」

「お、追いかけてなんて言えって!？」

「ばかつ!そんなこと誤解を解けばいいだけ……ってそれくらい自分で考えなさいよ!!」

「ほんと不器用なんだから!!このアホ兄はっ!!
とにかくとつとイケエ!!」

せ、戦争どころじゃなくなっただけでもっ!？

私が彼と出会ったのは9歳の時だった。

誕生日会ということで私は父様と母様に言われ、綺麗なドレスで着飾った姿でパーティに出た。

ほかの人たちが沢山来る。ということではとても喜んだことを覚えてる。

会ったことも無い私のためにわざわざプレゼントをもって祝いに来てくれる。

幼い頃から病弱で、ほかの貴族邸へ行くことの無かった私にとって

はとても嬉しく、初めての友達を作れるということにワクワクしていた。

初めての友達が出来ると前日の夜には中々眠れなかつたくらいである。

ところが。

私は気づいてしまった。

そう、私には立場。

それがあつたのである。

誰も彼もが打算的、下心を持って接してくる子供たち。

その瞳には私は映っていない。

私を通して父様たちを見ている。

公爵家とのつながりを求め、それに近い何かを言い含められたであろう淀んだ目で見てくる同世代の子たち。

プレゼントも煌びやかな宝石類や綺麗にあしらったドレスや銀細工の食器などなど。

言つては悪いとは思つたけれどその頃の私にとってはなんら興味のもてないものだった。

ふふ。

それもそうだろう。

どこの世界に宝石やドレスなんてものを欲しがる子供が9歳児がいるのか。

そんなものよりも絵本や花束のほうが何百倍もマシだというものである。

貴族の世界ではこうしたプレゼントを喜んで受け取るのが普通だと父様や母様は言った。

が、とてもじゃないけど私にとってはお世辞にも嬉しいとは言えないものだった。

何よりも愛想笑いが疲れたものである。ちょこちょこ見かける花だ

つて彩りも何も考えていない雑な物。季節感もへったくれも無く、ただ綺麗なものを買って詰めただけという花にとつても見るものにとつても残念なもの。高いものを適当に買って包んでいるのだろう。面白みも無く同じ種類の花ばかりが集まるのもまた私の退屈さを加速させた。

ただでさえ摘み取った花は寿命が短い。

その花をどうしてこのような扱いを出来るのか。その無神経さに驚いたのも今となっては良い思い出か。

せつかくのプレゼントを要らない等と言えるはずも無く。

嬉しくも無いのに嬉しそうな振る舞いで自分も相手をも騙す。それが一番の苦痛で、とてもじゃないけど昨日までのワクワク感はどこかへ飛んでいってしまった。

そんな中。

1人の緑の髪をした女の子を視界の端に止めた。

あの時はとてもじゃないけど男だなんてことは微塵も思わず、母様よりも綺麗な人を始めて見たと感じたものである。

彼だけは私に対して近寄ろうともせず、近くにいたメイドに不思議な小箱を渡してそのまま去ってしまった。

去り際に心配そうな目を向けてくれたのがとても嬉しくて、それを見て私は「ああ、この人も同じことを思っている」と考え、ついと笑みが漏れたのはしかたがない。

ホールから出て行くのを目で追っついていき、多少なりとも気になった私としては断りを入れて体調不良ということでの場を退室した。

このときのコレが始めてついた嘘だったかもしれない。

私は部屋に帰ると見せかけて遠回りして庭に面する廊下の窓を開け、そこから庭へと飛び出していった。

裸足で外へ行くのも初めてで、庭の芝生の感触は気持ちよかったことを覚えている。

今でも大切な思い出だ。

「何か御用ですか？
カトレア様。」

一応、忍び寄ったつもりではあったのだけれどすぐにはれてしまった。

御用？と聞かれて少し戸惑った。

用なんて無い。

強いて言えば話してみたかっただけである。

何よりも様付けに壁を感じて悲しかった私はとりあえずは仲良くなるための一歩と言うことで一緒に鯉の餌やりをすることにした。

「私も一緒に餌をあげていい？」

という私の体調を慮る旨の言葉を言われたが今はすこぶる快調である。

ホールから出たのも嘘だし。

嘘で余計な気遣いをさせてると思うと少し気が引けたので、出来る限りの笑顔で心配ないことを伝えた。

「大丈夫よ。心配してくれてありがとう。」

小さいのに紳士なのね。」

すると彼は一つ咳払いをして、先ほどの私の質問に答える。

その後もぼつりぼつりと話をして、彼 エンデと呼び捨てあうことになる。

動物の話をちよっとして文通もすることになった。

どれもが初めてのことで新鮮で、嬉しいことだった。

何よりも彼からはほかの同世代の子にあるようなガツつく感じが全くといって良いほどに無い。

今まで同世代に近い子供触れてなかったー自分で言うのもなんだけれど箱入り娘にとっては非常に話しやすかった。

私にとっての友達が始めて出来たときだった。

42ページ目（後書き）

これからは追憶編。

基本、カトレア視点で物語を振り返る章です。この章が終わり、次の章で完結。という予定。完結後も投稿は出来るそうなので完結後はゼロ魔の原作が少なくとも来年中には終わる（あと二巻だか三巻でってことらしい。）とのことなので終わってから投稿がちらほら・・・って感じだと思えます。

完結後の話はこの作品のタイトルの原作介入は極端に少なくなりただひたすらカトレアとラブイヤすると思えます。多分。ちなみにこの追憶編はそんなに長くないと思えます。

43 ページ目 (前書き)

今日はカトレアが主人公に惚れるきっかけを作ったエピソード。あくまでもキツカケですのでこの時点で異性として意識し始め、これから徐々に徐々に好きになっていく・・・ってところですよ。それとカトレアも人の子。ということちょっと荒れてます。

43 ページ目

エンデと友達になってから3年が過ぎた。
私が12歳の頃。

私は彼のことを『大っきらい』になっていた。

別に彼が嫌な男の子だったとかそういうわけじゃない。

むしろ貴族なのに貴族らしくなくて、子供っぽいのにどこかが大人びていて、少なくとも嫌いになる部分なんて無い。

はずだったのだが。
毎年送られてくる誕生日プレゼント。

幻想木箱。

これが一番の問題だった。

出来が悪い？

まさか。

下手をすればこの世で一番素敵な物だと言える。

機能的にも。容姿的にも。である。

中身はただの文字ではなく、声が出て水が人形を模り良く動き回る
今まで見たことが無い形の物語。

外見はそうした機能をつけるためのルーン文字がビツチリと綺麗に
描かれており、独得な紋様に見えないこともない。いや、そう見え
るように計算されているのが分かる。

物語の内容が悪い？

まさか。

今まで聞いたことが無い、独創的でどこか明るく幸せな気持ちになれる。

そういう物語ばかりだった。

ただそれらの物語には必ずといって良いほど、名前の無い一人の女の子が登場する。

その女の子は生まれつき病弱で、外に出ることを夢見ているということ。

そう、私を意識としたであろう女の子が毎回のごとく出てきていた。その物語の中では自然と物語上無理はないような手法で、女の子の体は治り、時には一緒に戦ったり、一緒に演奏したり、旅をしたり。それを見るたびに私の体も治る。

何の根拠も無くそう感じれた。それに手紙では私を治すためにエンデが魔法の練習をしているという。

が、それは本当に何の根拠も無い夢も希望も無い、単なる妄想。子供の妄想でしかなかったことに気づいたのが12の時。

たまたま寝付けなかった私は母様に子守唄でも歌ってもらおうと母様と父様の寝室へ向かった。

そこでは私の体のことについての話がされていた。

「あなた。

カトレアの体は・・・」

「ああ。治らない・・・そうだ。

どんな秘薬を使っても、どんな魔法を使っても・・・現状使える手ではカトレアは治らん。」

「では・・・あの子は・・・」

「うむ・・・酷だが、おそらく結婚　　は無理だろう。」

医者の話によれば将来的に・・・子供を産めない・・・産む前に死ぬ可能性が高いとのことだ。仮に産めたとしても産後の肥立ちもある。難しいだろう。

そのような女を娶る貴族はいまい。

下手をすれば子作りの行為ですら負担になる体。・・・嗚呼、ブリミル様、何故我が子をこのような体にしたのですか・・・

神にもすがる思いとはこのようなことを言うのだな。」

「このことはカトレアには・・・」

「・・・いずれは自分でも気づくだろう。」

が、今は知らせる必要は無い。

子供なのだからな。」

「・・・はい。」

そうか。

私の体は治らないのか。

それを理解した途端、エンデの送ってきた物語が途端に薄っぺらく思えて、エンデに対しても私は良く分からない怒りを抱いたのだ。た。

それはきつと嫉妬で。

ついでとばかりに自分の境遇に対する八つ当たりも含まれていて。

さらには幻想木箱の、最後には元気になる女の子に対するんだか良く分からない悔しさも湧き出てきて。

そんな幻想木箱を送ってくるエンデに対してイラついてイラついてしょうがなかった。

そのまま私は辛い現実から目を背けるように自分の殻に閉じこもったのだ。た。

それからしばらくして。

「カトレア？

貴方、最近元気ないわよ。どうしたの？」

「別に何でも無いわ。姉様。」

「何でもなくは無いでしょう？」

「最近はエンデ君に手紙も出してないじゃない？
どうしたの？」

「心配だつて旨の手紙が何通も届いてきてるのよ？」

「せめて返事だけでも書きなさい。」

「うるさいな・・・放っておいてよ。」

「うるさいということは無いでしょう？」

「貴方が悪いことをしてるから・・・」

「うるさいつてばっ！！」

手じかにあつた枕を姉様に投げつける私。

「いたっ！？

な、なにするのっ！？

「私は貴方を心配して・・・」

「姉様に何が判るつて言うのっ！？

「姉様は元気じゃないっ！！」

「走れるし、魔法も使えるし、頭も良いっ！！」

「婚約した相手だつているっ！！」

「それが今、なんの関係をー」

「ないわけないっ！！」

「全部、全部姉様が持つて行ったに決まつてるっ！！」

「？」

「何を言つてー」

「うるさいってばっ!!」
もう出てってよっ!! 出てけええええええええええっ!!」

姉様にも八つ当たりをして、私はなんてみっともないんだろっか。そんなことをどこかで冷静に考えつつ。

枕に顔をうずめてぼーっとしていると姉様は母様を連れてきた。放っておいて欲しいのに。

「どうしたの? カトレア。」

何かあったの?

何かあったら言っただけよ?」

「何も無いです。母様。」

「何も無いってことは無いでしょう?」

言っただけよ?」

言ってくれなければ何も分からないわ。」

「何も・・・本当に何も無いんです。」

「カトレア。おねがーい!」

「何も無いって言ってるでしょ!!」

母様も姉様も私のことは放っておいて!」

「か、カトレアっ!」

だ、ダメじゃないの。無理をしちゃ・・・まだ体が治ってないんだから。」

“まだ” 治ってない?

まだそんなことを言うの?

はつきりといえば良いのに。

「どうして・・・どうして・・・こんな体に産んだの?」
母様。」

「・・・か、カトレア。」

「私はこんな体に生まれたくなかったっ！！

別に魔法を使えなくたって良いっ！！

頭がよくなかったって良いっ！！

ただ元気な体が欲しいっ！！

それだけのことで出来ないこの体に産まれた私の気持ちが分かるわけが無いっ！！」

「・・・だから今、お医者様に・・・とにかくほら、ベッドにー

ー」

「誤魔化さないでよっ！！

もう知ってるの・・・知ってるんだから。」

「私の体・・・治せないんでしょう？」

「っ!？」

「今、母様たちに何かを言ってそれでこの体が治るの？
治らないでしょう？」

だから私は何でも無いって言ったのに・・・」

「ごめんなさい・・・私が貴方をそんな体で・・・」

だめ。だめだめ。

だめだ。抑えられない。

口が自然と動く。

私は涙を流しながら決定的な言葉を言ってしまった。

「どうして・・・どうして産んだの？」

こんなことなら『産まれなくなかった』っ！！」

私のこのセリフを聞いた瞬間、母様は目を見開いて今にも泣きそくな顔で俯いた。

「カトレアッ!？」

貴方っ！！」

「いいのよっ！エレーヌ！！」

「母様っ！？」

「・・・いい、のよ・・・わた、しが・・・悪いのだから。ごめんなさいね。ごめんなさい。本当にごめんなさい。」

その日の晩の食事は味を感じなかった。

次の日。

エンデが私の家に訪ねてきた。

今、一番会いたくない人が来てしまった。

今会ったら私は彼に何を言うか分からない。

それに今の私を見られたくないというのもあった。

こんな私を見られたら確実に嫌われる。

私はそれが何よりも怖かった。

部屋の鍵をかけてそのまま私は閉じこもった。

毛布に包まって、ぼーっと何をするでもなく過ごしていると、ふと気づく。外からなにやら話し声がした。

「カトレアはどうしたんですか？」

「ごめんなさい。カトレアは今・・・その・・・調子が悪いみたいで・・・」

「最近、手紙が届かなかったことも関係が？」

「・・・ええ。・・・そうね。貴方になら話しておいても構いませんね。」

カトレアの体は生まれつき病弱なのは知っているでしょう？

それで・・・貴方からもカトレアに呼びかけてくれるかしら？」

「・・・は、はい。」

「ごめんなさいね。多分無視されるとは思っけれど、無視されても友達をやめないで上げて。」

今はちよつと調子が悪いだけなの。」

本当は優しくして・・・とても良い子なのよ。」

「知ってますから、大丈夫です。」

「ふふ、ありがとう。私は少し夫と話すことがあるので、失礼するわね。」

知ってます・・・か。

今の私を見てもいないのに、どうしてそんなことが言えるのだろう。本当の私はこんなにも醜いと言っのに。」

「カトレア？」

いる？

いるよね？

エンデだよ。まずは部屋に入れてくれないかな？」

「・・・。」

とにかく今はそつとしておいて欲しい。

特に友達に見られたくなんかない。

いや、いつそ見せてしまおうか。

そうすれば彼から離れていくだろう。

なんだろう？

私は友達が欲しいのか、欲しくないのか？

自分でも分からなくなってきた。

「・・・どっぞ。」

「うん、お邪魔するね。」

部屋に入ってきたエンデはいつものように変わらず可愛らしい姿をしていた。いや、昔よりも大きくなっているのもあって、より綺麗になっていた。

醜い私に対して『僕はこんなにも美しいと言わんばかりの』嫌味のように。

「……。」

「どうしたの？」

最近、手紙が来ないけど？」

「別に。忙しいだけ。」

「そう、じゃあ仕方ないかな。」

今日のはあやとりでもしない？」

ほら？もって来たんだ。あやとり。」

「しない。」

「んじゃあ、一緒に鯉の餌やりに行こうよ。」

久しぶりにさ。」

「行かない。」

「となると……散歩はどう？」

「……私の体に対するあてつけなの？」

「ただのウォーキング。」

少しでも歩いておかないと。」

体を治しても大して変わらないかもよ。」

「うるさいっ！！」

治す。

その言葉を聞くと同時に頭が真っ白になって目の前のエンデを怒鳴りつけていた。

「私の体は治らないのっ!!」
治らないって言われて・・・言われたから・・・こんなしたくもないのに・・・母様や姉様に八つ当たりしちゃうし、好きなはずなのにエンデはきらいになっちゃうし・・・ぐず・・・ぐず・・・ああああああああああああんっ!!
なおげるものならなおしだいよっ!!
なおしたいにきまつてるじゃないっ!!
でも、無理だつて言われたのに・・・そんな治すとか言わないでよ
おおおおおおっ!!
もうやめてっ!!
変な期待させないでよ!!」

そのまま泣きじゃくっていると、エンデはおもむろにナイフを取り出しました。

「え、えんで？」
「見てて。カトレア。」

するとエンデは何を思ったか、ナイフを自分の腹に突きたて、そのまま横に引く。
当然血が飛び散る。

「エンデっ!?!」
な、なにをやってるのっ!?!
し、しんじょうよっ!?!
か、母様っ!?!
え、エンデがっ!?!
エンデ・・・が・・・エンデ?」

目の前では信じられない出来事が起きていた。少し涙目になりながらエンデは言った。

「ほら見て？」

もう傷がないでしょ？」

「・・・ほんとうだ。」

「これが僕の魔法で治した結果。カトレア。」

僕、手紙で書いたはずだよね？」

カトレアの病気は僕が治すって。」

「・・・う、うん。」

「秘薬もなしにこの大怪我を治すのって凄くないかな？」

「す、凄いよ・・・。」

子供の私でも基本的に怪我の治療には秘薬を用いるなんてことは知っている。

ところがだ。

目の前の少年は秘薬も無しに大怪我を数秒と経たずに治してしまっ

た。「そんな僕が治すって言うてるんだよ？信じられない？」

ちゃんとその目処も立ってる。

今すぐは無理だけど・・・あと数年でかならず治せる。だから。ね。

泣かないで。

カトレアが泣くと僕も泣きたくなる。」

今見たもの自体がもう信じられないことだけでも。

そういつて笑うエンデの笑顔は今まで見たどの笑顔よりも素敵な気

がして。
目を合わせた途端。

「・・・っ!？」

「ど、どうしたの？」

カトレア？

顔が赤いけど？」

「べ、別になんでもないよ。」

「そ、そう?？」

その後に私の部屋の血だまりについて母様に聞かれ、エンデは連れて行かれた。

そういえば、笑顔に気を取られてそっちの方に意識が向かなかったな。

これが私がエンデを異性として好きになったキツカケ。

今思うと、大量の血飛沫を見ておいてそれよりもその後の笑顔が記憶に残るって言うのだから。

私はちよっと変なのかもしれない。

いきなりお腹にナイフを突き立てるエンデほどでは無いと思ったけれどね。

43ページ目（後書き）

主人公はあいも変わらずです。

部屋が血で汚れることに後から気づいたというww

ちなみにこのときはリザレクションを開発済み。

なおかつほかの人で練習していた最中です。

そして魔法は使ってはならず、忘れがちな神様から貰った微チートである再生能力であたかもすぐに見せかけました。

言葉で言っても信じられないだろうから、態度でーー体を張ってインパクトのあるデモストレーションをしたってところですよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2375s/>

ゼロ魔の世界で魂生成～カトレアに惚れてなんかいないんだからね！～

2011年9月26日00時37分発行